

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第280集

大里郡岡部町

大寄遺跡Ⅱ

岡部町西部工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅲ—

2002

岡 部 町

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



遺跡群全景（合成写真）



大寄遺跡II区全景



第245号住居跡出土土器



第238号住居跡出土土器



第37号井戸跡出土土器



1. 土師器 (第248図6)



2. 土師器 (第118図5)



3. 須恵器A (第145図3)



4. 須恵器A (第143図10)



5. 須恵器A (第66図10)



6. 須恵器A (第147図12)



7. 須恵器B (第53図13)



8. 須恵器B (第248図9)



9. 須恵器B (第118図9)



10. 須恵器B (第248図12)



11. 須恵器B (第248図14)



12. 須恵系土師質土器 (第248図18)



13. 須恵系土師質土器 (第85図4)



14. 須恵系土師質土器 (第85図2)



15. 土師系土師質土器 (第248図13)



16. ロクロ土師器 (第49図2)



17. ロクロ土師器 (第37図2)



18. ロクロ土師器 (第116図7)

発刊に寄せて

新世紀を迎え、我が国をとりまく社会経済情勢は大きく変化しております。

このような中で岡部町では、町民一人ひとりが真の豊かさを実感できる「みどりと活力、そしてふれあいのまち」を将来の都市像とした、第3次岡部町総合振興計画を策定し諸施策を積極的に進めてまいりました。

工業の振興を図ることを目的とした西部工業団地整備事業もそのひとつであり、平成8年から10年にかけて、榛沢地区に23.1ヘクタールの工業団地が造成され、平成11年からは一部の企業が操業を開始し、現在では進出した企業すべてが順調に操業されており今後の地域経済活性化の一助になればと大いに期待されるところであります。

ところで本町は、豊かな自然の恵みをうけ、古くからの歴史と文化に支えられた伝統のある町で、特に原始・古代の遺跡が数多く所在し、全国的にも知られた遺跡も見つかっております。

近年では、中宿遺跡で発見された建物跡群が、古代の榛沢郡の郡衙正倉として高い注目を集め、平成3年に県史跡「中宿古代倉庫群跡」の指定を受けました。

町は指定地の公有地化や、古代倉庫の復元など史跡の保存整備を進め、現在は中宿歴史公園として町民の憩いの場になっております。

また、西部工業団地整備事業地内にも国の重要文化財に指定された「緑袖手付瓶」が出土した西浦北遺跡をはじめとした榛沢遺跡群が所在し、これらの遺跡の発掘調査を財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団をお願いいたしました。

西部工業団地関係では、これまでに2冊の発掘調査報告書が刊行されましたが、本報告書は先に刊行した「大寄遺跡」の続編にあたるもので、かつて岡部の地にくらした人々の足跡が記録され、その積み重ねのうちに長い歴史が築かれてきたことを知ることができま

す。

岡部町では、こうした先人たちの営みによって生まれてきた特色ある地域文化を大切に将来に伝えることを基礎にして、新世紀にふさわしい個性豊かで魅力ある町づくりを進めていきたいと考えております。

結びに、本報告書の刊行にあたりご協力をいただきました多くの皆様に心から感謝申し上げます。

平成14年3月

岡部町長

伊藤幸徳

序

埼玉県では、豊かな彩の国づくりを実現するため、調和と均衡ある発展を目指し、それぞれの地域の特性や文化に応じた整備事業を行っております。都市と農村が調和をおこなす県北地域では、自然環境と共生し、創造性に満ちた活気ある産業社会の構築に向けて、先端技術産業を軸とした整備が推進されております。

岡部町西部工業団地造成事業は、県北地域の都市機能と居住環境の調和を図り産業の発展と雇用の拡大を目的として、岡部町により計画されたものです。

工業団地造成地内には5か所の埋蔵文化財包蔵地が所在しておりました。その取扱いにつきましては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。調査につきましては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、岡部町の委託を受け当事業団が実施いたしました。

岡部町は、埼玉県内でも多くの埋蔵文化財が分布する地域として知られ、特に県指定史跡の「中宿古代倉庫群跡」は古代における榛沢郡衙の正倉と考えられております。

また、重要文化財に指定されている緑釉手付瓶を出土した西浦北遺跡は隣接地にあたり、源平の合戦で活躍した岡部六弥太忠澄の出身地としてもよく知られています。

岡部町西部工業団地関係の報告書はすでに沖田遺跡及び大寄遺跡関係の各一冊が刊行されておりますが、今回は大寄遺跡の未報告であった部分の報告です。遺跡の内容は、縄文時代前期および古墳時代から平安時代の集落跡を中心とするもので、特に平安時代後期(10世紀後半以降)の集落としては県内最大規模で、遺構・遺物も多く、当時の生活の様子を考える上の貴重な資料といえましょう。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及や教育機関の参考資料として広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました岡部町教育委員会、鹿島造路株式会社、株式会社横森製作所、東洋エクステリア株式会社並びに地元関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成14年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野健一

例言

1. 本書は、大里郡岡部町に開発された岡部町西部工業団地造成事業地内に所在する大寄遺跡・沖田I遺跡・沖田II遺跡・沖田III遺跡・宮西遺跡のうち大寄遺跡II区の一部に関する発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

大寄遺跡第1次 (OOYR)
大里郡岡部町大字榛沢293-8番地他
平成9年2月18日付け教文2-202号

大寄遺跡第2次
大里郡岡部町大字榛沢298-4番地他
平成9年4月30日付け教文第2-9号

大寄遺跡第3次
大里郡岡部町大字榛沢293-10番地他
平成10年4月24日付け教文2-10号
3. 発掘調査は、岡部町西部工業団地建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、岡部町の委託を受け、財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団が主体となり実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。平成8年度は元井 茂、橋本 勉、磯崎 一、木戸春夫、宮瀧由紀子、鳥羽政之、宮本直樹が担当し、平成9年1月6日から平成9年3月31日まで実施した。平成9年度は橋本 勉、中村倉司、磯崎 一、富田和夫、木戸春夫、平田重之、松田 哲が担当し、平成9年4月1日から平成10年3月31日まで実施した。平成10年度は、磯崎一、石坂俊郎、福田 颯、斎藤欣延が担当し、

平成10年4月1日から平成10年4月30日まで実施した。また、整理報告書作成作業は木戸が平成10年12月1日から平成11年3月31日まで、磯崎が平成11年4月1日から平成11年10月31日、平成11年12月1日から平成12年3月31日まで、富田が平成12年4月1日から平成12年9月30日まで、福田が平成13年10月1日から平成14年3月30日まで実施した。

5. 遺跡の基準点測量と航空写真は、株式会社東京航業研究所に委託した。
 6. 発掘調査時の遺構写真撮影は各担当者が行った。遺物写真は大屋道則が撮影した。
 7. 本報告書の出土品の整理・図版の作成は福田が行った。遺物実測は縄文土器・弥生土器・石器を金子直行、金属製品を瀧瀬芳之、それ以外は富田・福田の指示で永井いずみが行った。木製品については古田稔の、土器については石塚香、桜井元子の協力を得た。
- 本文の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、縄文時代の遺物は金子、井戸跡・溝・土壌に関する遺構と遺物、V-1は永井が、それ以外は福田が行った。
8. 本書の編集は、福田が担当した。
 9. 本書にかかる資料は平成14年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
 10. 本書の作成にあたり下記の方々からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略)
岡部町教育委員会 荒川正夫 斎藤欣延 酒井清治 佐藤忠雄 外尾常人 知久裕昭 鳥羽政之 平田重之 松田 哲 宮本直樹 渡辺 一

凡例

1. 本書の遺跡全測図におけるX・Yの座標値は、国土標準平面直角座標第IX系に基づく座標値を示している。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。
2. グリッドは10m×10m方眼で設定し、グリッドの呼称は、北西隅の杭番号である。
3. 遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構図	住居跡・掘立柱建物跡	……	1/60
	土壇・井戸跡	……	1/60
	横列跡	……	1/80
	茶毘跡・土壇墓	……	1/30
	溝跡	……	1/200
遺物図	土器	…	1/4
	石器・鉄製品	…	1/3
	拓影図	……	1/3
	土製品	……	1/2

上記に合わないものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度示している。
4. 全測図等に示す遺構表記の略号は以下のとおりである。

SJ	…住居跡	SB	…掘立柱建物跡
SK	…土壇	SD	…溝跡
SE	…井戸跡	SA	…横列跡
ST	…土壇墓		
5. 掘立柱建物跡については、推定される柱間間隔を遺構平面図に示した。
6. 挿入中のスクリーン・トーンは以下のことを示す。

遺構断面図	斜線部分	…地山
-------	------	-----

遺物図については灰釉陶器の灰釉塗布部分に網をかけて示した。断面黒塗りは須恵器を表す。
7. 遺構図中に示したドットは、遺物の出土位置を示す。
8. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位mである。
9. 遺物は以下の基準により、呼称を分けた。
 - ・土師器 ロクロを全く使用せず、酸化焰焼成のもの。
 - ・須恵器 ロクロを使用し、還元焰焼成のもの。Aはロクロを多用しており、従来の須恵器である。Bはロクロを使用し、従来の器形にない形態を持ち、バリエーションがある。
 - ・須恵系土師質土器 ロクロをほとんど使用せず、酸化焰焼成のもの。器形は須恵器を模倣する。
 - ・土師系土師質土器 ロクロを全く使用せず、還元焰に近い酸化焰焼成のもの。器形は須恵器を模倣している。
 - ・ロクロ土師器 ロクロを使用し、酸化焰焼成のもの。器形は陶器や木器を模倣する。
10. 遺物観察表は次のとおりである。
 - ・胎土は、肉眼で観察できるものについて示した。

A	…赤色粒	B	…石英	C	…長石		
D	…角閃石	E	…白色粒	F	…白色針状物質		
G	…雲母	H	…砂粒	I	…片岩	J	…礫
11. 本書に掲載した地形図等は以下のものを使用している。

国土地理院	1/50000地形図「高崎」	「寄居」
国土地理院	1/25000地形図「本庄」	「寄居」「深谷」「三ヶ尻」
国土地理院	1/25000国土基本図	「IX-JC 25-2」

(昭和36年作成)

目次

目 録

発刊によせて

序

例 言

凡 例

目 次

I 発掘調査の概要	1	(2) 掘立柱建物跡	199
1. 調査に至るまでの経過	1	(3) 溝跡	266
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(4) 井戸跡	290
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	4	(5) 上墳	310
II 遺跡群の立地と環境	6	(6) 欄列跡	328
1. 地理的環境	6	(7) 土壇墓	332
2. 周辺の遺跡	6	(8) 茶毘跡	334
III 遺跡群の概要	11	(9) ビット・グリッド・表採出土遺物	335
1. 遺跡群の概要	11	(10) II区出土鉄製品	338
2. 大寄遺跡の概要	14	(11) 追加遺物	341
IV 大寄遺跡II区の遺構と遺物	15	V 結語	345
1. II区の概観	15	1. 出土土器の様相	345
2. 縄文・弥生時代の遺構と遺物	41	(1) 大寄遺跡の土器編年	345
(1) 竪穴住居跡	41	(2) ロクロ使用の酸化焰焼成土器の 位置付け	356
(2) グリッド出土土器	42	2. 集落の変遷	361
(3) グリッド出土石器	44	3. まとめ	389
3. 古代・中世の遺構と遺物	47		
(1) 竪穴住居跡	47		

挿図目次

第 1 図	年度別調査範囲	3	第 36 図	第130～133号住居跡	51
第 2 図	埼玉県の地形	6	第 37 図	第130～132号住居跡出土遺物	52
第 3 図	遺跡周辺の地形区分	7	第 38 図	第133号住居跡出土遺物	54
第 4 図	周辺の遺跡	9	第 39 図	第134号住居跡・出土遺物	55
第 5 図	関連遺跡分布図	12・13	第 40 図	第135号住居跡・出土遺物	56
第 6 図	大寄遺跡全測図	16・17	第 41 図	第136～138号住居跡・出土遺物(1)	58
第 7 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図区割	18	第 42 図	第136～138号住居跡出土遺物(2)	59
第 8 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(1)	20	第 43 図	第139・140号住居跡	61
第 9 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(2)	21	第 44 図	第139号住居跡出土遺物	62
第 10 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(3)	22	第 45 図	第140号住居跡出土遺物	63
第 11 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(4)	23	第 46 図	第141号住居跡	64
第 12 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(5)	24	第 47 図	第141号住居跡出土遺物	65
第 13 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(6)	25	第 48 図	第142～144号住居跡	66
第 14 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(7)	26	第 49 図	第142～144号住居跡出土遺物	67
第 15 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(8)	27	第 50 図	第145・146号住居跡・出土遺物(1)	69
第 16 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(9)	28	第 51 図	第145・146号住居跡出土遺物(2)	70
第 17 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(10)	29	第 52 図	第147～149号住居跡	72
第 18 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(11)	30	第 53 図	第147～149号住居跡出土遺物	73
第 19 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(12)	31	第 54 図	第150号住居跡・出土遺物	75
第 20 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(13)	32	第 55 図	第151号住居跡・出土遺物	76
第 21 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(14)	33	第 56 図	第152号住居跡・出土遺物	77
第 22 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(15)	34	第 57 図	第153～155号住居跡	78
第 23 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(16)	35	第 58 図	第153～155号住居跡出土遺物(1)	79
第 24 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(17)	36	第 59 図	第153～155号住居跡出土遺物(2)	80
第 25 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(18)	37	第 60 図	第156～158号住居跡	83
第 26 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(19)	38	第 61 図	第156号住居跡出土遺物	84
第 27 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(20)	39	第 62 図	第157・158号住居跡出土遺物	86
第 28 図	大寄遺跡Ⅱ区全測図(21)	40	第 63 図	第159・160号住居跡	87
第 29 図	第124号住居跡・グリッド出土土器(1)	42	第 64 図	第159・160号住居跡出土遺物	88
第 30 図	グリッド出土土器(2)	43	第 65 図	第161～164号住居跡	90
第 31 図	グリッド出土土器(1)	45	第 66 図	第162～164号住居跡出土遺物(1)	91
第 32 図	グリッド出土土器(2)	46	第 67 図	第162～164号住居跡出土遺物(2)	92
第 33 図	第125号住居跡	47	第 68 図	第165・166号住居跡	95
第 34 図	第126～128号住居跡・出土遺物	48	第 69 図	第165・166号住居跡出土遺物	96
第 35 図	第129号住居跡・出土遺物・第218号土壇	49	第 70 図	第167号住居跡	98

第71図	第167号住居跡出土遺物	99	第107図	第216号住居跡・カマド・出土遺物	140
第72図	第168号住居跡・出土遺物	100	第108図	第217号住居跡・出土遺物	142
第73図	第169号住居跡・出土遺物	101	第109図	第217号住居跡カマド	143
第74図	第170号住居跡・出土遺物	102	第110図	第218・219号住居跡・出土遺物	143
第75図	第171・172号住居跡・出土遺物	103	第111図	第220・221号住居跡・出土遺物	144
第76図	第173・174号住居跡・出土遺物	104	第112図	第222・223号住居跡・出土遺物	146
第77図	第175号住居跡・出土遺物	105	第113図	第224・225号住居跡	147
第78図	第176号住居跡・出土遺物	106	第114図	第225号住居跡カマド	148
第79図	第177号住居跡・出土遺物	107	第115図	第224・225号住居跡出土遺物	149
第80図	第178号住居跡	107	第116図	第226～229号住居跡・出土遺物	150
第81図	第179・180号住居跡・出土遺物(1)	108	第117図	第230号住居跡・出土遺物	151
第82図	第179・180号住居跡出土遺物(2)	109	第118図	第231号住居跡・出土遺物	153
第83図	第181・182号住居跡・出土遺物	112	第119図	第232号住居跡・出土遺物	154
第84図	第183～185号住居跡・出土遺物	113	第120図	第233号住居跡・出土遺物	154
第85図	第186号住居跡・カマド・出土遺物	115	第121図	第234・235号住居跡・出土遺物	155
第86図	第187号住居跡カマド	116	第122図	第236号住居跡・出土遺物(1)	157
第87図	第188号住居跡・出土遺物	116	第123図	第236号住居跡出土遺物(2)	158
第88図	第189号住居跡・カマド・出土遺物	117	第124図	第237号住居跡	159
第89図	第190号住居跡	118	第125図	第237号住居跡カマド・出土遺物(1)	160
第90図	第191号住居跡・出土遺物	118	第126図	第237号住居跡出土遺物(2)	161
第91図	第192～194号住居跡	119	第127図	第238～240号住居跡	164
第92図	第192・193号住居跡カマド	120	第128図	第238～240号住居跡出土遺物(1)	165
第93図	第192～194号住居跡出土遺物	121	第129図	第238～240号住居跡出土遺物(2)	166
第94図	第195・196号住居跡	123	第130図	第238～240号住居跡出土遺物(3)	167
第95図	第197～200号住居跡	124	第131図	第241号住居跡	169
第96図	第197・198号住居跡カマド・ 第197～199号住居跡出土遺物	125	第132図	第241号住居跡カマド・出土遺物(1)	170
第97図	第201号住居跡・出土遺物	127	第133図	第241号住居跡出土遺物(2)	171
第98図	第202号住居跡	128	第134図	第241号住居跡出土遺物(3)	172
第99図	第203・204号住居跡・出土遺物	129	第135図	第242号住居跡・出土遺物	173
第100図	第205号住居跡・出土遺物	130	第136図	第243・244号住居跡カマド	174
第101図	第206号住居跡・出土遺物	131	第137図	第245号住居跡	176
第102図	第207号住居跡・出土遺物	132	第138図	第245号住居跡カマド・遺物分布図	177
第103図	第208・209号住居跡	133	第139図	第245号住居跡遺物出土状況 出土遺物(1)	178
第104図	第208・209号住居跡カマド・出土遺物	134	第140図	第245号住居跡出土遺物(2)	179
第105図	第210～215号住居跡・出土遺物(1)	136	第141図	第245号住居跡出土遺物(3)	180
第106図	第210～215号住居跡出土遺物(2)	137	第142図	第245号住居跡出土遺物(4)	181

第143图	第246·247号住居跡·出土遺物	……183	第179图	第30号掘立柱建物跡·出土遺物	……222
第144图	第248·249号住居跡·出土遺物	……184	第180图	第31号掘立柱建物跡·出土遺物	……223
第145图	第250号住居跡·出土遺物	……185	第181图	第32号掘立柱建物跡·出土遺物	……224
第146图	第251·252号住居跡·出土遺物(1)	……186	第182图	第33号掘立柱建物跡·出土遺物	……225
第147图	第251·252号住居跡出土遺物(2)	……187	第183图	第34号掘立柱建物跡	……227
第148图	第253号住居跡	……189	第184图	第35号掘立柱建物跡·出土遺物	……228
第149图	第254号住居跡·出土遺物	……189	第185图	第36号掘立柱建物跡·出土遺物	……229
第150图	第255号住居跡·出土遺物	……190	第186图	第37号掘立柱建物跡·出土遺物	……230
第151图	第256号A·B住居跡	……191	第187图	第38号掘立柱建物跡·出土遺物	……231
第152图	第256号A·B住居跡出土遺物	……192	第188图	第39号掘立柱建物跡·出土遺物	……232
第153图	第257号住居跡·出土遺物	……193	第189图	第40号掘立柱建物跡·出土遺物	……233
第154图	第258号住居跡·出土遺物	……193	第190图	第41号掘立柱建物跡	……234
第155图	第259·260号住居跡·出土遺物	……194	第191图	第42号掘立柱建物跡·出土遺物	……235
第156图	第261号住居跡·出土遺物	……196	第192图	第43号掘立柱建物跡	……236
第157图	第262·263号住居跡·出土遺物	……197	第193图	第44号掘立柱建物跡·出土遺物	……237
第158图	第11号掘立柱建物跡	……199	第194图	第45号掘立柱建物跡·出土遺物	……238
第159图	第12号掘立柱建物跡·出土遺物	……200	第195图	第46号掘立柱建物跡·出土遺物	……240
第160图	第13号掘立柱建物跡(1)	……201	第196图	第47号掘立柱建物跡·出土遺物	……241
第161图	第13号掘立柱建物跡(2)·出土遺物	……202	第197图	第48号掘立柱建物跡·出土遺物	……242
第162图	第14号掘立柱建物跡	……203	第198图	第49号掘立柱建物跡	……243
第163图	第15号A·B掘立柱建物跡(1)· 出土遺物	……205	第199图	第50号掘立柱建物跡	……244
第164图	第15号A·B掘立柱建物跡(2)	……206	第200图	第51号掘立柱建物跡	……245
第165图	第16号掘立柱建物跡	……207	第201图	第52号掘立柱建物跡·出土遺物	……246
第166图	第17号掘立柱建物跡	……208	第202图	第53号掘立柱建物跡·出土遺物	……247
第167图	第18号掘立柱建物跡	……209	第203图	第54号掘立柱建物跡·出土遺物	……248
第168图	第19号掘立柱建物跡·出土遺物	……210	第204图	第55号掘立柱建物跡	……249
第169图	第20号掘立柱建物跡	……211	第205图	第56号掘立柱建物跡·出土遺物	……250
第170图	第21号掘立柱建物跡·出土遺物	……212	第206图	第57号掘立柱建物跡·出土遺物	……251
第171图	第22号掘立柱建物跡·出土遺物	……213	第207图	第58号掘立柱建物跡·出土遺物	……252
第172图	第23号掘立柱建物跡·出土遺物	……215	第208图	第59号掘立柱建物跡·出土遺物	……254
第173图	第24号掘立柱建物跡	……216	第209图	第59号掘立柱建物跡出土遺物	……255
第174图	第25号掘立柱建物跡·出土遺物	……217	第210图	第60号掘立柱建物跡·出土遺物	……255
第175图	第26号掘立柱建物跡·出土遺物	……218	第211图	第61号掘立柱建物跡	……256
第176图	第27号掘立柱建物跡·出土遺物	……219	第212图	第62号掘立柱建物跡·出土遺物	……257
第177图	第28号掘立柱建物跡·出土遺物	……220	第213图	第63号掘立柱建物跡·出土遺物	……259
第178图	第29号掘立柱建物跡·出土遺物	……221	第214图	第64号掘立柱建物跡·出土遺物	……260
			第215图	第65号掘立柱建物跡·出土遺物	……261

第216図	第66号掘立柱建物跡	262	第253図	上墳(4)	314
第217図	第67号掘立柱建物跡	263	第254図	上墳(5)	315
第218図	第68号掘立柱建物跡	264	第255図	土墳(6)	316
第219図	第69号掘立柱建物跡・出土遺物	265	第256図	土墳(7)	317
第220図	溝跡(1)	266	第257図	上墳(8)	318
第221図	溝跡(2)	268	第258図	土墳(9)	319
第222図	溝跡(3)	269	第259図	七墳出土遺物(1)	321
第223図	溝跡(4)	270	第260図	土墳出土遺物(2)	322
第224図	溝跡(5)	271	第261図	欄列跡(1)	329
第225図	溝跡(6)	272	第262図	欄列跡(2)	330
第226図	溝跡(7)	273	第263図	第3・4号土墳墓	332
第227図	溝跡(8)	274	第264図	第4号土墳墓遺物分布図	333
第228図	溝跡(9)	276	第265図	第3号土墳墓出土古銭	334
第229図	溝跡(10)	277	第266図	第1号茶毘跡	335
第230図	溝跡(11)	278	第267図	ビット出土遺物	336
第231図	溝跡(12)	279	第268図	グリッド・表採出土遺物	337
第232図	溝跡(13)	280	第269図	Ⅱ区出土鉄製品(1)	339
第233図	溝跡出土遺物	281	第270図	Ⅱ区出土鉄製品(2)	340
第234図	第10号溝跡出土遺物(1)	283	第271図	追加・訂正遺物	342
第235図	第10号溝跡出土遺物(2)	284	第272図	大寄遺跡Ⅰ～Ⅲ期の土器	347
第236図	第10号溝跡出土遺物(3)	285	第273図	大寄遺跡Ⅳ～Ⅴ期の土器	349
第237図	第10号溝跡出土遺物(4)	286	第274図	大寄遺跡Ⅵ～Ⅶ期の土器	351
第238図	井戸跡(1)	291	第275図	大寄遺跡Ⅷ～Ⅹ期の土器	353
第239図	井戸跡(2)	292	第276図	大寄遺跡ⅩⅠ～ⅩⅡ期の土器	354
第240図	井戸跡(3)	293	第277図	大寄遺跡ⅩⅢ～ⅩⅣ期の土器	355
第241図	井戸跡出土遺物(1)	295	第278図	各土器群の概念図	357
第242図	井戸跡出土遺物(2)	296	第279図	土器の種類と器種	359
第243図	井戸跡出土遺物(3)	297	第280図	各土器群の共存関係	359
第244図	井戸跡出土遺物(4)	298	第281図	各土器群の消長図	360
第245図	第37号井戸跡・出土遺物(1)	300	第282図	住居跡・掘立柱建物の規模	362
第246図	第37号井戸跡出土遺物(2)	301	第283図	住居跡・掘立柱建物の軸方向	363
第247図	第37号井戸跡出土遺物(3)	303	第284図	Ⅰ～Ⅱ期の住居跡	364・365
第248図	第37号井戸跡出土遺物(4)	304	第285図	Ⅲ～Ⅴ期の住居跡	366・367
第249図	第37号井戸跡出土遺物(5)	305	第286図	Ⅵ～Ⅶ期の住居跡	368・369
第250図	土墳(1)	311	第287図	Ⅷ～Ⅸ期の住居跡	370・371
第251図	土墳(2)	312	第288図	Ⅹ～ⅩⅠ期の住居跡	372・373
第252図	土墳(3)	313	第289図	ⅩⅡ～ⅩⅢ期の住居跡	374・375

第290図	XⅣ期の住居跡 ……………	376・377
第291図	7世紀の掘立柱建物跡 ……………	378・379

第292図	8世紀の掘立柱建物跡 ……………	380・381
第293図	9・10世紀の掘立柱建物跡 ……………	382・383

目 次

第1表	各遺跡の調査期間と面積 ……………	2	第33表	第179・180号住居跡出土遺物観察表 ……	110
第2表	第126・128号住居跡出土遺物観察表 ……	48	第34表	第181・182号住居跡出土遺物観察表 ……	112
第3表	第129号住居跡出土遺物観察表 ……………	50	第35表	第183～185号住居跡出土遺物観察表 ……	114
第4表	第130～132号住居跡出土遺物観察表 ……	53	第36表	第186号住居跡出土遺物観察表 ……………	116
第5表	第133号住居跡出土遺物観察表 ……………	54	第37表	第188号住居跡出土遺物観察表 ……………	116
第6表	第134号住居跡出土遺物観察表 ……………	55	第38表	第189号住居跡出土遺物観察表 ……………	117
第7表	第135号住居跡出土遺物観察表 ……………	56	第39表	第191号住居跡出土遺物観察表 ……………	118
第8表	第136～138号住居跡出土遺物観察表 ……	60	第40表	第192～194号住居跡出土遺物観察表 ……	122
第9表	第139号住居跡出土遺物観察表 ……………	62	第41表	第197～199号住居跡出土遺物観察表 ……	126
第10表	第140号住居跡出土遺物観察表 ……………	63	第42表	第201号住居跡出土遺物観察表 ……………	127
第11表	第141号住居跡出土遺物観察表 ……………	65	第43表	第203・204号住居跡出土遺物観察表 ……	129
第12表	第142～144号住居跡出土遺物観察表 ……	68	第44表	第205号住居跡出土遺物観察表 ……………	130
第13表	第145・146号住居跡出土遺物観察表 ……	70	第45表	第206号住居跡出土遺物観察表 ……………	132
第14表	第147～149号住居跡出土遺物観察表 ……	74	第46表	第207号住居跡出土遺物観察表 ……………	132
第15表	第150号住居跡出土遺物観察表 ……………	75	第47表	第208・209号住居跡出土遺物観察表 ……	135
第16表	第151号住居跡出土遺物観察表 ……………	76	第48表	第210～215号住居跡出土遺物観察表 ……	138
第17表	第152号住居跡出土遺物観察表 ……………	76	第49表	第216号住居跡出土遺物観察表 ……………	141
第18表	第153～155号住居跡出土遺物観察表 ……	81	第50表	第217号住居跡出土遺物観察表 ……………	143
第19表	第156号住居跡出土遺物観察表 ……………	85	第51表	第218号住居跡出土遺物観察表 ……………	144
第20表	第157・158号住居跡出土遺物観察表 ……	86	第52表	第220・221号住居跡出土遺物観察表 ……	144
第21表	第159・160号住居跡出土遺物観察表 ……	89	第53表	第222・223号住居跡出土遺物観察表 ……	146
第22表	第162～164号住居跡出土遺物観察表 ……	93	第54表	第224・225号住居跡出土遺物観察表 ……	148
第23表	第165・166号住居跡出土遺物観察表 ……	97	第55表	第226～229号住居跡出土遺物観察表 ……	151
第24表	第167号住居跡出土遺物観察表 ……………	100	第56表	第230号住居跡出土遺物観察表 ……………	151
第25表	第168号住居跡出土遺物観察表 ……………	100	第57表	第231号住居跡出土遺物観察表 ……………	154
第26表	第169号住居跡出土遺物観察表 ……………	102	第58表	第232号住居跡出土遺物観察表 ……………	154
第27表	第170号住居跡出土遺物観察表 ……………	102	第59表	第233号住居跡出土遺物観察表 ……………	154
第28表	第171号住居跡出土遺物観察表 ……………	104	第60表	第234・235号住居跡出土遺物観察表 ……	156
第29表	第173号住居跡出土遺物観察表 ……………	104	第61表	第236号住居跡出土遺物観察表 ……………	158
第30表	第175号住居跡出土遺物観察表 ……………	105	第62表	第237号住居跡出土遺物観察表 ……………	162
第31表	第176号住居跡出土遺物観察表 ……………	106	第63表	第238～240号住居跡出土遺物観察表 ……	168
第32表	第177号住居跡出土遺物観察表 ……………	106	第64表	第241号住居跡出土遺物観察表 ……………	172

第 65 表	第 242 号住居跡出土遺物觀察表	173
第 66 表	第 245 号住居跡出土遺物觀察表	181
第 67 表	第 246・247 号住居跡出土遺物觀察表	184
第 68 表	第 248・249 号住居跡出土遺物觀察表	184
第 69 表	第 250 号住居跡出土遺物觀察表	185
第 70 表	第 251・252 号住居跡出土遺物觀察表	188
第 71 表	第 254 号住居跡出土遺物觀察表	189
第 72 表	第 255 号住居跡出土遺物觀察表	189
第 73 表	第 256 号住居跡出土遺物觀察表	192
第 74 表	第 257 号住居跡出土遺物觀察表	193
第 75 表	第 258 号住居跡出土遺物觀察表	193
第 76 表	第 259・260 号住居跡出土遺物觀察表	195
第 77 表	第 261 号住居跡出土遺物觀察表	196
第 78 表	第 262・263 号住居跡出土遺物觀察表	196
第 79 表	第 12 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	199
第 80 表	第 13 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	202
第 81 表	第 15 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	206
第 82 表	第 19 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	210
第 83 表	第 21 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	212
第 84 表	第 22 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	215
第 85 表	第 23 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	215
第 86 表	第 25 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	217
第 87 表	第 26 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	218
第 88 表	第 27 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	219
第 89 表	第 28 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	220
第 90 表	第 29 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	221
第 91 表	第 30 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	222
第 92 表	第 31 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	223
第 93 表	第 32 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	224
第 94 表	第 33 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	225
第 95 表	第 35 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	228
第 96 表	第 36 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	229
第 97 表	第 37 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	230
第 98 表	第 38 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	231
第 99 表	第 39 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	232

第 100 表	第 40 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	233
第 101 表	第 42 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	235
第 102 表	第 44 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	237
第 103 表	第 45 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	238
第 104 表	第 46 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	240
第 105 表	第 47 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	241
第 106 表	第 48 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	242
第 107 表	第 52 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	246
第 108 表	第 53 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	247
第 109 表	第 54 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	248
第 110 表	第 56 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	250
第 111 表	第 57 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	250
第 112 表	第 58 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	250
第 113 表	第 59 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	255
第 114 表	第 60 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	255
第 115 表	第 62 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	257
第 116 表	第 63 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	259
第 117 表	第 64 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	261
第 118 表	第 65 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	261
第 119 表	第 69 号掘立柱建物跡出土遺物觀察表	265
第 120 表	溝跡出土遺物觀察表	282
第 121 表	第 10 号溝跡出土遺物觀察表	287
第 122 表	溝跡一覽表	289
第 123 表	井戸跡出土遺物觀察表	299
第 124 表	井戸枠計測表	302
第 125 表	第 37 号井戸跡出土遺物觀察表	306
第 126 表	井戸跡一覽表	309
第 127 表	土壇出土遺物觀察表	323
第 128 表	土壇一覽表	324
第 129 表	ビット出土遺物觀察表	336
第 130 表	グリッド・表採出土遺物觀察表	338
第 131 表	鉄製品一覽表	340
第 132 表	追加・訂正出土遺物觀察表	341
第 133 表	大寄遺跡 II 区遺構新旧対照表	343

写真図版目次

- 図版1 大寄遺跡Ⅱ区全景
大寄遺跡Ⅱ区B～D-21～23グリッド付近 (西より)
- 図版2 大寄遺跡Ⅱ区B・C-30～33グリッド付近 (東より)
大寄遺跡Ⅱ区掘立柱建物群G～I-18～19グリッド付近 (西より)
- 図版3 大寄遺跡Ⅱ区L～N-14～18グリッド付近 (西より)
大寄遺跡Ⅱ区B・C-34～36グリッド付近 (南より)
- 図版4 第124号住居跡
第124号住居跡 カマド
第126号住居跡
第126～128号住居跡
第131号住居跡
第131号住居跡 カマド遺物出土状況
第131号住居跡 鉄器出土状況
- 図版5 第132号住居跡 遺物出土状況
第132号住居跡 カマド遺物出土状況
第134号住居跡
第134号住居跡 遺物出土状況
第134号住居跡 カマド
第134号住居跡 カマド断面
第134号住居跡 カマド遺物出土状況
第135号住居跡
- 図版6 第135号住居跡 遺物出土状況
第135号住居跡 カマド遺物出土状況
第137・138号住居跡
第139号住居跡 遺物出土状況
第139号住居跡 カマド遺物出土状況
第140号住居跡
第140号住居跡 遺物出土状況
第140号住居跡 カマド遺物出土状況
- 図版7 第141号住居跡
第141号住居跡 カマド断面
第142号住居跡 遺物出土状況
第142号住居跡 カマド遺物出土状況
第143号住居跡 遺物出土状況
第144号住居跡
第145号住居跡 遺物出土状況
第146号住居跡
- 図版8 第147号住居跡
第147号住居跡 2号カマド
第145・146・149号住居跡
第153号住居跡
第155号住居跡
第155号住居跡 カマド遺物出土状況
第155号住居跡 カマド断面
第156号住居跡
- 図版9 第156号住居跡 遺物出土状況
第156号住居跡 カマド遺物出土状況
第156号住居跡 カマド遺物出土状況
第158号住居跡
第160号住居跡
第160号住居跡 遺物出土状況
第160号住居跡 カマド断面
第161号住居跡
- 図版10 第162号住居跡
第162号住居跡 遺物出土状況
第162号住居跡 カマド遺物出土状況
第162号住居跡 カマド断面
第163号住居跡
第163号住居跡 カマド遺物出土状況
第163号住居跡 鉄器出土状況
第163号住居跡 遺物出土状況
- 図版11 第164号住居跡
第165号住居跡
第166号住居跡
第167号住居跡

- 第167号住居跡 カマド
- 第168号住居跡
- 第168号住居跡 カマド
- 第169号住居跡 一次床面
- 図版12 第169号住居跡 二次床面
- 第171号住居跡・第160号土塙
- 第176号住居跡
- 第177号住居跡・第163号土塙
- 第179号住居跡
- 第179号住居跡 カマド
- 第180号住居跡
- 第180号住居跡 カマド
- 図版13 第181・182号住居跡・第198～200号土塙
- 第182号住居跡 カマド
- 第183号住居跡 遺物出土状況
- 第183号住居跡 遺物出土状況
- 第186号住居跡
- 第186号住居跡 遺物出土状況
- 第186号住居跡 カマド
- 第186号住居跡 カマド遺物出土状況
- 図版14 第187号住居跡
- 第189号住居跡・第129号土塙
- 第189号住居跡 カマド
- 第189号住居跡 遺物出土状況
- 第190号住居跡・第48号井戸跡
- 第192号住居跡
- 第192号住居跡 カマド
- 第192号住居跡 カマド崩落状況
- 図版15 第193号住居跡
- 第193号住居跡 カマド
- 第193号住居跡 カマド断面
- 第192～194号住居跡
- 第195・196号住居跡
- 第196号住居跡 カマド
- 第197号住居跡
- 第198号住居跡
- 図版16 第198号住居跡 カマド
- 第199号住居跡
- 第199・200号住居跡
- 第201号住居跡
- 第205号住居跡
- 第206号住居跡
- 第206号住居跡 遺物出土状況
- 第206号住居跡 カマド
- 図版17 第207号住居跡
- 第207号住居跡 カマド
- 第207号住居跡 カマド
- 第208号住居跡
- 第209号住居跡
- 第209号住居跡 カマド
- 第209号住居跡 カマド断面
- 第209号住居跡 カマド遺物出土状況
- 図版18 第209号住居跡 遺物出土状況
- 第209号住居跡 ビット3断面
- 第209号住居跡 ビット4断面
- 第212～215号住居跡
- 第216号住居跡
- 第216号住居跡 遺物出土状況
- 第216号住居跡 カマド
- 第216号住居跡 カマド周辺遺物出土状況
- 図版19 第217号住居跡
- 第217号住居跡 遺物出土状況
- 第217号住居跡 カマド
- 第217号住居跡 カマド
- 第217号住居跡 出入り口部
- 第217号住居跡 遺物出土状況
- 第218号住居跡
- 第219号住居跡
- 図版20 第220・221号住居跡
- 第222・223号住居跡
- 第222号住居跡 遺物出土状況
- 第224号住居跡
- 第225号住居跡
- 第225号住居跡 遺物出土状況

	第225号住居跡 カマド		第245号住居跡 遺物出土状況
	第225号住居跡 カマド周辺遺物出土状況		第246号住居跡
図版21	第225号住居跡 カマド遺物出土状況		第247号住居跡
	第227・228号住居跡		第247号住居跡 遺物出土状況
	第231号住居跡		第248・249号住居跡
	第231号住居跡 遺物出土状況	図版26	第250号住居跡・第36号井戸跡
	第231・232号住居跡		第250号住居跡 カマド
	第236～242号住居跡		第251号住居跡
	第236号住居跡		第252号住居跡 遺物出土状況
	第236号住居跡 遺物出土状況		第252号住居跡 カマド遺物出土状況
図版22	第236号住居跡 カマド		第252号住居跡 遺物出土状況
	第236号住居跡 遺物出土状況		第254号住居跡
	第236号住居跡 遺物出土状況		第255号住居跡
	第236号住居跡 遺物出土状況	図版27	第256号住居跡
	第236～242号住居跡		第256号住居跡 上層1 遺物出土状況
	第237号住居跡 遺物出土状況		第257号住居跡
	第237号住居跡 カマド断面		第258号住居跡
	第237号住居跡 カマド断面		第259号住居跡
図版23	第237号住居跡 カマド断面		第260号住居跡
	第237号住居跡 カマド断面		第261号住居跡
	第238号住居跡		第262号住居跡
	第238号住居跡 遺物出土状況	図版28	第263号住居跡
	第238号住居跡		第11号掘立柱建物跡
	第238号住居跡 カマド		第12号掘立柱建物跡
	第239号住居跡		第13号掘立柱建物跡
	第240号住居跡		第13号掘立柱建物跡
図版24	第241号住居跡 遺物出土状況		第14号掘立柱建物跡
	第241号住居跡 カマド遺物出土状況		第15号掘立柱建物跡
	第242号住居跡		第17号掘立柱建物跡
	第242号住居跡 カマド遺物出土状況	図版29	第18号掘立柱建物跡
	第245号住居跡		第19号掘立柱建物跡
	第245号住居跡 遺物出土状況		第20・21号掘立柱建物跡
	第245号住居跡 カマド遺物出土状況		第22・23号掘立柱建物跡
	第245号住居跡 遺物出土状況		第24号掘立柱建物跡
図版25	第245号住居跡 遺物出土状況		第26号掘立柱建物跡
	第245号住居跡 遺物出土状況		第27号掘立柱建物跡
	第245号住居跡 遺物出土状況		第27・28号掘立柱建物跡

- 図版30 第28号孤立柱建物跡
 第29号孤立柱建物跡
 第30号孤立柱建物跡
 第31号孤立柱建物跡
 第32号孤立柱建物跡
 孤立柱建物跡群 (G～I -18～19グリッド付近)
 第33・34号孤立柱建物跡
 第35号孤立柱建物跡
- 図版31 第36号孤立柱建物跡
 第37号孤立柱建物跡
 第38号孤立柱建物跡
 第39号孤立柱建物跡
 第40号孤立柱建物跡
 第41・42号孤立柱建物跡
 第43号孤立柱建物跡
 第44号孤立柱建物跡
- 図版32 第45～47号孤立柱建物跡
 第46号孤立柱建物跡
 第48号孤立柱建物跡
 第49号孤立柱建物跡
 第50号孤立柱建物跡
 第51号孤立柱建物跡
 第52号孤立柱建物跡
 第55号孤立柱建物跡
- 図版33 第56号孤立柱建物跡
 第57号孤立柱建物跡
 第58号孤立柱建物跡
 第59号孤立柱建物跡
 第60号孤立柱建物跡
 第61号孤立柱建物跡
 第62号孤立柱建物跡
 第63号孤立柱建物跡
- 図版34 第64号孤立柱建物跡
 第65号孤立柱建物跡
 第66号孤立柱建物跡
 第67号孤立柱建物跡
- 第68号孤立柱建物跡
 第69号孤立柱建物跡
 第37号井戸跡
 第37号井戸跡 断面
- 図版35 第37号井戸跡 断面
 第37号井戸跡 井戸枠出土状況(1)
 第37号井戸跡 井戸枠出土状況(2)
 第37号井戸跡 井戸枠出土状況(3)
 第37号井戸跡 井戸枠出土状況(4)
 第37号井戸跡 井戸枠出土状況 (最下段のみ)
 第37号井戸跡
 第37号井戸跡 遺物出土状況
- 図版36 第37号井戸跡 遺物出土状況
 第37号井戸跡 遺物出土状況
 第37号井戸跡 炭化材出土状況
 第40号井戸跡
 第44号井戸跡
 第48号井戸跡
 第48号井戸跡 断面
 第48号井戸跡 馬糞出土状況
- 図版37 第49号井戸跡 断面
 第49号井戸跡
 第50号井戸跡
 第51号井戸跡
 第52号井戸跡
 第53号井戸跡
 第54号井戸跡 断面
 第54号井戸跡 遺物出土状況
- 図版38 第55号井戸跡 遺物出土状況
 第55号井戸跡 遺物出土状況
 第56号井戸跡
 第57号井戸跡
 第10号溝跡
 第10号溝跡 遺物出土状況
 第13号溝跡
 第13号溝跡

- 図版39 第24号溝跡 遺物出土状況
 第104号土壇 遺物出土状況
 第242号土壇
 第242号土壇 遺物出土状況
 第3号土壇墓
 第3号土壇墓 遺物出土状況
 第3号土壇墓 遺物出土状況
 第4号土壇墓
 図版40 第4号土壇墓 遺物出土状況
 第4号土壇墓 獣歯出土状況
 第4号土壇墓 獣歯下顎部出土状況
 第4号土壇墓 古銭出土状況
 第1号茶毘跡
 第1号茶毘跡 遺物出土状況
 A-25GrP1 遺物出土状況
 A-26GrP1 遺物出土状況
 図版41 第126・129・131~134号住居跡出土遺物
 図版42 第137・138・140~142・145・148号住居跡
 出土遺物
 図版43 第148・152・153・155・156号住居跡出土遺物
 図版44 第156・158・160・162号住居跡出土遺物
 図版45 第162・163・165・167・169号住居跡出土遺物
 図版46 第169・170・183・186・191号住居跡出土遺物
 図版47 第193・201・203~206号住居跡出土遺物
 図版48 第206・208・209・211号住居跡出土遺物
 図版49 第212~215・220・222・225・227・231号住
 居跡出土遺物
 図版50 第231・235・236号住居跡出土遺物
 図版51 第236・237号住居跡出土遺物
 図版52 第237・238号住居跡出土遺物
 図版53 第238号住居跡出土遺物
 図版54 第240・241号住居跡出土遺物
 図版55 第241・242・245号住居跡出土遺物
 図版56 第245~247・250・252号住居跡出土遺物
 図版57 第252・254・256号住居跡・第15・48号据立
 柱建物跡・第8・9号溝跡出土遺物
 図版58 第9・10号溝跡出土遺物
 図版59 第10号溝跡・第33・38号井戸跡出土遺物
 図版60 第37・40・47・54~56号井戸跡出土遺物
 図版61 第37号井戸跡・第120・155・158・230号土
 壇・ビット出土遺物
 図版62 第212・250号住居跡・第37号井戸跡・第1
 号土壇墓・ビット・グリッド出土遺物
 図版63 第133・137~138号住居跡出土遺物
 図版64 第142・144・153・155・160号住居跡出土遺物
 図版65 第160・167・180・183・186号住居跡出土遺
 物
 図版66 第193・203・213~215・225・231号住居跡
 出土遺物
 図版67 第236・237・241・245号住居跡出土遺物
 図版68 第245・256・262号住居跡・第10号溝跡出土
 遺物
 図版69 第10号溝跡・第40・51・57号井戸跡出土遺物
 図版70 第37・57号井戸跡・第230号土壇・ビット・
 グリッド出土遺物
 図版71 第129・134・155・190号住居跡出土遺物
 図版72 第160・167・206号住居跡出土遺物
 図版73 第206・216号住居跡出土遺物
 図版74 第225・236~238号住居跡出土遺物
 図版75 第238・241・245号住居跡出土遺物
 図版76 第245号住居跡出土遺物
 図版77 第245・252号住居跡出土遺物
 図版78 第252・262号住居跡・第10号溝跡出土遺物
 図版79 I区第203号住居跡・第47号井戸跡出土遺
 物・鉄製品
 図版80 灰釉陶器
 図版81 土錘・勾玉・切子玉
 図版82 砥石・第3号土壇墓出土古銭
 図版83 第110・129・179・180・183・193・199・217・
 237号住居跡・第10号溝跡・第3号土壇墓出
 土遺物
 図版84 第37号井戸跡出土井戸枠・木製容器

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

岡部町は、農業を中心とした町づくりから、産業構造の転換を図り、工業、商業、農業のバランスがとれた創造性豊かな活力に満ちた町づくりの実現に取り組んでいる。

事業の目玉となる道の駅おかべ、中宿歴史公園、古代倉庫復元など県指定史跡中宿遺跡を中心に史跡を活用した総合的な整備と、岡部駅周辺の区画整理事業が始まった。事業地内の熊野遺跡の事前発掘調査も実施され、和同開寶や三彩陶枕などの注目すべき出土品から、熊野遺跡は律令時代の榛澤郡衙の中心地と推定されている。

こうした開発事業に対応するため、町は新たに平成5年度から文化財保護体制の整備と充実を図るため、教育委員会に文化財保護室を設置した。県はこれに応え県の職員を派遣して体制の強化を支援している。

一方、町は工業の導入振興によって税収の増大と雇用の促進をはかるため、榛澤地区に開発面積231,000㎡の民間企業3社が進出する岡部町西部工業団地建設を誘致した。

工業団地建設予定地には埋蔵文化財包蔵地が所在するため、町は事業者とその取り扱いについて協議を重ねてきた。町教育委員会は平成8年9月から11月にかけて、予定地内の試掘調査を実施し、5ヶ所の遺跡の所在を確認した。遺跡の面積は合計約86,200㎡に達することが明らかとなった。

町は遺跡を出来るだけ保存する方向で開発企業3社に設計変更を要望して、調査期間の短縮、調査費用の縮減をはかった。しかし、町文化財保護室の体制は区画整理や歴史公園建設、町史編さん事業等と並行して、工業団地の発掘調査に対応するだけの条件が整わず、町主体となつての発掘調査計画は暗礁に乗り上げた。

行き詰まった状況を何とか打開するため、岡部町

長は工業団地建設促進に伴う埋蔵文化財の発掘調査協力について、県の協力が得られるよう県教育委員会に陳情し、指導及び協力を依頼した。

町は苦しい財政状況の中で6人の専門職員を配し、文化財行政の積極的推進に努め先進的な体制造りに努力している。県はこうした町の姿勢を高く評価した。この上さらに工業団地の発掘調査を実施するだけの余力は残されていないと判断した。そこで県文化財保護課は調査の受皿として財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団(以下「埋文事業団」)が受託事業として実施できるかどうか検討に入り、関係各方面と調整を図り、受託条件等を整備した。そして局内の合意を得て市町村支援の観点から、埋文事業団が委託を受けて発掘調査を実施する旨、正式に町と事業者に加え、理解と協力を求めた。その方針は、調査主体を埋文事業団とし、町も調査組織に職員を派遣して全面協体制をとるものである。さっそく関係者間で具体的な調査期間、方法、経費を中心に協議が行われた。

かくして平成8年12月19日付け教文第1246号で県から事業者の鹿島道路株式会社・株式会社横森製作所・東洋エクステリア株式会社あて、岡部町と事業委託契約の締結を、岡部町は埋文事業団と事業委託契約の手続きを行うよう通知した。

発掘調査の委託契約は、町が発掘調査から整理報告書刊行まで、契約上の義務と責任を履行することとして契約上の形を整えた。

発掘調査に先立ち事業者からは文化財保護法第57条の第2項に基づく発掘通知が、埋文事業団からは同法57条の第1項に基づく発掘調査届けが提出され、平成9年1月6日から沖田・大寄遺跡をかきりに発掘調査が開始された。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

岡部町西部工業団地造成用地内に所在する周知の遺跡は、大寄遺跡、宮西遺跡、西浦北遺跡の3遺跡である。各遺跡の範囲及び遺構確認を目的とした試掘調査は岡部町教育委員会によって行われた。その結果前記2遺跡において遺構が確認された。さらに新たに沖田Ⅰ遺跡、沖田Ⅱ遺跡、沖田Ⅲ遺跡の存在が確認された。特に大寄遺跡、宮西遺跡については濃密に遺構が分布することが明らかとなった。西浦

北遺跡については、対象範囲では遺構は確認されなかった。以上の結果から前記5遺跡について調査を行うこととなった。

調査に当たっては文化財保護課、岡部町教育委員会、開発担当者代表である鹿島道路株式会社と綿密な協議を行い、各遺跡の調査時期と調査部分について決定した。各遺跡の調査期間及び面積は第1表に示したとおりである。

第1表 各遺跡の調査期間と面積

	平成8年度			平成9年度					平成10年度											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
大寄遺跡 34,100㎡	-----																			
沖田Ⅰ遺跡 3,700㎡	-----																			
沖田Ⅱ遺跡 4,500㎡	-----																			
沖田Ⅲ遺跡 4,800㎡	-----																			
宮西遺跡 18,180㎡	-----																			

以下に本報告に関する遺跡の調査経過について記す。

大寄遺跡

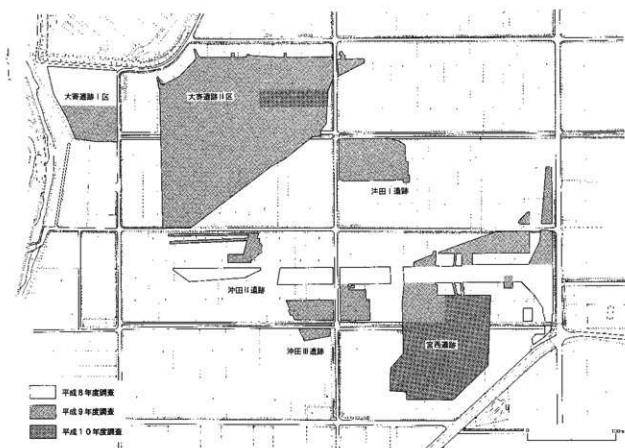
大寄遺跡は、西部工場用地用地内に所在する遺跡群の中では、西北部に位置する。調査は平成9年1月6日から平成10年4月30日まで行われた。調査面積は約34,100㎡である。

保存区域を挟んで西側のブロックを、便宜的に大寄遺跡Ⅰ区、東側のブロックをⅡ区と称する。調査は小山川に面した大寄遺跡Ⅰ区から開始された。最初に重機による表土掘削を行ったところ、遺跡全体に黒色土が厚く堆積し、住居跡が密集して重複していることが判明した。黒色土中に包含されていた住居跡の大半は、掘り込みが浅く、中には床面の痕跡を残すみの住居跡も存在し、遺構確認及び精査は

困難を極めた。

精査の結果、縄文時代前期の住居跡及び古墳時代から平安時代に至る住居跡が計212軒、掘立柱建物跡22棟等、多数の遺構とそれに伴う遺物が検出された。調査は平成9年度に継続し、6月図化作業、航空写真撮影を行い、調査は終了した。

大寄遺跡Ⅱ区は平成9年度4月、Ⅰ区と一部平行しながら調査を開始した。調査区南部は埋没谷が入り、遺構密度は比較的薄かった。特に南東部は地形が傾斜しており、居住域としては利用されなかったようである。反面、調査区北半は、相対的に高い地形を生かして居住域として長期間使用されていた。遺構密度は極めて濃く、多数の遺構が複雑に重複しており、調査は難航した。精査の結果、縄文時代前期の住居跡4軒、古墳時代から平安時代に至る住居



第1図 年度別調査範囲

跡259軒、掘立柱建物跡69棟等、多数の遺構とそれに伴う遺物が検出された。平成11年3月、調査はほぼ終了、航空写真撮影を実施した。年度が変わって、平成11年4月、残った図化作業の一部と図面点検を行い、調査は全て終了した。

整理・報告書作成事業

整理事業は、平成10年4月1日から平成12年9月30日まで実施した。平成10年度は沖田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ以西の整理と平行して実施した。遺物の水洗、注記を経て、接合、復元、実測作業、遺構図の整理と二次原図の作成、トレース作業などを進めた。平成11年

度は遺物の接合・復元作業と拓本採り、実測作業を本格的に進めた。また、遺構図のトレースはほぼ終了した。平成12年度、遺物の実測作業と平行してトレースを実施した。その後、遺構図・遺物図版の版組、遺物写真撮影、原稿執筆等を行い、「人寄遺跡Ⅰ」を刊行した。平成13年度は、遺物の復元、実測、トレース、遺構図の整理、トレースを並行して行い、その後遺構図・遺物図版の版組、遺物写真撮影、原稿執筆、遺物観察表の作成を経て、1月割付を作成、2月人札。校正を行い、3月本書の印刷を終了した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

平成8～10年度

理事 長 荒井 桂
副理事 長 富田真也(8・9年度)
副理事 長 飯塚誠一郎(10年度)
専務理事 吉川國男(8年度)
専務理事 堀野 博(9年度)
常務理事兼管理部長 稲葉文夫(8・9年度)
常務理事兼管理部長 鈴木 進(10年度)
理事兼調査部長 梅沢太久夫(8・9年度)
管理部

庶務課 長 依田 透(8・9年度)
庶務課 長 金子 隆(10年度)
主 査 西沢 信行(8・9年度)
主 査 田中裕二(10年度)
主 任 長滝美智子
主 任 菊池 久(8年度)
主 任 腰塚雄二(9・10年度)
専門調査員兼経理課長 関野栄一
主 任 江田和美
主 任 福田昭美
主 任 腰塚雄二(8年度)
主 任 菊池 久(9・10年度)

調査部

調査部長 谷井 彪(10年度)
調査部副部長 高橋一夫(8年度)
調査部副部長 今泉泰之(9年度)
調査部副部長 水村孝行(10年度)
調査第一課長 井上尚明(9年度)
調査第二課長 大和 修(8年度)
調査第二課長 井上尚明(10年度)
主 査 元井 茂(8年度)
主 査 橋本 勉(8・9年度)
主 査 中村會司(9年度)
主 査 磯崎 一

主任調査員 富田和夫(9年度)
主任調査員 木戸春夫(8・9年度)
主任調査員 石坂俊郎(10年度)
主任調査員 宮瀧由紀子(8年度)
主任調査員 福田 聖(10年度)
同部町教育委員会
主 任 鳥羽政之(8年度)
主 事 平田重之(9年度)
主 事 宮本直樹(8年度)
臨時職員 松田 哲(9年度)
臨時職員 齋藤欣延(10年度)

(2) 整理・報告書作成事業

平成10～13年度

理事 長 荒井 桂(10・11年度)
理事 長 中野健一(12・13年度)
副理事 長 飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長 鈴木 進(10年度)
常務理事兼管理部長 広木 卓(11・12年度)
常務理事兼管理部長 大館 健(13年度)
管理部
管理部副部長 関野栄一(12年度)
管理部副部長兼経理課長 関野栄一(11年度)
管 理 幹 持田紀男(13年度)
庶務課 長 金子 隆(10・11年度)
主席(庶務担当) 阿部正浩(12年度)
主席(施設担当) 野中廣幸(12年度)
主 査 田中裕二(10・11年度)
主 任 江田和美(11年度)
主 任 長滝美智子(10・11年度)
主 任 腰塚雄二(10年度)
主 任 菊池 久(12・13年度)
専門調査員兼経理課長 関野栄一(10年度)
主席(経理担当) 江田和美(12年度)
主 任 江田和美(10・11・13年度)

主任 長滝美智子(12・13年度)
主任 福田昭美
主任 腰塚雄二(11～13年度)
主任 菊池 久(10・11年度)

資料部

資料部長 増田逸朗(10年度)
資料部長 高橋一夫(11年度)
主幹兼資料部副部長 小久保 徹(10年度)
専門調査員兼資料部副部長 石岡 憲雄(11年度)
専門調査員 大和 修(11年度)

(資料整理第2担当)

資料整理第二課長 市川 修(10年度)
主任調査員 木戸春夫(10年度)
統括調査員 磯崎 一(11年度)
調査部

調査部長 高橋一夫(12・13年度)
資料副部長 鈴木敏昭(12年度)
調査部副部長 坂野和信(13年度)
主席調査員(資料整理担当) 磯崎 一(12・13年度)
統括調査員 富田和夫(12年度)
主任調査員 福田 聖(13年度)

II 遺跡群の立地と環境

1. 地理的環境

岡部町は埼玉県の北西部に位置する。面積30.57 km²、人口約19,000人の農業を主体とした町で、特産品のブロッコリー生産は日本一を誇り、トウモロコシ、鶏卵、肥育牛も県下一の生産量である。

岡部町西部工業団地造成用地にかかる遺跡群は岡部町大字榛沢地内に位置する。この地域は岡部町の中でも最も西寄りにあたり、西側は小山川を挟んで本庄市と接する。最寄の交通はJR岡部駅で、駅から西北西に約3.2kmに位置する。周囲は畑と水田の広がる農村地帯である。

本地域にかかわる河川は女堰川、見馴川（下流で小山川）、志戸川、藤治川等があり、おおむね北東流し、利根川に注いでいる。

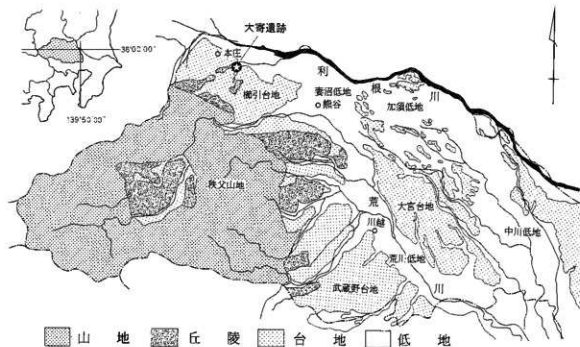
遺跡群の立地する本庄台地は、神流川によって生成された扇状地性台地である。標高約110mの神川町池田付近を扇頂部とする。そこから北東方向に高度を減じ、本庄市諏訪町では約50mとなる。扇端は

急崖となって妻沼低地と接する。西は神流川を境とし、東は志戸川支流の藤治川で楕引台地と面する。女堀川以東の地域は見馴川、志戸川などによる浸食が進んでおり、扇状地と自然堤防に分類される（註1）こともあるが、自然堤防とされる部分については本来の台地が浸食を受け、その上に堆積物がたまったものと推定される。発掘調査で遺構の確認される面はローム面であり、基本的に集落は北側の小山川と南側の志戸川に挟まれたこのような台地上に展開している。

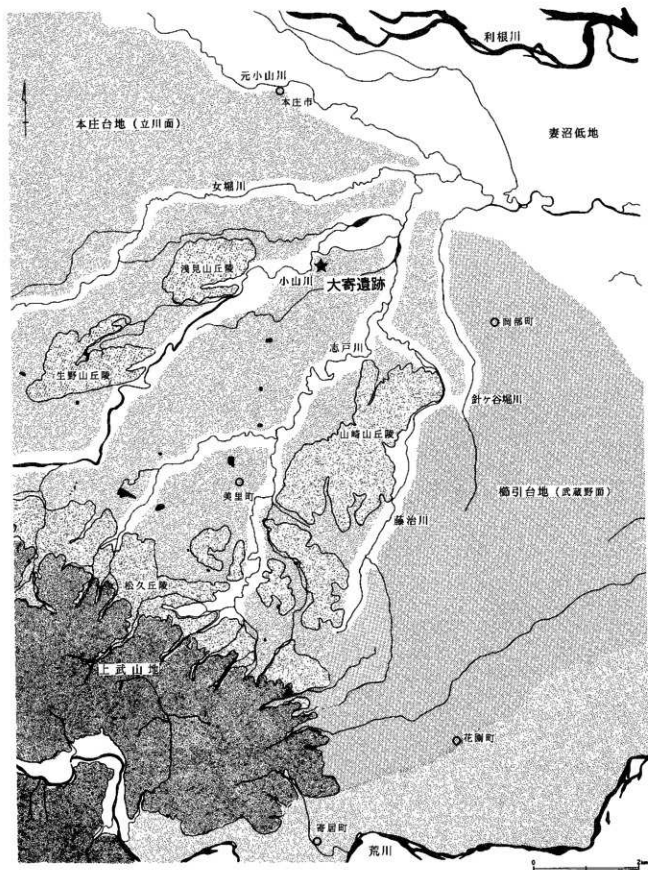
第3図は、明治18年測量の迅速図に埼玉県地質図等を参考にして作成した地形分類図である。細部については正確さに欠ける部分もあるので、正確には専門書を参考にされたい。

2. 周辺の遺跡

この地域は多くの遺跡が所在する所として知られ



第2図 埼玉県の地形



第3図 遺跡周辺の地形区分

ており、特に古墳時代以降の遺跡はその量とともに内容において県内屈指のものである。調査件数も多く既に数多くの報告書等が刊行され歴史的背景についても分析が加えられている。ここでは大寄遺跡の中心となる時期である古墳時代以降の遺跡について概観する。

前期の住居跡は原ヶ谷戸遺跡、大寄B遺跡、石母B遺跡、水窪遺跡、六反田遺跡、滝下遺跡等で検出されている。中期の住居跡は六反田遺跡、宮西遺跡、西浦北遺跡、東光寺裏遺跡等で検出されている。前期、中期の集落は、散発的で比較的小規模である。後期には六反田遺跡、砂田前遺跡などの大規模な集落が営まれている。

周辺一帯は方形周溝墓、古墳の密に分布する地域としてよく知られている。前期の石母B遺跡は美里町の南志渡川遺跡とともに前方後方形周溝墓を含む方形周溝墓群で、東海西部系土器群が多く出土している。原ヶ谷戸遺跡や大寄B遺跡でも前期の方形周溝墓が検出されている。中期では、安光寺遺跡、千光寺遺跡や、台地先端部の四十坂遺跡、中宿遺跡で方形周溝墓・方墳が検出されている。前期古墳としては見玉町鷺山古墳があり、中期には美里町長坂塚天塚古墳、川輪聖天塚古墳がある。

後期には各所に群集墳が形成される。遺跡周辺では本庄市西五十子古墳群、東五十子古墳群、西山古墳群、千光寺古墳群、四十塚古墳群などがある。また、宮西遺跡では古墳跡が検出され、平安時代の住居跡では埴輪が甕の袖として転用されていたことなどから、榛沢地区内にも古墳群が存在することが予想される。主要な古墳としては前記の他に浅間山古墳、寅稻荷塚古墳、御手長山古墳等がある。これらの古墳を造り得る社会を支える生産基盤は、主に周辺の低地部に求められる。石母A遺跡では、既に古墳時代前期から灌漑を目的とした施設が造られてい

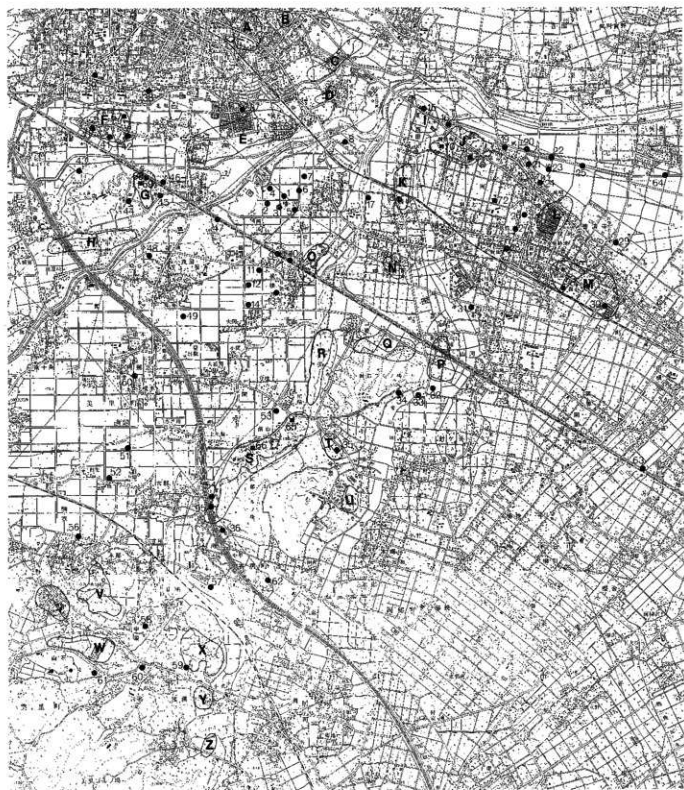
たと見られ、早くからこの地域に、水に対する管理技術が取り入れられていたことがわかる。このような伝統的な生産基盤の上に条里制が施行されるようになる。遺跡周辺には見玉条里、十条条里、岡部条里などがあり、調査例も増えている。

奈良・平安時代になると本遺跡群を含む小山川中流域の榛沢、後榛沢に加えて新たに、構引台地先端部の岡地区に集落が営まれるようになる。前者には六反田遺跡をはじめとして今回調査された大寄遺跡、宮西遺跡、石母遺跡や重要文化財に指定されている緑釉手付瓶等を出土した西浦北遺跡がある。後者には榛沢郡正倉跡に推定される県指定史跡中宿遺跡があり、7世紀後半から9世紀にかけての倉庫跡が検出されている。

中宿遺跡の南に広がる熊野遺跡は中宿遺跡とともに郡衙に関連する遺跡と推定されており、前代までと違った遺跡の有り方を示している。熊野遺跡からは大型の掘立柱建物跡や石組井戸、道路跡のほか、多数の住居跡が検出されている。遺物では多数の畿内産土師器、唐三彩の陶枕、円面硯、帯金など一般集落からは出土例の少ない遺物がみられ、郡衙を取り巻く集落の様相が判明しつつある。いずれ、政庁、正倉とともに周辺部を含めた具体的な郡衙像が明らかになるに違いない。

10世紀以降については本庄市大久保山遺跡、美里町向田遺跡、中宿遺跡等で竪穴住居跡、東光寺裏遺跡で羽釜などが出土している。今回の調査で大寄遺跡から該期の住居跡がまとめて検出されている。古代後半期の集落構造を具体的に窺うことのできる資料であり、その意義は大きい。

註1 「土地分類基本調査」では「見馴川低地」として細区分しているが、『新編埼玉県史別編3』においてはなされていない。



第4図 周辺の遺跡

周辺の遺跡

1 沖田I遺跡	2 沖田II遺跡	3 沖田III遺跡	4 大寄遺跡	5 西宮遺跡
6 西浦北遺跡	7 稲荷塚遺跡	8 六反田遺跡	9 東光寺裏遺跡	10 伊勢塚遺跡
11 石寺A遺跡	12 石寺B遺跡	13 地神祇A遺跡	14 地神祇B遺跡	15 原ヶ谷戸遺跡
16 四十坂遺跡	17 新井遺跡	18 水窪遺跡	19 上宿遺跡	20 滝下遺跡
21 中宿遺跡	22 砂田前遺跡	23 岡部桑里遺跡	24 同遺跡	25 樋詰遺跡
26 内手遺跡	27 熊野遺跡	28 新山遺跡	29 菅原遺跡	30 上原遺跡
31 西龍ヶ谷津遺跡	32 水久保遺跡	33 西谷遺跡	34 石原山瓦窯跡	35 猪山祭祀遺跡
36 北坂遺跡	37 田端屋敷遺跡	38 笠ヶ谷戸遺跡	39 雄滝遺跡	40 元高遺跡
41 七色塚遺跡	42 久下東遺跡	43 山根遺跡	44 大久保山遺跡	45 東谷遺跡
46 宍勝寺北裏遺跡	47 古川端遺跡	48 村後遺跡	49 日の森遺跡	50 向店遺跡
51 志渡川遺跡	52 南志渡川遺跡	53 石神遺跡	54 清水谷遺跡	55 安光寺遺跡
56 麻蘇神社前遺跡	57 甘粕山遺跡群	58 神明ヶ谷戸遺跡	59 誓門寺西山遺跡	60 こぶヶ谷戸祭祀遺跡
61 峯遺跡	62 用土平遺跡	63 島の上遺跡	64 矢島南遺跡	65 川輪型天塚古墳
66 長坂壱天塚古墳	67 公卿塚遺跡	68 前山1号墳	69 前山2号墳	70 浅間山古墳
71 寅船荷古墳	72 御手長山古墳	73 愛宕神社古墳	A 塚合古墳群	B 御堂坂古墳群
C 鶴の森古墳群	D 東五十子古墳群	E 西五十子古墳群	F 東富田古墳群	G 浅見山古墳群
H 塚本山古墳群	I 西田古墳群	J 四十坂古墳群	K 水窪古墳群	L 白山古墳群
M 上原古墳群	N 中南古墳群	O 後橋沢古墳群	P 茶白山古墳群	Q 千光寺古墳群
R 西山古墳群	S 諏訪山古墳群	T 猪山古墳群	U 大明神古墳群	V 木部山古墳群
W 羽黒山古墳群	X 誓門寺古墳群	Y 猪俣北古墳群	Z 猪俣南古墳群	

参考文献

- 埼玉県 1978 『土地分類基本調査 高崎・深谷』
- 埼玉県 1982 『新編埼玉県史』資料編1
- 埼玉県 1982 『新編埼玉県史』資料編2
- 堀口萬吉他 1986 『埼玉県の地形と地質』 『新編埼玉県史 別編3』 埼玉県
- 堀口萬吉他 1987 『荒川流域の地形』 『荒川 自然』 埼玉県
- 本庄市 1976 『本庄市史』 資料編
- 増田逸朗他 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 美里町 1986 『美里町史』 通史編
- 村本達郎 1975 『埼玉県地理図集』

上記以外の文献は文末に記載した。なお、本章は、木戸春夫 1998『沖田I/沖田II/沖田III』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第231集、富田和夫 2000『大寄遺跡I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268集を一部改変のうえ、抜粋して転載した。

III 遺跡群の概要

1. 遺跡群の概要

岡部町西部工業団地は大字椋沢地内に位置する。この地域は本庄台地が小山川と志戸川によって開削された扇状地である。遺構の検出される面は基本的にローム面であり通常の台地でのあり方と同じであるが、遺跡は時に埋没河川を含みその埋積土によって複雑な情況を呈する。本遺跡群は椋沢地内の西寄りに当たり、小山川に面して本庄市と接している。小山川と台地との比高差は3～4mを測る。北側は小山川の古い流路によって形成されたと思われる急勾配の斜面によって低位面に続く。

この地域には六反田遺跡、西浦北遺跡を始めとして多くの遺跡が存在し、椋沢遺跡群の名称と呼ばれている。六反田遺跡は古墳時代前期から続く集落で、150軒以上の竪穴住居跡が調査されている。稲荷塚、大寄A、大寄B、西浦北、宮西の各遺跡は園場整備に伴って一部が調査されている。

大寄A遺跡は水路部分の調査で、大寄遺跡Ⅱ区中央付近を東西に貫通する。大寄B遺跡は園場整備によって完全に削平された部分の調査である。縄文時代中期の埋設土器、弥生時代中期及び後期の住居跡、古墳時代前期から奈良時代までの住居跡および方形周溝墓などが検出されている(佐藤1979)。この2遺跡はいずれも現在の大寄遺跡に含まれるもので、大寄B遺跡の所在した台地縁辺を北限とし、南西方向に伸びる微高地全面に及ぶと考えられる。

西浦北遺跡は、縄文時代前・中期の住居跡3軒、古墳時代中・後期の住居跡2軒、奈良・平安時代の住居跡49軒、製鉄・精錬遺構14基などが調査されている(佐藤1983)。4号住居跡から出土した緑釉手付甕と灰釉長頸瓶は重要文化財に指定されている。西浦北遺跡は独立した弧状を呈する畑の高まり部分に遺構が集中していたと思われる。遺跡南側の宮西遺跡と地形は独立しているが、内容は共通する部分が多い。今回の調査では遺跡西側の低い部分が用地内

にかかっていたが、試掘調査の結果、遺構は確認できなかった。

宮西遺跡は大寄A遺跡と同じく水路部分の調査が行われ、縄文時代前・中期の住居跡4軒、古墳時代後期の住居跡15軒、平安時代の住居跡2軒が検出されている。その一部が今回の調査区内に含まれている。遺跡は前述の古流路を西限として東に広がる。東側一帯は、大寄八幡神社があり、現在も集落が広がる居住域で、遺跡の範囲も相当の広がりを持つものと推測される。今回の調査では新たに沖田Ⅰ遺跡、沖田Ⅱ遺跡、沖田Ⅲ遺跡が確認された。これらの遺跡は大寄遺跡と宮西遺跡の間にあるやや低い水田部分にあり集落跡の存在は予想されていなかったところである。試掘調査の結果、このような比較的低い部分にも小規模な微高地が確認され遺構が存在することが明らかとなった。このような小規模な微高地は開発が進んだ現在では地形図に表れることは殆どないが、沖田Ⅰ遺跡については昭和36年の地図には畑としての高まりを見ることが出来る。

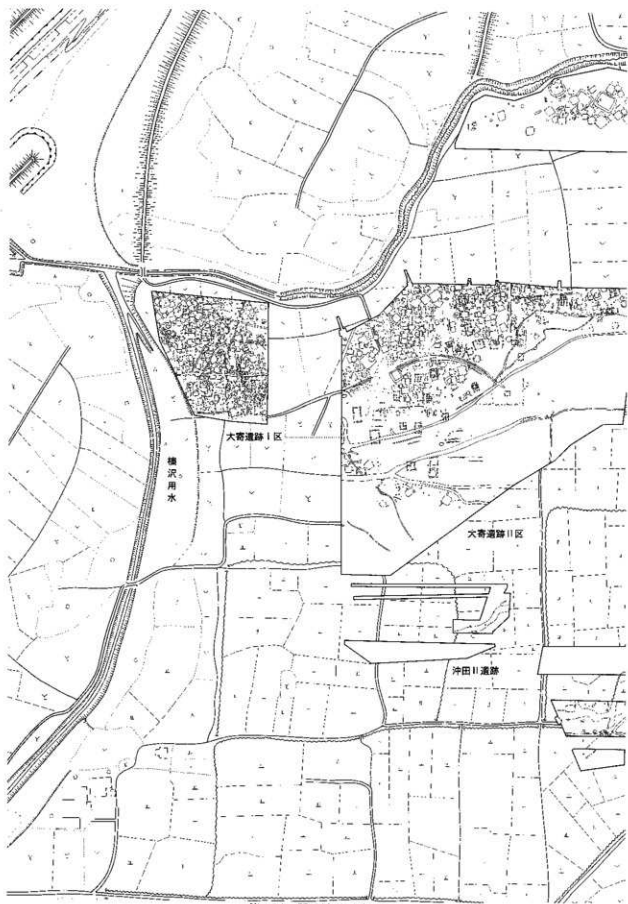
今回の調査で検出された各遺跡の内容は以下のとおりである。

沖田Ⅰ遺跡

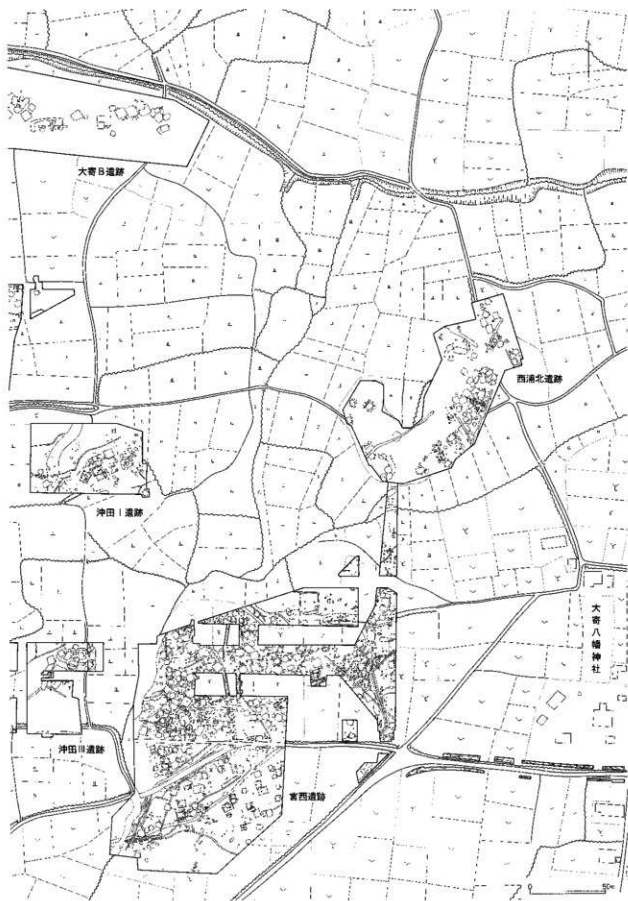
縄文時代前期から平安時代の遺構、遺物が検出された。縄文時代の遺構は前期の竪穴住居跡6軒、土壇7基である。遺構は検出されなかったが中期の土器片もわずかながら出土した。古墳時代に属するものは竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡6棟、土壇5基、溝跡10条である。いずれも後期に属する。平安時代のものは竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基、土壇18基である。

沖田Ⅱ遺跡

土壇3基、溝跡1条、河川跡1条、ピットが検出された。遺物は縄文時代前期及び平安時代のものが出土している。



第5図 関連遺跡分布図



沖田Ⅲ遺跡

縄文時代前期から近世までの遺構、遺物が検出された。縄文時代に属するものは前期の竪穴住居跡3軒である。古墳時代前期では方形周溝墓7基、竪穴状遺構5基、後期では竪穴住居跡10軒、溝跡14条である。平安時代は井戸跡1基、道路状遺構1条、溝跡2条、土壇12基である。中世以降の所産としては土壇墓が1基検出されている。

2. 大寄遺跡の概要

大寄遺跡は工業団地予定地の北西部に位置する。今回調査対象となった5遺跡の内でも、最大規模の遺跡である。遺跡は標高約53～55m、概ね平坦な台地上に立地する。遺跡の西側及び北西側は身願川(小山川)によって形成された崖線によって画されている。遺跡南東部は、西南西から東北東に抜ける浅い埋没谷が入り、標高は若干低くなっている。この低地帯を挟んで南側には沖田Ⅰ遺跡、沖田Ⅱ遺跡が形成されている。

遺構分布の面からも、この低地帯とその北側にある相対的に高位な台地部では大きな相違が認められる。Ⅱ区南側に広がる低地帯は、遺構密度が薄く、古墳時代の住居跡が数軒と、奈良・平安時代の掘立柱建物跡が数棟分布する程度で、居住エリアとしては不適地であったようである。一方、北側の台地部では竪穴住居跡、掘立柱建物跡など、極めて多数の遺構が複雑に重複した状態で検出された。縄文時代前期の住居跡を嚆矢とし、古墳時代中期の土壇、古墳時代後期～平安時代に至る住居跡、中世の建物や井戸跡、また遺構としては検出されなかったが、縄文時代中期・後期、弥生時代や古墳時代前期の土器もあり、長期にわたり居住適地として利用されたことが判明した。

さて、大寄遺跡Ⅰ・Ⅱ区から検出された遺構は、竪穴住居跡475軒、掘立柱建物跡91棟、井戸跡68基、土壇412基、茶毘跡1基、土壇墓4基、溝跡57条、掘

宮西遺跡

縄文時代から中世にかけての遺構、遺物が検出された。中心となる時期は平安時代である。奈良時代の区画施設や粘土探掘壕、平安時代の製鉄炉跡、道路跡、平安時代と推定される小金銅仏等も出土している。調査時における遺構数は竪穴住居跡327軒、掘立柱建物跡36棟、井戸跡28基、土壇264基、溝跡60条、古墳跡1基、道路状遺構3条、粘土探掘壕9基、製鉄炉跡2基などである。

列13条等である。竪穴住居跡は縄文時代前期のものが4軒、不明2軒、古墳時代後期～平安時代に至るものが469軒検出された。縄文時代の集落は群としての明確なまとまりをもたず、散在的である。古墳時代後期、特に6世紀前半代に位置づけられる集落は、Ⅰ・Ⅱ区南端の低地部に散在する。この段階では北側の台地部には集落が営まれない。北側に集落が進出するのは6世紀末葉～7世紀前後である。以降10世紀後半～11世紀に至る頃まで、安定的に集落域として機能したものと考えられる。特に10世紀後半以降の集落が多い点は本遺跡の最大の特徴といえ、該期の集落としては県内でも最大規模の一例である。

中世段階の様相はあまり明確ではない。Ⅰ区南東部に方形で小型の柱穴が密集して検出され、おそらく、掘立柱建物跡群が存在したものとと思われるが、具体的に建物として捉えられなかった。また、中世段階と思われる井戸跡、土壇がⅠ区・Ⅱ区双方に検出され、Ⅱ区には中世段階と推定される火葬墓(茶毘跡)が検出された。

大寄遺跡を含めた崖沢遺跡群は、古代の集落としては熊野・中宿遺跡を含めた同遺跡群と並ぶ大集落であることは疑いない。「崖沢」の遺称地でもあり、彼我の関連性は勿論、古代崖沢部の動態を解明する上で、また中世社会への移行を考える際に欠くべからざる遺跡といえよう。

IV 大寄遺跡II区の遺構と遺物

1. II区の概観

大寄遺跡II区は、I区の東方、保存区域を挟んで約50m隔たっている。東西約230m、南北185mの広大な調査区である。地形的にはI区同様ほぼ平坦な台地上に位置する。標高は約53~54mで、西側から東側に向かって僅かに傾斜している。

調査区の南半には浅い埋没谷が入り、西南西から東北東に向けて抜けている。この低地部と北側にある台地部では、遺構分布の面からも大きな相違がある。調査区北半の高位面では極めて多数の遺構が稠密に分布し、対照的に南側の低地部では遺構分布は疎である。

検出された遺構は竪穴住居跡263軒、掘立柱建物跡69棟、井戸跡60基、溝跡34条、土壇270基、茶毘跡1基、土壇墓4基、横列跡7条、性格不明遺構2基などである。

遺跡は縄文時代前期、古墳時代後期から平安時代に至る集落、中世の遺構群からなる。遺構は検出されなかったが、弥生時代中期、古墳時代前期の上器が出土しており、未調査の調査区北側に当該期の集落が存在する可能性が高い。また、第1号土壇は古墳時代中期のものである。この他に同時期の遺構は見られないが、同様に北側に遺構が展開すると考えられる。

縄文時代の住居跡は4軒検出された。第1~3号住居跡は、3軒重複している。第124号住居跡は、やや離れた東側にある。遺存状態の良い第1号住居跡は長方形で、壁柱穴が巡る。前期関山期に属する。

古墳時代後期~平安時代の住居跡は259軒検出されている。

集落の中で最も古く位置づけられるのは、6世紀末葉~7世紀初頭段階の8軒の住居跡である。第57号住居跡は、カマドをコーナー一部にもつ特異なものである。また、第8・11号溝跡、第38・54号井戸跡もこの時期に属するものである。井戸跡はいずれも

小規模で、素掘りである。

7世紀には集落が本格的に展開する。前半は北側に4軒が散在する程度だが、中頃から後半にかけて倍増し、40軒前後になる。大きく東側と西側の2群が認められる。前半の第206号住居跡は小規模だが、遺物を多く出土している。

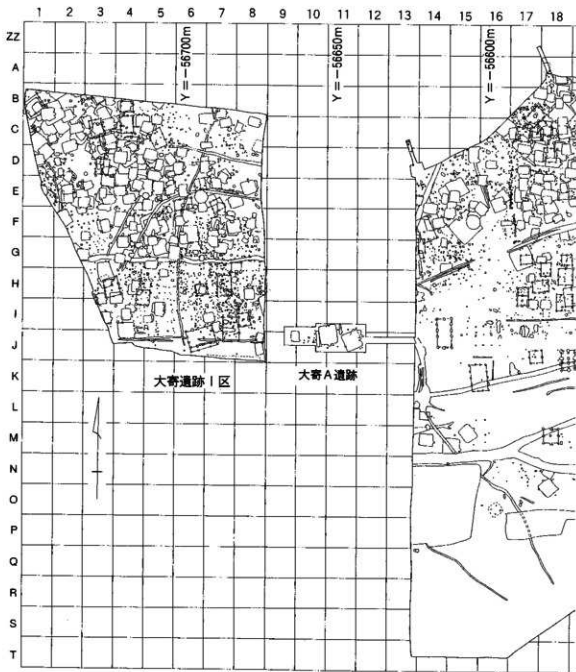
7世紀後半段階になると、第21・23・55・262号住居跡など大型の住居跡が目立つ。特に第23号住居跡は9mを超える本遺跡最大の住居跡である。カマドは、奥壁の中央よりやや右側に置かれるものが多い。

また、この時期から掘立柱建物跡が本格的に造られるようになる。住居跡群からやや離れた南側のエリアを中心に、総柱建物跡、側柱建物跡が分布する。側柱建物跡は、3×2間のものが最も多いが、5×2間の第13号建物跡のような大型のものもある。第13号建物跡は中央に3×1間の小規模な柱列がある特異なものである。第11号建物跡は、第18・30号溝によって区画されている。付近にある建物跡とは軸方向が異なり、性格が異なる可能性もある。調査区の北側の住居跡に接しているものは、やや軸方向が西に偏している。その内の3棟、西側の第57~59号建物跡は、D-21グリッド付近に集中して分布している。

総柱建物跡は10棟ほどあり、3×2間、2×2間のものがある。第31・56号掘立柱建物跡は調査区の北側、それ以外は南側に位置する。側柱建物跡同様に、両者では軸方向が異なる。調査区の南側のものは、一定の間隔を置いて配置されている可能性が高い。

なお、南北軸の建物跡で、この時期としたものは、8世紀代のものである可能性も考慮しておく必要があろう。

第42・44・47・60号井戸跡は、いずれも調査区の南側の低地にかかる部分に分布している。規模が小



第6図 大寄遺跡全測図

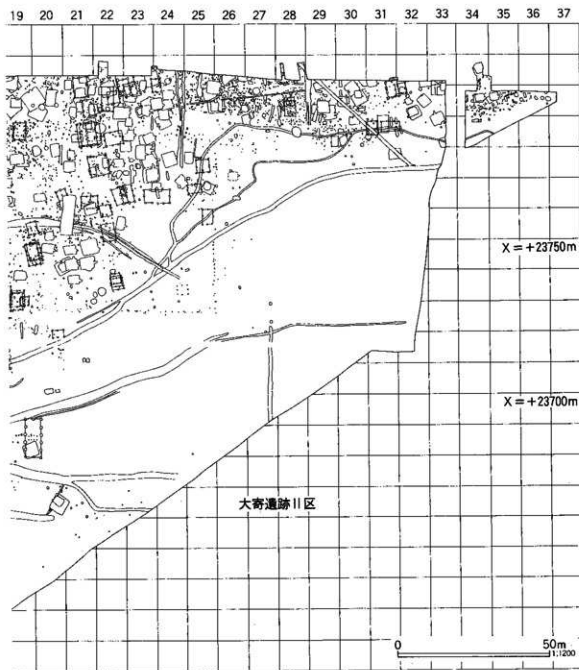
さく、素掘りで、溜井と考えられる。

調査区を東西方向に貫く大規模な第10号溝は、この時期に開削されている。第9・19・33号溝は、第10号溝に関連する一連のものと考えられる。

8世紀前半は更に住居跡が増加し、40～50軒前後になる。7世紀から展開する集落は、この時期に最大規模になる。重複するものや、拡張されるもの、カマドを造り替えるものが多く、継続した居住を窺

わせる。第71号住居跡は、床面に鍛冶が2基付設されており、鑪の羽口等も出土している。第217・241号住居跡は入り口と考えられる施設が認められる。第237・241号住居跡は出土遺物が多く、237号からは切子玉や猿投窯産の水滴が出土している。

掘立柱建物跡は調査区の中央やや西側を中心に展開する。住居跡群南側のエリアのものは南北軸、東西軸のものが多く、それ以外はやや西に偏した軸方

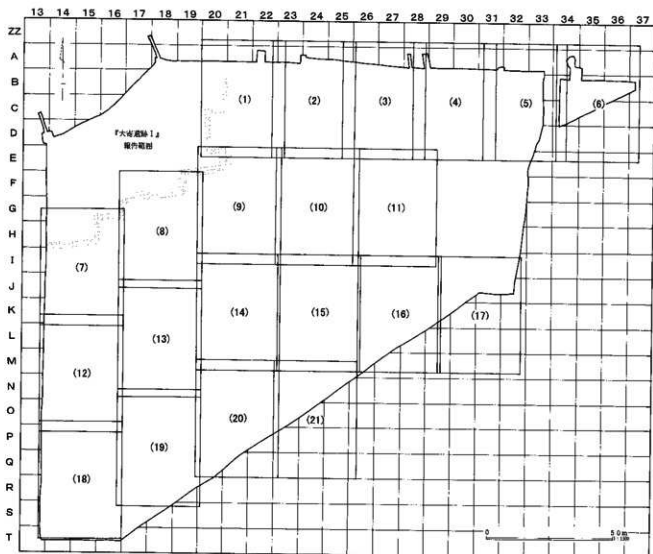


向である。側柱建物跡は、 3×2 間のものが最も多い。第33・34号建物跡は南側に第7号溝がある。時期が特定できないものもあるが、G・H-17~19グリッドの建物跡は8世紀代のまとまりのある建物跡群と考えられる。第7号溝はこれらを区画するものと考えられる。第22号建物跡は近接するが、この建物跡群とは軸方向が異なり、南庇を持っている。総柱建物跡で、この時期に特定できるものは第34号1

棟のみである。住居跡南側の建物跡群に含まれている。

第49・56号井戸跡は、規模が大きく、深い。第56号井戸跡からはまとめて土器が出土している。

8世紀中葉は集落が縮小を始める時期である。住居跡は平面形が正方形のものと、主軸方向が長い長方形のものがある。第152号住居跡は、一辺1.8mほどのごく小型のものである。第238号住居跡からは、



第7図 大倉遺跡Ⅱ区全測図区割

遺物が多く出土している。この時期に特定できる建物跡は、第44・47号建物跡のみである。いずれも住居跡の分布からやや離れた南側に位置する。この内第47号建物跡は、周辺の建物跡と一定の距離を置いて配置されている可能性がある。

第48号非戸跡は大型のもので、2段の掘り方を持っている。

8世紀代だが、時期の特定できない掘立柱建物跡は15棟ほどある。これまで述べてきたように、住居跡と同じ位置に分布し、やや西偏する軸方向を持つものと、住居跡の南側のエリアにあり、先の第33・34号建物跡等とともに建物跡群を構成するものの2者がある。3×2間の側柱建物跡が最も多い。総柱

建物跡は3棟あり、南側のエリアに造られている。

8世紀後半から9世紀前半は、集落が縮小する時期である。8世紀後半の住居跡は15軒前後で、主軸方向が長い長方形のものが多い。

9世紀前半の造構は極端に少なくなっている。Ⅱ区では住居跡3軒にとどまる。中業でも少なく、2軒のみである。いずれも主軸方向が長い長方形である。

住居跡が再び増加に転ずるのは、9世紀後半である。25軒ほどの住居跡が検出されている。調査区の西側に大部分が分布するが、第203号住居跡は東側の調査区北側方面にかかって検出されており、もう一つの群が北側に展開する可能性がある。住居跡は

平面形が正方形、縦長、横長の長方形のものがあり、第115号住居跡は、極端に細長い平面形である。カマドが対角線上に斜めに突出するものも見られるようになる。第60号住居跡は、焼失家屋である。掘立柱建物跡は2棟のみである。井戸跡は、大型の第16号のみである。

10世紀前半段階の住居跡は数軒で、調査区の北西側に分布する。前回報告でも述べたように、前後の時期はどの軒数がなく、集落の継続性にやや疑問がある。住居跡の形態は、正方形、長方形である。カマドは中央に造られるものもあるが、右側のコーナー寄りに造られるものが多い。

掘立柱建物跡は第38号1棟のみで3×2間の総柱建物跡である。柱間が一定せず、柱穴も軸線上に並んでいない。井戸跡は第37号のみである。大型で大規模な掘り方を持ち、蒸籠組みの井戸枠が組まれている。

10世紀中葉の住居跡として認定できたものは8軒にとどまる。住居跡は全体的に小型化し、横長の長方形のものが多くなる。カマドは住居の規模に比して、大型のものが多くなり、住居跡の性格の変化を窺わせる。

10世紀後半以降の住居跡は40数軒を数え、8世紀前半と並んで、集落が最大規模に拡大した時期である。ただし、10世紀後半段階以降は土器群を明瞭に分離することができず、11世紀代のものを含みこんでいる可能性もある。同時存在の住居跡は十数軒の可能性が高い。住居跡は、長軸2～4mの小型のものが多く、概して浅めである。平面形は横長の長方形のものが多く、カマドは奥壁のコーナー寄りの右側に付設されている。第156号住居跡は土器を比較的多く出土するが、それ以外はあまり多くないようである。

10世紀代と考えられる掘立柱建物跡は前述の第38号以外に3棟検出されている。5×2間、2×2

間の掘立柱建物跡である。いずれも、第5・6号横列との関連を窺わせる位置関係にある。

井戸跡でこの時期に特定できるものは、2基検出されている。住居跡群の中に位置する。規模が大きく、2段の掘り込みを持つ。

溝は南流する第22・23号溝がある。浅く、性格は不明だが、集落域の区画とも考えられる。

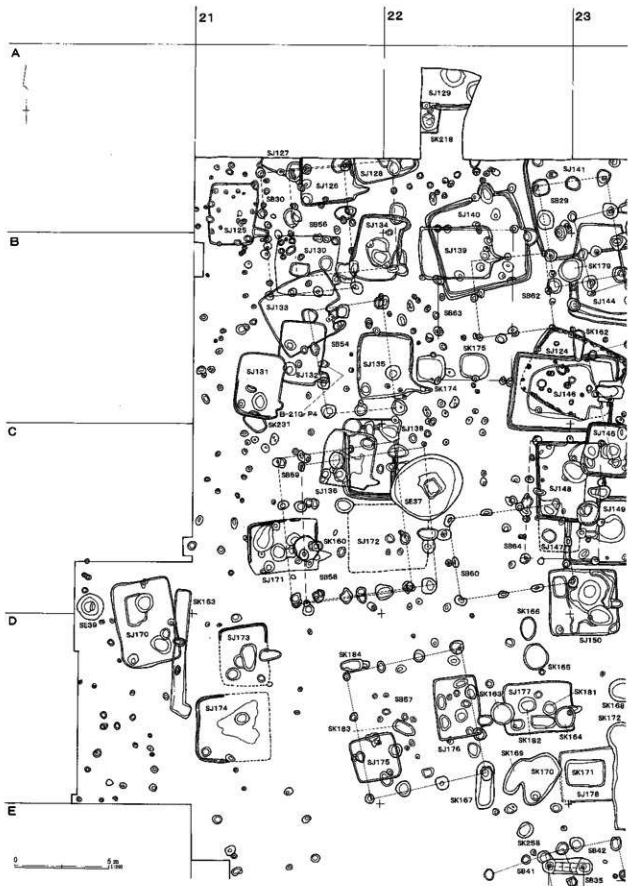
横列は7条検出された。いずれも時期を特定できないが、相互に関連したものと思われる。第5～7号は、集落域の外延を区画するものと考えられ、その付近には掘立柱建物跡が造られている。遺構の分布からは9世紀後半の集落の区画と考えられるが、10世紀の掘立柱建物跡とも関係する可能性もある。その他のものは、住居跡群内部の区画の可能性が高く、具体的な構造物ではなく、生垣的なものである印象を受ける。

上墳墓は2基検出された。第1・2号は住居跡の中に掘り込まれていた。10世紀後半以降の住居跡を利用した廃屋墓と考えられる。

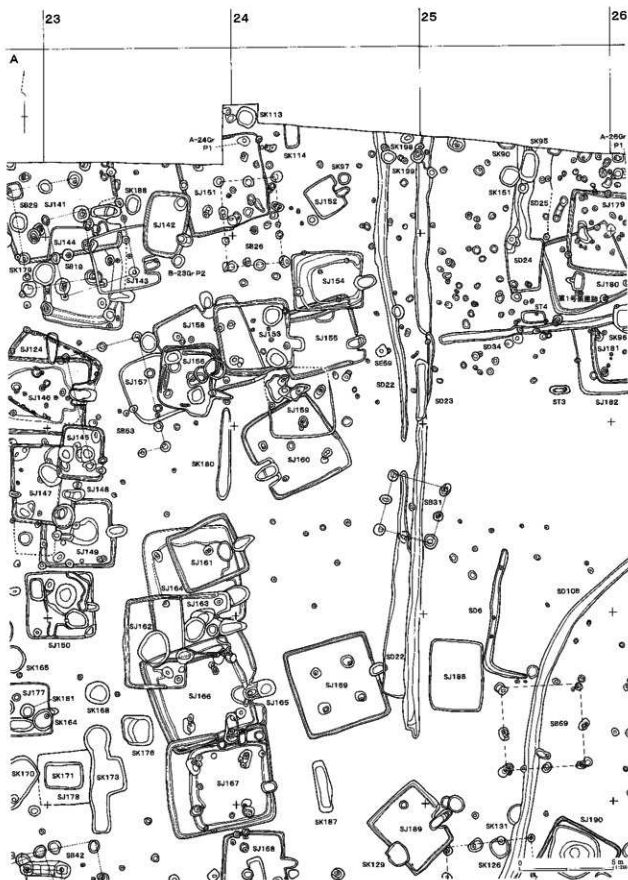
出土遺物は土師器・須恵器を主体とし、灰釉陶器、10世紀後半以降では羽釜、クロロ土師器高台碗・小皿などから構成されている。この他に刀子、鎌、鋸、紡錘車、釘等の鉄製品や切子玉、勾玉等の玉類が出土している。

12世紀以降と考えられるものとしては、井戸跡、土壇墓、溝等がある。井戸跡は規模が大きく、素掘りである。土壇墓は茶毘跡とセットになるものと考えられ、調査区の北側に位置することから、更に墓群が北側に展開すると予想される。第3号土壇墓からは、北宋銭が7枚布に包まれた状態で出土している。第4号土壇墓からは、馬の上下の歯列が出土し、馬を埋葬したものと考えられる。

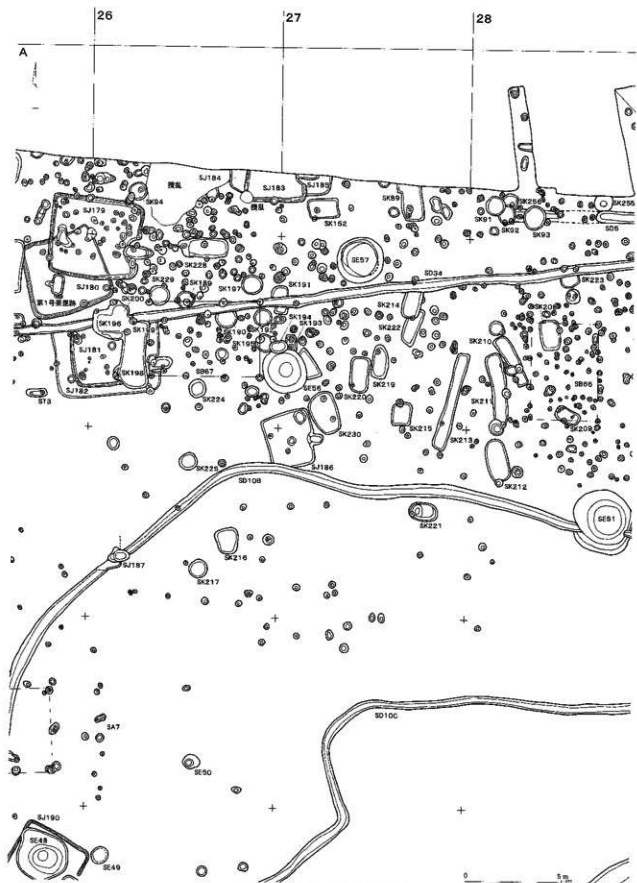
遺物は、常滑産の甕、在地産の鉢、龍泉窯系の青磁等が出土している。



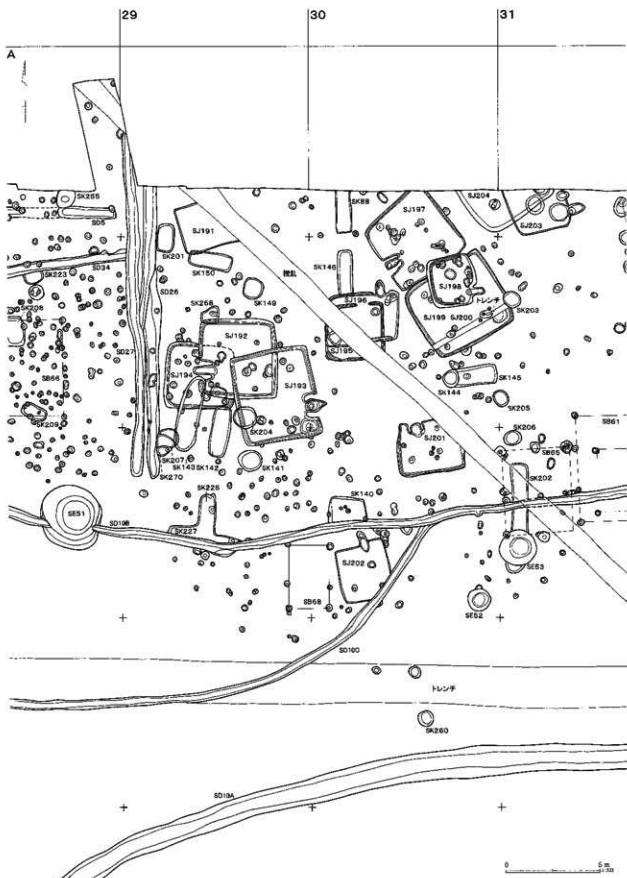
第8图 大寄遺跡II区全測図(I)



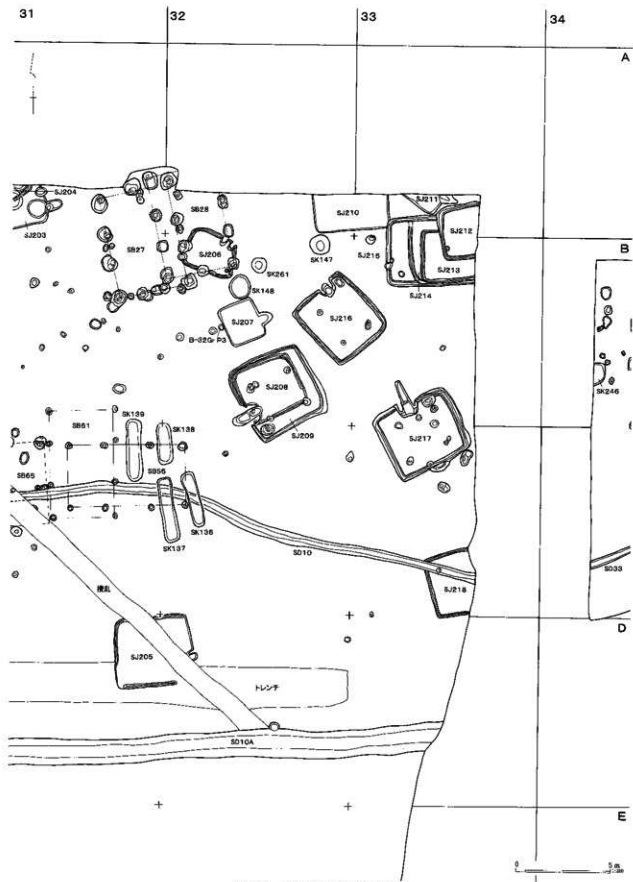
第9图 大窑遗址II区全测图(2)



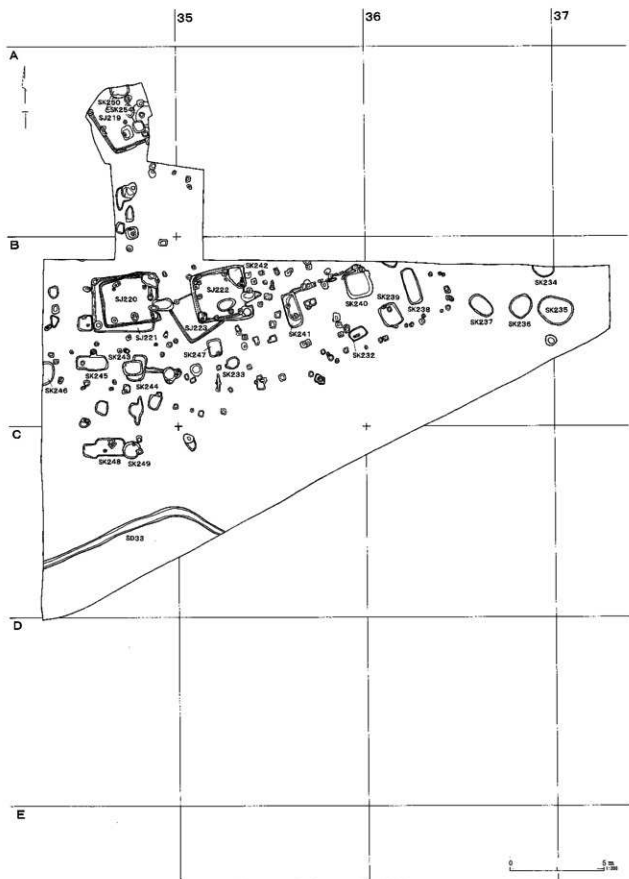
第10图 大寺遺跡Ⅱ区全測图(3)



第11図 大寄遺跡Ⅱ区全測図(4)



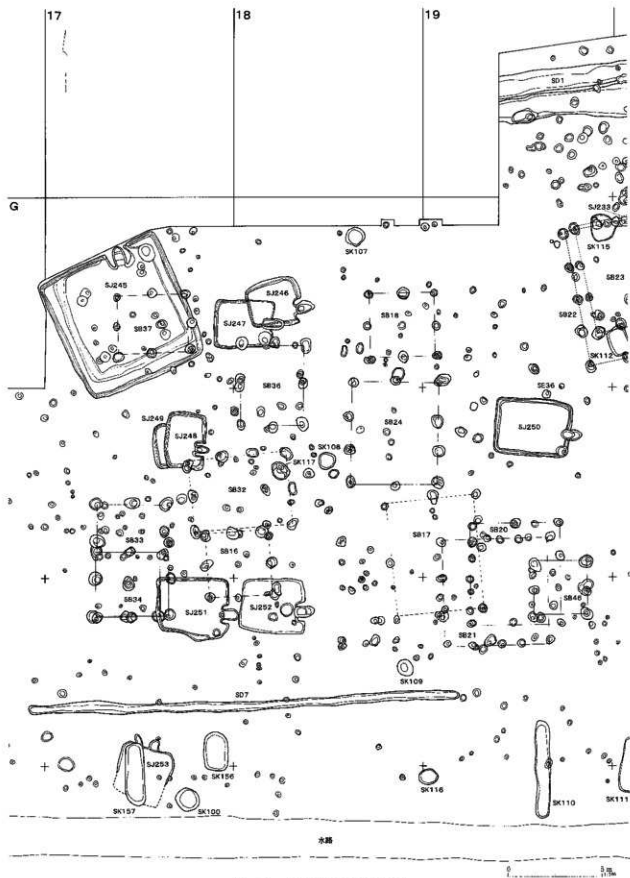
第12図 大寺遺跡Ⅱ区全測図(5)



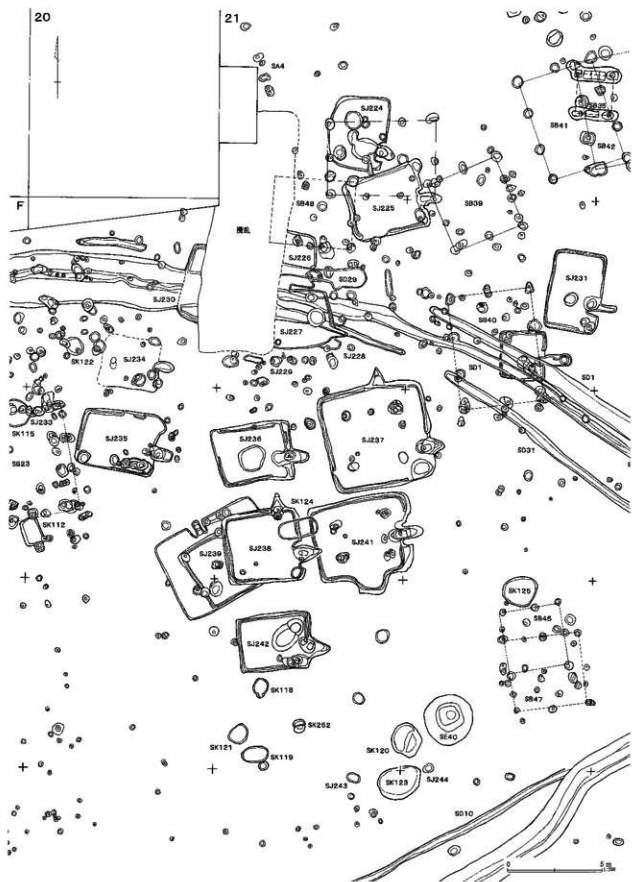
第13图 大寄遺跡Ⅱ区全測図(6)



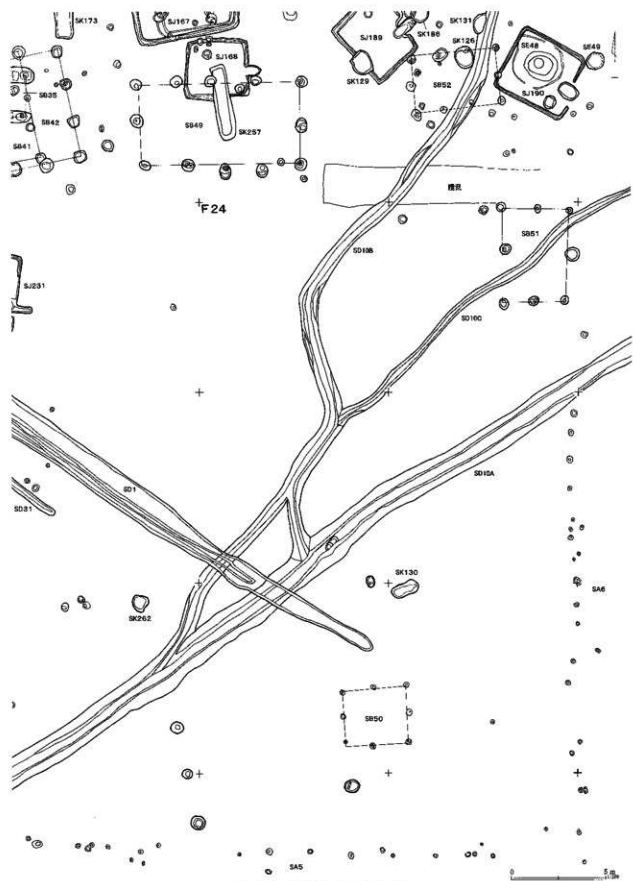
第14网 大寺遺跡Ⅱ区全測図(7)



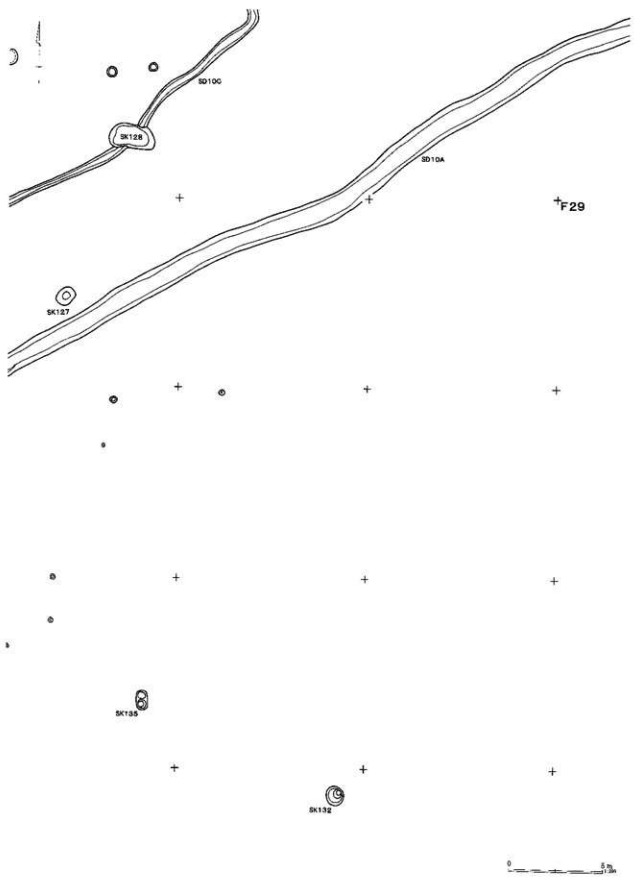
第15网 大窑遗址II区全测图(8)



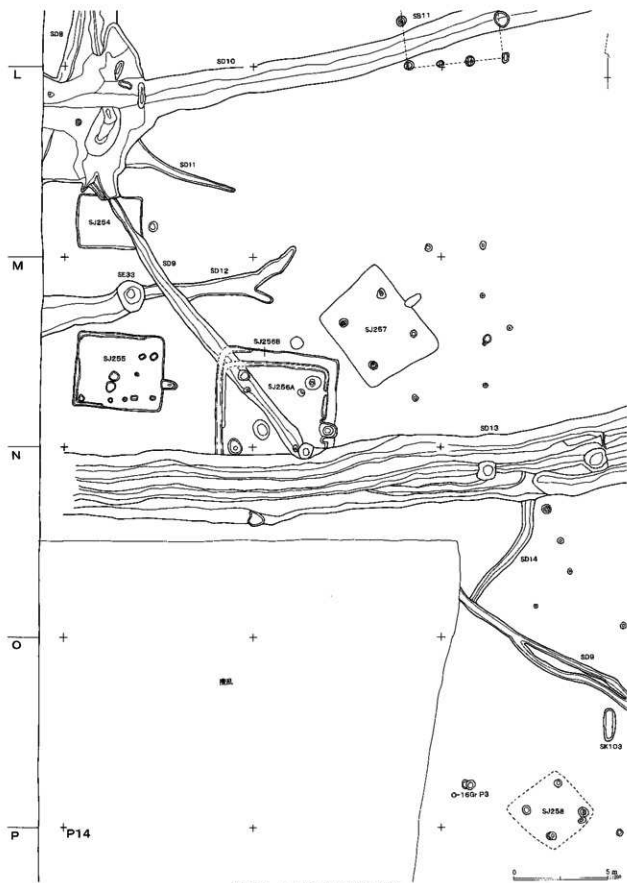
第16图 大冢遺跡Ⅱ区全測図(9)



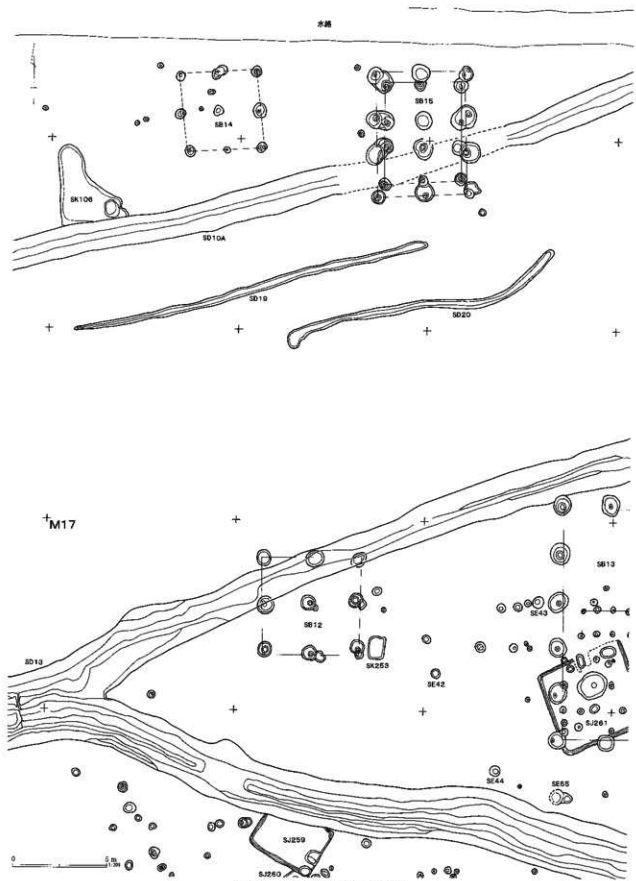
第17图 大客遗址II区全洲图00



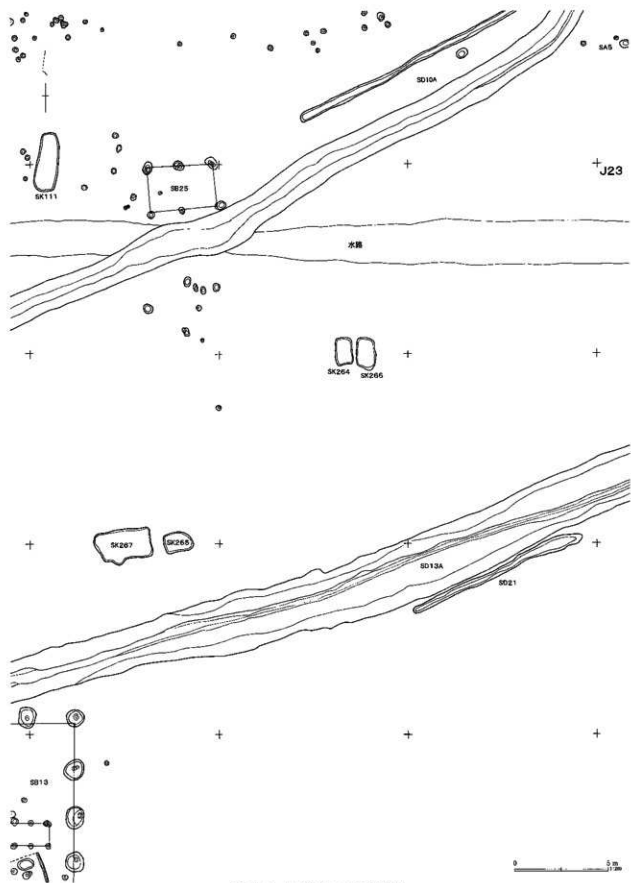
第18图 大寄遺跡II区全測図(0)



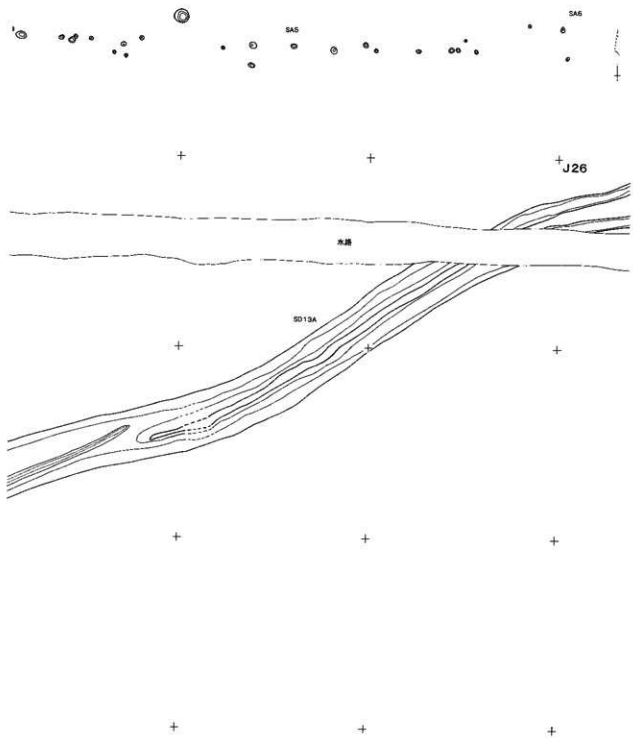
第19图 大寺遺跡II区全測図(初)



第20图 大冢遺跡II区全測图(1)

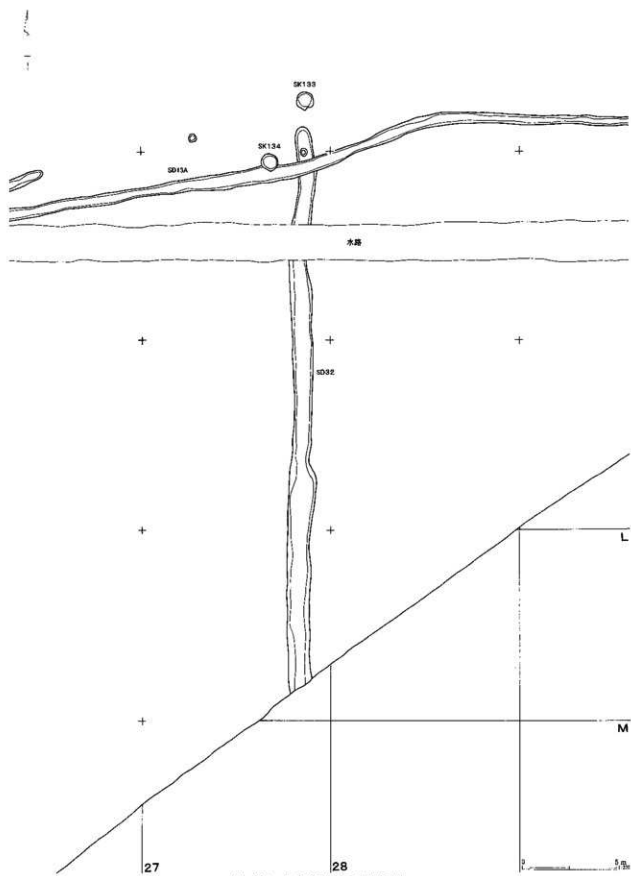


第21图 大寄遺跡Ⅱ区全測図(4)

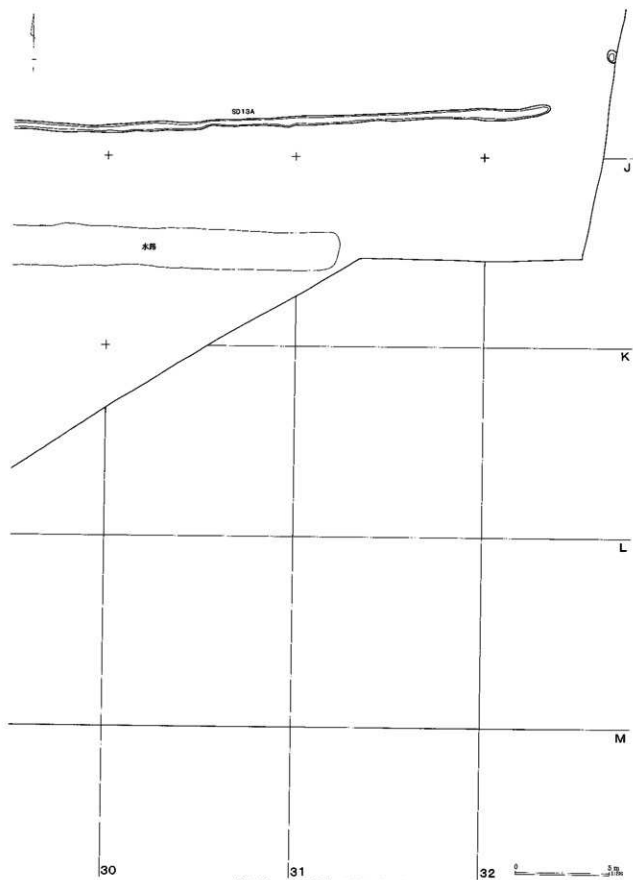


第22図 大寄遺跡II区全測図(19)

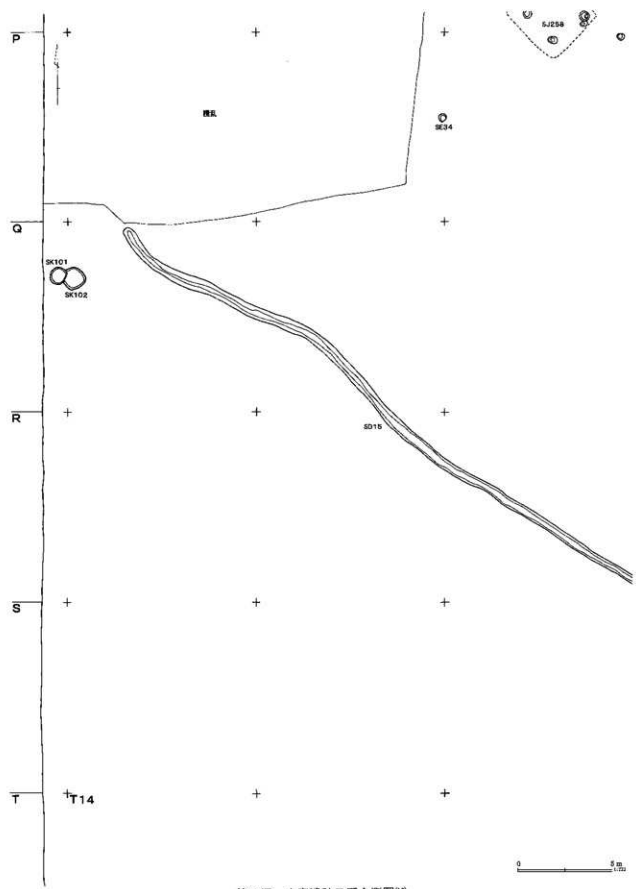
0 5m



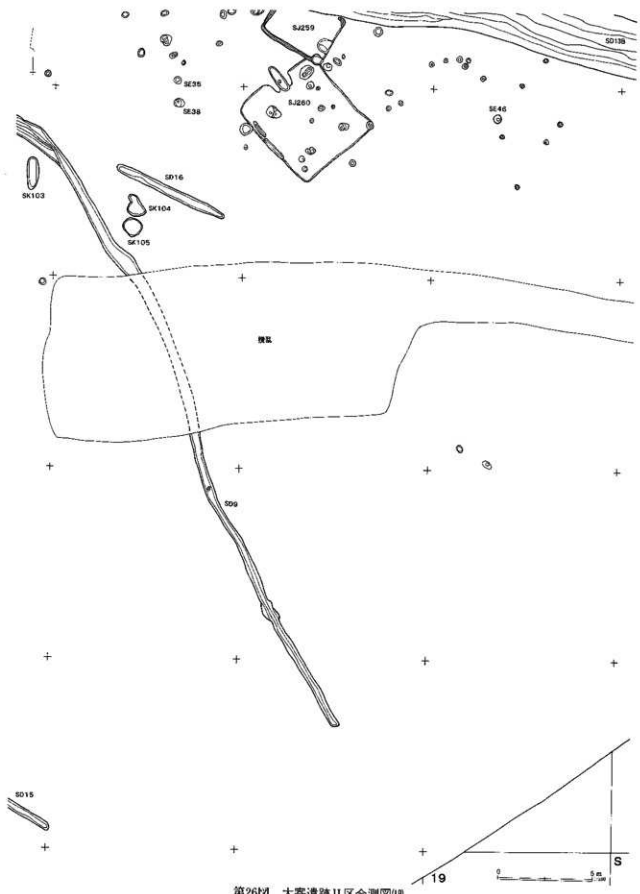
第23図 大寄遺跡Ⅱ区全測図(16)



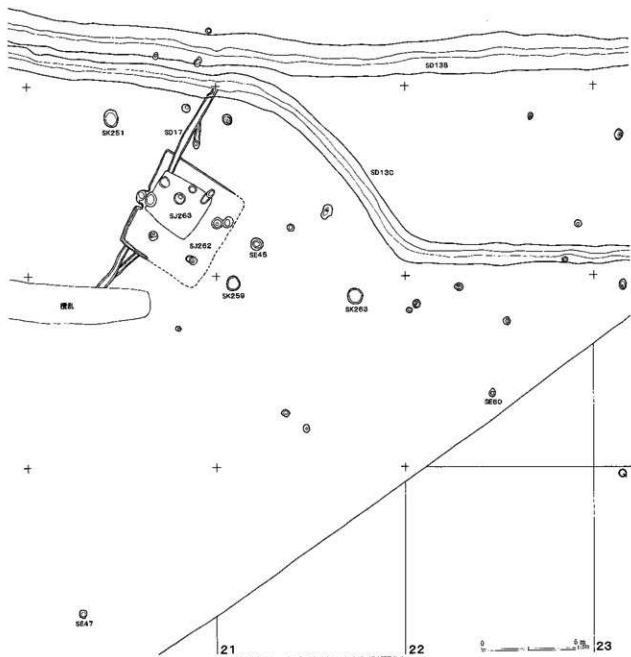
第24图 大窑遗址II区全测图(1/1)



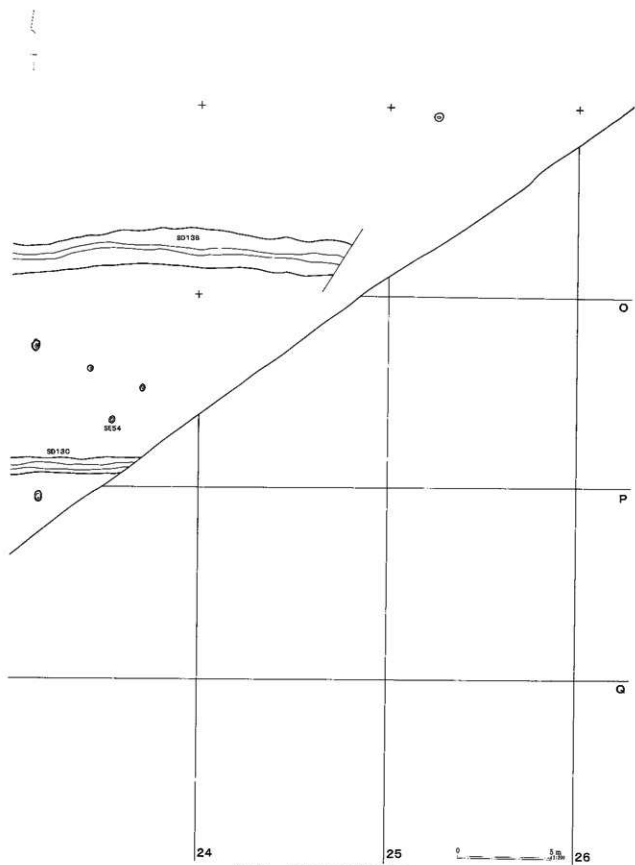
第25图 大冢遺跡II区全測図⑩



第26図 大寄遺跡II区全測図(1)



第27图 大窑遗址II区全测图(2)



第28图 大窑遗址II区全测图(2)

2. 縄文・弥生時代の遺構と遺物

第124号住居跡 (第29図)

B-22・23グリッドに位置する。住居跡の大半が第146号住居跡と重複し、また、第53掘立柱建物跡とも重複するが、本住居跡の方が古い。住居跡のプランは壁溝が存在することから推定可能で、ほぼ北西方向に長軸を採る長方形を呈する。長径5.15m、短径4.19m、深さ0.24mを測る。

住居跡のコーナーはやや丸みを帯びており、壁溝及び、壁柱穴が一周巡るものと思われる。壁柱穴は等間隔状に並び、深さは深いもので約0.4m前後、平均では0.2m前後を測る。壁溝は壁柱穴と組み合わさって存在するが、部分的に途切れる箇所がある。炉は地床がで、住居跡長軸上中央部やや北寄りに設けられており、長径0.54m、短径0.45m程を測る。

住居跡の主柱穴は明瞭にし得ないが、長軸方向に棟木の乗る4本柱、もしくは6本主柱が想定される。

遺物は1点のみ出土している。1は所謂繊維土器で、縄文時代前期中葉の黒浜式に比定されるものである。胴部でやや強く折れ、口縁部の開く深鉢形土器と思われ、やや節の大きな単節LR縄文を追横位施文する。繊維はやや多く含まれており、風化が進み脆弱である。

グリッド出土の縄文・弥生土器

第I群土器 (第29図1~13)

縄文時代前期の上器群を一括する。

1~11は繊維を含む黒浜式土器である。1は口縁部がやや内彎気味に開く器形を呈し、口唇部がやや内削状の角頭状を呈する。やや撚りの緩い単節RLを施文する。2は先細り状の角頭状口唇部が外反して開く器形を呈する。口唇下には節の大きな単節LR縄文を横位施文し、以下に原体の異なる0段多条縄文LRを施文する。この多条縄文には、原体末端処理の結節部分の回転文であるS字状結節文が見られる。3も2と同様の器形の口縁部破片であり、単節LRを施文する。

4~9は胴部破片で、11は底部破片である。4~6は単節LR縄文を施文し、7は無節縄文を施文する。8は器面の荒れが著しく、無節か単節かの判断が難しい。9、10は単節RLを施文するが、9はやや縦位方向に細かく施文しており、結果的にLR縄文を表出している可能性がある。

12、13は諸磯り式土器である。12は平行沈線間に爪形文を施文する爪形文系土器で、13は浮線文系土器である。13は浮線の上に斜位の刻みを施すが、部分的に、刻みが鋸歯状もしくは×状を呈する。

第II群土器 (第30図14~18)

中期後半の加曾利E式土器を一括する。加曾利E式の中でも終末段階の土器群である。

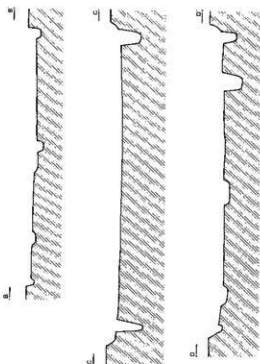
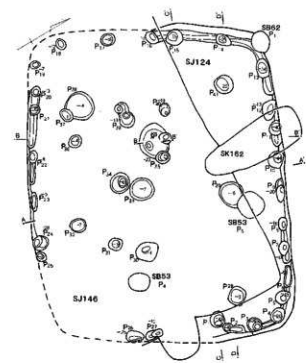
14、15は口縁部文様帯と胴部文様帯を持つキャリパー系土器の口縁部破片であるが、口縁部の内彎がゆるく、隆帯で表現する渦巻文も退化している。14は口唇部直下に渦巻文を施すもので、使用される隆帯は低平である。15は口唇部が角頭状に肥厚するもので、口縁部文様帯上端を横位の隆帯で区画する。16は口縁部文様帯下端部分で、下端区画の隆帯が巻き上がって渦巻文を形成する。17は胴部が「く」字状に屈曲し、無文の口縁部が開く浅鉢で、口縁部との区画沈線の上に交互の刺突文を施文する。胴部部分の文様帯には沈線文を充填する区画文を施すものと思われる。18は幅広の沈線磨消垂文を垂下するので、地文には単節RLを充填施文する。

以上、14~17は加曾利EⅢ式古段階の土器群に比定されるが、18は磨消垂文が無文帯状に広いことから、EⅢ式新段階に比定されるものと思われる。

第III群土器 (第30図19~28)

後期初頭から中葉の土器群を一括する。

19はやや厚手の土器で、列点状文を施文しており、称名寺式終末から堰之内式初頭にかけてのものと思われる。20は3本沈線で区画、もしくはモチーフを連結するものである。24は底部付近の破片で、沈線の区画文を施文している。いずれも堰之内Ⅰ式に比



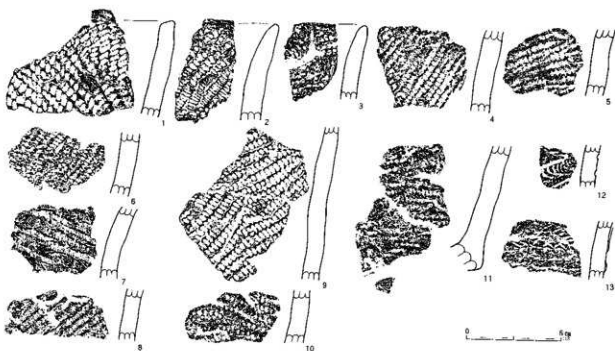
SJ124

- 1 褐色土 焼土粒少量、コム粒を含む
- 2 褐色褐色土 ローム粒多量
- 3 褐色褐色土 焼土粒・ローム粒を含む
- 4 黄褐色土 ローム主体

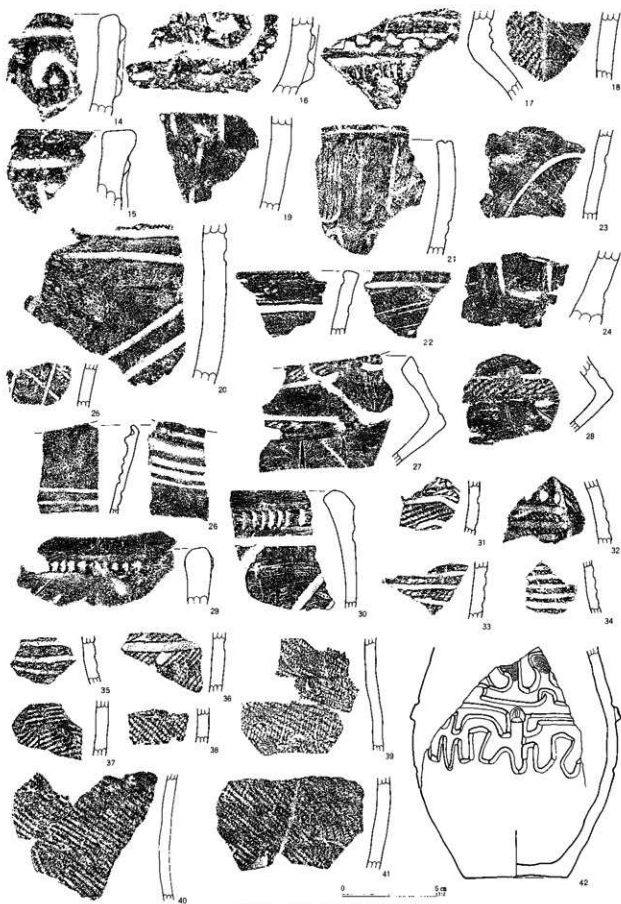
0 2m



0 5cm



第29図 第124号住居跡・グリッド出土土器(1)



第30図 グリッド出土土器(2)

定される。

21は角頭状の口唇部が内彎気味に開く器形で、浅い沈線による細かな区画文を施す。口唇上には、沈線が巡る。22は角頭状口唇が開く器形で、口縁部内端に沈線が巡る。23は器壁の薄い土器で、放物線状の沈線モチーフを描く。壺之内Ⅱ式に比定される。

25、26は加曾利Ⅱ式に比定される土器群で、25は沈線の粗い斜格子目文を施す。26は3単位の波状口縁を呈する深鉢形土器で、口唇部は外削状の角頭状を呈する。口縁部裏には凹線文を2条施文し、以下に平行沈線文の無文を施文する。波頂部付近の口唇裏直下の凹線内には、川形の刺突文を施している。外面は口縁部の無文帯下に、沈線文帯を施文する。この沈線文の間隔は比較的広い。

27、28は同一団体と思われる、口縁部が「く」字状に屈曲する浅鉢と思われる。27はやや内削状の角頭状口縁が緩やかな波状を呈し、波頂部付近では口縁部から胴屈曲部にかけての貼付文が見られるが、剥落している。口縁部と郷部に沿って沈線区画が施され、それぞれ無文帯を挟む様に単節LR縄文を施文する。曾谷式に比定されよう。

第Ⅳ群土器 (第30図29、30)

後期終末から晩期初頭にかけての土器群を一括する。29、30は紐線文系の土器群で、29はやや内彎する口縁部に低隆帯を巡らし、その上に連続刺突文列を施文する。30は口縁部がやや内彎する器形で、口端部に幅広い結節状の刺突文を巡らしている。文様帯は沈線で区画し、斜行沈線や弧状沈線文でモチーフを描く。安行Ⅱ式系の土器群であるが、晩期の安行Ⅲa式段階に比定されよう。

第Ⅴ群土器 (第30図31~42)

弥生時代中期の上器群を一括する。31~36は地文縄文上に沈線文を施文するもので、大半は表形土器の頸部から胴部にかけての破片である。31、32は沈線区画に沿って刺突文列を施文している。33~35は地文縄文上に集合沈線文を施文しており、36は角状沈線で区画、モチーフを描いている。37~41は縄文

のみ施文される土器群である。

42は胴部から底部にかけて大形破片で、底部は現存する。胴部は曲線沈線文で細かな区画文を施し、区画文は単位文化せず、連続しており、対称構成も見られない。胴部の中央で、モチーフの中間部に川形貼付文を施し、上部には刻みを施している。底径5.6cm、現存高12.2cmを測る。

グリッド出土の石器

打製石斧 (第31図1~6)

4がやや撥形を呈する他は、何れも中央部に抉りの入る分胴形石斧である。4は中期、2~5は中期末から後期の所産と思われる。6は弥生時代の所産と思われ、本来ならば石鏝と分類すべきものと思われる。1は頭部を欠損し、ホルンフェルス製で、長さ8.1cm、幅6.3cm、厚さ2.1cm、重さ95.10gを測る。2は刃部を一部欠損するが、ホルンフェルス製で、長さ9.4cm、幅6.0cm、厚さ1.6cm、重さ84.10gを測る。3は完形の砂岩製で、長さ11.6cm、幅6.2cm、厚さ2.3cm、重さ194.97gを測る。4は完形のホルンフェルス製で、長さ15.5cm、幅6.9cm、厚さ2.4cm、重さ206.21gを測る。5は刃部を一部欠損するが、結晶片岩製で、長さ13.2cm、幅8.2cm、厚さ2.4cm、重さ310.50gを測る。6は刃部を欠損するが、ホルンフェルス製で、長さ14.6cm、幅14.9cm、厚さ2.3cm、重さ467.91gを測る。

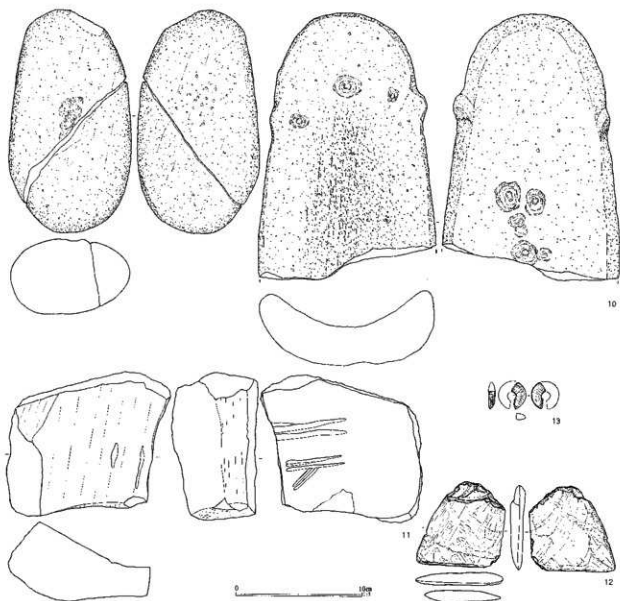
磨石 (第31図7、8、第32図9)

3点出土しているが、いずれも大形の磨石である。7は完形の安山岩製で、長さ11.65cm、幅9.3cm、厚さ5.5cm、重さ796.58gを測る。8は一部欠損するが、安山岩製で、長さ13.1cm、幅8.2cm、厚さ3.3cm、重さ521.31gを測る。9は完形の閃緑岩製で、長さ17.6cm、幅9.7cm、厚さ6.0cm、重さ1411.89gを測る。石皿 (第32図10)

1点のみ出土した。10は一部欠損するが、両側縁に小突起を1対作り出している。安山岩製で、長さ21.1cm、幅14.0cm、厚さ6.1cm、重さ1432.55gを



第31図 グリッド出土石器(1)



第32図 グリッド出土石器(2)

測る。

砥石 (第32図11)

石皿の転用品で、線状の研磨痕と磨面が見られる。安山岩製で、長さ11.6cm、幅12.90cm、厚さ6.8cm、重さ715.97gを測る。

扶状耳飾 (第32図13)

半分程を欠損するが、小形の扶状耳飾で、長さ2.

0cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm、重さ1.44gを測る。沿石製である。

三角形石製品 (第32図12)

全面研磨が施されており、縁は刃部状を呈する。スクレーパーの可能性もある。刃部を一部欠損するが、泥岩製で、長さ6.5cm、幅6.8cm、厚さ1.1cm、重さ53.87gを測る。

3. 古代・中世の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

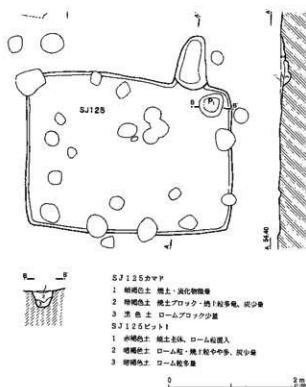
第125号住居跡 (第33図)

調査区の北西側、A・B-21グリッドに位置する。第30号掘立柱建物跡が東側に接し、北東側に第127号住居跡が、南西側に第130号住居跡がある。

平面形は長方形で、規模は長軸方向3.24m、短軸方向2.53m、深さは0.05mでごく浅い。主軸方向は、N-89-Eを指す。床面は平坦で、貼り床や硬化面等は確認できなかった。深さがごく浅いこともあり、覆土の状況は観察できなかった。

カマドは東壁の南寄りに造られ、壁を掘り込み突出している。ごく浅い掘り方が設けられ、火床面は床面よりやや下位になっている。軸は検出できなかった。ビット1は位置としては貯蔵穴の可能性もあるが、覆土は焼土を多く含み、カマド崩壊後の流れ込みと考えられることから断定には至らない。

床面に掘りこまれたビットは多いが、柱穴と考えられるものは確認されなかった。



第33図 第125号住居跡

遺物は土師器の甕の小破片がカマド中より出土したのみで、図示できるものはない。時期は9世紀と考えられる。

第126号住居跡 (第34図)

調査区の北西側、A-21グリッドに位置する。遺構の北側は調査区域外にかかる。第127号住居跡、第30・56号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。また東側に近接して第128号住居跡があり、出土遺物から本住居跡の方が新しいと考えられる。

平面形は北側が調査区域外となるため確定ではないが、正方形と推定される。規模は長軸方向2.81m、短軸方向は調査区内で2.57m、深さは0.21mで浅い。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦で、堅く踏み固められ、硬化していた。覆土はローム粒やブロックを多く含み、埋め戻しの可能性が高い。

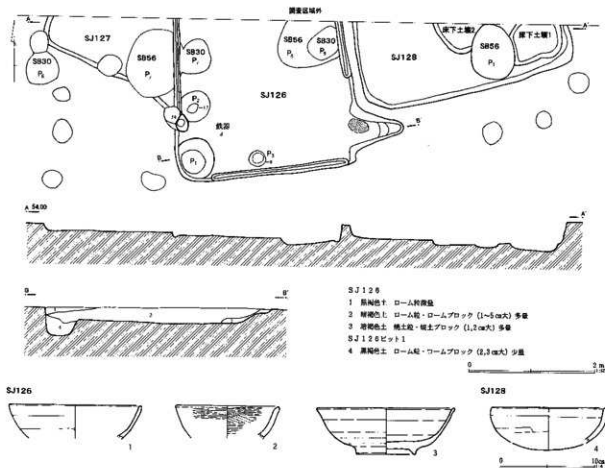
カマドは東壁の南寄りに造られ、壁を掘り込み突出している。火床面は床面とほぼ同じ高さで焚口に近いと考えられる部分が焼土化していた。軸は検出できなかった。西壁に沿ってビットが2基掘りこまれていた。その内ビット1は埋め戻しと考えられる。柱穴と考えられるものは確認されなかった。

遺物は、土師器の環の小破片とクロロ土師器の高台付椀が出土している。土器以外にも南西コーナーの床面直上から釘が、カマド内から用途不明の折損した棒状製品が出土している。時期は10世紀末と考えられる。

第127号住居跡 (第34図)

調査区の北西側、A-21グリッドに位置する。遺構の北側の大部分は調査区域外にかかる。第126号住居跡、第30・56号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。また西側に近接して第125号住居跡がある。

平面形は北側が調査区域外となるため不明である。規模は北西-南東方向で2.25m、深さは0.05m



第34図 第126～128号住居跡・出土遺物

第2表 第126・128号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	出土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(14.0)	3.6		EII	2	橙褐	5	
2	ロクロ環	(10.9)	3.4		DE	1	明褐	15	内面及び口縁部黒色処理+ミガキ
3	ロクロ高台碗	14.6	4.9	6.2	ADE	3	橙褐	75	
4	土師環	(12.0)	3.7		DEH	2	橙褐	15	

でごく浅い。主軸方向は、N-63°-Wを指す。床面は平坦で、貼り床や硬化面等は確認できなかった。深さがごく浅いこともあり、覆土の状況は観察できなかった。

カマドは検出していない。床面、壁面にピットが掘りこまれていたが、本住居跡のものではないと考えられる。

遺物は土師器の甕の小破片が出土している。時期は9世紀と考えられる。

第128号住居跡 (第34図)

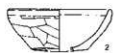
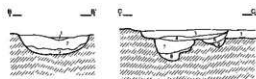
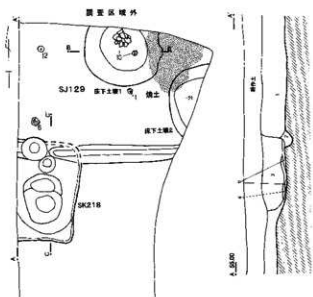
調査区の北西側、A-21・22グリッドに位置する。遺構の北側は調査区域外にかかる。第56号掘立柱建

物跡と重複関係にあり、本住居跡が古い。また東側に近接して第126号住居跡があり、出土遺物から本住居跡の方が古いと考えられる。

平面形は北側が調査区域外となるため確定ではないが、方形と推定される。規模は南壁が3.54m、直行する方向が調査区内で1.35m、深さは0.22mで浅い。主軸方向は、N-80°-Eを指す。床面は平坦で、やや軟弱である。覆土の状況は確認できなかった。

カマドは検出していない。床面には床下土塊と考えられる径1mほどの掘り込みが2基掘りこまれていた。柱穴と考えられるものは確認されなかった。

遺物は土師器の環・甕と須恵器蓋の小破片が出土



SJ129

1 暗褐色土 粘土粒中多、ローム粒微量

2 灰褐色土 ローム粒少量

SJ129床下土層1

1 赤褐色土 純土層

2 暗褐色土 ロームブロックとの混在層

3 黄褐色土 ロームと白色粘土の混在層

SK218

3 暗褐色土 粘土粒少量、ローム粒中多

4 灰白色粘土 粘土粒少量、硬質

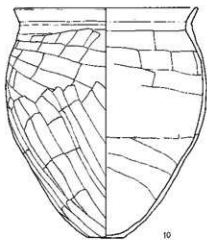
5 赤色土 粘土粒少量

6 黄褐色土 ローム質で、暗褐色土混入

7 暗褐色土 ローム粒均一に混入

8 暗褐色土 ローム粒少量

0 2m



0 10cm

第35図 第129号住居跡・出土遺物・第218号土坑

第3表 第129号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師皿	(14.0)	2.8	(10.6)	ADE	1	橙褐	25	
2	土師環	(10.8)	4.4	(6.0)	ARH	2	明褐	25	
3	土師環	(12.8)	3.8		ADE	2	赤褐	15	
4	土師環	(11.8)	4.0	(6.4)	DE	2	橙褐	15	
5	須恵高台桶	(13.2)	5.6	6.4	EJK	2	明灰	45	木野産 A
6	須恵高台桶	(14.0)	5.5	6.0	BDE	1	乳灰	55	No.5「合」墨者 A
7	須恵皿	13.2	2.1	6.4	EIJ	2	暗灰	50	木野産 A
8	須恵皿	13.2	2.7	6.1	BEIJK	2	灰	100	木野産 A
9	羽釜	(21.8)	7.0		BDEJ	1	橙褐	10	カマド 土師質 ロクロ彫
10	土師甕	(19.4)	24.3	4.0	ADEH	1	橙褐	65	No.2 No.3
11	土師台付甕		2.7	18.0	ADEH	1	橙褐	60	No.1
12	土師台付甕		2.5	8.6	DEH	1	明褐	95	No.4
13	土器片鏝		0.7		BEH	2	褐灰	100	土師環の底部転用

している。時期は8世紀前半と考えられる。

第129号住居跡 (第35図)

調査区の北西側、A-22グリッドに位置する。北側と東西は調査区域外にかかり、調査できたのは遺構の南側の一部のみである。第218号土壇と重複関係にあり、本住居跡が古い。

平面形は不明だが、南壁が直線的であることから方形になると推定される。規模は南壁が調査区内で3.09m、直行する方向が2.13m、壁の立ち上がりはほとんどなく、壁周溝で遺構の範囲を認定した。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦でやや軟弱である。北東側の床面直上には焼土が一面に広がっていた。覆土は焼土を多く含む。自然堆積である。

カマドは検出していない。床面には床下土壇と考えられる掘り込みが2基掘りこまれていた。この内床下土壇1は下層に白色粘土を多く含み、第218号土壇にも同様の粘土層が認められることから、何らかの関係がある可能性も考えられる。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は土師器の皿・環・甕と須恵器の皿・高台付桶、羽釜が出土している。土師器は器肉の厚い1・2と薄い3・4があり、後者は端部がつまみあげられている。須恵器はいずれも木野窯産である。6は体部外面に「合」の墨書がある。13は土器片鏝と考えられるもので、環の底部を打ち欠き、両端に刀子による切り込みが入れられている。

時期は9世紀後半と考えられる。

第130号住居跡 (第36図)

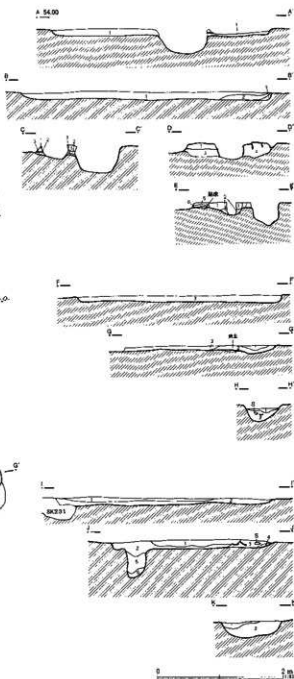
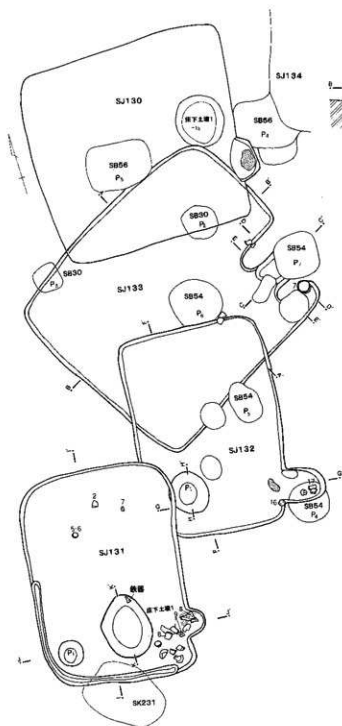
調査区の北西側、B-21グリッドに位置する。第133号住居跡、第30・56号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。また東側に近接して第134号住居跡があり、出土遺物から本住居跡の方が新しいと考えられる。

残存状況が悪く、カマドと北壁と南壁の掘り込みを僅かに認識できたことにより、遺構の範囲を認定した。

平面形は、正方形である。規模は長軸3.31m、短軸3.28m、深さは0.02mでごく浅い。主軸方向は、N-90°Eを指す。床面は平坦で、硬化面等は認められなかった。覆土は深さがごく浅いこともあり、覆土の状況は観察できなかった。

カマドは東壁の南寄りに造られ、壁を掘り込み突出している。燃焼部のもっとも深い部分を検出できたのみで形態等は不明である。火床面は床面とほぼ同じ高さで最も深い部分が焼土化していた。軸は検出できなかった。東壁寄りの中央には径1.1m、深さ15cmの土壇が床面の下に掘り込まれており、床下土壇と考えられる。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、ロクロ土師器の高台付桶の破片が出土しているのみである。時期は10世紀と考えられる。



SJ131

- 1 黄褐色土 ローム地少量、焼土粒多量
 - 2 黄褐色土 ローム地少量
 - 3 黄褐色土 焼土粒・灰化物少量
 - 4 赤褐色土 焼土
 - 5 黄褐色土 ローム地少量、しまり張
 - 6 黄褐色土 ローム地多量
- SJ131床下土層1
- 1 黄褐色土 崩壊したる
 - 2 黄褐色土 ロームブロックまばら

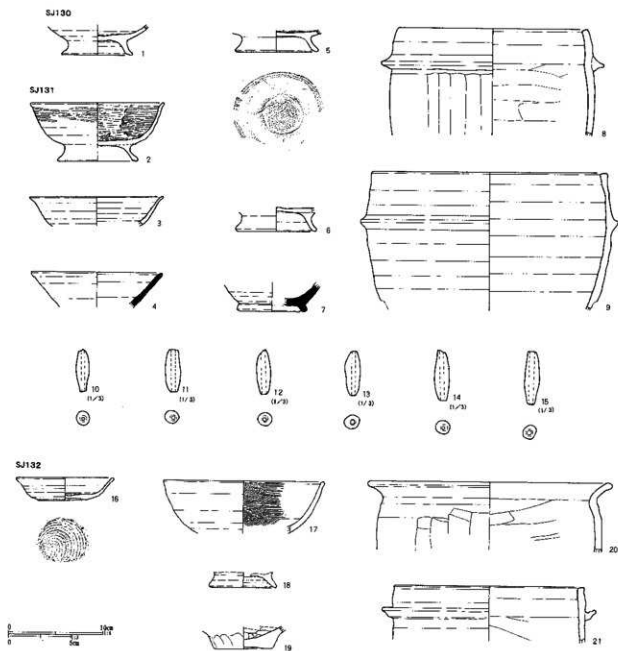
SJ132

- 1 黄褐色土 焼土・ロームブロック肉包
 - 2 黄褐色土 灰・焼土多
 - 3 黄褐色土 ローム地・焼土粒少量
- SJ132ピット1
- 1 黄褐色土 ローム地・焼土粒少量
 - 2 黄褐色土 ローム地多量、焼土粒・焼土ブロック (1.3m×1) 少量

SJ133

- 1 黄褐色土 ロームブロック中々多、ローム地・焼土少量
 - 2 黄褐色土 ローム地多量
 - 3 黄褐色土
- SJ133中マダ
- 1 白砂層 焼土ブロック・黄褐色土混入
 - 2 黄褐色土 灰多量
 - 3 黄褐色土 ロームブロック混入
 - 4 黄褐色土 ロームブロック少量
 - 5 黄褐色土
 - 6 白砂層 崩壊されている
 - 7 白砂層土 ロームブロック混入

第36図 第130～133号住居跡



第37図 第130～132号住居跡出土遺物

第131号住居跡 (第36図)

調査区の北西側、B-21グリッドに位置する。第132号住居跡、第231号土壇と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.18m、短軸2.46m、深さは0.06mでごく浅い。主軸方向は、N-79°-Wを指す。床面は平坦で、堅く踏み固められ、硬化していた。覆土は自然堆積で、1層に焼上ブロックが多く含まれるが、周辺からの流れ込みと考えら

れる。

カマドは東壁の南寄りに造られ、燃烧部の大部分は壁内に取まるが、若干壁を掘り込んでいる。火床面は床面とはほぼ同じ高さで笑口に近と考えられる部分が焼土化していた。灰層はあまり発達していない。軸は検出できなかった。カマドの手前には長軸1.0m、短軸0.8mの土壇が貼り床の下から検出された。北西コーナーには径0.4m、深さ0.45mのピット1が掘り込まれており、柱穴と考えられる。

第4表 第130～132号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	検成	色調	残率	備考
1	ロクロ高台碗		3.2	7.4	ABDEJ	1	茶褐	70	確認面
2	ロクロ高台碗	(14.0)	6.2	8.2	AEG	2	淡褐	65	No.16 内面黒色処理+ミガキ
3	ロクロ高台碗	(14.0)	3.1		ADJ	1	明褐色	20	確認面
4	須恵杯	(13.8)	3.7		ADH	3	灰白	10	B
5	ロクロ高台碗		2.3	8.6	BDE	1	褐灰	75	No.9 内面黒色処理+ミガキ
6	ロクロ高台碗		2.5	8.2	ADEJ	1	茶褐	95	No.9 内面黒色処理
7	須恵高台碗		3.2	(6.8)	ADH	3	灰白	20	No.8 B
8	羽釜	(20.0)	11.3		BEJ	2	茶褐	15	No.4 非ロクロ整形、土師質、体部外面縦ケズリ
9	羽釜	(25.0)	14.5		DEJ	2	褐	15	No.5・6・7 ロクロ整形 土師質
10	土鉢	径3.3cm	最大径1.0cm	孔径0.25cm			重量2.87g	D	1 明褐 残率100%
11	土鉢	径3.3cm	最大径1.2cm	孔径0.3cm			重量3.45g	ADE	2 明褐 残率100%
12	土鉢	径3.5cm	最大径1.1cm	孔径0.3cm			重量2.75g	AD	2 暗褐 残率100%
13	土鉢	径3.5cm	最大径1.2cm	孔径0.3cm			重量4.01g	EJ	2 暗褐 残率100%
14	土鉢	径4.0cm	最大径1.2cm	孔径0.3cm			重量3.86g	AD	2 明茶褐 残率100%
15	土鉢	径4.2cm	最大径1.1cm	孔径0.3cm			重量3.97g	ADE	2 暗褐 残率100%
16	ロクロ皿	10.2	2.4	5.0	DE	2	赤褐	70	No.1
17	ロクロ碗	(17.0)	5.4		DE	2	橙褐	25	No.3 カマド 確認面 内面ミガキ
18	ロクロ高台碗		1.6	(6.8)	DE	2	褐灰	40	カマド
19	土師壺		2.3	(6.0)	DEJ	2	褐	35	P 1
20	土師壺	(26.0)	7.2		BEJ	1	橙褐	15	P 1
21	羽釜	(20.0)	5.9		AE	3	褐	5	非ロクロ整形 土師質

遺物は、比較的多く、カマドの手前からカマドの構築材と考えられる礎とともに羽釜がまとまって出土した。

器種は須恵器の環・高台付碗、ロクロ土師器の高台付碗、羽釜、土鉢が出土している。2はロクロ土師器の高台付碗で内面黒色処理され丁寧に磨かれている。5・6はロクロ土師器で内面黒色処理される。8・9は羽釜である。8はロクロ調整されず、胎土が土師質である。9はロクロ調整である。土器以外にも床下土壌から麻股織の織身部が出土している。時期は11世紀前半と考えられる。

第132号住居跡 (第36区)

調査区の北西側、B-21グリッドに位置する。第131・133号住居跡、第54号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第131号住居跡よりも古く、第133号住居跡、第54号掘立柱建物跡よりも新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.29m、短軸2.36m、深さは0.08mでごく浅い。主軸方向は、N-83°-Wを指す。床面は平坦である。覆上は自然堆積である。

カマドは東壁の南寄りに造られ、若干壁を掘り込

んで突出している。火床面が床面より若干掘り窪められている。焚口に近いと考えられる部分が焼上化していた。軸は検出できなかった。カマドの手前の北西コーナーには径0.6m、深さ0.3mのピット1が掘り込まれており、覆上には焼上が多く含まれていた。

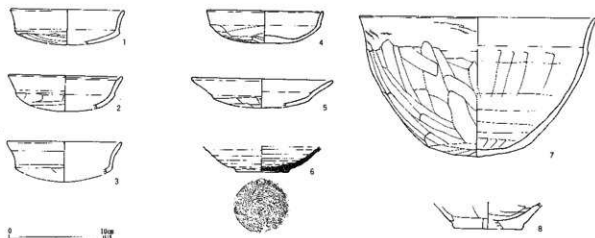
遺物はロクロ土師器の小皿がカマドの南壁に接して、碗がカマドの中から出土している。

器種はロクロ土師器の小皿・高台付碗、土師器の壺、羽釜が出土している。この他に図示不能だが灰釉陶器の皿の細片が出土している。17はロクロ土師器の碗で内面が丁寧に磨かれている。21は羽釜で、ロクロ調整されず、胎土が土師質である。時期は10世紀末と考えられる。

第133号住居跡 (第36区)

調査区の北西側、B-21グリッドに位置する。第130・132号住居跡、第30・54・56号掘立柱建物跡と重複関係にあり、いずれよりも本住居跡が古い。

平面形は方形である。規模は長軸4.01m、短軸3.50m、深さは0.06mでごく浅い。主軸方向は、N-61°-Eを指す。床面は平沢で部分的に貼り床が認



第38図 第133号住居跡出土遺物

第5表 第133号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	3.6		AEG	2	淡褐	20	確認面 底部黒斑有り
2	土師環	(12.0)	3.4		ADE	1	赤褐	29	底部黒斑有り
3	土師環	(12.0)	3.4		EGHJ	2	橙褐	5	
4	土師環	12.2	3.4		EH	2	橙褐	60	
5	土師皿	(15.0)	2.9		ADEII	3	褐	25	SJ132と接合
6	須恵環		3.8	5.6	BEI	1	青灰	55	本野産 A
7	土師鉢	(25.0)	14.7	(10.0)	EH	2	赤褐	30	No.1
8	土師甕		2.8	(7.0)	BEG	3	赤褐	20	床F

められる。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の中央より若干南寄りに造られている。第54号掘立柱建物跡の柱穴と重複するため明らかでないが燃焼部はほぼ壁内に収まると考えられる。火床面は床面とほぼ同じ高さで地山の焼上化は認められなかった。床面上には灰層（2層）が形成されていた。袖は白色粘土を貼り込んで造り出されていた。右側の袖には補強材として第38図7の鉢が正位で埋め込まれていた。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は土師器の環・皿・鉢・甕、須恵器の環が出土している。6の環は底部周辺ヘラ削りの木野産産のもので、混入の可能性が高い。時期は7世紀中葉と考えられる。

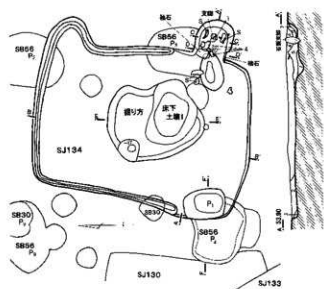
第134号住居跡（第39図）

調査区の北西側、A・B-21・22グリッドに位置する。第30・56号掘立柱建物跡と重複関係にあり、いずれよりも本住居跡が新しい。また西側に近接し

て第130号住居跡があり、出土遺物から本住居跡の方が古いと考えられる。

平面形は不整な長方形である。東壁は北側が張り出している。規模は長軸3.48m、短軸2.66m、深さは0.06mでごく浅い。主軸方向は、N-84°-Wを指す。床面は遺構の中央がやや低く、壁周辺がやや高めである。貼り床が認められ、全体に堅く踏み固められ、硬化していた。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の南寄りに造られ、壁を張り込み突出している。火床面は床面とほぼ同じ高さで、支脚の手前か焼土化していた。袖は検出できなかったが、燃焼部の両脇から袖の構造材と考えられる片岩が出土している。左側は倒れた状態だが、右側は立てられたままの状態であった。中央には支脚と考えられる径10cm、高さ25cmの礎が立てられたままの状態で出土し、その上に4の羽釜がかぶった状態で出土している。遺構の中央には大規模な掘り方が掘り込まれ、それを埋め戻して1m×0.6mの床下土壌が造



SJ134

- 1 黒褐色土 ローム地・ロームブロック (2~4cm大)・焼土粒・白色粘土少量
- 2 黒褐色土 ローム地・焼土粒少量
- 3 黒褐色土 ローム地・ロームブロック (2cm大) 少量

SJ134カマ?

- 4 黒褐色土 ローム地・ロームブロック (3.4cm大)・焼土粒少量
- 5 黒褐色土 ローム地少量・焼土粒少量・しまり餅
- 6 黒褐色土 焼土ブロック・しまり餅
- 7 黒褐色土 ローム粒少量・焼土粒少量

SJ134床下土層1

- 1 黒褐色土 ローム粒少量
- 2 黒褐色土 ローム・白色焼土ブロック
- 3 黒褐色土 ロームブロックとの焼土層
- 4 黒褐色土

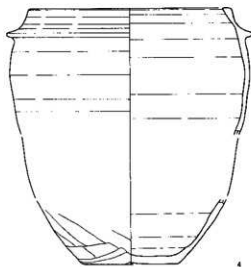
SJ134ピット1

- 1 黒褐色土 ロームブロック (3cm大) 中々多い
- 2 黒褐色土 ローム地・ロームブロック少量 (SB55)
- 3 黒褐色土 ローム主体・黒色土ブロック混入 (SB56)

0 10m



0 10cm



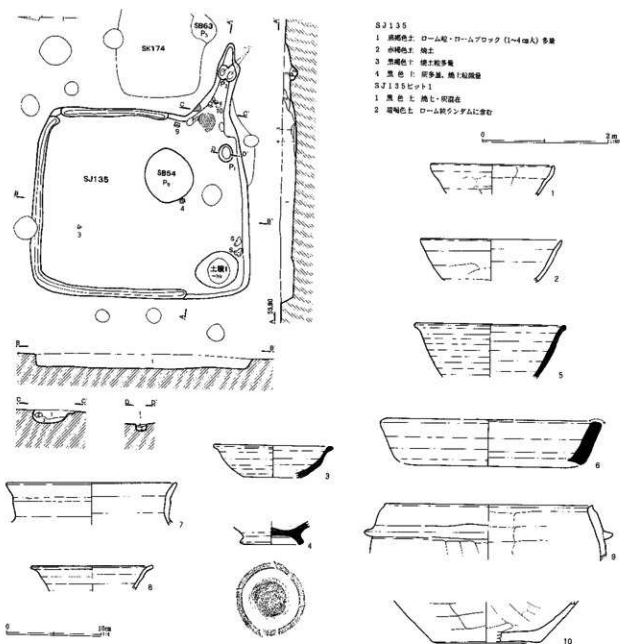
第39図 第134号住居跡・出土遺物

第6表 第134号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	ロクロ小皿	10.2	2.8	4.4	AHJ	2	淡褐	80	カマドNo.5
2	ロクロ椀	(15.6)	5.4	(7.4)	ADHJ	2	褐	30	
3	土師甕	(21.8)	5.1		AEG	2	褐	5	
4	羽釜	(21.4)	(27.0)	10.0	ADEH	1	褐灰	30	カマドNo.1・2・3・4・6 ロクロ整形 須恵質

られている。上面には貼り床が施されていた。南西コーナーに径60cm、深さ50cmのピット1があり、埋め戻しの可能性が高い。柱穴と考えられるものは確認されなかった。

遺物はロクロ土師器の小皿・椀、土師器の甕、羽釜が出土している。2の椀は底部外周がヘラ削りされている。内面は黒色処理される可能性がある。羽釜は胴部中ほどを欠失するが同一個体と考えられ



第40図 第135号住居跡・出土遺物

第7表 第135号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(13.0)	3.2		BDE	3	褐	5	土壇1
2	土師環	(13.0)	4.4		AEGH	2	褐	20	
3	須恵環	(12.4)	3.4	(6.0)	BEK	1	青灰	20	Na 5 木野産 A
4	須恵高台椀		2.4	(5.8)	DEJK	2	明灰	80	Na 4 木野産 A
5	須恵盤	(16.0)	5.7		EK	2	灰	20	木野産 A
6	須恵盤	(22.0)	4.6		BEIJK	2	明灰	5	木野産 割れ口を削り、口縁にしている A
7	土師罌	(18.0)	4.5		DEJ	2	赤褐	20	
8	ロクロ環	(12.6)	2.7		ADE	1	淡褐	15	
9	羽釜	(22.0)	5.8		ARDEJ	1	淡褐	5	Na 3 非ロクロ製形 胴部外面縦ケズリ 土師質
10	羽釜		4.4	(11.5)	BDEJ	2	褐	20	Na 1

る。ロクロ整形され、底部周辺はヘラ削りである。時期は10世紀末と考えられる。

第135号住居跡（第40図）

調査区の北西側、B-21・22グリッドに位置する。第54号独立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。

平面形は不整な方形である。規模は長軸3.45m、短軸2.93m、深さは0.18mで浅い。主軸方向は、E-Wを指す。床面は遺構の中央がやや低く、壁周辺がやや高めである。貼り床が認められ、全体に強く踏み固められ、硬化していた。覆土中にロームブロックが多く含まれ、埋め戻しの可能性がある。

カマドは東壁の最も南寄りに造られ、壁を長く掘り込み、やや斜め方向に突出している。カマドの右側の壁面には段がつけられていた。火床面は床面とほぼ同じ高さで、焚口に近いと考えられる部分が焼土化していた。側壁も焼土化していた。煙道にピット状の掘り込みがある。4層は灰層である。袖は検出できなかった。南西コーナーにあるピット1は径1.1m、深さ40cmあり、埋め戻しの可能性が高い。柱穴と考えられるものは確認されなかった。

遺物は土師器の環・甕、須恵器の環・高台付碗・盤、ロクロ土師器の環、羽釜が出土している。10の羽釜はカマド燃焼部から出土したものである。3～6の須恵器はいずれも未野窯跡産である。6の甕は甕の底部周辺の部分を、割れ口を削り口縁部としたものである。羽釜はいずれも非ロクロ整形で縦位のヘラ削りが施され、土師質である。10の甕の底部には多量の砂粒が付着している。遺物の時期は大きく9世紀後半（3～7）と10世紀前半（1・2・8～10）の2時期に分けられる。この内、本住居跡の時期はカマド燃焼部から出土した羽釜から10世紀前半とする。

第136号住居跡（第41図）

調査区の北西側、C-21グリッドに位置する。第137・138号住居跡、第58・59号独立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。

平面形は方形である。確認面で掘り込みは認められず、方形のシミ状の範囲を遺構の範囲とした。規模は長軸2.93m、短軸2.61mである。主軸方向は、N-9°→Eを指す。床面は貼り床が遺構の中央に若干残るのみであった。

カマドは燃焼部の底面を確認したのみである。東壁の最も南寄りに造られ、壁を掘り込み突出している。火床面は床面とほぼ同じ高さで、焚口に近いと考えられる部分が焼土化していた。袖は検出できなかった。カマドの正面のやや南寄りには、径70cm、深さ15cmの床下土壌があり、上面に貼り床が施されていた。南西コーナーにあるピット1・2は径40cmで上層に焼土を含み、埋め戻しの可能性がある。柱穴と考えられるものは確認されなかった。

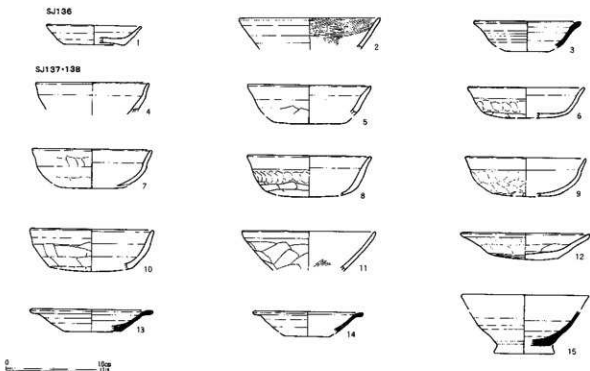
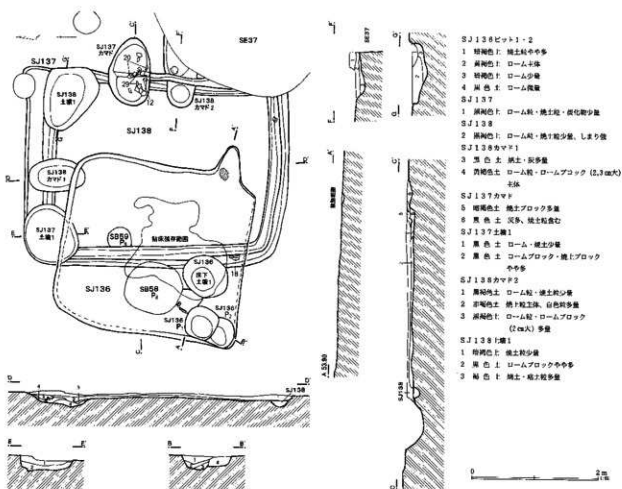
遺物（1～3）はロクロ土師器の小皿・環、須恵器の環が出土している。1・2はロクロ土師器で、2は内面黒色処理され、丁寧なヘラ磨きが施される。3の須恵器の環は混入と考えられる。時期は11世紀中葉である。

第137号住居跡（第42図）

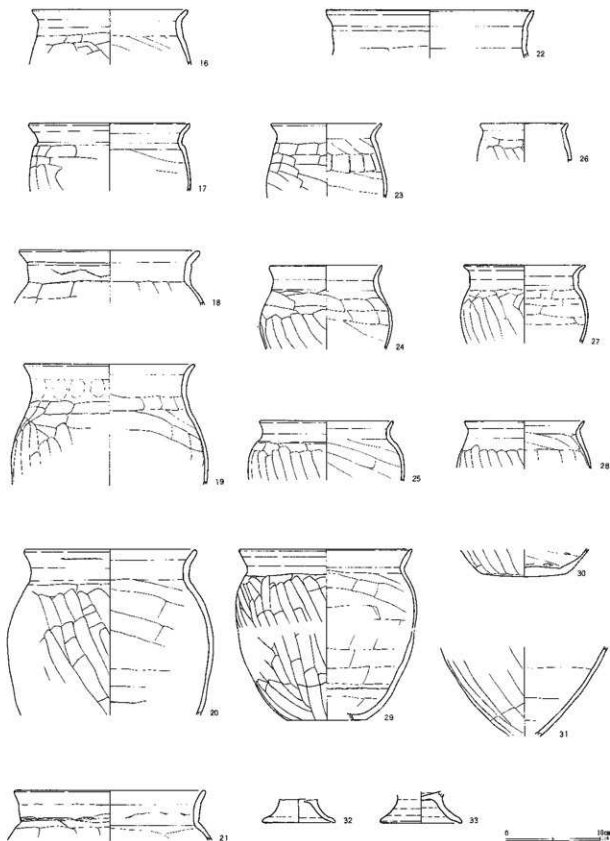
調査区の北西側、B・C-21・22グリッドに位置する。第136・138号住居跡、第58・59号独立柱建物跡、第37号井戸跡と重複関係にあり第、136号住居跡、第37号井戸跡より古く、その他のものより新しい。第138号住居跡は本住居跡と入れ子状になっている。

平面形は長方形である。規模は長軸4.16m、短軸3.08m、深さは0.1mで浅い。主軸方向は、W-Eを指す。床面はほぼ平田で、貼り床は認められない。全体に強く踏み固められ、硬化していた。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の中央よりやや北側に造られ、壁を掘り込み突出している。火床面は床面とほぼ同じ高さで、壁の外側は段を持って煙道となっている。6層は灰層である。袖は白色粘土を貼りつけて造られていたが、実測していないため図示できなかった。北西コーナーにある土壌1は径1.0m、深さ25cmあ



第41図 第136～138号住居跡・出土遺物(1)



第42图 第136~138号住居跡出土遺物(2)

第8表 第136～138号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	ロクロ小皿	(10.0)	2.1	(6.4)	AEG	1	淡褐	20	
2	ロクロ環	(14.8)	3.4		BEGH	3	橙褐	30	P 1 内面黒色処理+ミガキ
3	須恵環	(11.3)	2.8		BDE	1	明灰	15	P 1 木野産 A
4	土師環	(12.0)	3.3		DE	2	黒褐	10	
5	土師杯	(13.0)	3.2		EG	3	暗褐	10	
6	土師環	(12.4)	3.2		BCEH	2	淡褐	25	カマド
7	土師環	(12.6)	3.8		BEII	2	褐	20	1号カマド
8	土師環	(13.0)	4.2		ABDEII	2	淡褐	45	カマド
9	土師環	(12.8)	4.1		ABEJ	2	橙褐	30	SJ137土壌1
10	土師環	(13.0)	4.2	(8.8)	ABDE	2	明褐	25	掘り方
11	土師環	(14.0)	4.2		REH	2	褐	5	内面黒色処理+ミガキ カマド
12	土師皿	13.6	2.8	7.5	DEG	2	茶褐	60	カマドNo.14 確認面
13	須恵皿	(12.5)	2.3	(6.0)	ABHI	3	真灰	10	木野産 A
14	須恵皿	(11.6)	2.2		EIK	1	青灰	25	掘り方 木野産 B
15	須恵高台環		3.7		EHK	3	時灰	20	木野産 SJ137土壌1 B
16	土師甕	(16.4)	5.8		DE	2	褐灰	20	確認面
17	土師甕	(17.0)	7.2		DE	1	明褐	10	掘り方
18	土師甕	(19.0)	5.7		ADE	2	褐	30	No.1
19	土師甕	(18.0)	12.8		DEIJ	2	橙褐	20	確認面
20	土師甕	18.0	17.5		ADE	2	褐	30	カマドNo.5・12 周辺確認
21	土師甕	(19.8)	5.4		ABDEH	2	橙褐	25	カマド
22	土師甕	(22.0)	5.1		DE	1	橙褐	15	掘り方
23	土師小型甕	11.6	7.8		ABEH	3	橙褐	40	1号カマド
24	土師小型甕	(12.0)	8.9		BEII	2	褐	15	カマド
25	土師小型甕	(14.0)	6.3		EH	2	淡褐	15	床下
26	土師小型甕	(9.2)	4.1		AE	2	暗褐	10	
27	土師小型甕	(12.8)	8.3		ADE	1	褐	30	確認面
28	土師小型甕	(12.6)	5.0		AEH	2	褐	25	カマド
29	小型甕	(18.2)	18.0	18.5	DEII	1	明褐	25	カマドNo.2・8 SJ136・137確認面 底部穿孔
30	土師甕		3.0	8.8	BCEH	2	褐	75	カマド
31	土師甕		9.5		DE	1	橙褐	65	カマド SJ136・137確認面
32	土師台付甕		2.5	(7.6)	BEH	2	褐	40	床下
33	土師台付甕		3.3	(8.5)	DEH	1	明褐	80	確認面

る。覆土(1層)は自然堆積である。柱穴と考えられるものは確認されなかった。

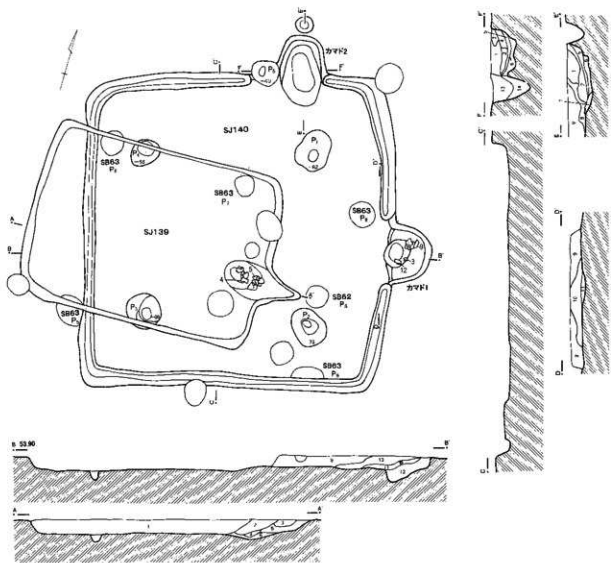
遺物(4～33)は土師器の環・皿・甕・台付甕・小型甕、須恵器の皿・高台付環、また図示できないが灰胎陶器の小破片(実物不明)が出土している。12の皿、20・29の甕はカマドからの出土である。調査時に第138号住居跡と一体で取り上げられており、遺物を両者に分離することに躊躇するものもあるが、カマド出土土器をもとにするならば10を除く土師器環・皿類、19・20・29の甕類が本住居跡に伴うと考えられる。11の環は内面が黒色処理され、ヘラ磨きが施されている。29の甕には径6cmの内側からの底部穿孔が施されている。時期は10世紀前半で

ある。

第138号住居跡(第41凸)

調査区の北西側、B-21、C-21・22グリッドに位置する。第136・137号住居跡、第58・59号掘立柱建物跡、第37号井戸跡と重複関係にあり、第58・59号掘立柱建物跡より新しく、その他のものより古い。第137号住居跡は本住居跡と入れ子状になっている。

平面形は長方形である。規模は長軸3.88m、短軸2.99m、深さは0.04mでごく浅い。主軸方向は、E-Wを指す。床面はほぼ平坦で、貼り床が認められる。覆土は第137号住居跡が入れ子状に掘り込まれるため硬化していた。



SJ139

- 1 黒褐色土・ローム粒・ロームブロック (1~2m²) 少量
- SJ139カマド
- 2 黒褐色土 コーム粒・焼土粒少量、白色粒少量
- 3 黒褐色土 焼土粒少量
- 4 黒褐色土 焼土粒少量、白色粒少量
- 5 黒褐色土 焼土粒少量
- 6 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量

SJ140カマド

- 1 灰白色粘土
- 2 灰白色粘土 焼土ブロック少量
- 3 黒褐色土 ローム粒少量
- 4 黒褐色土 ローム粒中多、焼土粒少量
- 5 黒色土 灰少量、焼土粒、焼土ブロック・灰化焼土
- 6 黒色土 ロームブロック少量混入、灰・焼土粒混じり
- 7 黒色土 ロームブロック少量

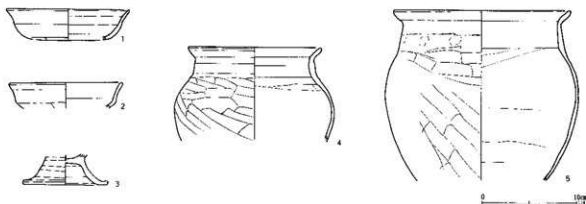
- 8 黒褐色土 ローム粒中多、灰化焼土粒少量
- 9 黒褐色土 ロームブロック混入、白色粒土ブロックや中多
- SJ140カマド1
- 10 灰白色粘土 焼土ブロック少量
- 11 黒褐色土 灰土
- 12 褐色土 焼土・ローム粒混じり
- SJ140ピット5
- 13 黒褐色土 ローム粒中多
- 14 黒褐色土 ローム粒少ない

0 3m

第43図 第139・140号住居跡

カマドは北壁と東壁の2箇所に造られていた。築造順序は1号→2号の順である。1号カマドは北壁のほぼ中央に造られる。浅い土壇状の燃焼部が掘り込まれ、突出している。掘り方(4層)はローム土で埋め戻されている。火床面は床面より下位になっている。3層は灰層である。使用後ローム土で埋め

戻されていたと考えられ、覆土の2層が乗っている。カマド2は東壁のほぼ中央に造られる。浅い土壇状の燃焼部が掘り込まれ、やや長く突出するようだが、第37号井戸跡と重複しており不明である。火床面は床面より下位になっている。第137号住居跡築造時に埋め戻された可能性がある。カマド1・2とも軸



第44図 第139号住居跡出土遺物

第9表 第139号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	上師環	(13.0)	3.2	(8.8)	DEH	2	明褐	25	
2	下師環	(12.0)	2.7		DEII	2	明褐	16	
3	上師台付甕	3.2		8.8	DE	1	橙褐	95	カマド
4	土師小型甕	(14.0)	9.9		BDE	1	褐	30	Na 1
5	上師甕	(18.6)	18.0		EGH	1	赤褐	30	カマドNo 4・8・10

は検出できなかった。北東コーナーにある土壇1は径1.0m、深さ20cmあり、埋め戻されている可能性が高い。柱穴と考えられるものは確認されなかった。

遺物は土師器の環・皿・甕・台付甕・小型甕、須恵器の皿・高台付環が出土している。第137号住居跡の項でも述べたが、調査時に第138号住居跡と一体で取り上げられており、遺物を両者に分離することに躊躇するものもあるが、第137号住居跡の資料としたもの以外は本住居跡に伴うものと考えたい。須恵器は破片のみである。いずれも末野窯跡産である。甕には大小があり、小型のものは台付甕である可能性が高い。時期は9世紀末である。

第139号住居跡 (第43図)

調査区の北西側、A・B-22グリッドに位置する。第140号住居跡、第62・63号掘立柱建物跡と重複関係にあり、いずれよりも新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.92m、短軸2.74m、深さは0.22mで浅い。主軸方向は、N-89°-Wを指す。床面は平出である。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の中央より若干南側に造られ、燃焼部

部分は若干壁を掘り込み突出している。燃焼部は浅い土壇状を呈し、火床面は床面よりやや下位となっている。床面の焼土化は見られない。灰層は認められず、3・4層は天井部の崩落土と考えられる。抽は検出できなかった。柱穴と考えられるものは確認されなかった。

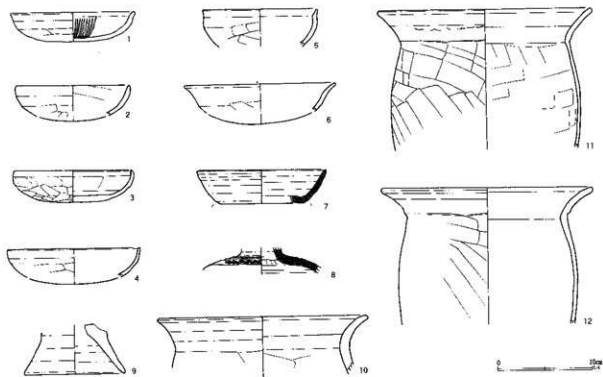
遺物は土師器の環・甕・小型甕・台付甕、また図示できないが須恵器の環の小破片が出土している。土器以外にも棒状の鉄製品が出土している(第270図30)。3-5はいずれもカマド出土である。時期は9世紀末と考えられる。

第140号住居跡 (第43図)

調査区の北西側、A・B-22グリッドに位置する。第139・141号住居跡、第62・63号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第141号住居跡より新しく、その他のものより古い。

平面形は方形である。規模は長軸4.92m、短軸3.67m、深さは0.16mで浅い。主軸方向は、N-35°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、貼り床が認められる。覆土はローム土を多く含み、埋め戻しである。

カマドは北壁と東壁の2箇所に造られていた。築



第45図 第140号住居跡出土遺物

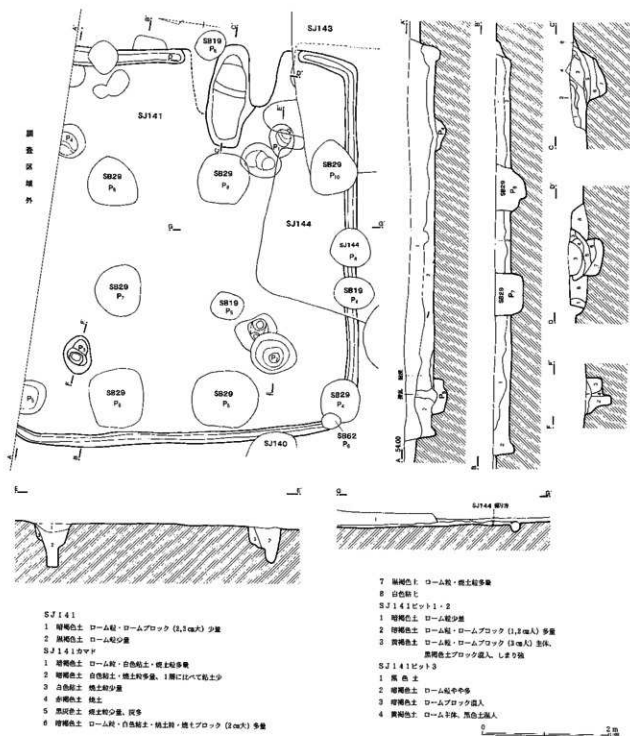
第10表 第140号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師 碗	(13.0)	3.1		BDEH	2	橙褐色	20	床下 内面放射暗文+ラセン暗文
2	土師 碗	(12.0)	3.2		AD	3	赤褐色	10	床下
3	土師 碗	(12.6)	3.3		BDE	2	褐色	40	Na 6 カマドNo. 1・2
4	土師 碗	(14.0)	3.0		DE	2	褐色	15	
5	土師 鉢	(12.0)	3.9		DEH	2	橙褐色	10	床下
6	土師 皿	(16.0)	3.0		AEG	2	橙褐色	15	床下
7	須恵 器	(13.6)	3.5	(8.6)	BEJ	2	明灰	20	P 3 木野産 A
8	須恵 器		2.8		BEK	1	暗青灰	20	床下 木野産 A
9	ロクロ 高台		5.2	(10.4)	BDEH	3	明褐色	20	Na 1
10	土師 甕	(22.0)	6.3		DEH	3	褐色	20	
11	土師 甕	(22.4)	14.8		DEH	2	橙褐色	15	カマド
12	土師 甕	(22.0)	14.5		DEG	2	褐色	20	カマドNo. 5・7

造順等は不明で、同時に使われていた可能性もある。カマド1は東壁の中央よりやや南寄りに造られる。燃焼部は壁面に掘り込まれ、突出している。掘り方は深く、褐色土(12層)で埋め戻されていた。火床面は床面とはほぼ同じ高さである。10層は天井部の崩落土、11層は灰層である。カマド2は北壁の中央よりやや東寄りに造られる。浅い土壌状の燃焼部が掘り込まれ、突出している。6・7層は掘り方で、ローム土で埋め戻されていた。火床面は床面より下位で

ある。2層は天井部の崩落土、5層は灰層である。煙道先端部のピットは煙突の施設である可能性がある。袖は検出できなかった。柱穴は径40-50cm、深さ60-75cmで、柱痕等は認められなかった。

遺物は土師器の碗・皿・鉢・甕、須恵器の碗・壺、ロクロ土師器の高台付碗が出土している。3の碗はカマド出土である。8は壺の肩部で、櫛歯状の工具により刺突文と波状文が施文されている。ロクロ土師器は混入と考えられる。時期は8世紀初頭である。



第46図 第141号住居跡

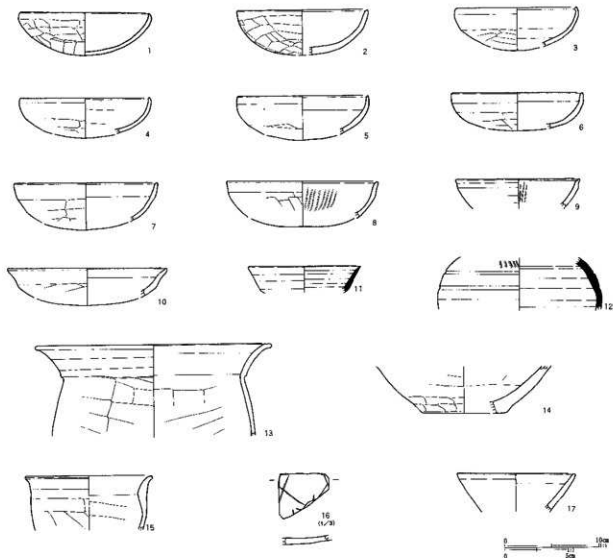
第141号住居跡 (第46図)

調査区の北西側、A・B-22・23グリッドに位置する。北側が調査区域外にかかる。第140・143・144号住居跡、第19・29・62号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。

平面形は方形になると推定される。規模は長軸

6.18m、短軸4.06m、深さは0.14mで浅い。主軸方向は、N-80°-Eを指す。床面はほぼ平坦である。覆土はローム土を不規則に含み、埋め戻しの可能性もある。

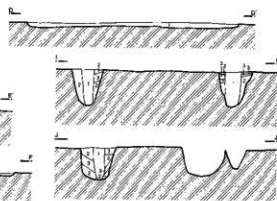
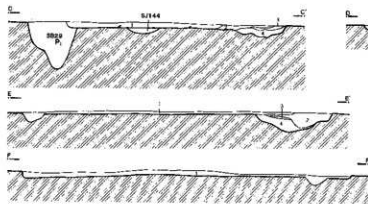
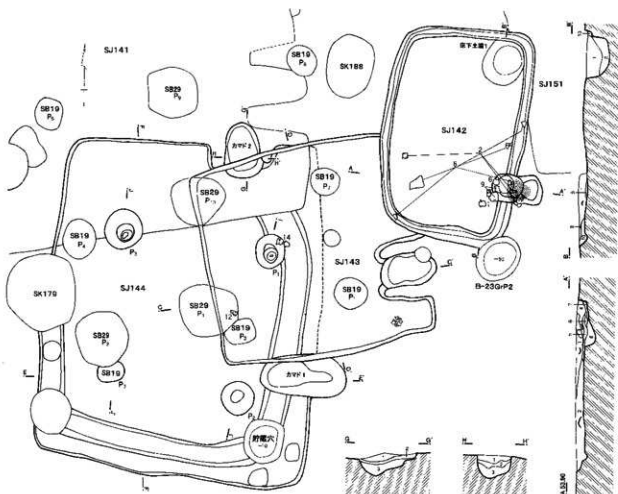
カマドは東壁のほぼ中央に造られる。燃焼部は壁内に収まる。掘り方は深く、ローム土や白色粘土を



第47図 第141号住居跡出土遺物

第11表 第141号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	地成	色調	残率	備考
1	土師環	(13.8)	4.5		AEH	2	褐	30	
2	土師環	(13.8)	4.7		DEH	2	褐	30	カマド袖
3	土師環	(13.0)	4.1		DE	2	褐	20	カマド カマド袖
4	土師環	(13.6)	3.7		DEH	2	明褐	15	床下
5	土師環	(13.8)	4.1		AE	2	褐	20	
6	土師環	(14.0)	3.3		DEH	2	橙褐	10	床下
7	土師環	(15.2)	4.1		DEH	2	黒	10	内外面とも黒色
8	土師環	(16.0)	3.8		ADEH	2	橙褐	15	放射暗文
9	土師環	(13.0)	3.2		ADE	1	赤褐	5	放射暗文
10	土師皿	(17.0)	3.1		DE	2	明褐	15	
11	須志	(6.0)	2.8		BEH	3	暗灰	10	周辺確認面 木野葦 A
12	須志	(6.0)	2.8		EJ	1	暗青灰	10	カマド 木野葦 A
13	土師鉢	(25.0)	9.8		AEG	1	茶褐	25	床下
14	土師壺	(13.4)	5.0	(9.0)	ADEH	2	褐	25	周辺確認面
15	土師小型鉢	(13.4)	5.7		DE	2	褐	15	
16	土師環		0.5		DE	2	褐	破片	周辺確認面 「×」のへら記号
17	土師埴	(12.4)	4.1		BEJ	2	赤褐	20	



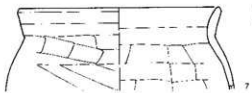
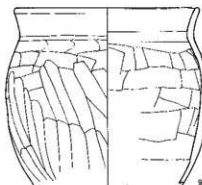
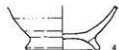
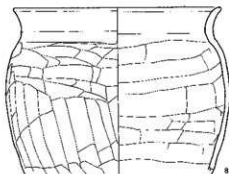
- SJ142
- 1 暗褐色土 ローム貯蔵室・焼土貯
 - 2 黄土ブロック (2.1m²)・白色粘土少量
 - 3 黒褐色土 ローム貯・焼土貯少量
 - 4 黒褐色土 白色粘土多量・焼土貯少量
 - 5 黒色土 焼土貯・焼土貯少量
 - 6 赤褐色土 焼土
 - 7 黒褐色土 ローム貯・ロームブロック [1.2m²]少量
 - 8 黒褐色土 ローム貯・焼土貯・灰・白色粘土多量
 - 9 赤褐色土 ロームブロックによる壁化層
 - 10 黒褐色土
- 0 2m

- SJ142地下土層1
- 1 黒褐色土 焼土貯少量・炭化物少量
 - 2 褐色土 灰・焼土多量・炭化物少量
- SJ143
- 1 暗褐色土 ローム貯・焼土貯・少量
- SJ143土マツ
- 1 暗褐色土 焼土貯少量
 - 2 赤褐色土 焼土貯
 - 3 暗褐色土 焼土貯多量・ローム貯・ロームブロック (2.1m²)・炭化物・白色粘土少量
- SJ144
- 1 暗褐色土 ローム貯・焼土貯少量

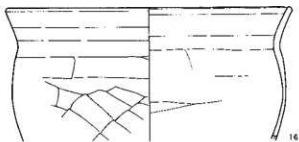
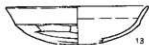
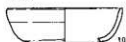
- SJ144土マツ1
- 1 暗褐色土 焼土貯少量・炭化物少量
 - 2 褐色土 灰・焼土多量
 - 3 黒色土 灰多量
 - 4 暗褐色土 ロームブロック・焼土貯多量
- SJ144土マツ2
- 1 赤褐色土 焼土貯少量・白色粘土多量
 - 2 赤褐色土 焼土貯
 - 3 暗褐色土 ローム貯・ロームブロック少量
- SJ144土マツ3
- 1 暗褐色土 ローム貯少量
 - 2 暗褐色土 ローム貯・ロームブロック少量・暗褐色土を同様に含む・じまり層
 - 3 暗褐色土 ローム貯少量・じまり層

第48図 第142～144号住居跡

SJ142



SJ143



SJ144



0 10cm

第49图 第142~144号住居跡出土遺物

第12表 第142～144号住居跡出土遺物観察表

番号	器 種	口 径	高	底 径	胎 土	焼成	色 調	残率	備 考
1	須恵系高台椀	13.0	5.2	5.2	DEGJ	2	褐	75	P 1 No 6
2	ロクロ高台環	14.0	7.0	9.2	ABDE	1	茶褐	95	P 1 No. 1・11・13
3	須恵系環	(13.0)	3.7		FGJ	2	茶褐	15	
4	須恵系高台椀		4.8	(7.2)	EIJ	3	茶褐	30	P 1
5	土師高台環	(14.0)	4.9		AEG	3	赤褐	25	P 1
6	土師 甕		4.9	4.0	BDH	1	暗褐	65	No 8
7	土師 甕	(21.0)	8.8		DEG	2	暗褐	20	No12
8	土師 甕	(22.0)	17.6		REJ	1	茶褐	45	No. 2・3・4・5・10
9	土師 甕	(19.4)	18.7		ADE	1	橙褐	35	P 1 No. 7・9
10	土師 環	(12.0)	3.6	(8.8)	ADEH	3	明赤褐	10	
11	土師 環	(12.0)	3.5	(8.0)	AEH	3	褐	10	
12	土師 環	(12.3)	3.4		ADE	2	淡褐	30	口縁部に無調整部残す、黒斑有り(底部)
13	土師 皿	(15.0)	3.9		DE	2	橙褐	20	
14	須恵系高台椀		3.0	(7.2)	BEK	1	青灰	30	No. 3 未野産 A
15	土師 甕	(20.0)	6.8		ADE	2	褐	10	カマド
16	土師 甕	(30.0)	14.1		ABEG	1	赤褐	15	No. 4
17	羽 釜	(22.6)	12.2		BDEJ	1	橙褐	15	土師質 胴部クテケズリ カマド
18	土師 環	(12.0)	3.8		BEH	2	暗褐	25	床下
19	土師 環	(14.0)	2.6		BEH	2	褐	10	
20	土師 環	(14.2)	2.8		BDEH	2	淡褐	15	2号カマド
21	須恵系環	(15.0)	3.7		HJ	1	灰褐	10	床下 未野産 A
22	土師小型甕	(10.5)	5.7	6.5	DE	1	明褐	35	体部側面黒斑有り
23	土師 甕	(16.0)	10.1		BCDEH	2	茶褐	30	1号カマド・P 4・床下/SJ143

多く含む褐色土(6・7層)で埋め戻されていた。火床面は床面とほぼ同じ高さである。3・4層は天井部の崩落上、5層は灰層である。袖は白色粘土を貼りつけて造られる。柱穴は径50～70cm、深さ20cm前後で、柱痕等は認められなかった。1・2の内側にもピットがあることから、建て替えられた可能性もある。

遺物は土師器の環・皿・甕・壺・小型鉢、須恵器の環・壺、古墳時代中期の埴・高環が出土している。12の肩部には櫛刃状工具による烈点文が施される。16の内面に「×」のヘラ記号が見られる。17は古墳時代中期のもので混入である。時期は7世紀末である。

第142号住居跡 (第48図)

調査区の北西側、A・B-23グリッドに位置する。第143・151号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.42m、短軸2.29m、深さは0.06mでごく浅い。主軸方向は、N-83°-Wを指す。床面はほぼ平坦である。覆土は白

然堆積である。

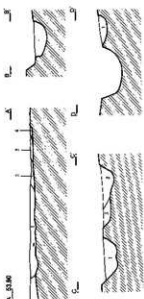
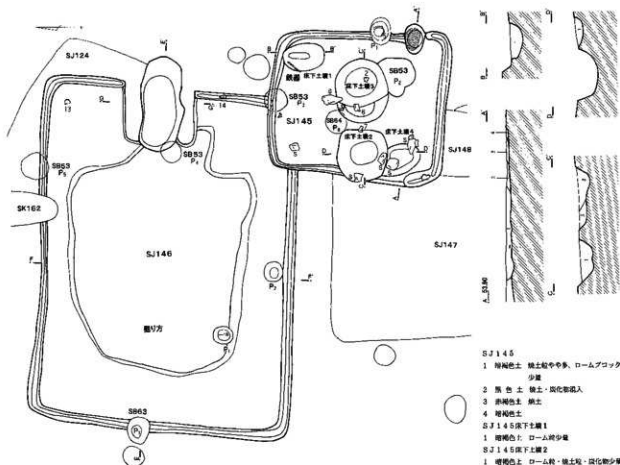
カマドは東壁の南寄りに造られる。燃焼部は浅い土壇状に掘り込まれる。掘り方(7・8層)は深く、黒褐色土で埋め戻されていた。火床面(6層)は床面とほぼ同じ高さである。3・4層は天井部の崩落土、5層は灰層である。袖は検出できなかった。土壇1は長軸1.0m、短軸60cm、深さ40cmで、埋め戻されている。柱穴と考えられるものは確認されなかった。

遺物は土師器の高台付環・甕、須恵系土師質土器の高台付椀、ロクロ土師器の高台付環が出土している。1の底部には製作時の置台と考えられる植物の圧痕が付いている。6・9の甕はカマド出土である。時期は10世紀中葉である。

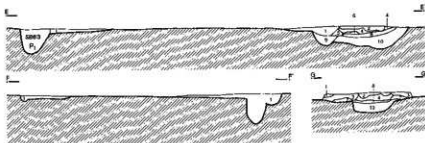
第143号住居跡 (第48図)

調査区の北西側、A・B-23グリッドに位置する。第141・142・144号住居跡、第19・29号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第142号住居跡より古く、それ以外より新しい。

平面形は方形である。規模は長軸3.37m、短軸



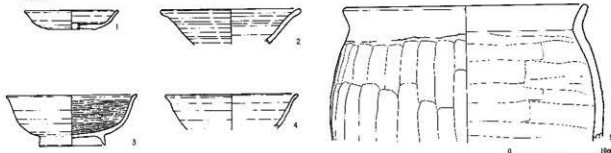
- SJ145
- 1 暗褐色土 粘土粒中多、ロームブロック少量
 - 2 黒色土 粘土・炭化物混入
 - 3 赤褐色土 粘土
 - 4 暗褐色土
- SJ145 土下土庫1
- 1 暗褐色土 ローム粒少量
 - 2 SJ145 土下土庫2
 - 1 暗褐色土 ローム粒・粘土粒・炭化物少量
 - 2 SJ145 土下土庫3
- SJ145 土下土庫4
- 1 暗褐色土 ローム粒・ブロック (1~3cm大) 主体、暗褐色土ブロック少量、しまり物
 - 3 暗褐色土 ローム粒少量
- SJ145 土下土庫4
- 1 暗褐色土 ローム粒・粘土粒少量
- SJ146
- 1 黒褐色土 ローム粒少量
 - 2 SJ146 土下土庫
 - 1 暗褐色土 粘土粒少量、白色粘土多量



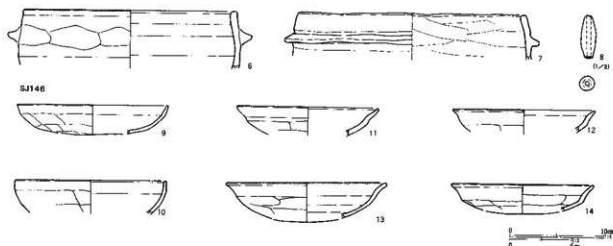
- 3 暗褐色土 粘土粒・ロームブロック (2~4cm大) 多量、白色粘土少量
- 6 白色粘土 粘土粒少量
- 9 黒褐色土 ローム粒・粘土粒少量
- 4 赤褐色土 粘土粒・ロームブロック (2cm大) 少量、白色粘土少量
- 7 白色粘土
- 10 黒褐色土 ローム粒少量
- 5 暗褐色土 粘土粒少量
- 8 黒色土 炭多量、粘土粒少量

0 10m

SJ145



第50図 第145・146号住居跡・出土遺物(1)



第51図 第145・146号住居跡出土遺物(2)

第13表 第145・146号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	ロクロ小皿	(10.0)	2.0	(5.0)	ACEH	1	橙褐	10	
2	ロクロ高台杯	(14.6)	3.7		ADHJ	2	淡褐	20	No.6
3	ロクロ高台碗	(14.0)	5.3	(7.0)	BHJ	2	茶褐	60	内面黒色処理+ミガキ
4	ロクロ杯	(14.0)	3.7		EC	2	褐	10	
5	土師甕	(26.0)	14.5		ABDHIJ	2	褐	20	No.5
6	羽釜	(22.4)	6.1		DEJ	1	明褐	15	No.3 ロクロ整形 土師質
7	羽釜	(24.0)	4.7		IJJ	2	褐	20	P.1 No.4 土師質
8	土師鉢	長3.3cm 最大径1.2cm		孔径0.3cm		重量3.51g	DE	1	明赤褐 残率100%
9	土師杯	(16.0)	3.0		BDIH	2	橙褐	15	壁溝
10	土師杯	(16.0)	3.6		DEII	2	明褐	10	
11	土師皿	(15.0)	3.0		DEH	2	明褐	10	床下
12	土師皿	(15.0)	2.4		DEII	2	褐	15	カマド
13	土師皿	(17.0)	3.8		ADE	1	橙褐	15	No.1
14	土師皿	(15.0)	2.8		DEH	2	茶褐	25	No.2

2.98m、深さは0.06mでごく浅い。主軸方向は、N-79°-Eを指す。床面はほぼ平坦である。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁のやや南寄りに造られ、燃焼部は壁内に収まる。浅い上壊方の掘り方(4層)が埋め戻されていた。火床面(3層)は床面とほぼ同じ高さである。袖は白色粘土を貼りつけて造られる。柱穴は確認されなかった。

遺物は土師器の杯・皿・甕、須臾器の高台付碗、羽釜が出土している。12・13・17は混入と考えられる。15の甕はカマド出土である。羽釜(17)は非ロクロ整形で縦位のヘラ削りが施され、土師質である。時期は9世紀中葉である。

第144号住居跡(第48図)

調査区の北西側、B-22、A・B-23グリッドに

位置する。第141・143号住居跡、第19・29号掘立柱建物跡、第179号土壊と重複関係にあり、第143号住居跡、第29号掘立柱建物跡より古く、それ以外より新しい。第179号土壊との関係は不明である。

平面形は長方形である。長軸5.18m、短軸4.32m、深さは0.05mでごく浅い。主軸方向は、N-85°-Wを指す。床面は平坦で、貼り床が施され、全体に硬化していた。覆土は自然堆積である。

カマドは北壁と東壁の2箇所に造られている。築造順序は1→2の順である。いずれも浅い土壊状の燃焼部が掘り込まれ、突出する。カマド1は東壁のやや南寄りに造られる。掘り方(4層)は深く、埋め戻されていた。火床面は床面とほぼ同じ高さである。2層は天井部の崩落土、3層は灰層である。袖は検出していない。カマド2は北壁の中央よりやや

東寄りに造られる。3層は掘り方である。火床面は床面とはほぼ同じ高さである。1層は天井部の崩落土、2層は灰層である。袖は白色粘土を貼りつけて造られていた。柱穴は径40～60cm、深さ50cmで、各々に柱痕が認められる。

遺物は土師器の環・甕・小型壺、須恵器の環が出土している。23の甕はカマド1、20の環はカマド2の出上である。時期は8世紀初頭である。

第145号住居跡 (第50図)

調査区の北西側、B・C-23グリッドに位置する。第146・147・148号住居跡、第53・64号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。

平面形は南北方向がやや長い長方形である。規模は長軸2.76m、短軸2.52m、深さは0.08mでごく浅い。主軸方向は、N-86°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、全体に堅く踏み固められ、硬化していた。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の南寄りに造られる。燃焼部は浅い皿状に東壁に半ばかかる形で掘り込まれている。煙道が削平されているため、本来は大部分が壁外に出出していたものと考えられる。4層は掘り方で埋め戻されていた。火床面(3層)は床面とはほぼ同じ高さである。2層は灰層である。袖は検出できなかった。また、床面にはカマドの補強材と考えられる片岩等の礫が散在していた。床下土壌は4基検出された。床下土壌1は長軸70cm、短軸40cm、深さ20cm、土壌2は長軸80cm、短軸80cm、深さ25cm、土壌3は長軸1.0m、短軸80cm、深さ20cm、土壌4は長軸50cm、短軸50cm、深さ10cmで、3・4はローム土を多く含む埋め戻されている。カマド北側に径30cm、深さ10cmのピット(P1)がある。

遺物は土師器の甕、ロクロ土師器の小皿・高台付杯・高台付椀、羽釜、土錘が出土している。5の甕はカマド北側のピット1からの出土である。土器以外にも床下土壌1の上面から紡錘車の軸と考えられる鉄製品が出土している(第269図18)。5の甕は礫を多く含むザラザラした胎土である。羽釜はいずれ

も土師質で、6はロクロ整形で、7は非ロクロ柱形である。時期は10世紀後半である。

第146号住居跡 (第50図)

調査区の北西側、B・C-22・23グリッドに位置する。第124・145号住居跡、第53・63号掘立柱建物跡、第162号土壌と重複関係にある。第53号掘立柱建物跡との新旧は不明だが、その他のものより本住居跡が古い。

平面形は長方形である。長軸5.32m、短軸3.16m、深さは0.10mでごく浅い。主軸方向は、N-89°-Wを指す。床面は平坦で、貼り床が施され、硬化していた。覆土は削平のため明らかでない。

カマドは東壁の中央に造られる。燃焼部は深い土壌状に掘り込まれ、突出している。9・10層は掘り方で埋め戻されていた。火床面は床面とはほぼ同じ高さである。8層は灰層、2～6層は天井部の崩落土である。袖は白色粘土(7層)を貼り付けて造られていた。ピットは径30cm、深さ20cmの2基が検出された。

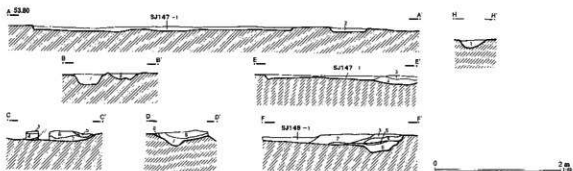
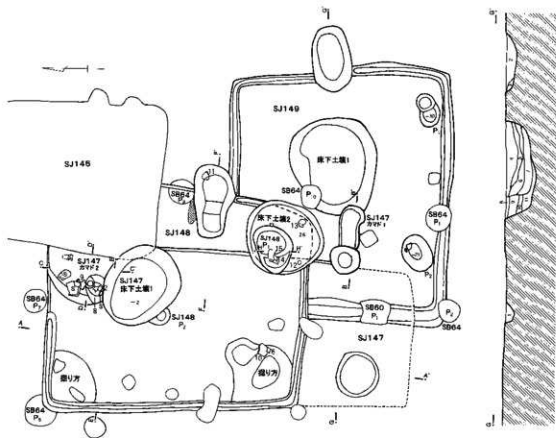
遺物は土師器の環・皿が出土している。時期は8世紀前半である。

第147号住居跡 (第52図)

調査区の北西側、C-22・23グリッドに位置する。2基のカマドと東壁を除いて削平されていた。第145・148・149号住居跡、第60・64号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第145号住居跡より古く、その他のものより新しい。

平面形は、長方形と推定される。規模は推定で長軸5.78m、短軸2.59mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面の状況は不明である。

カマドは北壁と東壁の2箇所に造られていた。いずれも袖は検出していない。築造順序は1→2の順である。カマド1は東壁の南寄りに造られる。燃焼部は径40cm、深さ30cmのピット状に掘り込まれ、煙道が長く壁外に突出している。火床面は床面よりも下位になる。9層は天井部の崩落土、7層は灰層である。カマド2は北壁の東寄りに造られる。掘り込



SJ147

- 1 黒褐色土 ローム状・粘土粒中少
- 2 暗褐色土 焼土粒少量
- 3 黒褐色土 灰土・灰土層中少
- 4 暗褐色土 焼土粒多量、ローム粒・白色粘土粒少量
- 5 褐色土
- 6 暗褐色土 焼土ブロック・白色粘土ブロック多量
- 7 黒色土 焼土・炭化物混入
- 8 褐色土 焼土ブロック多量
- 9 可成暗褐色土 白色粘土混入

SJ148

- 1 黒褐色土 ローム状・粘土粒少量
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (1.2m入) 多量、焼土粒少量
- 3 黒褐色土 焼土粒多量
- 4 白色粘土 焼土粒少量
- 5 赤褐色土 焼土
- 6 黒褐色土 ローム粒少量

SJ148ビット1

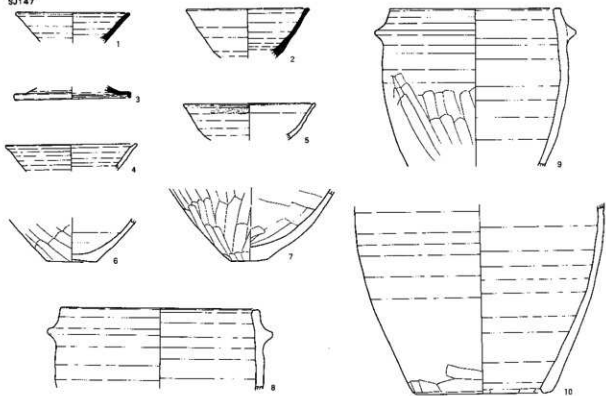
- 1 暗褐色土 焼土粒・ローム粒・白色粘土粒を含む

SJ149

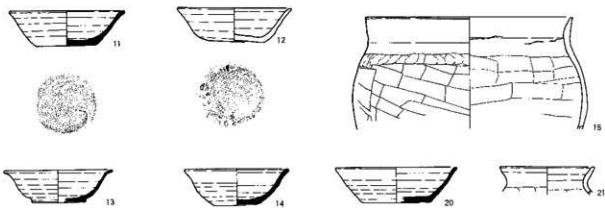
- 1 黒褐色土 ローム粒少量
- #### SJ149カマド
- 2 白色粘土 焼土粒・焼土ブロック (1~3cm入) 多量、黒褐色土少量
 - 3 黒色土 灰多量、焼土粒混入
- #### SJ149床下土庫1
- 4 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (2.3cm入) 多量、しまり強
 - 5 黒褐色土 ローム粒少量、ロームブロック (5cm入)、しまり強
 - 6 黒褐色土 ローム粒多量、白色粘土少量、しまり強
 - 7 黒褐色土 ローム粒・灰白色粒 (多量)、しまり強
 - 8 黒褐色土 ローム粒混雜、しまり強
 - 9 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (1~3cm入) 多量、しまり強
 - 10 黒褐色土 ローム粒混雜、しまり強
 - 11 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (1~5cm入) 多量、しまり強

第52図 第147~149号住居跡

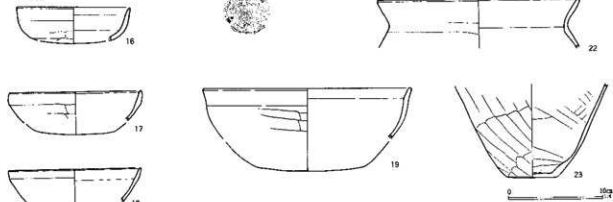
SJ147



SJ148



SJ149



第53图 第147~149号住居跡出土遺物

第14表 第147～149号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	須恵 環	(12.0)	2.6		DEK	1	灰白	20	床下土壌1 B
2	須恵高台椀	(13.0)	3.2		DEI	3	明灰	20	カマド2 B
3	須恵 蓋	(12.2)	1.3		BE	1	青灰	15	本野産 A
4	須恵系高台椀	(13.8)	2.8		ADE	3	赤褐	20	床下土壌1
5	灰 軸 椀	(14.0)	3.9		K	1	明灰	15	漬けかけ 大原2
6	土師 甕		4.7	5.2	DE	2	褐	35	No.1
7	土師 甕		7.8	4.0	FHK	2	褐	40	床下土壌1
8	羽 釜	(21.0)	8.5		BEGJ	2	灰褐	10	カマドNo.1 ロクロ整形 須恵質
9	羽 釜	(18.0)	16.7		BDEJ	1	灰褐	20	カマドNo.3 カマド2周辺・カマド2 ロクロ整形 須恵質
10	瓶		20.0	(14.0)	DEHIJ	1	褐	20	No.1 ロクロ整形、土師質
11	須恵 環	12.0	3.7	6.4	DEH	2	明貴灰	70	カマド内No.1 A
12	須恵系 環	12.0	3.6	6.0	ADE	2	黄灰	75	No.5
13	須恵 環	(11.4)	3.4	(5.2)	IJ	1	灰白	30	No.4 B
14	須恵 環	11.0	3.9	4.5	ABE	1	淡褐	80	P.1 No.7 B
15	土師 甕	(22.0)	11.8		EGJ	2	灰褐	30	No.3
16	土師 環	(12.0)	3.5		ADEH	3	橙褐	10	壁溝内
17	土師 環	(14.0)	3.2		DEH	2	明褐	15	床下
18	土師 環	(14.0)	3.7		DFH	3	褐	10	床下土壌2
19	土師 鉢	(22.0)	5.3		ADEII	2	明褐	10	床下
20	須恵 環	(12.8)	3.7	(7.2)	BEI	2	灰	20	床下 本野産 A
21	土師小型甕	(10.0)	2.9		EGH	1	褐	25	
22	土師 甕	(21.4)	10.2		ADEII	3	赤褐	15	床下土壌2
23	土師 甕		9.8	5.2	DEHJ	3	暗褐	40	床下土壌1

みが不明瞭だがカマド1同様の構造を持つと推定される。ビット状の掘り込みの北側は焼土化していた。火床面（8層）は床面とほぼ同じ高さである。7層は灰層、3・4・6層は天井部の崩落土である。周辺には天井・軸の補強材と考えられる片岩が散在していた。床下土壌1は径1.2m、深さ35cmで、ローム土を多く含む褐色上で埋め戻されていた。また、カマド1の西側にも径70cm、深さ7cmの皿状の掘り込みがあり、本住居跡に伴う可能性が高い。

遺物は土師器の甕、須恵器の環・蓋・高台付椀、須恵系土師質土器の高台付椀、灰釉陶器の椀、羽釜、甌が出土している。2・9はカマド出土である。羽釜はいずれもロクロ整形で須恵質である。灰釉陶器は東濃窯産である。時期は10世紀前半である。

第148号住居跡（第52団）

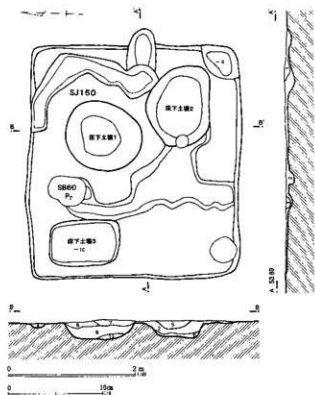
調査区の北西側、C-22・23グリッドに位置する。2基のカマドと東壁を除いて削平されていた。第145・147・149号住居跡、第60・64号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第149号住居跡、第60・64号掘立柱

建物跡より新しく、その他のものより古い。

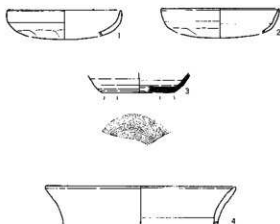
平面形は北壁が長いびつな長方形である。規模は長軸4.11m、短軸3.56m、深さ0.03mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦で、貼り床が施され、硬化していた。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁のほぼ中央に造られていた。燃焼部は壁を掘り込み突出している。土壌状の掘り方（6層）が掘られ埋め戻されていた。火床面（5層）は床面とほぼ同じ高さである。2～4層は天井部の崩落土である。北側の軸の基底部と考えられる部分では、第64号掘立柱建物跡ビット9の南端に白色粘土を貼り付けている様子が観察でき、その立ち上がり部分が焼土化している。ビット1は、第149号住居跡の床下土壌2を切って造られている。貯蔵穴の可能性もある。ビット2は径30cm、深さ27cmで、第147号住居跡の床下土壌1に切られる。

遺物は土師器の甕、須恵器の環、須恵系土師質土器の環が出土している。14・15はビット1・11はカマド出土である。この他に図示していないが、灰釉



- SJ150
- 1 埴輪粘土 黒土・白色粘土・ロームブロック多量
 - 2 埴輪粘土 コーム粒・ロームブロックや中骨、焼土少量
 - 3 埴輪粘土 焼硬なコーム粒少量
 - 4 黒土 ロームブロック多
 - 5 埴輪粘土
 - 6 SJ150床下土庫
 - 7 埴輪粘土 ロームブロック多、褐色土混入
 - 8 埴輪粘土 ロームブロックとの灰土層
 - 9 埴輪粘土 ロームブロックとの灰土層、ロームや中骨少ない
 - 10 埴輪粘土 ロームブロックとの灰土層
 - 11 埴輪粘土 ロームブロックとの灰土層、ローム多量



第54図 第150号住居跡・出土遺物

第15表 第150号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.7		BEH	2	橙褐	15	掘り方
2	土師環	(12.4)	2.6		BDEH	2	明褐	15	床下土庫2 掘り方
3	須恵環		2.1	(7.2)	BEF	1	青灰	25	カマド 掘り方 南比企産 A
4	土師甕	(20.0)	4.0		BCDEH	3	橙褐	10	

陶器の椀の小破片が出土している。時期は10世紀前半である。

第148号住居跡 (第52図)

調査区の北西側、C-22・23グリッドに位置する。第147・148号住居跡、第60・64号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。

平面形は長方形である。規模は長軸4.10m、短軸3.51m、深さ0.04mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦だが、削平されているため覆上の状況は不明である。

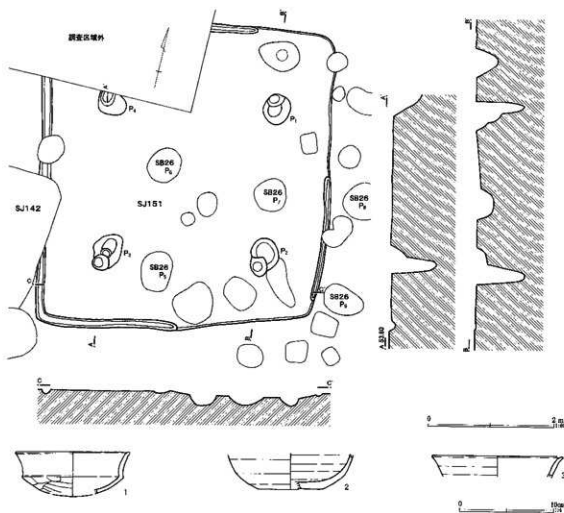
カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は浅い土壇状に壁を掘り込み突出している。火床面(5層)は床面よりやや下位である。3層は灰層、2層は天井部の崩落土である。袖は検出していない。床下土庫1は、径1.3m、深さ50cmで、覆上はローム土

を多く含む層と少ない層の互層になっており、埋め戻しである。7層は白色粘土を多く含む。床下土庫2は長径70cm、短径50cm、深さ40cmである。ピットは2基検出された。ピット1は径30cm、深さ20cmのものが2つつながった形態である。ピット2は、径60cm、深さ27cmである。柱穴と考えられるものは確認されなかった。

遺物は土師器の環・鉢・甕・小型甕、須恵器の環が出土している。土器以外にも用途不明の板状の鉄製品(第270図28)が出土している。時期は9世紀中葉としておきたい。

第150号住居跡 (第54図)

調査区の北側、C・D-22・23グリッドに位置する。床面まで削平されており、掘り方のみが遺存していた。第60号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の



第55図 第151号住居跡・出土遺物

第16表 第151号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	4.4		ADEH	1	赤褐	20	P 4
2	クワ	14.0	3.8	(7.0)	AGH	2	褐灰	10	
3	クワ	14.0	2.2		DF	2	乳白	5	

第17表 第152号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.1)	3.3		ADE	2	橙褐	60	No.1 2片あり接合しない
2	土師環	12.2	4.0		ADE	2	粉褐	80	No.2

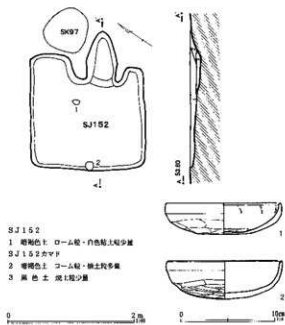
方が古い。

平面形は長方形である。規模は長軸3.60m、短軸3.35m、深さ0.03mである。主軸方向は、N-89°-Eを指す。床面の状況は不明だが、貼り床が施されている。削平されているため、覆土の状況は不明である。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は浅い土塊状に壁を掘り込み突出している。1層は掘り

方で、埋め戻されていた。火床面、灰層、天井部の崩落土は削平されており、不明である。軸は検出していない。床下土塊1は長径1.2m、短径1.0m、深さ26cm、床下土塊2は長径1.2m、短径90cm、深さ24cmで、いずれも覆土はローム上や焼土を多く含み、埋め戻されている。柱穴は確認されなかった。

遺物は土師器の環・甕、須恵器の環が出土している。時期は8世紀後半である。



第56図 第152号住居跡・出土遺物

第151号住居跡 (第55図)

調査区の北側、A・B-23・24グリッドに位置する。遺構の北西側は調査区域外にかかる。床面まで削平されており、壁周溝、掘り方のみが遺存していた。第142号住居跡、第26号掘立柱建物跡と重複し、本住居跡の方が古い。

平面形は方形である。規模は長軸4.68m、短軸4.57mである。主軸方向は、N-76°-Eを指す。削平のため、床面、覆土の状況は不明である。

カマドは調査区域内では検出されず、北側に造られていたと推定される。柱穴は4基検出された。径40~60cm、深さ60~70cmで、柱痕等は不明である。

遺物は土師器の環、ロクロ土師器の腕が出土している。後者は混入と考えられる。時期は7世紀前半である。

第152号住居跡 (第56図)

調査区の北側、A-24グリッドに位置する。

平面形は方形である。規模は長軸1.87m、短軸1.79m、深さ0.13mである。主軸方向は、N-56°-Eを指す。床面は調査時に掘りすぎたため状況を確認できなかったが、硬化面は認められなかったようである。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は浅い土壇状に壁を掘り込み突出している。火床面は床面よりやや下位である。3層は灰層、2層は天井部の崩落土である。軸は白色粘土を貼り付けて造られていた。柱穴と考えられるものは確認されなかった。

遺物は土師器の環が床面から出土した。時期は8世紀中葉である。

第153号住居跡 (第57図)

調査区の北側、B-23・24グリッドに位置する。第155・158・159号住居跡と重複関係にあり、第155・158号住居跡より新しく、第159号住居跡より古い。

平面形は、方形である。規模は長軸3.89m、短軸3.87m、深さ0.21mである。主軸方向は、N-87°-Eを指す。床面は平坦で、貼り床が施されている。覆土は埋め戻しの可能性がある。

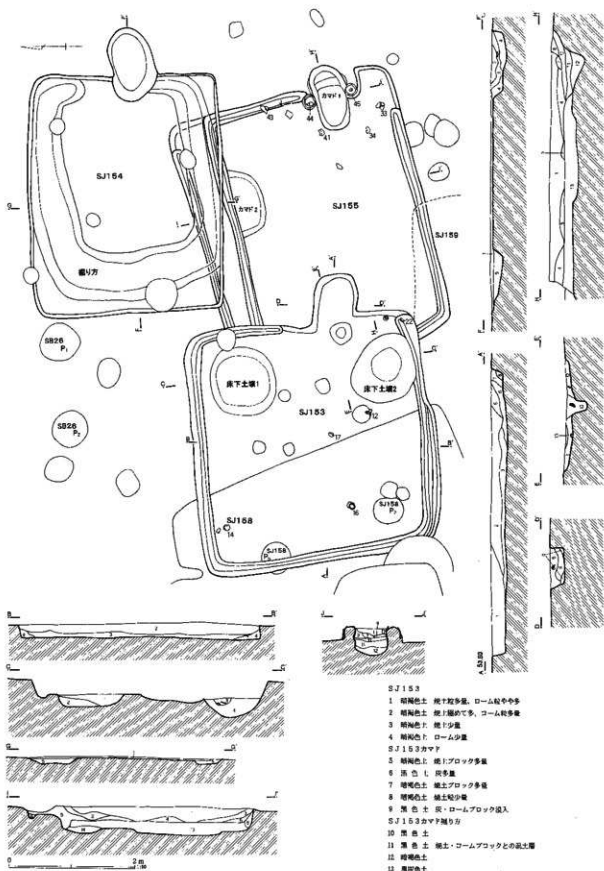
カマドは東壁のほぼ中央に造られていた。燃焼部は壁を掘り込み突出している。浅い皿状の掘り方(7~13層)が掘られ埋め戻されていた。火床面は床面とほぼ同じ高さである。6層は灰層である。5層は天井部の崩落土である。軸は検出していない。床下土壇は2基ある。1は径1.0m、深さ20cm、2は径1.1m、深さ30cmで、いずれも焼土・ローム土を多く含む埋め戻されている。柱穴は確認されなかった。

遺物は土師器の環・皿・甕・小型壺・台付甕、須恵器の環・蓋・高台付碗・壺・コップ形土器、土師、砥石、鉄滓が出土している。15・19・20・23はカマドから、1・8・9・22はカマドの掘り方から、12・16・17は床面からの出土である。時期は9世紀中葉である。

第154号住居跡 (第57図)

調査区の北側、B-24グリッドに位置する。第155号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.79m、短軸3.02m、深さ0.03mでごく浅い。主軸方向は、N-87°-Eを指す。床面は平坦で、貼り床(5層)が施され、硬化していた。覆土は削平のためほとんど残っていないかった。



第57図 第153～155号住居跡

SJ153 灰土層①

- 1 褐色土 焼土・ロームブロック混入
- 2 黄褐色土 ロームブロック少量、焼土、黒土と灰混入

SJ153 灰土層②

- 3 赤褐色土 焼土の塊状層
- 4 黒色土 ロームブロックが互層に堆積

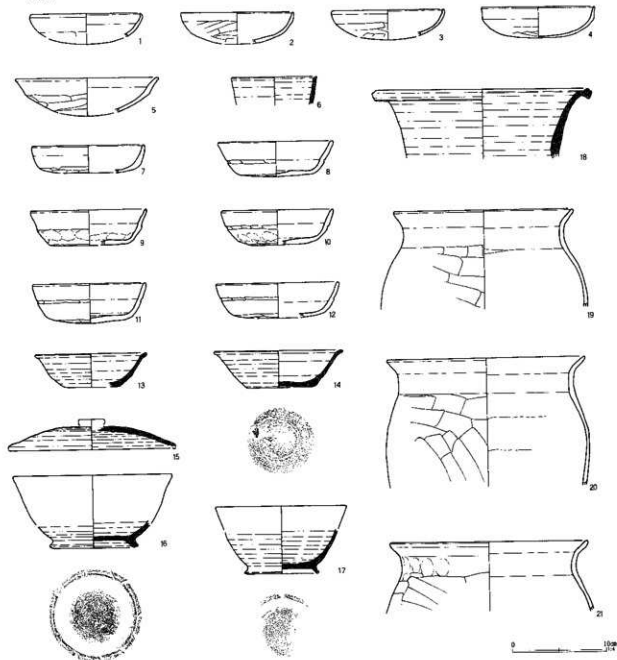
SJ154

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック混入
- 2 暗褐色土 カマヤ
- 3 暗褐色土 白色粘土・焼土ブロック多量
- 4 黒色土 灰多量、焼土粒、焼土ブロック混入
- 5 黒色土 焼土・ローム粒・ロームブロック・灰混入

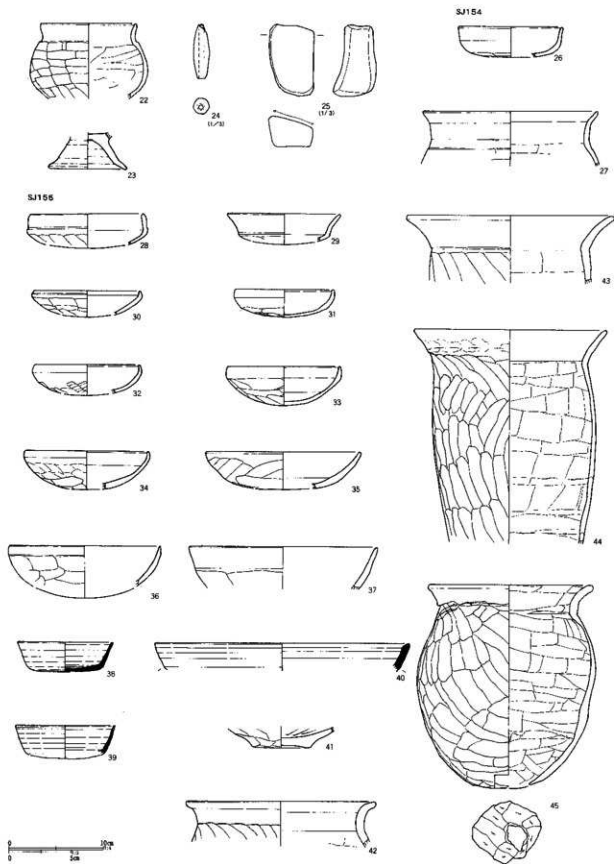
SJ155

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (2~5cm) 多量
- 2 黒褐色土 白色粘土ブロック (2~5cm) 多量
- 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (1,2cm) 焼多量
- 4 黒褐色土 ローム粒少量
- 5 黒褐色土 ローム粒少量
- 6 黒褐色土 コームブロック (1,2cm) 多量
- 7 白色粘土
- 8 赤褐色土 焼土主体
- 9 黄褐色土 焼土粒、白色粘土多量
- 10 黒色土 焼土粒少量、しまりなし
- 11 黄褐色土 ローム粒少量
- 12 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック (2,3cm) 多量
- 13 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック (2~6cm) 多量
- 14 黄褐色土 ローム粒・白色粘土・焼土少量

SJ153



第58図 第153~155号住居跡出土遺物(1)



第59图 第153~155号住居跡出土遺物(2)

第18表 第153～155号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(11.6)	2.5		AII	2	明褐色	5	カマド周辺掘り方
2	土師環	(12.0)	3.3		ADH	3	橙褐色	20	
3	土師環	(11.8)	2.8		ADH	2	明褐色	15	床下土層2 体部、外面に黒斑あり
4	土師環	(12.0)	3.3		ADEH	2	橙褐色	10	
5	土師皿	(15.0)	3.6		DE	2	橙褐色	25	床下 内面風化、調整不明酸 SJ158
6	須恵コップ形	(9.0)	2.8		EF	1	青灰	5	南比企産 A
7	土師環	(12.0)	2.9		ADEH	2	明褐色	20	
8	土師環	(12.0)	3.7	(7.3)	ADG	1	褐色	35	カマド周辺掘り方 口縁下端沈板する
9	土師環	(12.2)	3.7	8.2	AEG	1	橙褐色	40	カマド周辺掘り方 粉っぽい胎土、黒黒斑
10	土師環	(11.7)	3.7	(6.2)	ADG	1	明褐色	45	カマド周辺、掘り方の可能性あり 口縁下端沈板する
11	土師環	(12.0)	4.1	(9.0)	EH	3	橙褐色	25	
12	土師環	(13.0)	3.7		DGH	2	橙褐色	25	No.3
13	須恵環	(11.8)	3.6	(6.0)	BEK	2	明灰	15	未野産 A
14	須恵環	(13.6)	3.9	7.0	ABRI	3	明灰	60	No.6 未野産 A
15	須恵蓋	(17.5)	2.2		BEF	2	青灰	20	カマド 南比企産 A
16	須恵高台椀		2.7	8.4	EIK	2	灰	80	No.5 未野産 A
17	須恵高台椀		4.6	(7.3)	BEI	1	暗灰	25	No.4 未野産 A
18	須恵香	(22.6)	7.4		EF	1	青灰	20	南比企産 A
19	土師甕	(18.8)	10.4		ADEH	3	明褐色	25	カマド
20	土師甕	(21.0)	13.6		ADE	3	茶褐色	20	カマド
21	土師甕	(21.0)	7.4		ADEH	3	明褐色	20	床下土層1 掘り方
22	土師小型甕	(10.0)	8.0		DE	1	明褐色	30	No.2 カマド掘り方
23	土師台付甕		3.9	8.0	DE	2	橙褐色	95	カマド
24	土師鉢	長4.3cm	最大径1.3cm	口径0.4cm			垂重5.47g	ADE	2 暗褐色 残率95%
25	石	長5.6cm	幅3.5cm	厚さ2.4cm			垂重70.74g	石材 No.7	
26	土師環	(11.0)	3.2	(8.5)	DE	2	褐色	10	カマド
27	土師甕	(18.4)	5.8		DEH	2	褐色	20	カマド
28	土師環	(12.0)	3.2		BEH	2	黒褐色	15	内外面黒色処理
29	土師環	(12.0)	2.9		BEH	2	橙褐色	10	
30	土師環	(11.2)	2.5		EHI	2	橙褐色	30	床下カマド跡 SJ153
31	土師環	(10.3)	2.9		DE	2	橙褐色	35	
32	土師環	(11.0)	3.0		DE	1	橙褐色	35	カマド
33	土師環	11.9	4.1		EGHI	2	暗赤褐色	60	No.6
34	土師環	(13.0)	4.0		BEH	2	明褐色	35	No.5
35	土師皿	(18.2)	3.8		BDE	1	明褐色	20	床下
36	土師環	(16.0)	4.3		BEH	2	橙褐色	15	カマド
37	土師鉢	(20.0)	4.0		EI	2	赤褐色	10	
38	須恵環	(10.0)	3.1	(6.2)	ABDE	3	黄灰	45	全周ヘラケズリ A
39	須恵環	(10.4)	3.1		EK	2	灰白	20	未野産 A
40	須恵盤	26.9	(2.9)		BEHK	2	明灰	5	床下 未野産 A
41	土師甕		2.2	6.2	BEH	2	赤褐色	50	No.3
42	土師甕	(20.0)	4.8		BCDEHJ	2	淡褐色	15	
43	土師甕	(22.0)	7.2		BCEHJ	2	橙褐色	20	No.1
44	土師甕	20.4	22.5		BDEH	2	褐色	95	カマドNo.3
45	土師甕	17.0	21.3		DEH	1	橙褐色	95	カマドNo.2 胴部、底部に焼成後穿孔各1ヶ所

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は土壇状に壁を掘り込み突出している。4層は掘り方で、埋め戻されている。火床面は床面より下位である。3層は灰層、2層は大井部の崩落土である。袖は検

出されていない。柱穴は確認されなかった。

遺物は土師器の環と甕がカマドから出土している。時期は9世紀後半である。

第155号住居跡 (第57図)

調査区の北側、B-24グリッドに位置する。第153・154・159号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。

平面形は長方形である。規模は長軸4.26m、短軸3.54m、深さ0.19mである。主軸方向は、N-75°-Eを指す。北側に拡張され、最初の住居跡を埋め戻す形で、貼り床(13層)が施されている。床面は平坦である。覆土は埋め戻しである。

カマドは北壁と東壁の2箇所に造られていた。築造順序は2→1の順である。カマド1は東壁の南寄りに造られる。燃焼部は浅い土壇状に掘り込まれ、壁からやや突出している。11・12層は掘り方である。火床面は床面とはほぼ同じ高さである。10層は灰層、7・8層は天井部の崩落土である。袖は白色粘土を貼り付けて造られていた。44・45の裏は、袖の補強材として埋め込まれていたものである。カマド2は北壁のやや東寄りに造られる。貼床の下になり、燃焼部の痕跡が残るのみである。火床面は床面よりやや下位になる。14層は天井部の崩落土と考えられる。柱穴は検出されなかった。

遺物は土師器の環・皿・鉢・壺・甕、須恵器の環・盤が出土している。32・36はカマド1から、30はカマド2からの出土である。45は胴部と底部に径3cmほどの穿孔が施されている。時期は7世紀末である。

第156号住居跡 (第60図)

調査区の北側、B-23グリッドに位置する。第157・158号住居跡、第177・178号土壇と重複関係にあり、土壇よりも古く、他の住居跡より新しい。

平面形は、長方形で、東側と南側に張り出しがある。壁周溝が2周することから拡張したものと思われる。規模は長軸3.82m、短軸3.05m、深さ0.20mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦で、貼り床が施されている。覆土は埋め戻しの可能性がある。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は壁を掘り込み、長い煙道が突出していた。火床面(5

層)は床面よりやや上がった高さで、壁にかかる位置が径30cmほど焼土化していた。中央に支脚の据付用の小ピットが穿たれていた。4層は灰層、3層は天井部の崩落土である。袖は検出していないが、北側では補強材としていた片岩がそのままの状態を立てっており、逆側にも据付痕が残っていた。床下土壇は3基ある。1は径1.0m、深さ20cm、2は径70cm、深さ20cm、3は径60cm、深さ5cmで、いずれもローム土を多く含む暗褐色土で埋め戻されていた。ピット1は径40cm、深さ10cmである。柱穴は確認されなかった。

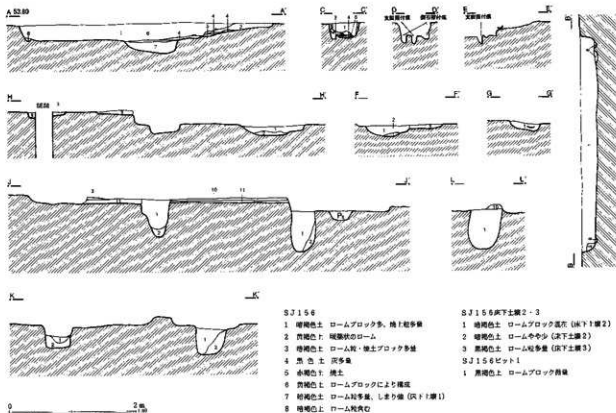
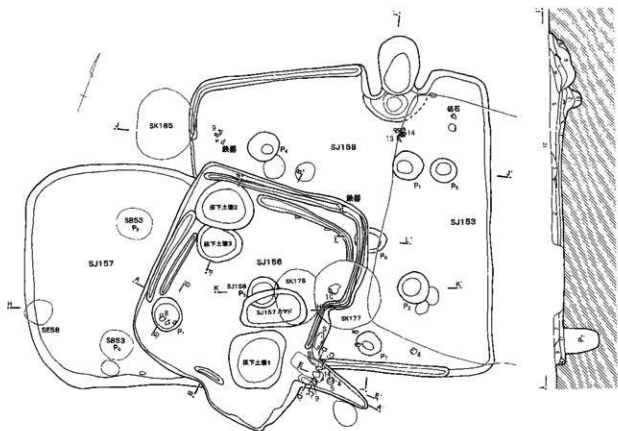
遺物は土師器の環・甕、須恵器の小瓶・コップ形土器・高台付椀、ロクロ土師器の小皿・椀・高台付椀・長頸瓶、羽釜、土錘が出土している。4・5・9・14はカマドから、8はピットからの出土である。4と5の小皿は合わせ口の状態で、燃焼部のやや奥から出土しており、埋納された可能性がある。14の羽釜は小礫を多く含む胎土である。土器以外にも、大型の刀子と用途不明の板状鉄製品が出土している(第269図3・第270図32)。時期は10世紀末から11世紀前半である。

第157号住居跡 (第60図)

調査区の北側、B-23グリッドに位置する。第156・158号住居跡、第53号掘立柱住居跡、第58号井戸跡と重複関係にあり、第156号住居跡、第58号井戸跡より古く、第158号住居跡、第53号掘立柱住居跡より本住居跡の方が新しい。床面まで削平され、堀り方の範囲を遺構と認定した。遺構の東半分は第156号住居跡に壊されている。

平面形は長方形と推定される。規模は長軸方向2.45m、短軸3.49mである。主軸方向は、N-67°-Eを指す。床面の状況は不明だが、貼り床(3層)が施されていた。覆土の状況は不明である。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれていた。2層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(1層)は床面より下位である。灰層等は確認できなかった。袖・柱穴は確



- SJ154
- 1 暗褐色土 ロームブロック多、焼土粒多量
 - 2 黄褐色土 瓦礫状のローム
 - 3 暗褐色土 ローム質・焼土ブロック多量
 - 4 黒色土 灰多量
 - 5 赤褐色土 焼土
 - 6 黄褐色土 ロームブロックにより構成
 - 7 暗褐色土 ローム粒多量、しまり強 (灰下土層1)
 - 8 暗褐色土 ローム粒欠乏

- SJ156灰下土層2-3
- 1 黄褐色土 ロームブロック盛付 (灰下土層2)
 - 2 暗褐色土 ロームや砂少 (灰下土層2)
 - 3 黄褐色土 ローム粒多量 (灰下土層3)
- SJ156ピット1
- 1 黄褐色土 ロームブロック多量

第60図 第156～158号住居跡

SJ157

- 1 黄褐色土 コーム殻・焼土殻・ブロック (2.3cm大) 多数, 炭化穀少量
- 2 黄褐色土 コーム殻・ブロック (2~4cm大) 多数
- 3 黄褐色土 ローム殻少量

SJ158

- 1 黄褐色土 ローム壳体, 黄褐色土混入
- 2 黄褐色土 焼土殻・ローム殻少量
- 3 黒色土 ローム殻少量
- 4 黒色土 ローム殻少量
- 5 黄褐色土 白色粘土ブロック・炭粒少量

SJ158カマド

- 6 白色粘土 焼土ブロック少量

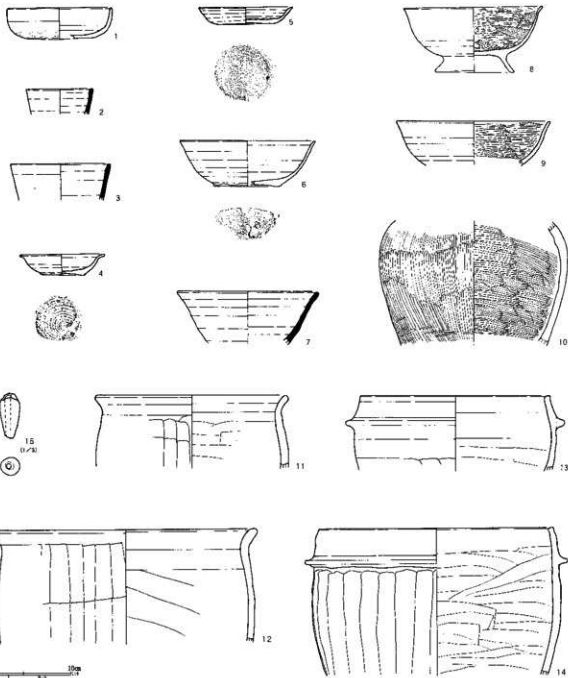
7 黒色土 灰土体, 焼土殻少量

- 8 黄褐色土 焼土ブロック少量, コームブロック少量
- 9 黄褐色土 焼褐色土混入
- 10 黄褐色土 炭化屑
- 11 黄褐色土 焼土・ロームアフラク混入
- 12 黄褐色土 白色粘土ブロック・焼土ブロック混入
- 13 黒色土 焼土殻少量

SJ158ピット1~6

- 1 黄褐色土 ローム殻・ロームブロック (1~4cm大) 多数
- 2 黄褐色土 ローム殻・ロームブロック (2.1cm大) 多数, 炭化植物遺土少量
- 3 SJ158ピット6
- 4 黒色土 ローム殻少量

SJ158



第61図 第156号住居跡出土遺物

第19表 第156号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	粘土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(11.0)	3.3	(6.8)	BDE	2	明褐	25	床下土塊 1
2	須恵コップ形	(7.0)	2.7		EF	1	明青灰	5	南北余灰 A
3	須恵平瓶	(10.4)	3.9		EK	1	明青灰	10	床下土塊 1 秋岡産 A
4	ロクロ小皿	9.0	2.2	4.7	BHJ	2	褐	95	Na 6
5	ロクロ小皿	9.8	1.8	5.9	AFD	2	炭灰	100	Na 7
6	ロクロ椀	(14.2)	4.8	(7.2)	DIJ	2	暗褐	35	
7	須恵高台椀	(14.8)	5.6		ABIJ	2	灰褐色	20	カマド B
8	ロクロ高台椀	14.5	7.0	8.1	ADE	1	明褐	60	P 1 Na13 内面黒色処理+ミガキ
9	ロクロ椀	(16.2)	4.7		EHJ	2	茶褐	20	カマドNa5 内面黒色処理+ミガキ
10	ロクロ長頸瓶		13.1		DEJ	1	灰褐色	40	Na 1 内面黒色処理 内面ミガキ
11	土師甕	(20.0)	7.8		ABDEH	1	橙褐	10	床下土塊 2
12	土師甕	(27.8)	12.0		ADIJ	2	橙褐色	10	カマド
13	羽釜	(20.0)	8.0		BDHJ	2	橙褐色	20	カマド 土師甕
14	羽釜	(25.0)	15.6		BHJ	2	赤褐	25	カマドNa3 土師甕
15	土師	径3.5cm	最大径1.5cm	孔径0.35cm					ADE 2 赤褐 残率55%

認めなかった。

遺物は、土師器の環と須恵器の環がいずれも掘り方から出土した。時期は9世紀前半である。

第158号住居跡 (第60図)

調査区の北側、B-23・24グリッドに位置する。第153・156・157号住居跡、第177・178・185号土塊と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。床面は2枚確認され、北側に拡張されている。

平面形は方形である。規模は長軸4.78m、短軸4.59m、深さ0.2mである。主軸方向は、N-21°-Wを指す。床面は全体に硬化し、貼り床(10層)が施されていた。覆土は自然堆積である。

カマドは北壁の東寄りに造られ、2回とも同じ場所に造られている。燃焼部は土塊状に掘り込まれ、突出している。カマド1は古いものでカマド2の手前にピット状の掘り方(12・13層)が造られ、埋め戻されていた。カマド2は新しいものである。8・9層は掘り方で、埋め戻されていた。火床面(8層)は床面より下位である。7層は灰層、6層は天井部の崩落土である。軸は両側で確認され、白色粘土を貼り付けて造られていた。柱穴は7基確認された。径40~50cm、深さ50~60cmで、柱痕は確認されなかった。

遺物は、土師器の環・皿・甕・鉢・ミニチュアと須恵器の蓋・壺が出土した。ミニチュアの鉢はカマ

ド出土で、遺棄された可能性がある。土器以外にも鎌(第269図13)が出土している。時期は8世紀前半である。

第159号住居跡 (第63図)

調査区の北側、B-23・24グリッドに位置する。第153・155・158・160号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。床面まで削平され、掘り方の範囲を遺構と認定した。遺構の北半分は不明瞭であった。

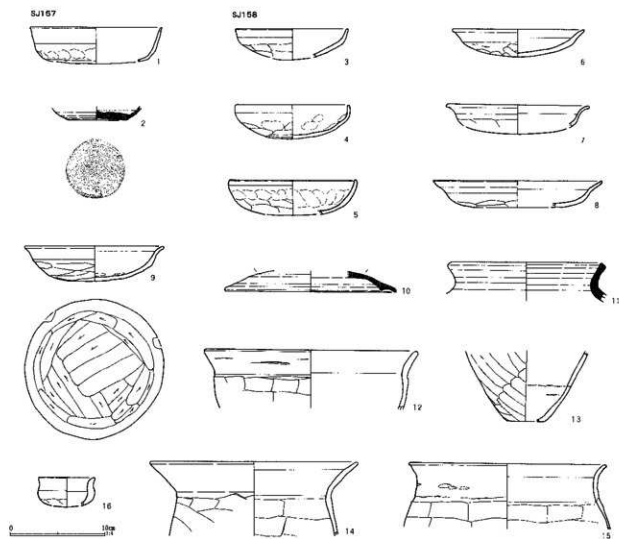
平面形は方形と推定される。規模は長軸3.66m、短軸3.33mである。主軸方向は、N-88°-Wを指す。床面の状況は不明だが、貼り床(1層)が施されていた。覆土の状況は不明である。

カマドは不明である。北壁・西壁のいずれかに造られていたと考えられる。床下土塊と考えられるものは不整形で、東西2.5m、南北1.5m、深さ20cmで、埋め戻されていた。柱穴は長径80cm、短径40cm、深さ60cmで埋め戻されていた。

遺物は、土師器の環が出土しているが、本住居跡に伴うものではないと考えられる。時期は10~11世紀と考えられる。

第160号住居跡 (第63図)

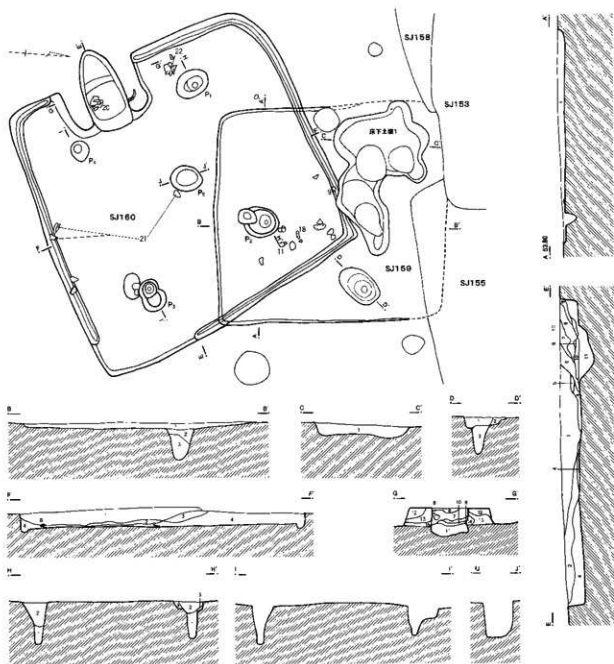
調査区の北側、B・C-24グリッドに位置する。第159号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が古い。平面形は歪んだ方形である。規模は長軸4.49m、



第62図 第157・158号住居跡出土遺物

第20表 第157・158号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎七	焼成	色調	残率	備考	
1	土師環	(14.0)	3.6	6.2	BDEH	2	橙褐	15	掘り方	
2	須恵環		1.4		BEI	2	明灰	80	掘り方 水野産 A	
3	土師環	(12.0)	3.0		BDEII	2	橙褐	15	貼床内	
4	土師環	12.0	3.6		DE	2	橙褐	80	Na 1 貼床内 底部外面凹形黒斑あり	
5	土師環	(13.4)	3.8		ABEH	2	淡褐	25		
6	土師皿	(14.0)	2.9		BDEH	2	淡褐	25		
7	土師皿	(15.0)	2.3		BEII	2	淡褐	15	掘り方	
8	土師皿	(17.8)	2.8		ABEH	2	淡褐	15		
9	土師皿	14.6	3.7		ADE	2	明褐	95	Na 5 貼床内	
10	須恵蓋	(18.2)	2.2		BDEIK	3	明灰	10	貼床内 群鳥産 A	
11	須恵蓋	(16.0)	4.2		BEI	2	暗青灰	10	掘り方 水野産 A	
12	土師鉢	(22.2)	6.2		BDEH	2	黒褐	20	貼床内	
13	土師鉢		7.5		(4.2)	BEH	2	褐	30	貼床内 Na 3
14	土師甕	(21.8)	7.9		BDEH	2	褐	20	P 1 No 3	
15	土師甕	(20.8)	6.9		BDEHJ	2	赤褐	20	P 5	
16	土師ニシキアヲ	(6.0)	3.0		BEH	2	淡褐	15	カマド	



SJ159

- 1 暗褐色土 ローム殻・焼土粒少量、ロームブロック部分に含む
- 2 黒色土 ローム殻少量
- 3 黒色土 ロームブロックとの境層

SJ160

- 1 黄褐色土 コーム殻・ロームブロック (0.3cm入)、焼土粒少量、白色粘土粒混入
- 2 黄褐色土 ローム殻・ロームブロック主体
- 3 黄褐色土 ローム殻・ロームブロック主体、少量に比べて暗褐色土多量
- 4 黄褐色土 ローム殻少量

SJ160カマド

- 1 白色粘土
- 2 黄褐色土 焼土粒やや多、白色粘土ブロックを含む
- 3 黄褐色土

- 6 赤褐色土 白色粘土ブロック混入

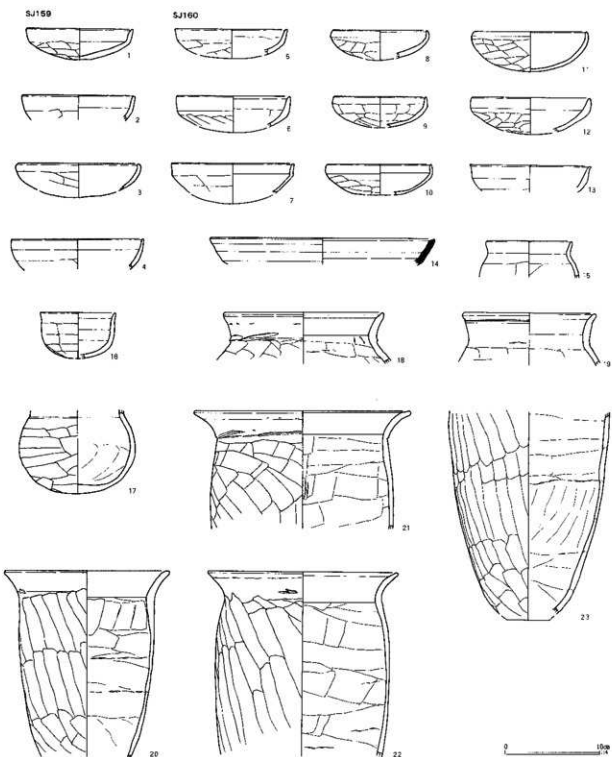
- 9 暗褐色土 焼土ブロック多量
- 10 黒色土 灰主体
- 11 暗褐色土 ロームブロック混入
- 12 暗褐色土 ローム殻・焼土層、白色粘土少量
- 13 白色砂土 焼土殻少量
- 14 赤褐色土 焼土層
- 15 黄褐色土 ローム殻・焼土粒少量

SJ160ピット1・2

- 1 黒色土
- 2 黒色土 ローム殻・ロームブロック含む
- 3 黒色土 ロームブロックとの境層

0 3m

第63図 第159・160号住居跡



第64図 第159・160号住居跡出土遺物

短軸4.44m、深さ0.17mである。主軸方向は、N-27°-Wを指す。床面は平坦である。覆土は1層が自然堆積、2～4層が埋め戻しである。

カマドは西壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁からやや突出している。11

層は掘り方である。火床面は床面とほぼ同じ高さである。10層は灰層、5～9層は天井部の崩落土である。袖は白色粘土を貼り付けて造られていた。21・22の釜は、袖の補強材として埋め込まれていたものである。柱穴は5基確認された。径30～50cm、深さ

第21表 第159・160号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(11.2)	3.3		AEH	2	橙褐	30	
2	土師環	(12.0)	2.6		DEH	3	橙褐	10	
3	土師環	(12.8)	2.9		ADE	2	褐	20	
4	土師環	(14.0)	3.2		AEG	2	褐	10	
5	土師環	(11.8)	2.7		DEH	1	橙褐	20	
6	土師環	(12.0)	3.2		DEH	1	明褐	20	
7	土師環	(13.0)	3.2		FH	3	橙褐	20	床下
8	土師環	(10.0)	3.0		BDEH	2	淡褐	20	
9	土師環	(9.8)	3.2		ADEH	1	橙褐	25	Na10
10	土師環	(11.0)	3.2		BDEH	2	橙褐	25	
11	土師環	(12.0)	4.2		BDEH	2	橙褐	50	Na16
12	土師環	(12.4)	3.6		ADEH	3	橙褐	40	
13	土師環	(12.8)	2.8		ADE	2	明赤褐	10	
14	須恵盤	(23.8)	2.7		BEIK	2	明灰	5	木野産 A
15	土師小型壺	(9.0)	3.9		ADE	2	橙褐	10	
16	土師小型壺	(8.0)	4.8		BDE	2	褐	25	
17	土師小型壺		8.8		BCDEH	2	褐	40	底部に黒斑
18	土師壺	(16.7)	5.4		BCEHJ	2	明褐	20	Na12
19	土師小型壺	(14.0)	5.5		ADEH	2	褐	35	P 3
20	土師壺	17.4	19.6		ABEIJ	2	褐	70	カマドNa 8
21	土師壺	23.0	12.5		BCEHJ	2	明褐	50	Na 4・5カマド袖内
22	土師壺	20.0	19.5		ABDEH	2	褐	60	Na 1・2カマド袖内
23	土師壺		21.2		BDEH	2	明赤褐	40	カマド

40～60cmで、埋め戻されていた。

遺物は土師器の環・小型壺・小型甕・甕、須恵器の甕が出土している。20はカマドの燃焼部からの出土である。時期は7世紀後半である。

第161号住居跡 (第65団)

調査区の北側、C-23・24グリッドに位置する。第164号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。床面まで削平され、壁周溝の範囲を遺構と認定した。

平面形は方形である。規模は長軸3.63m、短軸3.34mである。主軸方向は、N-68°-Eを指す。床面と覆土の状況は不明だが、貼り床(3層)が施されている。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁から突出している。6層は掘り方である。火床面は床面よりやや下位である。5層は灰層、天井部の崩落土は不明である。床下土壇1は径90cm、深さ20cmで、下層は白色粘土の層であった。

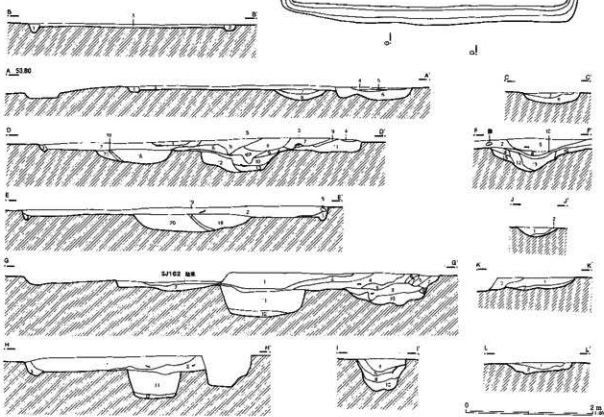
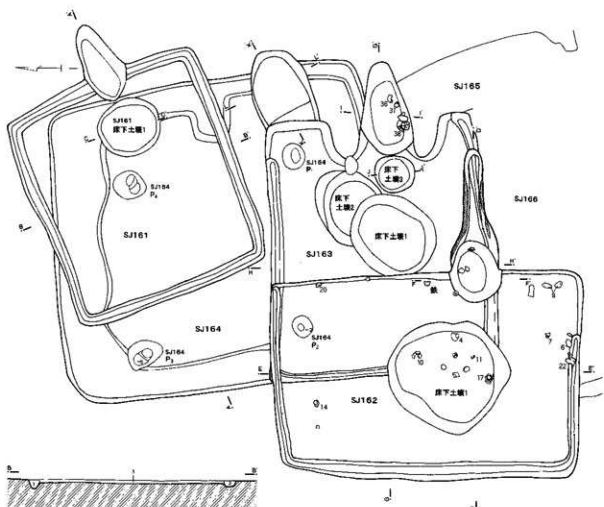
遺物はなく、遺構の重複関係から8・9世紀頃のものと考えられる。

第162号住居跡 (第65団)

調査区の北側、C・D-23グリッドに位置する。第163～166号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。

平面形は、長方形である。規模は長軸4.88m、短軸3.25m、深さ0.07mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は中央がやや高く、周辺がやや低くなっている。全体に貼り床が施される。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は壁を掘り込み、長い煙道が突出していた。土壇状の掘り方(12・13層)は埋め戻されている。火床面(10・11層下)は床面よりやや下がっている。煙道は長く両壁が焼土化していた。10・11層が灰層、5～9層は天井部の崩落土である。袖は検出していない。床下土壇は長径2.0m、短径1.7m、深さ30cmで、埋め戻したが、伏まれる19層は白色粘土であった。柱穴



第65图 第161~164号住居跡

SJ161:

- 1 灰褐色土 埋没あり、ローム状、白色粒少量
- 2 灰褐色土 ローム粒、白色粒、焼土粒少量
- 3 褐色土 ロームブロック混入

SJ161カマド

- 4 灰褐色土 焼土粒少量、しまり面
- 5 灰褐色土 焼土粒、白色粒、灰少量、しまり面
- 6 灰褐色土 焼土粒、しまり面

SJ161床下土層

- 7 埋没灰土 ローム質・焼土粒混入
- 8 白色粒土

SJ162

- 1 埋没灰土 灰・焼土粒混入
- 2 埋没灰土 焼土粒ややや多、褐色粒・ローム粒少量
- 3 埋没灰土 ローム粒少量
- 4 埋没灰土 白色粒土ブロック少量混入

SJ162カマド

- 5 埋没灰土 白色粒土ブロック、焼土粒やや多
- 6 白色粒土 白色粒土塊、焼土粒、埋没灰土混入
- 7 埋没灰土 焼土粒少量
- 8 埋没灰土 焼土粒、白色粒土少量
- 9 赤褐色土 焼土粒、埋没灰土・白色粒土少量
- 10 赤褐色土 焼土粒混入
- 11 赤褐色土 焼土ブロックやや多
- 12 埋没灰土 ロームブロックやや多、焼土少量
- 13 埋没灰土 焼土ブロック多量、灰・褐色粒混入
- 14 埋没灰土 焼土粒少量、やや粘質
- 15 黒色土 焼土粒少量

- 16 褐色土 ロームブロック・ローム粒少量、焼土混入
- 17 埋没灰土 灰化物粒混入による

SJ162床下土層

- 18 埋没灰土 ロームブロックとの混入層
- 19 白色粒土
- 20 埋没灰土 ロームブロックとの混入層

SJ163

- 1 埋没灰土 焼土混入が多
- 2 埋没灰土 焼土多量、灰化物・白色粒土ブロック少量
- 3 埋没灰土 焼土粒少量

SJ163カマド

- 4 褐色土 焼土粒やや多、灰化物粒・白色粒土・ロームブロック少量
- 5 白色粒土 焼土ブロック混入
- 6 赤褐色粒土 焼土層
- 7 埋没灰土 灰・焼土粒混入
- 8 黒色土 焼土粒・灰化物混入
- 9 埋没灰土 ローム粒少量
- 10 褐色土 ローム質・白色粒土ブロック・焼土粒混入

SJ163床下土層

- 11 埋没灰土 ロームブロックとの混入層、焼土粒混入
- 12 埋没灰土 ローム混入

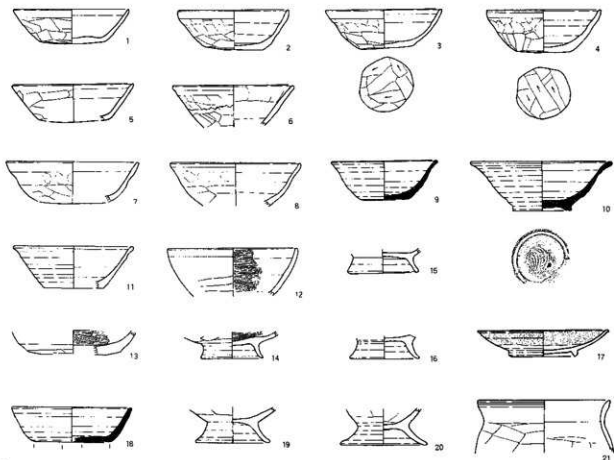
SJ163床下土層

- 1 埋没灰土 焼土粒、ロームブロック混入
- 2 白色粒土

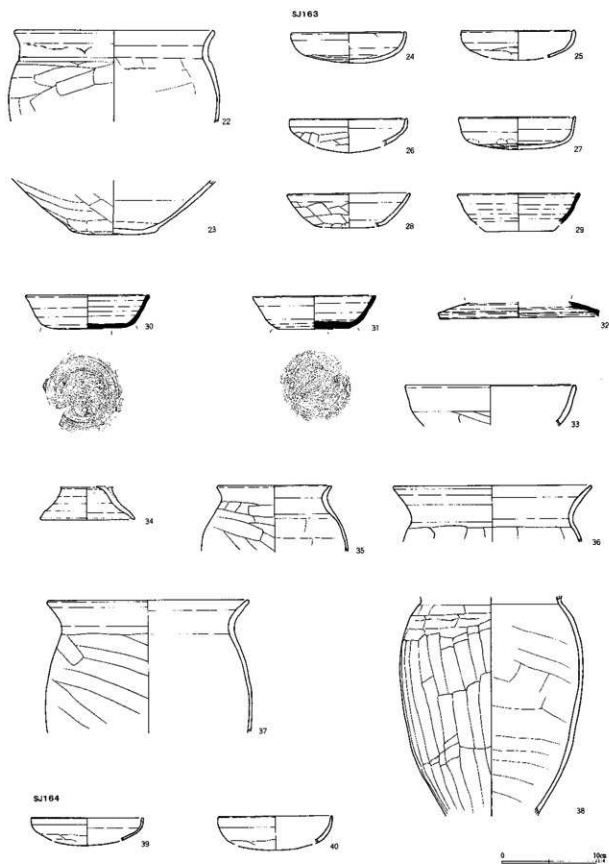
SJ164カマド

- 1 白色粒土 焼土ブロック多量混入
- 2 埋没灰土 焼土粒やや多、ロームブロック混入
- 3 埋没灰土 焼土粒、ローム粒少量

SJ162



第66図 第162~164号住居跡出土遺物(1)



第67图 第162~164号住居跡出土遺物(2)

第22表 第162～164号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	12.2	3.6		ADE	2	橙褐	55	カマド
2	土師環	11.8	4.2	6.2	EG	2	褐	60	SJ163
3	土師環	12.2	4.2	5.6	DEH	2	橙褐	70	No.8 カマド
4	土師環	(12.0)	4.5	5.7	BDE	1	褐	60	No.17
5	土師環	(12.8)	3.8	(7.4)	DEJ	2	褐	20	床下土壌1
6	土師環	12.8	4.5		ADE	1	橙褐	70	No.12
7	土師環	(14.0)	4.2		DEH	2	褐	10	No.10
8	土師環	(13.6)	4.5		BDE	2	明褐	20	
9	須恵環	(11.0)	4.0	5.2	AEIIIJ	3	黄灰	50	SJ163 B
10	須恵高台碗	(15.0)	5.4	6.2	BEJK	1	灰白	45	No.22 A
11	ロクロ環	(12.6)	4.4	(6.2)	ABDEII	2	橙	30	No.18 内面黒色処理
12	土師鉢	(13.6)	5.1		DEH	2	褐	10	床下 内面黒色処理トミガキ
13	ロクロ鉢		2.6	(10.0)	DEH	2	褐	25	床下 内面黒色処理トミガキ
14	ロクロ高台碗		2.8	(6.4)	ADE	2	黄灰	70	No.2 内面黒色処理トミガキ
15	ロクロ高台碗		2.5	7.1	ADE	1	茶褐	95	No.23
16	ロクロ高台碗		2.5	7.1	DEII	1	赤褐	100	No.7
17	灰釉高台皿	(13.8)	2.8	6.6	BK	1	灰白	60	No.15 東遺産
18	須恵環	(12.6)	3.6	(8.0)	BEI	2	明灰	25	未野産 A
19	土師台付甕		3.8	(7.8)	ABE	2	赤褐	40	
20	土師台付甕		3.9	9.0	ADE	1	赤褐	55	No.3
21	土師小型甕	(14.0)	5.6		ADE	2	暗赤褐	10	No.9
22	土師甕	(21.0)	9.7		DE	1	橙褐	20	No.14 SJ145
23	土師壺		5.8	(9.0)	DEG	2	褐	25	
24	土師環	12.0	3.3		DE	2	褐	55	
25	土師環	(12.0)	2.8		ADE	2	暗褐	10	
26	土師環	(12.5)	2.9		ADE	2	褐	20	SJ162
27	土師環	12.2	3.4		DEJ	2	橙褐	75	
28	土師環	(13.0)	3.5		ABDE	2	褐	25	
29	須恵環	(12.9)	3.3		BFFK	1	明青灰	15	床下土壌2 カマド左植内 雨比命産 A
30	須恵環	(13.0)	3.6	7.7	BEJK	2	灰	60	カマド 未野産か? A
31	須恵環	13.0	3.5	7.4	BDEJ	2	灰褐	100	No.2 A
32	須恵壺	(16.9)	1.6		BEJK	2	青灰	10	未野産 A
33	土師環	(18.0)	4.3		ADE	2	褐	15	カマド
34	土師台付甕		3.5	(10.0)	ADE	1	暗褐	30	
35	土師台付甕	(12.0)	7.0		ADE	2	暗褐	20	カマド
36	土師甕	(21.0)	5.9		DEII	1	茶褐	30	カマドNo.1
37	土師甕	(21.2)	14.1		DEH	3	褐	20	カマド
38	土師甕		23.3		ADE	2	褐	55	カマドNo.4 カマド右植内
39	土師環	(11.8)	2.4		BEH	2	橙褐	5	P.4
40	土師環	(12.0)	3.0		BDEH	3	橙褐	10	掘り方

と考えられるものは確認されなかった。

遺物は多く、土師器の環・鉢・甕・台付甕・小型甕・壺、須恵器の環・高台付碗、ロクロ土師器の環・高台付碗・鉢、灰釉陶器の高台付皿が出土している。1・3はカマドから、4・6・7・11・17・22はカマドの前の床面からまともに出てきた。3・15は底面に砂が付着している。18は混入と考えられる。土器以外にも、鉄滓が出土している。時期は10世紀

前半である。

第163号住居跡 (第65図)

調査区の北側、C・D-23・24グリッドに位置する。第162-164～166号住居跡と重複関係にあり、第162号住居跡より古く、それ以外より新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸4.08m、短軸3.58m、深さ0.13mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は床下土壌1の上面が凹んでおり、貼り

床が施されている。覆土は埋め戻しである。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は上墳状に掘り込まれ、壁から突出している。10層は掘り方である。火床面は床面より下位である。8層は灰層、4～7層は天井部の崩落土である。袖は白色粘土を貼り付けて造られている。床下土墳1は長径1.4m、短径1.1m、深さ40cm、床下土墳2は径1.0mほどで、埋め戻されていた。床下土墳3は径60cm、深さ15cmで、上面には白色粘土が貼り付けられている。下層も白色粘土の層である。

遺物は多く、土師器の坏・甕・台付甕、須恵器の坏、須恵系土師質土器の坏・蓋が出土している。30・31・33・35～38はカマドから出土した。土器以外にも、鉄鏝が2点、床下土墳1・2の上面から出土している。時期は8世紀後半である。

第164号住居跡（第65図）

調査区の北側、C・D-23・24グリッドに位置する。第161～163・165・166号住居跡と重複関係にあり、第161～163号住居跡より古く、第165・166号住居跡との関係は不明である。床面まで削平されており、掘り方のみを調査した。

平面形は方形である。規模は長軸4.88m、短軸4.72mである。主軸方向は、N-83°Eを指す。覆土は不明だが、全体に貼り床が施されていた。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は浅い皿状に掘り込まれ、壁からやや突出している。火床面（2層）は床面とほぼ同じ高さである。1層は天井部の崩落土である。袖は検出していない。柱穴は4基検出された。径40～60cm、深さ40～60cmで、柱痕等は確認されなかった。

遺物は土師器の坏の小破片が出土したのみである。時期は確実ではないが8世紀と考えられる。

第165号住居跡（第68図）

調査区の北側、D-23・24グリッドに位置する。第162～164・166・167号住居跡と重複関係にあり、第162・163・167号住居跡より古く、それ以外より新しい。本住居跡は第166号住居跡を埋め戻して、拡張

したものと考えられる。

平面形は方形である。規模は長軸5.73m、短軸5.44m、深さ0.05mである。主軸方向は、N-70°Eを指す。床面は平坦で、全面に貼り床（7層）が施されている。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁のやや南寄りに造られ、第166号住居跡のカマドと重複していた。燃焼部は上墳状に掘り込まれ、壁から突出している。火床面は床面とほぼ同じ高さである。3層は灰層、1・2層は天井部の崩落土である。袖は両側で確認され、白色粘土を貼り付けて造られている。8・9の甕は袖の補強材として埋め込まれていたものである。柱穴は4基確認された。径30～40cm、深さ60～90cmで、5層は柱痕である。

遺物は、土師器の坏・皿・甕・甔が出土している。7・10・11はカマドから出土した。時期は8世紀前半である。

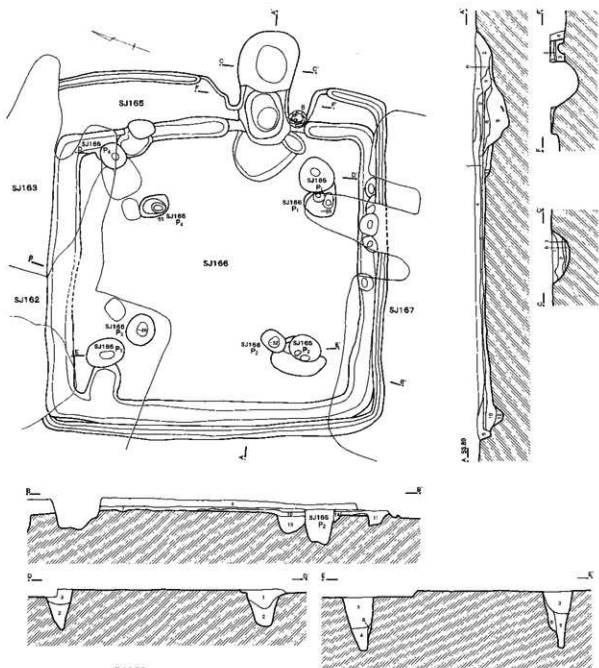
第166号住居跡（第68図）

調査区の北側、D-23・24グリッドに位置する。第162～164・165・167号住居跡と重複関係にあり、第162・163・167号住居跡より古く、それ以外より新しい。第165号住居跡は本住居跡を拡張したものである。

平面形は方形である。規模は長軸5.32m、短軸4.84m、深さ0.07mである。主軸方向は、N-70°Eを指す。床面は平坦で、全面に貼り床（10層）が施されている。

カマドは第165号住居跡のカマドと重複していた。燃焼部は深く上墳状に掘り込まれ、壁から突出している。火床面は床面とほぼ同じ高さである。8・9層は掘り方である。灰層、天井部等は不明である。袖は確認できなかった。柱穴は4基確認された。径30～60cm、深さ30～60cmで、柱痕等は確認されなかった。

遺物は、土師器の坏・皿・甕が出土している。16はカマドから出土した。土器以外に壁周溝から刀子（第269図4）が折れ曲がった状態で出土している。



SJ105

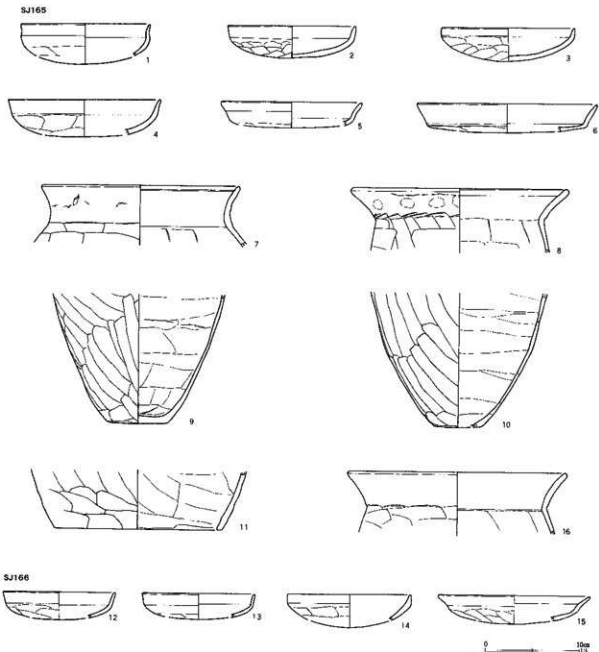
- 1 白色粘土 焼土ブロック多量
 - 2 褐色土 白色粘土ブロック・焼土ブロック混入
 - 3 赤色土 灰多量、焼土粒・石灰骨粉少量
 - 4 暗褐色土 焼土粒・ロームブロック少量
 - 5 暗褐色土 ローム粒やや多
- SJ106
- 6 暗褐色土 ロームブロック主体、白色粘土・焼土混入
 - 7 暗褐色土 ロームブロック骨粒
 - 8 褐色土 白色粘土・焼土ブロック混入
 - 9 白色粘土 焼土ブロックとの混土層
 - 10 暗褐色土 コームブロック骨粒
 - 11 暗褐色土
 - 12 暗褐色土 ローム粒やや多
 - 13 暗褐色土 コーム粒含む
 - 14 暗褐色土 ロームブロック多

SJ105セット1~4

- 1 白色粘土 焼土粒・焼土ブロック混入
 - 2 暗褐色土 ロームブロック混入
 - 3 暗褐色土 ローム・焼土混入
 - 4 暗褐色土 ロームブロックやや多
- SJ105カマド跡
- 1 白色粘土 焼土ブロック骨粒
 - 2 黒灰色土 灰層
 - 3 暗褐色土 白色粘土・焼土ブロック混入
 - 4 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量

0 2m

第68図 第165・166号住居跡



第69図 第165・166号住居跡出土遺物

時期は8世紀前半である。

第167号住居跡 (第70図)

調査区の北側、D・E-23・24グリッドに位置する。第165・166号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。

平面形は方形である。規模は、長軸5.60m、短軸5.17m、深さは0.06mでごく浅い。拡張されており、拡張前の規模は長軸4.48m、短軸4.40mである。主軸方向は、N-5°-Wを指す。床面は平坦で、貼り

床が施されていた。覆土の状況は不明である。

カマドは北壁と東壁の2箇所に造られている。築造順序は2→1の順である。いずれも土壇状の燃焼部が掘り込まれ、突出する。カマド1は北壁のやや東寄りに造られる。土壇状の掘り方(5・6層)は深く、埋め戻されていた。火床面は床面より下位である。3・4層は灰層。2層は天井部の崩落土である。袖は白色粘土を貼り付けて造られていた。カマド2は当初の住居跡の東壁のほぼ中央に造られる。

第23表 第165・166号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(13.6)	3.4		BDEII	2	褐	20	壁溝
2	土師環	13.6	3.4		BDEH	2	褐	80	
3	土師環	(14.0)	3.5		BDEII	2	橙褐	20	カマド右袖
4	土師環	(16.0)	3.7		BDEH	2	褐	10	
5	土師環	(15.0)	2.5		BDEH	2	橙褐	15	
6	土師皿	(19.0)	2.9		DEH	2	橙褐	30	
7	土師甕	(21.0)	6.3		BDEH	2	橙褐	15	カマド
8	土師甕	22.4	6.7		ADEII	1	明褐	75	カマド右袖No1
9	土師甕		13.7	6.5	ABCEH	2	明赤褐	25	カマド 右袖
10	土師甕		14.2	(5.0)	ABEII	3	橙褐	15	カマド
11	土師甕		6.2	(18.0)	BDEH	2	橙褐	15	カマド
12	土師環	(12.0)	2.7		BDEHJ	2	褐	20	P1
13	土師環	(12.0)	2.4		ADE	2	茶褐	10	
14	土師環	(13.0)	2.7		DEH	2	淡褐	5	
15	土師皿	(16.0)	2.6		BDEII	2	淡褐	15	
16	土師甕	(23.0)	6.4		ABDEH	2	橙褐	30	カマド

9層は掘り方で、埋め戻されている。火床面・灰層は不明で、上面に貼り床が施されていた。貯蔵穴・柱穴は拡張後の住居跡に対応するものである。貯蔵穴はカマドの右側にあり、径60cm、深さ15cmで、土師器の環と壺が上面から出土している。柱穴は5基確認され、各々径30cmほどの複数の小ピットが認められることから拡張のみならず、複数回数の建て替えがあった可能性もある。径60～100cm、深さ30～60cmで、柱の抜き取り痕が認められる。

遺物は土師器の環・皿・壺・甕が出土している。11～13はカマド1から、8・15は貯蔵穴から、4はカマド2からの出土である。時期は8世紀中葉である。

第168号住居跡 (第72区)

調査区の北側、E-23・24グリッドに位置する。第49号掘立柱建物跡、第257号土壌と重複関係にあるが、新旧は不明である。南側に第167号住居跡があり、本住居跡の方が新しい。床面まで削平されている。

平面形は歪んだ長方形である。規模は長軸3.33m、短軸3.20mである。主軸方向は、N-87°-Wを指す。床面は平坦で、覆土の状況は不明である。3・4層は掘り方の可能性もある。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は壁

から突出している。火床面(1層)は床面とはほぼ同じ高さで推定される。2層は掘り方である。灰層、天井部等は不明である。袖は確認できなかった。柱穴は2基確認された。径40～50cmで浅い。ピット1はその位置から貯蔵穴の可能性もある。土師器の甕が出土している。

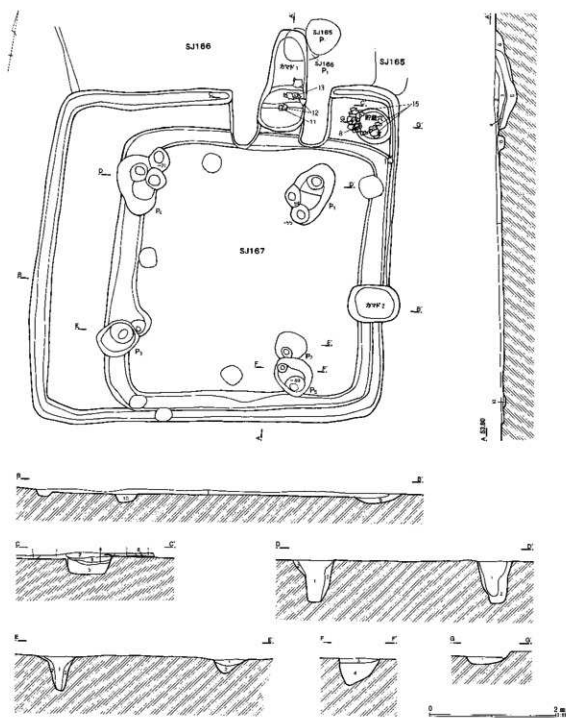
遺物は、土師器の甕が出土している。時期は9世紀後半である。

第169号住居跡 (第73区)

調査区の北側、D-24グリッドに位置する。第22号溝跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。本住居跡では床面が2枚確認されている。

平面形は方形である。規模は長軸4.81m、短軸4.63m、深さ0.07mである。主軸方向は、N-72°-Eを指す。床面は平坦で、全面に貼り床(13層-1次床面、2層-2次床面)が施されている。覆土(1層)は自然堆積である。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁から突出している。10層は掘り方で埋め戻されている。火床面(6層下、8・9層下)は2枚認められ、各々の床面より下位である。6・9層は灰層、5・7・8層は天井部の崩落土である。袖は確認されなかった。柱穴は4基確認された。径60cm、深さ50～80cmで、3層は柱抜き取り痕



SJ167

1 暗褐色土 ローム状・ロームブロックや中形・塊土少量

SJ167カマヤ

2 褐色土 塊土ブロック・褐色砂質粘土多量

3 黒色土 灰土層、焼土層混入

4 褐色土 灰土層

5 暗褐色土 褐色粘土・焼土・ローム混入

6 暗褐色土 粘土層中少量

7 褐色土 砂質粘土

8 褐色土 灰質凝結土層

9 暗褐色土 白色粘土・塊土ブロック多量

10 暗褐色土 ロームブロック多量

SJ167貯蔵穴

1 暗褐色土 コーム状・砂土・塊土少量

SJ167ピット1~6

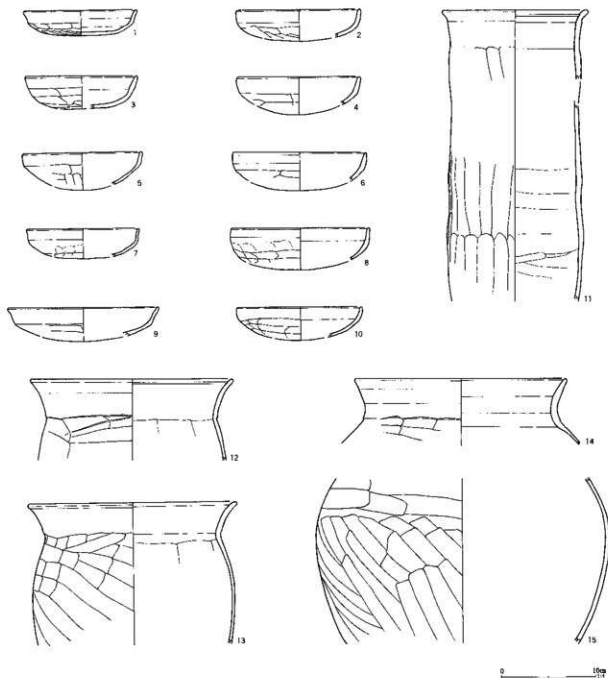
1 暗褐色土 ローム状・焼土少量

2 暗褐色土 ロームブロックとの混入層

3 暗褐色土 ローム状・ロームブロック多量

4 暗褐色土 ロームブロック多量

第70図 第167号住居跡



第71図 第167号住居跡出土遺物

である。

遺物は、土師器の環・碗・甕が出土している。遺物は床下からの出土が多い。10はカマドから出土した。時期は8世紀前半である。

第170号住居跡（第74区）

調査区の北側、C・D-20グリッドに位置する。第153号土壌と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。

平面形は長方形である。規模は長軸4.49m、短軸3.13m、深さ0.04mでごく浅い。主軸方向は、N-80°-Eを指す。床面は平坦である。覆土は自然堆積である。

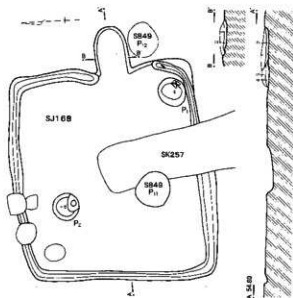
カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は小さく掘り込まれ、壁から突出している。火床面（2層）は床面より下位である。灰層、天井部の崩落土は不明である。袖は確認できなかった。床下土壌は

第24表 第167号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備	考
1	土師環	12.0	2.7		ADE	2	褐	60	A Na 6	
2	土師環	(13.0)	2.9		ADE	2	褐	20	A	
3	土師環	11.8	3.4		ADE	1	明褐	25	A P 1	
4	土師環	(13.0)	3.0		DE	1	暗褐	15	カマドB	
5	土師環	(12.6)	3.4		DEH	3	橙褐	15	P 5	
6	土師環	(14.0)	3.0		ADH	2	橙褐	10	カマドA	
7	土師環	(12.0)	2.9		ADE	2	暗褐	10	A	
8	土師環	14.6	4.2		DEH	3	茶褐	35	A Na 2	
9	土師甕	(16.0)	3.0		ADE	2	暗褐	15	P 5	
10	土師環	(13.2)	3.2		DE	3	赤褐	45	P 1	
11	土師甕	(15.2)	30.8		ADE	2	橙褐	30	カマドNa 4 カマドA	
12	土師甕	(21.3)	8.6		DEH	2	褐	50	カマドA カマドNa 3・4	
13	土師甕	22.0	15.0		ADE	1	明褐	45	カマドNa 2・5 カマドA	
14	土師甕	(22.0)	7.1		ADE	2	明褐	15	A	
15	土師壺		17.5		ADE	2	明褐	70	Na 1・3・4 掘り方	

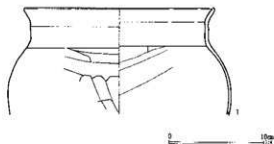
第25表 第168号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備	考
1	土師甕	(20.0)	11.3		BDE	2	赤褐	15	P 1	



SJ168

- 1 暗褐色土 粘土・ローム多量
- 2 暗褐色土 粘土・ローム少量
- 3 暗褐色土 褐色土主体、焼土層・ローム少量
- 4 暗褐色土 粘土・ローム・ローム少量



第72図 第168号住居跡・出土遺物

4基ある。1は径50cm、深さ16cm、2は径1.0m、深さ20cm、3は長径1.8m、短径1.2m、深さ20cm、4は長径1.1m、短径1.0m、深さ25cmで、埋め灰されていた。ピット1は径60cm、深さ50cmである。柱穴と考えられるものは検出できなかった。

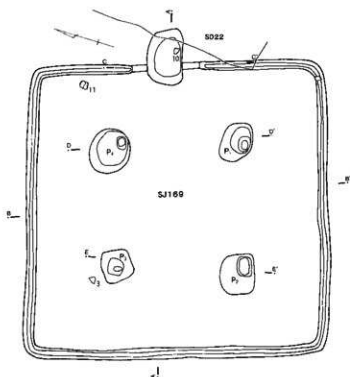
遺物は、ロクロ土師器の高台付桶・椀、須恵器の甕、土錘が出土している。3はカマドの燃焼部の中央から出土した。土器以外にも鉄製紡錘車の車部(第269図17)、鉄滓が出土している。時期は10世紀後半である。

第171号住居跡 (第75図)

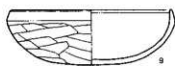
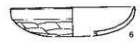
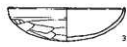
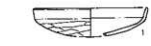
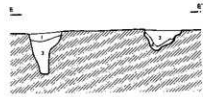
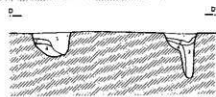
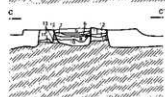
調査区の北側、C-21グリッドに位置する。第58・59号掘立柱建物跡、第160号土壌と重複関係にあり、前者より新しく、後者より古い。床面まで削平され、遺構の南側は不明瞭である。

平面形は長方形である。規模は長軸3.59m、短軸2.67mである。主軸方向は、N-87-Wを指す。床面、覆土の状況は不明だが、床下土壌に貼り床が施されることから、全体に行われていたと思われる。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は、壁から突出している。火床面が辛うじて残り、焚口付近の床面は焼土化していた。灰層、天井部の崩落土は不明である。袖は確認できなかった。床下土壌



- SJ169
- 1 暗褐色土 ローム粒少量
 - 2 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック主層
 - 3 暗褐色土 ローム粒少量、しまり肌
- SJ169ピット
- 4 暗褐色土 粘土質・白色粘土少量
 - 5 白色粘土 粘土質薄層
 - 6 黒色土 灰多量
 - 7 白色粘土 粘土質・暗褐色土少量
 - 8 赤褐色土 粘土質
 - 9 黒色土 灰多量、焼土粒少量
 - 10 黄褐色土 ローム粒・焼土粒少量
 - 11 暗褐色土
 - 12 白色粘土 硬土粒多量
 - 13 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (1cm大) 少量、しまり肌
- SJ169ピット1~4
- 1 暗褐色土 ローム粒薄層
 - 2 暗褐色土 ローム粒・白色粘土ブロック (2.3cm大) 少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒少量
 - 4 暗褐色土 ローム粒・ブロック (1~5cm大) 主層、黄褐色土ブロック含む、しまり肌
- 0 2m

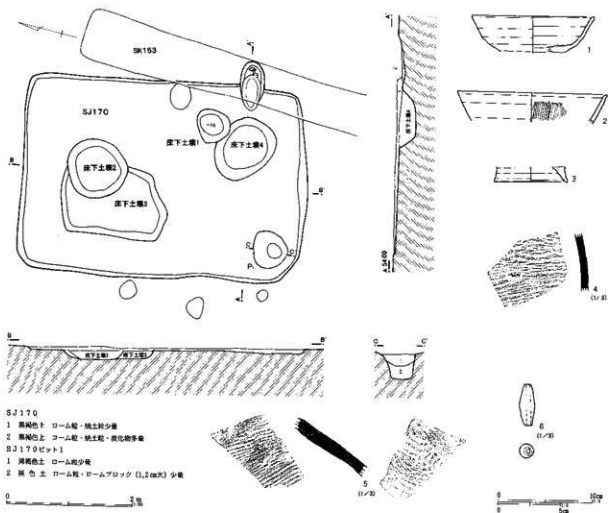


0 10cm

第73図 第169号住居跡・出土遺物

第26表 第169号住居跡出土遺物観察表

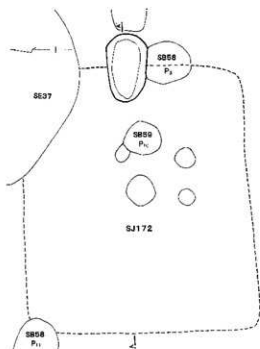
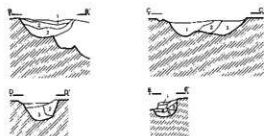
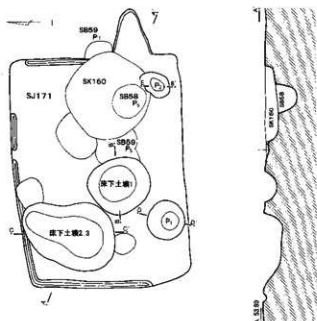
番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.9		BDEH	2	褐	60	一次床下面
2	土師環	(12.4)	3.4		BDEH	2	橙褐	45	カマド
3	土師環	(12.4)	3.5		BDEH	3	橙	50	No.1
4	土師環	(13.0)	2.8		BDEH	3	淡褐	20	床下面
5	土師環	(14.4)	2.8		BEH	2	橙褐	20	
6	土師環	(13.2)	3.0		BDEHJ	3	褐	25	一次床下面
7	土師碗	(18.0)	3.3		BDEHJ	3	橙褐	20	
8	土師環	15.8	4.4		BCEH	3	明赤褐	45	一次床下面・床下
9	土師碗	(17.0)	5.8		CDEH	3	橙褐	45	床下
10	土師壺	(22.0)	10.0		BCDEHJ	2	淡褐	10	カマドNo.1
11	土師壺		8.0	4.3	BEH	1	褐	60	二次床面



第74図 第170号住居跡・出土遺物

第27表 第170号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	ロクロ高台椀	(13.0)	3.8		ADE	1	茶褐	45	カマドNo.1 床下土壇1・2
2	ロクロ高台椀	(15.8)	3.1		EG	2	黒	10	確認面 内外面ともに黒色処理+ミカキ
3	ロクロ高台椀		1.6	(7.6)	DEH	1	茶褐	40	カマドNo.1
4	須恵炭				EIK	2	青灰	破片	未野査
5	須恵炭				BEIK	1	灰	破片	確認面 未野査
6	上	楯	長3.3cm 最大径1.2cm 孔径0.3cm 重量3.39g		DE	1	明赤褐	残率100%	床下土壇4



- SJ171
- 1 黒褐色土 ローム状少量
- SJ171 地下土坑1
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (2cmA) 本跡、しまり状
 - 2 黒色土 ローム粒残量、しまり度
 - 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (1~2cmA) 多量、しまり弱
- SJ171 地下土坑2・3
- 1 黒褐色土 焼土粒中々多
 - 2 黒褐色土 ロームとの互層
 - 3 黒褐色土 ロームブロック少量混在
- SJ171 ヒット1
- 1 黒褐色土 ローム粒残量
 - 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (1,2cmA) 少量
 - 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (1~2cmA) 少量
- SJ171 ヒット2
- 1 黒褐色土 焼土粒少量
 - 2 黒褐色土 焼土粒・ローム粒、黒化数多量
 - 3 黒褐色土 ローム粒多量
 - 4 黒褐色土 焼土粒少量
 - 5 黒色土 焼土粒少量



0 10cm



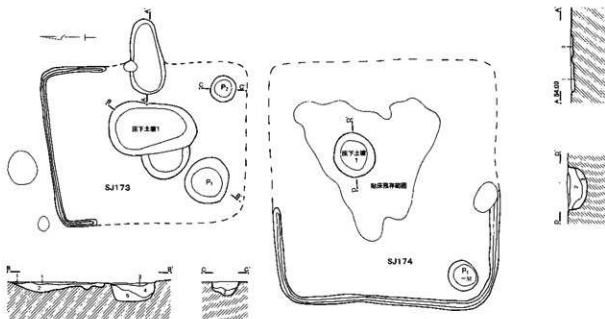
- SJ172 カマヤ
- 1 黒色土 焼土粒多量
 - 2 黒褐色土 白色粘土・焼土・黒化数混在
 - 3 黒褐色土 焼土中々多

0 2m

第75図 第171・172号住居跡・出土遺物

第28表 第171号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	須恵高台椀 (16.0)	16.0	5.0		BEIK	2	明灰	15	床下土層1 A
2	ロクロ高台椀 (15.0)	15.0	5.4		AEG	1	明褐	15	P2 内面ミガキのみ



SJ173カマド

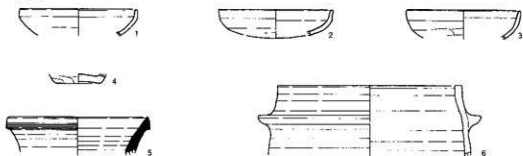
- 1 黒褐色土 ローム粒少量
- 2 黒褐色土 ローム粒少量
- SJ173床下土層1
- 1 黒褐色土 ローム粒少量
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (1,2cm²)・焼土粒少量
- SJ173ピット1
- 3 赤褐色土 ローム粒少量
- 4 黒褐色土 ローム粒・焼土粒少量

6 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (1,2cm²) 多量

- SJ173ピット2
- 1 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒少量
- 2 暗褐色土 ローム粒少量
- SJ174床下土層1
- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (1,2cm²) 多量、しまり飯
- 2 黒褐色土 ローム粒少量、しまり飯
- 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (2,4cm²) 多量、しまり飯

0 5m

SJ173



0 10cm

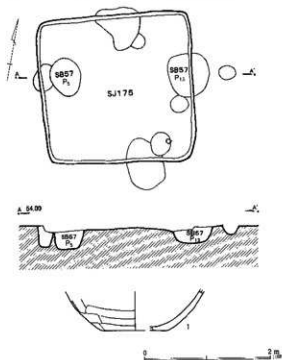
第76図 第173・174号住居跡・出土遺物

第29表 第173号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.4)	2.8		DEH	2	明褐	10	床下
2	土師環	(12.0)	2.7		DEH	2	橙褐	5	床下
3	土師環	(12.0)	3.0		DEH	2	橙褐	10	床下
4	土師盃		1.0	4.7	DEIJ	2	褐	80	P1
5	須恵盃	(14.8)	4.1		RE	1	暗青灰	15	床下土層1 木野産
6	羽釜	(19.4)	7.5		DEH	1	灰褐	5	P1 ロクロ整形 須恵質

第30表 第175号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師甕		4.2	(7.0)	BDEJ	3	赤褐	15	Na1 確認面



第77図 第175号住居跡・出土遺物

は3基ある。1は径1.0m、深さ25cm、2は長径1.2m、短径1.0m、深さ40cmで、埋め戻されていた。ピット1は径60cm、深さ30cm、2は径50cm、深さ30cmである。ピット2は5層が灰層で灰溜りのような施設の可能性ある。柱穴と考えられるものは検出できなかった。

遺物は、ロクロ土師器の高台付椀、須恵器の椀が出土している。土器以外にも用途不明の鉄製品（第269図20）が出土している。時期は10世紀後半である。

第172号住居跡（第75図）

調査区の北側、C-21・22グリッドに位置する。第58・59号掘立柱建物跡、第37号井戸跡と重複関係にあり、前者より新しく、後者より古い。床面まで削平され、カマドのみが残存していた。

平面形は長方形と推定される。主軸方向は、W-Eを指す。床面、覆土の状況は不明である。

カマドは東壁に造られていたと考えられる。土塊

状の掘り方（2・3層）が埋め戻されていた。1層は灰層である。柱穴と考えられるものは検出できなかった。

遺物は、図示不能な土師器の甕の小片が出土したのみである。時期は不明である。

第173号住居跡（第76図）

調査区の北側、D-21グリッドに位置する。床面まで削平され、遺構の南側は不明瞭である。

平面形は長方形である。規模は長軸3.29m、短軸2.50mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面、覆土の状況は不明だが、床下土塊に貼り床が施されていた。

カマドは東壁に造られていた。燃焼部は、現状では皿状に掘りこまれ、壁から突出している。1・2層は掘り方である。火床面・灰層等は不明である。軸は確認できなかった。床下土塊1は長径1.4m、短径80cm、深さ15cmである。ピット1は径60cm、深さ25cm、2は径40cm、深さ20cmである。柱穴と考えられるものは検出できなかった。

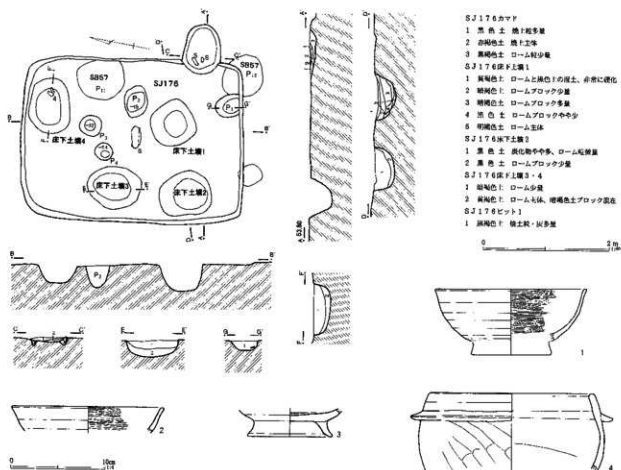
遺物は、土師器の杯・甕、須恵器の壺、羽釜が出土している。1～4は混入の可能性が高い。土器以外にも刀子の茎かと思われる鉄製品（第269図10）が出土している。ピット1の羽釜を伴うものと考え、時期は10世紀後半とする。

第174号住居跡（第76図）

調査区の北側、D-21グリッドに位置する。床面まで削平され、遺構の西側と貼り床の一部が残存するのみである。

平面形は方形、もしくは長方形と推定される。規模は南北方向3.56m、東西は3.2m以上になる。主軸方向は、カマドを東側に想定するとW-Eとなる。床面、覆土の状況は不明だが、貼り床（1層）が施されていた。

カマドは確認できなかった。床下土塊1は径70cm、



第78図 第176号住居跡・出土遺物

第31表 第176号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	ロク高台椀	(14.8)	5.4		AEG	1	明褐色	20	P1
2	ロク口椀	(15.9)	2.7		AEG	2	明褐色	5	P2 内面黒色処理ニミガキ
3	ロク高台椀		3.0	(8.8)	DEJ	2	褐色	50	確認面
4	羽釜	(17.0)	8.3		DEGJ	3	赤褐色	15	No.1 非ロク口壺形 上脚裏

第32表 第177号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	3.0		AEGH	2	褐色	5	カマド
2	須恵壺	(20.0)	5.2		EIJK	1	暗青灰	10	カマド 木野原

深さ30cmで、埋め戻されている。ピット1は径40cm、深さ30cmである。柱穴と考えられるものは検出できなかった。

遺物は図示不能な土師器の小破片が出土している。時期は不明だが、10・11世紀か。

第175号住居跡 (第77図)

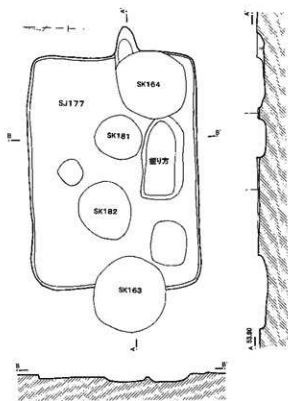
調査区の北側、D-21・22グリッドに位置する。第57号掘立柱建物跡と重複し、木住居跡が新しい。

床面まで削平され、掘り方のみを確認した。

平面形は方形である。規模は長軸2.45m、短軸2.36mである。主軸方向は、カマドを東側に想定するとN-77-Eになる。床面、覆土の状況は不明だが、貼り床が施されていた。

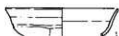
カマドは確認できなかった。柱穴と考えられるものは検出できなかった。

遺物は、土師器の甕と図示不能な土師器の環の小



SJ177
 1 黒褐色土 ローム状少量
 SJ177カマド
 2 黒褐色土 焼土塊少量

0 1 2 3m



0 100mm

第79図 第177号住居跡・出土遺物

破片が出土している。時期は不明だが、甕は7・8世紀の可能性がある。

第176号住居跡 (第78図)

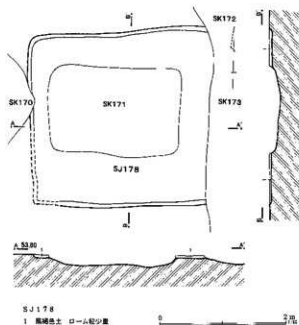
調査区の北側、D-22グリッドに位置する。第57号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡の方が新しい。床面まで削平され、遺構の西側は不明瞭である。

平面形は長方形である。規模は長軸3.60m、短軸2.40mである。七軸方向は、N-82°-Eを指す。床

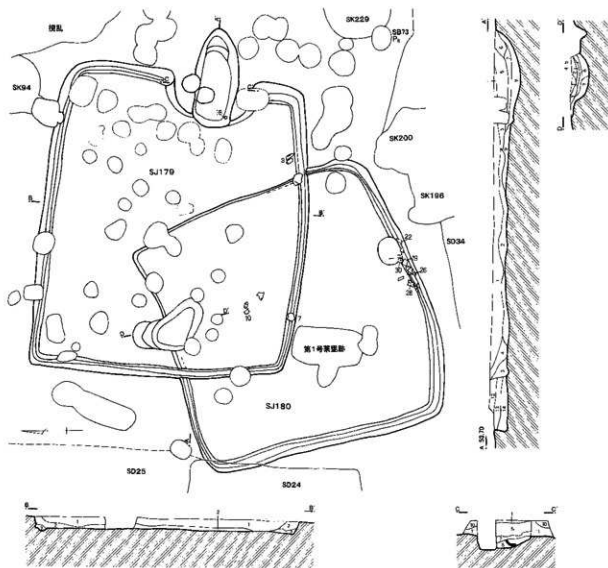
面は床下土壌1の上面が凹んでいた。床下土壌に貼り床(1層)が施されることから、全体に行われていたと思われる。覆土の状況は不明である。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘りこまれ、壁から突出している。3層は掘り方である。火床面(2層)が辛うじて残り、焚口付近の床面は焼土化していた。1層は灰層である。側壁には補強材の片岩を立てたと思われる凹みが残っていた。袖は確認できなかった。床下土壌は4基ある。1は径1.3m、深さ35cm、2は長径90cm、短径70cm、深さ35cm、3は長径80cm、短径70cm、深さ30cm、4は長径85cm、短径65cm、深さ25cmで、埋め戻されていた。ビット1は径40cm、深さ15cmで、所謂灰溜ビットと考えられる。2は長径50cm、短径40cm、深さ19cm、3は径40cm、深さ32cm、4は径30cm、深さ54cmである。柱穴と考えられるものは検出できなかった。

遺物は、土師器の甕・台付甕、ロクロ土師器の高台付椀・椀、羽釜・灰軸陶器が出土している。4は床下土壌4の上面から出土した。土器以外にも床下土壌3から用途不明の筒状の鉄製品(第270図24)が出土している。時期は10世紀後半である。



第80図 第178号住居跡



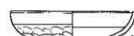
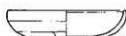
SJ179

- 1 暗褐色土 灰褐色土を含む、ローム粒多量、焼土小ブロック少量
- 2 暗褐色土 ローム粒多量、焼土粒多量
- 3 暗褐色土 灰褐色土、灰褐色粘土小ブロック多量
- 4 褐色土 灰褐色粘土、焼土小ブロック多量
- 5 暗褐色土 暗褐色土を主体に黄褐色粘土多量、焼土粒、小ブロック少量
- 6 暗褐色土 焼土ブロック (1cm²) を多量
- 7 暗褐色土 焼土粒少量、炭化物粒を含む、下層は強かに、灰・炭屑となる
- 8 暗褐色土 焼土粒、焼土ブロック (1cm²)、炭化物粒少量、ロームブロック (5mm²) 多量
- 9 暗褐色土 焼土粒、焼土少量、ロームブロック多量
- 10 暗褐色土 黄褐色粘土、焼土粒、ローム粒少量
- 11 暗褐色土 粘土層、焼土層、炭化物粒、暗褐色土を含む

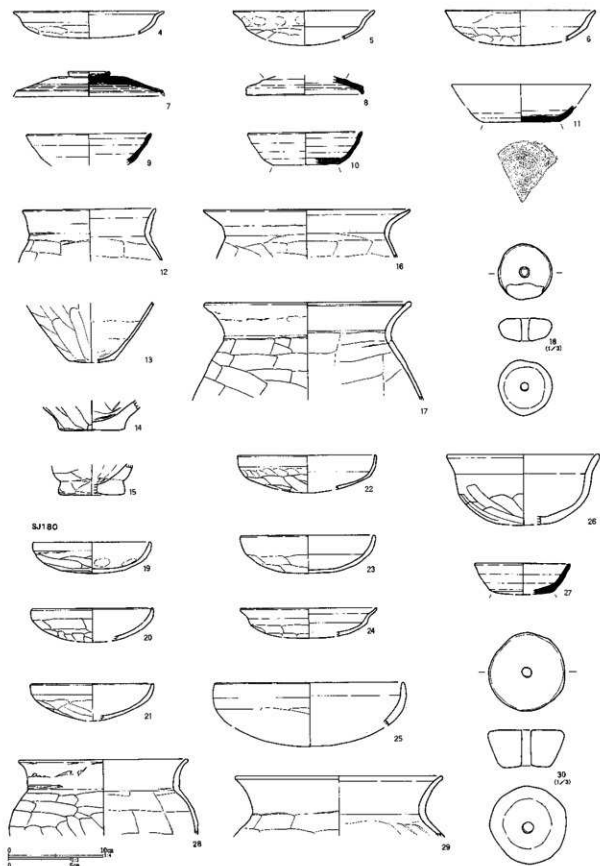
SJ180

- 12 暗褐色土 白色腐植土、焼土粒、ローム粒少量
 - 13 暗褐色土 ローム粒少量、焼土粒少量
 - 14 暗褐色土 ローム粒、焼土粒多量
- SJ180の剖面
- 1 暗褐色土 焼土粒を含む
 - 2 灰白色土 焼土多量、焼土粒を含む
 - 3 暗褐色土 ローム粒、ブロック多量、焼土粒少量
 - 4 暗褐色土 灰、焼土粒多量、炭化物粒少量
 - 5 暗褐色土 粘土、焼土粒多量
 - 6 暗褐色土 焼土粒、焼土粒多量、ローム粒少量
 - 7 暗褐色土 ロームブロック、焼土粒多量

SJ179



第81図 第179・180号住居跡・出土遺物(1)



第82图 第179・180号住居跡出土遺物(2)

第33表 第179・180号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.5		BDEII	2	褐	20	
2	土師環	(12.4)	3.5		ADE	1	褐	40	床下面 口縁部に無調整部残す
3	土師環	(13.0)	3.1		BDEHJ	2	淡褐	25	床下面
4	土師皿	(16.0)	2.4		BEH	2	淡褐	20	
5	土師皿	(15.0)	3.0		BDEH	2	淡褐	10	
6	土師環	(16.0)	3.2		BDEH	2	橙褐	25	SJ180覆土
7	須恵蓋	(16.0)	2.5		EK	1	明青灰	60	No.7 萩岡産 A
8	須恵蓋	(12.2)	2.0		BEFJ	3	明灰	25	覆土 南北余産 A
9	須恵環	(13.2)	3.3		EHK	2	灰	20	木野産 A
10	須恵環	(12.0)	3.4	(6.8)	ABEIJ	2	黄灰	15	No.5 木野産 A
11	須恵環		1.6	(8.0)	BEF	1	灰	20	南北余産 A
12	土師小型鉢	(14.0)	5.6		BEH	2	淡褐	25	カマド
13	土師甕		6.3	(5.0)	BDEII	2	褐	25	
14	土師甕		3.1	(7.0)	AEHJ	2	赤褐	15	
15	土師甕		3.2	(7.0)	BCEII	2	橙褐	25	砂底
16	土師甕	(22.0)	5.1		BEH	2	橙褐	25	覆土
17	土師甕	(21.8)	10.4		ABEII	2	褐	15	覆土
18	土製紡錘車	上径4.3cm	下径3.2cm	孔径0.8cm			重量36.68g	No.1	
19	土師環	(12.5)	3.3		DE	2	橙褐	50	No.9 口縁下に無調整部のこす、胎上積上げあり
20	土師環	(12.8)	3.4		BDEH	2	部	25	覆土
21	土師環	(13.0)	3.9		BDEH	2	褐	25	
22	土師環	(14.6)	3.6		BDEII	2	淡褐	25	No.13
23	土師環	(14.0)	4.0		BDEH	2	淡褐	25	床下面 SJ179床下面
24	土師皿	(14.4)	3.0		BDEII	2	淡褐	15	
25	土師環	(20.0)	4.6		BEH	2	淡褐	10	床下面
26	土師鉢	(16.0)	7.5		ADEII	3	褐	55	No.7 覆土 内面黒色処理
27	須恵環	(10.0)	3.3	(6.4)	BHIJ	3	明青灰	20	木野産 全周回転ヘラズリ A
28	土師甕	(18.0)	8.1		ABEH	2	褐	15	No.4
29	土師甕	(21.6)	6.4		ABEH	2	橙褐	15	覆土 SJ179覆土
30	土製紡錘車	上径6.1cm	下径3.9cm	孔径0.8cm			重量115.93g	No.10	

第177号住居跡 (第79図)

調査区の北側、D-22・23グリッドに位置する。第163・164・181・182号土壇と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。ほぼ床面まで削平されていた。

平面形は長方形である。規模は長軸3.62m、短軸2.66mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面はほぼ平坦で、全体に貼り床が施されている。覆土の状況は不明である。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は、壁から突出している。火床面は床より下位である。2層は灰層、天井部の崩落土は不明である。袖は確認できなかった。床下土壇、ピットは確認できなかった。

遺物は、土師器の環、須恵器の甕が出土している。時期は9世紀後半である。

第178号住居跡 (第80図)

調査区の北側、D-22・23グリッドに位置する。第170～173号土壇と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。遺構の西側は不明瞭で、ほぼ床面まで削平されていた。

平面形は長方形と推定される。規模は長軸南北方向2.77m、東西方向2.9m以上である。主軸方向は、カマドを東側に想定した場合、W-Eを指す。床面は平坦で、覆土は自然堆積と考えられる。

カマドは確認していない。東壁に造られていたと考えられる。床下土壇、ピットは確認できなかった。柱穴と考えられるものは検出できなかった。

遺物は、土師器の小破片が出土したのみである。時期は不明である。

第179号住居跡 (第81図)

調査区の北側、A・B-25・26グリッドに位置する。第180号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸4.84m、短軸4.13m、深さ0.16mである。主軸方向は、N-87°-Wを指す。床面はやや凹凸があり、貼り床が施されていた。覆土は埋め戻しである。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁から突出している。8・9層は掘り方で、埋め戻されている。火床面は床面とほぼ同じ高さである。7層は灰層、5・6層は天井部の崩落土である。袖は黄灰色粘土を貼り付けて造られていた。ピットはいずれも本住居跡より新しく、柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環・皿、須恵器の環・蓋・甕・小型甕・土製紡錘車が出土している。12はカマド出土である。6の口縁部の外面には粘土がめくれあがった状態で部分的に付いている。15の底面には砂粒が多く付着し、底部外周は未調整である。27は混入と考えられる。時期は8世紀中葉と考えられる。

第180号住居跡 (第81図)

調査区の北側、A・B-25・26グリッドに位置する。第179号住居跡、第24・25号溝跡・第1号茶臼跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。

平面形は歪んだ方形である。規模は長軸4.38m、短軸4.12m、深さ0.17mである。主軸方向は、N-78°-Eを指す。床面は平坦で、貼り床が施されていた。覆土は自然堆積である。

カマドは北壁のやや東寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁からやや突出している。6・7層は掘り方である。火床面(5層)は床面より下位で、粘土を貼りこんで造られている。4層は灰層、1~3層は天井部の崩落土である。袖は確認できなかった。柱穴と考えられるものは確認していない。

遺物は土師器の環・皿・鉢・甕、須恵器の環、土

製紡錘車が出土している。19・22・26・30は南壁際から出土した。時期的に幅があるが、8世紀前半と考えられる。

第181号住居跡 (第83図)

調査区の北側、B-25・26グリッドに位置する。第182号住居跡、第196・198~200号土壇、第34号溝跡と重複関係にある。第182号住居跡との新旧関係は不明だが、本住居跡が第182号住居跡の床面を壊していないことから、本住居跡が浅く、新しいと考えられる。土壇、溝跡はいずれも本住居跡より新しい。床面まで削平されており、壁周溝の範囲を遺構の範囲とした。

平面形は方形である。規模は南北方向3.17m、東西方向2.73mである。主軸方向は、東カマドと想定した場合、N-87°-Eを指す。床面、覆土の状況は不明である。

カマドは確認されず、北あるいは東方向に造られていたと考えられる。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

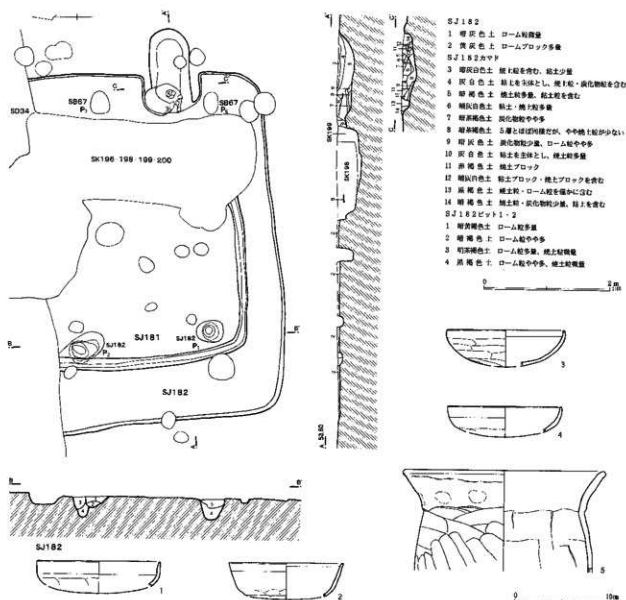
遺物は、第181・182号一括で取り上げられているが、本住居跡に伴うものではないと考えられる。時期は不明だが、第182号住居跡より新しい8世紀以降と考えられる。

第182号住居跡 (第83図)

調査区の北側、B-25・26グリッドに位置する。第181号住居跡、第67号掘立柱建物跡、第196・198~200号土壇、第34号溝跡と重複関係にある。第181号住居跡との新旧関係は不明だが、本住居跡が古いと考えられる。土壇、溝跡はいずれも本住居跡より新しい。掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。床面近くまで削平されている。

平面形は長方形と推定される。規模は長軸5.61m、短軸3.49mである。主軸方向は、N-87°-Eを指す。床面は平坦で、全面に貼り床(2層)が施されている。覆土の状況は不明である。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁から突出している。8・



第83図 第181・182号住居跡・出土遺物

第34表 第181・182号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(13.0)	2.6		DEH	2	淡褐	15	
2	土師環	(12.0)	3.4		BCEH	2	褐	10	P2
3	土師環	(12.4)	3.8		BDEHJ	2	橙褐	25	Na2
4	土師環	(12.0)	2.7		EH	2	褐	10	
5	土師甕	(21.0)	10.7		DEH	1	明褐	25	Na4・5

9層は掘り方で埋め戻されている。火床面は床面より下位である。7層は灰層、3～6層は天井部の崩落土である。袖は両側で確認され、白色粘土を貼り付けて造られている。柱穴は2基確認された。径40～60cm、深さ30～40cmで、埋め戻されている。

遺物は、土師器の環・甕が出土している。3・5

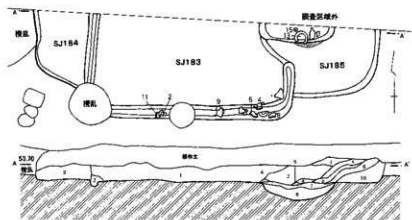
はカマドから出土した。時期は8世紀中葉である。

第183号住居跡 (第84図)

調査区の北側、A-26・27グリッドに位置する。

第184・185号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が両者より新しい。遺構の北側は調査区域外にかかる。

平面形は方形と推定される。規模は東西方向3.30

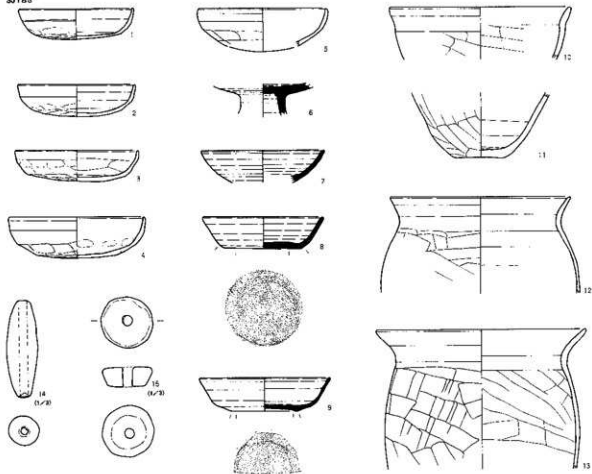


SJ183

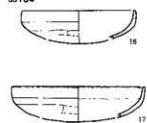
- 1 暗褐色土 ローム層・焼土粒少量
- 2 暗褐色土 ローム粒少量
- 3 暗褐色土 ローム層・焼土粒少量、自然粘土少量
- 4 白色粘土 焼土粒少量
- 5 赤褐色土 焼土
- 6 暗褐色土 焼土粒少量
- 7 黒色土 焼土粒少量
- 8 暗褐色土 ローム層・焼土粒少量、炭化物散見
- 9 暗褐色土 ローム層・焼土粒少量 (SJ184)
- 10 暗褐色土 ローム層・焼土粒少量 (SJ185)

0 2m

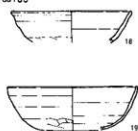
SJ182



SJ184



SJ185



第84図 第183~185号住居跡・出土遺物

第35表 第183～185号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備	考
1	土師環	12.0	3.3	9.4	DE	1	橙褐	70	Na 7	
2	土師環	12.4	3.4		DE	2	褐	70	Na13	
3	土師環	(13.0)	3.3	(10.6)	ADE	2	橙褐	40		
4	土師環	(14.2)	4.4	8.6	DE	2	褐	30	No.8 カマド	底部平産風になる
5	土師環	(13.4)	4.0		DEJ	2	橙褐	25	Na 9	
6	須恵高盤		3.5		BEIJ	2	暗灰	35	未野原 A	
7	須恵環	(13.0)	3.3		BEFH	1	明灰	25	南比企産 A	
8	須恵環	12.7	3.4	7.8	BEIJK	2	明灰	95	Na.6 未野産 A	
9	須恵環	(13.8)	3.5	7.0	BEF	1	青灰	25	No.12 南比企産 A	
10	土師鉢	(19.0)	5.5		BEG	2	褐	10	カマド	
11	土師壺		6.7	5.3	BDEG	2	褐	55	Na14	
12	土師壺	(19.0)	10.2		DE	2	褐	15		
13	土師壺	22.2	14.8		ADE	2	褐	70	Na.2	
14	土師	長さ7.7cm	最大径2.5cm	孔径0.6cm			重量36.17g	DEH 1	褐	100%
15	土製紡錘車	上径4.0cm	下径2.8cm	孔径0.8cm			厚さ1.5cm	重量36.39g	カマド	No.1
16	土師環	(12.0)	3.0		DEH	2	褐	10	床下	
17	土師環	(14.0)	3.3		ADE	2	褐	10	床下	
18	土師環	(12.6)	3.3		ADE	3	明橙褐	30		
19	土師環	(13.6)	4.6		ADE	2	赤褐	5		
20	土師壺	(21.8)	10.0		AEGH	2	褐	20		

m、南北方向1.60mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦である。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁に造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁から突出している。8層は掘り方で埋め戻されている。火床面は床面より下位である。7層は灰層、3～6層は天井部の崩落土である。袖は両側で確認され、白色粘土を貼り付けて造られている。柱穴は確認されなかった。

遺物は、土師器の環・鉢・壺、須恵器の環・高盤、土師、土製紡錘車が出上している。13・15はカマドから、2・4・5・8・9・11は南壁際からまとまって出上した。11の底面には砂粒が多く付着している。13の壺の外表面は、ケズリの際に工具がはねた痕跡が多く残る。時期は8世紀後半である。

第184号住居跡 (第84図)

調査区の北側、A-26グリッドに位置する。第183・185号住居跡と重複関係にあり、前者より古く、後者との前後関係は不明である。第185号住居跡は本住居跡と同一の遺構である可能性もある。遺構の北側は調査区域外にかかり、西側は攪乱に壊されている。

平面形は方形と推定される。規模は東西方向80cm、南北方向1.15mである。主軸方向は不明である。床面は平坦である。覆土は自然堆積である。

カマド、柱穴などは確認されなかった。

遺物は、土師器の環が出上している。時期は8世紀前半である。

第185号住居跡 (第84図)

調査区の北側、A-27グリッドに位置する。第183・184号住居跡と重複関係にあり、前者より古く、後者との前後関係は不明である。第184号住居跡は本住居跡と同一の遺構である可能性もある。遺構の北側は調査区域外にかかり、

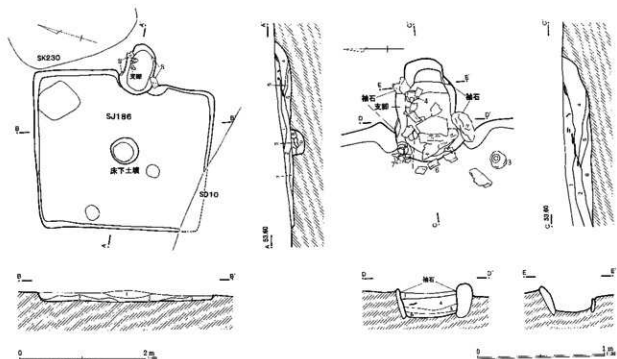
平面形は方形と推定される。規模は東西方向1.83m、南北方向1.02mである。主軸方向は不明だが、壁の方向からW-Eになると考えられる。床面は平坦である。覆土は自然堆積である。

カマド、柱穴などは確認されなかった。

遺物は、土師器の環・壺が出上している。18・19は混入と考えられる。時期は8世紀中葉である。

第186号住居跡 (第85図)

調査区の北側、B・C-26・27グリッドに位置す

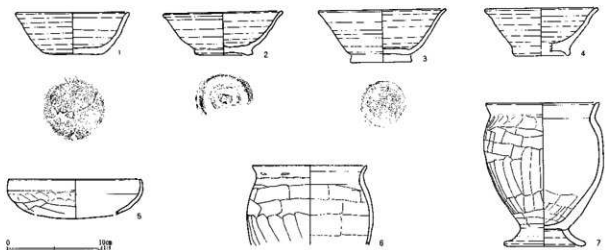


SJ186

- 1 黒褐色土 灰褐色土・粘土粒多量
- 2 暗褐色土 灰土粒・赤褐色土粒・灰褐色土多量
- 3 暗褐色土 rome粒・褐色粘土多量
- SJ186カマド
- 4 暗褐色土 粘土ブロック多量
- 5 灰褐色土 粘土・炭化粉・灰流入
- 6 赤褐色土 粘土

SJ186床下土壇

- 7 暗褐色土 粘土粒・炭化粉中多
- 8 暗褐色土 粘土・粘土粒多量
- 9 灰白色土 粘土を主体とし、炭化粉多量
- 10 暗褐色土 粘土粒多量



第85図 第186号住居跡・カマド・出土遺物

る。第10号溝跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。

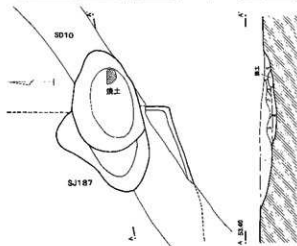
平面形は遺構の南側が歪む方形である。規模は長軸2.86m、短軸2.44m、深さ0.12mである。主軸方向は、N-79°-Eを指す。床面は平垣である。覆土

は自然堆積である。

カマドは東壁に造られていた。燃焼部は掘り方(6層)を埋め戻すことで土壇状となり、壁から突出している。火床面は床面より上位である。やや奥側に支脚と考えられる礎が立ったままの状態です。出土して

第36表 第186号住居跡出土物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	須恵系 承 环	12.0	4.4	6.2	AEIJ	3	赤褐	100	カマド カマドNo.6・11 酸化焙焼成
2	須恵系高台 环	(12.6)	4.5	5.0	BDJ	3	灰褐	40	
3	須恵系高台 环	(13.5)	4.8		ADEI	3	黄灰	50	カマドNo.1 木野産 酸化焙焼成
4	須恵系高台 环	(11.8)	5.0	(5.6)	ABEJ	2	灰褐	35	カマドNo.13
5	土 師 环	(14.0)	3.7		BEH	2	淡褐	25	
6	土師 小型 甕	12.2	8.4		BDEH	2	淡褐	45	カマドNo.3
7	土師 台付 甕	(12.0)	15.1	8.0	DEH	3	茶褐	60	カマドNo.5



SJ187カマド

- 1 黄褐色土 焼成後、ローム産少量
- 2 硬赤褐色土 焼成後
- 3 硬褐色土 焼成後、焼土ブロック多
- 4 黄褐色土 以て多量、焼土多量、焼土塊多
- 5 硬褐色土 焼土塊多



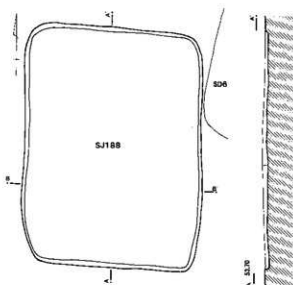
第86図 第187号住居跡カマド

いる。5層は灰層、4層は天井部の崩落土である。袖は両側で確認され、白色粘土を貼り付けて造られている。内側には補強材と考えられる礎が立ったままの状態出土している。7の甕も北側の袖の補強材と考えられる。床下土壌は径40cm、深さ20cmで埋め戻されていた。下層は粘土層である。柱穴等は確認されなかった。

遺物は、土師器の 环・甕・小型甕・台付甕、須恵系土師質土器の 环・高台付 环が出土している。1・3・6はカマドの手前からとまって出土した。5は混入である。2の底部は、中心切り技法で切り離されている。時期は10世紀中葉である。

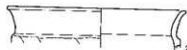
第37表 第188号住居跡出土物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土 師 环	(13.0)	2.2		BDEH	2	淡褐	5	
2	土 師 鉢	(18.8)	4.2		ABCEII	2	橙褐	10	

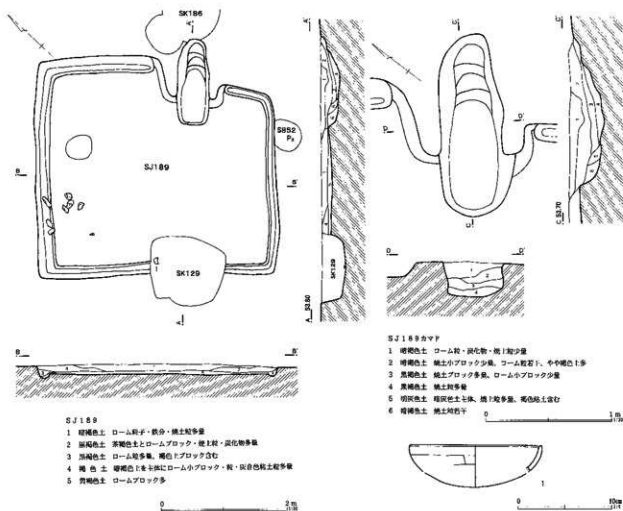


SJ188

- 1 硬褐色土、ロームアブロック多、焼土少量



第87図 第188号住居跡・出土遺物



第88図 第189号住居跡・カマド・出土遺物

第38表 第189号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(14.0)	2.8		DEH	1	明赤褐	5	

第187号住居跡 (第84図)

調査区の北側、C-26グリッドに位置する。第10号溝跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。

遺構の大部分を削平されており、カマドと遺構の南東側の一部を検出したのみである。主軸方向は、東壁を軸方向とすれば、W-Eとなる。覆上は自然堆積である。

カマドは東壁に造られ、南壁に近い位置に当たるようである。燃焼部は皿状で、壁から突出している。火床面(4層下)は床面より下位である。やや奥に支脚状の焼土塊が見られた。4層は灰層、2・3層は天井部の崩落土である。袖、床土土塊、柱穴等は

確認されなかった。

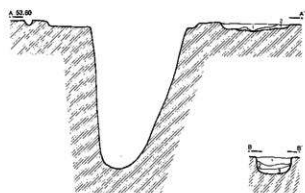
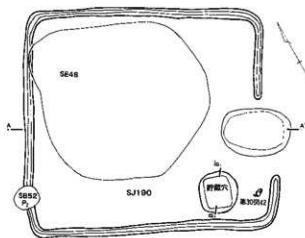
遺物は皆無である。遺構の状況から10・11世紀頃の遺構と考えられる。

第188号住居跡 (第87図)

調査区の北側、D-25グリッドに位置する。第6号溝跡と近接しており、本住居跡のほうが古い。床面まで削平されており、掘り方のみが残存していた。

平面形は長方形である。規模は長軸3.75m、短軸2.87mである。主軸方向は、東カマドと想定した場合、W-Eを指す。床面の状況は不明だが、全体に貼り床(1層)が施されている。

カマドは確認されず、北あるいは東方向に造られ



- SJ190カマド
 1 黒褐色土 褐色土多量、炭化物粒・ローム粒・焼土粒少量
 2 褐色粘土 1層と同様の土質に、ロームブロック多量
 SJ190貯蔵穴
 1 焼褐色土 ローム小ブロック・炭化物粒を多く含む
 2 褐色粘土 黄褐色粘土小ブロック多量、炭土粒少量
 3 焼褐色土 主体は1層に同じ、1層より厚く、炭化物の量が少ない

第89図 第190号住居跡

いたと考えられる。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の小破片が出たのみである。時期は7・8世紀頃と考えられる。

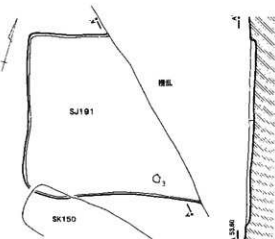
第189号住居跡 (第88図)

調査区の中央、D・E-24・25グリッドに位置する。第52号独立柱建物跡、第129・186号土壇と重複関係にあり、第129号土壇より古く、第186号土壇より

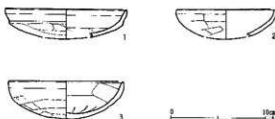
り新しい。第52号独立柱建物跡との前後は不明である。

平面形は方形で、カマドより南東側が狭くなっている。棚状施設があった可能性もある。規模は長軸3.46m、短軸3.29m、深さ0.14mである。主軸方向は、N-48°-Eを指す。床面は平埧で、全体に貼り床(5層)が施されていた。覆土は埋め戻しである。

カマドは北東壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁から突出している。4・5・6層は掘り方である。火床面(3層下)は床面より下位である。3層は灰層、2層は天井部の崩落土である。軸は両側で確認され、白色粘土を貼り付けて造られていた。柱穴と考えられるものは確認していない。



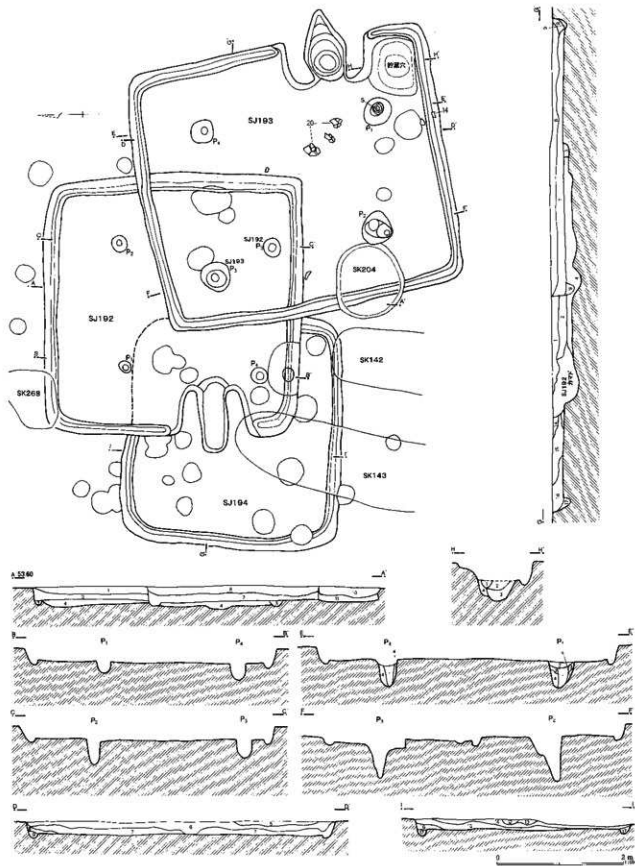
- SJ191
 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック(2-4個大)少量



第90図 第191号住居跡・出土遺物

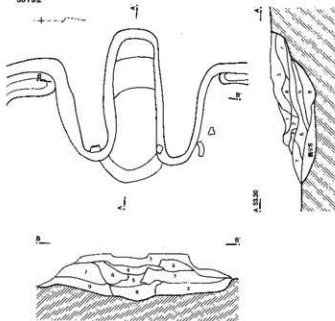
第39表 第191号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.8)	3.0		EG	1	橙褐色	15	
2	土師環	(10.4)	2.8		DE	2	橙褐色	15	
3	土師環	12.2	4.0		AEG	2	橙褐色	80	No.1



第91图 第192~194号住居跡

SJ192



SJ192・193

- 1 埋戻色土 焼土粒、ローム粒、ローム小ブロック少量
- 2 黒褐色土 ローム小ブロック少量、灰褐色粘土、焼土小ブロック骨片多量
- 3 黒色土 中々褐色土を含有、ローム小ブロック、粒多量
- 4 黒褐色土 ローム小ブロック多量、焼土粒少量
- 5 埋戻色土
- 6 埋戻色土 ローム粒多量、焼土、炭化物粒少量を含む
- 7 埋戻色土 ロームブロック少量、ローム、焼土、炭化物粒多量
- 8 埋戻色土 ローム粒を含む
- 9 褐色土 ローム粒を含む
- 10 埋戻色土 ローム小ブロック、粒多量、パリス、焼土、炭化物粒若干あり (SK204)
- 11 埋戻色土 灰褐色土、炭化物骨片 (SK204)

SJ192カマド

- 1 埋戻色土 黒色土多量、暗褐色土、黄褐色粘土小ブロック、焼土粒少量
- 2 赤灰色土 焼土化した灰褐色粘土ブロックを多く含む
- 3 黄灰色土 暗褐色土多量、黄灰色粘土ブロックを多い量の土状に多く含む
- 4 埋戻色土 黄褐色粘土ブロック、焼土粒、炭化物粒少量
- 5 赤褐色土 黄褐色粘土粒、焼土粒少量、炭化物粒多量
- 6 赤褐色土 焼土ブロック、焼土小ブロック多量
- 7 赤灰色土 白色粘土と褐色土の混成層、炭化物粒を若干含む
- 8 黒褐色土 ローム粒、黄褐色粘土を若干含む、炭化物多量
- 9 埋戻色土 ローム小ブロック、褐色土多量

SJ193カマド

- 1 埋戻色土 焼土粒多量、ローム粒少量、白色焼結粒多量
- 2 灰色粘土
- 3 灰白色土 焼土粒多量、灰少量
- 4 赤褐色土 焼土
- 5 埋戻褐色土 焼土粒、ブロック少量
- 6 埋戻褐色土 シルト、粘土、灰、焼土粒を含む
- 7 粘土 焼土粒を含む
- 8 埋戻色土 炭化物多量
- 9 赤褐色土
- 10 赤褐色土 焼土ブロック
- 11 埋戻褐色土 焼土ブロック (10cm)、粘土ブロック (20cm)、灰多量
- 12 粘土 焼土粒少量、2層と同様
- 13 埋戻褐色土 灰、粘土骨片、シマリ土
- 14 赤褐色土 コームブロック (2.3cm) を含む
- 15 埋戻褐色土 ロームブロック多量
- 16 灰色粘土 焼土、炭化物多量
- 17 埋戻褐色土 粘土粒、埋戻色土混入
- 18 埋戻褐色土 灰白色粘土、焼土、炭化物粒多い
- 19 埋戻色土 ロームブロック (3-5cm) 多量

SJ193貯蔵穴

- 1 埋戻褐色土 赤褐色土多量、焼土粒混入
- 2 黒褐色土 焼土粒多量、ローム粒多量
- 3 埋戻色土 ロームブロック多量、焼土粒少量
- 4 埋戻色土 ロームブロック (5cm) 多量

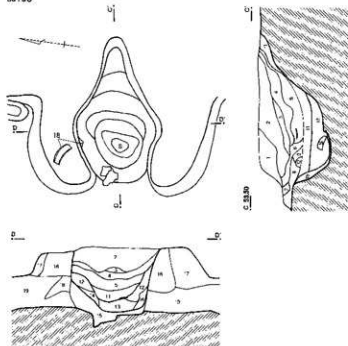
SJ193ピット

- 1 埋戻色土 コーム粒少量
- 2 埋戻褐色土 焼土粒、炭化物粒、ローム粒、粘土骨片を含む
- 3 赤褐色土 ロームブロック少量
- 4 埋戻色土 ロームブロック多量

SJ194

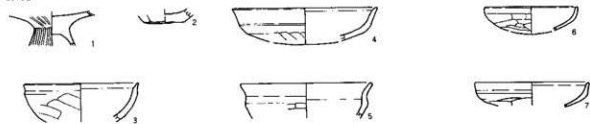
- 12 赤褐色土 焼土粒
- 13 埋戻色土 ローム粒少量、白色焼結粒を含有
- 14 埋戻色土 ローム粒、白色焼結粒、焼土粒多量
- 15 赤褐色土 ローム粒多量
- 16 赤褐色土 ローム粒少量
- 17 埋戻色土 ローム粒、ロームブロック多量

SJ193

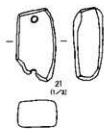
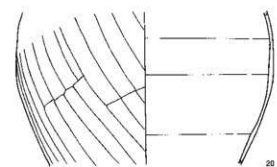
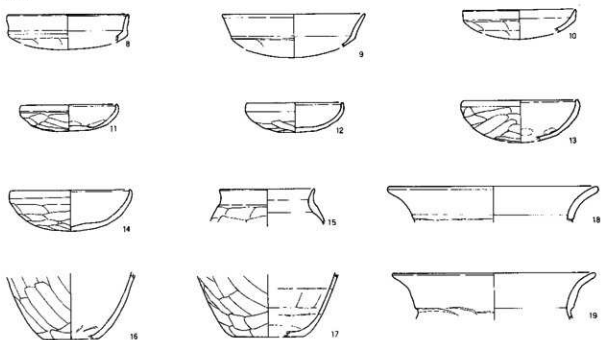


第92図 第192・193号住居跡カマド

SJ192



SJ193



SJ194



第93図 第192～194号住居跡出土遺物

遺物は土師器の環が出土している。小破片のみで時期の判別が難しいが、重複関係から7世紀後半以前のものと推定される。

第190号住居跡 (第89図)

調査区の中央、E-25・26グリッドに位置する。第52号掘立柱建物跡、第48号井戸跡と重複関係にあ

る。第52号掘立柱建物跡との前後は不明で、第48号井戸跡より古い。

床面まで削平されており、壁間溝の範囲を遺構の範囲とした。

平面形は方形で、カマドより北側が狭くなっている。規模は長軸4.05m、短軸3.53mである。主軸方

第40表 第192～194号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師高坏		3.6		EGJ	2	橙褐	50	1区
2	土師甕		1.5	4.4	ABCE	2	褐	80	3区 覆土
3	土師坏	(12.0)	4.0		ADEH	1	橙褐	10	1区
4	土師坏	(15.2)	3.5		BEG	1	茶褐	10	4区
5	土師鉢	(13.8)	3.7		ABE	1	茶褐	5	4区
6	土師坏	(9.8)	2.5		ADE	2	赤褐	25	3区 覆土
7	土師坏	(12.0)	2.5		BEG	1	褐	10	2区
8	土師坏	(12.8)	3.0		BDEH	2	明褐	10	
9	土師坏	(15.0)	3.5		EH	3	橙	15	
10	土師坏	(12.0)	2.4		BCBHJ	2	淡褐	15	P 2
11	土師坏	(10.2)	2.8		DE	2	橙褐	45	P 2
12	土師坏	(10.0)	3.1		DRH	2	橙褐	40	
13	土師坏	(12.0)	4.3		BDE	2	橙褐	40	やや風化
14	土師坏	12.6	4.4		ADE	2	褐	75	No 8
15	土師小型甕	(10.0)	3.8		BDEH	2	褐	20	
16	土師甕		7.0	(5.8)	BCEIJ	2	褐	10	カマド
17	土師甕		6.7	(7.4)	BCDEHJ	2	褐	25	カマド
18	土師甕	(22.0)	3.8		BDEHI	2	褐	60	カマドNo.1・3 カマド
19	土師甕	(21.4)	5.0		BCEIJ	2	橙褐	20	
20	土師甕		16.2		ABEJ	1	橙褐	40	No.3・5
21	砥	石	長 5.7cm 幅 3.1cm 厚さ 2.0cm		孔徑 0.6cm		重量 33.65g		石材 上下ニッ所に孔有り
22	土	雑	長 (4.5cm) 最大径 1.4cm		孔徑 0.4cm		重量 8.41g	BEJ 2	時赤褐 残率 80%

向は、N-30°-Eを指す。床面、覆上の状況は不明である。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は皿状に掘り込まれ、壁から突出している。1・2層は掘り方である。火床面の状況は不明である。灰層、天井部の崩落上は不明である。袖は確認できなかった。カマドの南側には、径60cm、深さ30cmの土壌があり、貯蔵穴と考えられる。覆土は埋め戻しである。柱穴と考えられるものは確認していない。

遺物は土師器の小破片が出土したのみである。また覆土中から弥生時代中期の壺が出土している。(第30図42) 時期は不明である。

第191号住居跡 (第90図)

調査区の北側、A・B-29グリッドに位置する。第150号土壌と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。遺構の東側の大半を擾乱により壊されていた。

平面形は方形と推定される。規模は南北方向2.56m、東西方向2.03m、深さ0.06mである。主軸方向は、東カマドと想定した場合、N-72°-Eとなる。床面は平坦で、覆土は自然堆積である。

カマドは東壁もしくは北壁に造られていたと考えられる。柱穴等と考えられるものは確認できなかった。

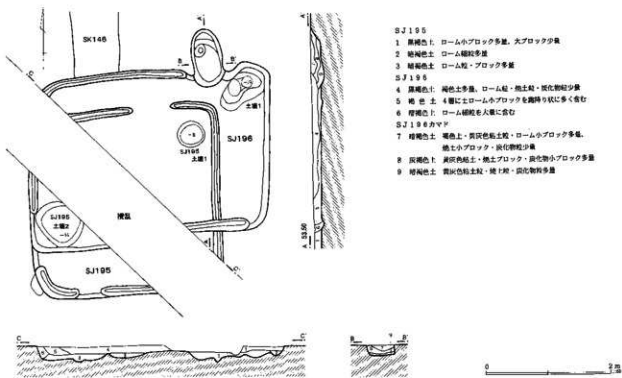
遺物は土師器の坏が出土している。時期は8世紀初頭である。

第192号住居跡 (第91図)

調査区の北側、B-29グリッドに位置する。第193・194号住居跡、第143・268号土壌と重複関係にあり、第194号住居跡より新しく、第193号住居跡、第143・268号土壌より古い。

平面形は方形である。規模は長軸4.34m、短軸4.25m、深さ0.21mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦で、全体に貼り床(4層)が施されていた。覆土は自然堆積である。

カマドは西壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土壌状に掘り込まれ、奥壁は段になっている。ほゞ壁の範囲に収まっている。8層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(5層下)は床面よりやや上位となっている。5層は灰層、2~4・6・7層は天井部の崩落土である。袖は黄灰色粘土を貼り付けて



第94図 第195・196号住居跡

造られていた。柱穴は4基検出された。径20~30cm、深さ30~40cmで、覆土の状況は確認できなかった。

遺物は、土師器の環・鉢・高杯が出土している。1は混入と考えられる。小破片が多く明確ではないが、時期は7世紀後半と考えられる。

第193号住居跡 (第91図)

調査区の北側、B・C-29・30グリッドに位置する。第192・194号住居跡、第204号土塊と重複関係にあり、第192・194号住居跡より新しく、第204号土塊より古い。

平面形は方形である。規模は長軸4.78m、短軸4.38m、深さ0.16mである。主軸方向は、N-80°-Eを指す。床面は平坦で、覆土は自然堆積である。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は深い土壇状に掘り込まれ、壁からやや突出している。13~15層は掘り方で、中に拳代の礫が入っていた。火床面は2枚ある。(5層下、11層下)前者は床面とほぼ同じ高さ、後者はやや下位である。5・11層は灰層、2~4層は天井部の崩落土である。楯は両側で確認され灰色粘土を貼り付けて造られてい

た。貯蔵穴はカマドの南側で確認され、長径80cm、短径70cm、深さ40cmである。柱穴は4基検出された。径20~30cm、深さ40~60cmで、1層は柱礎である。1の底面からは拳代の礫が出土している。

遺物は土師器の環・小型壺・甕、須恵器の環、砥石が出土している。16~18はカマドから出土した。21は上下に穿孔が施されている。時期は7世紀後半である。

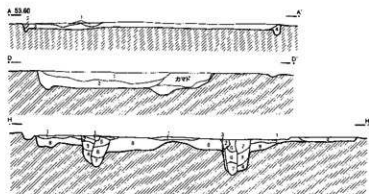
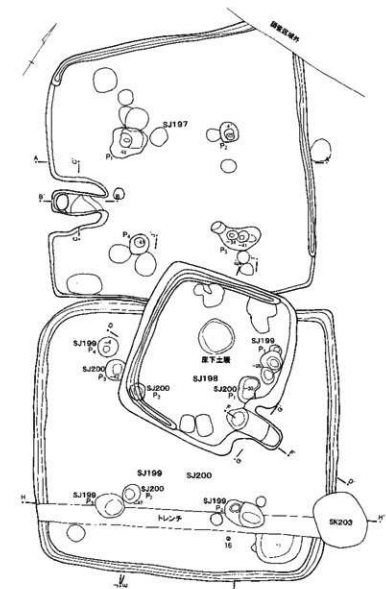
第194号住居跡 (第91図)

調査区の北側、B-29グリッドに位置する。第192・193号住居跡、第142・143号土塊と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。

平面形は方形である。規模は長軸3.64m、短軸3.47m、深さ0.18mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦で、覆土は埋め戻しの可能性がある。

カマドは確認されず、東壁もしくは北壁に造られていたと推定される。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

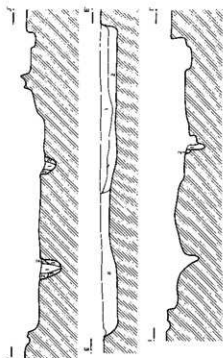
遺物は土師器の小破片、土錘が出土したのみであ



SJ197

- 1 白色粘土
- 2 黒色土
- 3 暗褐色土 焼土粒を中々多、白色粘土ブロック少量
- 4 黒色土 ローム粒を中々多

0 2m



SJ197カマフ

- 1 暗灰褐色土 白色粉粒地・ローム粒含む
- 2 暗褐色土 焼土粒多量、ローム粒含む
- 3 暗褐色土 灰少量、ローム粒・焼土粒含む
- 4 黒褐色土 F ロームブロック含む
- 5 暗灰褐色土 粘土・焼土粒含む
- 6 黒褐色土 L ローム粒少量
- 7 暗褐色土 L ローム粒多量
- 8 暗褐色土 L ローム粒含む

SJ198

- 1 暗褐色土 ローム粒を中々量りに含む、焼土粒少量
- 2 暗褐色土 ローム粒細、小ブロック少量、焼土粒若干

SJ198カマフ

- 3 暗褐色土 黄褐色土・焼土小ブロック、炭化物粒少量
- 4 赤灰色土 焼土ブロック・黄褐色粘土ブロック多量
- 5 暗褐色土 ローム小ブロック・焼土小ブロック若干
- 6 暗灰色土 灰白色粘土・焼土粒・小ブロック多量
- 7 暗灰褐色土 コーム小ブロック少量
- 8 黒褐色土 ローム小ブロック少量

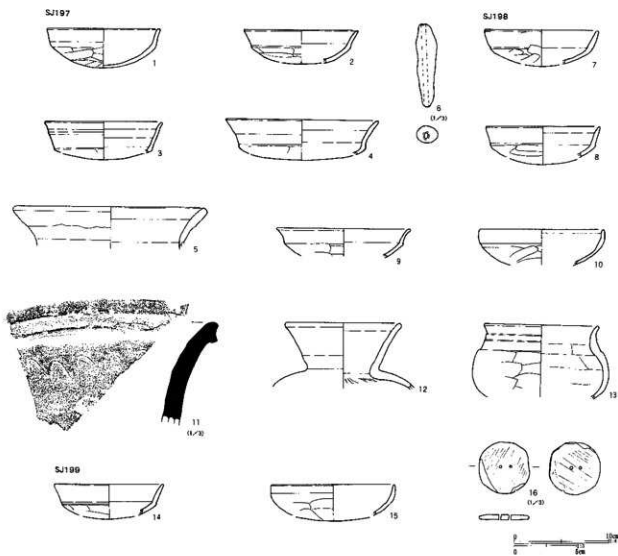
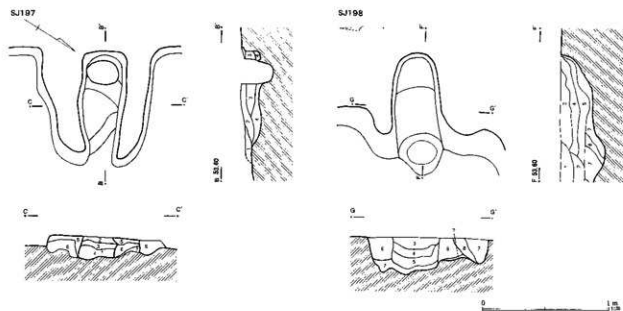
SJ199・200

- 1 暗褐色土 コーム粒多量
- 2 暗褐色土 ローム粒多量、黄色土ブロック少量
- 3 暗灰褐色土 暗褐色土を主体にロームブロック多量
- 4 暗褐色土 ローム粒・小ブロック少量
- 5 暗褐色土 4層と同程度だが、ローム粒・小ブロック多量
- 6 暗褐色土 ローム粒多量
- 7 暗褐色土 ローム粒・ブロック大量
- 8 暗灰褐色土 ほぼ3層と同様
- 9 黒褐色土 ローム粒・焼土粒多量 (SK203)

SJ200ピット

- 1 暗褐色土 ローム粒少量
- 2 暗褐色土 ローム大ブロック多量
- 3 暗灰褐色土 ローム大ブロック多量

第95図 第197～200号住居跡



第96図 第197・198号住居跡カマド・第197～199号住居跡出土遺物

第41表 第197～199号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(11.8)	4.1		ADE	2	橙褐	20	
2	土師環	(12.0)	3.4		ADE	2	明橙褐	15	
3	土師環	(12.4)	3.3		DE	1	黒	10	
4	土師皿	(16.0)	3.7		ADE	2	橙褐	15	
5	土師壺	(20.0)	4.4		ADEH	2	赤褐	10	床下
6	土師	口径 6.5cm	最大径 1.7cm	孔径 0.4cm	重量 11.84g	ADE	2	暗褐	残率100%
7	土師環	(12.0)	3.5		ABG	2	明褐	15	1区
8	土師環	(12.0)	3.3		AB	2	橙褐	20	1区
9	土師環	(14.0)	3.0		ABE	1	褐	10	
10	土師環	(13.0)	3.8		ABEG	1	褐	5	4区
11	須恵	8.2			BEIJ	1	珒青灰	破片	2区 本野産
12	土師	(12.0)	7.0		ARDE	1	褐	35	SJ197・199
13	土師小壺	(12.0)	7.7		ABE	2	橙褐	15	
14	土師環	(11.4)	3.3		ABEH	3	橙褐	5	
15	土師環	(13.0)	3.3		BEII	2	赤褐	10	
16	有孔円板	長4.1cm	短径4.0cm	孔径0.2cm	厚さ0.4cm	重量12.54g			No.1

る。時期は不明だが、遺構の重複関係から7世紀のものと考えられる。

第195号住居跡 (第94区)

調査区の北東側、B-30グリッドに位置する。第196号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。第196号住居跡に遺構の北側を壊されている。

平面形は方形である。規模は長軸3.10m、短軸2.91m、深さ0.10mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦で、全体に貼り床(5層)が施されていた。覆土は埋め戻しである。

カマドは北壁の東寄りに造られていたと考えられる。第196号住居跡に完全に壊されており、燃焼部の状況等は不明である。床下土壌は2基検出している。1は径40cm、深さ8cmで、その位置から貯蔵穴の可能性がある。2は径70cm、深さ14cmである。覆土の状況は確認できなかった。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の図示不能な小破片が出土したのみである。時期は不明である。

第196号住居跡 (第91区)

調査区の北側、B-30グリッドに位置する。第195号住居跡、第146号土壇と重複関係にあり、前者より新しく、後者との関係は不明である。

平面形は長方形である。規模は長軸3.77m、短軸

2.70m、深さ0.05mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦で、覆土は自然堆積である。

カマドは北壁のやや東寄りに造られていた。燃焼部は土壌状に掘り込まれ、壁から突出している。火床面(9層下)は床面よりやや下位である。9層は灰層、7・8層は大井部の崩落土である。袖は確認できなかった。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

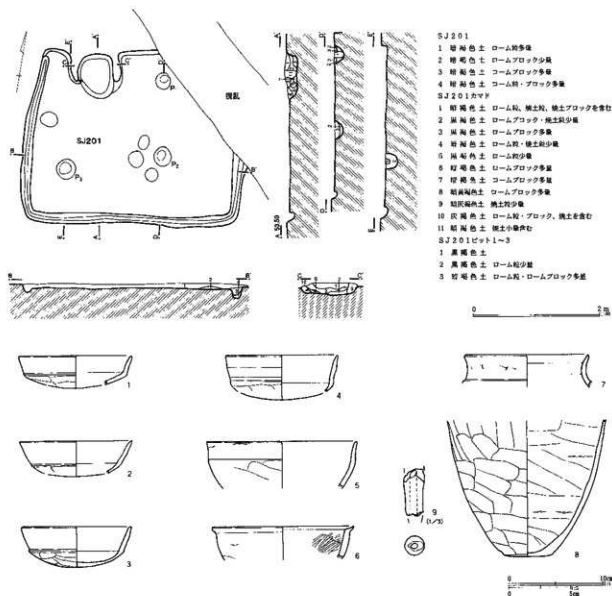
遺物は土師器、須恵器の図示不能な小破片が出土したのみである。時期は不明だが10世紀と思われる。

第197号住居跡 (第95区)

調査区の北東側、A・B-30グリッドに位置する。第198号住居跡と重複関係にあり、第199・200号住居跡と近接する。第198・199号住居跡より古く、第200号住居跡との関係は不明である。遺構の北側は調査区域外にかかる。

平面形は方形である。規模は長軸4.51m、短軸4.33m、深さ0.08mである。主軸方向は、N-53°-Eを指す。床面は平坦である。覆土は自然堆積である。

カマドは西壁の南寄りに造られていた。燃焼部は幅の狭い長方形の土壌状に掘り込まれ、ほぼ壁内に収まっている。4層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(3層下)は床面とはほぼ同じ高さである。3層は灰層、2層は大井部の崩落土である。袖は両側



第97図 第201号住居跡・出土遺物

第42表 第201号住居跡出土遺物観察表

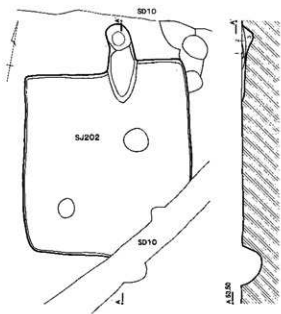
番号	器種	口径	高	底径	胎土	挽成	色調	残率	備考
1	土師 杯	(11.8)	3.1		ABEII	2	橙褐色	20	
2	土師 杯	(12.0)	3.4		BCDEH	3	橙褐色	15	
3	土師 杯	11.6	4.3		BCEH	2	淡褐色	70	内面着色処理
4	土師 杯	(12.0)	3.9		BEH	2	灰褐色	45	カマド
5	土師 鉢	(15.8)	5.0		BEH	2	橙褐色	15	
6	土師 碗	(15.0)	3.5		DEII	2	淡橙褐色	5	内面ミガキ
7	土師 甕	(13.0)	3.5		ABCDEH	3	橙褐色	10	床下面
8	土師 甕	14.4		5.2	BCDEH	2	黒褐色	30	
9	土 鉢	長(3.7cm)		最大径1.6cm	孔径0.5cm		重疊7.47g	DE 1	残率50%

で確認され、暗灰褐色粘土を貼り付けて造られていた。柱穴は確認されなかった。

遺物は、土師器の杯・皿・壺、土師が出土している。時期は7世紀前半である。

第198号住居跡 (第95図)

調査区の北東側、B-30グリッドに位置する。第197・199・200号住居跡と重複関係にあり、そのいずれよりも新しい。



SJ302カマド

- 1 焼成粘土 灰土ブロック多量混入
- 2 灰白粘土 同層
- 3 焼成粘土 ロームブロック (2.5cm) 多量

0 2m

第98図 第202号住居跡

平面形はやや各辺が丸みを持つ方形である。規模は長軸2.67m、短軸2.54m、深さ0.15mである。主軸方向は、N-77°-Eを指す。床面は遺構の南側がやや高くなっている。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は幅の狭い長方形の土塊状に掘り込まれ、突出している。7層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(5層下)は床面とはほぼ同じ高さである。5層は灰層、3・4層は天井部の崩落土である。軸は両側で確認され、灰白色粘土を貼り付けて造られていた。床下土壌は径60cm、深さ20cmである。柱穴は確認されなかった。

遺物は、6・7世紀の土師器の坏・小型壺・鉢、須恵器の甕が出上しているが、本住居跡に伴うものではなく、重複関係にある第197・199・200号住居跡のものと考えられる。時期は10-11世紀と推定される。

第199号住居跡 (第95図)

調査区の北東側、B-30・31グリッドに位置する。

第198・200号住居跡と重複関係にあり、第197号住居跡が近接する。第197・200号住居跡より新しく、第198号住居跡より古い。第200号住居跡に重なっており、同住居跡を建て替えた可能性がある。床面近くまで削平されている。

平面形は方形である。規模は長軸4.82m、短軸4.25mである。主軸方向は、北カマドと推定した場合、N-32°-Wとなる。床面は平坦で、覆土の状況は不明である。

カマドは北壁に造られていたと考えられる。柱穴は4基確認され、5-7層は柱の抜き取り痕である。

遺物は、土師器の坏、石製模造品が出土している。第198号住居跡出土遺物との間に齟齬はなく、いずれも本住居跡に帰属するものと考えられる。16は混入と考えられる。表裏面とも丁寧に研磨される。側面はケズリのままの部分も見られる。時期は7世紀中葉である。

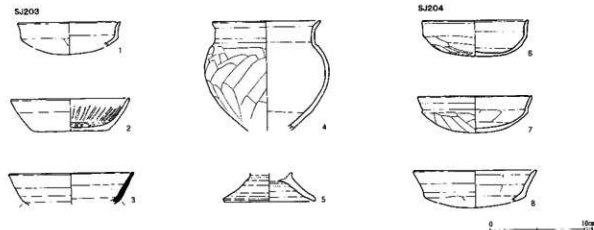
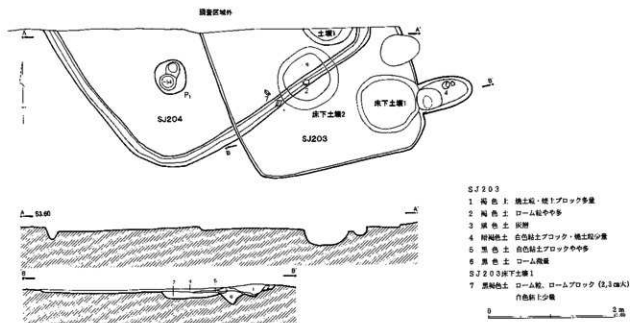
第200号住居跡 (第95図)

調査区の北東側、B-30・31グリッドに位置する。第198・199号住居跡と重複関係にあり、第197号住居跡に近接する。第198・199号住居跡より古く、第197号住居跡との前後関係は不明である。第199号住居跡に重なっており、第199号住居跡は同住居跡を建て替えた可能性がある。床面まで第199号住居跡に壊されている。

平面形は方形である。規模は第199号住居跡より、やや小さくなると考えられるか不明である。主軸方向は、第199号住居跡と同様であれば、N-32°-Wとなる。床面の状況は不明だが、掘り方(8層)を持ち、全体に貼り床が施されていたと考えられる。覆土の状況は不明だが、埋め戻されていた可能性がある(1層)。

カマドは北壁に造られていたと考えられる。柱穴は4基確認され、1層は柱の抜き取り痕である。

遺物は、皆無である。時期は不明だが、第199号住居跡に近接する時期だとすれば、7世紀中葉と考えられる。



第99図 第203・204号住居跡・出土遺物

第43表 第203・204号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(10.8)	2.6		EG	3	橙褐色	5	
2	土師環	(12.6)	3.4	(8.2)	DE	2	赤褐色	40	Na.1 内面放射+ラセン暗文
3	須恵環	(13.2)	3.3		ABEHK	2	灰白	15	秋田産 A
4	土師小型甕	11.4	11.6		ADEH	1	紫	90	カマド No.2
5	土師台付甕		3.0	9.3	ADEH	1	赤褐色	90	床下土層1
6	土師環	11.2	3.8		AE	2	橙褐色	80	
7	土師環	(12.0)	3.8		BDEH	1	赤褐色	30	SJ203 No.1
8	土師環	(13.0)	3.3		AEG	2	暗褐色	5	床下

第201号住居跡 (第97図)

調査区の北東側、B・C-30グリッドに位置する。遺構の北東コーナーは攪乱により壊されている。

平面形は長方形である。規模は長軸4.46m、短軸3.54m、深さ0.06mである。主軸方向は、N-7°-W

を指す。床面は平坦である。覆土は埋め戻しである。

カマドは北壁の西寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、ほぼ壁内に収まっている。3・6~8層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(2・4層下)は床面より下位である。2・4層は

灰層、1層は大井部の崩落土である。袖は両側で確認され、暗灰褐色粘土を貼り付けて造られていた。柱穴は3基確認された。径20～30cm、深さ15～20cmで、1層は柱底である。

遺物は、土師器の環・鉢・甕、土錘が出土している。時期は7世紀前半である。

第202号住居跡 (第98図)

調査区の北東側、B・C-30グリッドに位置する。第10号溝跡と重複するが、前後関係は不明である。遺構の南東コーナーは第10号溝跡により壊されている。床面まで削平されている。

平面形は長方形で、カマドの西側が狭くなっている。規模は長軸2.85m、短軸2.77mである。主軸方向は、N-15°-Wを指す。床面、覆上の状況は不明である。

カマドは北壁のやや東寄りに造られていた。燃焼部は皿坑状に掘り込まれ、突出している。3層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(2層下)は床面より下位である。2層は灰層、1層は大井部の崩落土である。袖、柱穴等は確認されなかった。

遺物は皆無である。時期は不明である。

第203号住居跡 (第99図)

調査区の北東側、A-31グリッドに位置する。第204号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が新しい。遺構の北側は調査区域外にかかる。

平面形は方形もしくは長方形と推定される。規模は長軸3.00m、短軸方向2.45m、深さ0.03mである。主軸方向は、N-70°-Eを指す。床面は平坦である。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は段を持って掘り込まれ、突出している。6層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(2・4層下)は床面より下位である。3層は灰層、1層は大井部の崩落土である。袖は確認できなかった。床下土塊1

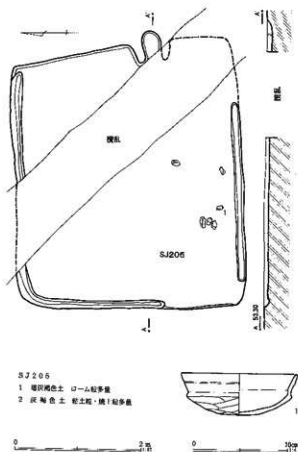
は径90cm、深さ5～7cmで埋め戻され、上面の東半分には白色粘土が貼り付けられていた。床下土塊2は径1.0m、深さ10cmで、床下土塊1とは同じ上で埋め戻されていた。

遺物は、土師器の環・小型甕・台付甕、須恵器の環が出土している。4はカマド出土である。時期は9世紀中葉である。

第204号住居跡 (第99図)

調査区の北東側、A-30-31グリッドに位置する。第203号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。遺構の北側は調査区域外にかかる。床面近くまで削平されていた。

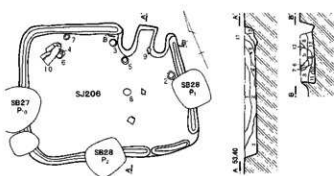
平面形は方形もしくは長方形と推定される。規模は調査区内で東西方向3.45m、南北方向2.60m、深



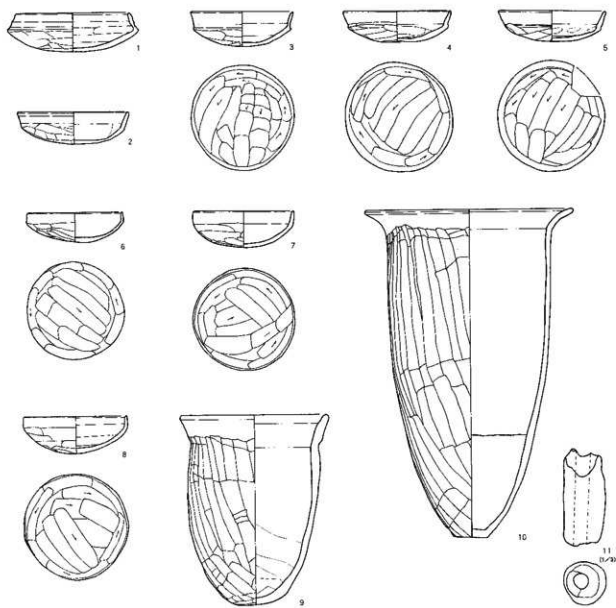
第100図 第205号住居跡・出土遺物

第44表 第205号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	12.2	4.4		BDEH	3	暗褐色	60	粘土粗く、砂粒多い



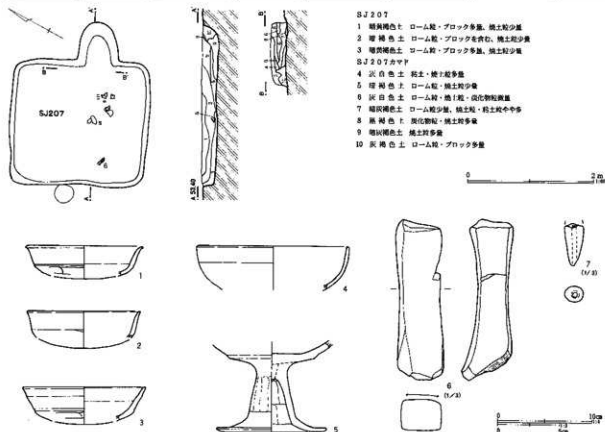
- 5J206
- 1 緑褐色土 ローム多量、白色陶磁器少量
 - 2 緑褐色土 ローム少量
 - 3 黒褐色土 ローム陶磁器、焼土粒少量
 - 4 黒褐色土 ローム陶磁器、焼土粒・灰色粘土ブロック (2.3cm大) 少量
 - 5 緑褐色土 焼土粒多量、灰色粘土ブロック・ローム粒少量、石灰質
 - 6 緑褐色土 焼土粒・餅付物群、群生群食粒、腐性含有あり
 - 7 赤褐色土 焼土
 - 8 灰色 焼土
 - 9 黒灰色土 灰多量
 - 10 埋戻し土: ローム粒・ロームブロック多量
 - 11 緑褐色土 コーム粒・焼土粒少量
 - 12 埋戻し土: 灰色粘土・ローム粒少量、焼土粒・焼土ブロック多量
 - 13 黒褐色土 ロームブロック (2.3cm大) 多量



第101図 第206号住居跡・出土遺物

第45表 第206号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	4.1		ADE	2	橙褐	25	板土・床下
2	土師環	11.7	3.4		DEG	1	褐	100	No.8
3	土師環	10.8	3.6		AEI	1	淡褐	100	No.5
4	土師環	11.4	3.3		DEHJ	2	橙褐	100	No.3
5	土師環	11.2	3.2		DEI	1	褐	95	No.6
6	土師環	10.0	3.1		AEH	2	橙褐	100	No.2
7	土師環	10.6	3.8		ADEH	1	橙褐	100	No.4
8	土師環	11.0	3.9		ADEH	1	橙褐	100	No.10
9	土師小型甕	15.4	20.2		BDEJ	2	明褐	85	カマド No.7
10	土師釜	(21.8)	34.6	3.5	BDEJ	1	暗褐	60	No.1
11	土	錘	長7.7cm	最大径3.4cm	孔径1.0cm		重量77.32g	EJ	1 褐 残率80% 床下層面



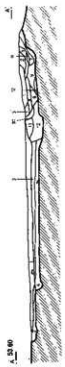
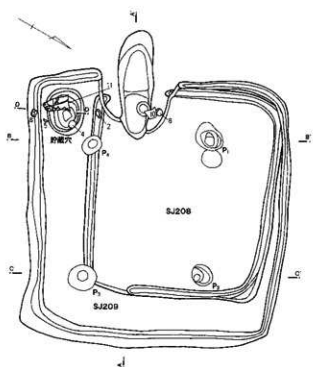
第102図 第207号住居跡・出土遺物

第46表 第207号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.2)	3.1		AE	1	橙褐	10	全体に摩滅、粉びょう胎土
2	土師環	(12.0)	2.8		BD	3	淡褐	5	カマド
3	土師環	(13.0)	3.6		ABDEJ	2	暗褐	15	カマド
4	土師筒	(15.8)	4.7		AEH	2	褐	10	
5	土師高環		9.6	(11.7)	ADEH	2	明褐	30	No.2 風化のため調整不明瞭
6	砥	長12.6cm	幅3.6cm	厚さ2.4cm			重量203.10g		磁灰石製 No.8
7	土	錘	長3.3cm	最大径1.5cm	孔径0.4cm		重量4.50g	ADE	2 明褐 残率50%

き0.03mである。主軸方向は東カマドと想定した場合、N-55°-Eとなる。床面は平坦である。覆上の状況は確認していない。

カマドは検出されなかった。土壌1は径70cm、深さ20cmである。貯蔵穴等の可能性もある。柱穴は1基確認され、重複することから建て替えの可能性も



- SJ208・209
- 1 暗褐色土 ローム粒を含む、焼土粒を多く含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒中多
 - 3 暗褐色土 ローム粒多量、ロームブロック (柱穴) 少量
 - 4 暗褐色土 ローム粒少量、ロームブロック含む
- SJ209サマ
- 1 暗褐色土 焼土粒・粘土粒多
 - 2 暗褐色土 焼土多量、崩化した焼土ブロックを含む
 - 3 灰白色土 粘土・焼土粒多量
 - 4 暗褐色土 灰多量、焼土粒を含む
 - 5 灰白色土 粘土・焼土粒多量
 - 6 暗褐色土 粘土粒・ローム粒を含む
 - 7 暗褐色土 焼土粒・粘土粒多量
 - 8 暗褐色土 ローム粒多量、焼土粒・炭化物少量
 - 9 暗褐色土 焼土粒少量
 - 10 暗褐色土 焼土粒・粘土粒を含む
 - 11 暗褐色土 ローム粒を含む、焼土粒・炭化物粒少量
 - 12 灰白色土 粘土層、焼土粒を少し含む
 - 13 暗褐色土 ローム粒多量
 - 14 暗褐色土 炭化物多、焼土粒少量
 - 15 暗褐色土 ローム粒少量
 - 16 灰白色土 粘土層、焼土粒少量
 - 17 暗褐色土 焼土粒・粘土粒を多く含む
 - 18 暗褐色土 ローム粒多量
 - 19 暗褐色土 ロームブロック多量
- SJ209ピット1-4
- 1 暗褐色土 ローム粒・粘土粒中多
 - 2 暗褐色土 ローム粒・焼土粒、炭化物粒の塊状を含む
 - 3 暗褐色土 ローム粒・ブロック多量
 - 4 暗褐色土 ローム粒多量
- SJ209跡火
- 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒多量
 - 3 暗褐色土 ローム粒中多、焼土粒を多く含む

第103図 第208・209号住居跡

ある。径50cm、深さ50cmと54cmの2ヶ所の掘り込みがある。

遺物は、土師器の環が出土している。7は床面出土である。時期は7世紀前半である。

第205号住居跡 (第100図)

調査区の北東側、D-31・32グリッドに位置する。他の住居跡とはやや離れた位置にある。北西-南東方向の対角線上を掘削により壊されている。

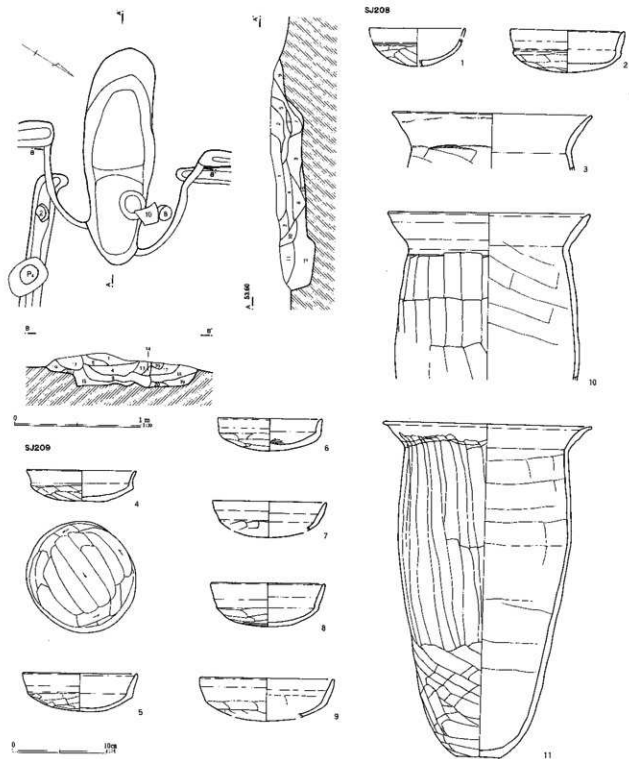
平面形は方形である。規模は長軸4.18m、短軸3.70m、深さ0.06mである。主軸方向は、N-76-Eを指す。床面は平坦である。覆上は埋め戻しの可能性がある。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は小さく、壁からやや突出している。火床面(2層下)は床面とはほぼ同じ高さである。2層は天井部の崩落土である。袖は白色粘土を貼り付けて造られていた。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は土師器の環が出土している。また南側の壁際には片岩の大型の礫がまとまって出土している。カマドの構築材の可能性もある。時期は、7世紀前半である。

第206号住居跡 (第101図)

調査区の北東側、A・B-32グリッドに位置する。第27・28号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居



第104図 第208・209号住居跡カマド・出土遺物

跡の方が古い。

平面形は長方形である。規模は長軸2.85m、短軸2.51m、深さ0.14mである。主軸方向は、N-65°-Wを指す。床面は平坦である。覆土は自然堆積である。

カマドは北壁の東寄りに造られていた。燃焼部は

小さい長方形で、ほぼ壁内に収まっている。10・11・13層は掘り方で、埋め戻されている。火床面（9層下）は床面とほぼ同じ高さである。9層は灰層、5・12層は天井部の崩落土である。軸は灰色粘土を貼り付けて造られていた。柱穴と考えられるものは確認

第47表 第208・209号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環		2.8		AEH	3	橙褐	20	
2	土師環	(12.0)	4.5		ADE	1	橙褐	40	No.1
3	土師甕	(21.0)	5.9		ABCEH	2	橙褐	25	
4	土師環	11.5	3.3		AEGH	1	橙褐	100	No.2
5	土師環	(12.0)	4.0		ABEG	2	茶褐	85	No.1
6	土師環	(11.0)	3.4		ABG	2	茶褐	20	
7	土師環	(12.0)	3.1		ADE	3	明褐	20	
8	土師環	12.0	4.6		ABG	2	出褐	65	No.3
9	土師環	(14.0)	4.1		BFG	1	暗褐	20	
10	土師甕	(21.4)	17.7		BCDE	2	明褐	25	No.2
11	土師甕	22.0	35.2	(4.8)	BEJ	1	茶褐	50	No.1

できなかった。

遺物は遺存率の高いものが多く、土師器の環・甕、土鍬が、床面から出土している。特に2～8の環類は正位の状態、間隔を置いて出土しており、意図的に遺棄された可能性もある。9はカマド出土である。10の甕は底部よりやや上位の外周に焼土が幅2～3cmの帯状に付着し、底部は煤が付着する。使用法を窺わせるものである。時期は、7世紀後半である。

第207号住居跡 (第102図)

調査区の北東側、B-32グリッドに位置する。

平面形は方形である。規模は長軸2.21m、短軸1.97m、深さ0.24mである。主軸方向は、N-63°-Eを指す。床面は平坦である。覆土は埋め戻しの可能性がある。

カマドは東壁のほぼ中央に造られていた。燃焼部は大きく、壁から突出している。火床面(9層下)は床面と同じ高さである。9層は灰層、6・10層は天井部の崩落土である。柚は検出できなかった。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は土師器の環・椀・高台付環、土鍬、砥石が出土している。小破片が多く、4・5は混入と考えられる。6の砥石は4面とも使い込まれている。時期は、確実ではないが、カマド出土の3から7世紀中葉としておきたい。

第208号住居跡 (第103図)

調査区の北東側、B・C-32グリッドに位置する。第209号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が

古い。第209号住居跡は本住居跡を拡張したものである。

平面形は長方形である。規模は長軸3.30m、短軸3.03m、深さ0.08mである。主軸方向は、N-62°-Eを指す。床面は平坦で、覆土は自然堆積の可能性もあるが、埋め戻しと考えられる。

カマドは第209号住居跡のカマドと重複し、掘り方も検出できなかった。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

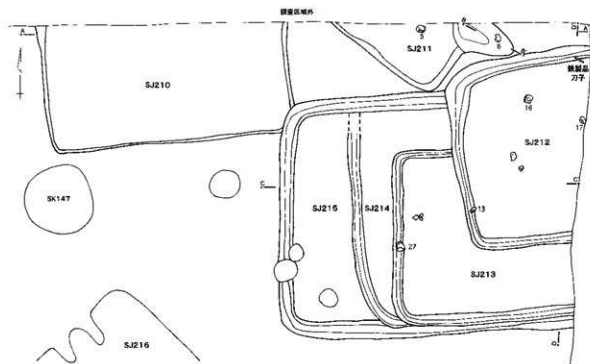
遺物は、土師器の環・甕が出土している。2はカマド脇の壁周溝から出土している。時期は7世紀中葉である。

第209号住居跡 (第103図)

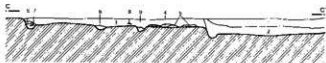
調査区の北東側、B・C-32グリッドに位置する。第208号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が新しい。本住居跡は第208号住居跡を埋め戻して、拡張したものと考えられる。

平面形は方形である。規模は長軸4.21m、短軸4.03m、深さ0.1mである。主軸方向は、N-62°-Eを指す。床面は平坦で、全面に貼り床が施されている。覆土は自然堆積である。

カマドは西壁のやや南寄りに造られ、第208号住居跡のカマドと重複し、完全に壊れている。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁から突出している。7～14層は掘り方である。15層は第208号住居跡の灰層の可能性もある。火床面(4層下)は床面とほぼ同じ高さである。北側にピット状の掘り込みがあり、11の甕を据えた可能性もある。4層は灰層、1～3層



A SJ210



SJ211のVV

- 1 黒褐色土 ローム粒・粘土粒散在
- 2 黒褐色土 白色粘土多量、焼土粒・粘土ブロック (2.1m尺) 散在
- 3 黒褐色土 ローム粒多量

SJ212

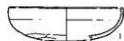
- 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量
- 2 暗褐色土 ローム粒中多量、炭化物散在、焼土粒を3割

SJ215

- 3 暗褐色土 ローム粒中多量、焼土粒、炭化物粒少量
- 4 灰白色土 粘土・焼土多量
- 5 黒褐色土 ローム粒散在
- 6 暗褐色土 ローム粒多
- 7 暗褐色土 ローム粒散在
- 8 暗褐色土 ローム粒散在 (SJ214)
- 9 暗褐色土 ローム粒・ブロックを散在 (SJ213)

0 3m

SJ210



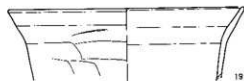
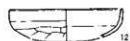
0 10cm

第105図 第210～215号住居跡・出土遺物(1)

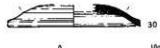
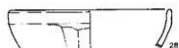
SJZ11



SJZ12



SJZ13~215



0 10cm

第106图 第210~215号住居跡出土遺物(2)

第48表 第210～215号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	3.4		ADE	2	褐	10	
2	土師環	(12.0)	3.1		DEH	2	橙褐	10	
3	土師環	(13.8)	2.9		ADE	2	橙褐	5	
4	土師甕		5.3	3.0	AEJ	1	褐	25	
5	土師環	11.8	3.4		AEG	2	赤褐	100	Na.2 内面黒色処理
6	土師環	10.2	3.3		AE	2	褐	85	カマドNa.1
7	土師環	(12.0)	2.6		AEG	1	橙褐	15	カマド
8	土師環	(12.0)	2.8		EGII	3	橙褐	10	
9	土師環	(12.0)	3.5		ADE	2	褐	10	
10	土師環	(11.6)	2.5		AETI	2	褐	10	内面黒色処理
11	土師環	(11.6)	3.7		DEH	2	橙褐	15	
12	土師環	(12.0)	3.0		DEH	2	橙褐	15	床下面
13	土師環	12.6	3.2		DEH	1	茶褐	30	Na.6
14	土師環	(12.0)	3.1		DEH	2	褐	10	床下面底部内面にへう記号「×」
15	土師環	(14.4)	4.4		ADE	2	褐	20	覆上 内面に「×」状の彫刻あり
16	須恵環	(13.6)	4.1	9.0	EHK	1	灰白	65	Na.3 不明 秋間産 A
17	須恵環	(13.8)	3.8	8.1	BEIK	1	明青灰	70	Na.2 金山産 産か A
18	須恵環	(13.5)	3.4	7.9	BEFH	3	乳白	35	覆土 南比企産 A
19	土師甕	(25.0)	7.8		ADE	1	橙褐	10	覆上
20	土師甕	(22.8)	6.1		ADEII	2	赤褐	15	
21	土師甕	(22.8)	6.0		ABDE	2	赤褐	10	
22	土師環	(12.0)	3.5		DEII	3	明褐	10	覆土
23	土師環	(12.6)	3.2		DEH	2	橙褐	20	覆土
24	土師環	(14.0)	2.6		DEH	2	明褐	15	
25	土師環	(14.0)	3.4		DE	2	褐	10	覆土
26	土師環	(13.0)	3.2		ADE	2	橙褐	10	覆土
27	土師環	13.1	3.5		DE	1	橙褐	80	Na.2 確認面
28	土師鉢	(17.0)	4.1		ADEG	1	茶褐	10	覆土
29	小型壺	(7.3)	4.4	(6.6)	ADEH	1	明褐	40	体部～底部黒斑あり
30	須恵壺	(14.0)	2.3		EIK	1	灰白	30	覆上 秋間産 A

は天井部の崩落土である。袖は両側で確認され、灰白色粘土(17・18層)を貼り付けて造られている。貯蔵穴はカマドの南側にあり、径60cm、深さ40cmで、中ほどに段を持ち、埋め戻されている。柱穴は4基確認された。径30～40cm、深さ50～80cmで、1～3層は柱の抜き取り痕である。

遺物は、土師器の環・甕が出土している。4の環は完形で、貯蔵穴上面から逆位の状態で出土した。5の環は北側の袖の上面から正位の状態で出土した。11の甕は北側の袖と貯蔵穴上面から出土し、カマドを壊した際に廃棄したものと考えられる。時期は7世紀中葉である。

第210号住居跡(第105図)

調査区の北東側、A-32・33グリッドに位置する。第215号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が

新しい。遺構の北側の大部分は調査区域外にかかる。

平面形は方形と推定される。規模は東西方向3.97m、南北方向1.99m、深さ0.04mである。主軸方向は、東カマドと想定した場合N-84°Eとなる。床面は平坦である。覆土の状況は確認できなかった。

カマドは東壁もしくは北壁に造られていたと考えられる。柱穴等と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環・甕の小破片が出土している。この他に弥生土器の小破片が出土している。時期は8世紀前半である。

第211号住居跡(第105図)

調査区の北東側、A-33グリッドに位置する。第212～215号住居跡と近接する。時期的にも近接しているが本住居跡の方がやや古い。遺構の北側の大部

分は調査区域外にかかる。

平面形は方形と推定される。規模は北西—南東方向1.83m、北東—南西方向1.26m、深さ0.15mである。主軸方向は、N—65°—Wを指す。床面は平坦である。覆土は自然堆積である。

カマドは西壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は皿状に掘り込まれ、段があり、壁から突出している。3層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(2層下)は床面とほぼ同じ高さよりやや上位である。灰層は不明瞭で見とめられなかった。2層は大井部の崩落土である。袖は確認できなかった。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環が出土している。5の環は法面際の床面から上位の状態出土した。6はカマド出土である。時期は7世紀後半である。

第212号住居跡 (第105図)

調査区の北東側、A・B—33グリッドに位置する。第213—215号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。また、近接する第211号住居跡とは、本住居跡の方が新しい。遺構の東側の大部分は調査区域外にかかる。

平面形は方形と推定される。規模は南北方向2.96m、東西方向2.23m、深さ0.05mである。主軸方向は、東カマドを想定した場合、N—78°—Eとなる。床面は平坦である。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁に造られていたと考えられる。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環・甕・壺、須臾器の環が出土している。小破片が多いが、16・17は比較的遺存率が高く、床面から出土している。17は胎土や質感から群馬県太田市金山窯周辺の製品と考えられる。14・15は内面に「×」のへら記号が施されている。19は砂粒を多く含む覆土である。土器以外にも、刀子と用途不明の板状鉄製品(第269図2・第270図26)が出土している。時期にやや幅のあるように感じられるが、16・17から8世紀中葉としておきたい。

第213号住居跡 (第105図)

調査区の北東側、A・B—33グリッドに位置する。第212・214・215号住居跡と重複関係にあり、いずれよりも本住居跡の方が古い。第214・215号住居跡は本住居跡を拡張したものと考えられ、壁周溝のみをもって遺構の範囲を認定した。

平面形は長方形と推定される。規模は長軸方向2.99m、短軸2.71m、深さ0.05mである。主軸方向は、東カマドと想定した場合、W—Eとなる。床面は平坦である。第214・215号住居跡とほぼ同じ高さで、この住居跡そのものの覆土は失われている。

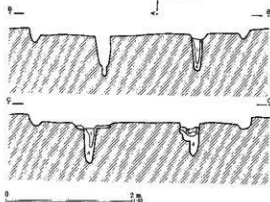
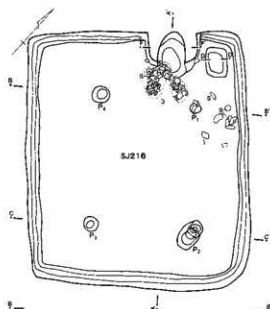
カマドは東壁もしくは北壁に造られていたと考えられる。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環・鉢・壺、須臾器の蓋が、第214・215号住居跡と一緒に取り上げられている。そのほとんどが覆土出土のもので、第215号住居跡に帰属すると考えられる。27の環も平面では本住居跡に伴うように見えるが、床面からは浮いており、第215号住居跡のものと考えられる。土器の時期は7—8世紀と幅があるが、第215号住居跡を遺存率の高い27の時期である8世紀前半とし、それに近接する時期を考慮しておきたい。

第214号住居跡 (第105図)

調査区の北東側、A・B—33グリッドに位置する。第212・213・215号住居跡と重複関係にあり、第212・215号住居跡より古く、第213号住居跡より新しい。本住居跡は第213号住居跡を拡張したものであり、第215号住居跡は本住居跡を拡張したものと考えられる。壁周溝のみをもって遺構の範囲を認定した。

平面形は長方形と推定される。規模は長軸方向3.67m、短軸方向3.07m、深さ0.05mである。主軸方向は、東カマドと想定した場合、第213・215号住居跡とほぼ同一のW—Eとなると考えられるが、西壁がやや触れることから若干北東方向に振れる可能性もある。床面は平坦である。第213・215号住居跡とほぼ同じ高さで、この住居跡そのものの覆土は失われている。

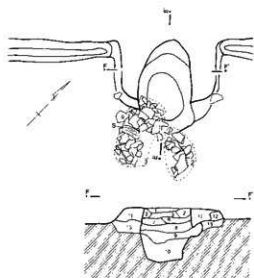
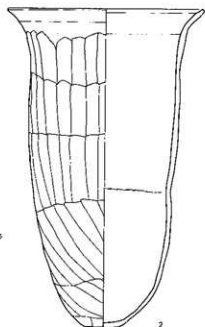
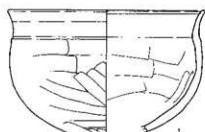


SJ216

- 1 暗褐色土 ローム殻・ブロックやヤサ
- 2 暗褐色土 ローム殻・焼土粒少量
- 3 灰褐色土 ローム殻多量

SJ216ピット1~4

- 1 暗褐色土 ローム殻少量
- 2 暗褐色土 ローム殻多量
- 3 暗褐色土 ローム殻少量
- 4 暗褐色土 ローム殻多量



SJ216ピットV

- 1 暗褐色土 ローム殻・焼土粒少量
- 2 暗褐色土 焼土粒・粘土粒を含む
- 3 暗褐色土 焼土多量
- 4 灰白色土 粘土
- 5 暗褐色土 炭化粒・焼土粒少量
- 6 黒色土 炭化物類・焼土粒少量

7 暗褐色土 ローム殻多量

8 暗褐色土 炭化粒・ローム殻を含む

9 暗褐色土 ローム殻・炭化粒少量

10 暗褐色土 ローム殻・ブロック(20cm)を含む・焼土粒少量

11 灰白色土 粘土

12 暗褐色土 炭七粒・ローム殻多量

13 暗褐色土 ローム殻多量・焼土粒少量

第107図 第216号住居跡・カマド・出土遺物

第49表 第216号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師鉢	(20.8)	13.0		ARDEHI	2	橙褐色	30	No.1・2
2	土師壺	20.7	33.7	3.7	EHJ	1	明茶褐色	70	No.3・4 カマド
3	土師壺	(18.6)	35.8	4.0	INDEJ	3	橙褐色	70	No.5・6 カマド

カマドは東壁に造られていたと考えられる。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の坏・鉢・壺、須恵器の蓋が、第213・215号住居跡と一括で取り上げられている。土器の時期は7～8世紀と幅があるが、第215号住居跡を遺存率の高い27の時期である8世紀前半とし、それに近接する時期を考えておきたい。

第215号住居跡 (第105図)

調査区の北東側、A・B-33グリッドに位置する。第210・212～214号住居跡と重複関係にあり、第210・212号住居跡より古く、第213・214号住居跡より新しい。本住居跡は第214号住居跡を拡張したものと考えられる。

平面形は長方形と推定される。規模は長軸方向4.12m、短軸3.47m、深さ0.05mである。主軸方向は、東カマドと想定した場合、W-Eとなる。床面は第213・214号住居跡とほぼ同じ高さで、平坦である。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁に造られていたと考えられる。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の坏・鉢・壺、須恵器の蓋が、第213・214号住居跡と一括で取り上げられている。そのほとんどが覆土出土のもので、本住居跡に帰属すると考えられる。27の坏も覆土出土で、本住居跡のものと考えられる。土器の時期は7～8世紀と幅があるが、遺存率の高い27から8世紀前半としておきたい。

第216号住居跡 (第107図)

調査区の北東側、B-32・33グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は長軸3.99m、短軸3.38m、深さ0.08mである。主軸方向は、N-50°Eを指す。床面は全面に貼り床が施され、平坦だが、貯蔵穴の周囲のみがやや盛り上がっている。覆土は

埋め戻しの可能性がある。

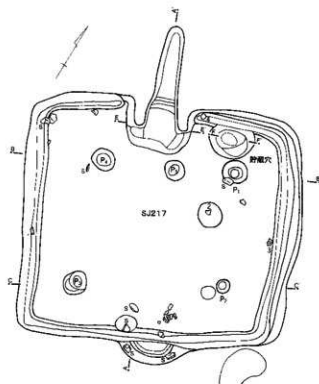
カマドは北壁の東寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁内に収まっている。7～10層は掘り方である。火床面(5層下)は床面とほぼ同じ高さである。5・6層は灰層、3・4層は天井部の崩落土である。袖は両側で確認され、灰白色粘土(11層)を貼り付けて造られている。柱穴は4基確認された。径20～30cm、深さ50～60cmで、1層は柱の抜き取り痕である。

遺物は、土師器の鉢・壺が出土している。2・3はカマドの手前からまとまって出土した。カマドで使用したものをその場で破砕したような印象を受ける。貯蔵穴の東側からは礫がまとまって出土し、編物石の可能性が高い。時期は7世紀後半である。

第217号住居跡 (第108図)

調査区の北東側、B・C-33グリッドに位置する。平面形は方形である。規模は長軸4.32m、短軸3.80m、深さ0.18mである。主軸方向は、N-63°Eを指す。床面は全面に貼り床(カマド8層)が施され、平坦である。覆土は自然堆積である。

カマドは北壁の中央に造られていた。検出時は灰白色粘土が小さな山になっていた状態である。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁内に収まっている。煙道は、燃焼部から段を持って北側に長く延びている。8～10・14・16・17層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(7層下)は床面とほぼ同じ高さである。7層は灰層、2～4・6・12・20・22・23層は天井部の崩落土である。1層と5層はカマド崩落後に穿たれたビットとその影響により形成された土層と考えられる。袖は両側で確認され、灰白色粘土(13層)を貼り付けて造られている。貯蔵穴はカマドの東側にあり、長径75cm、短径40cm、深さ30cmで、埋め戻されている。柱穴は5基確認された。径20～40cm、

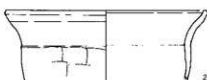


◎J217

- 1 暗褐色土 焼土層・ローム粒を含む
- 2 暗褐色土 ローム粒少量、焼土粒少量
- 3 暗褐色土 ローム粒を含む
- 4 暗褐色土 ローム粒・ブロック少量
- 5 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 6 暗褐色土 ローム粒・ブロック少量
- 7 暗褐色土 ローム粒・ブロック少量
- 8 暗褐色土 ローム粒少量
- 9 暗褐色土 ローム粒少量

◎J217のヤマ

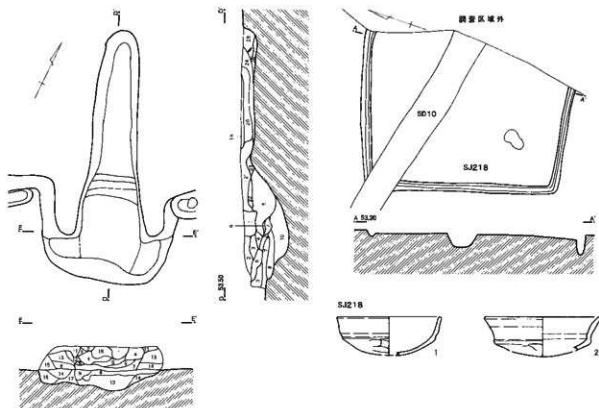
- 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を僅かに含む
- 2 灰白色土 焼土を主体とし、焼土粒を散らして含む
- 3 暗褐色土 焼土粒を含む
- 4 灰白色土 餅土を主体とし、焼土粒を多量に含む
- 5 暗褐色土 焼土粒・焼土粒少量
- 6 暗褐色土 焼土粒少量、焼土粒を散らして含む
- 7 暗褐色土 焼土粒・ローム粒・炭化植物少量
- 8 暗褐色土 焼土・ローム粒の中多
- 9 灰褐色土 焼土粒の中多
- 10 暗褐色土 ローム粒・ブロック(1~3cm)少量
- 11 暗褐色土 焼土粒・ブロックを含む
- 12 暗褐色土 暗褐色土の混じった焼土・焼土粒少量
- 13 灰白色土 焼土で構成
- 14 暗褐色土 ローム粒少量
- 15 暗褐色土 ローム粒の中多
- 16 暗褐色土 ローム粒少量
- 17 灰褐色土 ローム粒少量
- 18 暗褐色土 ローム粒少量、焼土粒少量
- 19 暗褐色土 焼土粒を含む
- 20 暗褐色土 焼土少量
- 21 暗褐色土 焼土層・ローム粒を含む
- 22 灰白色土 焼土・焼土粒を含む
- 23 灰褐色土 ローム粒少量、焼土粒少量
- 24 暗褐色土 焼土粒を含む
- 25 暗褐色土 焼土粒少量、ローム粒を含む
- 26 暗褐色土 ローム粒少量



第108図 第217号住居跡・出土遺物

第50表 第217号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師 環	(11.5)	3.6		AE	1	明褐	35	Na 3
2	土師 鉢	(21.2)	7.5		BDEG	1	褐	10	Na 6
3	土師 甕	(13.0)	5.5		BDEH	1	茶褐	20	Na 5
4	土師 甕		4.2	5.2	BDEH	1	赤褐	30	Na 8
5	磨石	石長4.7cm 幅4.0cm 厚さ3.7cm							重量94.61g 石質角閃石安山岩



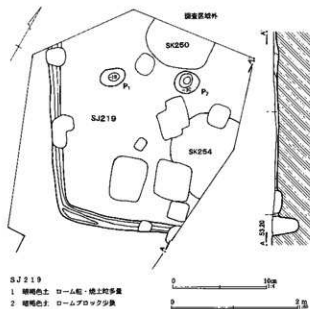
第109図 第217号住居跡カマド

深さ30～50cmで、1・2層は柱の抜き取り痕である。南壁の中央は幅1.1mの範囲が30cmほど半円形に張り出している。ローム土で段を造り出しており、入り口の階段状の施設と考えられる。段の東西の同じ位置に片岩が貼り付けられており、施設に関わるものと思われる。

遺物は、土師器の環・鉢・甕が出土している。5は磨石である。他にも片岩がいくつか出土している。時期は7世紀後半である。

第218号住居跡 (第110図)

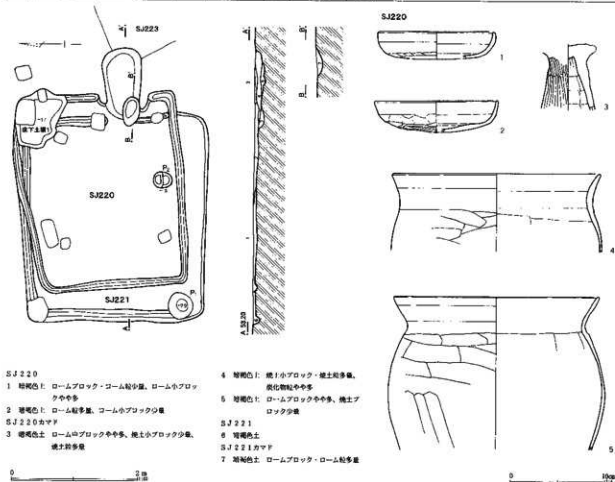
調査区の北東側、C・D-33グリッドに位置する。第10号溝跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。



第110図 第218・219号住居跡・出土遺物

第51表 第218号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(10.8)	4.0		DE	1	灰褐	5	
2	土師環	(12.2)	3.6		ABEG	1	明褐	10	



第111図 第220・221号住居跡・出土遺物

第52表 第220・221号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.2)	2.8		AD	2	褐	25	カマド
2	土師環	13.0	3.3		ADE	2	橙褐	70	覆土
3	土師高環		7.0		AEH	2	赤褐	65	覆土
4	土師甕	(22.0)	8.3		BEK	2	橙褐	10	カマド 覆土
5	土師甕	(21.8)	16.2		DEIJ	2	附褐	15	カマド

遺構の東側の大部分は調査区域外にかかる。

平面形は方形と推定される。規模は南北方向3.38 m、東西方向2.53 m、深さ0.06 mである。主軸方向は、東カマドを想定した場合、N-74°-Eとなる。床面は平坦である。覆上はローム粒・焼土粒を少量含む暗褐色土で、自然堆積である。

カマドは北壁もしくは東壁に造られていたと考え

られる。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環が出上している。小破片が多く、確実ではないが7世紀中葉としておきたい。

第219号住居跡 (第110図)

調査区の北東側、A-34グリッドに位置する。第250・254号土壌と重複関係にあり、第250号土壌より本住居跡の方が古く、第254号土壌より新しい。遺構

の北・東・南側は調査区域外にかかる。

平面形は方形と推定される。規模は南北方向3.35m、東西方向3.13m、深さ0.03mで、床面近くまで削平されていた。主軸方向は、東カマドを想定した場合、N-69°-Eとなる。床面は平坦である。覆土は自然堆積である。

カマドは北壁もしくは東壁に造られていたと考えられる。柱穴は2基確認された。径40cmで柱痕は確認できなかった。

遺物は、土師器の環、須恵器の図示不能な小破片が出土している。小破片が多く、確実ではないが7世紀中葉としておきたい。

第220号住居跡 (第111図)

調査区の北東側、B-34グリッドに位置する。第221号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が新しい。本住居跡は第221号住居跡を建て替えたものと考えられる。

平面形は長方形である。規模は長軸3.08m、短軸2.66m、深さ0.05mである。主軸方向は、N-85°-Eを指す。床面は平坦で、覆土は自然堆積である。

カマドは東壁のやや南寄りに造られ、第221号住居跡のカマドと重複し、完全に壊している。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁から突出している。5層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(4層下)は床面とほぼ同じ高さである。3・4層は大井部の崩落土である。袖は確認できなかった。床下土壌はカマドの北側にあり、長径1.1m、短径60cm、深さ17cmである。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、第220・221号住居跡一括で取り上げられ、土師器の環・甕・高環が出土している。1・4・5はカマド出土である。3は混入と考えられる。時期は8世紀後半である。

第221号住居跡 (第111図)

調査区の北東側、B-34グリッドに位置する。第220号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。第220号住居跡は本住居跡を建て替えたものと

考えられる。

平面形は長方形である。規模は長軸3.23m、短軸2.90m、深さ0.05mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦で、覆土は自然堆積の可能性もあるが、埋め戻しと考えられる。

カマドは第220号住居跡のカマドと重複し、掘り方(7層)を検出したのみである。ピットは2基ある。1は径40cm、深さ79cm、2は径30cm、深さ9cmである。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、第220号住居跡一括で取り上げており、本住居跡のみに伴うかは明らかでない。第220号住居跡と近接する時期と考え、時期は8世紀末としておきたい。

第222号住居跡 (第112図)

調査区の北東側、B-35グリッドに位置する。第223号住居跡、第242号土壇と重複関係にあり、前者より新しく、後者より古い。

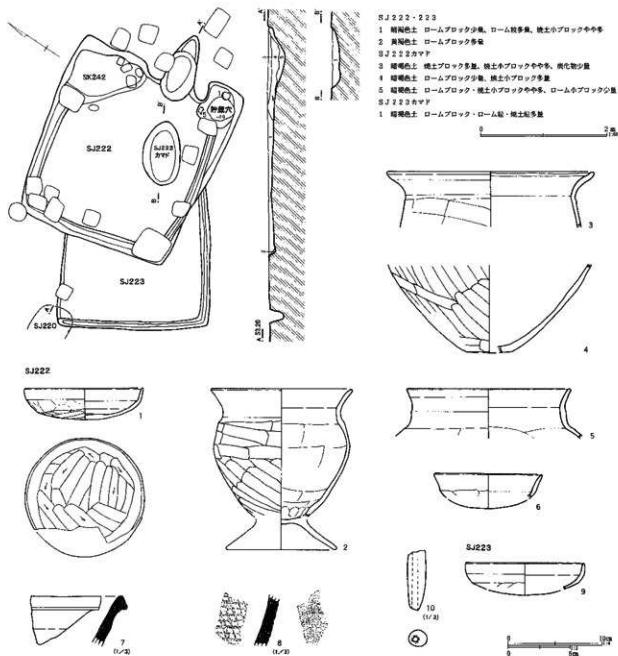
平面形は長方形である。規模は長軸3.02m、短軸2.78m、深さ0.05mである。主軸方向は、N-80°-Eを指す。床面は平坦で、覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、突出している。5層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(4層下)は床面とほぼ同じ高さである。灰層は検出されていない。3・4層は大井部の崩落土である。袖は両側で確認され、灰白色粘土を貼り付けて造られている。貯蔵穴はカマドの南側にあり、長径70cm、短径60cm、深さ19cmである。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環・白付甕・甕・壺、須恵器の甕が出土している。1・5は貯蔵穴の上面出土である。時期は8世紀前半である。

第223号住居跡 (第112図)

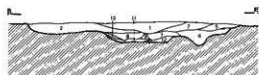
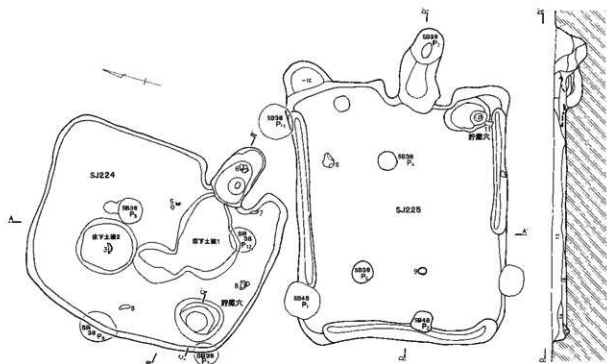
調査区の北東側、B-34・35グリッドに位置する。第222号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。第222号住居跡に遺構の北側の大部分は壊されている。それ以外の部分も床面まで削平されている。



第112図 第222・223号住居跡・出土遺物

第53表 第222・223号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	土師 坏	12.4	3.3		DE	2	褐	80	貯蔵穴 No 1
2	土師 台付 甕	(14.8)	13.5		ADEH	2	褐	40	覆土 貯蔵穴 カマド 胴部下半坡熱内面肩毎黒く変色
3	土師 甕	(21.8)	5.9		DE	3	赤褐	20	覆土
4	土師 甕	9.3		(5.2)	DE	2	褐	25	覆土
5	土師 甕	(17.4)	5.3		DEH	2	明橙褐	15	貯蔵穴 No 2
6	土師 坏	(11.4)	2.6		ADE	2	橙褐	10	覆土
7	須恵 甕		3.9		EHJ	2	灰白		貯蔵穴 米野庭
8	須恵 甕				EK	1	青灰		破片 貯蔵穴 斜格子印き+青海波当て具
9	土師 坏	(12.5)	2.8		DE	2	橙褐	10	カマド 掘り方内
10	土 鉢	長4.7cm 最大径1.5cm 孔径0.4cm					重量8.52g ADE	2 褐 残率65%	覆土



- SJ224
- 1 焼褐色土 灰褐色土・ローム状多量、焼土粒・炭化物少量
 - 2 暗褐色土 1層と同様だがやや暗く、炭化物が少量である
 - 3 灰褐色土 ローム粒・炭1粒少量
 - 4 暗黄褐色土 ロームブロック多量
 - 5 黒褐色土 焼上小ブロック・炭化物粒多量
 - 6 黒褐色土 炭化物・焼土・ローム粒粒多量
 - 7 暗灰褐色土 炭1粒多量、炭化物粒少量
 - 8 暗褐色土 コーム粒・ブロックがやや多、焼土粒を含む
 - 9 灰褐色土 焼土粒・ブロック(3cm²)多量、炭化物粒を含む
 - 10 黄褐色土 ロームブロック主体
 - 11 黒褐色土 焼土粒少量
 - 12 暗褐色土 ローム粒・ブロック多量、焼土粒少量

- SJ225
- 13 暗褐色土 灰褐色土を含む、焼土小ブロック・ローム大粒少量
 - 14 暗褐色土 15層と同様だがやや暗い、炭化物粒少量
 - 15 灰褐色土 褐色土・炭1本含む、ローム粒粒多量、炭化物少量
 - 16 灰褐色土 ローム粒子・小ブロックを上位と下部に含み、焼土粒少量

- SJ224貯蔵穴
- 1 暗褐色土
 - 2 黒褐色土
 - 3 黄褐色土
 - 4 暗黄褐色土

0 1m 2.5m

第113図 第224・225号住居跡

平面形は長方形である。規模は長軸推定2.59m、短軸2.37mである。主軸方向は、N-58°-Eを指す。床面、覆土の状況は不明である。

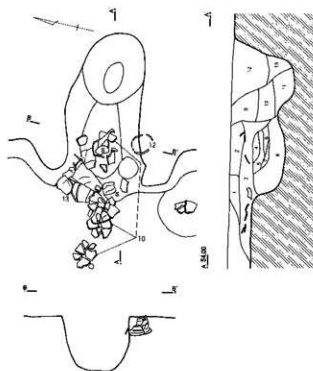
カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は土塊状に掘り込まれ、突出していると考えられる。1層は掘り方で、埋め戻されている。灰層、犬井部の崩落上等は不明である。軸は確認できなかつ

た。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環の小破片と、土鎌が出土している。9はカマド出土である。時期は8世紀前半である。

第224号住居跡 (第113図)

調査区のほぼ中央、E-21グリッドに位置する。第38号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第225号住



第225号カマド

- 1 褐色粘土 灰白色粘土ブロック大塊、ローム小ブロック・粘土粒少量
- 2 灰褐色土 褐色土塊、灰白色粘土・粘土粒少量、炭化物ブロック少量
- 3 褐色土 黄灰色粘土・ローム粒・粘土粒少量、炭化物少量
- 4 赤褐色土 焼土粒・灰少量
- 5 灰白色土 焼土粒少量、灰層、ボソボソ
- 6 暗灰色土 焼土粒・炭化物粒少量、灰少量
- 7 黒灰色土 炭化物粒・灰少量
- 8 暗褐色土 ローム粒少量、焼土・ローム粒少量、灰褐色土粒少量
- 9 黒褐色土 炭化物粒少量、焼土・ローム粒少量、灰褐色土粒少量
- 10 暗褐色土 中灰色粘土を含む、ローム小ブロック・粘土粒少量
- 11 暗褐色土 ローム粒少量、小ブロック少量
- 12 暗褐色土 焼土粒・ローム粒・炭化物粒少量 (S B33第3層)
- 13 暗褐色土 (S B33第3層)

第114図 第225号住居跡カマド

居跡と近接する。本住居跡が兩者より新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.79m、短軸3.06m、深さ0.07mである。主軸方向は、N-5°-Eを指す。床面は床下土塊の上面が回っている。覆上は自然堆積である。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土塊状に掘り込まれ、突出している。火床面(6層下)は床面より下位である。灰層は検出されていない。5・6層は天井部の崩落土の可能性がある。燃焼部中央のピットは径25cm、深さ15cmで、竈等を附設した可能性がある。軸は両側で確認され、灰白色粘土を貼り付けて造られている。貯蔵穴は南西コーナーにあり、径75cm、深さ40cmで、埋め戻しの可能性もある。床下土塊は2基検出されている。1はカマドの西側にあり、長径1.75m、短径50cm、深さ15cmで、覆上は焼土・炭化物を多く含み、埋め戻されている。2は径95cm、深さ10cmで、埋め戻されている。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の甕、ロクロ土師器の高台付椀・椀、灰釉陶器の椀、羽釜が出土している。6はカマド出土である。羽釜はいずれも土師質で、非ロクロ整形である。時期は10世紀後半である。

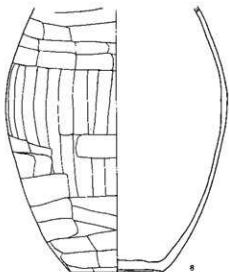
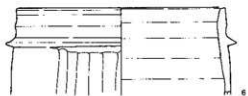
第225号住居跡 (第113図)

調査区のはほぼ中央、E・F-21・22グリッドに位置する。第38・39・48号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第224号住居跡と近接する。本住居跡が最も古い。

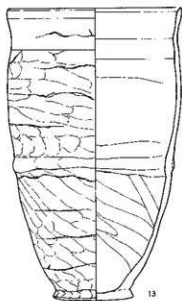
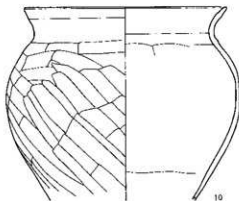
第54表 第224・225号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残片	備考
1	ロクロ高台椀	(13.0)	4.2		ADEJ	2	淡褐色	15	3区
2	ロクロ椀	4.0	4.3		BDEG	1	橙褐色	20	1区
3	灰釉椀	(16.0)	4.5		K	1	灰白	20	No.4
4	ロクロ椀	(14.9)	5.5		DEH	2	茶褐色	10	1区 内面黒色処理+ミガキ
5	ロクロ高台椀		3.8	(7.6)	ADEJ	2	橙褐色	20	No.5 内面ミガキ
6	羽釜	(22.0)	9.2		BDEII	2	茶褐色	15	カマドNo.1 土師質 非ロクロ整形 胴部外面縦ケズリ
7	羽釜	(22.0)	9.2		ADEGH	2	明褐色	15	No.2 土師質 非ロクロ整形
8	土師甕		27.9	9.8	BEJ	2	褐色	25	カマド 床下土塊 3区No.3
9	須恵	(11.6)	3.2		BEJ	1	青灰	90	No.12 金山窯産 A
10	土師甕	21.4	20.4		ADEII	1	明褐色	80	カマドNo.1・2・3・4 壁溝2区
11	土師甕	(18.5)	6.8		ADGH	1	褐色	25	No.10
12	土師甕	22.0	12.8		ADE	2	明褐色	20	No.11
13	土師甕	18.4	30.9	8.4	ADE	2	褐色	75	カマドNo.3

S.J224

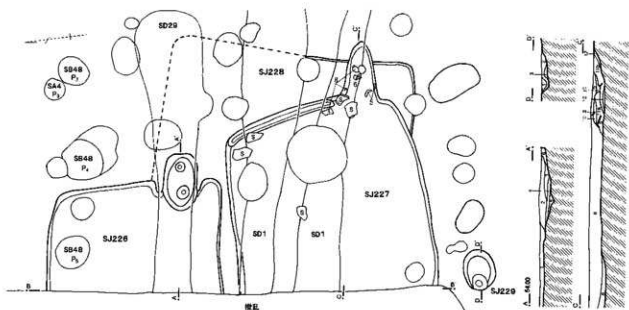


S.J225



0 10cm

第115图 第224·225号住居跡出土遺物



SJ228

- 1 黒褐色土 ローム殻・粘土粒少量
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒少量
- 3 黒褐色土 I層と同層
- 4 黒褐色土 ローム土塊、黒色土混入
- 5 暗黄褐色土! ローム殻・粘土粒子少量

SJ227

- 1 暗黄褐色土 ローム殻・小ブロック多量、焼土粒少量
- 2 黒褐色土 6層とほぼ同層だが、焼土粒を含まない
- 3 暗黄褐色土! ロームと黒色土を明らにほぼ同層

SJ227カマド

- 9 黒褐色土 ローム殻・粘土粒少量
- 10 暗黄褐色土! 多量の焼土と焼土及び黒色土で構成
- 11a 黒色土! ローム殻と焼土小ブロックを混入

11b 黒褐色土 11aより焼土多

12 赤褐色土 焼土の混層

SJ228カマド

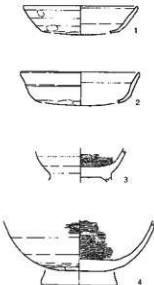
- 1 暗黄褐色土 暗褐色土土塊、ローム殻・粘土粒少量
- 2 黒褐色土 焼土小ブロック・炭化物少量、ローム粒少量
- 3 赤褐色土 暗褐色土土塊、炭多量、焼土小ブロック少量
- 4 黒褐色土 粘土粒少量
- 5 暗褐色土! ローム殻少量
- 6 暗褐色土! 灰色粘土若干層、ローム粒少量

SJ229カマド

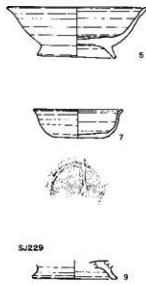
- 1 灰白色土 焼土殻・ブロック多量、炭化物物を含む
- 2 暗黄褐色土 炭土粒多量
- 3 暗黄褐色土! ローム殻多量、粘土粒少量

0 2m

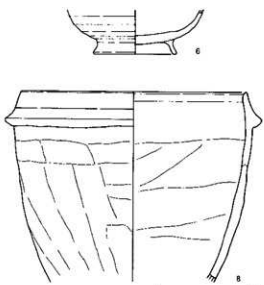
SJ226



SJ227



SJ229



0 10cm

第116図 第226~229号住居跡・出土遺物

第55表 第226～229号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	12.0	2.8		BGH	2	褐	10	
2	土師環	(12.5)	3.2		FGH	3	褐	15	
3	ロクロ高台碗		3.6		ABEJ	3	褐	25	内面黒色処理+ミガキ
4	ロクロ高台碗		5.4	7.3	BDEJ	1	茶褐	55	内面ミガキ
5	ロクロ高台碗	14.8	5.2	8.2	DEH	2	茶褐	65	Na 4・11
6	ロクロ高台碗		4.7	(8.6)	AEJ	3	明褐	65	Na 2 カマド
7	ロクロ小皿	9.4	3.0	3.5	ADEK	3	乳白	50	
8	須恵壺	(24.0)	20.1		ADEHJ	3	褐	30	Na 1・3・5 カマド 床下土壌 非ロクロ成形 上層質
9	ロクロ高台碗		1.9	(8.6)	BEG	1	明褐	15	カマド

第56表 第230号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	須恵環	(12.0)	2.8		EIK	2	明青灰	10	未野焼

平面形は長方形である。規模は長軸4.06m、短軸3.24m、深さ0.18mである。主軸方向は、N-71°Eを指す。床面は平坦で、全面に貼り床(16層)が施されている。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、突出している。8層は掘り方で埋め戻されている。火床面(7層下)は床面より下位である。4～7層が灰層、1～3層は天井部の崩落上である。袖は両側で確認され、灰白色粘土を貼り付けて造られている。南側の袖には12の襖が補強材として埋め込まれていた。貯蔵穴はカマドの南側にあり、長径70cm、短径50cm、深さ21cmである。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の壺・甕、須恵器の蓋が出土している。10・12・13はカマド出土である。9は群馬県太田市金山窯周辺の製品と考えられる。13は粘土帯の接合痕が明瞭で、胴部中位には補強したと考えられる粘土紐が外面に貼付されている。武蔵型の甕とは異なり、他地域の影響を受けている可能性もある。時期は8世紀後半である。

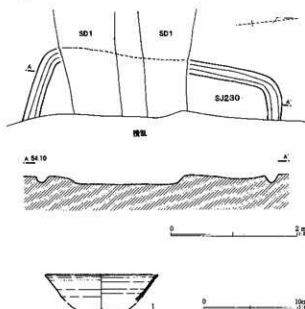
第226号住居跡(第116図)

調査区のはほぼ中央、F-21グリッドに位置する。第228号住居跡、第48号掘立柱建物跡、第29号溝跡と重複関係にあり、第227号住居跡と近接する。第48号掘立柱建物跡、第227号住居跡・第29号溝跡より古く、第228号住居跡より新しい。遺構の西側の大部分は調査区域外にかかる。

平面形は方形もしくは長方形である。規模は南北方向2.69m、東西方向1.75m、深さ0.14mである。主軸方向は、N-78°Wを指す。床面は平坦で、覆土は埋め戻されている可能性がある。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、突出している。4～6層は掘り方で埋め戻されている。火床面(3層下)は床面とほぼ同じ高さである。3層が灰層、天井部の崩落上は不明である。袖は両側で確認され、灰白色粘土を貼り付けて造られている。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環・甕、ロクロ土師器の高台付碗が出土している。時期は、いずれも小破片で確実



第117図 第230号住居跡・出土遺物

ではないが10世紀後半としておく。

第227号住居跡 (第116図)

調査区のほぼ中央、F-21グリッドに位置する。

第228号住居跡、第1号溝跡と重複関係にあり、第226号住居跡と近接する。両住居跡よりも本住居跡の方が新しく、第1号溝跡より古い。遺構の西側の大部分は調査区域外にかかる。

平面形は長方形である。規模は南北方向3.10m、東西方向3.13m、深さ0.18mである。主軸方向は、N-88°-Eを指す。床面は平坦で、全面に貼り床(7・8層)が施されている。覆土は埋め戻しである。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は突出している。火床面(12層下)は床面と同じ高さである。灰層は検出されていない。10-12層は天井部の崩落土である。袖は確認できなかった。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、ロクロ土師器の高台付碗・小皿、羽釜が出土している。5・6・8はカマド出土である。8は非ロクロ整形で土師質である。胎土に砂粒を多く含む。時期は10世紀後半である。

第228号住居跡 (第116図)

調査区のほぼ中央、F-21グリッドに位置する。

第226・227号住居跡、第1・29号溝跡と重複関係にあり、いずれよりも本住居跡の方が古い。遺構の南東のコーナーを検出したのみで、その他は不明である。

平面形は方形と推定される。規模は不明である。深さは0.03mである。床面は平坦である。覆土の状況は不明である。

カマドは不明である。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は図示不能の土師器、須恵器の小破片が出土しているのみである。時期は不明だが、新旧関係から9世紀と考えるべき。

第229号住居跡 (第116図)

調査区のほぼ中央、F-21グリッドに位置する。

遺構の大部分が削平されており、カマドのみを検出

した。

主軸方向は不明だが、E-Wに近い軸方向になると考えられる。

カマドは東壁に造られていたと推定される。燃焼部は土壌状に掘り込まれている。火床面(3層下)は床面より下位である。灰層は検出されていない。1~3層は天井部の崩落土である。袖は確認できなかった。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、ロクロ土師器の高台付碗の破片が出土している。時期は確実ではないが、9~10世紀と考えるべき。

第230号住居跡 (第117図)

調査区のほぼ中央、F-20グリッドに位置する。

第1号溝跡と重複関係にあり、本住居跡が古い。床面近くまで削平されている。遺構の東側の大部分は攪乱により壊される。

平面形は方形もしくは長方形である。規模は南北方向3.96m、東西方向1.08m、深さ0.04mである。主軸方向は、北カマドを想定した場合、N-4°-Eとなる。床面は中央が高く、周囲がやや低くなっている。覆土の状況は不明である。

カマドは北壁に造られていたと推定される。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

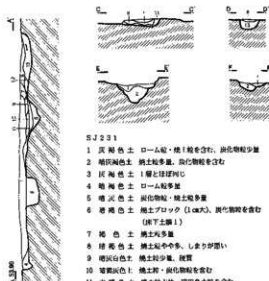
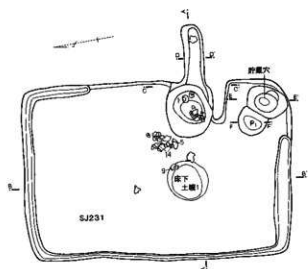
遺物は、須恵器の坏の破片が出土している。時期は9世紀と考えられる。

第231号住居跡 (第118図)

調査区のほぼ中央、F-22・23グリッドに位置する。

平面形は長方形である。規模は長軸4.26m、短軸2.78m、深さ0.06mである。主軸方向は、N-79°-Wを指す。床面は平坦で、覆土は自然堆積である。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は土壌状に掘り込まれ、煙道が長く東側に延びる。5層は掘り方で埋め戻されている。火床面(11層)は床面よりやや下位である。10層が灰層、7~9・12層は天井部の崩落土である。袖は南側でのみ確認され、ローム土を貼り付けて造られている。貯蔵穴

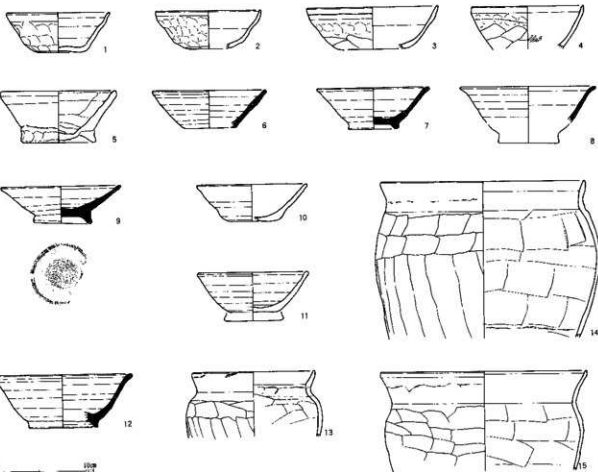


S.J.231

- 1 灰褐色土 ローム状・焼土粒を含む、炭化物粒少量
- 2 暗灰褐色土 焼土粒多量、炭化物粒を含む
- 3 灰褐色土 1層とはほぼ同じ
- 4 暗褐色土 ローム状多量
- 5 暗褐色土 炭化物粒・焼土粒多量
- 6 暗褐色土 焼土ブロック (1cm²、炭化物粒を含む
(貯下土層1))
- 7 暗褐色土 焼土粒多量
- 8 暗褐色土 焼土粒やや多、しまりが悪い
- 9 暗灰白色土 焼土粒少量、炭質
- 10 暗灰白色土 焼土粒、炭化物粒を含む
- 11 赤褐色土 焼土粒多量、埋灰色土層を含む
- 12 暗茶褐色土 焼土粒、炭化物粒少量
- 13 暗灰褐色土 ローム状少量、焼土粒を含む、しまりが悪い

S.J.231貯蔵穴

- 1 黒色土 コーム粒多量
- 2 灰褐色土 ロームブロック多量、焼土少量
- S.J.231ピット1
- 1 灰褐色土 焼土ブロック底入
- 2 暗褐色土 黒色土上焼土ブロックの底1層



第118図 第231号住居跡・出土遺物

第57表 第231号住居跡出土遺物観察表

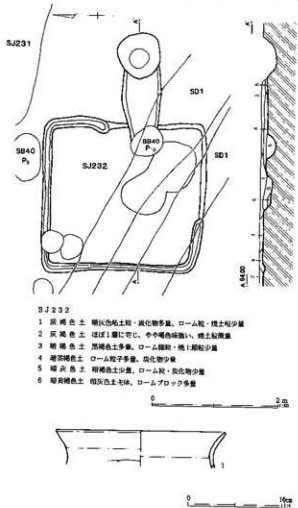
番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	10.9	4.2	5.4	ADEII	2	褐	95	No.3 砂土
2	土師環	(11.0)	4.0		ADEH	2	褐	25	カマド
3	土師環	(13.9)	4.4	(7.8)	BEII	2	粉褐	20	2区
4	土師環	(12.0)	4.5		ABDEIJ	2	茶褐	20	2区
5	土師高台環	11.9	5.5	(7.5)	DEG	2	淡褐	75	No.5 カマド 非ロクロ整形 体部外面ナテ 華な作り
6	須恵高台環	12.0	4.0	5.5	A	3	明灰	85	1・2・4区 P1 覆土 末野産 B
7	須恵高台環	(11.8)	4.4	5.3	ADEI	3	灰白	60	P1 末野産 B
8	須恵高台碗	(14.4)	3.6		EIIIK	2	青灰	25	2区 P1 末野産 A
9	須恵高台皿	12.4	4.0	5.9	AEHIJ	2	明灰	80	No.10 覆土 末野産 B
10	土師環	11.6	3.9	5.6	BDEH	2	褐	55	2区
11	須恵系高台環	(11.5)	4.2	(4.6)	AEGII	2	褐	40	2区
12	須恵高台碗	(14.4)	5.6	(7.0)	BEIJ	3	黄灰	40	カマド B
13	土師小型甕	(12.8)	6.9		DEH	2	黒褐	45	2区
14	土師甕	21.3	16.6		BEHJ	3	淡褐	90	3区 No.6・8
15	土師甕	(22.0)	10.5		ABEH	2	褐	15	P1

第58表 第232号住居跡出土遺物観察表

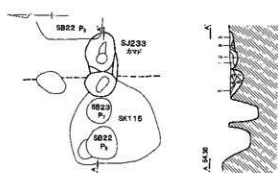
番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師甕	(18.0)	3.7		BDEII	1	褐	10	

第59表 第233号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師甕	(17.0)	5.0		ABE	1	茶褐	10	カマド

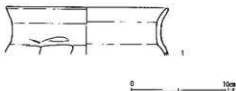


- S.J232
- 1 灰褐色土 焼灰色地土層・炭化物少量、ローム粒・残土粒少量
 - 2 灰褐色土 ほぼ1層に亘り、やや褐色味強い、残土粒少量
 - 3 暗褐色土 炭褐色土多量、ローム粒・焼土粒少量
 - 4 暗褐色土 ローム粒多量、炭化物少量
 - 5 暗褐色土 暗褐色土少量、ローム粒・炭化物少量
 - 6 暗褐色土 暗灰色土を以て、ロームブロック多量



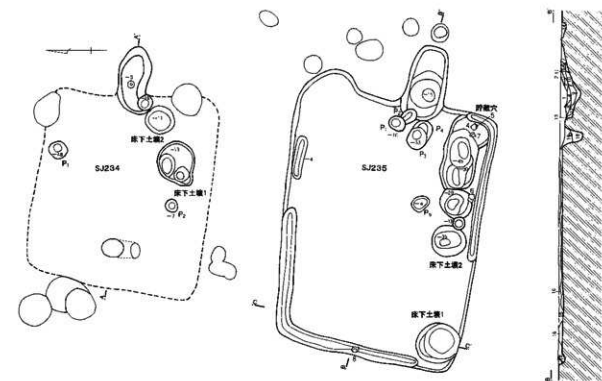
S.J233

- 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 2 暗褐色土 ローム粒多量
- 3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量
- 4 暗褐色土 焼土多量
- 5 暗褐色土 炭多量、焼土粒・ブロック・ローム粒多量
- 6 暗褐色土 ローム粒を以て、焼土粒・ブロック多量
- 7 暗褐色土 ローム粒・焼土粒を以て
- 8 暗褐色土 ロームブロックで構成



第120図 第233号住居跡・出土遺物

第119図 第232号住居跡・出土遺物



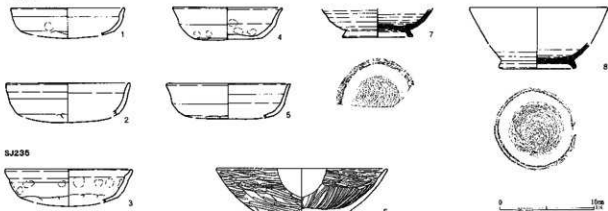
SJ235

- 1 暗褐色土 粘土粒を含む、炭化植物・ローム粒少量
- 2 暗灰色土 ローム粒を含む
- 3 褐色土 粘土粒多量
- 4 暗灰褐色土 粘土粒、炭化植物を含む
- 5 灰白色土 粘土粒を含む
- 6 暗褐色土 粘土粒多量
- 7 暗褐色土 粘土粒、炭化植物を含む
- 8 暗褐色土 ローム粒、粘土粒少量
- 9 灰褐色土 粘土粒多量、炭化植物少量
- 10 暗灰褐色土 粘土粒多量、炭化植物を含む

- 11 黄褐色土 ローム主体
- 12 暗灰褐色土 粘土粒を含む
- 13 暗褐色土 ローム粒多量
- 14 暗黄褐色土 ローム粒多量
- 15 灰褐色土 ローム粒多量、焼1粒、炭化植物少量
- 16 暗灰褐色土 ローム粒、焼7粒多量
- 17 暗灰褐色土 焼1粒多量
- 18 暗灰褐色土 ローム粒多量、焼1粒少量
- 19 暗褐色土 ローム粒、焼1粒少量(地下土層1)
- 20 暗褐色土 ローム粒多量、粘土粒少量(地下土層1)

0 2m

SJ234



第121図 第234・235号住居跡・出土遺物

第60表 第234・235号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.9		BEG	1	褐	10	カマド
2	土師環	(13.0)	3.5		ABDE	2	茶褐	5	カマド
3	土師環	(13.4)	3.5		BDE	2	褐	20	貯蔵穴
4	土師環	(11.6)	3.4	(7.3)	EDEG	1	茶褐	65	Na.1
5	土師環	(13.0)	3.6		DEG	1	暗褐	10	Na.1
6	土師椀	(18.0)	4.9	(9.0)	BDE	2	灰褐	35	Na.4 内面黒色処理トミガキ
7	須恵高台椀		3.0	(7.0)	EI	1	青灰	35	Na.2 末野産 A
8	須恵高台椀		2.7	7.7	BEIK	2	明灰	80	Na.3 末野産 A

はカマドの南側にあり、長径70cm、短径45cm、深さ30cmで、埋め戻されている。床下土壌は径60cm、深さ25cmで、焼土・炭化物を含む。ピットは貯蔵穴と切り合うように掘られ、貯蔵穴の方が新しい。径45cm、深さ15cmで、覆土は焼土を多く含み、埋め戻されている。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環・高台付環・小型甕・甕、須恵器の環・高台付環・高台付椀、須恵系土師質土器の高台付環が出土している。1・2はカマド燃焼部の出土である。5・14はカマドの手前からまわって出土している。9は床下土壌の上面からの出土である。1の底部には砂粒が多く付着している。1・5・10・11は器壁が厚く、ズッシリと重い。5は非ロクロ整形でナデとオサエにより造られている。土器以外にも、刀子(第269図5)が出土している。時期は10世紀前半である。

第232号住居跡(第119図)

調査区のほぼ中央、F-22グリッドに位置する。第40号掘立柱建物跡、第1号溝跡と重複関係にあり、前者より新しく、後者より古い。

平面形は方形である。規模は長軸2.55m、短軸2.47m、深さ0.05mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦で、覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は長楕円形に掘り込まれ、煙道が長く東側に延びる。火床面(4層下)は床面よりやや下位である。灰層・天井部の崩落上は不明である。袖は確認できなかった。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の甕の小破片が出土している。時

期は9世紀と考えられる。

第233号住居跡(第120図)

調査区のほぼ中央、F・G-19・20グリッドに位置する。遺構の大部分が削平されており、カマドのみを検出した。第22・23号掘立柱建物跡、第115号土壌と重複関係にあり、そのいずれよりも新しい。

主軸方向は不明だが、W-Eに近い軸方向になると考えられる。

カマドは北壁に造られていたと推定される。遺存している部分は燃焼部と煙道の一部と考えられる。南側は燃焼部で、土壌状に掘り込まれている。6・7層は掘り方である。火床面(6層)は床面より下位と考えられる。5層は灰層である。3・4層は天井部の崩落土である。袖は確認できなかった。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

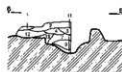
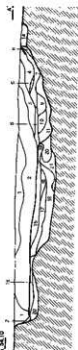
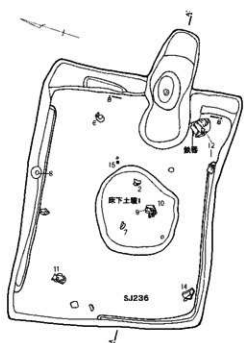
遺物は、土師器の甕の小破片が出土している。時期は確実ではないが、9世紀と考えておきたい。

第234号住居跡(第121図)

調査区のほぼ中央、F・G-20グリッドに位置する。床面まで削平されており、カマドに連続する地山の変色範囲を遺構の範囲とした。

平面形は長方形である。規模は長軸3.13m、短軸2.76mである。主軸方向は、N-4'E-Eを指す。床面・覆土の状況は不明である。

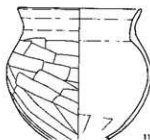
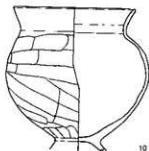
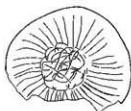
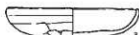
カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は土壌状に掘り込まれ、突出している。燃焼部の中央よりやや奥に径10cm、深さ9cmの小ピットがあり、甕等の掘付痕の可能性もある。覆土等は確認していない。袖は確認できなかったが、南側の袖の下に当たる部分に、径20cm、深さ16cmの小ピットが掘られて



SJ236

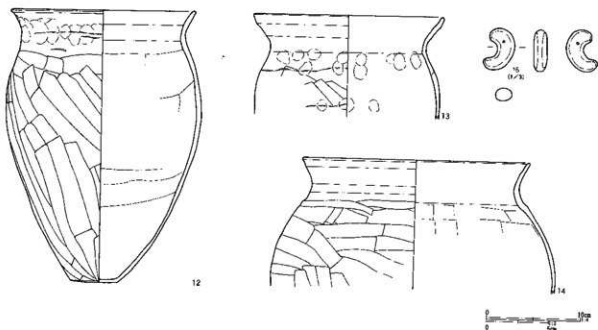
- 1 黒色土
- 2 暗褐色土 ロームブロックとの混土層
- 3 暗褐色土 ローム粘多量
- 4 黄褐色土 雑土ブロック主体、ロームブロック片を含む
- 5 黒色土 灰化物多量、灰混入
- 6 黒色土 灰多量
- 7 黒色土 灰主体、雑土打「含む
- 8 暗褐色土 雑土粘多量
- 9 暗褐色土 コームブロック (1~5cm) 多量、粘土ブロックを含む
- 10 暗褐色土 雑土粘中多量、灰、ロームブロック混入
- 11 暗褐色土 ロームブロック多量
- 12 暗褐色土 ローム粘多量 (2層に亘る)
- 13 黄褐色土 コーム主体
- 14 暗褐色土 ローム粘・ロームブロック中多量
- 15 暗褐色土 ローム粘・ブロック多量
- 16 暗褐色土 ローム粘・ブロック・雑土粘を含む
- 17 暗褐色土 ローム粘・ブロック多量
- 18 暗褐色土 ローム粘・ブロック多量
- 19 暗褐色土 ローム粘多量
- 20 黄褐色土 コーム主体とし、黒色土粘・ブロックを含む
- 21 黒色土 ロームブロック (2cm) を含む

0 2m



0 10cm

第122図 第236号住居跡・出土遺物(I)



第123図 第236号住居跡出土遺物(2)

第61表 第236号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.5)	3.5		BEG	1	暗褐	60	
2	土師環	12.6	2.8		BCFG	1	褐	50	No.15
3	土師環	(13.8)	3.1		ABDE	1	明褐	20	
4	土師環	(14.0)	3.2		BEG	1	橙褐	10	カマド
5	土師環	(12.0)	2.5		ABE	1	褐	10	
6	土師環	13.2	4.7		HDEG	1	赤褐	70	No.3 内面放射ラセン埴文 砂底
7	須恵環	13.0	3.5	8.1	BEF	2	明灰	75	No.11 SJ238No.39・40 南北金産 A
8	須恵蓋	17.9	3.7		EHJK	1	雲灰	95	No.4 秋間産 環状つまみ つまみ径5.6cm A
9	須恵蓋		5.4		BEIK	1	明雲灰	破片	No.12 木野産 A
10	土師古付罌	13.0	15.2		DEH	3	明褐	90	No.14
11	土師小型罌	13.0	13.9		BDEGK	1	暗褐	60	No.6
12	土師罌	19.4	28.8	5.0	ADE	2	褐	95	No.17・18
13	土師罌	(20.0)	10.8		ABDE	1	明褐	35	
14	土師壺	(24.0)	13.8		ABEG	1	黄褐	25	No.9
15	幻	高さ3.3cm	幅1.0cm	孔径0.2cm			重量8.42g	No.1	蛇紋岩製

いた。床下土壌は2基検出した。1は径60cm、深さ13cmで、更に中に径20cm、深さ5cmの2ヶ所の間掘り込みがある。2は径40cm、深さ11cmである。ピットは2基検出されている。1は、径30cm、深さ48cmである。2は径20cm、深さ7cmである。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

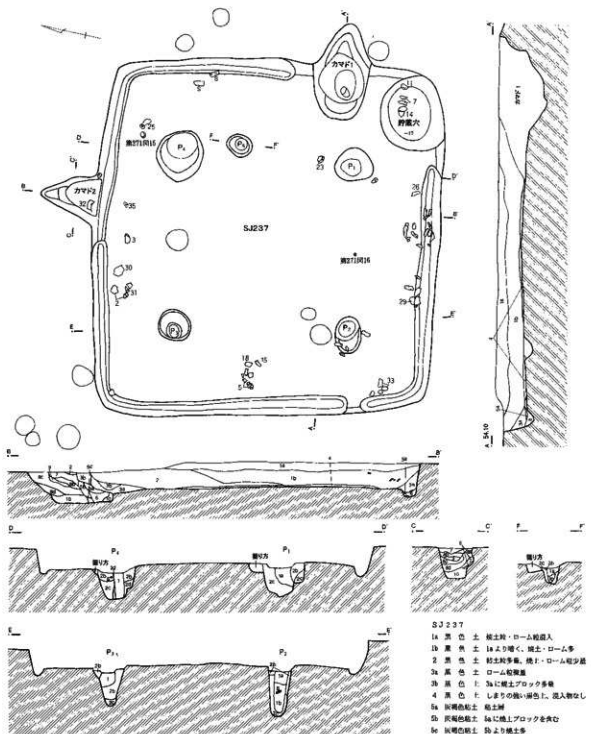
遺物は、土師器の環の小破片がカマドから出土している。時期は9世紀中葉と考えられる。

第235号住居跡 (第121図)

調査区のはほぼ中央、G-20グリッドに位置する。床面近くまで削平されている。

平面形は長方形で、北東コーナーが張り出している。規模は長軸4.32m、短軸3.13m、深さ0.03mである。主軸方向は、N-89°-Wを指す。床面は平坦で、全面に貼り床(15・16層)が施されている。覆土は自然堆積と考えられる。

カマドは東壁の中央に造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、突出している。9～12層は掘り方である。火床面(9層)は床面よりやや下位になる。灰層は検出されていない。3・4・8層は天井部の崩落上である。袖は確認できなかった。貯蔵穴はカマドの南側にあり、長径70cm、短径55cmで、埋



S.J.237カマド

- 1 灰褐色粘土: 粘土主体
 - 2 赤褐色土: 粘土主体
 - 3 黒褐色土: 黒色土主体
 - 4 黒色土: 灰土主体
 - 5 黄褐色土: ローム主体
- ※aは灰層、bは物を少し盛入、
cは色の盛入物と同義、
dは他の要素が強い。

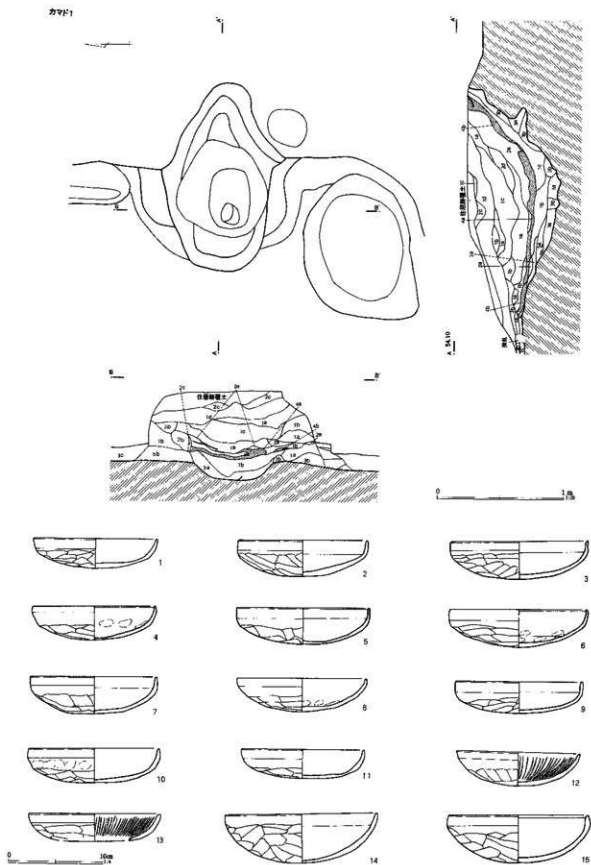
S.J.237ピット1-5

- 1 黒褐色土: 黒色土主体、僅かにローム土を混入する(柱間)
 - 2 黄褐色土: ローム土主体、黒色土を混入する(取方)
- ※aは柱間、b~cに向かって混入物増加、dはローム土

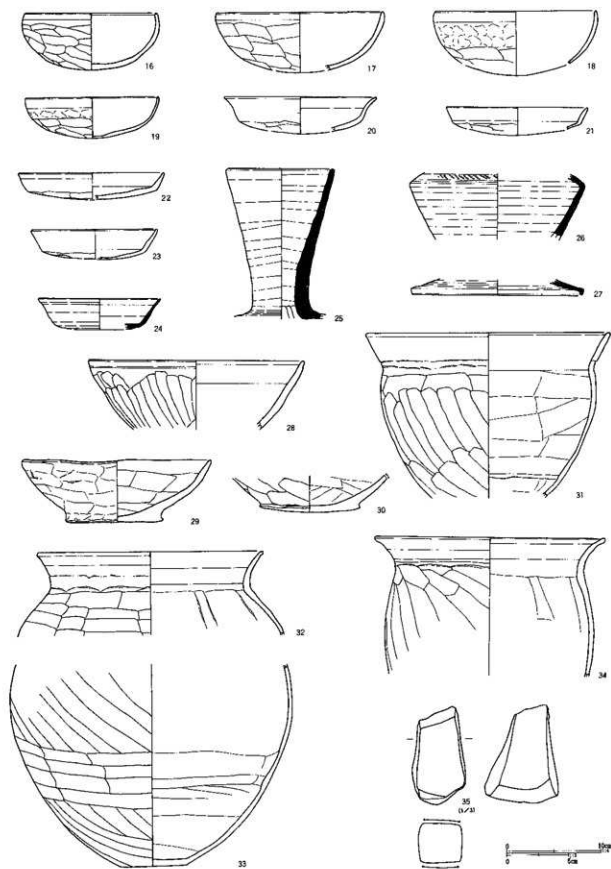
S.J.237

- 1a 黒色土: 粘土質・ローム粘土
- 1b 黄褐色土: 1aより暗く、塊土・ローム多
- 2 黄褐色土: 粘土質多量、塊土・ローム極少量
- 3a 黒色土: ローム粘土
- 3b 黒色土: 1aに粘土ブロック多量
- 4 黒色土: しまりの強い黒色土、混入物なし
- 5a 灰褐色粘土: 粘土質
- 5b 灰褐色粘土: 1aに粘土ブロックを夾む
- 5c 灰褐色粘土: 粘土質多量
- 6 黄褐色土: ロームブロック混入
- S.J.237カマド
- 7 灰褐色粘土: 粘土ブロック多量
- 8a 赤褐色土: 粘土質、粘土・黒色土混入
- 8b 赤褐色土: 1aより粘土多
- 8c 赤褐色土: 1aより黒色土多
- 8d 赤褐色土: 1aより黒色土多、1aより粘土少
- 9 黒色土: 粘土質ブロック多量
- 10 黄褐色土: 粘土・ローム・粘土ブロック混入

第124図 第237号住居跡



第125図 第237号住居跡カマド・出土遺物(1)



第126図 第237号住居跡出土遺物(2)

第62表 第237号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	13.0	3.1		BDEH	2	褐	80	2区
2	土師環	13.6	3.7		BDEH	2	橙褐	75	3区 No.7
3	土師環	(14.6)	4.0		BEH	2	橙褐	45	No.5
4	土師環	13.0	3.6		DE	2	淡褐	50	1区
5	土師環	14.0	3.8		BDEH	2	褐	70	3区 No.13・15・16
6	土師環	14.5	4.0		ADE	2	褐	85	4区
7	土師環	13.4	4.9		BEH	2	黒褐	85	No.18・49
8	土師環	(13.6)	3.5		ADE	2	褐	45	Bカマド 底部黒斑有り
9	土師環	13.4	3.3		BDEIJ	2	橙褐	80	3区
10	土師環	(13.6)	3.6		BDEH	2	褐	30	Bカマド
11	土師環	13.0	3.0		BDEH	3	淡褐	90	No.50 カマド
12	土師環	(13.0)	3.5		DEH	2	橙褐	10	3区 内面放射線文
13	土師環	(14.0)	2.8		BEH	2	橙褐	10	掘り方 内面放射線文
14	土師環	16.0	5.2		BEII	2	赤褐	85	カマド No.47
15	土師環	14.7	5.0		ABEH	2	橙褐	75	4区 No.12
16	土師碗	(14.0)	6.0		EII	3	褐	50	3区 雑溝
17	土師碗	(17.6)	6.1		ABCDEH	2	橙褐	45	1区
18	土師碗	(17.0)	5.6		BDEH	2	橙褐	20	No.11
19	土師環	(14.0)	4.3		BEII	2	橙褐	25	No.10
20	土師皿	(16.0)	3.6		EH	2	淡褐	20	1区
21	土師皿	(15.0)	2.3		DEIJ	2	褐	20	4区
22	土師皿	(15.3)	2.8		BDEH	2	橙褐	20	3区
23	土師皿	13.4	3.1	10.7	BDEH	2	橙褐	90	No.45
24	須恵環	(13.0)	3.3	(7.0)	BEJ	1	暗青灰	15	1区 未野産 ヘラ切り後ナデ A
25	須恵長頸瓶	(11.2)	15.8		EK	1	灰白	70	No.46 秋田産 A
26	須恵長頸壺		7.1		EK	1	明青灰	25	No.43 秋田産 A
27	須恵壺	(18.0)	1.8		BEJ	2	明青灰	10	3区 秋田産 A
28	土師鉢	(22.8)	7.3		ABDEH	2	橙褐	20	1・3区 カマドA
29	土師鉢	19.8	6.4	10.4	BEH	2	褐	90	2区 No.24 砂底
30	土師鉢		3.9	10.6	ARCEHJ	2	赤褐	90	No.6 壺の底部を転用 砂底
31	土師壺	(25.6)	17.5		ABDEH	2	褐	20	3区 No.7
32	土師壺	(23.6)	8.8		ABCEII	2	橙褐	25	No.2
33	土師壺		21.3	7.0	ADE	1	橙褐	40	4区 No.21・23
34	土師壺	(24.2)	14.6		ADEH	1	明褐	30	カマドA カマド
35	砥	石	長7.7cm 幅7.7cm 厚さ3.1cm					重量192.95g	凝灰岩 No.4

め灰されている。床下土壌は2ヶ所から検出した。

1は南西コーナーにあり、径70cm、深さ20cmである。

2は貯蔵穴と切り合うように南壁沿いに連続して掘り込まれている。掘り方の可能性もある。径50～60cm、深さ13～45cmで、埋め戻されている。ピットは5基検出した。径20～40cm、深さ4～33cmである。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環・碗、須恵器の高台付碗が出土している。3・4・7は、貯蔵穴の上面から出土している。6の碗は調整が丁寧で、土師器の手法で作られており、古い段階の土師質土器と思われる。時期は9世紀後半である。

第236号住居跡 (第122区)

調査区のはほぼ中央、G-20・21グリッドに位置する。

平面形は歪んだ長方形である。規模は長軸4.16m、短軸3.16m、深さ0.23mである。主軸方向は、N-78-Eを指す。床面は平坦で、全面に貼り床(19-21層)が施されている。覆土は埋め戻しである。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、突出している。9～11層は掘り方である。火床面(6・7層下)は床面と同じ高さである。8層は奥壁が焼上化したものである。

一面に焼土化し、よく焼けている。6・7層は灰層である。3・4層は天井部の崩落土である。袖は南側で確認され、ローム土を貼り付けて造られている。カマドの両脇には幅30cmの棚状施設が設けられている。床下土壌は径1.3m、深さ30cmで、埋め戻されている。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環・台付甕・小型甕・甕・壺、須恵器の環・蓋・甕、勾玉が出土している。12はカマド南側からまとも出土した。8は正位の状態では北壁際から出土した。6は底部が切り離されておらず、底面には砂粒が多く付着している。器形も全体に歪んでいる。土器以外にも刀子(第269図1・6・8)が3点出土し、その内、第269図1は12の下から出土した。15は覆土の上層から出土した。丁寧に磨かれており、古墳時代以前のものである可能性が高い。本住居跡に伴うものではないと思われる。本住居跡の時期は8世紀後半である。

第237号住居跡(第124図)

調査区のはほぼ中央、F・G-21・22グリッドに位置する。

平面形は方形である。規模は長軸5.62m、短軸5.48m、深さ0.26mである。主軸方向は、N-77-Eを指す。床面は平埧で、全面に貼り床が施されている。また、遺構の南寄りには黒色土が薄く認められ、敷物等が敷かれていた可能性もある。覆土は埋め戻しである。また、貯蔵穴の周辺には灰と粘土が互層のような状態で認められ、カマドの崩壊に伴うものと考えられる。

カマドは北壁と東壁の2箇所に造られていた。築造順序は2→1の順である。いずれも燃焼部は土塊状に掘り込まれ、突出する。カマド1は東壁のやや南寄りに造られる。1b・1c・3a・3b・5a層は掘り方で、埋め戻されていた。火床面(4層下)は床面とほぼ同じ高さである。4層が灰層、1・2層は天井部の崩落土と袖である。袖は白色粘土を貼り付けて造られている。カマド2は北壁のほぼ中央に造られていた。6・10層は掘り方である。火床面(5・8

層下)は床面と同じ高さである。灰層は認められない。7・8層は天井部の崩落土である。袖は確認できなかった。貯蔵穴はカマド1の南側にあり、径1.0m、深さ19cmで、埋め戻されている。柱穴は5基礎確認された。径30~90cm、深さ50~80cmで、1層は柱の抜き取り痕である。P5は規模が小さく、補助的な柱穴と考えられる。

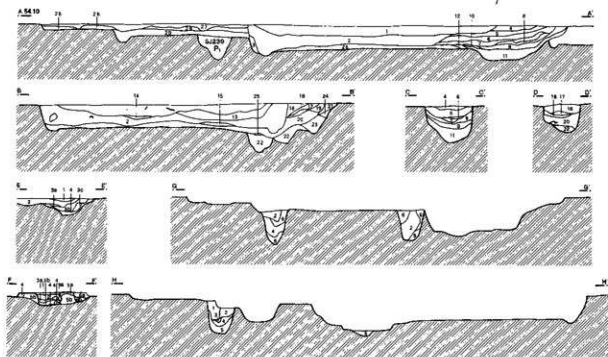
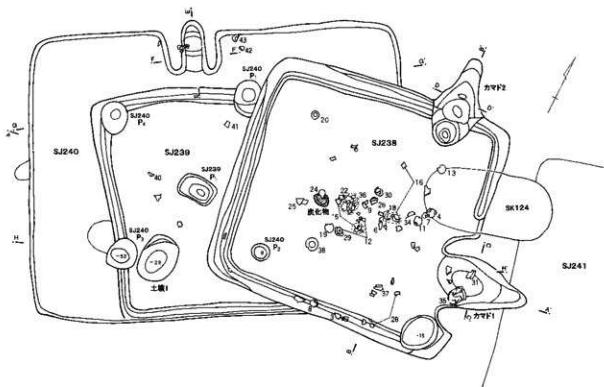
遺物は、土師器の環・皿・椀・鉢・壺・甕、須恵器の環・蓋・長頸瓶・長頸壺・水滴(第271図15)、切子玉(第271図16)、砥石が出土している。ほとんどのものがほぼ床面直上に近い状態で出土している。7・11・14は貯蔵穴の埋め戻された上面から並んだ状態で、25・第271図15は北東コーナー周辺から出土している。貯蔵穴上面のものは各々カマド出土の破片と接合関係にあり、分布は人為的な行為の結果である可能性もある。28・34はカマド1からの出土である。切子玉は遺構の南側の床面から出土している。7は胎土に雲母を多く含んでいる。29は壺の製作途上で鉢に転用したとも思えるもので、器壁も厚く違和感がある。30は割れ口が一部磨耗しており、この状態で使った可能性もある。これ以外にも刀子と考えられる鉄製品(第269図9)が出土している。また、南壁の際を中心に長さ10cm前後の礫が15点出土し、編物石と考えられる。時期は8世紀初頭である。

第238号住居跡(第127図)

調査区のはほぼ中央、G・H-21グリッドに位置する。第239-241号住居跡、第124号上層と重複関係にあり、住居跡より新しく、土壌より古い。

平面形は方形である。規模は長軸4.10m、短軸3.88m、深さ0.27mである。主軸方向は、東カマドとした場合、N-85-Eを指す。床面は平埧で、カマドを造り直した際に貼り床(20・26層)を施している。覆土は自然堆積である。以下では、カマド1に伴う床面を床面1、カマド2に伴う床面を床面2として記述をする。

カマドは北壁と東壁の2箇所に造られている。



SJ238

- 1 暗褐色土 ローム地中多、炭化物・焼土粒を含む
 - 2 暗褐色土 炭土粒・炭化物粒を含む、ローム粒少量
 - 3 暗褐色土 ロームブロック多量
- SJ238カマド!
- 4 暗褐色土 焼土粒多量
 - 5 灰白色土 粘土質、焼土粒・炭化物粒少量
 - 6 暗褐色土 焼土粒多量
 - 7 暗褐色土 焼土粒少量

- 8 赤褐色土 焼土ブロック多量
- 9 暗褐色土 ボツボツで焼土塊を含む
- 10 灰色土 炭化物多
- 11 灰白色土 粘土質、焼土粒多量
- 12 暗褐色土 ローム粒・ブロック多量含む
- 13 暗褐色土
- 14 灰白色土 粘土質、焼土粒少量
- 15 暗褐色土 ローム粒多量、焼土粒少量



第127図 第238～240号住居跡

SJ238カマフ2

- 16 黄褐色土 焼土粒を含む
- 17 灰白色土 焼土粒少量
- 18 黄褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 19 黄褐色土 焼土粒・ブロック多量
- 20 灰褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 21 灰褐色土 ローム粒・焼土粒を含む
- 22 黄褐色土 ローム粒・ブロックを含む
- 23 焼灰褐色土 ローム粒少量
- 24 黄褐色土 ロームブロック多量
- 25 黄褐色土 炭化植物・焼土粒少量
- 26 黄褐色土 焼土粒・ロームブロックを含む

SJ240

- 27 黄褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 28 黄褐色土 ローム粒・ブロック多量

SJ239

- 29 黄褐色土 焼土粒にロームブロック多量

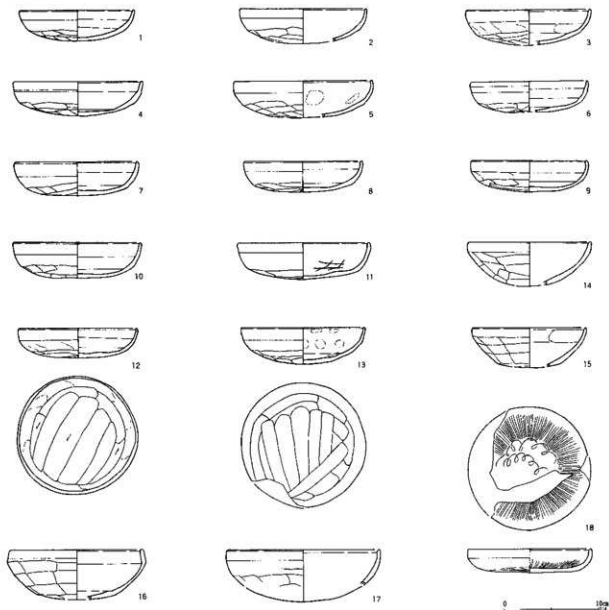
SJ240カマフ

- 1 黄褐色土 焼土粒・炭化植物
- 2 黄褐色土 焼土ブロック多量
- 3a 灰褐色土 焼土ブロック・ロームブロック少量
- 3b 黄褐色土 ロームブロック少量・焼土ブロック多量
- 3c 黄褐色土 ロームブロック少量・焼土ブロック多量
- 4 焼灰褐色土 ローム粒・炭化植物・焼土粒少量
- 5a 灰褐色土 焼土粒・炭化植物
- 5b 灰褐色土 炭化植物・ローム粒少量
- 6a 黄褐色土 炭化植物・焼土粒少量
- 6b 黄褐色土 炭化植物・ロームブロック少量

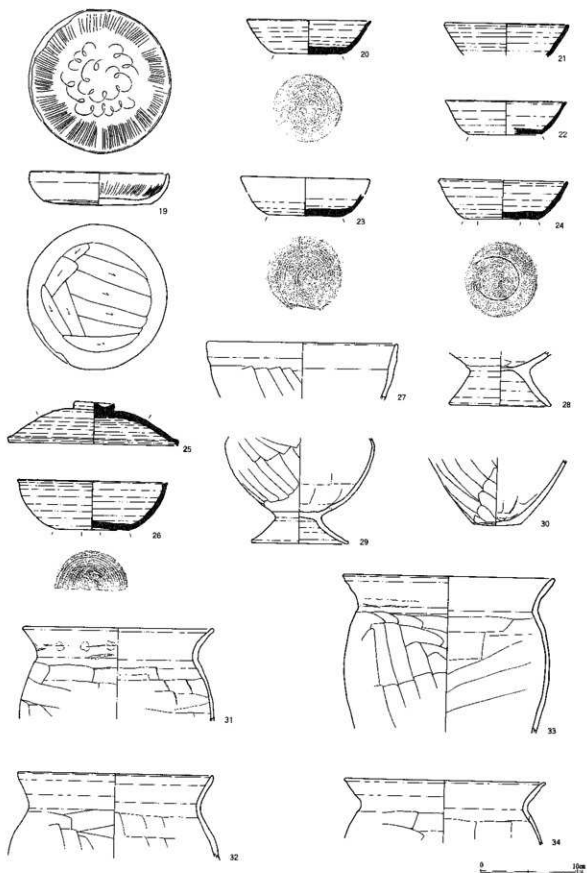
SJ240ピット1~4

- 1 黄褐色土 焼土粒・ローム多量
- 2 黄褐色土 焼土粒・ローム粒少量
- 3 黄褐色土 ロームブロック
- 4 黄褐色土 ローム粒少量
- 5 黄褐色土 ローム粒・ブロック多量
- 6 黄褐色土 ローム粒多量

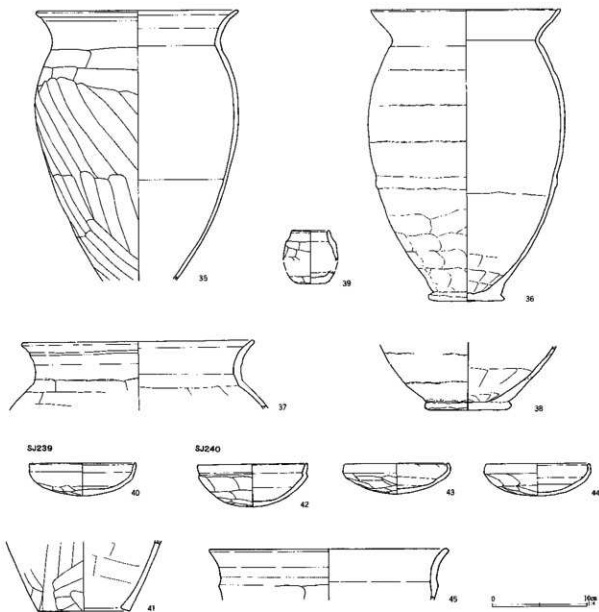
SJ238



第128図 第238~240号住居跡出土遺物(1)



第129图 第238~240号住居跡出土遺物(2)



第130図 第238～240号住居跡出土遺物(3)

造順事は2→1の順である。いずれも燃焼部は土塊状に掘り込まれ、突出する。カマド1は東壁のやや南寄りに造られる。11・12層は掘り方で、埋め戻されていた。火床面(9層下)は床面とほぼ同じ高さである。9層が灰層、4～8層は天井部の崩落土である。袖は両側で認められ、灰白色粘土を貼り付けて造られている。カマド2は北壁の東寄りに造られている。燃焼部は深く掘り込まれ、ビットが切り合ったような段状になっている。22・23層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(20・25層下)は床面と

ほぼ同じ高さである。25層が灰層の一部と思われるが不明瞭である。19・20・24層は天井部の崩落土である。袖は確認できなかった。

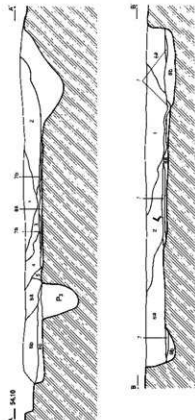
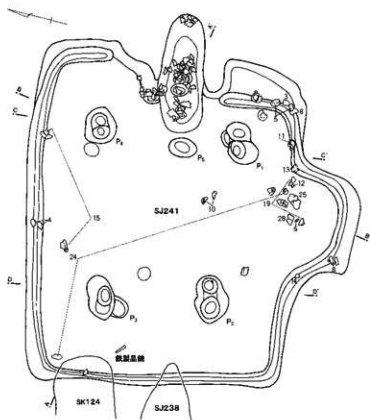
貯蔵穴は床面1に伴うもので、カマド1の南側にあり、径60cm、深さ19cmである。床面1ではビットは確認していない。床面1を除去したところ、その下から焼土・炭化物を多く含む覆上の径20cm、深さ5cmのビットが検出された。柱穴と考えられるものは検出できなかった。

第63表 第238~240号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.2)	3.2		ADEII	2	橙褐	30	
2	土師環	13.4	3.4		ADE	2	褐	45	
3	土師環	13.0	3.8		ADII	2	橙褐	90	No47
4	土師環	13.6	3.6		ABE	2	褐	80	No35
5	土師環	(14.5)	3.8		DE	2	橙褐	45	覆土 内面やや風化
6	土師環	12.3	3.2		BDEG	1	褐	50	No26
7	土師環	(13.0)	3.6		ADEH	1	橙褐	60	No35
8	土師環	12.4	3.2		DEK	2	明褐	75	No46
9	土師環	12.2	3.2		DEH	2	橙褐	85	No25
10	土師環	(13.5)	3.7		ADE	2	明褐	50	内床面下
11	土師環	13.9	3.9	12.0	BEGH	1	橙褐	80	No32 底部内面に「#」ヘラ記号
12	土師環	12.4	3.1		BDE	2	褐	100	No17・19
13	土師環	13.0	3.9		HDEG	1	褐	90	No37
14	土師環	(13.0)	4.5		BDEGH	1	茶褐	30	
15	土師環	12.0	4.1		HDEJ	1	赤褐	90	No18・21
16	土師環	14.0	5.2		ADEG	2	茶褐	45	No30・38
17	土師環	(16.0)	3.8		ABDE	2	橙褐	25	内床面下
18	土師環	(13.0)	2.5		ADEH	1	褐	65	No27・28 内面ラセン暗文+放射暗文
19	土師環	14.5	3.5	11.4	DEIJ	1	橙褐	85	No16 内面ラセン暗文+放射暗文
20	須恵環	13.0	3.5	7.2	EFK	1	明灰	100	No42 南北産 A
21	須恵環	(13.0)	3.4		REF	2	明灰	30	南北産 A
22	須恵環	(12.8)	3.6	7.6	EFK	1	明灰	60	No20 南北産 A
23	須恵環		2.4	7.9	AEFK	2	明灰	65	南北産 底部外面「×」ヘラ記号 A
24	須恵環	13.6	4.1	7.8	EFJ	2	明灰	85	No15 南北産 A
25	須恵蓋	(17.8)	4.4		BEIIIK	1	明青灰	30	No13 木野産 つまみ径(4.1) cm A
26	須恵椀	(16.0)	5.1	(7.8)	BEVK	1	青灰	30	No23 南北産 A
27	土師鉢	(20.0)	6.0		ADEG	2	橙褐	10	
28	土師台付甕		5.8	(10.4)	DEGH	2	橙褐	60	No5・8
29	土師台付甕		11.2	10.0	ABEGII	1	赤褐	55	No17
30	土師甕		7.0	5.2	DEH	2	暗褐	60	No24 外面被熱
31	土師甕	(20.0)	9.7		EGII	1	明褐	25	カマドNo1 東カマド
32	土師甕	(20.6)	8.9		ADE	2	赤褐	15	
33	土師甕	(22.2)	16.4		ABG	2	褐	20	北カマド
34	土師甕	(21.0)	6.6		BCDE	1	茶褐	10	No31
35	土師甕	21.4	28.5		ADE	2	橙褐	90	カマドNo2 東カマド
36	土師甕	(20.0)	30.9	8.0	ADE	3	橙褐	55	No22
37	土師甕	(24.4)	(7.3)		BDEJ	2	褐	15	No10
38	土師壺		6.9	8.2	DE	2	明褐	90	No12 底部砂底 胴部積み上げ痕2段 ケズリ無し
39	ミニチュア	3.7	(5.6)	3.4	BDEG	2	茶褐	75	
40	土師環	11.2	3.4		ADEII	2	橙褐	55	No2
41	土師壺		7.4	(9.6)	BEH	2	褐	20	No1
42	土師環	11.6	4.5		ABG	1	暗褐	80	No2 周溝
43	土師環	11.0	3.2		DE	1	橙褐	75	No1
44	土師環	(10.9)	3.4		DEH	2	橙褐	40	
45	土師鉢	(25.0)	5.4		ABDE	3	褐	20	

遺物は多く、10を除き床面1の直上から出土している。31・35はカマド1からの出土である。土師器の環・鉢・台付甕・甕・壺・ミニチュア、須恵器の環・蓋が出土している。11は内面に「井」の、23は

底面に「×」のヘラ記号が施されている。18・19の暗文が施される環は、完全な平底で他の半底風の環とはやや様相を異にする。36・38は底部に円盤が残っており、38の底面には砂粒が多く付着する。双



SJ241

- 1 黒褐色土 ロームブロック・焼土跡少量
- 2 凝灰質粘土 粘土で構成される、焼土跡多量
- 3 黒褐色土 ロームブロック少量、黒色土層中に混入
- 4 黒褐色土 ロームブロック多量
- 5 暗褐色土 焼土跡多量

- 6a 黒色土 ロームブロック状、焼土跡混入
- 6b 黒色土 6aより焼土跡多、明確あり
- 6c 黒色土 6bより焼土跡多、明確あり
- 7a 黒色土 粘土・砂により構成
- 7b 黒色土 7aより粘土多、硬質
- 8a 黒褐色土 ロームブロック混入、しまり強い
- 8b 黒褐色土

0 2m
1:10

SJ241ビット1~4

- 1 黒褐色土 ロームブロック少量、パヤ/パヤしている
- 2a 黒色土 ロームブロック少量
- 2b 黒色土 2aよりロームブロック多量
- 3a 黒褐色土 ロームブロック主体、黒色土塊散在
- 3b 黒褐色土 3aより黒色土多
- 3c 黒褐色土 3aより黒色土多

SJ241ビット5

- 1 黒褐色土 ローム・焼土粒散在
- 2 黄褐色粘土 粘土の粘層、軟質
- 3 黒色土 炭化物の粘層、軟質
- 4a 灰色土 炭の粘層、軟質
- 4b 灰色土 炭層中に黒色土混入
- 5 黒褐色土 ローム粒、灰多量

SJ241カマド

- 1 灰褐色粘土 焼土粒塊散在
- 2a 赤褐色土 焼土粒塊、焼土が横たわ
- 2b 赤褐色土 2aに黒色土を混入
- 2c 赤褐色土 2aに黒色土を混入、焼土多
- 3a 黒色土 ロームブロック・焼土ブロック多量、粘土粒少量
- 3b 黒色土 3aより焼土少ない
- 4a 黒色土 ロームブロック多量、焼土ブロック少量
- 4b 黒色土 4aよりロームブロック多
- 5 黄褐色土 ロームブロック主体、黒色土少量

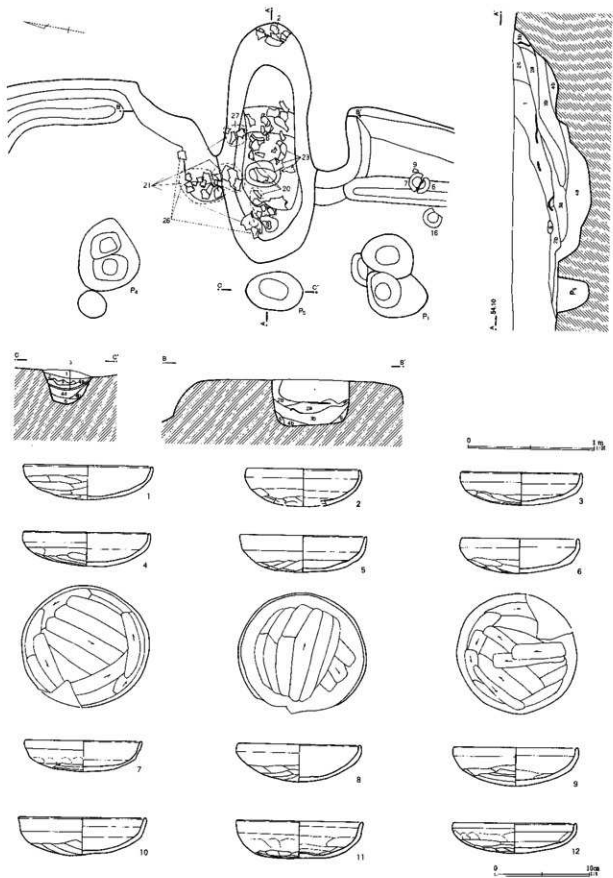
第131図 第241号住居跡

方とも調整にケズリを使用しておらず、ナデにより仕上げている。粘土帯の接合痕が明瞭に残っている。36は外面の中心に接合痕を捕強する紐が貼付されている。土器以外にも棒状の鉄製品(第269図11)が出土している。時期は8世紀中葉である。

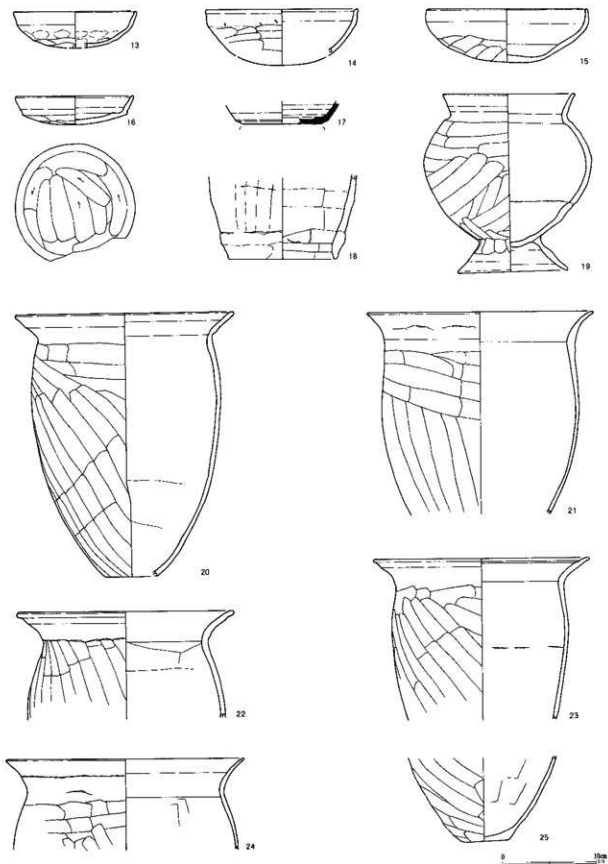
第238号住居跡 (第127図)

調査区のほぼ中央、G・H-20・21グリッドに位置する。第238・240号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。

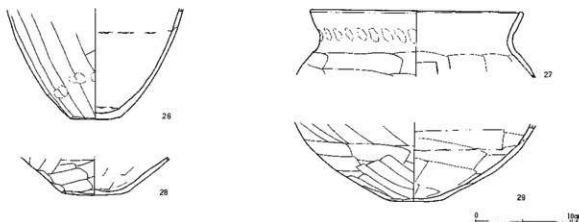
平面形は方形もしくは長方形と考えられる。規模



第132図 第241号住居跡カマド・出土遺物(i)



第133图 第241号住居跡出土遺物(2)



第134図 第241号住居跡出土遺物(3)

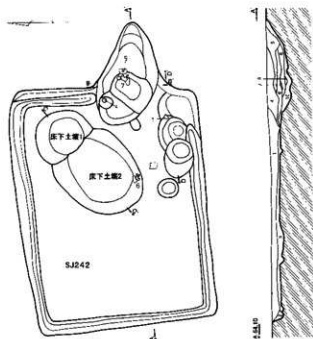
第64表 第241号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	土師 坏	13.5	3.5		ADEHJ	3	赤褐	70	2・4区
2	土師 坏	(12.0)	3.8		DEH	2	橙褐	30	カマドNo45
3	土師 坏	(12.6)	3.4		DEH	1	明褐	65	3区 No19
4	土師 坏	13.3	3.6		BDEJ	2	橙褐	90	No30
5	土師 坏	13.2	4.4		BDE	1	橙褐	95	No18・20
6	土師 坏	12.2	3.6		DEGJ	1	明褐	80	No21
7	土師 坏	(12.3)	3.3		DEGJ	1	橙褐	50	No21
8	土師 坏	12.8	4.0		DEGH	1	明褐	65	No17
9	土師 坏	(13.0)	4.0		BDE	2	明褐	30	4区 No23
10	土師 坏	13.3	3.9		ADEH	2	明褐	80	3・4区 No24・25
11	土師 坏	13.3	3.9		ADEH	2	明褐	80	No16
12	土師 坏	12.9	3.2		DEG	2	明褐	50	No13
13	土師 坏	(13.0)	3.8		DE	2	淡褐	30	No14 内面風化
14	土師 坏	(16.0)	(4.9)		ABEG	1	褐	35	4区 No50
15	土師 坏	16.9	5.7		BDEJ	1	橙褐	80	No29・31
16	土師 坏	12.4	3.0		BDE	1	橙褐	90	No22
17	須恵 坏	2.4		(8.6)	E	2	灰白	15	3区 へら起こし 群馬産 A
18	土師 甕	8.9		(11.4)	BDEG	1	橙褐	30	カマド
19	土師 台付 甕	13.8	18.9	11.4	ADE	1	赤褐	80	4区 No4・10・13
20	土師 甕	23.2	27.7	(5.5)	ADE	2	橙褐	80	カマドNo35・36・41・42 カマド
21	土師 甕	23.8	21.4		ADE	2	明褐	40	カマドNo32・38・47・48
22	土師 甕	(22.4)	11.3		ABDE	1	赤褐	30	2区
23	土師 甕	(22.8)	17.0		ABEH	2	赤褐	20	カマドNo37・41・42
24	土師 甕	(25.0)	9.6		ABDEH	3	橙褐	30	No12・28
25	土師 甕	9.0	5.1		BEH	1	褐	70	No9
26	土師 甕	11.7	5.3		ABCEG	1	明褐	70	カマドNo32・48・49
27	土師 甕	22.2	7.0		ADEH	1	明褐	50	カマドNo38
28	土師 甕	3.7	7.0		ABDE	2	橙褐	60	No6
29	土師 甕	8.3	5.6		BDEG	1	明褐	30	

は南北方向3.57m、東西方向2.37m、深さ0.20mである。主軸方向は、東カマドを想定した場合、N-60°-Eとなる。床面は平坦で、貼り床が施されている。覆土は埋め戻しである。

カマドは確認されず、東壁に造られていたと推定

される。土壌が南西コーナーから1基検出されている。長径80cm、短径60cm、深さ30cmである。ピットは遺構の中央で1基検出されている。長径60cm、短径40cm、深さ55cmである。柱穴である可能性もあるが対応関係は明らかでない。



SJ242

1 焼成褐色土 焼土粒多し、ローム状を有す

2 灰褐色土 焼土粒、ローム状を有す

SJ242のウ

3 暗褐色土 ローム多量、焼土粒を有す

4 灰褐色土 灰化物質多量、焼土粒を有す

5 灰白色土 焼土粒、ブロック多量、灰化物質少量

6 灰褐色土 焼土粒、灰化物質を有す

7 暗褐色土 灰多量

8 灰白色土 灰、焼土粒多量

9 暗褐色土 焼土粒を有す

10 暗褐色土 焼土粒、ローム状を有す

11 黄褐色土 ローム主体

SJ242床下土層1・2

1 灰褐色土 ローム状、ブロック (1~3cm大) 多量、焼土粒少量

2 暗褐色土 焼土粒多量、ローム状、ブロックを有す

3 灰白色土 焼土粒、ローム状を有す

4 暗褐色土 ローム状、ブロック (1~5cm大) 多量、焼土粒を有す

SJ242ピット

1 暗褐色土 焼土粒少量、灰化物質を有す

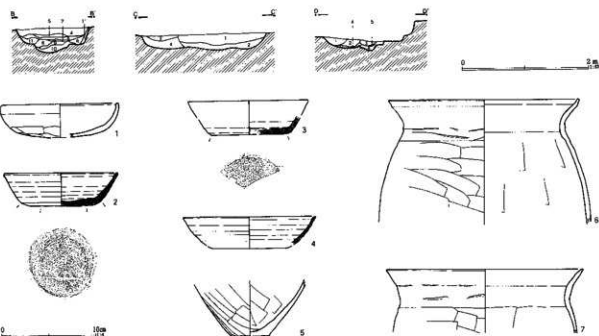
2 暗褐色土 焼土粒多量

3 灰褐色土 焼土粒を有す

4 灰白色土 ローム主体

5 暗褐色土 灰化物質

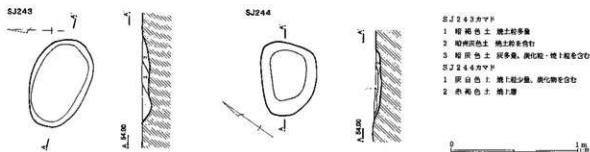
6 暗褐色土 焼土粒、灰化物質を有す



第135図 第242号住居跡・出土遺物

第65表 第242号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	12.3	3.5		BEH	2	橙褐	75	No.3
2	須恵環	(12.0)	4.5	(7.0)	ABEIJK	3	灰	65	床下土層1・2 床下木野産 A
3	須恵環		1.8	(8.0)	BEF	1	明青灰	20	南比企産 A
4	須恵環	(14.0)	3.0		EFK	1	明青灰	15	床下土層1・2 南比企産 A
5	土師壺		6.8	4.0	ABDEG	1	黄褐	75	No.1
6	土師壺	(20.0)	13.2		ABEG	3	褐	15	
7	土師甕	(20.7)	6.7		ABEG	1	暗灰褐	15	No.2



第136図 第243・244号住居跡カマド

遺物は土師器の坏が出土している。時期は7世紀後半である。

第240号住居跡 (第127図)

調査区のほぼ中央、G・H-20・21グリッドに位置する。第238・239号住居跡と重複関係にあり、前者より古く、後者より新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸5.89m、短軸4.59m、深さ0.10mである。主軸方向は、N-26°-Wを指す。床面は平坦である。覆土は埋め戻されている可能性がある。

カマドは北壁のほぼ中央に造られている。燃焼部は細長い土壇状に掘り込まれ、ほぼ壁内に収まっている。3・4層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(2層下)は床面とほぼ同じ高さである。灰層は不明瞭である。1・2層は天井部の崩落土である。袖は両側で認められ、灰褐色粘土を貼り付けて造られている。柱穴は4基検出されている。径50cm、深さ60cmで、柱痕等は認められない。

遺物は、土師器の坏・鉢・甎が出土している。時期は7世紀後半である。

第241号住居跡 (第131図)

調査区のほぼ中央、G-21・22、H-21グリッドに位置する。第238号住居跡、第124号土壇と重複関係にあり、両者より古い。

平面形は長方形である。規模は長軸5.31m、短軸4.13m、深さ0.24mである。主軸方向は、N-75°-Eを指す。床面は平坦である。覆土は埋め戻されている可能性がある。7層は床面上に広がる砂質の土で、地震に伴う噴砂と考えられる。

カマドは東壁のほぼ中央に造られている。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、突出している。4層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(3層下)は床面よりやや下位である。3b層は灰層である。1・2層は天井部の崩落土である。袖は両側で認められ、灰白色粘土を貼り付けて造られている。カマドの南側には幅30cmほどの棚状の施設が設けられている。柱穴は4基検出され、各々に重複が見られることから建て替えられた可能性がある。径60cmほどの大きな掘り方の中に径30cm、深さ50cmの掘り込みが2ヶ所認められる。2層は柱の抜き取り痕の可能性がある。南壁には、幅1.4mほどの長方形の60cmほどの張り出しが設けられている。第217号住居跡の入り口状施設と同様の位置から片岩の破片が出土しており、本住居跡の張り出しも入り口の施設の可能性がある。

遺物は、土師器の坏・壺・甎・甎・甎・甎が出土している。2・20・21・23・26・27は、カマド出土である。多くは天井部の崩落土に含まれ、かけてあった状態のものがつぶれた可能性もある。3・5・6・7・8・9・16は、カマド南側の棚状施設から落ちたような状態で出土している。両側の壁際からはかなり浮いた状態で、12・13・19・25・28が出土している。15・24のように離れて接合するものもあり、埋没過程を示す好例と言えよう。18は底部の粘土帯のみが幅広く、接合痕が明瞭に残る。器面もへら削りが施されておらず、凹凸が著しい。19は脚台部の榫を除く外面と内面の口縁部と胴部上半に煤が付着する。実際に火に掛けた様相が明瞭に分かるもので

ある。炉のような施設に掘え置かれたものと考えられる。土器以外にも西側の床面から鎌（第269図12）が、覆上から円盤状の用途不明の鉄製品（第270図23）が出土している。時期は8世紀前半である。

第242号住居跡（第135図）

調査区のほぼ中央、H-21グリッドに位置する。

平面形は長方形である。規模は長軸3.87m、短軸3.00m、深さ0.05mである。主軸方向は、N-85°-Eを指す。床面は平坦で全体に貼り床（3層）が施されている。覆上は自然堆積である。

カマドは東壁のやや南寄りに造られている。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、突出している。掘り方は2基の土壇が切り合うような形に掘り込まれている。10層は掘り方で、埋め戻されている。火床面（8層下・9層）は床面とはほぼ同じ高さである。7・8層は灰層である。5層は天井部の崩落土である。袖は確認できなかったが、11層の状況からローム土と灰白色粘土で造られていたと考えられる。床下土壇は2基検出され、切り合い関係が認められる。1は長径1.35m、短径1.2m、深さ25cm、2は長径90cm、短径70cm、深さ20cmで、両者とも埋め戻されている。南東コーナーには径60cmの3基のピットが連続して掘り込まれた状態で検出されている。深さ15~20cmで、覆土は焼土を多く含む。性格は不明である。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏が出土している。5・7は、カマド出土である。1・2・4は床下土壇やピットからの出土である。時期は8世紀末である。

第243号住居跡（第136図）

調査区のほぼ中央、I-21グリッドに位置する。遺構の大部分が削平されており、カマドのみを検出した。

主軸方向は不明だが、W-Eに近い軸方向になると考えられる。

カマドは西壁に造られていたと推定される。遺存している部分は、土壇状に掘り込まれた燃焼部の一

部と考えられる。掘り込みの底面が火床面と考えられる。3層は灰層である。1・2層は天井部の崩落土である。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第244号住居跡（第136図）

調査区のほぼ中央、H-I-22グリッドに位置する。遺構の大部分が削平されており、カマドのみを検出した。

主軸方向は不明だが、N-45°-Eに近い軸方向になると考えられる。

カマドの附設される壁の方向は不明である。遺存している部分は、土壇状に掘り込まれた燃焼部の一部と考えられる。2層が火床面と考えられる。灰層は不明である。1層は天井部の崩落土で、カマドが灰白色粘土で造られたことを示している。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

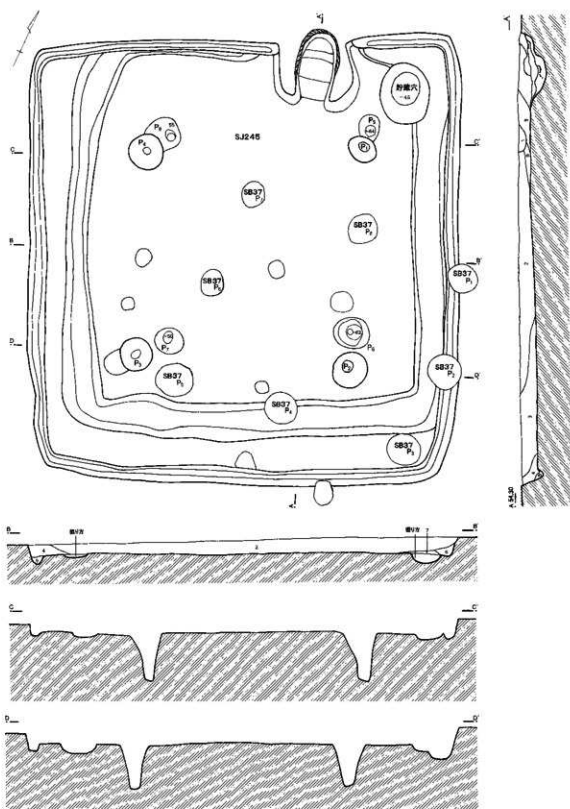
遺物は凶示不能な土師器の小破片が出土したのみである。時期は不明である。

第245号住居跡（第137図）

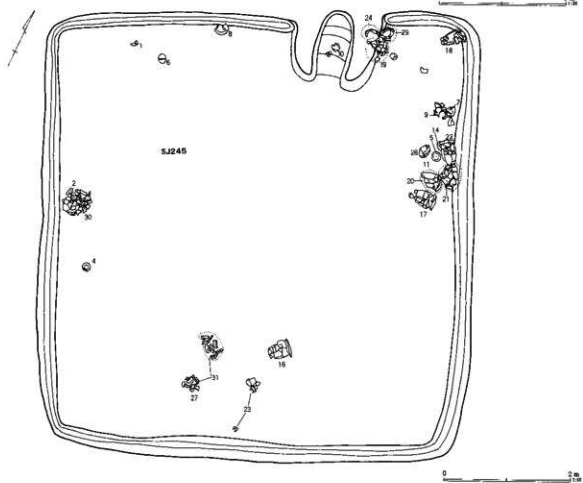
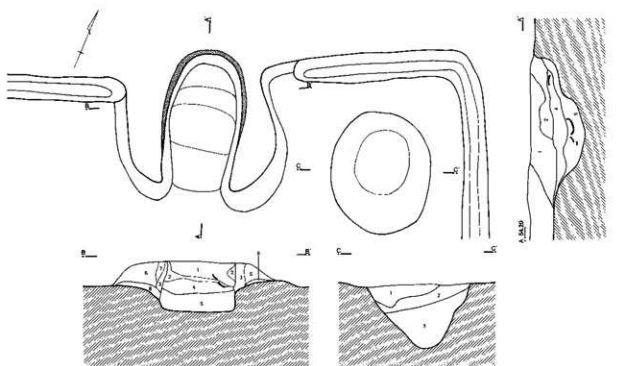
調査区の西側、G・H-16・17グリッドに位置する。第37号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。

平面形は方形である。規模は長軸6.98m、短軸6.83m、深さ0.19mである。主軸方向は、N-25°-Wを指す。床面は平坦でよく踏み固められ、硬質である。全体に溝状の掘り方があり、掘り方調査時に拡張前の住居跡を検出した。北壁とカマドは共有し、その他の各辺を拡張している。掘り方の外周を拡張前の住居とすると、規模は長軸6.35m、短軸6.10mになる。覆土は埋め戻しである。2層中には焼土が多く含まれ、遺構検出時に不整形のプランを確認できるほどであった。

カマドは北壁のやや東寄りに造られる。拡張前と拡張後で全く同じように使用しているようで、拡張前のカマドにかかわるような痕跡は検出できなかった。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、ほぼ壁内に収まっている。奥壁と側壁がよく焼けてバリバリに焼土化



第137图 第245号位居跡



第138図 第245号住居跡カマド・遺物分布図



SJ 245 貯蔵穴

- 1 暗褐色土 白色粘土ブロック・ロームブロック少量
- 2 暗褐色土 白色粘土塊・焼土粒少量
- 3 暗褐色土 ローム粒比較的多



SJ 245

- 1 暗褐色土 焼土ブロック多量
- 2 暗褐色土 ロームブロックまばら、ローム粒・焼土粒多量
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量
- 4 黒色土 ローム塊多
- 5 黒色土 ローム粒多量
- 6 黒色土 ローム粒少量
- 7 黄褐色土 ローム粒多量
- 8 暗褐色土 灰白色粘土ブロック・ローム粒・焼土粒多量
- 9 暗褐色土 灰白色粘土少量、暗褐色土ブロック多量

SJ 245 カマド

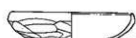
- 1 灰白色粘土 焼土ブロック少量
- 2 赤褐色粘土 ブロック状焼土多量、白色粘土多量
- 3 赤褐色粘土 壁残断
- 4 黒色土 灰玉塊、灰白色粘土・焼土粒多量
- 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒・焼土粒・白色粘土多量
- 6 白色粘土
- 7 白色粘土 壁残断
- 8 暗褐色土 焼土・ローム粒多量



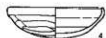
1



2



3



4



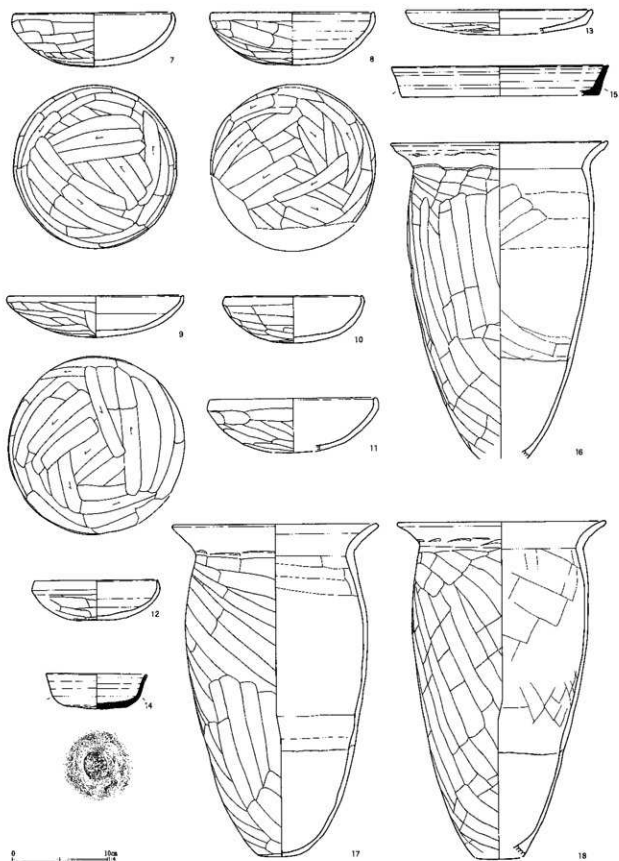
5



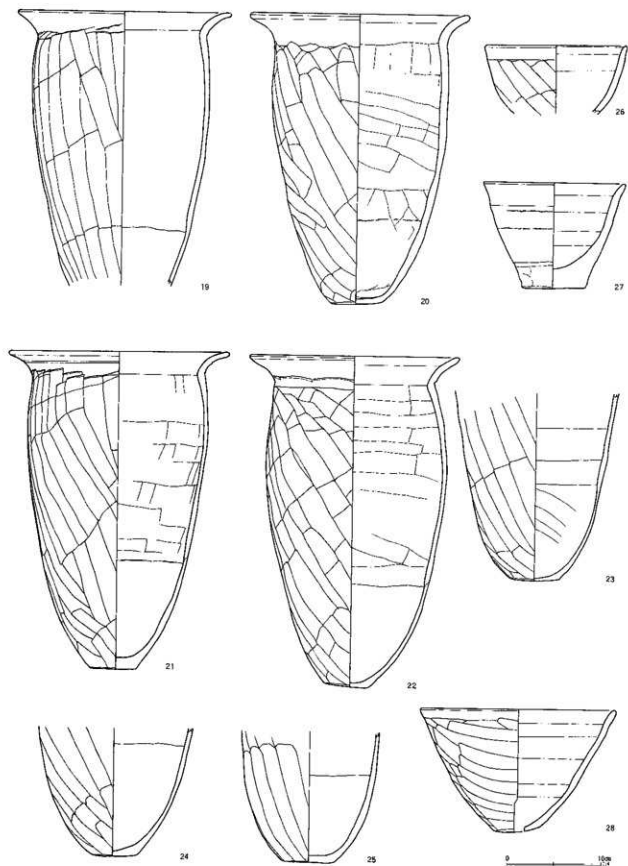
6



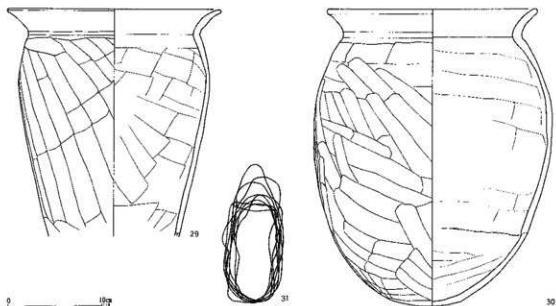
第139図 第245号住居跡遺物出土状況図・出土遺物(1)



第140图 第245号住居跡出土遺物(2)



第141图 第245号住居跡出土遺物(3)



第142図 第245号住居跡出土遺物(4)

第66表 第245号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(9.9)	3.0		DEH	2	橙褐	30	No.23 全体に風化
2	土師環	(11.0)	3.1		ADE	2	橙褐	30	No.11
3	土師環	(12.8)	3.2		BDE	2	橙褐	35	貯蔵穴 カマド
4	土師環	10.0	3.3		DEJ	1	橙褐	95	No.24
5	土師環	12.7	3.7		ADE	1	橙褐	100	No.9
6	土師環	13.0	3.6		DEJ	1	橙褐	100	No.22
7	土師環	16.8	5.7		BDE	1	赤褐	100	No.20
8	土師環	17.2	5.6		DE	2	橙褐	85	No.21
9	土師皿	18.6	4.4		ADE	2	褐	95	No.19
10	土師環	14.6	5.0		DEJ	1	橙褐	85	カマド No.14
11	土師環(縮)	(17.6)	5.6		BDE	2	褐	35	No.12
12	土師環	(13.0)	4.2		DEH	2	橙褐	20	
13	土師盤	(19.6)	2.4		ADE	1	茶褐	15	
14	須恵環	10.7	3.7	7.0	BEI	1	青灰	100	No.10 木野産 A
15	須恵盤	(23.0)	3.1	(21.0)	BD	1	灰白	15	群馬産 A
16	土師甕	23.0	33.3		ADEH	1	明褐	95	No.6・8
17	土師甕	21.5	35.0	4.5	DEH	2	橙褐	95	No.1
18	土師甕	22.2	35.3	5.3	EIJ	1	橙褐	95	No.5
19	土師甕	22.4	29.0		ABRHJ	2	橙褐	70	No.6
20	土師甕	22.6	30.6	5.5	EGIJ	2	茶褐	90	No.2
21	土師甕	23.0	33.5	4.9	ABEGJ	2	橙褐	90	No.4
22	土師甕	21.9	35.0	4.7	AEIJ	3	橙褐	95	No.3
23	土師甕	19.9	19.9	5.4	DEH	2	褐	65	No.26・28
24	土師甕	13.7	13.7	4.6	DEH	3	橙褐	80	No.7
25	土師甕	13.8	13.8	5.3	DEII	2	褐	50	カマド
26	土師鉢	(14.8)	7.3		ABEG	1	橙褐	20	カマド
27	土師鉢	15.0	11.2	6.5	DEII	2	茶褐	95	No.25
28	土師瓶	20.6	13.0	3.0	BDEHJ	1	橙褐	85	No.12
29	土師甕	(22.8)	24.0		ABEJ	2	明褐	40	No.13
30	土師甕	22.0	31.4	7.8	EHJ	2	明褐	90	No.11

している。網掛け部分は焼土化した範囲である。5層は掘り方である。火床面（4層下）は床面よりやや下位である。4層は灰層、1・2層は天井部の崩落土である。袖は両側で確認され、白色粘土（6・7層）を貼り付けて造られている。貯蔵穴は拡張後の住居跡に伴うもので、カマドの東側にあり、長径95cm、短径80cmで、覆土は自然堆積と考えられる。柱穴は4基のセットが2組確認された。1～4は拡張後の住居跡に伴うもので、径40～60cm、深さ60～70cmで、覆土の状況は確認できなかった。5～8は拡張前の住居跡に伴うもので、径40～60cm、深さ50～64cmで、覆土の状況は確認できなかった。

遺物は、土師器の杯・皿・盤・鉢・甕・甗が出土している。完形に近い甗類が多く出土しており、特徴的である。24・29はカマドの東側袖の外側から、埋め込まれたものが途中で折れた状態で出土し、カマドの補強材として使用されたものと考えられる。南壁際のはほぼ床面上からは杯や甗が並べられたと考えられる状態で出土している。21・22は底部を合わせた状態で、17・20は並べた状態で、5・7・10・14は据え置かれたと考えられる状態で出土している。北壁際や南壁際からも甕・鉢が出土している。14は木野窯跡産で、底面はへら起しのままで、ややへそが出ている。内面はその際の凹凸が明瞭に残り、再調整は加えられていない。27は胎土に雲母を多く含み、器壁が厚く、調整もナデのみで粘土帯の接合痕が明瞭に残る。30は器壁が厚く、重量感があり、プロポーションや調整も様相を異にすることから、他地域の影響を受けている可能性もある。甕は、21は2次加熱痕が不明瞭だが、それ以外はいずれも使用されたものようである。23はかなり2次加熱を受けているようで、ボロボロである。31は編物石で8個出土している。長さ10～13.5cm、幅4～6cm、重さ212～386gである。石材は砂岩、安山岩等である。中には、使用痕が認められるものもあり、磨石のように用いたものと考えられる。時期は7世紀末である。

第246号住居跡（第143図）

調査区の西側、G-18グリッドに位置する。第247号住居跡、第36号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。

平面形は歪んだ長方形である。規模は長軸2.86m、短軸2.49m、深さ0.41mで深い。主軸方向は、N-78°-Eを指す。床面は平坦で、良く踏み固められ、硬質である。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の南寄りに造られる。燃焼部は土塊状に掘り込まれ、突出している。奥壁は段を持つ。火床面（7層下）は床面よりやや下位である。7層は灰層、6層は天井部の崩落土である。袖は両側で確認され、白色粘土を貼り付けて造られている。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の杯・甕、須恵器の甗が出土している。4・6の杯は完形に近く、北西・南東のコーナーからそれぞれ逆位・正位で出土している。4には8の甗が蓋をするように被せてあった。6の杯は底面の外周に指頭による顕著な凹みがあり、全体がやや歪んでいる。時期は8世紀中葉である。

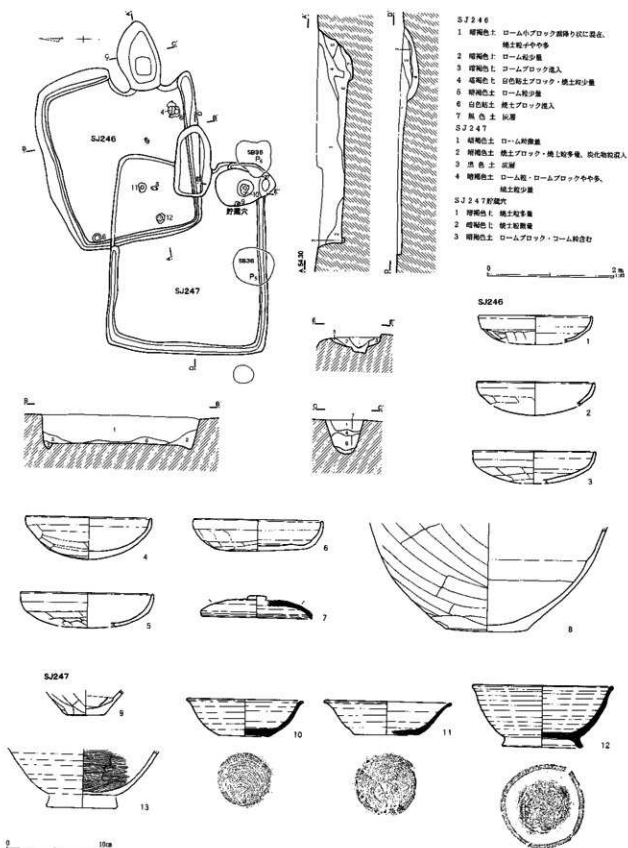
第247号住居跡（第143図）

調査区の西側、G-17・18グリッドに位置する。第246号住居跡、第36号掘立柱建物跡と重複関係にあり、建物跡より古く、本住居跡より新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.08m、短軸2.54m、深さ0.05mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦だが、第246号住居跡と重複する範囲は陥没している。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁のはほぼ中央に造られる。燃焼部は土塊状に掘り込まれ、突出している。4層は掘り方である。火床面（3層下）は床面よりやや下位である。3層は灰層、2層は天井部の崩落土である。袖は両側で辛うじて確認され、白色粘土を貼り付けて造られている。貯蔵穴はカマドの南側にあり、長径70cm、短径60cm、深さ25cmで、埋め戻しである。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の甗、須恵器の杯・高台付碗、口



第143図 第246・247号住居跡・出土遺物

第67表 第246・247号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.8		DEH	2	茶褐	25	
2	土師環	(12.4)	2.5		DE	2	褐	35	
3	土師環	(13.0)	3.4		DEH	2	橙褐	20	
4	土師環	13.2	4.5		ADEHJ	1	明褐	90	Na.3
5	土師環	(14.0)	3.5		ADE	1	橙褐	25	体部～底部に黒斑有り
6	土師環	13.6	3.3		ADEJ	1	橙褐	100	No.1
7	須恵蓋	(11.6)	1.9		BEI	1	青灰	35	木野産
8	土師壺		11.3	8.5	ADEH	2	褐	55	Na.4
9	土師壺		2.6	4.0	DEJ	2	赤褐	60	Na.4
10	須恵環	12.2	3.9	5.3	AEF	2	褐灰	95	No.1 貯蔵穴 南北企産 A
11	須恵環	13.4	3.5	6.7	ABIJ	3	赤褐	90	No.1 木野産 A
12	須恵高台碗	(14.6)	6.6	7.7	ABEI	3	赤褐灰	70	Na.3 木野産 A
13	クロコ高台碗		4.8		ADE	3	明褐	20	

クロコ土師器の高台付碗が出土している。9・10は貯蔵穴出土で、10は正位で納めたような状態で出出した。11もカマド北側の床面から正位の状態で出上している。時期は9世紀中葉である。

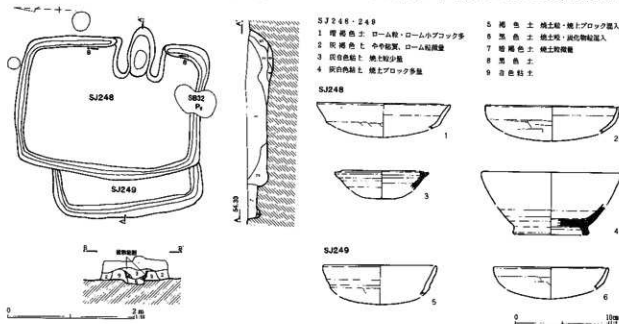
第248号住居跡 (第144回)

調査区の西側、II-17グリッドに位置する。第249

号住居跡、第32号獨立柱建物跡と重複関係にあり、前者より新しく、後者より古い。

平面形は長方形である。規模は長軸2.95m、短軸2.20m、深さ0.24mである。主軸方向は、N-88°-Wを指す。床面は平坦で、覆土は埋め戻しである。

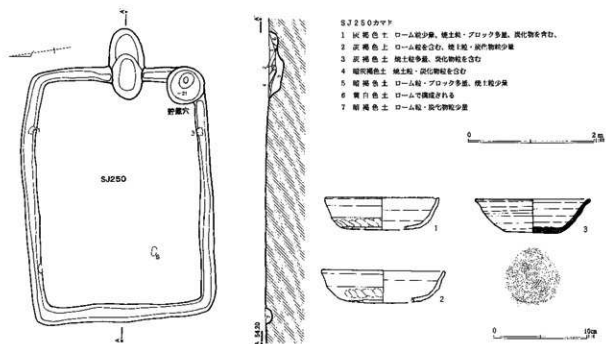
カマドは東壁のやや南寄りに造られる。燃焼部は



第144回 第248・249号住居跡・出土遺物

第68表 第248・249号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師杯	(14.2)	2.4		DE	2	褐	10	カマド
2	土師環	(14.0)	2.8		ADE	2	褐	15	
3	須恵環	(8.2)	2.0		EK	1	明青灰	20	A
4	須恵高台碗		3.3	(7.8)	AEI	3	黄灰	20	木野産 A
5	土師環	(12.0)	3.2		DE	3	褐	5	
6	土師環	(12.0)	2.3		DE	2	橙褐	5	



第145図 第250号住居跡・出土遺物

第69表 第250号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	3.3		BFG	1	暗褐	35	No.1
2	土師環	(13.0)	3.3		BDEG	15	黄	15	カマド
3	須恵環	12.2	3.6	5.6	BEIK	2	明灰	75	No.2 木野産 A

皿状に掘り込まれ、突出している。側壁がよく焼けていた。火床面（6層下）は床面よりやや下位である。6層は灰層、3・4層は天井部の崩落土である。袖は両側で確認され、白色粘土（9層）を貼り付けて造られている。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環・甕、須恵器の環・高台付碗が出土している。時期はバラツキがあり、いずれも小破片のため確実ではないが、カマド出土の1を伴うものとして、7世紀中葉から後半としておきたい。

第249号住居跡（第144図）

調査区の西側、H-17グリッドに位置する。第248号住居跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。第248号住居跡に遺構の大部分を壊されている。

平面形は方形と推定される。規模は南北方向2.35m、東西方向0.67m、深さ0.07mである。主軸方向は、東カマドを想定した場合、N-85°-Eになる。

床面は平坦で、覆土は自然堆積である。

カマド・柱穴は不明である。

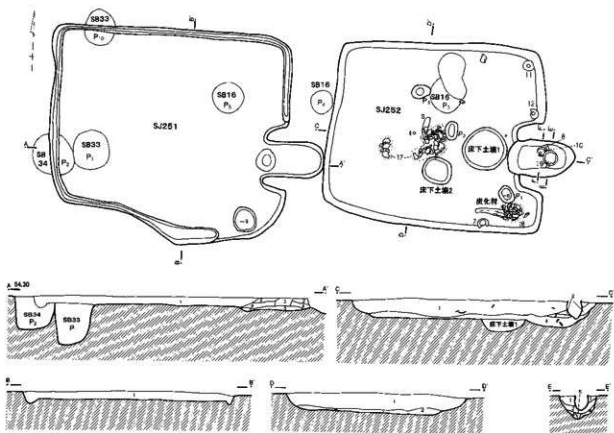
遺物は、土師器の環が出土している。時期は、7世紀中葉前後としておきたい。

第250号住居跡（第145図）

調査区の西側、H-19グリッドに位置する。第36号井戸跡と近接し、井戸跡の方が古いと考えられる。床面近くまで削平されている。

平面形は長方形である。規模は長軸3.99m、短軸3.00mである。主軸方向は、N-86°-Wを指す。床面は削平されているが貼り床が全体に遺存していた。覆土の状況は不明である。

カマドは東壁の中央に造られる。燃焼部は土塊状に掘り込まれ、突出している。5・6層は掘り方で、埋め戻されている。火床面（5層上）は床面よりやや下位である。4層は灰層、1・3層は天井部の崩落土である。袖は確認できなかった。貯蔵穴は、カ



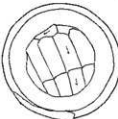
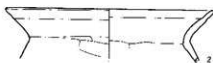
SJ251

- 1 暗褐色土 ローム殻・赤色粒・白色粒少量
カマド
- 2 暗褐色土 ローム殻・焼土粒多量
- 3 暗褐色土 焼土粒多量、しまり強
- 4 暗褐色土 焼土殻・焼土ブロック (1~3cm大) 多量
- 5 黒色土 炭多、ローム殻・焼土粒多量

SJ252

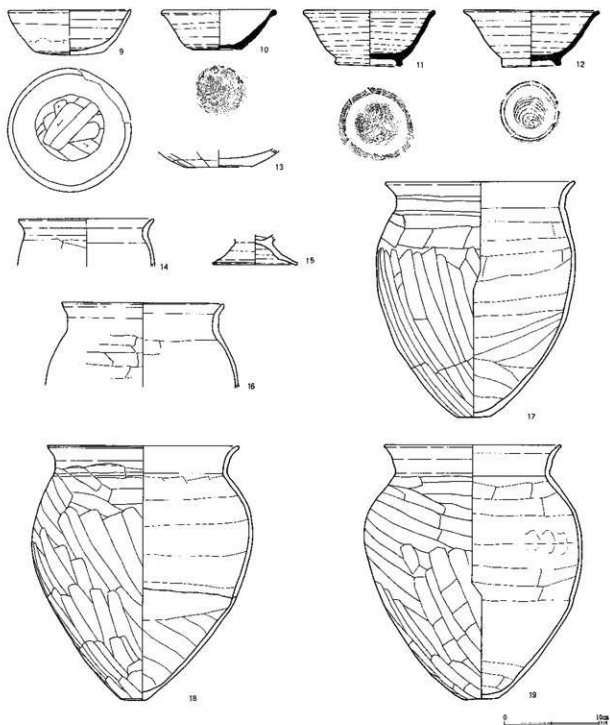
- 1 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック (2.3cm大)・赤色粒・白色粒少量
カマド
- 2 赤褐色土 焼土殻・焼土ブロック (2.3cm大) 半張
- 3 暗褐色土 焼土粒少量、しまり強い
- 4 暗褐色土 ローム殻・ロームブロック (2cm大) 多量
- 5 暗褐色土 ローム殻・焼土粒多量、しまり強い

SJ251



0 10cm

第146図 第251・252号住居跡・出土遺物(I)



第147図 第251・252号住居跡出土遺物(2)

マドの南側、南東コーナーにあり、径60cmで、中央が1段低く、深さは21cmである。覆土は焼土粒・ローム粒を含む暗褐色上で、自然堆積と考えられる。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、上師器の坏、須恵器の坏が出土している。時期は9世紀中葉から後半である。

第251号住居跡 (第146図)

調査区の西側、I-17・18、H-17グリッドに位置する。第252号住居跡、第16・33・34号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第33・34号掘立柱建物跡より新しく、その他のものより古い。

平面形は長方形である。南壁の東半は大きく南側

第70表 第251・252号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	3.1		DE	2	褐	5	
2	土師甕	(22.0)	5.6		AEGJ	1	明褐	15	
3	土師環	(11.6)	3.5	(7.0)	ADEH	2	赤褐	25	カマド
4	土師環	(12.0)	3.9	(8.2)	DEH	2	褐	30	
5	土師環	(11.4)	3.6	(7.4)	ADE	1	明褐	15	
6	土師環	(12.0)	3.9	7.2	EG	2	橙褐	50	床下
7	土師環	13.4	4.1	8.7	DE	2	褐	85	No.2
8	土師環	12.4	3.3	7.2	DEH	2	明褐	95	カマドNo.2
9	土師環	12.9	4.8	7.4	DEH	2	淡褐	90	床下
10	須恵環	12.0	4.2	5.2	BEIJ	1	灰	95	No.2 No.1カマド 末野産 A
11	須恵高台碗	13.7	5.9	6.4	AEIJ	3	黄灰	95	No.11 末野産 A
12	須恵高台碗	14.2	6.0	6.1	ABEI	3	黄灰	85	No.12 末野産 A
13	土師壺		1.8	(7.0)	HDJ	1	明褐	45	床下
14	土師小型甕	(14.2)	5.1		DE	3	暗褐	20	床下
15	土師台付甕		3.2	8.8	DEH	1	明褐	95	床下
16	土師甕	(17.0)	8.9		DE	1	褐	15	カマド
17	土師甕	19.8	24.8	3.6	ADEII	1	明褐	75	No.3・4・5 カマド
18	土師甕	20.4	26.8	2.8	ADEH	2	にょい橙	90	No.1
19	土師甕	(18.6)	26.9	3.6	EIIJ	1	橙褐	80	カマドNo.3

に張り出している。規模は長軸3.78m、短軸3.30m、深さ0.04mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦で全面に貼り床が施されている。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の中央に造られる。燃焼部は皿状に掘り込まれ、突出している。火床面（5層下）は床面よりやや下位である。5層は灰層、2～4層は天井部の崩落土である。袖は両側で確認され、灰白色粘土を貼り付けて造られている。南側の張り出し部分で、径40cm、深さ9cmの浅い皿状のピットを検出している。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の環・甕が出土している。2の甕は砂粒を多く含む。時期は8世紀前半である。

第252号住居跡（第146図）

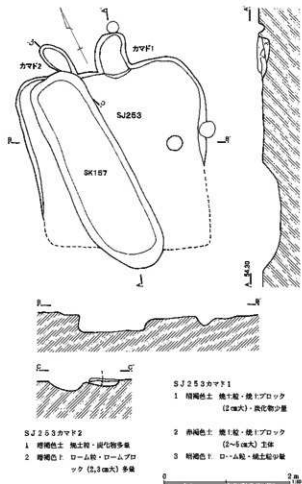
調査区の西側、I-18グリッドに位置する。第251号住居跡、第16号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸3.45m、短軸2.91m、深さ0.2mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は平坦で全面に貼り床（4層）が施されている。調査時に、その貼り床を覆土と誤認し掘り下げてしまった。覆土は埋め戻しである。南壁際から

は径10cm、長さ60cmの炭化材が出土している。

カマドは東壁のやや南寄りに造られる。燃焼部は皿状に掘り込まれ、突出している。住居から連続する掘り方に貼り床が施され、その上に燃焼部を掘り込んでいる。燃焼部の中央よりやや奥には、支脚を据え付けたと考えられる小ピット（5層）が認められた。火床面（3層下）は床面とほぼ同じ高さである。3層は灰層、2層は天井部の崩落土である。袖は両側で確認され、ローム上を貼り付けて造られている。床下土墳は2基検出された。1は径60cm、深さ5cm、2は径50cm、深さ5cmである。ピットは3基あり、1は径20cm、深さ6cm、2は径30cm、深さ10cm、3は径30cm、深さ35cmである。いずれも柱穴とは考えがたい。

遺物は多く、土師器の環・壺・甕・小型甕・台付甕、須恵器環・高台付碗が出土している。19はカマドにかけたままの正位の状態で2層に突き刺さる形で出土している。その脇には8・10の環が2枚、重ねて伏せた状態で出土している。11・12はちょうど壁の上から落ちた状態で、17は床面中央からまともって、18は炭化材に乗る形で出土している。9は深手で直線的に開き、須恵器の坏身のような器形である。11・12は酸化焰焼成である。13は古墳時代の



第148図 第253号住居跡

土師器壺の可能性があり、混入である。この他に図示不能な東濃産の灰釉陶器耳皿の小破片が出土している。時期は9世紀後半である。

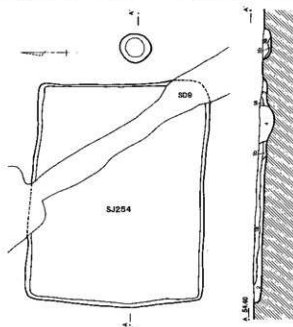
第253号住居跡 (第148図)

調査区の西側、I・J-17グリッドに位置する。第157号土壇と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。床面まで削平されており、遺構の南側は不明瞭である。

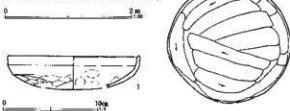
平面形は方形もしくは長方形と推定される。東壁の北半は大きく張り出している。規模は南北方向が

2.0m、東西方向が2.87m、深さは北側で0.02mである。主軸方向は、カマド1の軸方向とするとN-21°-Eを指す。床面は平坦だが壁際がやや浅くなっている。覆土の状況は確認できなかった。

カマドは北壁に2箇所造られている。築造順序は不明である。いずれも燃焼部は土壇状に掘り込まれ、突出する。カマド1は東壁の中央に造られる。3層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(2層下)



- S J 2 5 4
- 1a 赤褐色土 砂質
 - 1b 赤褐色土 褐色土をブロック状に混入する
 - 2 黒褐色土 ロームブロック混入
 - 3a 黒色土 焼土粒・フォームブロックを混入
 - 3b 黒色土 3a層に比してロームブロック多
 - 4 青灰色土 砂質、稀かにローム粒混入 (SDB)



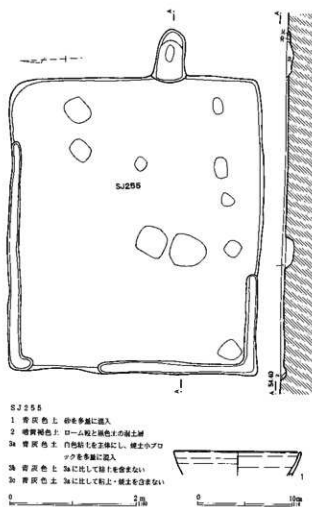
第149図 第254号住居跡・出土遺物

第71表 第254号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	残率	備	考
1	土師器 鉢	(13.8)	3.3		BDE	1	褐	20		
2	土師器 鉢	12.8	3.6		ADE	1	粉褐	80		

第72表 第255号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	残率	備	考
1	須恵系 鉢	(13.4)	2.5		ABCDE	3	灰褐	15		



第150図 第255号住居跡・出土遺物

は床面よりやや下位である。灰層は不明瞭であった。2層は天井部の崩落土である。軸は確認できなかった。カマド2は東壁の西寄り、カマド1の西側に造られている。2層は掘り方である。火床面(1層)は床面と同じ高さである。灰層は認められない。天井部の崩落土は不明である。軸は確認できなかった。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は出土しなかった。時期は不明だが、8・9世紀のものと考えられる。

第254号住居跡(第148図)

調査区の南西側、L-14グリッドに位置する。第9号溝跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。床面まで削平されており、調査できたのは掘り方のみである。また、東側のピットは位置関係からカマドに関連する施設の可能性があることから、本住居

跡と一体のものとして、ここで報告する。

平面形は長方形である。規模は長軸3.50m、短軸2.81mである。主軸方向は、東カマドを想定した場合、W-Eとなる。床面は既に削平されており、1層は第9号溝跡開削までの間に洪水等によってもたらされたものと思われる。2層は掘り方で、埋め戻されている。恐らく2層上には貼り床が全面に施されていたと思われる。

カマドは不明であるが、ピットをその関連施設とすると東壁のほぼ中央に造られていたことになる。ピットは径60cm、深さ15cmで、覆土は流れ込みである。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、土師器の坏が出土している。1は底部に顕著な指オサエが見られ凸出している。遺物の時期は8世紀中葉だが、7世紀後半の第9号溝跡より古いことから混入と考えられ、本住居跡の時期はそれ以前と考えられる。

第255号住居跡(第150図)

調査区の南西側、M-14グリッドに位置する。床面まで削平されており、遺構の南側は不明瞭である。

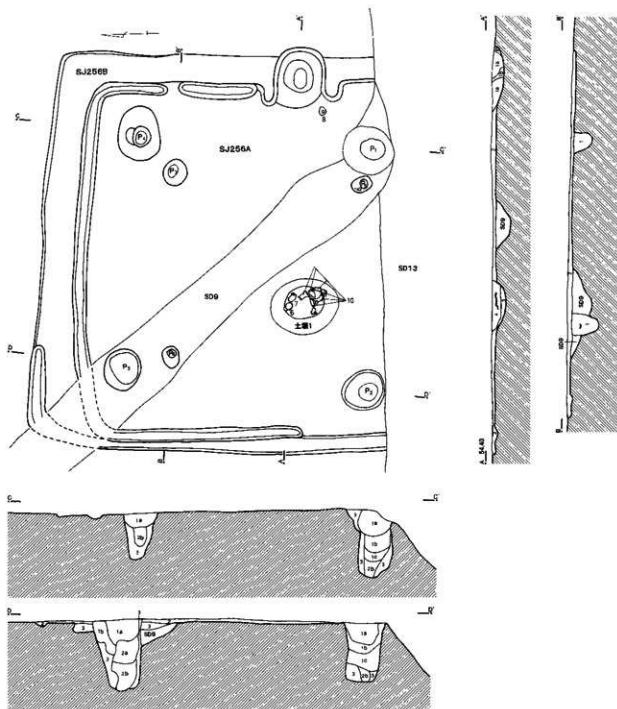
平面形は長方形である。規模は長軸4.68m、短軸4.02mである。主軸方向は、W-Eを指す。床面は既に削平されている。1層は掘り方で、埋め戻されている。

カマドは東壁のやや南寄りに造られている。燃焼部は土壌状に掘り込まれ、突出する。3層は掘り方で、埋め戻されている。粘土を貼り付けて火床面を造っているものと思われる。従って、火床面は3層の上となり、確認できなかったことになる。軸は確認できなかった。柱穴は確認できなかった。

遺物は須恵系土師質土器の坏と図示不能な土師器の葉の小破片が出土している。時期はいずれも小破片のため確実ではないが、10世紀前半のものと考えられる。

第256号住居跡(第151図)

調査区の南西側、M-14・15グリッドに位置する。第9・13号溝跡と重複関係にあり、前者より新しく、



SJ 256カマド

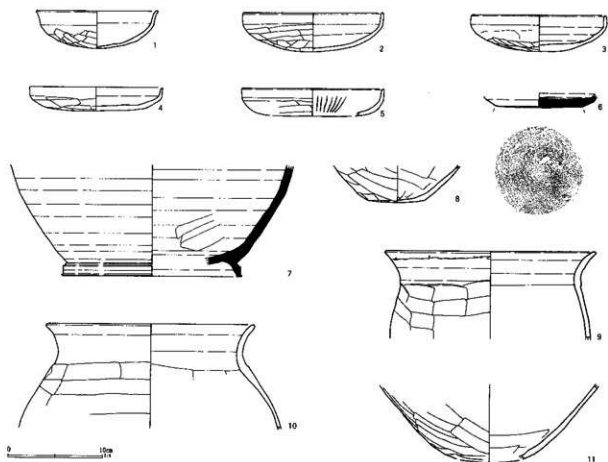
- 1a 暗赤褐色土 焼土ブロック・黒色土粒子で構成される。
- 1b 暗赤褐色土 1aに比して焼土ブロックの量が極端に少ない
- SJ 256
- 2 黒褐色土 ブロック状で硬質、堅固
- 3 暗赤褐色土 黒色土を僅かに混入する
- SJ 256土壇1
- 4 黒褐色土 ローム状多量、焼土粒を僅かに含む
- 5 暗赤褐色土 5層との間には灰層を含む、炭化物・焼土粒を含む

SJ 256Aピット6・7

- 1 暗赤褐色土 黒色土とローム混土層、焼土小ブロック層がらを含む
- SJ 256ピット1~4
- 1a 褐灰色土 砂多量
- 1b 褐灰色土 ロームブロック多量
- 1c 褐灰色土 ロームブロック多量、黒色土混入
- 2a 黒褐色土 焼土粒・ブロック多量
- 2b 黒褐色土 焼土多量
- 3 暗赤褐色土 黒色土とロームブロックで構成

0 2m

第151図 第256号A・B住居跡



第152図 第256号A・B住居跡出土遺物

第73表 第256号住居跡出土遺物観察表

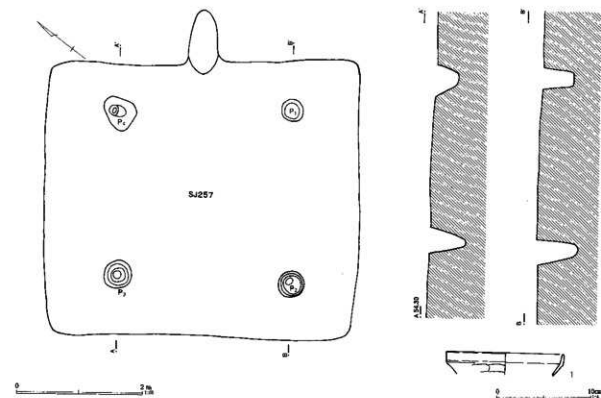
番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.8)	4.0		DEH	1	明褐	35	B P 3
2	土師環	(14.8)	4.1		ADE	2	橙褐	45	B
3	土師環	(14.0)	3.9		ADE	2	褐	65	B P 4
4	土師環	(14.0)	2.5		ABEH	1	橙褐	45	B P 4
5	土師環	(15.0)	2.8		BDE	1	褐	20	B P 3 内面放射暗文
6	須恵柄		1.5	9.2	ABEI	3	明黄灰	100	B 土塊1 No 1 末野産 手持ちヘラケズリ A
7	須恵長頸壺		11.8	(19.0)	EK	1	明黄灰	15	B 土塊1 No 2 秋田産
8	土師甕		3.0	6.0	BEH	1	褐	70	B No 1
9	土師壺	(22.0)	9.3		ABEH	1	赤褐	30	B
10	土師壺	22.0	11.0		ADE	1	橙褐	85	B 土塊1 No 3-8
11	土師壺		7.9	(9.6)	ABCDE	1	赤褐	25	B

後者より古い。遺構の南側は第13号溝跡によって壊されている。床面まで削平される。

平面形は方形である。規模は東西方向6.00m、南北方向5.69m (256B)である。主軸方向は、W-Eを指す。床面の状況は不明だが、2層が堅緻であることからよく踏み固められていたと考えられる。2層除去後拡張前の住居跡(256A)を検出した。南壁とカマドは共有し、東側は不明だが、その他の各辺

を拡張している。拡張前の住居の規模は東西方向5.62m、南北方向4.90mになる。

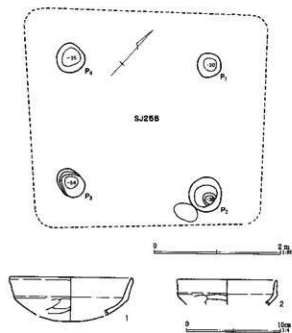
カマドは東壁に造られる。拡張前と拡張後で全く同じように使用しているようで、拡張前のカマドにかかわるような痕跡は検出できなかった。燃焼部は土塊状に掘り込まれ、256Aの場合には突出し、256Bの場合にはほぼ壁内に収まっている。火床面(1層)と床面の関係は不明である。灰層、天井部の崩



第153図 第257号住居跡・出土遺物

第74表 第257号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.4)	2.3		AEG	1	明褐	10	P 4



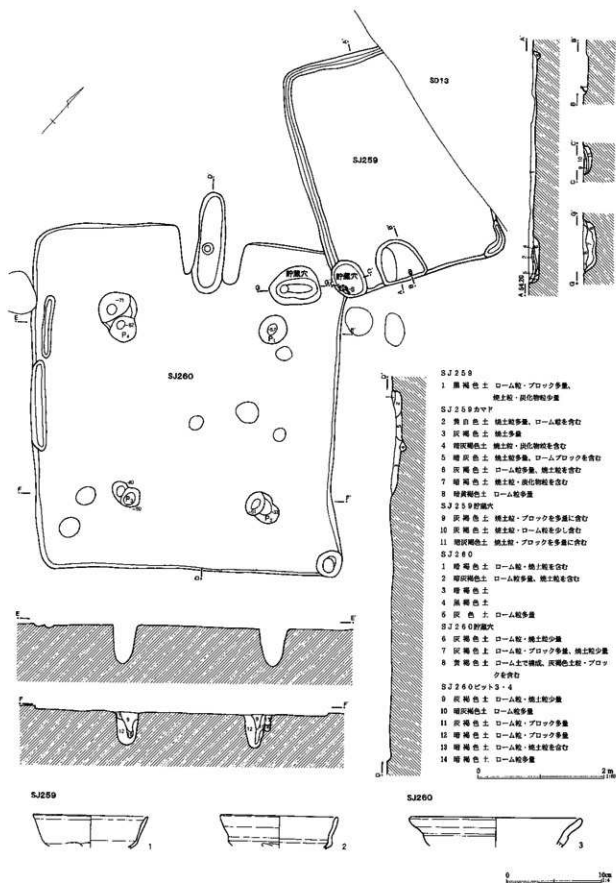
第154図 第258号住居跡・出土遺物

第75表 第258号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(13.0)	4.0		ABG	2	橙褐	5	P 2
2	土師環	(10.5)	2.6		ABEG	1	明褐	10	P 2

落土は不明である。軸は両側で確認され、白色粘土（6・7層）を貼り付けて造られている。土壌1は拡張後の256Bに伴うもので、長径1.10m、短径85cmである。中から土師器甕、須恵器長頸壺・環が出土している。柱穴は256Aの南西側のものを除き、4基のセットが2組確認された。1～4は拡張後の住居跡に伴うもので、径60～70cm、深さ70cm～1.10mで、2層が柱痕である。焼土を多く含むことから、抜去した後に火を上屋に火をかけた可能性も考えられる。5～7は拡張前の住居跡に伴うもので、径20～40cm、深さ35～42cmで、柱痕等は認められなかった。

遺物は、土師器の環・甕・壺、須恵器の碗・長頸壺がある。6・7・10は、土壌1から一括して出土した。6は分厚く、底部全面が手持ちへら削りで、



第155図 第259・260号住居跡・出土遺物

第76表 第259・260号住居跡出土遺物観覧表

番号	器種	口径	高さ	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	3.4		ADEH	2	褐	5	
2	土師環	(12.4)	3.4		ABGH	2	茶褐	10	カマド
3	土師甕	(18.0)	3.0		BDE	1	褐	15	覆土

大ぶりの椀と考えられる。時期は8世紀中葉である。

第257号住居跡 (第153図)

調査区の南西側、M-15グリッドに位置する。ピット調査後に住居跡として認定したもので、北壁と西壁の一部、南東コーナーの掘り方を検出したのみである。カマドは土壌状に黒色に変色した範囲と考えたもので確実ではない。床面まで削平されている。

平面形は方形である。規模は長軸5.01m、短軸4.37mである。主軸方向は、N-52°Eになる。床面・覆土の状況は不明である。

柱穴は4基検出された。径40～50cm、深さ35～60cmで、覆土の状況は確認できなかった。

遺物は、土師器の環と、図示不能な甕の小破片が出土している。時期は8世紀と思われる。

第258号住居跡 (第154図)

調査区の南西側、O・P-16グリッドに位置する。床面まで削平されており、柱穴の配置から住居跡と認定したものである。

平面形、規模、カマドの様相等は不明である。

柱穴は4基検出された。径40～50cm、深さ30～54cmで、覆土の状況は確認できなかった。

遺物は、土師器の環の小破片がピット2から出土している。時期は7世紀中葉頃と思われる。

第259号住居跡 (第155図)

調査区の南西側、N-18グリッドに位置する。第260号住居跡、第13号溝跡と重複関係にあり、前者より新しく、後者より古い。遺構の北側は第13号溝跡によって壊されている。

平面形は長方形である。規模は長軸3.61m、短軸2.73m、深さ0.06mである。主軸方向は、N-57°Wを指す。床面は平坦で、貼り床が施されている。覆土は埋め戻しである。

カマドは南東壁の南西寄りに造られる。燃焼部は

土壌状に掘り込まれ、ほぼ壁内に収まっている。5～7層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(4層下)は床面よりやや下位である。奥壁中央に、支脚と考えられる礫が立ったままの状態出土している。4層は灰層、2・3層は天井部の崩落土である。袖は確認できなかった。貯蔵穴はカマドの南西側にあり、長径60cm、短径50cm、深さ15cmで、埋め戻されている。中に礫を入れた土師器環が、コーナー部分から出土している。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

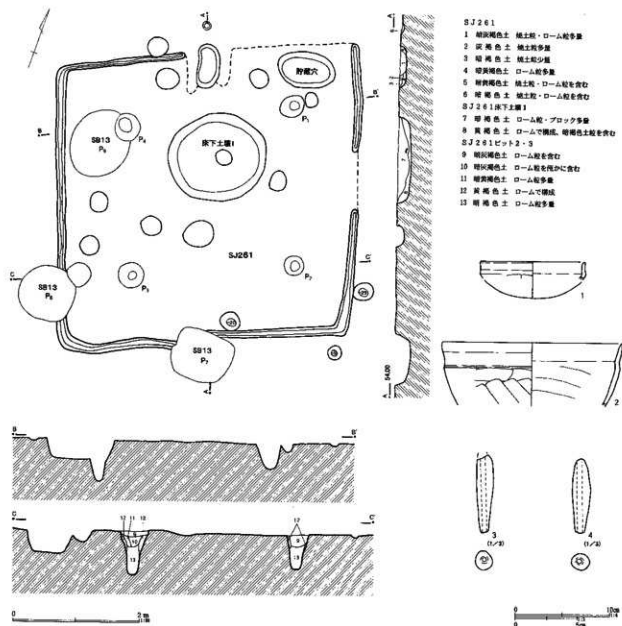
遺物は、土師器の環が出土している。図示していないが、甕の破片の中に礫が入った状態で貯蔵穴から出土したものがあり、埋置した可能性がある。時期は重複関係から7世紀頃と考えられる。

第260号住居跡 (第155図)

調査区の南西側、N・O-17・18グリッドに位置する。第259号住居跡、第13号溝跡と重複関係にあり、両者より古い。床面まで削平されている。

平面形は長方形で、北西壁はカマドの左右で壁がズレる。規模は長軸5.29m、短軸4.81mである。主軸方向は、N-42°Wを指す。床面、覆土の状況は不明である。北西壁のズレ、南西側の壁周溝のズレ、柱穴の切り合いから同一床面で、南西側に拡張したものと考えられる。

カマドは南西壁の中央に造られる。燃焼部は細長い溝状に掘り込まれ、突出している。火床面(3層下)は床面より下位である。中央に、支脚を据え付けたと考えられる小ピット(4層)が穿たれている。灰層は確認できなかった。1・2・5層は天井部の崩落土である。袖は両側で確認され、灰白色粘土を貼り付けて造られている。貯蔵穴はカマドの北東側にあり、長径80cm、短径60cm、深さ20cmで、埋め戻されている。柱穴は4基検出された。P2～4は2



第156図 第261号住居跡・出土遺物

第77表 第261号住居跡出土遺物観察表

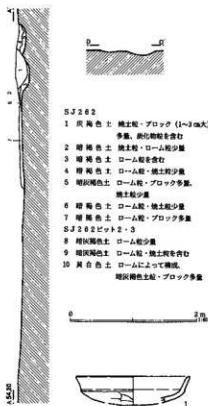
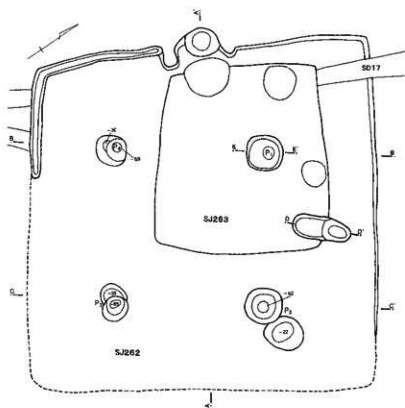
番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(11.0)	1.8		BDE	1	褐	15	
2	土師鉢	(19.0)	6.7		ABDEH	2	茶褐	20	
3	土罽	共6.1cm	最大径1.3cm	孔径0.3cm			重量11.51g	BEI	1 黒褐 残率90% P5
4	土罽	共5.9cm	最大径1.4cm	孔径0.4cm			重量8.82g	A EJ	1 褐 残率95% P6

第78表 第262・263号住居跡出土遺物観察表

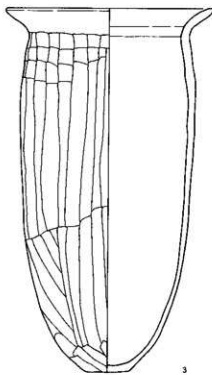
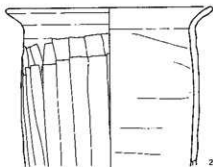
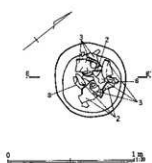
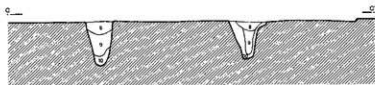
番号	器種	口径	高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.8		ADE	1	褐	10	
2	土師甕	(21.8)	16.7		ABDEH	1	明褐	40	P1 Na3・6・7・14
3	土師甕	(22.0)	38.5	4.6	ABEJ	1	橙褐	40	P1 Na1・2・5・10・11・12 部分的に黒斑あり

箇所の掘り込みが認められ、P2では切り合い関係が認められる。南西側の柱穴の方が新しく、拡張し

たものと考えられる。1基の径は30~40cmで、2~4はそれが2基重なっている。深さは33~71cm



- SJ262
- 1 灰褐色土 焼土粒・ブロッコ (1~3mm大) 多量、炭化物粒を含む
 - 2 暗褐色土 焼土粒、ローム粒少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒を含む
 - 4 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量
 - 5 暗灰褐色土 ローム粒・ブロッコ多量、焼土粒少量
 - 6 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量
 - 7 暗褐色土 ローム粒・ブロッコ多量
 - SJ262ピット2・3
 - 8 暗灰褐色土 ローム粒少量
 - 9 暗灰褐色土 ローム粒・焼土粒を含む
 - 10 黒白土 ロームによって構成、暗灰褐色土粒・ブロッコ多量



第157図 第262・263号住居跡・出土遺物

で、一概に拡張したものが深いというわけではない。

遺物は、土師器の甕が出土している。時期は小破片のため確実ではないが、7世紀頃と考えられる。

第281号住居跡 (第156図)

調査区の南西側、M・N-19・20グリッドに位置する。第13号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本住居跡の方が古い。床面まで削平され、壁間溝の範囲を遺構の範囲とした。

平面形は方形である。規模は長軸4.82m、短軸4.62mである。主軸方向は、N-71-Eを指す。床面、覆土の状況は不明である。

カマドは北壁の中央に造られる。遺構北側の小ピットもカマドの一部と考えられる。燃焼部は土塊状に掘り込まれ、ほぼ壁内に収まっている。煙道が小ピットの方向に延びていたと考えられる。4・5層は掘り方で、埋め戻されている。火床面(2・3層)と床面の関係は不明である。灰層は確認できず、天井部の崩落土は不明である。軸は確認できなかった。貯蔵穴はカマドの東側にあり、長径90cm、短径60cm、深さ10cmである。床下土壌はカマドの正面にあり、径1.40m、深さ15cmで、埋め戻されている。柱穴は4基検出された。径30~40cm、深さ40~60cmで、13層は柱の抜き取り痕と考えられる。

遺物は、土師器の環・鉢、土錘が出土している。時期は小破片のため確実ではないが、7世紀後半と考えられる。

第282号住居跡 (第157図)

調査区の南西側、O・P-20、O-21グリッドに位置する。第263号住居跡、第17号溝跡と重複関係にあり、前者より古く、後者との前後関係は不明である。床面まで削平されている。

平面形は方形である。規模は長軸5.44m、短軸5.07mである。主軸方向は、N-36-Wを指す。床面、覆土の状況は不明だが、遺構の西側には貼り床(7層)が施されている。

カマドは西壁の中央に造られる。燃焼部は方形に掘り込まれ、短く突出している。奥側の中央は、ピッ

ト状に掘り込まれている。火床面・灰層は確認できなかった。1層は本住居跡より新しいピットだが、覆土中に焼土・炭化物を多く含み、このカマドの上部構造を壊したためにそれが覆土として流れ込んだものと考えられる。その様相からは、火床面・灰層は明瞭なものと考えられ、確認面より上位にあるものと推定される。2・3・6層は掘り方と考えられる。4・5層は煙道からの流れ込みと考えられる。軸は両側で部分的に確認され、灰白色粘土を貼り付けて造られている。柱穴は4基検出された。P1は、径56cm、深さ63cmで、床面近くに長甕が廃棄されていた。P2~4は2箇所掘り込みが認められる。カマドを造り替えた痕跡がないことから、東側に拡張したものと考えられる。1基の径は40~60cmで、2~4はそれが2基重なっている。深さは22~69cmで、一概に拡張したものが深いというわけでもないようである。P2は9層が柱の抜き取り痕と考えられるほかは柱痕等は不明瞭である。

遺物は土師器の甕が出土している。2・3は柱穴(P1)に廃棄された状態で出土している。胎土には砂粒が多く含まれる。時期は7世紀中葉と考えられる。

第283号住居跡 (第157図)

調査区の南西側、O-20グリッドに位置する。第262号住居跡、第17号溝跡と重複関係にあり、前者より新しく、後者との前後関係は不明である。床面まで削平され、黒褐色の変色範囲を遺構の範囲とした。

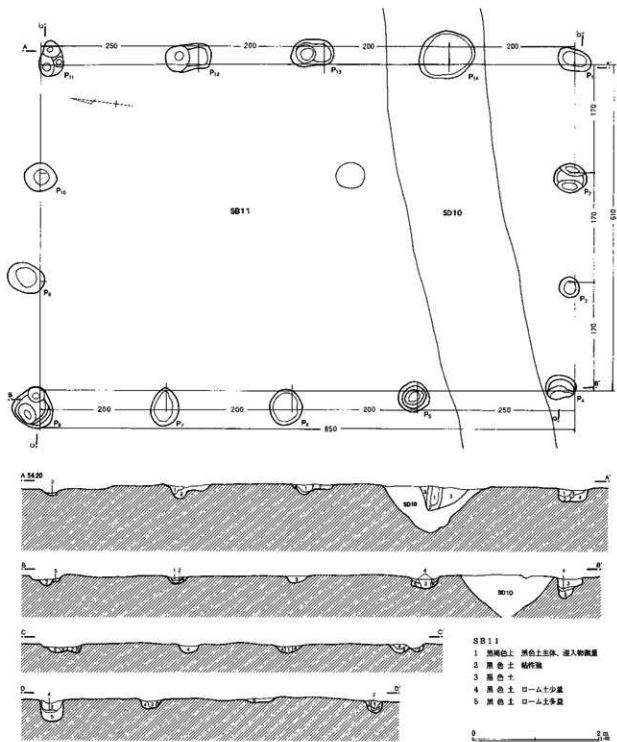
平面形は長方形である。規模は長軸3.75m、短軸2.93mである。主軸方向は、N-33-Eを指す。床面、覆土の状況は不明である。

カマドは北壁の東寄りに造られる。燃焼部は溝状に掘り込まれ、突出する。カマドの状況は不明だが、燃焼部の南側が2次加熱で焼土化しており、このレベルが火床面に近いものと考えられる。軸は確認できなかった。柱穴は不明である。

遺物は出土しなかった。時期は不明だが、遺構の様相から9世紀後半以降のものと考えられる。

(2) 掘立柱建物跡

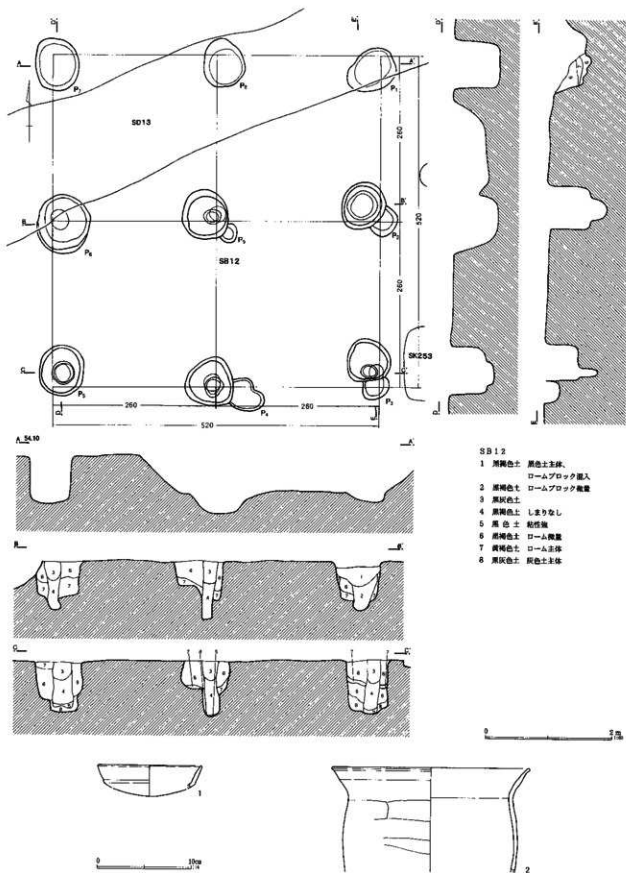
第11号掘立柱建物跡 (第158図)



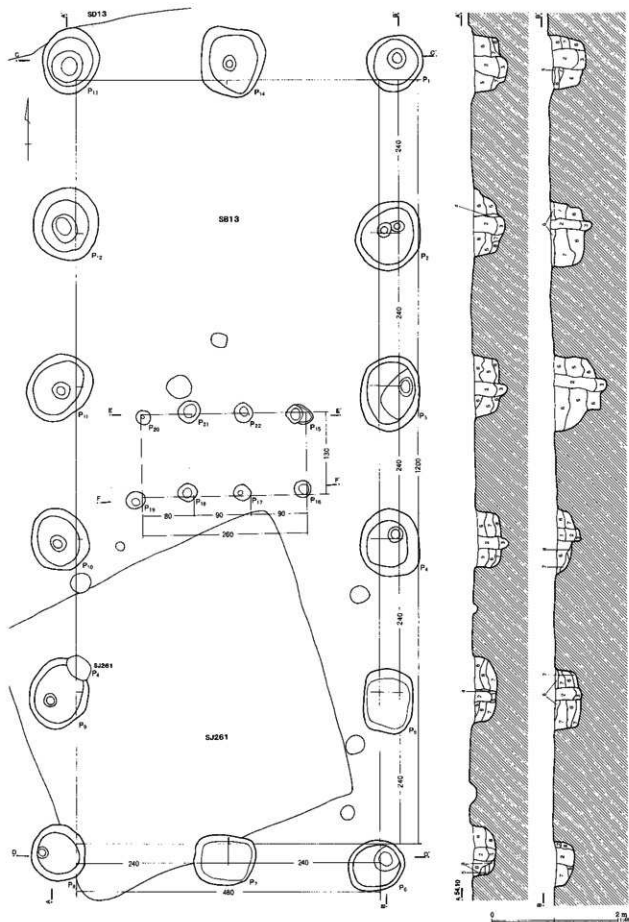
第158図 第11号掘立柱建物跡

第79表 第12号掘立柱建物跡出土遺物観察表

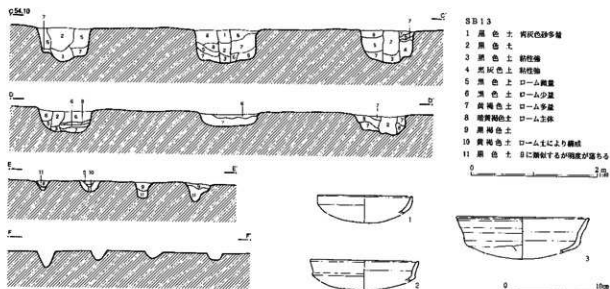
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	規成	色調	残率	備考
1	土師環	(11.0)	2.4		DEH	3	橙褐色	5	P 5
2	土師甕	(21.0)	11.0		ADEH	2	褐色	25	P 6



第159図 第12号掘立柱建物跡・出土遺物



第160图 第13号独立柱建物跡(1)



第161図 第13号掘立柱建物跡(2)・出土遺物

第80表 第13号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(10.0)	1.9		ADE	2	橙褐	5	P11
2	土師環	(11.5)	2.2		ADE	1	橙褐	5	P10
3	土師環	(14.0)	3.8		ADE	2	茶褐	5	P8

調査区の西側、K-15・16グリッドに位置する。第10号溝と重複関係にあり、P4が第10号溝跡を切っていることから、本建物跡が新しい。北側と東側にある第18・30号溝は、本建物跡に伴う区画溝跡と考えられる。

4×3間の南北棟の側柱建物跡である。規模は桁行8.50m、梁行5.10m、面積43.35㎡である。主軸方向は、N-7-Wである。柱間間隔は桁行2.00mで、P5-6間、P11-12間が2.50mである。梁行は1.70mで等間隔に揃っている。

柱穴の形態は円形のものが多いのだが、P12・13は楕円形の掘り方の北側に寄って柱穴の掘り込みが見られる。また、P2・8・11は複数の掘り込みが見られることから、建て替えの可能性も考えられる。規模は長軸32~88cm、短軸30~76cmと幅があるが、概ね径40~50cmに収まるようである。深さは6~37cmと幅があるが、概ね10~20cmの範囲に収まり、浅めである。1層が柱の抜き取り痕、2~5層が掘り方である。

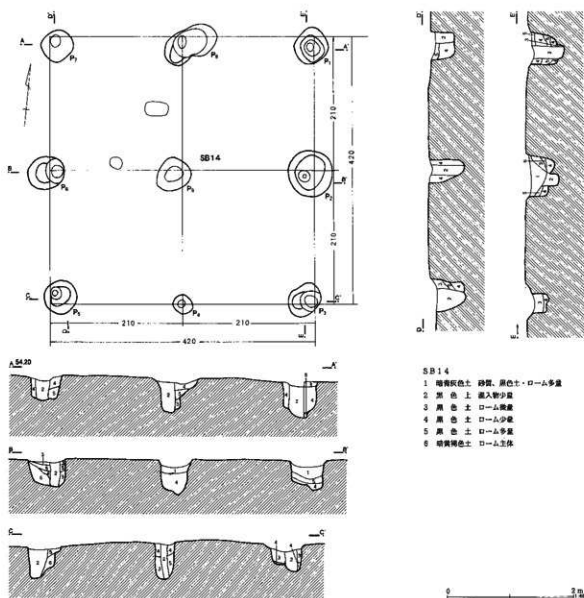
遺物は出土していない。時期は、第10号溝跡よりも新しいことから、7世紀後半以後のものと考えられる。

第12号掘立柱建物跡 (第159図)

調査区の南西側、M-18グリッドに位置する。第13号溝跡と重複関係にあり、P3が第13号溝跡に切られることから、本建物跡が古い。

2×2間の南北棟の総柱建物跡である。ほぼ正方形である。規模は桁行5.20m、梁行5.20m、面積27.04㎡である。主軸方向は、N-Sである。柱間間隔は桁行2.60m、梁行2.60mである。

柱穴の形態は円形のものが多いが、P5・6・8・9は南東側に小ビットが掘り込まれており、補助的な柱の痕跡と考えられる。規模は長軸53~92cm、短軸66~83cmである。深さは60~95cmと幅があるが、概ね70~90cmの範囲に収まる。やや規模が大きく、深い掘り方である。掘り方には、底面が平らなもの(P3・6・7)と、柱の当たりの部分のみ掘り下げたもの(P1・2・4・5・8・9)



第162図 第14号掘立柱建物跡

の2種類がある。小ビットは径20~60cm、深さ15~24cmである。P3~6・9は、確認時に柱痕が確認できた。覆土は1・2層が柱の抜き取り痕、3・4層が柱痕、5~8層が掘り方である。

遺物は土師器の坏と甕、土製の支脚と考えられる破片が出土している。図示できたものも遺存率が低く、伴うものかは明らかでないが、隣接する第13号掘立柱建物跡からも7世紀の遺物が出土していることから7世紀のものである可能性が高いように思われる。2の時期を勘案すると8世紀に下る可能性も

ある。

第13号掘立柱建物跡 (第160図)

調査区の南西側、L-N-19・20グリッドに位置する。第261号住居跡と重複関係にあり、P7~9が住居跡を切っており、本建物跡が新しい。

5×2間の南北棟の側柱建物跡である。規模は桁行12.00m、梁行4.80m、面積57.60㎡である。主軸方向は、N-1'-Eである。柱間間隔は桁行2.40m、梁行2.40mで、等間隔に揃っている。

柱穴の形態は円形、あるいは隅丸方形である。規

楕は長軸90~120cm、短軸77~107cmと幅があるが、概ね径90~100cmに収まるようである。深さは23~67cmと幅がある。遺構の南側のものが浅めの傾向があり、特にP7は浅い。掘り方には、底面が平らなもの(P1・5・9・14)と、柱の当たりの部分のみ掘り下げたもの(P2・4・10~13)の2種類がある。1~3層が柱痕、4~11層が掘り方である。

また、ほぼ中央に1×3間の小規模な柱穴列がある。軸方向、位置から、独立柱建物跡の施設の一部と考えられる。桁行2.60m、梁行1.30m、面積3.38㎡である。柱間隔は、P18~19間、P20~21間が狭く80cm、その他は90cmである。各柱穴の規模は、径22~43cm、深さ12~29cmである。小規模で浅い。

遺物は土師器の坏・甕の小破片が出土している。時期は図示した遺物が伴い、第12号掘立柱建物跡も同時期であるならば、7世紀のものと考えられる。

第14号掘立柱建物跡 (第162図)

調査区の西側、J・K-17・18グリッドに位置する。東側の第15号掘立柱建物跡と北側の軒が並ぶ位置にある。

2×2間の南北棟の総柱建物跡である。ほぼ正方形である。規模は桁行4.20m、梁行4.20m、面積17.64㎡である。主軸方向は、N-6°-Wである。柱間隔は桁行2.10m、梁行2.10mで、等間隔である。

柱穴の形態は円形のものが多い。P8は南西側に張り出しがある。規模は長軸33~90cm、短軸30~76cmである。深さは41~66cmと幅がある。概ね径50~60cm、深さ40~60cmの範囲に収まる。掘り方には、底面が平らなもの(P1・4・5・7・8)と、柱の当たりの部分が掘り下げたもの(P2・3・6・9)の2種類がある。覆土は1層が流れ込み、2層が柱痕、3~6層が掘り方である。

遺物は出土していない。隣接する第15号建物跡から7世紀後半の遺物が出土していることから、7世紀のものである。

第15号掘立柱建物跡 (第163図)

調査区の西側、J・K-18・19グリッドに位置する。西側の第14号掘立柱建物跡と北側の軒が並ぶ位置にある。第10号溝と重複関係にあり、本建物跡の方が新しい。また、本建物跡は拡張が行われている。新しいものをSB15A、古いものをSB15Bとして説明する。

A・Bいずれとも3×2間の南北棟の総柱建物跡である。

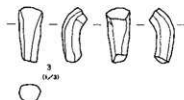
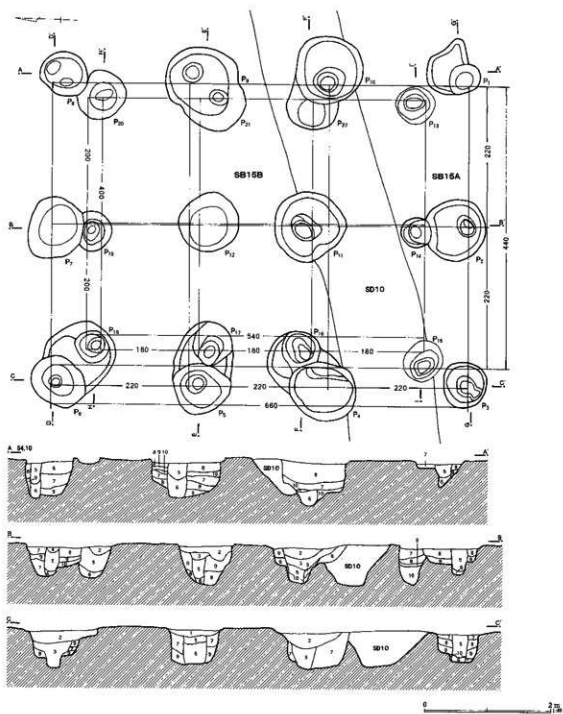
Aは桁行6.60m、梁行4.40m、面積29.04㎡である。主軸方向は、N-2°-Wである。柱間隔は桁行2.20m、梁行2.20mで、等間隔である。

柱穴の形態は円形である。Bの柱穴と重複するものは、それを埋め戻して掘られている。規模は長軸73~114cm、短軸42~106cmである。深さは37~80cmと幅がある。概ね径70~90cm、深さ40~60cmの範囲に収まる。P1は規模が小さく、浅めである。掘り方には、底面が平坦なもの(P3~5・7・8・12)と、柱の当たりの部分が掘り下げたもの(P2・9~11)の2種類がある。覆土は1~4層が流れ込みで自然堆積、5~6層が柱痕、7~10層が掘り方である。P1~3・8・9は確認時に柱痕を検出している。

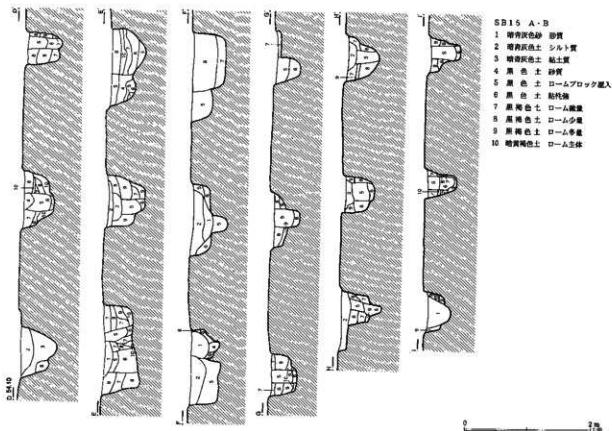
Bは桁行5.40m、梁行4.00m、面積21.60㎡である。主軸方向は、A同様である。柱間隔は桁行1.80m、梁行2.00mで、等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸50~98cm、短軸50~98cmである。深さは34~65cmと幅がある。概ね径60~90cm、深さ50~60cmの範囲に収まる。掘り方には、底面が平坦なもの(P14・17・19・20~22)と、柱の当たりの部分が掘り下げたもの(P13・15・16・18)の2種類がある。覆土は1~4層が流れ込みで自然堆積、5~6層が柱痕、7~10層が掘り方である。P13・14・21は確認時に柱痕を検出している。

遺物は土師器の坏・鉢・甕が出土している。また、形象埴輪(人物)の腕の部分が出土しているが流れ



第163图 第15号A・B掘立柱建物跡(1)・出土遺物



第164図 第15号A・B掘立柱建物跡(2)

第81表 第15号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(10.8)	3.7		ADE	3	明褐色	50	P 3
2	土師鉢	(18.0)	5.5		BDEJ	1	明褐色	10	P 3
3	埴輪腹部	長4.2cm	幅1.9cm	厚さ1.3cm	ADE	1	橙褐色	100%	P 5

込みであろう。時期は7世紀後半である。

第16号掘立柱建物跡 (第165図)

調査区の西側、I・J-17・18グリッドに位置する。第251・252号住居跡、第32号掘立柱建物跡と重複関係にある。第252号住居跡、第32号掘立柱建物跡より古く、第251号住居跡より新しい。付近には第17・18・20・21・24・32~34・36・37・46号掘立柱建物跡が集中して分布する。

2×2間の総柱建物跡である。平面形は正方形である。規模は桁行3.40m、梁行3.40m、面積11.56㎡である。主軸方向は、N-6°-Wで、やや西に偏している。柱間隔は桁行1.70m、梁行1.70mで、等間隔である。

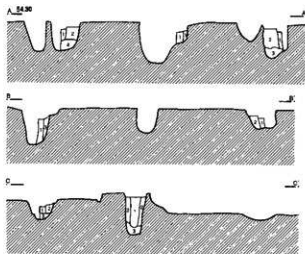
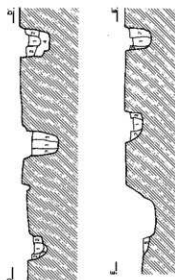
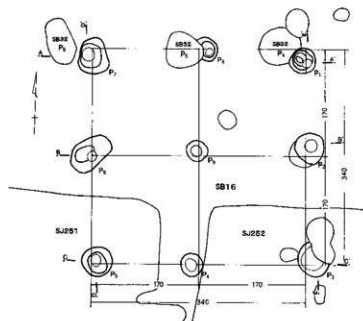
柱穴の形態は円形である。P 6は西側に張り出し

を持つ。規模は長軸34~72cm、短軸34~49cmである。深さは26~42cmと幅がある。概ね径35~50cm、深さ30~60cmの範囲に収まる。P 5は規模がやや小さいが、深い。掘り方は、いずれも底面が平坦である。覆土は1層が柱痕、2~5層が掘り方である。

遺物は図示不能な土師器の坏・甕の小破片が出土しているのみである。時期は他の遺構との関係から、8~9世紀のものと考えられる。

第17号掘立柱建物跡 (第166図)

調査区の西側、H・I-18・19グリッドに位置する。第20・21号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、前後関係は不明である。付近には第16・18・20・21・24・32~34・36・37・46号掘立柱建物跡が集中して分布する。



SB16

- 1 黒褐色土 ローム状土層、バラバラ
- 2 黒褐色土 ローム状・ロームブロック (2~4 cm大) 少量、しまり強
- 3 黒褐色土 ローム状土層、2層に比べ硬度落ち、しまり強
- 4 黒褐色土 ローム状・ロームブロック (3 cm大) 多量
- 5 暗褐色土 ローム状・ロームブロック (1~4 cm大)・粘土状多量



第165図 第16号掘立柱建物跡

2×2間の縦柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行6.00m、梁行4.60m、面積27.60㎡である。主軸方向は、N-6°-Wで、やや西に偏している。柱間隔は桁行3.00m、梁行2.30mで、等間隔である。

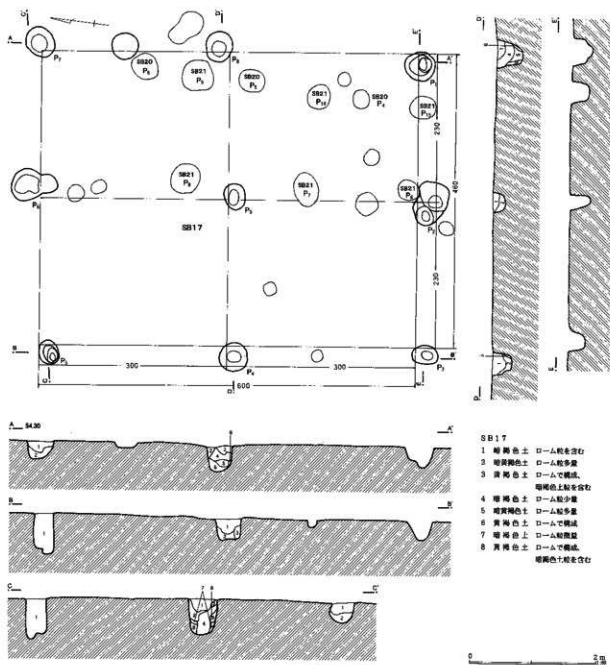
柱穴の形態は円形である。P6は西側に張り出しを持つ。規模は長軸40~74cm、短軸29~50cmである。深さは18~67cmと幅がある。概ね径35~50cm、深さ30~60cmの範囲に収まる。P2・5・6は深い。掘り方はP3を除き、いずれも底面が平坦である。P2には複数の掘り込みが見られ、建て直された可能

性がある。柱穴の規模や断面形は、第16号掘立柱建物跡と同様である。覆土は1~3層が流れ込みで自然堆積、4層が柱の抜き取り痕、5~8層が掘り方である。柱は全て抜き取られている。

遺物は図示不能な土師器の環・甕の小破片が出土しているのみである。時期は不明だが、16号と同様とすると、8~9世紀のものできよう。

第18号掘立柱建物跡 (第167図)

調査区の西側、G-18・19グリッドに位置する。南側に3mほど離れて第24号掘立柱建物跡があり、東側の軒が並ぶ位置関係にある。付近には第16・17-



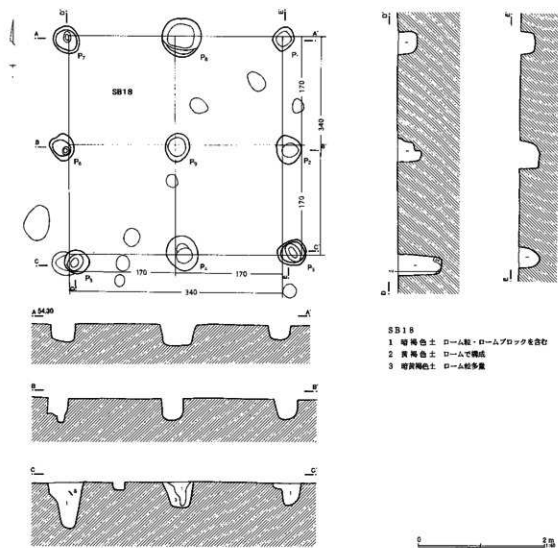
第166図 第17号掘立柱建物跡

20・21・24・32~34・36・37・46号掘立柱建物跡が集中して分布する。

2×2間の総建物跡である。平面形は正方形である。規模は桁行3.40m、梁行3.40m、面積11.56㎡である。主軸方向は、N-Sである。柱間隔は桁行1.70m、梁行1.70mで、等間隔である。

柱穴の形態はP形である。規模は長軸36~76cm、短軸32~52cmである。深さは22~76cmと幅がある。

概ね径35~50cm、深さ30~50cmの範囲に収まる。P1は小型で浅く、P5は深い。掘り方はP6を除き、いずれも底面が平坦である。P5は複数の掘り込みが見られ、建て替えられた可能性がある。柱穴の規模や断面形は、第16・17号掘立柱建物跡と同様である。覆土は1層が柱の抜き取り後の自然堆積層、2・3層が掘り方である。柱は全て抜き取られている。遺物は図示不能な土師器の環・甕の小破片が出土



第167図 第18号掘立柱建物跡

しているのみである。時期は不明だが、第16・17号と同様とすると、8～9世紀のものできよう。

第19号掘立柱建物跡 (第168図)

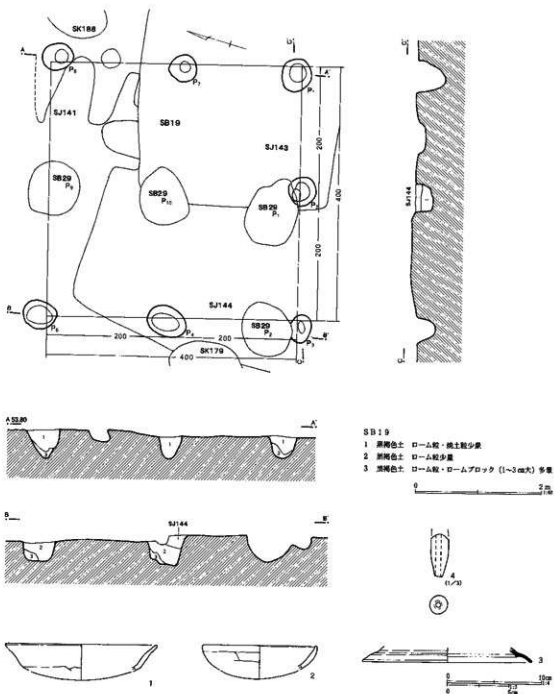
調査区の北側、A・B-23グリッドに位置する。遺構が集中して分布する部分にあり、重複遺構が多い。第141・143・144号住居跡、第29号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第141号住居跡より新しく、それ以外より古い。付近には第26・29・30・53・54号などの掘立柱建物跡が集中して分布する。

2×2間の側柱建物跡だが、第29号掘立柱建物跡に柱穴を壊されているため、総柱建物跡である可能性もある。平面形は正方形である。規模は桁行4.00

m、梁行4.00m、面積16.00㎡である。主軸方向は、N-16°-Wで、西に偏している。柱間隔は桁行2.00m、梁行2.00mで、等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸45～65cm、短軸34～50cmである。深さは27～51cmと幅がある。概ね径40～50cm、深さ30～50cmの範囲に収まる。掘り方は、いずれも底面が平坦である。覆土は1・2層が柱の抜き取り後の自然堆積層、3層が掘り方である。柱は全て抜き取られている。

遺物は土師器の坏、須恵器の坏・蓋、土錐の破片が出土しているのみである。時期は7世紀末である。



第168図 第19号掘立柱建物跡・出土遺物

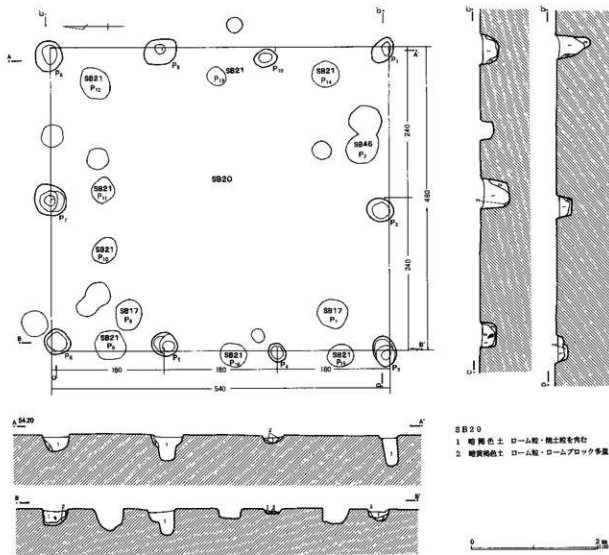
第82表 第19号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(16.0)	2.8		ADE	2	褐	10	P 4
2	土師環	(12.0)	2.5		ADE	2	明褐	10	P 7
3	須恵蓋	(18.0)	1.6		ABE	2	暗灰	10	P 6 未野産 A
4	土針	長3.4cm 幅1.5cm		孔径0.4cm	重さ6.41g	ADE	2	赤褐 55%	P 7

第20号掘立柱建物跡 (第169図)

調査区の西側、H・I-19グリッドに位置する。
第17・21・46号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、

柱穴同士の重複関係がなく、前後は不明である。付近には第16-18・21・24・32-34・36・37・46号掘立柱建物跡が集中して分布する。



第169図 第20号掘立柱建物跡

3×2間の南北棟の側柱建物跡である。平面形は正方形に近い長方形である。規模は桁行5.40m、梁行4.80m、面積25.92㎡である。主軸方向は、N-1°-Wである。柱間隔は桁行1.80m、梁行2.40mで、等間隔である。

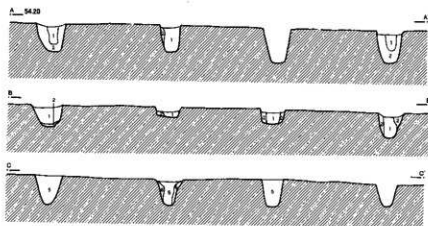
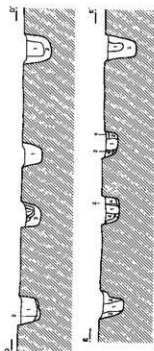
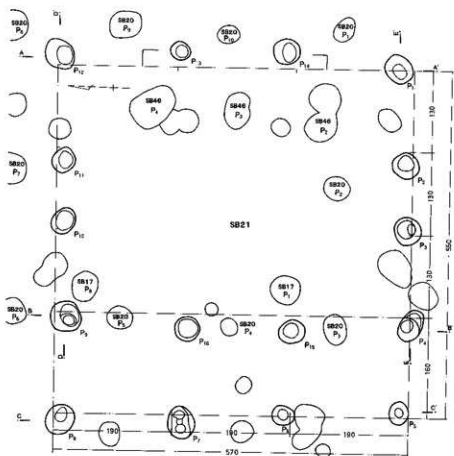
柱穴の形態は円形である。規模は長軸30~55cm、短軸26~48cmである。深さは8~66cmと幅がある。径は概ね30~50cmの範囲に収まるが、深さはまちまちである。P4・10は小規模で、浅い。掘り方は、いずれも底面が平坦である。覆土は1層が柱の抜き取り後の自然堆積層、2層が掘り方である。柱は全て抜き取られている。

遺物は図示不能な土師器の坏・甕の小破片が出土しているのみである。時期は不明だが他の遺構と同時期であるならば8~9世紀と考えられる。

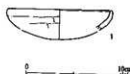
第21号掘立柱建物跡 (第170図)

調査区の西側、H・I-19グリッドに位置する。第17・20・46号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、柱穴同士の重複関係がなく、前後は不明である。付近には第16-18・20・24・32~34・36・37・46号掘立柱建物跡が集中して分布する。

3×3間の南庇の建物跡である。南北棟の側柱建物跡の身舎に南庇が付く。身舎の平面形は長方形である。規模は桁行5.70m、梁行3.90m、面積22.23㎡



- SB21
- 1 暗褐色土 ローム粒少量
 - 2 黄白色土 ローム粒多量
 - 3 暗褐色土 ローム粒・焼土粒混在
 - 4 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、
焼土粒を含む
 - 5 暗褐色土 ローム粒を含む、焼土粒少量
 - 6 暗褐色土 ローム粒多量
- 0 2m



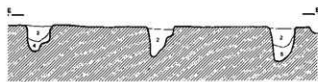
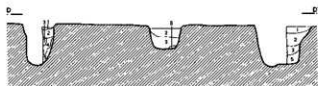
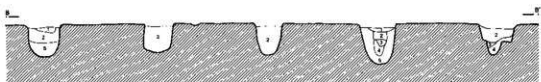
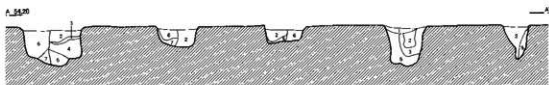
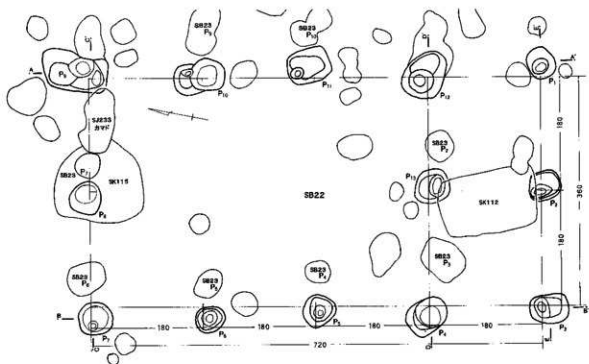
第170図 第21号掘立柱建物跡・出土遺物

第83表 第21号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(11.0)	2.1		ADE	2	明褐色	10	P1

である。主軸方向は、N-2°-Wである。柱間間隔は桁行1.90m、梁行1.30mで、ほぼ等間隔である。P13・14、15・16は軸線上から外れている。庇との柱間間隔は1.60mである。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸31~52cm、短軸29~49cmである。深さは16~52cmと幅がある。径は40cm前後のものが多く、深さは30~50cmの範囲のものが多く、掘り方は、いずれも底面が平坦であ



0 3m

SB 22

- 1 硬黄褐色土 ローム粒を含む
- 2 硬褐色土 ローム粒多量、均一な層
- 3 硬褐色土 ローム粒多量
- 4 硬褐色土 ローム粒を含む
- 5 硬褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む
- 6 黒褐色土 ローム粒多量
- 7 黄褐色土 ローム多量



0 10cm

第171図 第22号掘立柱建物跡・出土遺物

る。覆土は1・5層が柱の抜き取り後の自然堆積層、2～4・6層が掘り方である。柱は全て抜き取られている。

遺物は図示不能な土師器環・甕、須恵器盤の小破片が出土しているのみである。時期は不明だが他の遺構と同時期であるならば8～9世紀と考えられる。

第22号掘立柱建物跡 (第171図)

調査区の西側、G-19・20グリッドに位置する。第233号住居跡、第23号掘立柱建物跡、第112・115号土壌と重複関係にある。第233号住居跡、第112号土壌より古く、第23号掘立柱建物跡、第115号土壌より新しい。第23号掘立柱建物跡は、ほとんど同じ範囲で重複しており、本建物跡は第23号を建て替えたものと考えられる。付近には第17・18・20・21・24号掘立柱建物跡があるが、軸方向が大きすぎており関係は不明である。

3×2間の南庇の建物跡である。側柱建物跡の身舎に南庇が付く。身舎の平面形は長方形である。規模は桁行5.40m、梁行3.60m、面積19.44㎡である。主軸方向は、N-11'-Wで、西に偏している。柱間隔は桁行1.80m、梁行1.80mで、ほぼ等間隔である。P9・10には複数の掘り込みが見られ、建て替えられた可能性がある。庇との柱間隔は1.80mである。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸48～104cm、短軸42～63cmである。深さは28～74cmと幅がある。径は50cm前後のものが多く、深さは40～60cmの範囲のものが多く、掘り方はP3を除き、底面が平坦である。覆土は1・2層が柱の抜き取り後の自然堆積層、3・4層が柱の抜き取り時に掘り方を壊した崩落土、4～7層が掘り方である。柱は全て抜き取られている。

遺物は土師器環・盤の破片が出土している。時期は8世紀前半である。

第23号掘立柱建物跡 (第172図)

調査区の西側、G-19・20グリッドに位置する。第233号住居跡、第22号掘立柱建物跡、第112・115号

土壌と重複関係にある。第233号住居跡、第22号掘立柱建物跡、第112号土壌より古く、第115号土壌より新しい。第22号掘立柱建物跡はほとんど同じ範囲で重複しており、本建物跡を建て替えたものと考えられる。付近には第17・18・20・21・24号掘立柱建物跡があるが、軸方向が大きすぎており関係は不明である。

3×2間の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行5.70m、梁行3.80m、面積21.66㎡である。主軸方向は、N-11'-Wで、西に偏している。柱間隔は桁行1.90m、梁行1.90mで、ほぼ等間隔である。P1・8・9には複数の掘り込みが見られ、建て替えられた可能性がある。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸43～72cm、短軸35～54cmである。径50cm前後のものが多く、深さは30～63cmと幅があり、50～70cmのものが多く、掘り方はP1を除き、底面が平坦である。覆土は柱を抜き取った後埋め戻している。柱は全て抜き取られている。

遺物は土師器環・甕の破片が出土している。時期は22号と同時期の8世紀前半と考えられる。

第24号掘立柱建物跡 (第173図)

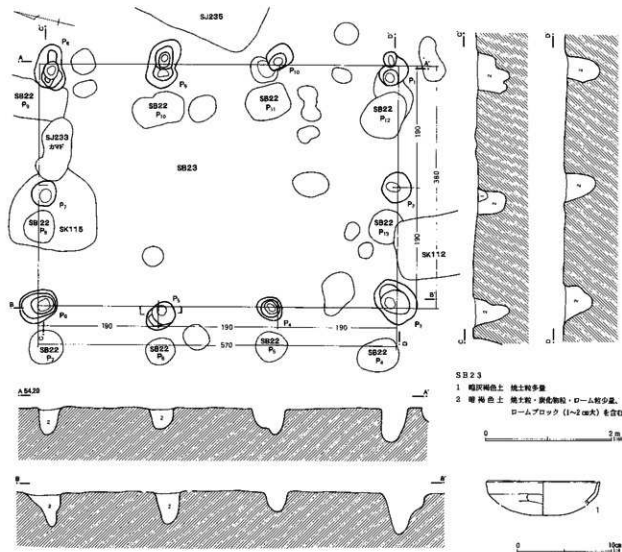
調査区の西側、G・H-18・19グリッドに位置する。付近には第16～18・20・21・24・32～34・36・37・46号掘立柱建物跡がある。東側の軸線が、第17号の東側、第21号の西側の軸線と並ぶ位置関係にある。

3×2間の南北棟の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行5.40m、梁行4.60m、面積24.84㎡である。主軸方向は、N-1'-Eで、ほぼ南北である。柱間隔は桁行1.80mで等間隔、梁行2.30mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸46～88cm、短軸44～57cmである。径50～60cmのものが多く、深さは9～54cmと幅がある。特にP9・10は浅く、この部分のみ礎石立ちであった可能性もある。掘り方は底面が平坦だが、P3・5は柱の当たりの部分が

第84表 第22号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(14.0)	2.4		AD	1	赤褐	15	P12
2	土師盤	(18.0)	3.5		DE	1	暗褐	20	P12



第172図 第23号掘立柱建物跡・出土遺物

第85表 第23号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.5		AEH	1	橙褐	5	P6

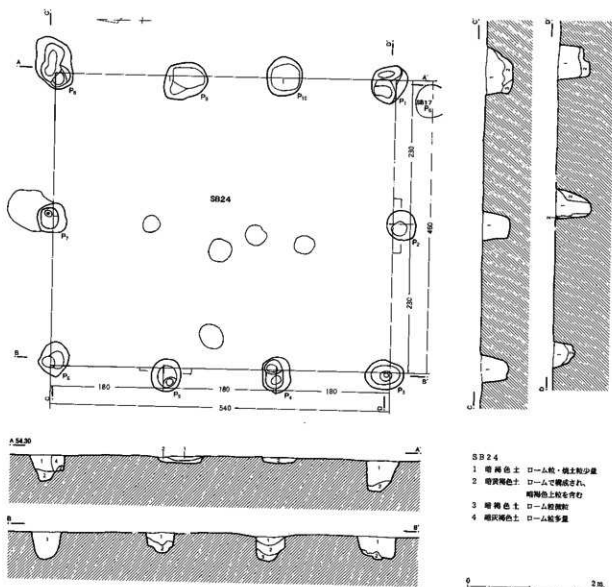
一段下がっている。覆土は1層か柱を抜き取った後の自然堆積層、2~4層が掘り方の崩落土である。柱は全て抜き取られている。

遺物は図示不能な土師器環・甕、須恵器環の小破片が出土している。時期は第17号などと同様とすれば、8~9世紀と考えられる。

第25号掘立柱建物跡 (第174図)

調査区の西側、I・J-20・21グリッドに位置する。南側に隣接して、第10号溝跡がある。

2×1間の東西棟の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行3.60m、梁行2.20m、面積7.92㎡である。主軸方向は、N-85°-Eで、ほぼ東西である。柱間隔は桁行1.80mで等間隔、梁行



第173図 第24号掘立柱建物跡

2.20mである。

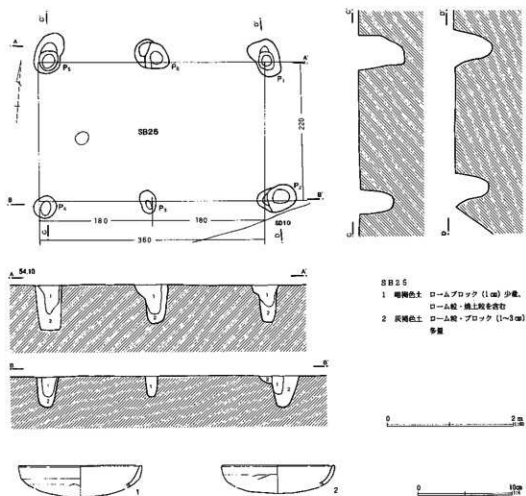
柱穴の形態はP3・4が円形、それ以外が長楕円形である。規模は長軸34～69cm、短軸24～43cmである。径35cm前後のものとは50～70cmのものがある。深さは30～66cmと幅があり、50～60cmのものが多い。P3は規模が小さく、浅めである。掘り方はいずれも底面が平坦である。覆土は1層が柱の抜き取り痕、2層が掘り方である。柱は全て抜き取られている。

遺物は土師器環・甕の破片が出土している。時期は8世紀前半と考えられる。

第26号掘立柱建物跡 (第175図)

調査区の北側、A・B-23・24グリッドに位置する。遺構が集中して分布する部分にあり、周囲には多くの遺構が重複して分布している。第151号住居跡と重複関係にあり、本建物跡の方が新しい。付近には第19・29・30・53号などの掘立柱建物跡が集中して分布する。

3×2間の南北棟の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行4.50m、梁行3.00m、面積13.50㎡である。主軸方向は、N-7-Wで、ほぼ南北である。柱間間隔は桁行1.50m、梁行1.50mで



第174図 第25号掘立柱建物跡・出土遺物

第86表 第25号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備	考
1	土師環	(13.0)	2.4		DE	2	明褐	5	P 5	
2	土師環	(12.0)	2.3		ADE	3	燈褐	5	P 4	

等間隔である。

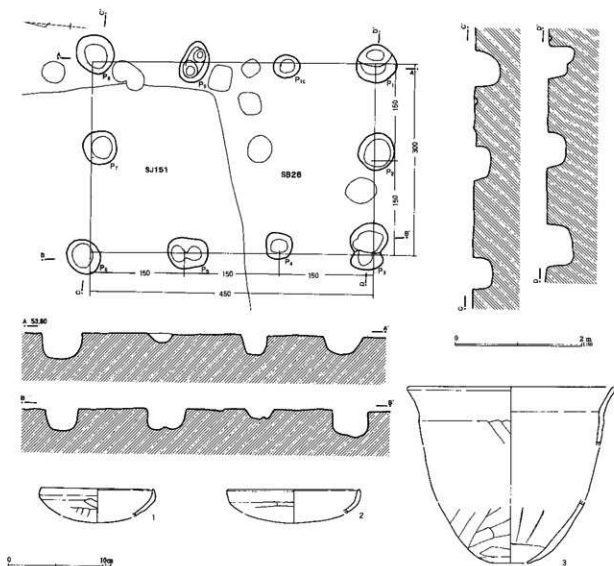
柱穴の形態はP3・5・9が長楕円形、それ以外が円形である。規模は長軸42～76cm、短軸35～61cmである。径40cm前後のものど60～70cmのものがある。深さは14～41cmと幅があり、30～40cmのものが多い。P4・9は規模が小さく、浅めである。掘り方はいずれも底面が平坦である。P5・9は複数の掘り込みがあり、建て替えられている可能性がある。覆土の状況は確認できなかった。

遺物は土師器環・甕・甔の破片が出土している。時期は7世紀末と考えられる。

第27号掘立柱建物跡 (第176図)

調査区の北東側、A・B-31-32グリッドに位置する。第206号住居跡、第28号掘立柱建物跡と重複関係にある。前者より本建物跡の方が新しい。後者とは柱穴同士の重複がなく前後は不明だが、規模が全く同じことから建て替えの関係にあると考えられる。

3×2間の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行5.40m、梁行3.60m、面積19.44㎡である。主軸方向は、N-13'-Wで、やや西に偏している。柱間間隔は桁行1.80m、梁行1.80mで等間隔である。



第175図 第26号掘立柱建物跡・出土遺物

第87表 第26号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.9		DE	2	褐	10	P 6
2	土師環	(14.0)	2.5		ADE	2	明褐	15	P 10
3	土師甔	(21.8)	18.6	(3.5)	ADE	2	褐	10	P 8

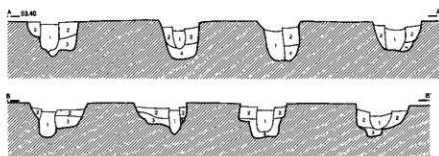
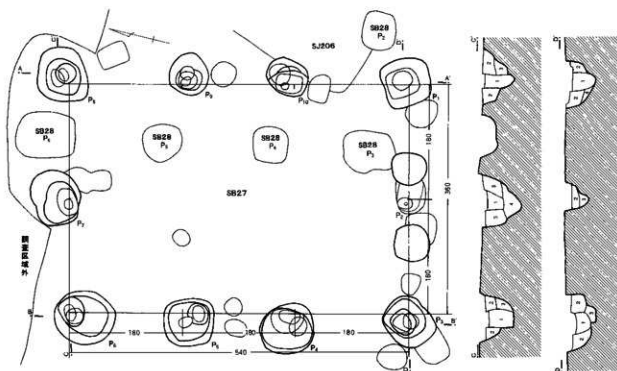
柱穴の形態は、P 1・3が方形に近く、それ以外は長楕円形である。規模は長軸61~98cm、短軸45~84cmである。径60cm前後のものと80~100cmのものがある。深さは45~75cmと幅があり、50~70cmのものが多い。P 2は規模がやや小さいが、その他のものは規模が大きく、深い。掘り方には、底面が平坦なもの（P 2・4・7・9・10）と、柱の当たりの部分が掘り下げたもの（P 1・3・5・6・

8）の2種類がある。覆土は1層が柱痕、2~4層は掘り方である。P 2以外は、遺構確認時に柱痕が確認できた。

遺物は土師器環・甔、須恵器環・蓋・甔の破片が出土している。時期は7世紀末と考えられる。

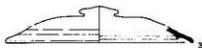
第28号掘立柱建物跡（第177図）

調査区の北東側、A・B-31・32グリッドに位置する。第206号住居跡、第27号掘立柱建物跡と重複関



- SS 27
- 1 黒褐色土 ローム状表層
 - 2 黒褐色土 ローム状少量
 - 3 黒褐色土 ローム状・ロームブロック (2-4 cm) 多数
 - 4 黒色土 ローム状表層

0 5m

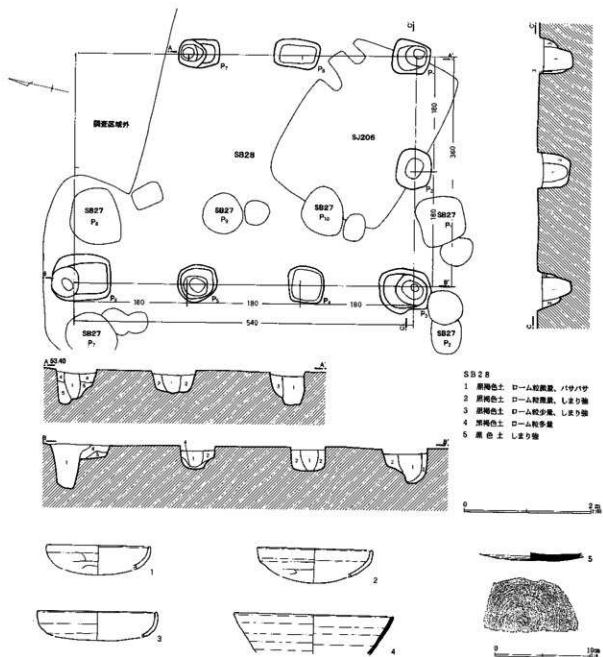


0 5cm

第176図 第27号掘立柱建物跡・出土遺物

第88表 第27号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色调	残率	備考
1	土師環	(11.0)	2.6		DE	2	橙褐	10	P 6
2	土師環	(12.4)	3.0		DE	1	明褐	15	P 1 柱根
3	須恵蓋	(20.0)	1.7		AEI	2	茶褐	5	P 10 米野産 A
4	須恵環		2.6	(10.0)	DHK	2	灰白	10	雨桶産? P 4 A
5	須恵甕		8.9		ABEI	3	褐灰	5	米野産 P 4



第177図 第28号掘立柱建物跡・出土遺物

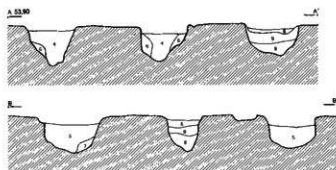
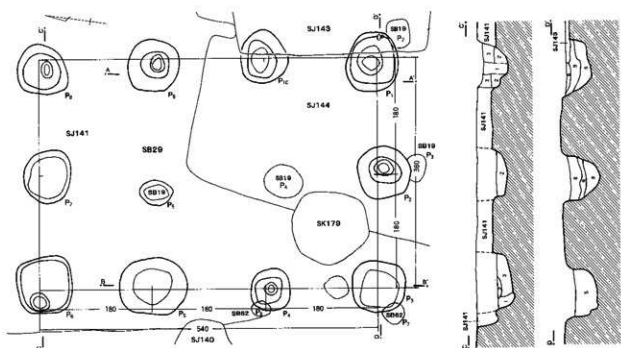
第89表 第28号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(10.8)	2.5		DE	2	褐	10	P 3
2	土師環	(12.0)	3.0		ADE	2	赤褐	15	P 8
3	土師環	(12.5)	2.6		ADE	1	橙褐	15	P 8
4	須恵環	(17.0)	4.1		BEK	2	灰	5	木野産 P 8 A
5	須恵環		0.8		BEF	2	黄灰	45	南比企産、全面回転ヘラ P 8 A

係にある。前者よりは本建物跡の方が新しい。後者とは柱穴同士の重複がなく前後は不明だが、規模が全く同じことから建て替えの関係にあると考えられ

る。遺構の北東側は調査区域外にかかる。

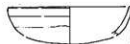
3×2間の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行5.40m、梁行3.60m、面積19.44㎡



SB29

- 1 暗褐色土 ローム新塊層
- 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中少量
- 3 黄褐色土 ロームブロック主体
- 4 黄褐色土 ローム粒・赤色粒少量
- 5 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック (2~3cm大) 少量
- 6 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック (2~4cm大) 少量
- 7 黄褐色土 ローム粒主体、黄褐色土少量、しまり層
- 8 黄褐色土 ローム粒多量、しまり層
- 9 黄褐色土 ローム新塊層、しまり層

0 100 200 300



0 100 200

第178図 第29号掘立柱建物跡・出土遺物

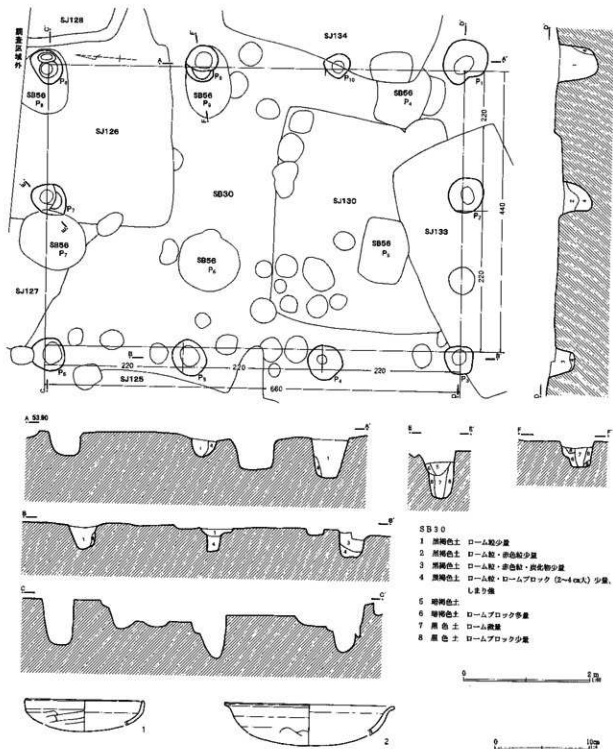
第90表 第29号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師壺	(18.0)	6.4		DEJ	1	赤褐	15	P2
2	土師環	(12.3)	2.4		ADE	1	赤褐	10	P1
3	土師環	(13.0)	3.1		DE	2	褐	5	P10

である。主軸方向は、N-13°-Wで、やや西に偏している。柱間間隔は桁行1.80m、梁行1.80mで等間隔である。

柱穴の形態は、各辺が丸みを帯びた方形あるいは長方形である。規模は長軸58~93cm、短軸44~82cmである。径60cm前後のものとは80~90cmのものがあ

る。深さは30~72cmと幅があり、30~40cmのものとは50~70cmのものがある。掘り方には、底面が平坦なもの(P2・4・5・8)と、柱の当たりの部分が掘り下げられているもの(P1・3・6・7)の2種類がある。覆土は1層が柱痕、2~5層は掘り方である。P1・3・5~7は、遺構確認時に柱痕が確認できた。

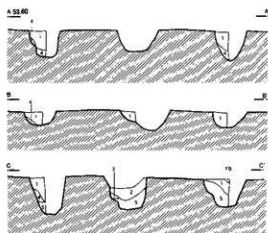
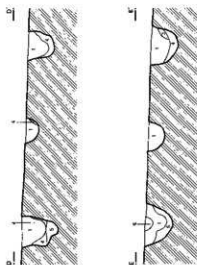
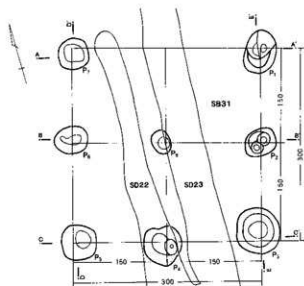


第179図 第30号掘立柱建物跡・出土遺物

第91表 第30号掘立柱建物跡出土遺物観察表

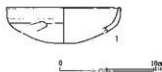
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師 杯	(12.5)	2.6		ADE	1	赤褐	15	P 2
2	土師 皿	(18.0)	3.1		AE	3	茶褐	5	P 1

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕の破片が出土している。時期は7世紀末と考えられる。



- SB31
- 1 暗褐色土 ローム粒・粘土粒少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (1~2 cm²)・粘土粒少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (2~4 cm²) 多量
 - 4 黒褐色土 ローム粒少量
 - 5 黒褐色土 ローム粒少量
 - 6 暗褐色土 ロームブロックで構成される

0 2m



第180図 第31号掘立柱建物跡・出土遺物

第92表 第31号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.6		ADE	2	梅	10	P4

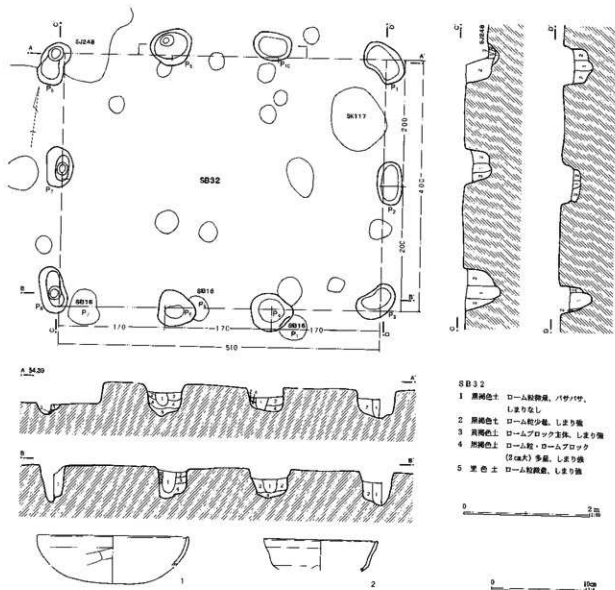
第29号掘立柱建物跡 (第178図)

調査区の北東側、A・B-22・23グリッドに位置する。遺構が集中して分布する部分にあり、周囲には多くの遺構が重複して分布している。第141・143・144号住居跡、第19号掘立柱建物跡、第179号土壇と重複関係にあり、第143号住居跡より古く、それ以外より新しい。付近には第19・26・30・53・54・62・63号などの掘立柱建物跡が集中して分布する。

3×2間の南北棟の側柱建物跡である。平面形は

長方形である。規模は桁行5.40m、梁行3.60m、面積19.44m²である。主軸方向は、N-10°-Wで、やや西に偏している。柱間隔は桁行1.80m、梁行1.80mで等間隔である。

柱穴の形態は、円形あるいは各辺が丸みを帯びた方形である。規模は長軸68~106cm、短軸60~90cmである。径60cm前後のものはP4のみで、その他は90cm前後と大型である。深さは51~69cmで、深い。掘り方は、P4以外底面が平坦である。覆土は1層が柱痕、2・3層が掘り方、4~6層が柱抜き取り後



第181図 第32号掘立柱建物跡・出土遺物

第93表 第32号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(16.0)	3.1		ADE	2	明褐色	10	P 8
2	土師環	(12.0)	3.2		ADE	2	明褐色	5	P 10

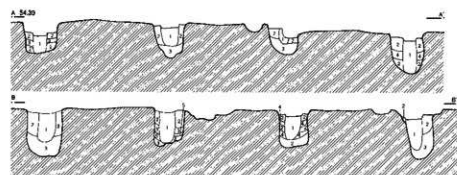
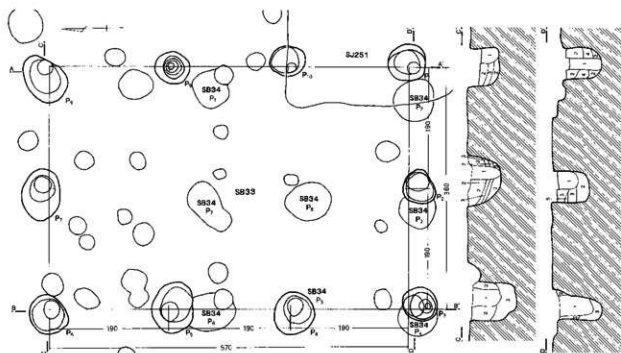
の流れ込みである。8・9層は埋め戻しである。柱はP1を除き抜き取られていると思われる。

遺物は土師器環・壺・甕、須恵器甕の破片が出土している。1は古墳時代前期のもので混入である。時期は、他の遺構との関係から、8～9世紀と考えられる。

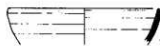
第30号掘立柱建物跡 (第179図)

調査区の北東側、A・B-21グリッドに位置する。

遺構が集中して分布する部分にあり、周囲には多くの遺構が重複して分布している。第125-127・130・134号住居跡、第56号掘立柱建物跡と重複関係にあり、第126・130・134号住居跡より古く、第133号住居跡、第56号掘立柱建物跡より新しい。第125・127号住居跡とは柱穴が直接重複関係にはなく、周辺遺構との間接的な重複関係も確認できないため前後は直接には不明だが、出土遺物が本建物跡の時期を示



- SB33
- 1 黒褐色土 ローム粒微細、バサバサ、しまりなし
 - 2 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック (1~3cm大) 多量、しまり強
 - 3 黄褐色土 ローム粒少量、しまり強
 - 4 黄褐色土 ロームブロック (2~3cm大) 主体、しまり強
 - 5 黒色土 しまり強



第182図 第33号掘立柱建物跡・出土遺物

第94表 第33号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	須恵鉢	(16.0)	3.8		BEK	1	青灰	5	P7 不明 A 木野産
2	須恵甕		9.2	(14.4)	BEK	1	紫灰	25	

すものであるならば、それより古いと考えられる。付近には第19・26・29・53・62号などの掘立柱建物跡が集中して分布する。

3×2間の南北棟の副柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行6.60m、梁行4.40m、面

積29.04㎡である。主軸方向は、N-5°-Wで、やや西に偏している。柱間隔は桁行2.20m、梁行2.20mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸43~76cm、短軸40~66cmである。P3・10が小規模だが、それ

以外は径60cm前後のものである。深さは30~78cmで、幅がある。掘り方は、P4以外底面が平坦である。覆土は7層が柱痕、6・8層が掘り方、1~5層が柱抜き取り後の流れ込みである。柱はP7・9を除き抜き取られていると思われる。

遺物は土師器環・甕・皿の破片が出土している。時期は8世紀前半と考えられる。

第31号掘立柱建物跡（第180図）

調査区の北東側、C-24・25グリッドに位置する。第22・23号溝跡と重複関係にあり、本建物跡の方が古い。第23号溝跡の調査後に遺構を認識したため、北側中央の柱穴は確認できなかった。

2×2間の竪柱建物跡である。平面形は正方形である。規模は桁行3.00m、梁行3.00m、面積9.00㎡である。主軸方向はN-16°-Eで、東に偏している。柱間隔は桁行1.50m、梁行1.50mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸38~76cm、短軸27~72cmである。P8が小規模だが、第23号溝跡の西側の立ち上がりにかかっていることもあり、確実ではない。それ以外は径50~70cm前後のものである。深さは19~59cmで、幅がある。P2・6・8は浅めである。掘り方は、いずれも底面が平坦である。覆土は3~5層が掘り方、1・2層が柱抜き取り後の流れ込みである。柱は全て抜き取られている。

遺物は土師器環・甕の小破片が出土している。周辺遺構との関係も不明で確実ではないが、遺物が伴うものであれば7世紀後半と考えられる。

第32号掘立柱建物跡（第181図）

調査区の西側、H-17・18グリッドに位置する。第248号住居跡、第16号掘立柱建物跡、第117号土壇と重複関係にあり、前2者より本建物跡の方が新しく、土壇との前後は不明である。付近には第16~18・20・21・24・33・34・36・37・46号掘立柱建物跡がある。

3×2間の東西棟の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行5.10m、梁行4.00m、面

積20.40㎡である。主軸方向はN-84°-Eで、やや北に偏している。柱間隔は桁行1.70mで等間隔、梁行2.00mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸58~75cm、短軸41~60cmで、ほぼ同規模である。深さは32~63cmで、P2・10は浅めである。掘り方は、P3・6が柱の当たりの部分が一段掘り下げられている。それ以外の底面ははたずれも平坦である。覆土は1層が柱痕、2~5層が掘り方である。柱は抜き取られなかったものと考えられる。

遺物は土師器環・甕の小破片が出土している。1は内面に油煙が付着している。時期は8・9世紀のものが出土している。周辺の遺構も同時期とすれば8~9世紀のいずれかの時期のものと考えられる。

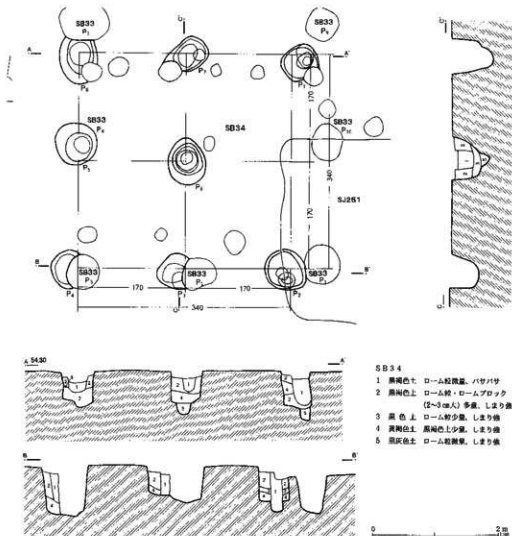
第33号掘立柱建物跡（第182図）

調査区の西側、H・I-17グリッドに位置する。第251号住居跡、第34号掘立柱建物跡と重複関係にあり、前者より古く、後者より新しい。付近には第16~18・20・21・24・32・34・36・37・46号掘立柱建物跡がある。

3×2間の南北棟の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行5.70m、梁行3.80m、面積21.66㎡である。主軸方向はN-1°-Eで、ほぼ南北である。柱間隔は桁行1.90m、梁行1.90mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸54~82cm、短軸48~68cmで、ほぼ同規模である。深さは50~79cmで、P10は浅めである。掘り方は、P9が柱の当たりの部分が一段掘り下げられている。それ以外の底面ははたずれも平坦である。覆土は1層が柱痕、2~5層が掘り方である。柱痕は遺構確認時に明瞭に確認できた。柱は抜き取られなかったものと考えられる。

遺物は土師器の甕、須恵器鉢・甕の破片が出土している。時期は8世紀前半と考えられる。



第183図 第34号掘立柱建物跡

第34号掘立柱建物跡 (第183図)

調査区の西側、H・I-17グリッドに位置する。第251号住居跡、第33号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本建物跡の方が古い。付近には第16・18・20・21・24・32・33・36・37・46号掘立柱建物跡がある。

2×2間の総柱建物跡である。平面形は正方形である。規模は桁行3.40m、梁行3.40m、面積11.56㎡である。主軸方向はN-Sである。柱間隔は桁行1.70m、梁行1.70mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸58~77cm、短軸47~66cmで、ほぼ同規模である。深さは50~73cmである。掘り方は、柱の当たりの部分が一段掘り下げられているもの(P1・2・7・8)と、底面

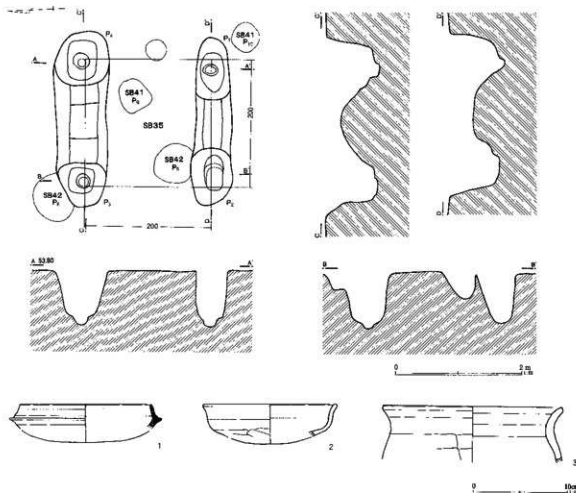
が平坦なもの(P3~6)がある。覆土は1層が柱痕、2~5層が掘り方である。柱痕は、遺構確認時に明瞭に認められた。柱は抜き取られなかったものと考えられる。

遺物は図示不能な土師器製の小破片が出土しているのみである。時期は他の遺構の状況から、8世紀前半と考えられる。

第35号掘立柱建物跡 (第184図)

調査区のはほぼ中央、E-22・23グリッドに位置する。第41・42号掘立柱建物跡と重複関係にある。断面図等で示すことができなかったが、調査時に本建物跡が最も新しいと考え、調査を行った。付近には第38・40・49・57号掘立柱建物跡がある。

1×1間の建物跡である。平面形は正方形である。



第184図 第35号掘立柱建物跡・出土遺物

第95表 第35号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	須恵環	(14.0)	2.7		BEK	1	灰	15	P3・P4 米野産 A
2	土師環	(14.0)	3.4		EH	2	明褐	10	P2・P3
3	土師壺	(19.0)	5.9		H	3	暗褐	10	P3・P4

規模は桁行2.00m、梁行2.00m、面積4.00㎡である。

主軸方向はN-88°-Wで、ほぼ東西である。P1-2間、P3-4間には布掘りが掘られている。

柱穴の形態は、上場が不整な円形もしくは楕円形、底面が隅丸方形もしくは楕円形である。規模は長軸78-88cm、短軸52-86cmで、ほぼ同規模である。深さは83-89cmである。掘り方は、P1・4が柱の当たりの部分が一段掘り下げられ、P2・3は平坦である。覆土の状況は確認できなかった。布掘りは幅60-80cm、深さ22-40cmである。本来ならば、柱掘り方との関係を示すべきだが、調査時に清跡として一括して掘り下げたため、確認することができな

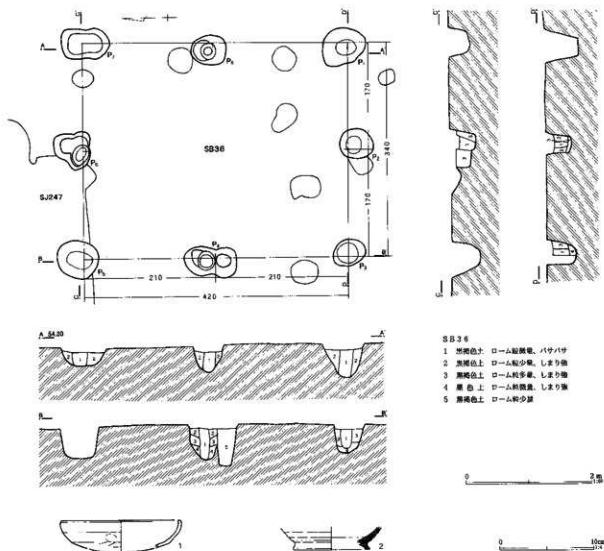
かった。

遺物は土師器の環・甕、須恵器の環が出土しているのみである。1は陶器 TK209の時期のもので、混入である。時期は、8世紀後半と考えられる。

第36号掘立柱建物跡 (第185区)

調査区の西側、G・H-18グリッドに位置する。第247号住居跡と重複関係にあり、本建物跡の方が新しい。付近には第16-18・20・21・24・32-34・37・46号掘立柱建物跡がある。

2×2間の南北棟の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行4.20m、梁行3.40mである。面積14.28㎡である。主軸方向はN-Sで、南北



- 注目点
- 1 黒褐色土 ローム粒微量、バサバサ
 - 2 黒褐色土 ローム粒少量、しまり強
 - 3 黒褐色土 ローム粒少量、しまり強
 - 4 黒色土 ローム粒微量、しまり強
 - 5 黒褐色土 ローム粒少量

第185図 第36号独立柱建物跡・出土遺物

第96表 第36号独立柱建物跡出土遺物観察表

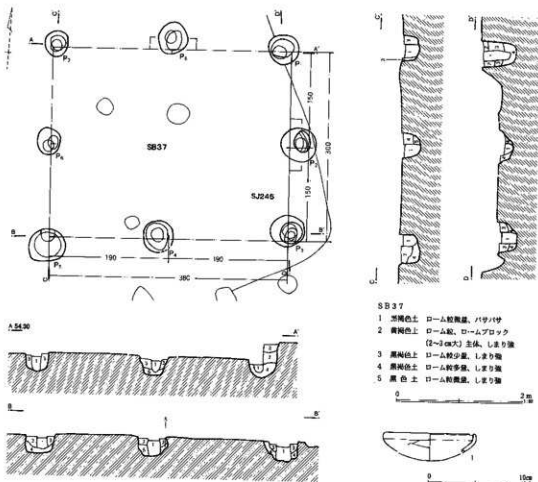
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	12.5	2.9		ADE	1	明褐色	10	P 6
2	須恵高台椀		2.4	(8.0)	BEIK	2	灰	10	P 6 未野産 A

である。柱間隔は桁行2.10mで等間隔、梁行1.70mで等間隔である。

柱穴の形態は、円形もしくは楕円形である。規模は長軸53~76cm、短軸47~60cmで、ほぼ同規模である。深さは35~64cmである。P 4・6・8は複数の柱穴が連結した形態で、柱を建て替えた可能性がある。掘り方の底面は、いずれも平坦である。覆土は1層が柱底、2~4層が掘り方である。5層は他のピットの可能性もある。柱底は、遺構確認時に明瞭

に認められた。柱は抜き取られなかったと考えられる。

遺物は土師器の環・甕、須恵器の高台付椀・蓋が出土している。土器以外にも円金具の一部と考えられる棒状鉄製品が出土している。遺物の時期は8・9世紀だが、重複する第247号住居跡が9世紀末であることから、本建物跡は9・10世紀頃のものと考えておきたい。



第186図 第37号掘立柱建物跡・出土遺物

第97表 第37号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(9.5)	2.0		ADE	2	褐	5	P8

第37号掘立柱建物跡 (第186図)

調査区の西側、G-17グリッドに位置する。第245号住居跡と重複関係にあり、本建物跡の方が新しい。付近には第16・18・20・21・24・32・34・36・46号掘立柱建物跡がある。

2×2間の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行3.80m、梁行3.00m、面積11.40㎡である。主軸方向はN-86°-Eで、ほぼ東西である。柱間隔は桁行1.90mで等間隔、梁行1.50mで等間隔である。

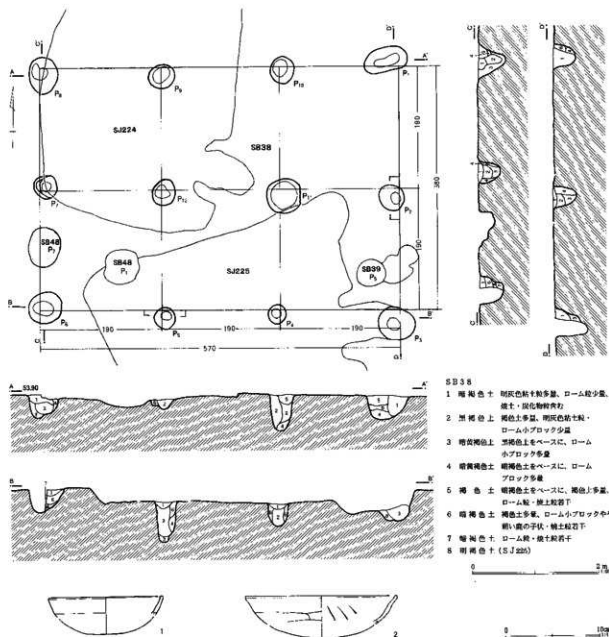
柱穴の形態は、円形である。規模は長軸40~60cm、短軸38~52cmで、ほぼ同規模である。深さは住居跡調査後に掘り下げたため、正確には不明だが、確認

面から60cmほどになると考えられる。深浅の差はあまりない。掘り方の底面は、いずれも平坦である。覆土は1層が柱底、2~5層が掘り方である。柱底は、各々の柱穴で、遺構確認時に明瞭に認められた。柱は抜き取られなかったと考えられる。

遺物は土師器の環・甕、須恵器の甕が出土している。時期は、第245号住居跡より新しい7世紀末以後であることを確認するのに留めたい。

第38号掘立柱建物跡 (第187図)

調査区の西側、E-21・22、F-22グリッドに位置する。第224・225号住居跡、第39・48号掘立柱建物跡と重複関係にある。第224号住居跡より古く、225号住居跡より新しい。第39・48号建物跡とは柱穴



第187図 第38号掘立柱建物跡・出土遺物

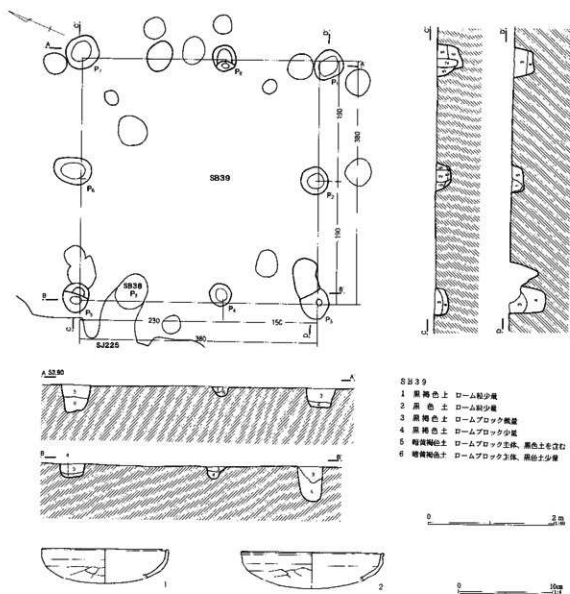
第98表 第38号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.0		EII	2	赤褐	10	P 8
2	土師皿	(16.0)	2.0		ADE	2	褐	10	P 6 放射状暗文

同上の切り合いがなく、判断が難しいが、後述するように、前者は本建物跡より古く、後者は新しいと考えられる。付近には第9・35・40～42・57号掘立柱建物跡がある。

3×2間の東西棟の総柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行5.70m、梁行3.80m、面積

21.66㎡である。主軸方向はW-Eで、東西である。柱間間隔は桁行1.90m、梁行1.90mで等間隔である。柱穴の形態は、P1・8が楕円形で、それ以外は円形である。規模は長軸31～70cm、短軸30～52cmで、径30～40cm前後のものと径50cm前後のものがある。深さは住居跡調査後に掘り下げたため、正確には不



第188図 第39号掘立柱建物跡・出土遺物

第99表 第39号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(13.2)	3.0		ADE	2	褐	15	P 6
2	土師環	(15.0)	2.9		ADE	2	褐	20	P 6

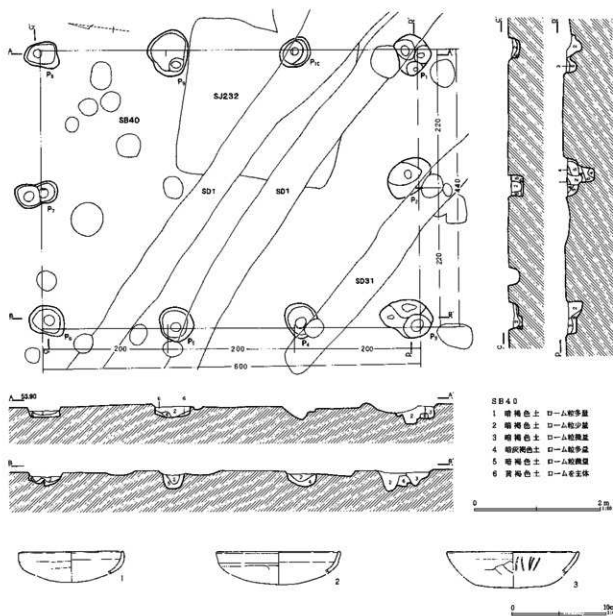
明だが、確認面から30~40cmほどのもの(P1・2・6~9)と60~80cm(P3~5・10)のものがある。また、P11・12は10cm・25cmと特に浅い。掘り方の底面は、いずれも平坦である。覆上は1層が柱抜き取り後の流れ込み、2層が柱底、3~7層が掘り方である。柱はP1・3以外抜き取られなかったと考えられる。

遺物は土師器の環・葉の破片が出土している。遺

物の時期は8世紀だが、上述の遺構の重複関係から10世紀前半頃と考えられる。

第39号掘立柱建物跡(第188図)

調査区の西側、E・F-22グリッドに位置する。第225号住居跡、第38号掘立柱建物跡と重複関係にある。直接の重複関係がないため、判断が難しいが、出土遺物が本建物跡の時期を示すものであるならば、両者より古いと考えられる。付近には第9・35・



第189図 第40号独立柱建物跡・出土遺物

第100表 第40号独立柱建物跡出土遺物観察表

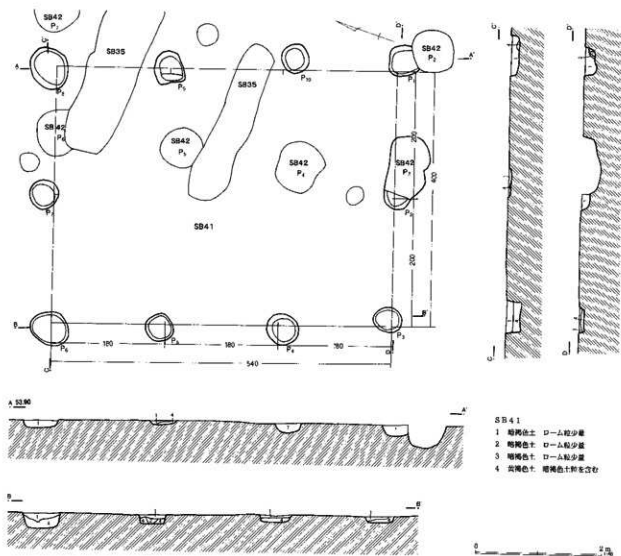
番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(11.0)	2.4		AElI	3	暗褐色	5	P 7
2	土師環	(13.0)	2.3		ADE	2	褐色	10	P 2
3	土師環	(14.0)	2.5		ADE	1	赤褐色	10	P 7 放射状暗文

40～42・57号独立柱建物跡がある。

2×2間の側柱建物跡である。平面形は正方形である。規模は桁行3.80m、梁行3.80m、面積14.44㎡である。主軸方向はN-23°-Wで、西に偏している。柱間隔は桁行が2.30m、1.90mで等間隔ではなく、梁行1.90mで等間隔である。東西のいずれかの

方向に広い入り口を持つ構造だったものと考えられる。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸38～50cm、短軸34～48cmで、径50cm前後のものが殆どである。P 4・8は規模が小さい。深さは20～72cmと幅がある。P 4は20cmと特に浅く、礎石立ち等であった可



第190図 第41号掘立柱建物跡

能性も考えられよう。掘り方の底面は、いずれも平坦である。覆上は1・2層が柱痕、3・4層が柱抜き取り後の流れ込み、5・6層が掘り方である。柱はP 2・6・7以外抜き取られたものと考えられる。

遺物は土師器の坏・甕が出土している。時期は8世紀前半である。

第40号掘立柱建物跡 (第189図)

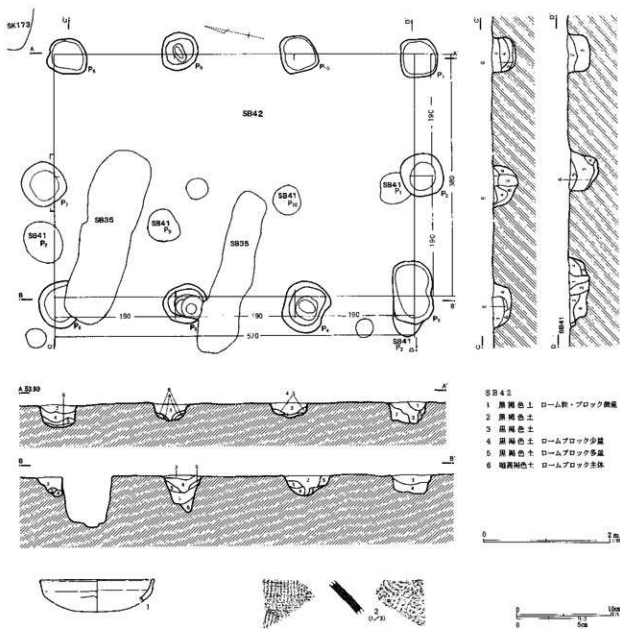
調査区の西側、F・G-22グリッドに位置する。第232号住居跡、第1・31号溝跡と重複関係にあり、本建物跡が最も古い。付近には第9・35・38・39・41・42・57号掘立柱建物跡がある。

3×2間の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行6.00m、梁行4.40m、面積26.40㎡

である。主軸方向はN-8°-Wで、やや西に偏している。柱間隔は桁行が2.00mで等間隔、梁行2.20mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸50~84cm、短軸31~65cmで、径50cm前後のもの (P 4-8・10) と60~80cmのもの (P 1-3・9) がある。深さは16~32cmと全体的に浅い。掘り方は、P 1-3が、柱の当たりの部分が一段掘り下げられている他は平坦である。覆上は2層が柱痕、3~6層が掘り方である。柱痕は遺構確認時に確認できた。柱は抜き取られなかったものと考えられる。

遺物は土師器の坏・甕が出土している。時期は8~9世紀と考えられる。



第191図 第42号独立柱建物跡・出土遺物

第101表 第42号独立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.4		ADE	3	橙褐色	5	P10
2	須恵甕		2.8		BEK	1	紫灰	5	P1 木野産

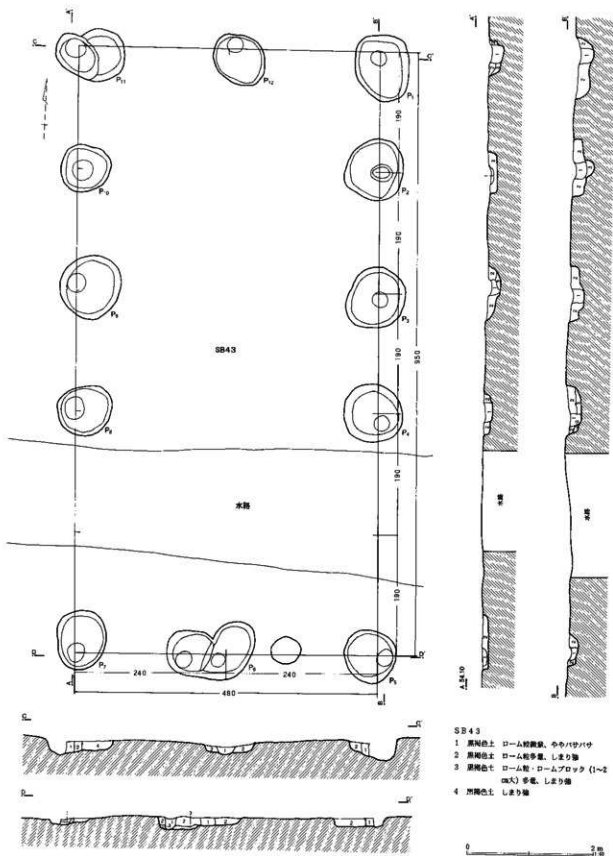
第41号独立柱建物跡 (第190図)

調査区のはほぼ中央、E-22・23グリッドに位置する。第35・42号独立柱建物跡と重複関係にあり、本建物跡が最も古い。付近には第9・38・40・49・57号独立柱建物跡がある。

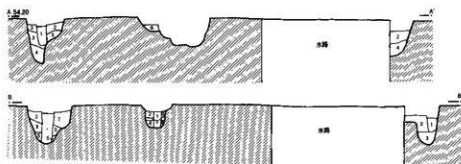
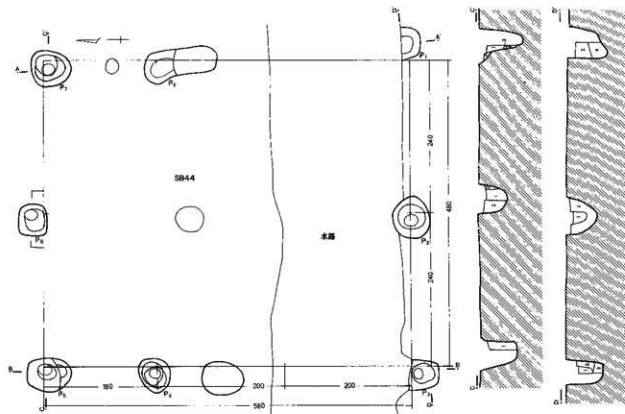
3×2間の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行5.40m、梁行4.00m、面積21.60㎡

である。主軸方向はN-19°-Wで、西に偏している。柱間間隔は桁行が1.80mで等間隔、梁行2.00mで等間隔である。

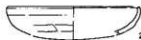
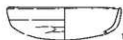
柱穴の形態は円形である。規模は長軸45~70cm、短軸40~61cmで、径50cm前後のもの(P1~5・7・9・10)と60~80cmのもの(P6・8)がある。深さは5~24cmと全体的に浅い。掘り方はいずれも底



第192図 第43号掘立柱建物跡



- SB44
- 1 黒褐色土 ローム粒微細、パサ/パサ
 - 2 黒褐色土 ローム粒少量、しまり強
 - 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (2~3cm大) 少量、しまり強
 - 4 黒褐色土 ローム粒微細、しまり強
 - 5 黒褐色土 ローム粒・白色粘土少量、しまり強
 - 6 黒褐色土 しまり強



第193図 第44号掘立柱建物跡・出土遺物

第102表 第44号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.8		ADE	2	赤褐	10	P 8
2	土師環	(14.0)	3.0		ADE	1	明褐	10	P 3

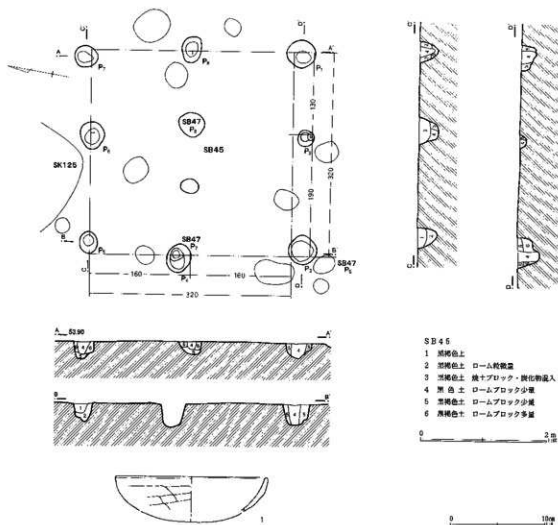
面が平坦である。覆土は1層が柱抜き取り後の自然堆積、2層が柱の抜き取り痕、3・4層が掘り方である。柱は全て抜き取られたものと考えられる。

遺物は実測不能な土師器の裏の小破片が出土している。時期は不明だが、8世紀後半と考えられる第

35号掘立柱建物跡より古いことから、8世紀中葉以前としておきたい。

第42号掘立柱建物跡 (第191図)

調査区のほぼ中央、E-22・23グリッドに位置する。第35・41号掘立柱建物跡と重複関係にあり、前



第194図 第45号掘立柱建物跡・出土遺物

第103表 第45号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残片	備考
1	土師環	(16.0)	3.6		DEH	1	黒	15	P3

者より古く、後者より新しい。付近には第9・38～40・49・57号掘立柱建物跡がある。

3×2間の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行5.70m、梁行3.80m、面積21.66㎡である。主軸方向はN-12°-Wで、西に偏している。柱間間隔は桁行が1.90m、梁行1.90mで等間隔である。

柱穴の形態は円形もしくは隅丸方形である。規模は長軸60～100cm、短軸52～68cmで、P3を除き径60～70cmの同様の規模である。深さは22～55cmと幅があり、東側の中央の2基が浅めである。掘り方は

P5を除き、底面が平坦である。覆土は1層が柱抜き取り後の自然堆積土、2層が柱の抜き取り痕、3～6層が掘り方である。柱は全て抜き取られたものと考えられる。

遺物は土師器の環・甕、須恵器甕の小破片が出土している。時期は不明だが、8世紀後半と考えられる第35号掘立柱建物跡より古いことから、8世紀中葉以前としておきたい。

第43号掘立柱建物跡 (第192図)

調査区の西側、I・J-14・15グリッドに位置する。付近には第11・44号掘立柱建物跡がある。水路

により、南側の柱穴を壊されている。

5×2間の南北棟の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行9.50m、梁行4.80m、面積45.60㎡である。主軸方向はN-3°-Wで、ほぼ南北である。柱間隔は桁行が1.90mで等間隔、梁行が2.40mで等間隔である。

柱穴の形態は円形もしくは楕円形である。規模は長軸77~155cm、短軸75~97cmの範囲で、複数の掘りこみがあるP6・11を除き径70~100cmである。深さは13~33cmで、全体的に浅い。掘り方はP2を除き、底面が平坦である。覆土は1層が柱底、2~4層が掘り方である。柱痕は遺構確認時に明瞭に確認できた。柱は抜き取られなかったものと考えられる。P6・11は複数の掘りこみがあり、P11は掘り方のようだが、P6は建て替えられたものである。

遺物は出土していない。時期は不明だが、第11・44号建物跡と同様であるとするならば、7・8世紀のものできよう。

第44号掘立柱建物跡 (第193区)

調査区の西側、I・J-15・16グリッドに位置する。付近には第11・14・32-34・42-44号掘立柱建物跡がある。水路により、P1-8間、P3-4間、の柱穴を壊されている。

3×2間の南北棟の側柱建物跡と考えられる。平面形は長方形である。規模は桁行5.80m、梁行4.80m、面積27.84㎡である。主軸方向はN-1°-Eで、ほぼ南北である。柱間隔は桁行1.80、2.00mで不均等、梁行は2.40mで等間隔である。

柱穴の形態は円形もしくは楕円形である。規模は長軸58~73cm、短軸40~60cmの範囲で、ほぼ同規模である。深さは29~71cmで、P4・8は浅い。掘り方は、いずれも底面が平坦である。覆土は1層が柱底、2~6層が掘り方である。P8以外、柱痕は遺構確認時に明瞭に確認できた。柱は抜き取られなかったものと考えられる。

遺物は、土師器環・甕、須臾器甕が出土している。

時期は、遺物が伴うものであれば、8世紀中葉と考えられる。

第45号掘立柱建物跡 (第194区)

調査区の西側、H-22グリッドに位置する。第47号掘立柱建物跡と重複関係にある。新旧は不明だが、遺物からは本建物跡の方が古い可能性がある。

2×2間の側柱建物跡である。平面形は正方形である。調査時は第47号建物跡の柱穴も本建物跡に帰属するものと判断し、総柱としたが、柱間隔が不均等になることから、側柱建物と考えた。規模は桁行3.20m、梁行3.20m、面積10.24㎡である。主軸方向はN-10°-Wで、西に偏している。柱間隔は桁行1.30m、1.90mで不均等になっている。梁行は1.60mで、等間隔である。

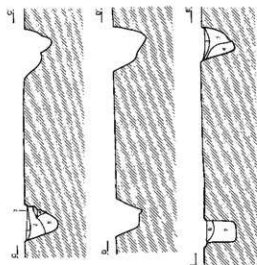
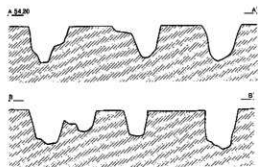
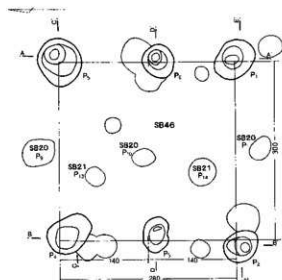
柱穴の形態は円形である。規模は長軸26~47cm、短軸25~40cmの範囲で、概ね径30~40cmである。深さは14~37cmで、全体的に浅い。特にP2・8は浅い。礎石立ち等の可能性も考えられる。掘り方はP3を除き、底面が平坦である。覆土は1~3層が柱抜き取り後の自然堆積土、4層が柱底、5・6層が掘り方である。柱痕はP1・2・3・8で、遺構確認時に明瞭に確認できた。柱は抜き取られなかったものと考えられる。

遺物は土師器環・甕、須臾器蓋の小破片が出土している。時期は、遺物が伴うものであるならば、7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

第46号掘立柱建物跡 (第195区)

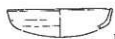
調査区の西側、H・I-19グリッドに位置する。第20・21号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、柱穴同士の重複がなく、新旧は不明である。付近には第16~18・24・32-34・36・37・46号掘立柱建物跡が集中して分布する。

2×1間の南北棟の側柱建物跡である。平面形は正方形である。第20号建物跡のP1・9は位置的には棟持柱の位置にあり、2×2間である可能性を残す。規模は桁行3.00m、梁行2.80m、面積8.40㎡である。主軸方向はN-1°-Wで、南北である。柱間



SB46

- 1 暗褐色土 ローム状多量
- 2 暗褐色土 ローム粒を散見
- 3 黄褐色土 ローム粒多量
- 4 暗褐色土
- 5 黄褐色土 ローム粒多量
- 6 暗褐色土 ローム粒多量
- 7 黄褐色土 ローム粒多量



0 2.5

0 1.0

第195図 第46号掘立柱建物跡・出土遺物

第104表 第46号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(11.0)	2.2		ADE	2	橙褐色	5	P6
2	土師環	(12.0)	2.6		ADE	2	橙褐色	10	

間隔は桁行3.00m、梁行1.40mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸55~73cm、短軸44~65cmの範囲で、ほぼ同規模である。深さは45~60cmで、深い。掘り方はP5を除き、底面が平坦である。覆土は1・2・6層が柱抜き取り後の自然堆積上、3~5・7層が掘り方である。柱は全て抜き取られたものと考えられる。

遺物は土師器環・甕、須恵器甕の小破片が出土している。時期は、遺物が伴うものであるならば8世紀と考えられる。

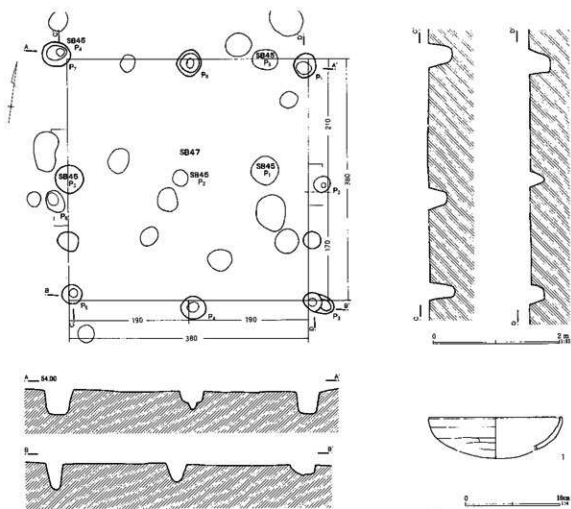
第47号掘立柱建物跡 (第196図)

調査区の西側、H-22・23グリッドに位置する。第45号掘立柱建物跡と重複関係にある。新旧は不明

だが、遺物からは本建物跡の方が新しい可能性が高い。

2×2間の側柱建物跡である。平面形はほぼ正方形である。規模は桁行3.80m、梁行3.80m、面積14.44㎡である。主軸方向はN-8°-Wで、やや西に偏している。柱間間隔は、桁行1.70m、2.10mと不均等になっている。梁行は1.90mで、等間隔である。

柱穴の形態は円形もしくは楕円形である。規模は長軸25~50cm、短軸26~45cmの範囲で、概ね径30~40cmである。深さは23~41cmで、ほとんどが30~40cmのものである。P2・3は浅めである。掘り方はP8を除き、底面が平坦である。覆土の状況は確認できなかった。



第196図 第47号掘立柱建物跡・出土遺物

第105表 第47号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(14.0)	3.5		ADE	1	褐色	15	P 8

遺物は土師器環・甕の小破片が出土している。時期は、遺物が伴うものであるならば、8世紀中葉と考えられる。

第48号掘立柱建物跡 (第197図)

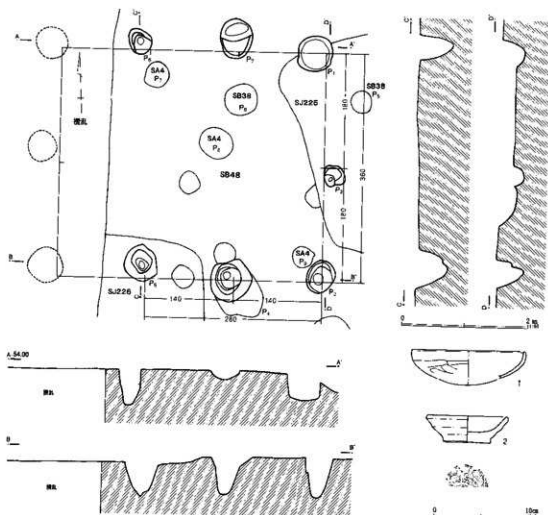
調査区の西側、E・F-21グリッドに位置する。第225・226号住居跡、第38号掘立柱建物跡、第4号横列跡と重複関係にある。本建物跡が最も新しい。付近には第9・35・40~42・57号掘立柱建物跡がある。遺構の西側は攪乱により壊されている。

桁行2間以上、梁行2間の側柱建物跡である。平面形は長方形になると考えられる。規模は桁行2.80

m以上、梁行3.60m、面積10.08m²である。主軸方向はN-86°-Wで、ほぼ東西である。柱間間隔は、桁行1.40mで等間隔、梁行1.80mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸40~70cm、短軸36~63cmで、概ね径60~70cmである。P 2・6は小型である。深さは20~65cmで幅があり、P 2・7が浅い他は深めである。掘り方はP 3・5を除き、底面が平坦である。覆土の状況は確認できなかった。

遺物は土師器環、ロク土師器の小皿、実測不能な須恵器環、が出土している。1や須恵器環は混入である。時期は11世紀前半である。



第197図 第48号掘立柱建物跡・出土遺物

第106表 第48号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	3.0		ADH	2	褐色	15	P 7
2	土師小皿	(8.4)	2.8	(5.0)	ADE	2	茶褐色	30	P 1

第49号掘立柱建物跡 (第198図)

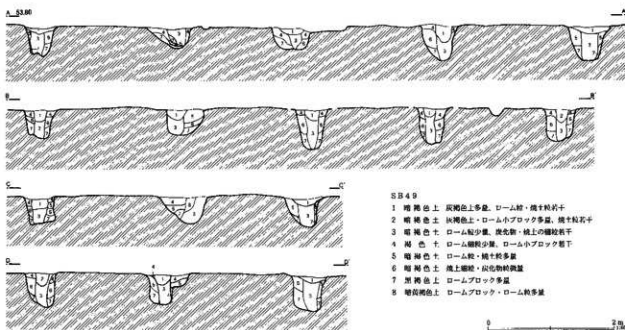
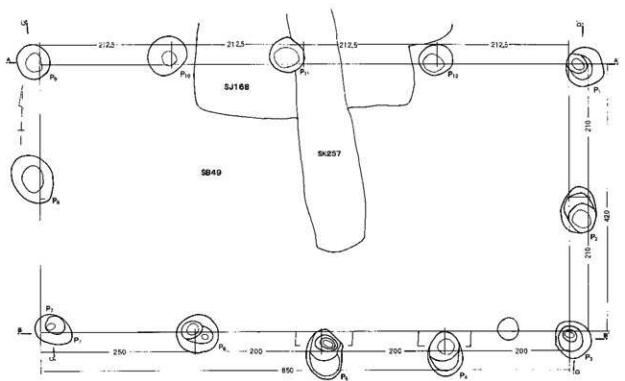
調査区のはほぼ中央、E-23・24グリッドに位置する。第168号住居跡、第275号土壇と重複関係にある。前後関係は不明である。付近には第35・41・42・52号掘立柱建物跡がある。

4×2間の東西棟の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行8.50m、梁行4.20m、面積35.70㎡である。主軸方向はN-88°-Eで、ほぼ東西である。柱間間隔は、桁行で2.00・2.125・2.50mがあり、不均等である。梁行は2.10mで、等間隔である。

柱穴の形態は円形もしくは楕円形である。規模は

長軸53～82cm、短軸44～62cmで、概ね径55～65cmである。深さは34～70cmで幅があるが60cm前後のものが多い。掘り方は、いずれも底面が平坦である。覆土は1・2層が柱の抜き取り痕への自然堆積、3層が柱痕もしくは抜き取り痕、4～7層が掘り方、8層が掘り方の崩落土である。P1～7では、遺構確認時に柱痕を確認している。それ以外は柱が抜き取られていると考えられる。

遺物は図示不能な土師器環・甕、古墳時代の高環が出土している。時期は不明だが、柱間隔が不揃いであることから、10世紀以後のもの可能性が高い。



SB49

- 1 暗褐色土 灰褐色土多量、ローム粒・焼土粒若干
- 2 暗褐色土 灰褐色土・ローム小ブロック多量、焼土粒若干
- 3 暗褐色土 ローム粒少量、炭灰粒・焼土の凝粒若干
- 4 暗褐色土 ローム凝粒少量、ローム小ブロック若干
- 5 暗褐色土 ローム粒・焼土粒多量
- 6 暗褐色土 焼土凝粒・炭化物粒多量
- 7 暗褐色土 ロームブロック多量
- 8 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多量

0 20m

第198図 第49号掘立柱建物跡

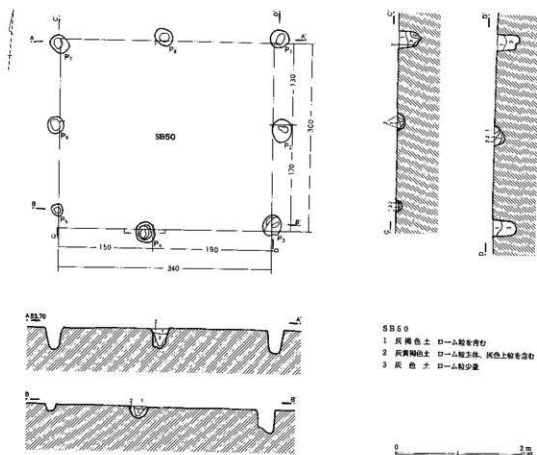
第50号掘立柱建物跡 (第199図)

調査区のはほぼ中央、H-24・25グリッドに位置する。他の建物跡とは離れた位置にある。東側と南側に第5・6号横列跡がある。

2×2間の側柱建物跡である。平面形は正方形である。規模は桁行3.40m、梁行3.00m、面積10.20㎡

である。主軸方向はN-86°-Eで、ほぼ東西である。柱間間隔は、桁行1.50m、1.90m、梁行1.30m、1.70mである。P2・5は軸線から外れている。切妻の屋根構造ではなく、片屋根のような構造である可能性もある。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸19~37cm、



第199図 第50号掘立柱建物跡

短軸19～32cmで、概ね径30cm前後である。深さは12～39cmで幅がある。10～20cmのもの（P2・4～6）、と30～40cmのもの（P1・3・6～8）がある。掘り方は、P1を除きいずれも底面が平坦である。覆土は1層が柱の抜き取り痕への自然堆積、2層が掘り方、3層が柱痕もしくは抜き取り痕である。柱は全て抜き取られていると考えられる。

遺物は図示不能な土師器環・甕が出土している。時期は不明だが、柱間隔が揃っていることから、10世紀以後のものとの可能性が高い。

第51号掘立柱建物跡（第200図）

調査区のほぼ中央、F-25グリッドに位置する。第10号溝跡と重複関係にあるが、前後は不明である。付近には第49・52・69号掘立柱建物跡がある。

2×2間の南北棟の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行4.80m、梁行3.40m、面

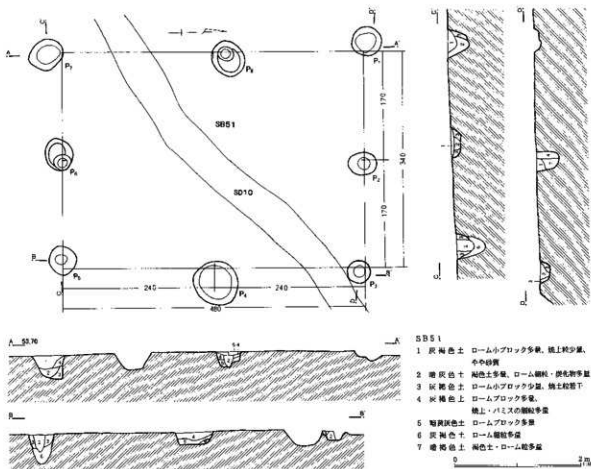
積16.32㎡である。主軸方向はN-1°-Eで、ほぼ南北である。柱間隔は、桁行2.40m、梁行1.70mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸46～70cm、短軸37～69cmで、径40～50cmのもの（P1～3・5・6）と径55～70cmのもの（P4・7・8）がある。深さは12～44cmで幅がある。規模の大小に関係なく、P1・4・6は浅めである。掘り方は、いずれも底面が平坦である。覆土は1層が柱の抜き取り痕への自然堆積、2層が柱の抜き取り痕、3～6層が掘り方である。柱は全て抜き取られていると考えられる。

遺物は図示不能な土師器甕が出土している。時期は不明だが、位置関係から10世紀以後のものである可能性を考えておきたい。

第52号掘立柱建物跡（第201図）

調査区のほぼ中央、E-25グリッドに位置する。



第200図 第51号掘立柱建物跡

第189・190号住居跡、第10号溝跡、第126号土壇と重複関係にあるが、前後は不明である。付近には第49・51・69号掘立柱建物跡がある。

3×2間の東西棟の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行4.50m、梁行3.00m、面積13.50㎡である。主軸方向はN-83°-Eで、やや北に偏している。柱間隔は、桁行1.50m、梁行1.50mで等間隔である。P4は軸線から外れている。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸31~76cm、短軸21~52cmで、径30~40cmのもの(P1・2・4・5・10)と径50~80cmのもの(P3・6~9)がある。深さは25~60cmで幅がある。規模の大小に関係なく、P3・5は浅めである。それ以外は40cm以上の深さがある。掘り方は、P1・6・7が柱の当たりの部分が一段掘り下げられている。その他の底面は平坦である。覆土は1層が柱の抜き取り痕への自

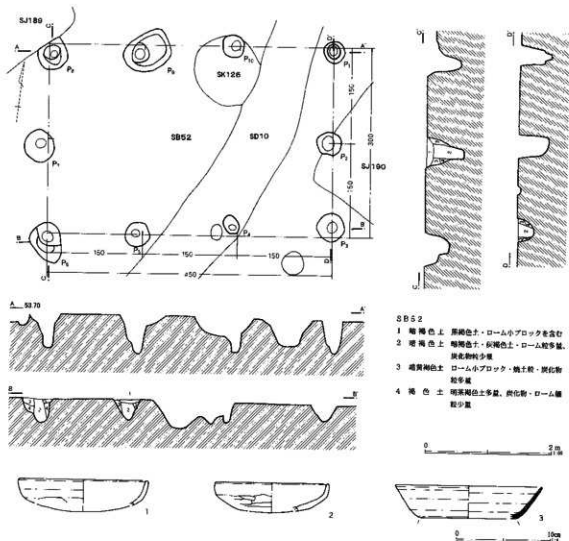
然堆積、2層が柱の抜き取り痕、3・4層が掘り方である。柱は全て抜き取られていると考えられる。

遺物は土師器環・須恵器環、実測不能な土師器環が出土している。時期は8世紀前半である。

第53号掘立柱建物跡(第202図)

調査区の北側B・C-23グリッドに位置する。第124(縄文)・145・146・157号住居跡、第185号土壇と重複関係にある。第146号住居跡との新旧は不明だが、その他のいずれよりも古い。付近には第19・26・29・60・62~64号掘立柱建物跡がある。

3×2間の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行6.00m、梁行4.00m、面積24.00㎡である。主軸方向はN-14°-Wで、やや西に偏している。柱間隔は、桁行2.00m、梁行2.00mで等間隔である。P1-2間には柱穴を検出することができず、切妻の屋根構造ではなかったと考えられる。



第201図 第52号掘立柱建物跡・出土遺物

第107表 第52号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(13.5)	2.6		ADH	2	茶褐色	15	P 6
2	土師環	(12.0)	2.9		ADE	1	赤褐色	15	P 2
3	須恵環	(15.6)	3.4	(10.2)	ABEII	3	黄灰	40	P 6 水野彦 A

また、P 4も軸線から外れている。

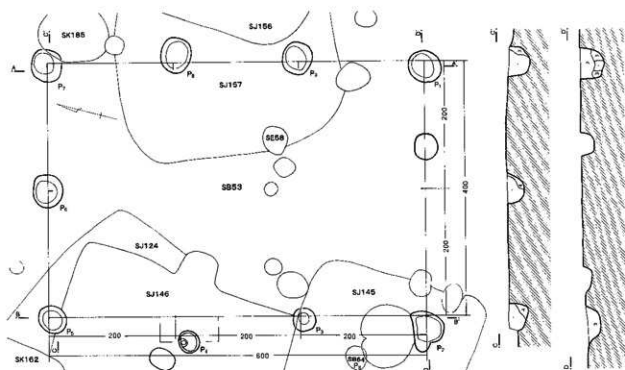
柱穴の形態は円形である。規模は長軸35～65cm、短軸33～50cmで、P 3・4が小型、P 6・9が大型で、それ以外は径40～50cmのものである。深さは、北側の軸線上の柱穴以外は住居跡の掘り込みの中にあるため確実ではないが、概ね確認面から30～40cm前後と考えられる。掘り方の底面は、P 4以外平坦である。覆土は1層が柱の抜き取り痕、2層が抜き取り痕への自然堆積、3～5層が掘り方である。柱は全て抜き取られていると考えられる。

遺物は土師器の環・甕・壺が出土している。時期は、遺構の重複関係から8世紀前半以前と考えられる。

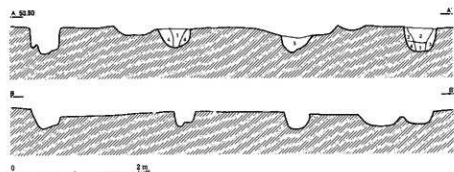
第54号掘立柱建物跡 (第203図)

調査区の北側、B-21・22グリッドに位置する。第132・133・135号住居跡と重複関係にある。第132・135号住居跡より古く、第133号住居跡より新しい。付近には第30・58・59・62・63号掘立柱建物跡がある。

3×2間の側柱建物跡である。平面形は長方形で



- S1153
- 1 磁褐色土 ローム状少量
 - 2 磁褐色土 ローム状・粘土状少量
 - 3 黄褐色土 ローム状・ロームブロック (2-3cm) 主層
 - 4 磁褐色土 ローム状少量
 - 5 黄褐色土 ローム状・ロームブロック (2cm) 少量



第202図 第53号掘立柱建物跡・出土遺物

第108表 第53号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼色	色調	残率	備	考
1	土師環	(12.0)	2.5		AD	E	2	粉濁	10	P 8

ある。規模は桁行5.70m、梁行3.80m、面積21.66㎡である。主軸方向はN-10°-Wで、やや西に偏している。柱間間隔は、桁行1.90m、梁行1.90mで等間隔である。P 8-9間には柱穴を検出することができなかった。

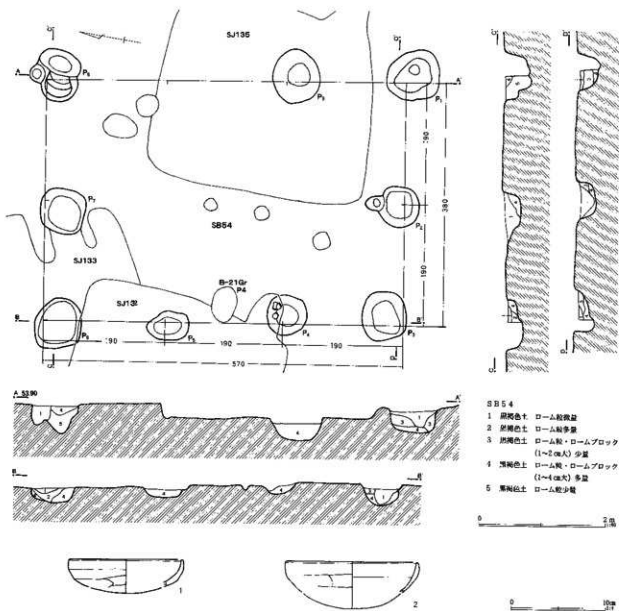
柱穴の形態は円形である。P 2・8は両側に張り出しを持つ。規模は長軸63~90cm、短軸45~75cmで、いずれも大型である。深さは、16~45cmで、P 4・5が浅めである他は概ね30cm以上の深さがある。掘り方の底面は、P 3・8以外平坦である。覆土は1・

2層が柱の抜き取り痕、3~5層が掘り方である。柱は全て抜き取られていると考えられる。

遺物は土師器の環・甕、須恵器蓋、古墳時代の高環が出上している。時期は、遺構の重複関係と遺物が伴うものであることを前提とすれば、7世紀末~8世紀初頭と考えられる。

第55号掘立柱建物跡 (第204図)

調査区の北東側、C-31-32グリッドに位置する。第61号掘立柱建物跡、第10号溝跡、第136-139号土塙と重複関係にあるが、直接の重複がなく、遺物も



第203図 第54号掘立柱建物跡・出土遺物

第109表 第54号掘立柱建物跡出土遺物観察表

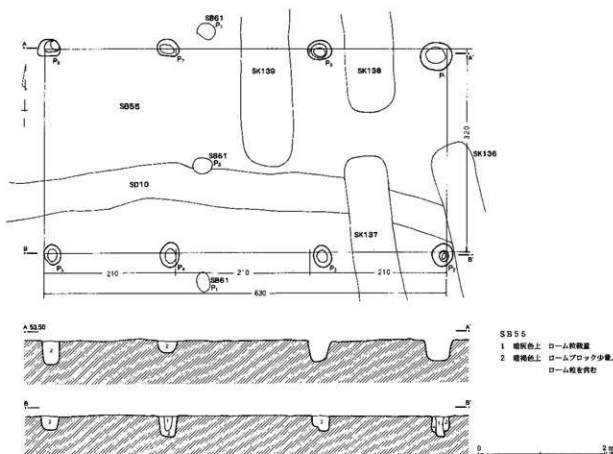
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備	考
1	土師環	(12.0)	2.9		ADE	2	赤褐	10	P 8	
2	土師環	(14.0)	3.2		ADE	3	橙褐	10	P 1	

僅少であることから新旧は不明である。付近には第27・28・65号掘立柱建物跡がある。

3×1間の東西棟の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行6.30m、梁行3.20m、面積20.16㎡である。主軸方向はN-88°-Eで、ほぼ東西である。柱間隔は、桁行2.10m、梁行3.20mで等間隔である。尾根構造は切妻ではなく、片屋根等と考えられる。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸31~50cm、短軸26~47cmである。P1が径50cmである他は、径30cm前後で小型である。深さは、20~46cmで、P7が浅めである他は30cm以上の深さがある。掘り方の底面は、P2以外平坦である。覆土は1層か柱痕、2層か掘り方である。柱はP2・4以外全て抜き取られていると考えられる。

遺物は実測不能な土師器の甕・須恵器の甕が出



第204図 第55号掘立柱建物跡

している。時期は第10号溝跡と重複するもので、それより古い例がないことから、7世紀を遡るものではなく、覆土の様相からは比較的新しい遺構と考えられる。

第56号掘立柱建物跡 (第205図)

調査区の北側、A・B-21・22グリッドに位置する。第126-128・130・134号住居跡、第30号掘立柱建物跡と重複関係にある。第128・133号住居跡より新しく、それ以外より古い。付近には第19・29・54・62・63号掘立柱建物跡がある。

2×2間の総柱建物跡である。平面形は正方形である。規模は桁行5.60m、梁行5.60m、面積31.36㎡である。主軸方向はN-3°-Wで、ほぼ南北である。柱間間隔は、桁行2.80m、梁行2.80mで等間隔である。

柱穴の形態は、楕円形もしくは隅丸長方形である。規模は長軸90~115cm、短軸70~98cmで、いずれも大

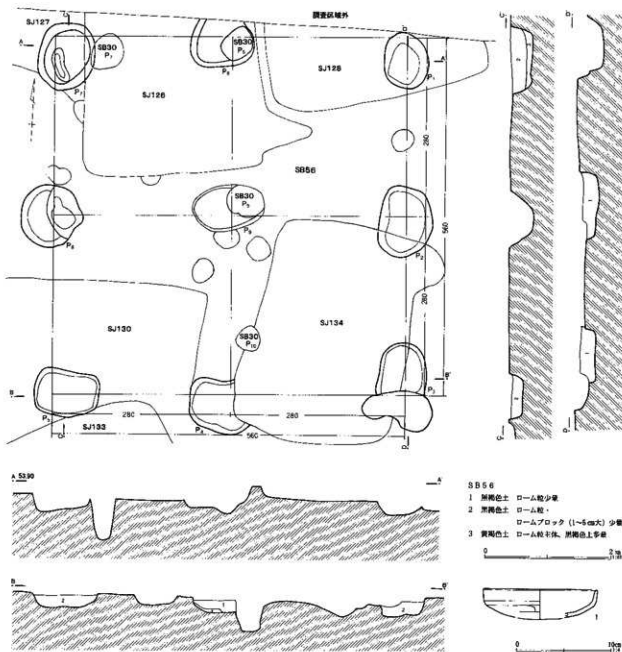
型である。深さは、26~47cmで、住居跡と重複するものが多いことから、本来は30~40cmになるものと考えられる。掘り方の底面は、いずれも平坦である。柱は全て抜き取られており、覆土は柱の抜き取り後の埋め戻しである。

遺物は土師器の環・甕が出土している。時期は遺物と重複関係から、7世紀末頃のものと考えられる。

第57号掘立柱建物跡 (第206図)

調査区の北側、D-21・22グリッドに位置する。第175・176号住居跡、第167・183・184号土壇と重複関係にある。いずれよりも本建物跡の方が古い。付近には第35・38・41・42・58-60号掘立柱建物跡がある。

3×2間の西庇の建物跡である。側柱建物跡の身舎に西庇が付く。身舎の平面形は長方形である。規模は桁行6.60m、梁行4.40m、面積29.04㎡である。主軸方向は、N-12°-Wで、西に偏している。柱間



第205図 第56号掘立柱建物跡・出土遺物

第110表 第56号掘立柱建物跡出土遺物観察表

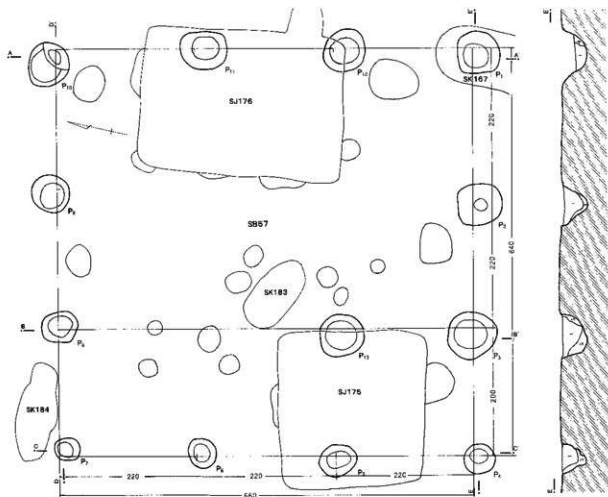
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	3.0		AEII	2	橙褐	10	覆土

第111表 第57号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(9.4)	1.8		DE	2	褐	5	P11

第112表 第58号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(13.0)	3.0		ADH	2	茶褐	15	P5
2	土師環	(12.0)	2.4		DE	2	暗褐	10	P5
3	ロクロ小皿		1.1	(5.0)	ABD	3	明茶褐	20	P5



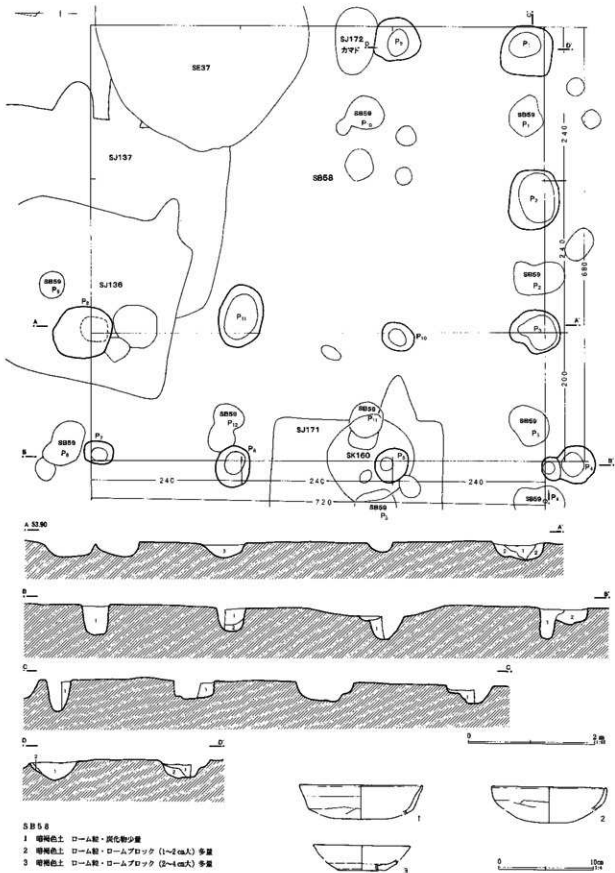
SB57

- 1 黄褐色土 ローム粒少量
- 2 赤褐色土 ローム粒・焼土粒少量
- 3 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック [1~5cm²] 少量
- 4 黄褐色土 ローム粒少量
- 5 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、黒褐色土少量



0 10m

第206図 第57号掘立柱建物跡・出土遺物



第207図 第58号掘立柱建物跡・出土遺物

間隔は桁行2.20m、梁行2.20mで、等間隔である。庇との柱間間隔は2.20mである。P 8-13間には、柱穴を検出することができなかった。

柱穴の形態は円形で、P 1・2は部分的に直線的な辺を持つ。規模は長軸43-78cm、短軸38-76cmで、身舎のものは径70-80cm、庇のものは径40cm前後のものである。深さは20-42cmと幅がある。規模の大小との関係は不明瞭である。掘り方は、庇のP 4・6・7以外は、底面が平坦である。覆土は1・2層が柱の抜き取り後の自然堆積層、3-5層が掘り方である。柱は全て抜き取られている。

遺物は土師器環・甕、須恵器類類が出土している。時期は不明だが、住居跡より古いことから7-8世紀のものと考えられる。

第58号掘立柱建物跡 (第207図)

調査区の北側、C-21・22、D-21グリッドに位置する。第136・137・171・172号住居跡、第59号掘立柱建物跡、第37号井戸跡、第160号土壌と重複関係にある。いずれの住居跡、井戸跡、土壌よりも古く、建物跡より新しい。第59号掘立柱建物跡とほとんど重複した範囲にあり、建物規模、構造、軸方向も同様であることから、本建物跡は第59号掘立柱建物跡を建て替えた可能性がある。付近には第54・57・60・62-64号掘立柱建物跡がある。住居跡や井戸跡に壊され、遺構の北側の柱穴は検出できなかったものが多い。

3×2間の西庇の建物跡である。南北棟の側柱建物跡の身舎に西庇が付く。身舎の平面形は長方形である。規模は桁行7.20m、梁行4.80m、面積34.56㎡である。主軸方向は、N-4°-Wで、ほぼ東西である。柱間間隔は桁行2.40m、梁行2.40mで、等間隔である。庇との柱間間隔は2.00mである。P 7の東側の柱穴は、第136号住居跡の床下土壌内に本来あったと思われるが、痕跡すら検出できなかった。

柱穴の形態は円形で、P 1・2は部分的に直線的な辺を持つ。規模は長軸46-104cm、短軸34-78cmで、身舎のものは径70-100cm、庇のものは径50-60

cm前後のものである。深さは13-51cmと幅がある。特にP 10は浅めである。規模の大小との関係は不明瞭である。掘り方の底面はいずれも平坦である。覆土は1層が柱の抜き取り後の自然堆積層、2・3層が掘り方である。柱は全て抜き取られている。

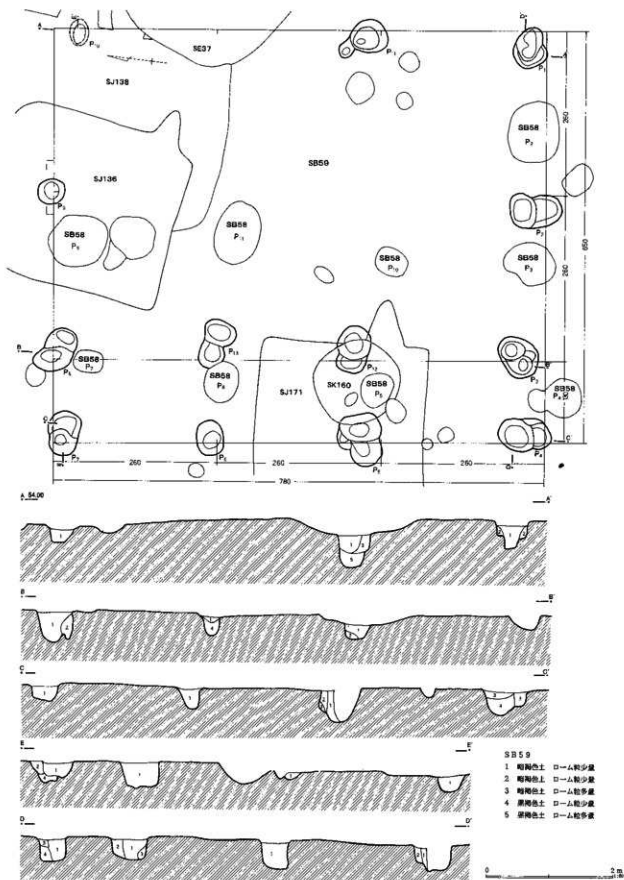
遺物は土師器環・甕が出土している。7世紀のものと10・11世紀のものが出土しているが、重複関係から後者は混入である可能性が高い。遺物が伴うものであれば、7世紀の遺構と考えられる。

第59号掘立柱建物跡 (第208図)

調査区の北側、C-21・22グリッドに位置する。第136-138・171・172号住居跡、第58号掘立柱建物跡、第37号井戸跡、第160号土壌と重複関係にある。いずれよりも本建物跡が古い。第58号掘立柱建物跡とほとんど重複した範囲にあり、建物規模、構造も同様であることから、本建物跡を建て替えた可能性がある。付近には第54・57・60・62-64号掘立柱建物跡がある。住居跡や井戸跡に壊され、遺構の北東側の柱穴は検出できなかったものがある。

3×2間の西庇の建物跡である。南北棟の側柱建物跡の身舎に西庇が付く。身舎の平面形は長方形である。規模は桁行7.80m、梁行5.20m、面積40.56㎡である。主軸方向は、N-7°-Wで、ほぼ東西である。柱間間隔は桁行2.60m、梁行2.60mで、等間隔である。庇との柱間間隔は1.30mである。

柱穴の形態は円形で、規模は長軸41-84cm、短軸40-62cmである。長軸が80cm程になるものは複数の掘り込みを持つものであり、1基の規模は40-50cm程度である。深さは22-72cmと幅がある。最も浅いP 9は136号住居跡の床面からの計測値であり、全体としては35-50cmに概ね収まる。P 3・8・12・13は複数の掘り込みがあり建て替えられた可能性がある。P 10は軸線からやや外れている。第138号住居跡のカマドの下から検出され、手際から平面図実測を遡漏してしまっただけは推定線である。P 1・6を除き、掘り方の底面は平坦である。覆土は1層が柱の抜き取り痕、2-5層が掘り方



第208图 第59号掘立柱建物跡・出土遺物



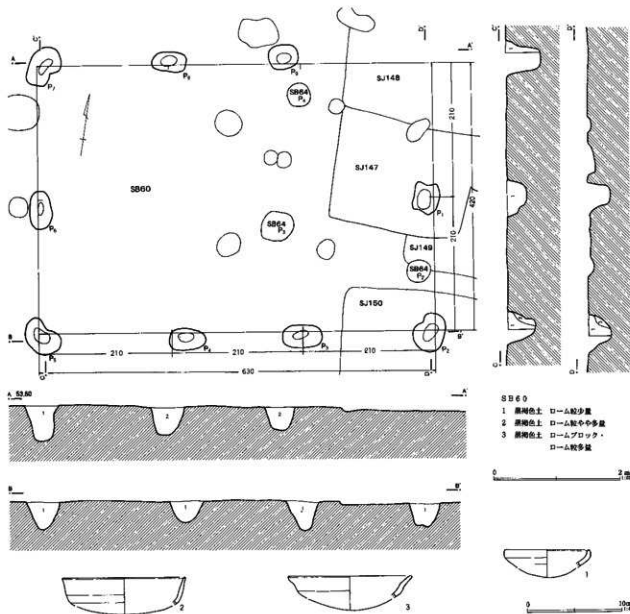
第209図 第59号掘立柱建物跡出土遺物

第113表 第59号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(14.0)	3.2		DEH	3	橙褐	10	P 8
2	土師小型壺	(9.8)	4.6		DEH	2	褐	15	P 1

ある。柱は全て抜き取られている。

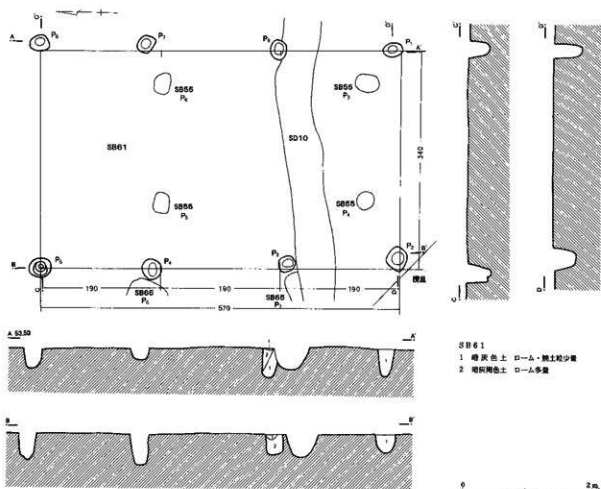
遺物は図示した土師器環・小型壺と、図示不能な土師器環・甕、須恵器環・甕、羽口が出土している。7世紀でも初頭のものと同後半のものが出土している



第210図 第60号掘立柱建物跡・出土遺物

第114表 第60号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(9.0)	1.9		DEH	3	褐	5	P 8
2	土師環	(13.0)	2.9		DH	1	暗褐	10	P 8
3	土師皿	(13.0)	2.3		ADE	3	橙褐	10	P 4



第211図 第61号掘立柱建物跡

が、重複関係から前者は混入である可能性が高い。遺物が伴うものとして、7世紀の遺構としておきたい。

第60号掘立柱建物跡 (第210図)

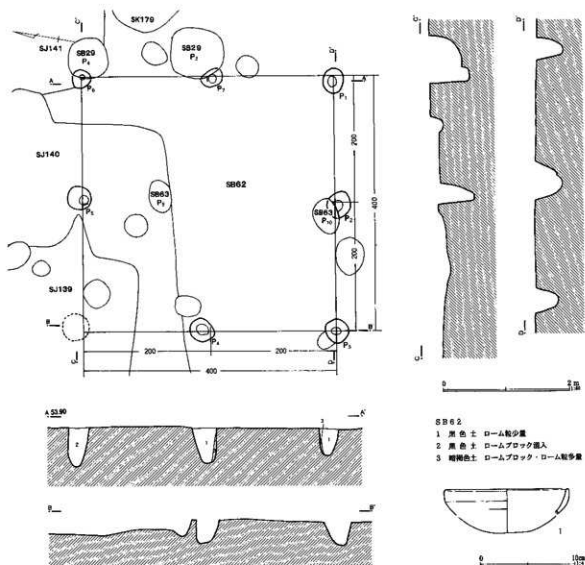
調査区の北側、C-22・23グリッドに位置する。第147-150号住居跡、第64号掘立柱建物跡と重複関係にある。第147・148号住居跡より古く、第149・150号住居跡より新しい。第64号建物跡とは柱穴同士の直接の重複がなく、新旧は不明である。付近には第53・57-59・62・63号掘立柱建物跡がある。148号住居跡に壊され、北東の隅柱の掘り方は検出できなかった。

3×2間の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行6.30m、梁行4.20m、面積26.46㎡である。主軸方向は、N-81°-Eで、やや北に偏し

ている。柱間間隔は桁行2.10m、梁行2.10mで、等間隔である。

柱穴の形態は基本的には楕円形だが、P2・5・7はL字形である。規模は長軸46-66cm、短軸33-46cmである。L字形のもの特に大型というわけではない。深さは30-54cmである。掘り方の底面はいずれも平坦である。覆土は1・2層が柱の抜き取り後の自然堆積層、3層が掘り方である。柱は全て抜き取られている。

遺物は土師器環と実測不能な土師器甕・壺、須恵器甕が出土している。いずれも小破片、時期は7世紀である。重複関係からは混入である可能性が高い。遺構の時期は、重複関係から8・9世紀としておきたい。



第212図 第62号掘立柱建物跡・出土遺物

第115表 第62号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(13.0)	2.7		ADE	3	茶褐色	5	P5

第61号掘立柱建物跡 (第211図)

調査区の北東側、B・C-31グリッドに位置する。第55・65号掘立柱建物跡、第10号溝跡と重複関係にある。第10号溝跡との新旧は、溝跡を先に掘削してしまったため、確認できなかった。建物跡とは、柱穴同士の直接の重複がなく、新旧は不明である。付近にはやや離れた位置に、第27・28・68号掘立柱建物跡がある。

3×1間の南北棟の側柱建物跡である。平面形は

長方形である。規模は桁行5.70m、梁行3.40m、面積19.38㎡である。主軸方向は、N-2°-Wで、ほぼ南北である。柱間隔は桁行1.90mで等間隔、梁行3.40mで等間隔である。屋根構造は切妻ではなく、片屋根等の構造になると考えられる。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸30~36cm、短軸22~33cmで、ほぼ同規模である。深さは18~48cmである。掘り方の底面は、P5を除き平坦である。覆土は1層が柱の抜き取り後の自然堆積層、2層が

掘り方の崩落上である。柱は全て抜き取られている。

遺物は、図示不能な土師器甕、須恵器環が出土している。時期は不明である。

第62号掘立柱建物跡 (第212図)

調査区の北側、B-22グリッドに位置する。第139-141号住居跡、第29・63号掘立柱建物跡と重複関係にある。第140-141号住居跡より新しく、第139号住居跡、第29・63号掘立柱建物跡より古い。付近には、第19・29・30・54・58-60・64号掘立柱建物跡がある。北西コーナーの柱穴は、第139号住居跡の掘り込みの中にあり、検出できなかった。

2×2間の側柱建物跡である。平面形は正方形である。規模は桁行4.00m、梁行4.00m、面積16.00㎡である。主軸方向は、N-1°Eで、ほぼ南北である。柱間間隔は桁行2.00m、梁行2.00mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。規模は長軸32-41cm、短軸26-38cmで、ほぼ同規模である。深さは34-65cmで、北側のものの方が深めである。掘り方の底面は、いずれも平坦である。覆土は1・2層が柱の抜き取り後の自然堆積層、3層が掘り方である。柱は全て抜き取られている。

遺物は、幸うじて実測できるほどの7世紀の土師器環の小破片、実測不能な土師器甕、須恵器環が出土している。重複関係からは、混入の可能性が高い。時期は、第139-140号住居跡の間の8-9世紀とするに留めたい。

第63号掘立柱建物跡 (第213図)

調査区の北側、A・B-22グリッドに位置する。第139-140-146号住居跡、第62号掘立柱建物跡、第174-175号土壇と重複関係にある。第140-146号住居跡、第62号掘立柱建物跡より新しく、第139号住居跡、第174-175号土壇より古い。付近には、第19-29・30・54・58-60・64号掘立柱建物跡がある。

3×2間の南北等の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行7.80m、梁行4.00m、面積31.20㎡である。主軸方向は、N-1°Eで、ほぼ

南北である。柱間間隔は桁行2.60mで等間隔、梁行2.00mで等間隔である。

柱穴の形態は円形もしくは楕円形である。規模は長軸36-60cm、短軸28-45cmで、P4・5・10がやや大型である。深さは29-79cmで、東側のものの方が深めである。掘り方の底面は、P6を除き平坦である。覆土は他の遺構の掘削後に遺構として認識したために確認できなかった。

遺物は、幸うじて実測できるほどの8世紀後半の土師器甕の小破片、実測不能な土師器環・甕、須恵器環・蓋が出土している。時期は、第139-140号住居跡の間の8-9世紀で、遺物が伴うものであるならば8世紀前半である可能性が高い。

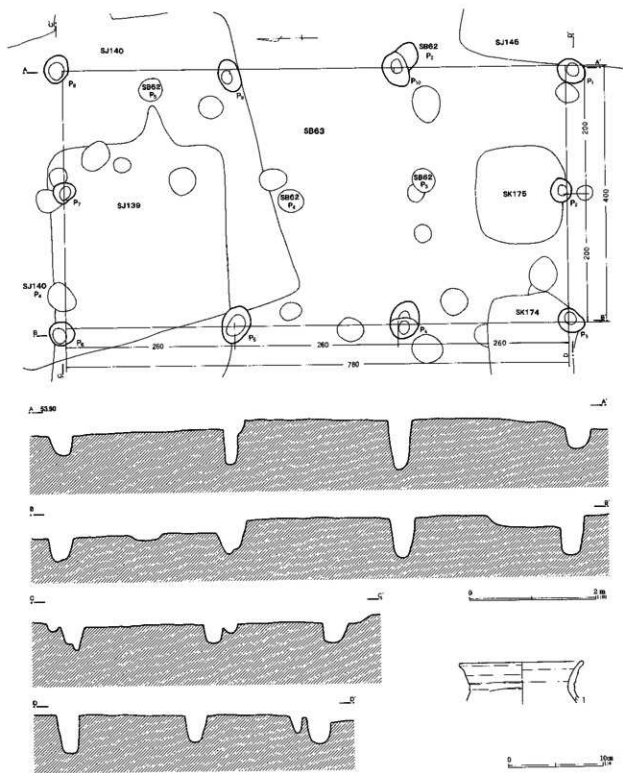
第64号掘立柱建物跡 (第214図)

調査区の北側、C-22・23グリッドに位置する。第145-147-149号住居跡、第60号掘立柱建物跡と重複関係にある。第149号住居跡新しく、第145-147-148号住居跡より古い。第60号建物跡とは柱穴同士の直接の重複がなく、新旧は不明である。付近には、第53・57-59・62・63号掘立柱建物跡がある。

3×2間の南北棟の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行6.00m、梁行4.00m、面積24.00㎡である。主軸方向は、N-2°Eで、ほぼ南北である。柱間間隔は桁行2.00m、梁行2.00mで等間隔である。

柱穴の形態は円形もしくは楕円形である。規模は長軸39-56cm、短軸34-50cmで、P3・6がやや大型である。深さは57-82cmで、P8・9が深いほかは60-70cmほどである。掘り方の底面はいずれも平坦である。覆土は1層が柱底、2・3・5層が掘り方、4層が柱抜き取り後の自然堆積層である。P1・3とも柱底が認められるが、上部に4層が流れ込むことから、下部のみ抜かず放置したと考えられる。

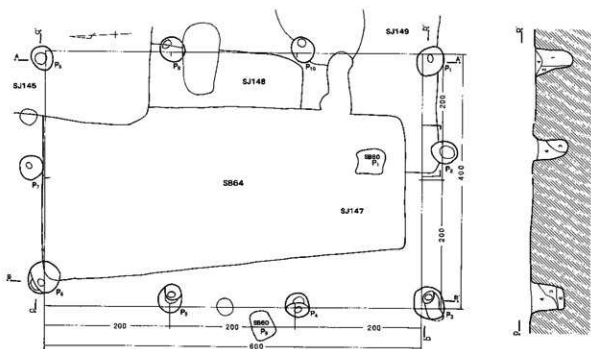
遺物は、幸うじて実測できるほどの7世紀中葉の土師器環、9世紀の須恵器皿の小破片、実測不能な土師器環・甕・台付甕、須恵器環が出土しているが、本建物跡に伴うかは不明である。土器以外にも凝灰



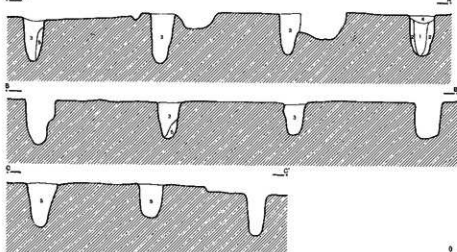
第213圖 第63号掘立柱建物跡・出土遺物

第116表 第63号掘立柱建物跡出土遺物觀察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	上層小型甕	(13.0)	4.3		ADE	1	褐	10	P 9

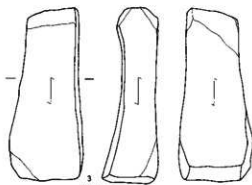


A SB64



SB64

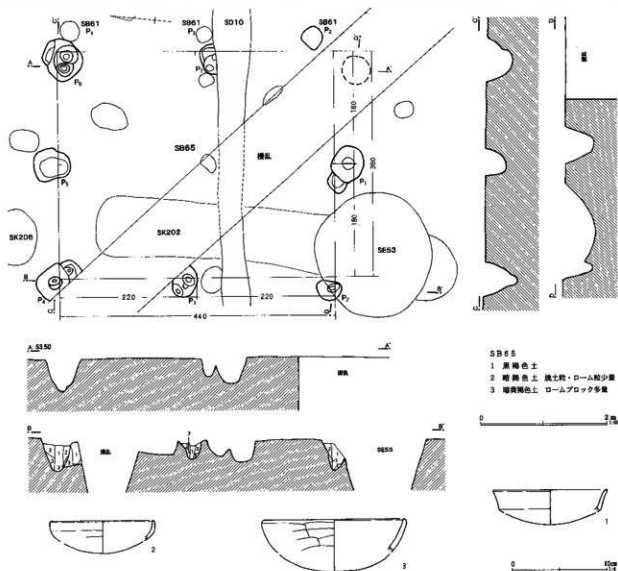
- 1 黒色土 ゴロゴロ、しまりなし
- 2 黒色土 ローム粒少量
- 3 黒色土 ローム粒・ローム
ブロックやや多量
- 4 暗褐色土 粘土粒・ローム粒少量
- 5 黄褐色土 黒色土との混土



第214図 第64号掘立柱建物跡・出土遺物

第117表 第64号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	3.2		ADE	2	褐	10	P 8
2	須恵皿		1.0	(6.0)	ABEI	2	赤灰	10	P 3 未野産 A
3	砥石	長13.8cm	幅5.9cm	厚さ2.1cm					P 7



第215図 第65号掘立柱建物跡・出土遺物

第118表 第65号掘立柱建物跡出土遺物観察表

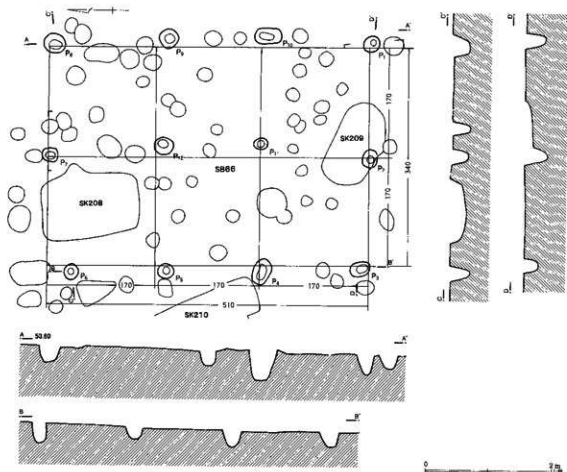
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(12.0)	2.3		ADE	2	赤褐	5	P 4
2	土師環	(11.0)	2.2		ADE	3	橙褐	5	P 1
3	土師環	(15.0)	3.5		ADE	2	橙褐	10	P 4

岩製の砥石が出土している。4面ともよく使い込まれている。時期は、重複関係から8・9世紀としておきたい。

第65号掘立柱建物跡 (第215図)

調査区の北東側、C-31グリッドに位置する。第

61号掘立柱建物跡、第10号溝跡、第53号井戸跡、第202号土壇と重複関係にある。建物跡とは、柱穴同士の直接の重複がなく、新旧は不明である。第10号溝跡との新旧は、溝跡を先に掘り下げてしまったため、調査では確認できなかったが、出土遺物等からは本



第216図 第66号掘立柱建物跡

建物跡が新しい可能性が高い。井戸跡・土壌は本建物跡より新しい。遺構の北西-南東方向の対角線上に当たる部分は、攪乱により大きく壊されている。付近には、第27・28・55・68号掘立柱建物跡がある。

2×2間の側柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行4.40m、梁行3.60m、面積15.84㎡である。主軸方向は、N-6°-Wで、ほぼ南北である。柱間隔は桁行2.20mで等間隔、梁行2.00mで等間隔である。

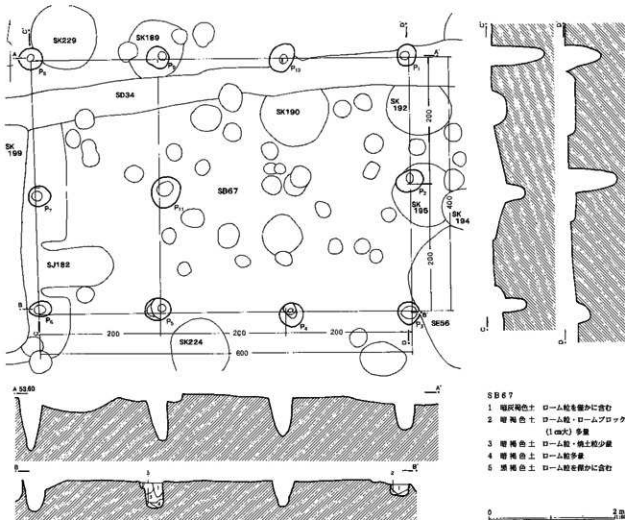
柱穴の形態は円形である。P2以外は複数の掘り込みが認められ、複合した形態になっている。規模は長軸37~76cm、短軸36~66cmで、数値が大きいものは径40cm前後の複数の掘り込みが見られるものである。深さは30~54cmで、P3・5・7が浅めである。掘り方の底面は、P4・6を除きいずれも平坦である。覆土は1層が柱底、2・3層が掘り方で

ある。柱の処理方法は、覆土を確認したものが限られるため確実ではないが、P3・4のように柱底が認められるものは抜き取られず、P2のように1層に崩れが見られるものは抜き取った可能性がある。平面形や覆土の状況から、建て替えが行われたと考えられる。

遺物は、辛うじて実測できるほどの7世紀・8世紀前半の土師器杯、実測不能な土師器杯・甕が出土している。時期は、不明だが、遺物が伴うものであるならば8世紀以降とできようか。

第66号掘立柱建物跡 (第216図)

調査区の北側、B-28グリッドに位置する。第208・209号土壌と重複関係にあり、本建物跡の方が古い。付近には掘立柱建物跡がなく、最も至近な第67・68号も20~30mほど離れている。また、ピットが多数検出されている。



第217図 第67号掘立柱建物跡

3×2間の南北棟の総柱建物跡である。平面形は長方形である。規模は桁行5.10m、梁行3.40m、面積17.34㎡である。主軸方向は、N-Sで南北である。柱間隔は桁行1.70m、梁行1.70mで等間隔である。P 5・6・9・10・12は軸線からやや外れている。

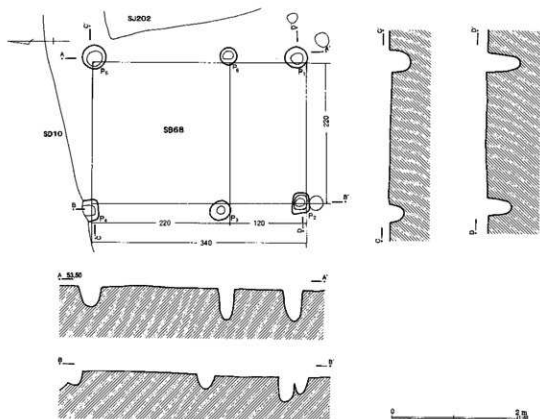
柱の形態は円形もしくは楕円形である。規模は長軸23～45cm、短軸22～33cmで、P 4・8・10はやや大型である。深さは20～58cmで幅がある。P 9・10・12は深く、それ以外は20～30cmの深さである。掘り方の底面は、いずれも平坦である。覆土の状況は確認できなかった。

遺物は、実測不能な土師器甕、須恵器蓋の小破片が出土している。時期は不明である。

第67号掘立柱建物跡 (第217図)

調査区の北側、B-26グリッドに位置する。第182号住居跡、第56号井戸跡、第34号溝跡、第189・190・192・194・195・224・229号土壌と重複関係にある。いずれとの新旧も確認できず、不明である。付近には掘立柱建物跡がなく、最も至近な第31・66号も20～30mほど離れている。また、ビットが多数検出されている。

2×2間の西庇の側柱建物跡である。身舎の平面形は正方形である。規模は桁行4.00m、梁行4.00m、面積16.00㎡である。主軸方向は、N-89°-Eで、ほぼ東西である。柱間隔は桁行2.00m、梁行2.00mで、等間隔である。庇との柱間隔は、2.00mである。



第218図 第68号掘立柱建物跡

柱穴の形態は円形もしくは楕円形である。規模は長軸34～50cm、短軸23～37cmである。深さは20～88cmと幅がある。遺構の東側のものが深めである。規模の大小との関係は不明瞭である。掘り方の底面はいずれも平坦である。覆土は1層が柱の抜き取り痕、2～5層は掘り方である。

遺物は、実測不能な土師器環・甕の小破片が出土している。時期は不明である。

第68号掘立柱建物跡 (第218図)

調査区の北側、C-29・30グリッドに位置する。第10号溝跡と重複関係にあるが、新田は不明である。付近には掘立柱建物跡がなく、最も至近な第65・66号も20～30mほど離れている。

1×1間の南庇の建物跡である。身舎の平面形は正方形である。規模は桁行2.20m、梁行2.20m、面積4.84㎡である。主軸方向は、N-1°-Eで、ほぼ南北である。柱間間隔は桁行2.20m、梁行2.20mで、等間隔である。庇との柱間間隔は1.20mである。

柱穴の形態は円形もしくは方形である。規模は長軸28～40cm、短軸23～38cmである。深さは24～50cmと幅がある。P 1・6は深めである。掘り方の底面はいずれも平坦である。覆土の状況は確認できなかった。

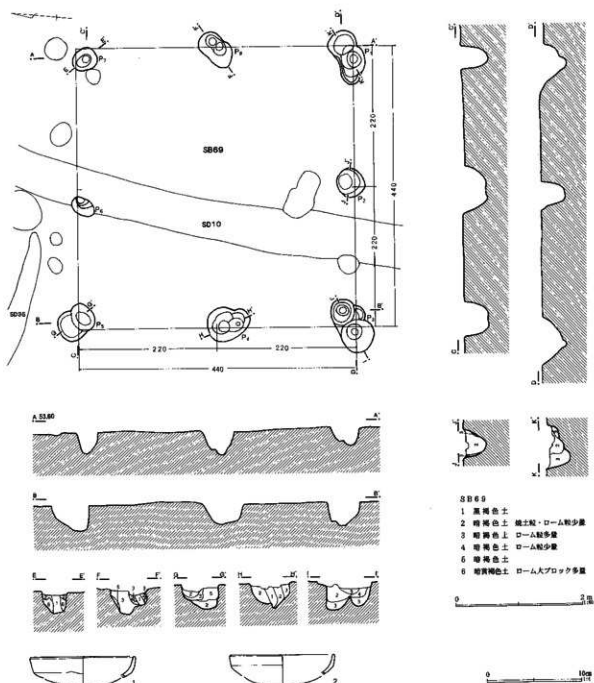
遺物は出土せず、時期は不明である。

第69号掘立柱建物跡 (第219図)

調査区の北側、D-25グリッドに位置する。第10号溝跡と重複関係にあるが、新田は確認できなかった。付近には、第49・51・52号掘立柱建物跡がある。また、東側4mに第6号横列跡が平行している。

2×2間の側柱建物跡で、平面形は正方形である。規模は桁行4.40m、梁行4.40m、面積19.36㎡である。主軸方向は、N-4°-Wで、ほぼ南北である。柱間間隔は桁行2.20m、梁行2.20mで等間隔である。

柱穴の形態は円形である。P 2・6・7以外は複数の掘り込みが認められ、複合した形態になっている。柱穴の形態は円形もしくは楕円形である。規模



第219図 第69号掘立柱建物跡・出土遺物

第119表 第69号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(11.0)	2.2		ADE	2	褐	10	P 8
2	土師環	(11.0)	2.3		ADE	2	褐	5	P 1

は長軸41~91cm、短軸36~52cmで、数値が大きいものは径40~50cmの複数の掘り込みが見られるものである。深さは35~45cmである。P 3・4以外は、掘り方の底面が平坦である。覆土は、1層が柱底、

2~6層が掘り方である。平面形、覆土の状況から、建て替えが行われたと考えられる。

遺物は、土師器環、実測不能な土師器環・甕の小破片が出土している。時期は不明である。

(3) 溝跡

大寄遺跡II区で検出された溝跡は全部で34条である。そのうち第2～4号溝跡は「大寄遺跡I」で報告済みである。今回報告する範囲には31条の溝跡が検出されている。溝跡の流水方向は、調査範囲の高低差から、北→南、東→西である。溝跡は、規模が大きく、数条に分岐しながら、調査区を横断する水路と考えられる溝跡（第10・13号溝跡）、東西南北に沿って直線的にのびる区画溝、中世以降の道路状遺構と思われる溝跡（第1号溝跡）、用途不明な溝跡などに分けられる。特に注目されるものとしては、第11号掘立柱建物跡の区画溝である第18・30号溝跡が挙げられる。

第1号溝跡（第220図）

F-19-24、H-24、G-16-18、F-17-19グリッドに位置する。第227・228・230・232号住居跡、第40号掘立柱建物跡、第10号溝跡と重複関係があり、本溝跡が最も新しい。

溝跡の西部は「大寄遺跡I」で報告した。本書で報告する部分は、東西方向に掘られているが、F-21グリッド付近で弧を描いて、東北東へ向きを変えている。溝跡は2条の溝が途切れながらも平行している。北側は、長さ6.00m、幅0.40～0.90m、深さ0.22mである。H-24グリッド付近で二股に分岐している。南側は、長さ26.0m、幅0.35～1.70m、深さ0.11mである。弧を描き始めるあたりで立ち上がる。

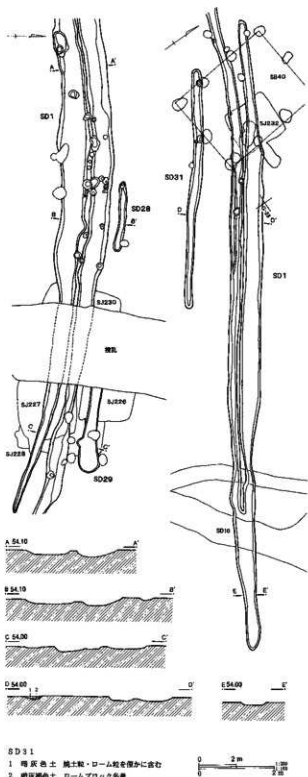
溝跡底面に部分的だが硬化面が認められ、道路としての使用が考えられることは、前回報告のとおりである。周辺から検出された第28・29・31号溝跡は、本溝跡に平行しているので、伴う可能性がある。

遺物は出土しなかった。

第5号溝跡（第221図）

A-28グリッドに位置する。第91～93・255・256号土壇と重複関係にあるが、新旧は不明である。

溝跡は東西方向に掘られているが、A-28グリッド付近では確認できなかった。又、西端は土壇と重



第220図 溝跡(I)

複している。長さは途切れている部分を含めて、7.94m、幅0.60m、深さ0.14mである。

遺物は出土しなかった。

第6号溝跡 (第221図)

C・D-25グリッドに位置する。西側に、第188号住居跡がある。

南北方向に掘られているが、途中で東へ直角に曲がっている。長さ南北6.50m・東西2.40m、幅0.46m、深さ0.06mで、非常に浅い。周辺の遺構との関係は見出せず、その性格は不明である。

遺物は少量で土師器甕・環、須恵器の破片が出土したが図示できなかった。時期は不明である。

第7号溝跡 (第221図)

I-16-19グリッドに位置する。

真北と直交する東西方向に掘られている。長さ22.80m、幅0.60m、深さ0.11mである。北側に、軸方向がN-Sになる掘立柱建物跡群が分布しており、本溝跡はこれらに関連する区画溝と考えられる。

遺物は少量で、土師器の小破片が出土したのみで、器種や時期は不明である。溝跡の時期は掘立柱建物跡群と同時期と考えられ、8世紀頃である。

第8号溝跡 (第221図)

K・L-13-14グリッドに位置する。第9・10号溝跡と重複関係にあり、本溝跡がもっとも古い。

溝跡は南北方向に掘り込まれていて、南側は、調査区域外へ延びている。長さは13.80m、幅0.70m、深さ0.23mである。

遺物は、調査時に第8・9号溝跡出土のものを図示した(第233図1~8)が、どちらの溝跡に属するかを完全に分離することはできなかった。ここで、これらの遺物について見ると、第9号溝跡から出土する土師器環は北武蔵型が主体的である。1はそれ以前の環なので、第8号溝跡に属する。この環の時期を採るならば、時期は6世紀末である。

第9号溝跡 (第222図)

J-M-14、M・N-15、N・O-16、O-Q-17、Q-R-18グリッドに位置する。第254・256号住居跡、第8・10・12-14号溝跡と重複関係にあり、第254号住居跡より新しく、第256号住居跡・第13号溝跡よりも古い。他の遺構との関係は不明である。

調査区西側を中央部から南部にかけて掘られた長い溝跡である。南北方向に掘られているが、途中で、北西-南東方向に向きを変えている。北側は水路によって壊され、O-16グリッドで二股に分かれている。交差する第10号溝跡より北側は幅広く、南側は狭くなっている。長さ95.10m、幅0.40-2.78m、深さ0.14-0.30mである。J-14グリッドにピット状の掘り込みが認められる。この掘り込みは深さ1.00mあり、この溝跡に水を流すための溜井のような機能を果たしていたと考え、溝の一部とした。

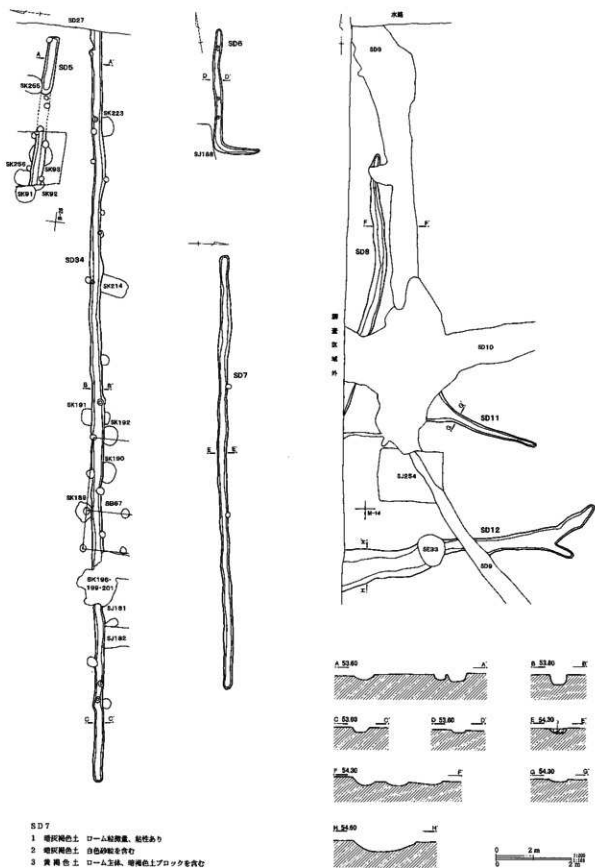
遺物は土師器環・壺(第233図1~15)が出土している。1~8は第8号溝跡と本溝跡から出土したもので、9~15は本溝跡から出土したものである。前述のように、2~8は本溝跡に伴う遺物と考えられる。模倣環もあるが、北武蔵型環が主体的である。15は口縁部の一部が内側に曲がった状態のものである。意図的に曲げたというよりも、歪んだものをそのまま焼成し、使用していたと考える。時期は7世紀後半である。

第10号溝跡 (第223-226図)

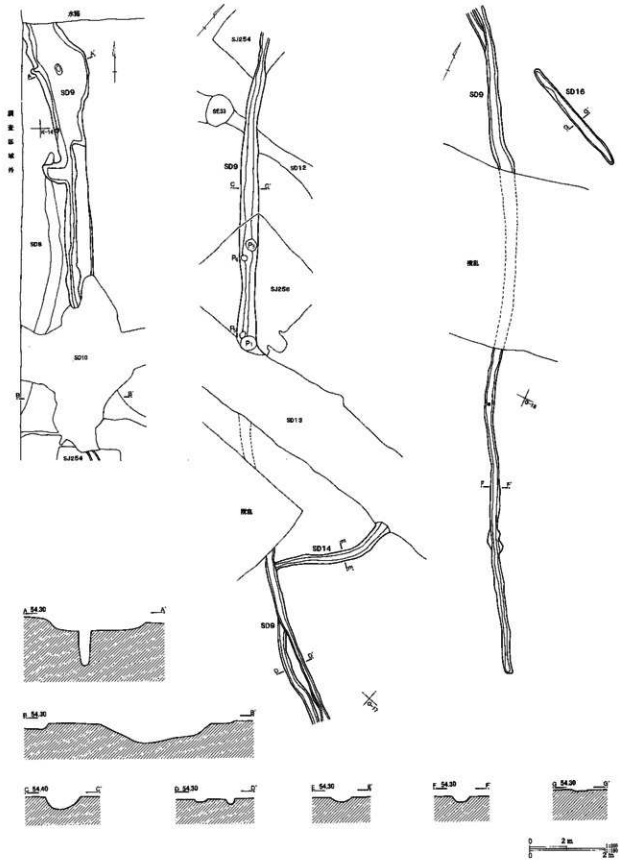
調査区中央部を北東から南西に横断している、最も規模が大きい溝跡である。溝跡は、主流と2本の支流で構成されている。そのため、位置するグリッドや重複遺構などが多く煩雑になる。そこで主流をA、支流をB-Dとし、別々に報告することにした。

第10A号溝跡は、D-29-33、E-27-29、F-25-27、G-24-25、H-22-24、I-21-23、J-19-21、K-16-19、L-14-15グリッドに位置する。第11・15号掘立柱建物跡、第1・8・9・11号溝跡、第106号土壇と重複関係にあり、第11-15号掘立柱建物跡・第1号溝跡・第106号土壇より古い。他の遺構との関係は不明である。

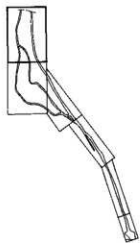
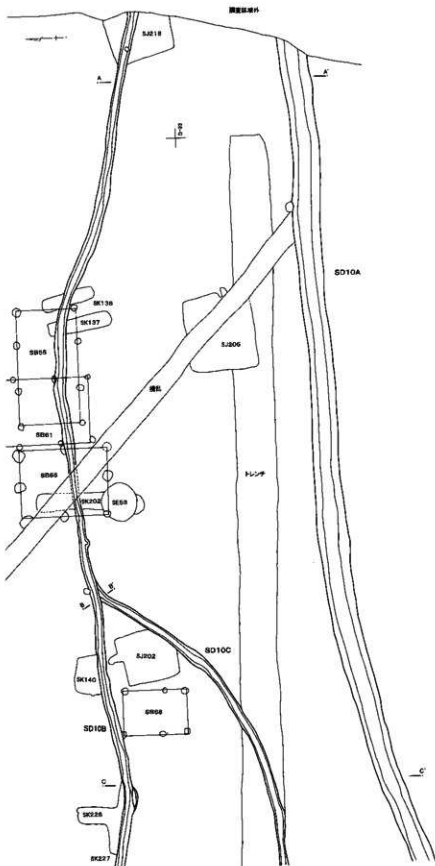
南西-北東方向に掘り込まれていて、両端は調査区域外へ延びている。長さ214.80m、幅1.40-2.10m、深さ0.42-0.54mである。西端は5.40×9.20mの不整形に掘り込まれている。この部分に、第8・



第221図 溝跡(2)

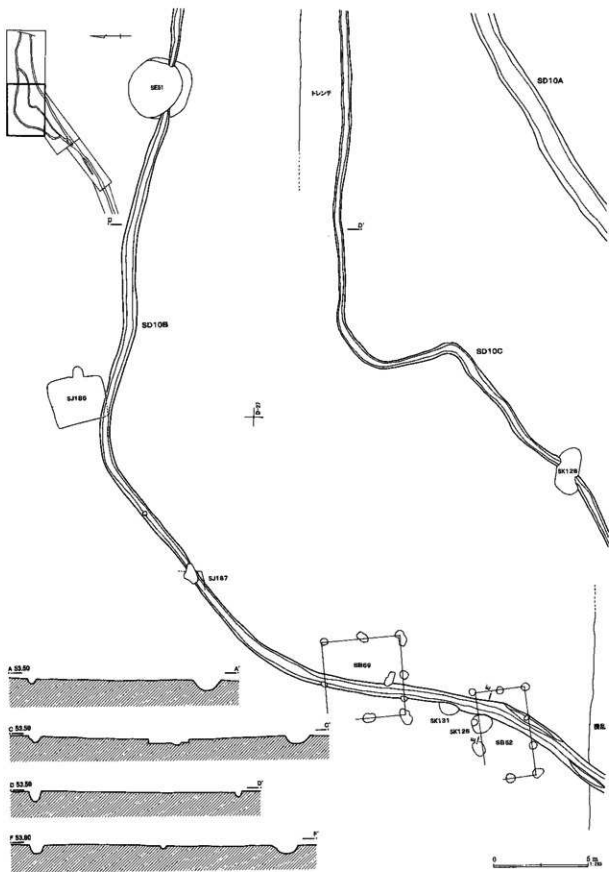


第222图 沟迹(3)

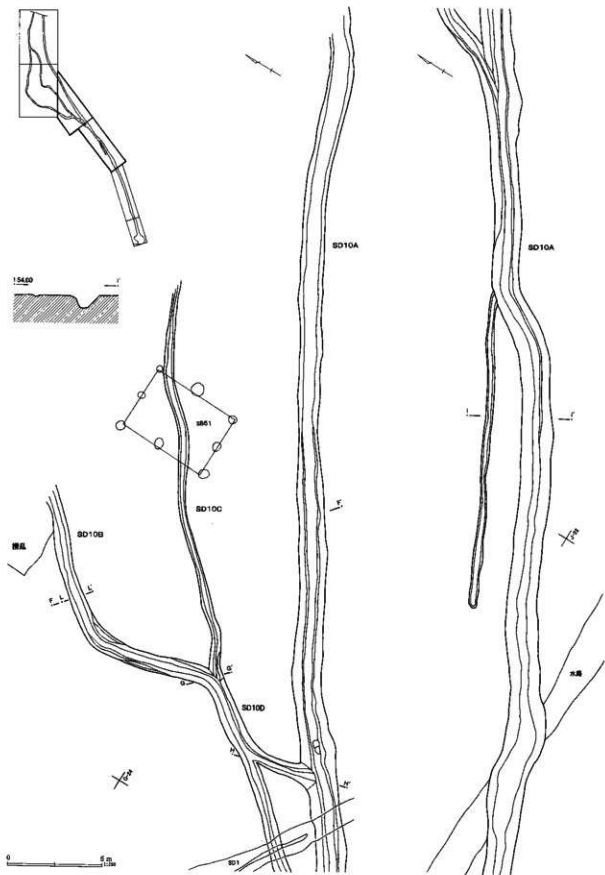


- SD16A
- 1 暗褐色土 砂礫 (1~5mm) 多量、ローム粒を含む
 - 2 青灰色土 ローム粒多量、砂を含む
 - 3 暗灰色砂 砂礫、ローム粒を含む
 - 4 灰白色土 シルト質、ローム粒多量
 - 5 灰褐色土 砂礫 (1~5mm)、ローム粒・ロームブロックを含む
 - 6 灰褐色土 ローム粒・砂礫 (1~5mm) 多量
 - 7 暗褐色土 ローム粒・シルト多量
 - 8 暗褐色砂 砂礫主体、ロームを散かに含む
 - 9 黄褐色土 ロームブロック多量、腐な状態
 - 10 黒褐色土 ロームブロック多量
 - 11 黒色土 ロームブロック少量、粘性強
 - 12 暗褐色土 ローム粒・砂礫少量
 - 13 深褐色土 砂質
- SD15B・C
- 1 暗灰色土 ローム小ブロック少量、炭化物・粘土粘着層
 - 2 暗褐色土 ローム小ブロックを散の子状に含む、ロームブロック多量
 - 3 黒色土 粘土粒を散かに含む、しまりあり
 - 4 灰色土 ローム粒を散かに含む、細粒の砂質
 - 5 暗灰色土 黄土質・炭化物多量
 - 6 暗灰色土 黄灰色土ブロック多量
 - 7 暗灰色土 ローム小ブロックを散の子状に含む
 - 8 暗灰色土 ローム小ブロック多量
 - 9 灰白色土 ローム粒・砂多量
 - 10 灰褐色土 ローム粒を散かに含む、細粒の砂質
 - 11 黒褐色土 砂質状態により構成
 - 12 暗灰色土 砂質状態により構成
 - 13 灰白色土 ローム粒を含む
 - 14 暗褐色土 ローム粒・細砂粒を含む
 - 15 暗灰色土 ローム粒・ロームブロック・砂多量
- SD15D
- 1 黄灰色土 ローム粒多量
 - 2 灰褐色土 ローム粒・砂礫 (1~3mm) を含む
 - 3 灰白色土 ロームブロック (1~5mm) 主体、シルトを含む
 - 4 灰褐色土 砂礫、ローム粒・ロームブロック多量
 - 5 黄灰色土 ローム粒・砂礫 (1~2mm) を含む
 - 6 暗褐色土 黒褐色土ブロック多量、シルトを含む
 - 7 暗褐色土 シルト質、ローム粒多量
 - 8 灰白色土 砂礫 (1~2mm) 主体、ローム粒を含む
 - 9 灰褐色土 砂礫 (1~5mm) 多量
 - 10 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量

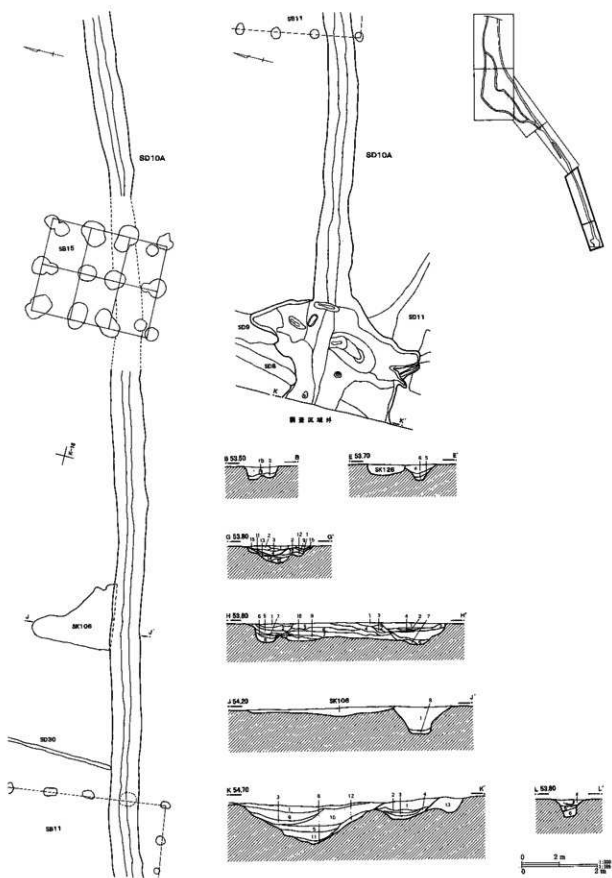
第223図 溝跡(4)



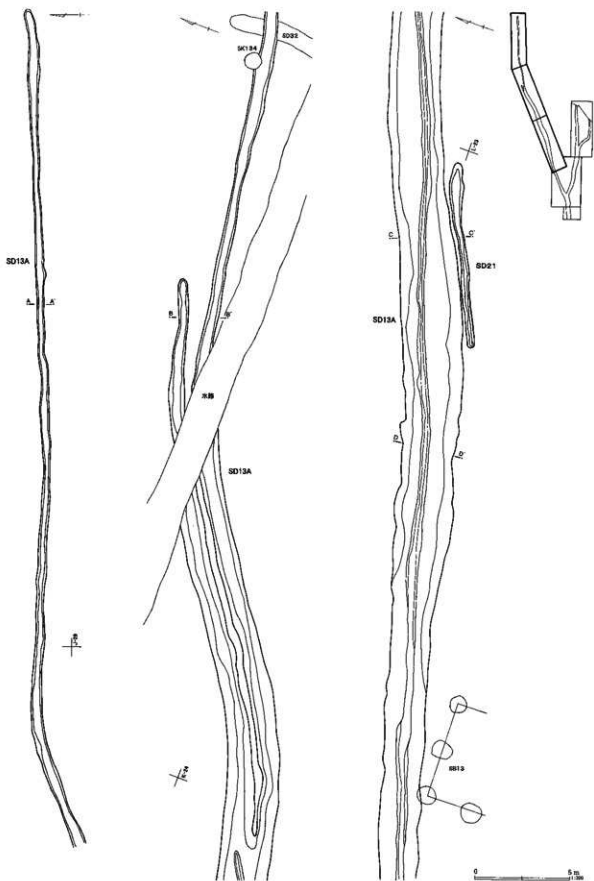
第224図 溝跡(5)



第225図 溝跡(6)



第226図 溝跡(7)



第227网 溝跡(8)

9・11号溝跡も流れ込んでいる。

第10B・D号溝跡は、C-25~33、D・E-25、F・G-24グリッドに位置する。第186・187・218号住居跡、第52・55・61・65・68・69号掘立柱建物跡、第51号井戸跡、第126・131・136・137・140・202・226・227号土壇と重複関係にあり、第218号住居跡より新しく、第186・187号住居跡、第126・136・137号土壇より古い。

G-24グリッドで、第10A号溝跡から分岐して、第10C号溝跡と交差しながら、北北東へ掘られている。その先は、C-26グリッドで東へ屈曲し、C-30グリッドで再び第10C号溝跡と重なり、第33号溝跡へ続く。長さ124.0m、幅0.40~0.90m、深さ0.50mである。

第10C号溝跡は、C-30、D-27~30、E-26・27、F-24~26、G-24、H-23・24、I-21・22グリッドに位置する。第202号住居跡・第51号掘立柱建物跡・第1号溝跡・第128号土壇と重複関係にあり、第1号溝跡より古い。他の遺構との関係は、不明である。

C-30グリッドで第10B号溝跡から分岐し、南西方向へ蛇行しながら掘られている。G-24グリッドで第10B号溝跡と交差しながら、H-23グリッドで第10A号溝跡に合流し、I-22グリッドで再び分岐する。長さは88.50m、幅0.30~0.50m、深さ0.28mである。支流の前後関係は、H-H'では、第10D号溝跡よりも第10C号溝跡の方が新しい。B-B'及びG-G'では、明確な切り合いは認められなかった。

遺物の出土位置からは、各溝跡の時期差はみられなかった。遺物は土師器環・皿・壺・甕、須恵器壺・高台付環・壺・甕、常滑甕、磨石（第234図~第237図）が出土している。土師器北武藏型環が主体的で、その出土量は全体で最も多く、図示したもので50点近くに及ぶ。1~50は土師器環・皿である。1~3は模倣環で7世紀前半のものである。4~46は北武藏型環である。47は内面に放射状暗文が施され

ている。49は丸底の皿、50は平底の皿である。51~57は須恵器である。未野産が多いが、湖西産、南北企産、秋間産も見られる。58~69は土師器壺・甕である。70は常滑の大甕の底部で、混入である。71は磨石である。時期は7世紀中葉から後半である。

第11号溝跡（第221図）

L-14グリッドに位置する。第10号溝跡と重複関係にあり、出土遺物より本溝跡の方が古いと考えられる。

北西-南東方向に掘られている。長さ6.10m、幅0.50~1.64m、深さ0.70mである。幅は北西に行くほど広くなる。

遺物は、土師器環・甕が出土しているが、小破片のため図示できなかった。環は模倣環で、6世紀末のものと思われる。

第12号溝跡（第222図）

L-15、M-13~15グリッドに位置する。第9号溝跡、第33号井戸跡と重複関係にあり、本溝跡が最も古い。

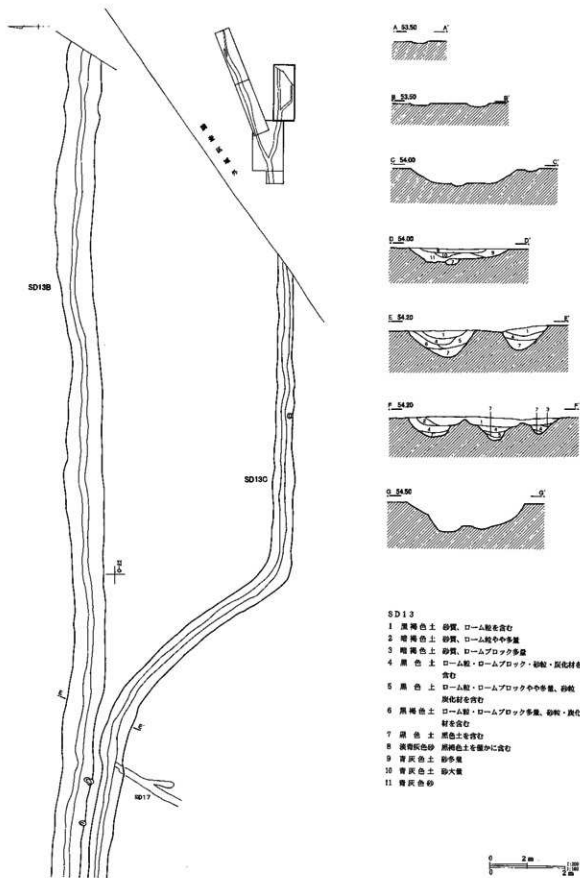
東西方向に掘られている。西側は調査区域外へ延び、東端は二股に立ち上がっている。長さ13.60m、幅0.68~2.10m、深さ0.31mである。

遺物は出土しなかった。

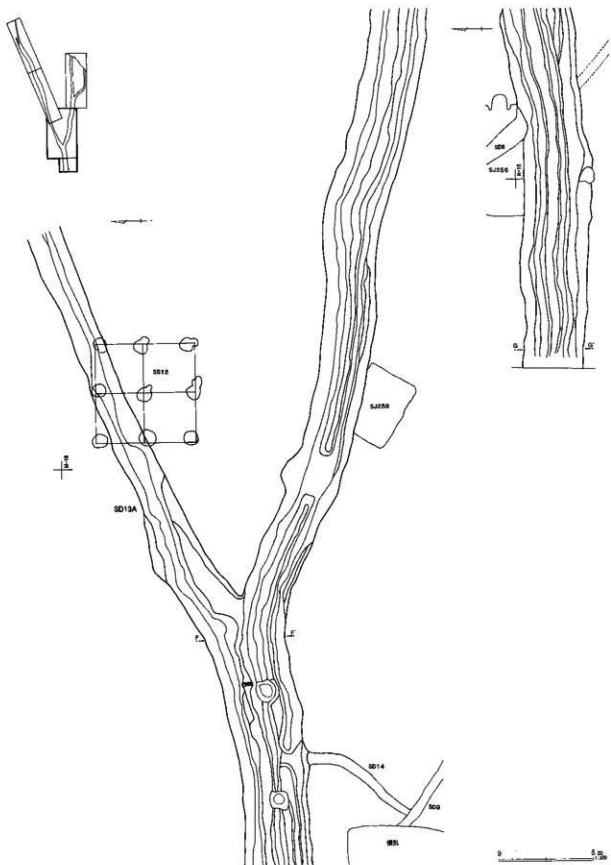
第13号溝跡（第227~229図）

調査区南側を東西方向に横断する溝跡である。第10号溝跡と同様に規模が大きい。調査区南東部で3条に掘られているが、N-17グリッドで1条にまとまっている。北からA・B・Cとして、報告する。第13A号溝跡は、I-28~32、J-24~28、K-22~24、L-18~22、M-15~19、N-14~17グリッドに位置する。第256号住居跡、第12・13号掘立柱建物跡、第9・14・32号溝跡、第134号土壇と重複関係にあり、第256号住居跡、第12・13号掘立柱建物跡、第9・32号溝跡よりも、本溝跡の方が新しい。他の遺構との関係は不明である。

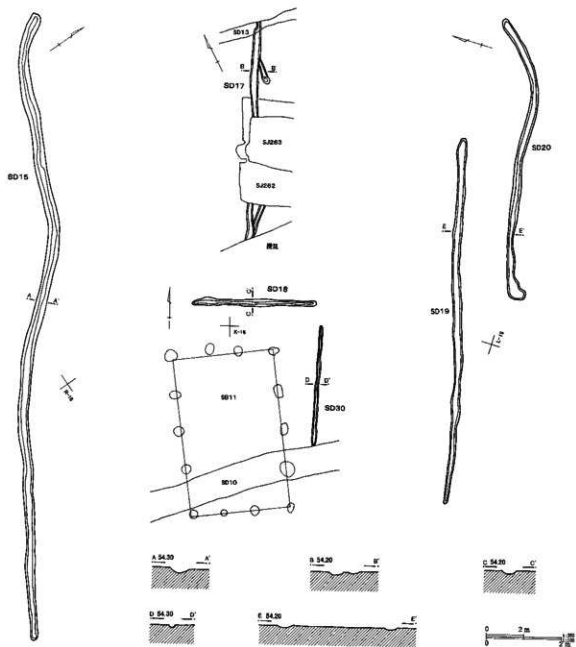
東部は東西方向に掘られており、L-28グリッドで、北東-南西方向に向きを変えて、N-17グリッド



第228図 溝跡(9)



第229図 溝跡(10)



第230図 溝跡①

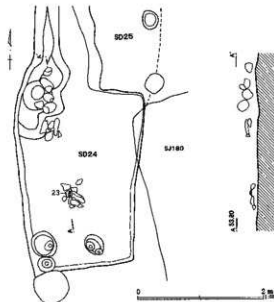
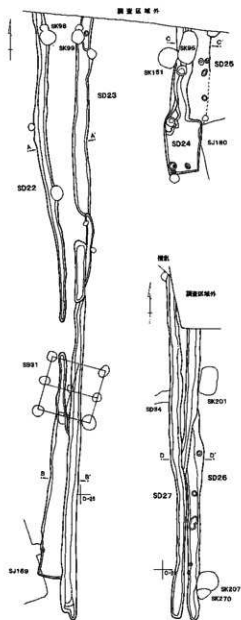
ドで第13B・C号溝跡と合流する。長さは、合流部を含めて161.45m、幅0.30~3.20m、深さ0.40~0.50mである。

第13B号溝跡は、M-15~17、N-14~24グリッドに位置する。第256・259号住居跡、第9・14・17号溝跡と重複関係にあり、第256・259号住居跡、第9・17号溝跡よりも、本溝跡の方が新しい。第14号溝跡との関係は不明である。

東端は調査区域外へ延びている。N-20グリッド

で第13C号溝跡と、N-17グリッドで第13A号溝跡と合流する。長さは、合流部分も含めて98.3m、幅1.49~3.30m、深さ0.59~0.70mである。

第13C号溝跡は、M-15~17、N-14~21、O-20~23グリッドに位置する。第259号住居跡、第9・14・17号溝跡と重複関係にあり、第259号住居跡、第9・17号溝跡よりも、本溝跡の方が新しい。第14号溝跡との関係は不明である。長さ101.00m、幅0.87~3.30m、深さ0.40~0.55mである。



SD 22・23

- 1 奇異色土 ローム粒、焼土粒少量
- 2 奇異色土 ローム粒・ロームブロック (2-3cmA) 多数



第231図 溝跡02

合流部分はN-14、N・M-15-17グリッドに位置する。第256号住居跡、第9・14号溝跡と重複関係にある。長さは、33.3m、幅3.70mである。

遺物は土師器環・甕、須恵器高台付碗・甕、須恵質埴輪、埴輪のミズラと思われる小破片、砥石、土錘などの古代以前のもとの、染付碗、すり鉢、焙烙、など近世のものが出土している。図示した遺物は須恵質埴輪（第233図16）のみである。溝跡の時期は、近世と考えられる。

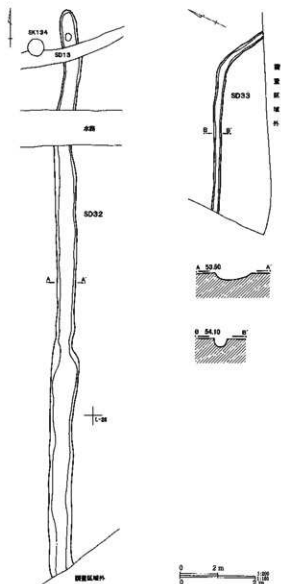
第14号溝跡（第222図）

N-16グリッドに位置する。第9・13号溝跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。長さ6.6m、幅0.40~0.60m、深さ0.12mである。遺物は出土しなかった。

第15号溝跡（第230図）

Q-14・15、R-15-17グリッドに位置する。調査区内で最も南西に位置する溝跡である。

北西-南東方向に掘られている。長さ33.50m、幅0.68m、深さ0.10mである。



第232図 溝跡(13)

遺物は土師器環・甕、須恵器甕の小破片が出土したが、図示できるものはなかった。時期は、土師器が6世紀末のもの、須恵器甕は8世紀代のものであることから、下限を8世紀とする。

第18号溝跡 (第222図)

O-17グリッドに位置する。北西-南東方向に掘られており、長さ6.50m、幅0.45m、深さ0.26mである。遺物は出土しなかった。

第17号溝跡 (第230図)

O-20グリッドに位置する。第262・263号住居跡・第13号溝跡と重複関係にあり、第13号溝跡よりも古

く、住居跡との関係は不明である。

北東-南西方向に掘られているが、北東端は第13号溝跡に、南西端は擾乱に、中央部は住居跡にそれぞれ壊されている。長さ11.40m、幅0.36m、深さ0.40mである。

遺物は土師器甕の破片が出土している。時期は不明である。

第18号溝跡 (第230図)

J-15・16グリッドに位置する。

東西南方向に掘られている。長さ6.63m、幅0.40m、深さ0.50mである。

本溝跡の東南にある、南北方向に走る第30号溝跡と対になっていると思われる。又、第11号掘立柱建物跡が、これらの溝跡の内側に軸を同じくして位置することから、両溝跡はこの掘立柱建物跡に付属する区画溝と考えられる。遺物は出土しなかった。

第19号溝跡 (第230図)

K-17・18グリッドに位置する。第10・13号溝跡の間に位置し、第10号溝跡と平行している。

東北東-西南西方向に掘られている。長さ19.30m、幅0.47m、深さ0.32mである。

遺物は土師器台付甕 (第233図17) が出土している。17は口縁部のくびれがなく鉢状である。胎土には、砂粒が多量に含まれている。時期は7世紀前半である。

第20号溝跡 (第230図)

K-18・19、L-18グリッドに位置する。

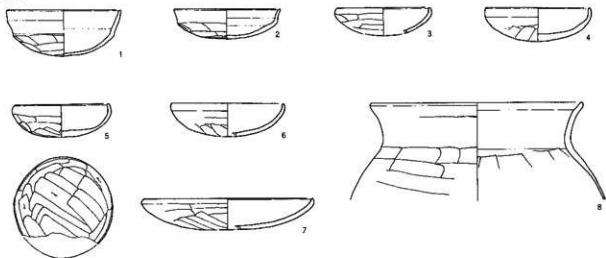
東西南方向に掘られているが、西端は南に、東端は北に曲がっている。長さ15.00m、幅0.30-0.60m、深さ0.28mである。遺物は出土しなかった。

第21号溝跡 (第227図)

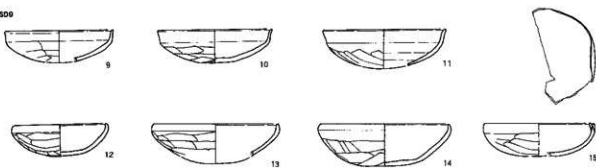
L-22グリッドに位置する。第13号溝跡の南側に平行している。

東北東-西南西方向に掘られている。長さ9.80m、幅0.35-0.80m、深さ0.07mである。規模が小さく、深さも極端に浅い。遺物は出土しなかった。

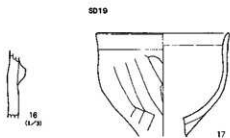
SD8-9



SD9



SD13



SD19

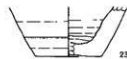
SD22



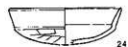
SD23



SD24



SD27



SD33



第233图 满迹出土遗物

第120表 溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備	考
1	土師環	(12.2)	4.9		ADE	2	橙褐	25	SD 8・9	
2	土師環	(11.2)	3.1		ADE	2	橙褐	30	SD 8・9	
3	土師環	(10.0)	2.7		AE	2	橙褐	25	SD 8・9	
4	土師環	(11.0)	3.6		ADE	1	褐	55	SD 8・9	
5	土師環	10.0	3.4		DEH	1	赤褐	80	SD 8・9	
6	土師環	(12.0)	3.5		AE	2	橙褐	20	SD 8・9	
7	土師皿	(18.0)	3.3		ADE	2	橙褐	25	SD 8・9	
8	土師壺	(22.4)	10.4		ADEII	2	橙褐	40	SD 8・9	
9	土師環	(11.4)	3.3		ADE	1	赤褐	20	SD 9	
10	土師環	(12.0)	3.5		ADE	2	明褐	40	SD 9	
11	土師環	(13.0)	3.8		ADEJ	1	赤褐	45	SD 9	
12	土師環	9.8	3.3		DE	2	褐	60	SD 9	G-15G
13	土師環	(13.2)	3.4		ADE	1	褐	20	SD 9	G-15G
14	土師環	13.6	4.4		BDEH	1	赤褐	75	SD 9	G-15G
15	土師環	(11.6)	3.4		DE	1	橙褐	40	SD 9	口縁部にゆがみあり
16	門前埴輪		7.1		BEK	3	灰	20	SD13	須忠貫 末野産
17	土師台付椀	(14.0)	10.9		AREIJ	2	褐	20	SD19	
18	土師環	(12.0)	2.5		ADE	2	褐	10	SD22	
19	ロクロ高台碗	(8.6)	1.6		AE	2	茶褐	5	SD22	高台のみ
20	土師環	10.2	3.5		DEJ	1	赤褐	60	SD23	No.1
21	土師環	(12.6)	3.1		DEH	2	明褐	10	SD23	
22	土師	長3.2cm	幅1.35cm	孔径0.4cm	重さ5.27g	DE	2	暗褐 95%	SD23	
23	常滑壺		5.3	(7.0)	EJ	2	暗灰	30	SD24	No.9 集石部
24	土師環	(11.8)	3.9		DEH	1	橙褐	20	SD27	
25	土師環	(13.0)	3.8		AEJ	2	褐	10	SD33	

第22号溝跡 (第231図)

A-D-24グリッドに位置する。第169号住居跡・第31号掘立柱建物跡・第23号溝跡・第98号土壇と重複関係にあり、住居跡・掘立柱建物跡よりも新しい。第23号溝跡・土壇との関係は不明である。

南北方向に掘られており、第23号溝跡と平行している。北側は、調査区域外に延び、数ヶ所で途切れている。途中で途切れている部分も含めて、長さ29.70m、幅0.28~1.10m、深さ0.19mである。

遺物は土師器環・ロクロ土師器高台付碗の高台部(第233図18・19)が出土している。ロクロ土師器が出土していることから、10~11世紀と考えられる。

第23号溝跡 (第231図)

A-C-24・25、D-24グリッドに位置する。第31号掘立柱建物跡、第22号溝跡、第99号土壇と重複関係にあり、掘立柱建物跡よりも本溝跡のほうが新しい。他の遺構との関係は不明である。

南北方向に掘られていて、第22号溝跡と平行して

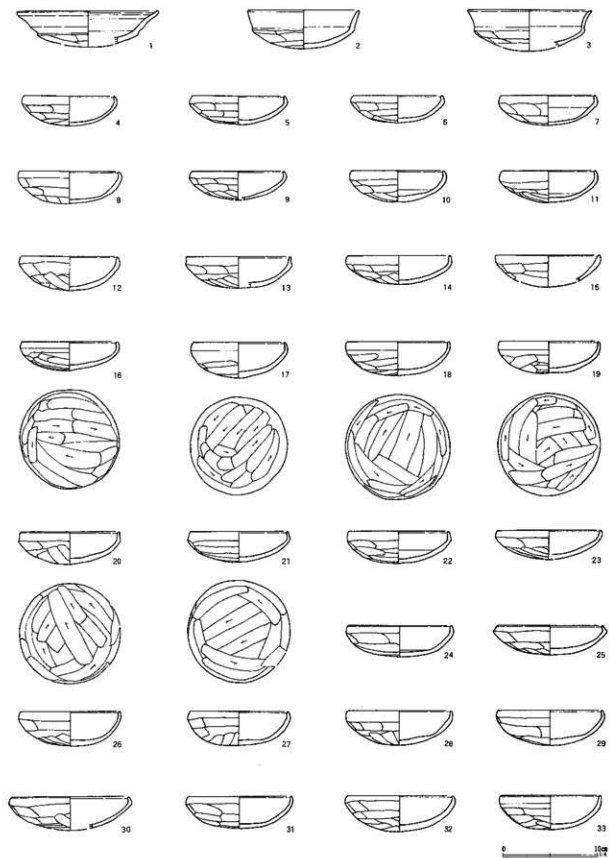
いる。北側は第22号溝跡と同じく、調査区域外へ延びている。途切れ途切れの複数の溝が、連なって構成されている。長さ31.80m、幅0.33~0.88m、深さ0.30mである。

遺物は土師器環、土錘(第233図20~22)が出土している。20・21は7世紀後半のものである。他にロクロ土師器高台付碗が出土しているが、図示できなかった。時期は第22号溝跡と同時期で、10世紀~11世紀と考えられる。

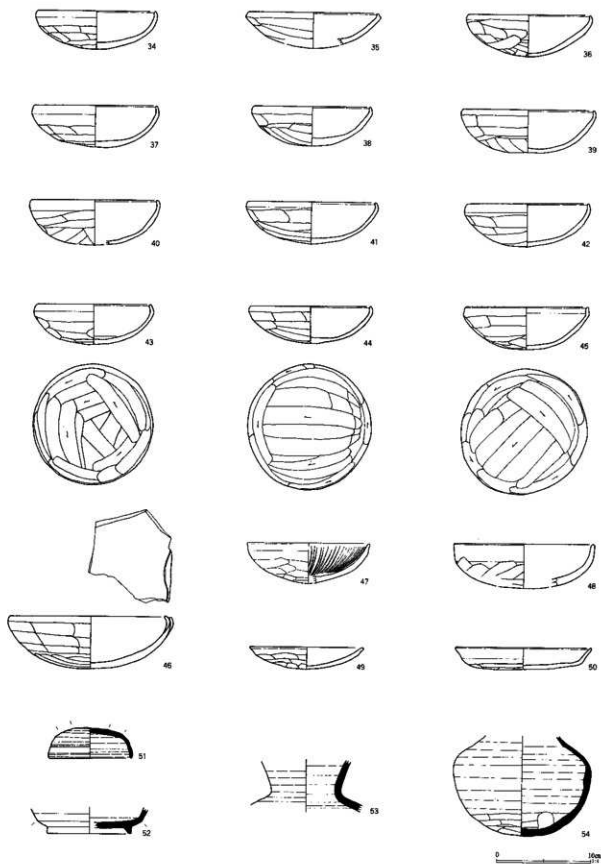
第24号溝跡 (第231図)

A・B-25グリッドに位置する。第180号住居跡、第25号溝跡、第95・151号土壇と重複関係にあり、第180号住居跡よりも本溝跡のほうが新しく、他の遺構との関係は不明である。

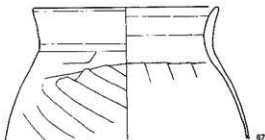
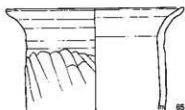
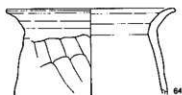
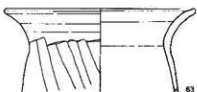
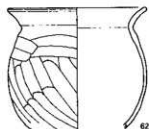
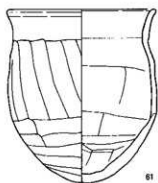
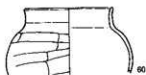
南北方向に掘られており、北側は調査区域外に延びている。長さ7.63m、幅0.84m、深さ0.18mであるが、西端は長さ2.80m、幅1.95mの方形に拡がっている。



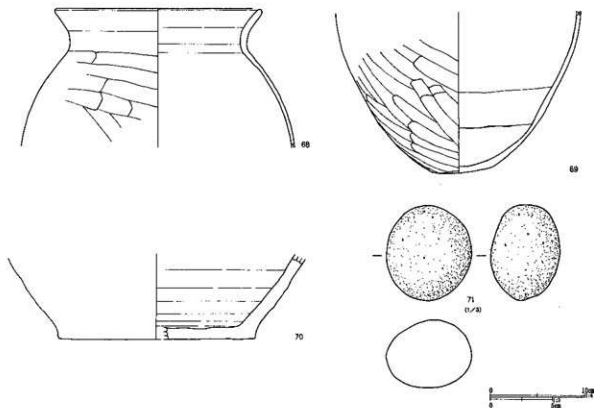
第234图 第10号溝跡出土遺物(1)



第235图 第10号溝跡出土遺物(2)



第236图 第10号清跡出土遺物(3)



第237図 第10号溝跡出土遺物(4)

遺物は方形部から常滑の壺(第233図23)が出土し、所謂、三筋壺の底部と考えられる。13世紀後半のものである。この部分からは、礫が2ヶ所集中して出土しているが、性格は不明である。

第25号溝跡(第231図)

A・B-25グリッドに位置する。第180号住居跡、第24号溝跡、第95号土壇と重複関係にあり、住居跡よりも新しく、その他の遺構との関係は不明である。確認面より、上面にあったが、調査区の壁にその断面が確認されて、その存在が認識できた。溝跡の幅は0.70mと計測できたが、その他は不明である。

遺物は出土しなかった。

第26号溝跡(第231図)

A-C-29グリッドに位置する。第27号溝跡、第207・270号土壇と重複関係にあるが、新旧は不明である。

南北方向に掘られており、北側は第27号溝跡に壊されている。長さ9.50m、幅0.60-0.89m、深さ0.03

mである。遺物は出土しなかった。

第27号溝跡(第231図)

A-C-29グリッドに位置する。第26・34号溝跡と重複関係にある。新旧は不明である。

南北方向に掘られている。南から8.15m付近で二股に分かれて、北側は調査区域外に延びている。長さ18.20m、幅0.38-1.53m、深さ0.05-0.24mである。

遺物は6世紀-7世紀初頭の土師器環(第233図24)が出土しているが、瀬戸の播鉢など中世の遺物が主体的に出土している。中世のものは図示できなかった。本溝跡の時期は中世以降と考えられる。

第28号溝跡(第220図)

F-20グリッドに位置する。

東西方向に掘られており、第1号溝跡と平行している。長さ3.70m、幅0.40m、深さ0.04mである。掘り込みは非常に浅い。第1号溝跡に付属する溝の可能性はある。遺物は出土しなかった。

第121表 第10号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(13.0)	3.5		BE	1	暗褐	20	SD10 C-32G
2	土師環	11.7	4.0		ADE	2	茶褐	50	SD10
3	土師環	(13.0)	3.8		ADH	2	橙褐	20	SD10 C-32G
4	土師環	(9.6)	3.1		ADE	2	明褐	30	SD10 No 7 黒斑あり
5	土師環	(9.8)	3.0		DE	2	橙褐	75	SD10
6	土師環	(9.4)	2.9		DEH	2	橙褐	60	SD10
7	土師環	10.0	3.2		DFH	2	明褐	90	SD10 I No 5
8	土師環	10.6	3.4		DE	2	明褐	100	SD10 No 2 内面に油煙あり
9	土師環	(9.8)	3.0		DE	1	橙褐	30	SD10
10	土師環	9.8	2.3		ADE	2	橙褐	95	SD10 I
11	土師環	10.0	3.3		ADE	2	橙褐	100	SD10 No 12 底部黒斑あり
12	土師環	10.2	3.6		ADE	1	橙褐	100	SD10 C No 1 部分的に黒斑あり
13	土師環	(11.0)	3.2		EH	2	橙褐	25	SD10 L-15G
14	土師環	11.0	3.0		ADE	1	橙褐	90	SD10 A 部分的に黒斑あり
15	土師環	(11.0)	2.7		ADEH	1	褐	40	SD10 A H-24G
16	土師環	10.2	3.1		ADE	2	橙褐	100	SD10 No 1
17	土師環	9.8	3.7		ADE	1	褐	100	SD10 A No 1 G-24G
18	土師環	10.8	3.6		DE	1	褐	95	SD10
19	土師環	10.6	3.4		ADE	1	褐	95	SD10 A No 2 G-24G 部分的に黒斑あり
20	土師環	10.2	3.4		BDE	2	橙褐	90	SD10 I
21	土師環	10.2	3.2		ADE	2	褐	90	SD10 I / J 底部黒斑あり
22	土師環	10.6	3.4		BDE	2	褐	95	SD10
23	土師環	(11.0)	3.0		ADE	3	橙褐	25	SD10
24	土師環	10.9	3.3		ADE	1	明褐	80	SD10 黒斑あり
25	土師環	(11.2)	3.1		ADEJ	2	橙褐	30	SD10
26	土師環	(10.4)	3.6		AD	2	橙褐	70	SD10 I / J
27	土師環	10.4	3.6		ADEH	3	橙褐	90	SD10 I
28	土師環	(11.0)	3.6		DEH	2	明褐	30	SD10 J-19G
29	土師環	11.0	3.7		BDEH	1	橙褐	95	SD10 A H-24G
30	土師環	12.4	3.3		ADE	3	橙褐	80	SD10 J
31	土師環	11.0	3.3		ADE	1	橙褐	70	SD10
32	土師環	11.2	3.7		ADE	2	褐	75	SD10 No 1 / I
33	土師環	(10.6)	3.6		DEJ	1	赤褐	65	SD10
34	土師環	(12.5)	4.0		DEJ	2	褐	70	SD10 C 外面全体に黒斑あり
35	土師環	(13.8)	3.3		ADE	2	橙褐	25	SD10
36	土師環	13.0	4.4		DH	3	橙褐	60	SD10
37	土師環	(13.0)	4.4		DH	2	橙褐	50	SD10 B
38	土師環	12.4	4.2		DEJ	1	橙褐	100	SD10 B No 2・3
39	土師環	14.0	4.5		DEH	1	橙褐	85	SD10 No 9
40	土師環	13.4	4.7		DE	1	橙褐	80	SD10 No 3
41	土師環	(13.5)	4.4		ADE	2	橙褐	70	SD10
42	土師環	13.0	4.5		DEI	1	褐	70	SD10 B C-31G / C-31G No 7
43	土師環	12.0	4.2		EDE	1	褐	95	SD10 No 1
44	土師環	12.6	3.9		ADE	2	橙褐	100	SD10 No 4
45	土師環	13.0	4.5		DE	1	橙褐	90	SD10 No 11
46	土師環	(17.0)	5.5		DEH	1	橙褐	20	SD10 A II-24G 口縁部にゆがみあり
47	土師環	(13.0)	4.3		DE	1	赤褐	30	SD10 内面放射状地文
48	土師環	(15.0)	4.5		DEH	2	褐	20	SD10 L-15G
49	土師器皿	(12.0)	2.3		AEH	2	橙褐	25	SD10
50	土師器皿	14.4	2.3		DEH	3	橙褐	85	SD10
51	須恵器蓋	8.7	3.2		EK	1	灰	65	SD10 瀬内産 A
52	須恵高台桶		2.8	(9.0)	BEFK	2	灰白	20	SD10 I 南比企産 A

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
53	須恵器壺		5.5		BEK	1	青灰	10	SD10 秋田産か?
54	須恵小壺		10.6		ABEI	2	黄灰	90	SD10C No.5 本野産
55	須恵壺 (16.0)		7.2		EIK	1	灰	25	SD10 J 21/I-21G 本野産
56	須恵壺 (17.0)		6.6		BEIK	1	明褐色	35	SD10C No.6 C-31G 本野産
57	須恵壺		11.1		EUJ	1	青灰	破片	SD10B C-27G 本野産
58	須恵壺		12.1		ABEI	3	茶褐	65	SD10B No.5 本野産 平行叩き+青海波当て具
59	土師ミニチュア		3.0	3.5	BDEJ	2	明褐	40	SD10C
60	土師小型壺 (9.3)		7.0		ADE	3	橙褐	25	SD10 L-15G
61	土師小壺 (15.6)		18.2		DE	3	暗褐	90	SD10B No.11 (D-25G)
62	土師小型壺 (15.6)		12.8		DEJ	2	褐	30	SD10 No.3/SD10J
63	土師壺 (20.0)		8.8		ADE	1	褐	20	SD10B No.4
64	土師壺 (17.6)		9.2		ADEJ	1	橙褐	25	SD10 I
65	土師壺 (18.8)		10.8		ADE	1	明褐	35	SD10 I
66	土師壺		5.3	5.3	BDEJ	1	褐	80	SD10 L 15G 一部に黒斑あり
67	土師壺 (19.6)		14.0		ADEJ	2	橙褐	35	SD10 K-16・17G
68	土師壺	21.6	14.6		ADEII	3	橙褐	39	SD10
69	土師壺		17.0	6.3	DEHJ	2	明褐	45	SD10B No.1
70	常滑壺		9.0	(20.6)	BJ	1	橙	20	SD10A No.3
71	磨石	長7.5cm 幅6.7cm 厚さ5.3cm							重さ343.49g 角閃石安山岩 SD10A

第29号溝跡 (第220図)

F-21グリッドに位置する。第226号住居跡と重複関係にあり、本溝跡の方が新しい。

東西方向に掘られており、第1号溝跡と平行している。長さ4.50m、幅0.50~1.05m、深さ0.09mである。第28号溝跡と同様に、第1号溝跡に付属する溝の可能性はある。遺物は出土しなかった。

第30号溝跡 (第230図)

K-16グリッドに位置する。

南北方向に掘られている。前述した第18号溝跡と対になると考えられる。第11号掘立柱建物跡に付属する区画溝である。長さ6.40m、幅0.20m、深さ0.50mである。遺物は出土しなかった。

第31号溝跡 (第220図)

F・G-22、G-23グリッドに位置する。第40号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本溝跡の方が新しい。

北西-南東方向に掘られており、第1号溝跡と平行している。長さ12.50m、幅0.50m、深さ0.10mである。第1号溝跡に関連する溝跡の可能性はある。

遺物は出土しなかった。

第32号溝跡 (第232図)

I-L-27グリッドに位置する。第13号溝跡と重複関係にあり、本溝跡の方が古い。

南北方向に掘られており、南側は調査区域外に延びる。途中を水路に横切られている。長さ29.70m、幅0.88~1.40m、深さ0.16mである。

遺物は土師器の坏・甕が出土したが、図示できるものはなかった。

第33号溝跡 (第232図)

C-34・35グリッドに位置する。

溝跡の両端は調査区域外へと延びているが、西側は第10号溝跡へ続くと考えられる。長さ10.40m、幅4.50m、深さ0.23mである。

遺物は土師器の坏 (第233図25) が出土した。時期は、7世紀後半である。

第34号溝跡 (第231図)

B-25~28グリッドに位置する。第181・182号住居跡、第67号掘立柱建物跡、第27号溝跡、第189~192・196・199・200・214・223号土壌と重複関係にあり、住居跡より新しく、第27号溝跡よりも古い。その他の遺構については不明である。

東西方向に直線的に掘られている。長さ39.60m、

第122表 溝跡一覧表

番号	グリッド	長さ	最大幅	深さ	重複遺構	備考
1	F-19-24, H-24, G-16-18, F-17-19	6.00	0.90	0.22	SJ227・228・230・232, SB40, SD10	中世以降
5	A-28	7.94	0.60	0.14	SK91-93・253・256	不明
6	C・D-25	8.90	0.46	0.06		古代
7	I-16-19	22.80	0.60	0.11		
8	K・L-13・14	13.80	0.70	0.23	SD9・10	6C末
9	J-M-14, M-N-15, N-O-16, O-Q-17 Q・R-18	95.10	2.78	0.30	SJ254・256, SD8・10・12-14	7C後
10A	D-29-33, E-27-29, F-25-27 G-24・25, H-22-24, I-21-23 J-19-21, K-16-19, L-14・15	214.80	2.10	0.54	SB11・15, SD1・8・9・11, SK106	7C中～後
10B	C-25-33, D-25, E-25, F-24, G-24	124.00	0.90	0.50	SJ186・187・218, SB52・55・61・65・68・69 SE51, SK126・131・136・137・140・202・226・227	7C中～後
10C	C-30, D-27-30, E-26・27, F-24-26 G-24, H-23・24, I-21・22	88.50	0.50	0.28	SJ202, SB51, SD1, SK128	7C中～後
10D	G-24	3.60	0.70	0.40		7C中～後
11	L-14	6.10	1.64	0.70	SD10	6C末
12	L-15, M-13-15	13.60	2.10	0.31	SD9, SE33	不明
13A	I-28-32, J-24-28, K-22-24 L-18-22, M-15-19, N-14-17	161.45	3.20	0.50	SJ256, SB12・13, SD9・14・32, SK134	近世
13B	M-15-17, N-14-24	98.30	3.30	0.70	SJ256・259, SD9・14・17,	近世
13C	M-15-17, N-14-21, O-20-23	101.00	3.30	0.55	SJ259, SD9・14・17,	近世
14	N-16	6.60	0.60	0.12	SD9・13	不明
15	Q-14・15, R-15-17	33.50	0.68	1.00		7～8C
16	O-17	6.50	0.45	0.26		不明
17	O-20	11.40	0.36	0.40	SJ262・263, SD13	8～9C
18	J-15・16	6.63	0.40	0.50		SB11に付属
19	K-17・18	19.30	0.47	0.32		7C前
20	K-18・19, L-18	15.00	0.60	0.28		不明
21	L-22	9.80	0.80	0.07		不明
22	A・B・C・D-24	29.70	1.10	0.19	SJ169, SB31, SD23, SK98	10～11C
23	A・B・C-24・25, D-24	31.80	0.88	0.30	SB31, SD22, SK99	10～11C
24	A・B-25	7.63	0.84	0.18	SJ180, SD25, SK95・151	13C後
25	A・B-25	—	0.70	—	SJ180, SD24, SK95	不明
26	A・B・C-29	9.50	0.89	0.03	SD27, SK207・270	不明
27	A・B・C-29	18.20	1.53	0.24	SD26・34	中世以降
28	F-20	3.70	0.40	0.04		不明
29	F-21	4.50	1.05	0.09	SJ226	不明
30	K-16	6.40	0.20	0.50		SB11に付属
31	F・G-22, G-23	12.50	0.50	0.10	SB40	不明
32	I・J・K・L-27	29.70	1.40	0.16	SD13	古代
33	C-34・35	10.40	4.50	0.23		7C後
34	B-25-28	39.60	0.60	0.28	SJ181・182, SB67, SD27 SK189-192・196・199・200・214・223	古代

幅0.60m、深さ0.28mである。

土師器が出土しているが、図示できるものはなかった。

遺物は土師器の環・甕、須恵器の環・甕、ロクロ

た。

(4) 井戸跡

大奇遺跡Ⅱ区から検出された井戸跡は、60基である。第1～32号井戸跡は、「大奇遺跡Ⅰ」で報告した。今回報告するのは、第33号井戸跡から第60号井戸跡の28基である。

井戸跡は、素掘りのもの、木組みのもの、石組みのものがある。素掘りの井戸が最も多いが、それらすべてが、使用時から素掘りだったのかは不明である。中には、木組みの井戸であった可能性のあるものもある。

時期は古墳時代後期から中世にかけてで、古代が中心である。そのうち、径0.5m前後、深さ1.0m程の小規模な井戸跡が半数を占めている。この小規模な井戸跡は、調査区南側の低地に集中している。これらの井戸跡より規模の大きい井戸跡は、調査区中央部から北側に分布している。

特筆すべきものとしては、第37号井戸跡があげられる。平安時代後半のもので、方形に組まれた7段の井戸枠が、良好な状態で検出された。またこの井戸跡を囲むように、同時期の住居跡が分布している。

今回、計測表(第126表)に掲載した長径・短径は、掘りあがりの状態であり、筒状のもの以外は、井戸使用時の径とは大きく異なる。そのような井戸は、井戸跡下半の筒状の部分が、本来の径と考え、以下ではその部分を「筒部」と呼称する。

第33号井戸跡(第238図)

M-14グリッドに位置する。第12号溝跡と重複関係にあり、井戸跡の方が新しい。

平面形は楕円形で、規模は長径1.67m、短径1.46m、深さ1.04mである。ロート状に掘り込まれている。確認面から0.60mで筒状となる。筒部の径は0.56mである。覆土は、自然堆積である。

遺物は少なく、土師器環、須恵器高台付碗(第241図1・2)の他に、土師器甕の小破片が出土している。1は7世紀中葉の模倣環で、混入と思われる。2は木野庵の高台付碗で、井戸跡中層から出土して

いる。時期は9世紀後半である。

第34号井戸跡(第238図)

P-15・16グリッドに位置する。

平面形は円形で、規模は径0.40m、深さ1.04mである。筒状に掘り込まれている。

遺物は、土師器甕・環が少量出土したが、小破片のため図示できるものはなかった。時期は、8世紀前半のものである。

第35号井戸跡(第238図)

N-17グリッドに位置する。南側に第38号井戸跡がある。

平面形は円形で、規模は長径0.44m、短径0.40m、深さ0.96mである。筒状に掘り込まれている。

遺物は出土しなかった。

第36号井戸跡(第238図)

H-19グリッドに位置する。南側に、第250号住居跡がある。

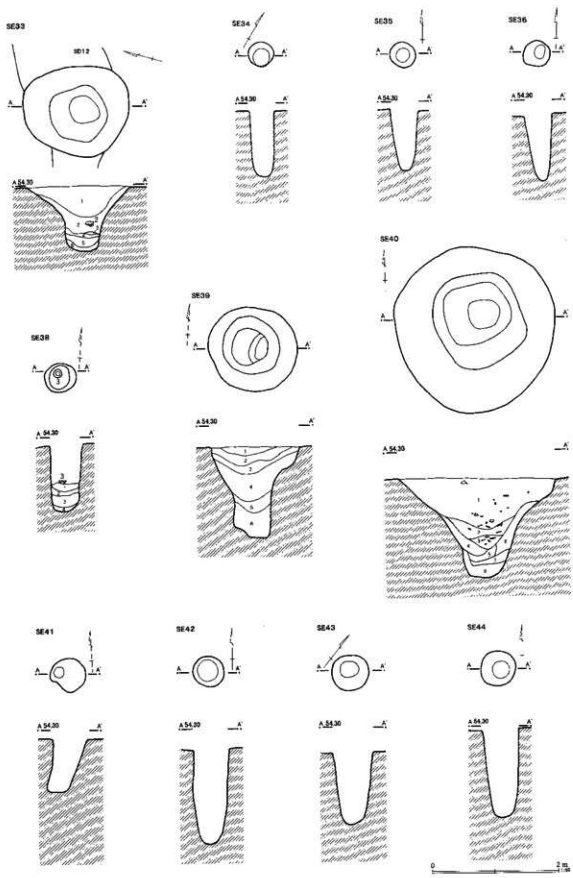
平面形は円形で、規模は径0.44m、深さ1.04mである。筒状に掘り込まれている。覆土は、暗褐色土の単層で、ローム粒を含み、焼土粒をわずかに含んでいる。遺物は出土しなかった。

第37号井戸跡(第245図)

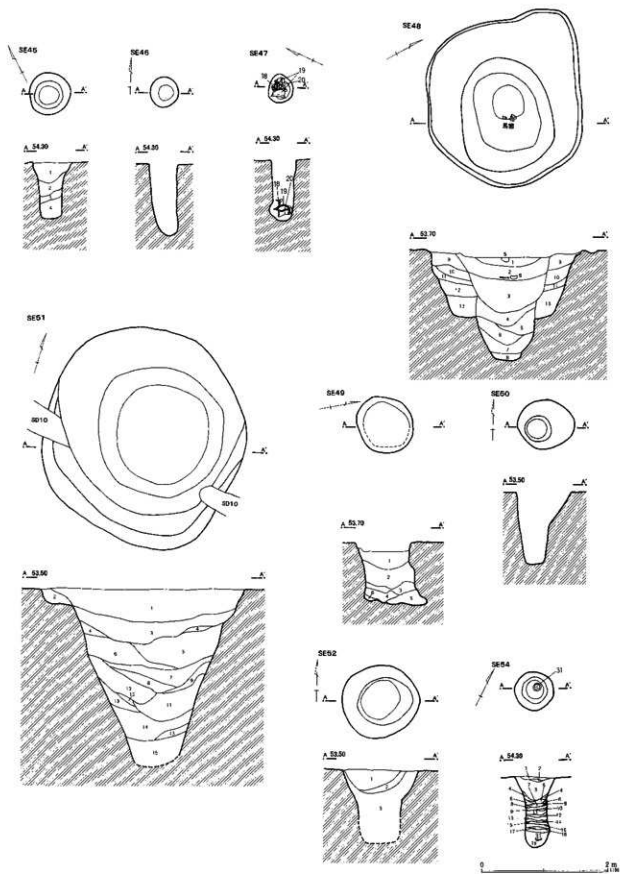
C-22グリッドに位置する。第137・138・172号住居跡、第58・59号孤立柱建物跡と重複関係にあり、井戸跡が最も新しい。

平面形は円形で、規模は長径3.82m、短径3.26m、深さ3.86mである。ロート状に掘り込まれている。筒部の径は1.86mである。覆土は15層に分けられる。6～8層は掘り方である。

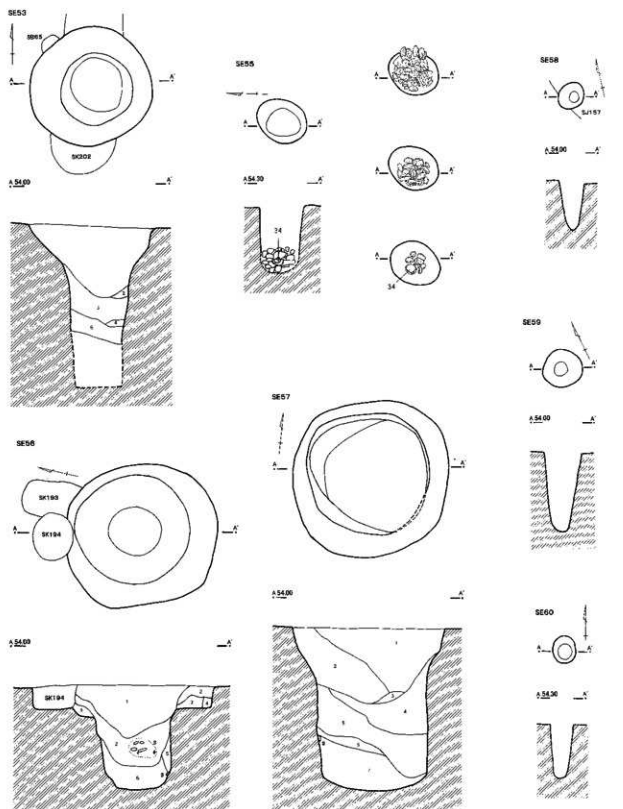
本井戸跡は残存状態が良好で、底部から7段に組まれた井戸枠が検出された。井戸側は方形で、規模は0.80×0.74mである。東・南・北は7段目までが、組まれた状態で確認できた。東の6・7段目は風化が著しく、図示できなかった。西の7段目は確認できなかった。井戸枠内からも枠材が数本出土している。井戸枠は長さ0.94～1.20m、幅0.11～0.20m、



第238团 井戸跡(1)



第239図 井戸跡(2)



第240图 井戸跡(3)

SE33

- 1 暗青褐色上 砂質土、小礫 (2cm以下) を含む
- 2 暗褐色上 均質な礫、礫中にローム粒混入
- 3 暗灰褐色上 砂質土、ローム粒少量
- 4 暗灰褐色上 中砂土質、ローム多量
- 5 暗灰褐色上 砂質土、ローム粒少量
- 6 暗灰褐色上 ローム粒多量、礫 (1cm) を含む

SE38

- 1 黒色土 ローム粒、小ブロック混入、しまりなし
- 2 黒色土 ローム粒、小ブロック多量、しまり有、粘性強
- 3 黒色土 ローム粒、小ブロック少量、しまりなし
- 4 黒色土 ローム粒、小ブロック多量、しまりなし

SE39

- 1 黒褐色上 ローム粒、白色粘多量
- 2 黒褐色上 ローム粒、粘土粘強
- 3 黒褐色上 白色粘上、粘土粘多量
- 4 黒褐色上 ローム粘強
- 5 黒褐色上 ローム粒、ロームブロック (2~4cm大) 多量
- 6 黒色土 ローム粒、ロームブロック (1cm大) 少量

SE40

- 1 灰褐色土 粘土粘多量、炭化物を含む
- 2 暗灰褐色上 粘土粘を含む
- 3 暗灰褐色上 粘土粘を塊かに含む、粘性強
- 4 暗灰褐色上 ローム多量、粘性強
- 5 灰白色上 粘土粘を含む、粘性強
- 6 暗灰褐色上 ローム多量、粘性強
- 7 暗灰褐色上 粘土粘を塊かに含む、粘性強
- 8 暗灰褐色上 粘土粘を塊かに含む、ローム粒多量、粘性強

SE45

- 1 暗褐色土 ローム粒を塊かに含む
- 2 暗褐色土 ローム粒を含む、中やザラザラ
- 3 暗灰褐色土 ローム粒多量
- 4 黒褐色土 ローム粒を塊かに含む

SE48

- 1 暗灰褐色上 粘土粘・十部石・パリス多量、ザラザラ
- 2 暗灰褐色上 パリス・ローム粒多量、粘土粘少量、ザラザラ
- 3 灰褐色土 パリス・ローム粘強多量、粘土粘少量、しまりなし
- 4 暗灰褐色土 ローム多量、粘土粘・炭化物粘少量
- 5 暗灰褐色土 ローム粘強多量、炭化物粘若干、ザラザラ
- 6 暗灰褐色土 ローム小ブロック・ローム粒多量、粘性有り
- 7 暗灰褐色土 ローム粘強少量 ローム小ブロック若干、ザラザラ
- 8 暗灰褐色上 ローム粘強との混土層
- 9 灰褐色上 ロームブロック粘、粘土粘多量
- 10 暗灰褐色上 ロームブロック粘、粘土粘多量
- 11 暗灰褐色上 ロームブロック粘・礫の子状、粘土小ブロック若干
- 12 暗灰褐色上 ロームブロック多量、粘性強
- 13 黄褐色土 暗褐色土中にロームブロック多量、粘性強

SE49

- 1 暗褐色土 ロームブロック・粘土粘多量、粘性強
- 2 暗褐色土 ローム粘強・粘土粘・ローム小ブロック少量
- 3 暗灰褐色土 ローム粘、ローム小ブロック多量
- 4 暗褐色土 ローム粘多量、粘土小ブロック少量
- 5 暗灰褐色土 白色粘多量、一部は灰白色
- 6 黒褐色土 有機物の腐食土・褐色土混入、ローム粘若干、しまりなし

SE51

- 1 暗灰褐色土 粘土粘・ローム粘・粘土粘・白色粘七ブロック (2~5cm大) 少量
- 2 暗灰褐色土 ローム粘多量
- 3 灰褐色土 ローム粘少量、灰白色粘上ブロック (2~20cm大) 多量
- 4 暗灰褐色土 ローム粘、粘土粘少量
- 5 灰褐色土 ローム粘多量
- 6 暗褐色土 白色粘強粘・ローム粘・大礫少量
- 7 暗灰褐色土 ローム粘・白色粘上粘多量、炭化物粘強、大礫少量
- 8 暗灰褐色土 白色粘上粘を含む、粘土粘、炭化物粘強、大礫少量
- 9 暗褐色土 ローム粘多量
- 10 暗褐色土 ロームブロック (10cm大)、粘土粘少量
- 11 暗灰褐色土 ロームブロックに暗褐色土少量混入
- 12 暗灰褐色土 ローム粘多量
- 13 暗灰褐色土 ロームブロックに暗褐色土の混土層
- 14 暗褐色土 ロームブロックに暗褐色土の混土層
- 15 暗灰褐色土 ロームブロック少量、粘土粘を含む

SE52

- 1 暗褐色土 シルト質、白色粘多量
- 2 暗褐色土 シルト質、白色粘・粘土粘上ブロック (2~5cm大) 含む
- 3 暗褐色土 シルト質、粘土粘強、白色粘少量、ローム粘少量

SE53

- 1 黒褐色土 小礫 (2~3cm大) 含む
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量
- 3 黒褐色土
- 4 青白色粘上
- 5 灰褐色土

SE54

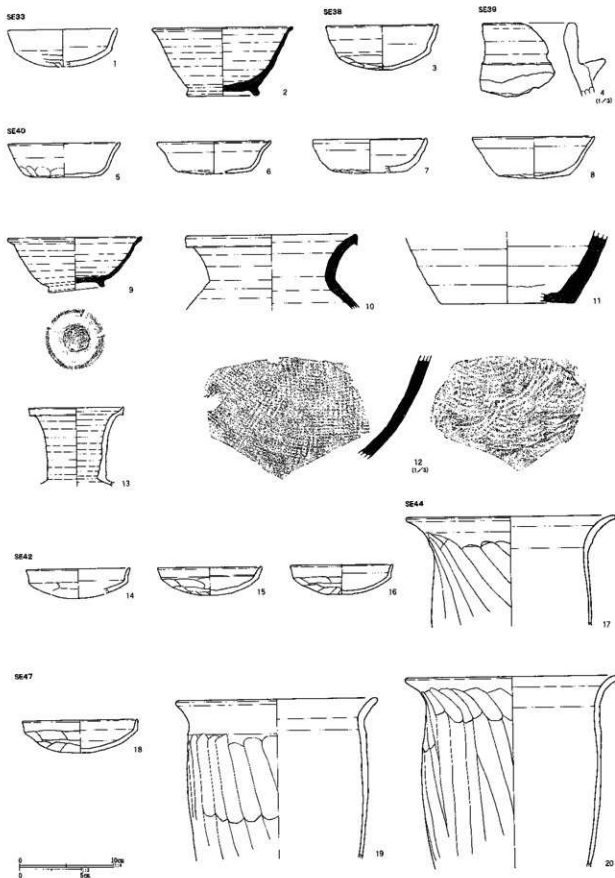
- 1 暗褐色土 灰色粘多量、粘土粘を含む
- 2 赤褐色土 粘土粘多量、炭化物粘少量
- 3 暗褐色土 粘土粘・炭化物粘・ロームブロック少量
- 4 灰白色土 暗褐色土粘・ローム粘を含む
- 5 暗褐色土 粘土粘少量
- 6 暗褐色土 ローム粘、ロームブロック (1~2cm大) 多量
- 7 暗褐色土 粘土粘、ローム粘少量
- 8 黄褐色土 ロームにより構成
- 9 暗褐色土 ローム粘少量
- 10 暗灰褐色上 ローム粘多量
- 11 暗褐色土 粘土粘・ローム粘少量
- 12 暗褐色土 ロームにより構成
- 13 暗灰褐色土 ローム粘を含む
- 14 黄褐色土 ロームにより構成、暗灰褐色土粘少量
- 15 暗灰褐色土 ローム粘少量
- 16 暗灰褐色土 ローム粘多量
- 17 暗灰褐色土 ローム粘多量
- 18 暗灰褐色土 ローム粘多量
- 19 暗褐色土 ローム粘少量

SE56

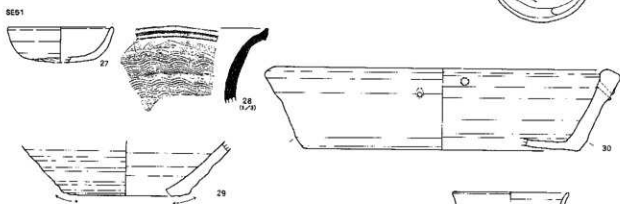
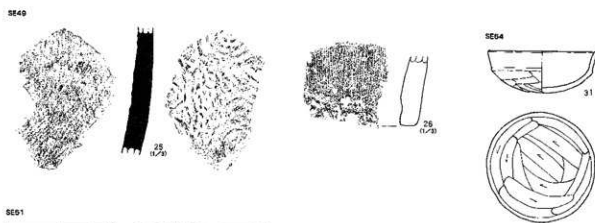
- 1 黒褐色土 粘土粘・粘土粘七ブロック (1cm大)、礫 (10cm大) 多量
- 2 暗灰褐色土 粘土粘少量、ローム粘を含む、粘土粘
- 3 暗褐色土 ローム粘、ロームブロック多量
- 4 灰褐色土 ロームにより構成される、暗褐色土粘混入
- 5 暗褐色土 ロームブロック (10~20cm大) 多量
- 6 暗灰褐色土 ローム粘を塊状に含む

SE57

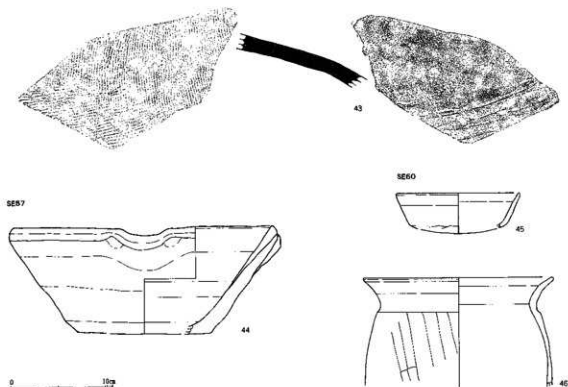
- 1 暗灰褐色土 ローム粘・粘土粘多量、粘土粘七ブロック (1~3cm大) を含む
- 2 灰白色土 粘土粘を塊かに含む、ローム・粘土粘七ブロック (1~10cm大) 多量
- 3 暗褐色土 粘土粘を塊かに含む、粘性強
- 4 暗褐色土 粘土粘七ブロック (2~20cm大) 少量
- 5 褐色土 ローム粘・粘土粘上ブロック (5~10cm大) 多量
- 6 暗灰褐色土 粘土粘七ブロック (10cm大) 少量
- 7 暗灰褐色土 粘土粘少量、円礫 (10cm大) 少量



第241图 井戸跡出土遺物(i)



第242図 井戸跡出土物(2)



第243図 井戸跡出土遺物(3)

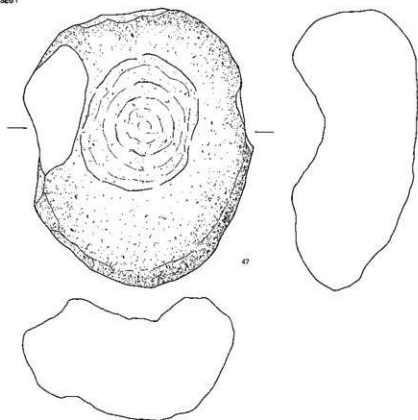
厚さ2.6～5.0cmの長方形で、各々に切り込みが入っている。井戸枠計測表(第124表)に示した切り込みの欄の下線は、切り込みではなく上からの圧力で、凹んだ部分を計測したものである。切り込みは、上下どちらかの2箇所のもの、両方の4箇所のものがある。井戸枠は、始めに南北の枠材を置き、その上に東西の枠材を乗せて、一段が構成されている。今回、井戸跡同士の接合を試みたが、接合関係はみられなかった。このため以下のことが考えられる。板材は、長い板材をその場で切断・加工したのではなく、板材の状態で搬入された可能性が高い。

遺物は土師器環・甕、須恵器環・高台付碗・壺・甕、土師系土師質土器高台付碗、須恵系土師質土器高台付碗、灰釉陶器高台付碗・壺、羽釜(第248・249図)などが出土している。1～6は土師器である。6は高台付碗で、内面黒色処理とミガキが施されている。7～12・14～17は須恵器である。7は非常に小ぶりである。8は厚い。9・12・14は青灰色でなく、やや焼成が悪い。又、器形が従来の須恵器には

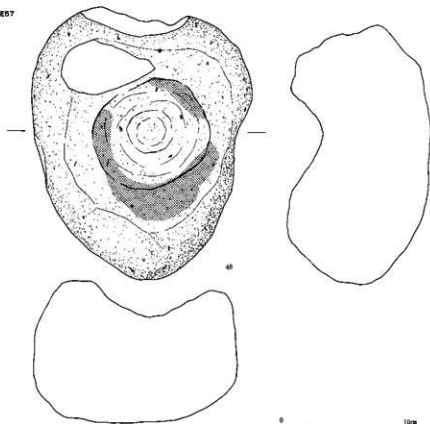
ないものである。13は非ロクロ成形で、土師質だが還元焰焼成に近いものである。環部は、口縁部をヨコナデし、体部をヘラズリして、土師器環に高台を貼り付けたような形である。しかし、焼成は土師器よりも良好で、高台が付いている点も土師器とは異なる。そこで、今回は土師系土師質土器とする。18・19はロクロ成形・酸化焰焼成なので、須恵系土師質土器とした。18は高台の付け方が非常に雑である。20はロクロ土師器高台付碗で、内面黒色処理とミガキが施されている。21～28は灰釉陶器である。27は灰投産で、それ以外はすべて東濃産と思われる。21は大原2号窯平行と思われる高台付碗で、27は、折戸53号窯平行と思われる高台付皿である。他は、大原2号窯～古沢山1号窯平行と思われる。29～31は土師器甕である。32・33は羽釜で、33は胴部をヘラズリしている。

非筒内には須恵器が少なく、土師系土師質土器や須恵系土師質土器やロクロ土師器が出土している点、掘り方には土師器甕が、井筒内には羽釜が出土

SE61



SE67

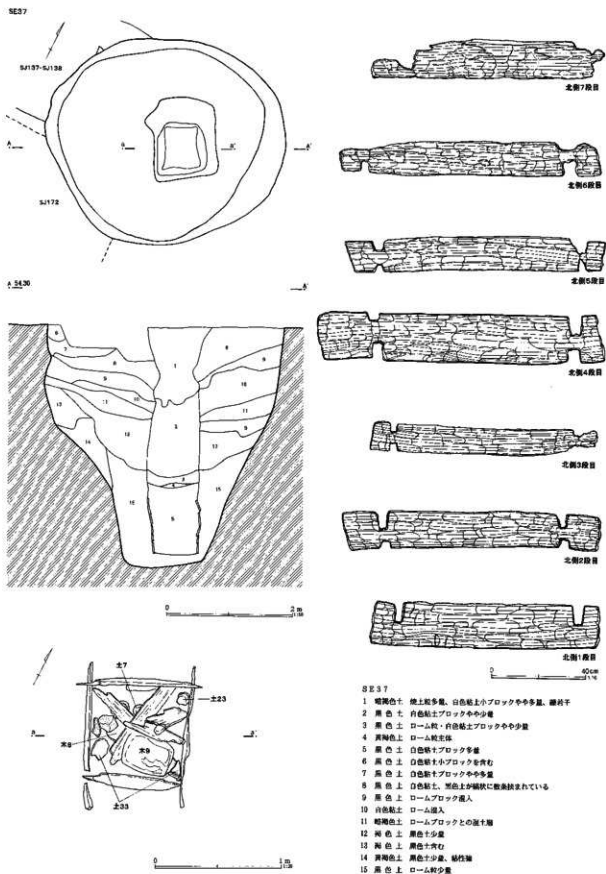


第244図 井戸跡出土遺物(4)

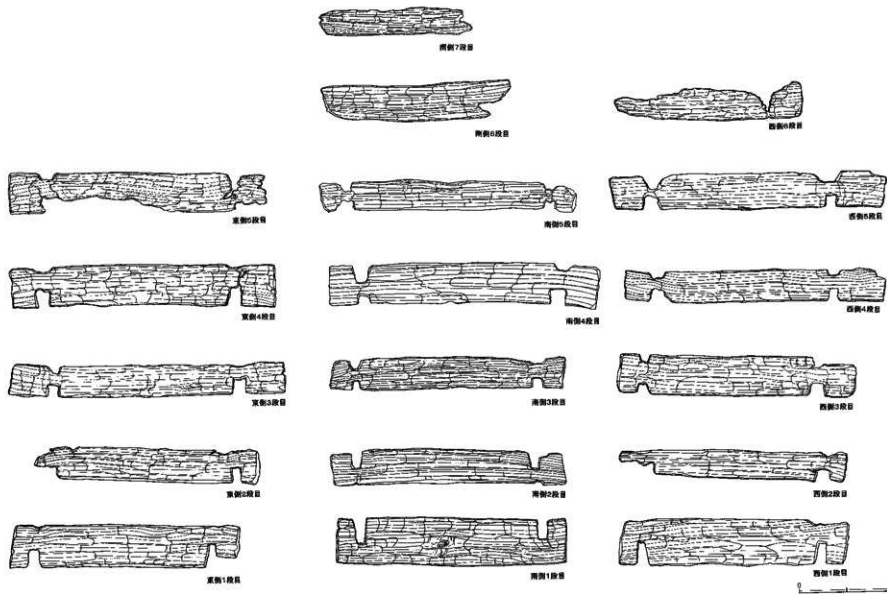


第123表 井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(11.5)	3.7		DFH	2	橙褐	10	SE33
2	須恵高台輪	(14.8)	7.2	7.4	ABE	2	黄灰	50	SE33 木野産 A
3	土師環	11.8	4.7		ADEI	1	褐	95	SE38
4	刺蓋		5.7		DEJ	2	茶褐	破片	SE39 ロクロ塗彩 土師質
5	土師環	(11.8)	3.6	7.8	ADE	2	赤褐	55	SE40
6	土師環	(12.0)	3.4	(7.8)	DEH	2	橙褐	20	SE40
7	土師環	(12.0)	3.6	(8.0)	ADEH	2	橙褐	20	SE40
8	土師環	(13.0)	4.4	(7.5)	ADE	2	橙褐	40	SE40
9	須恵高台輪	14.0	5.8	5.6	BEIK	2	灰	60	SE40 木野産 A
10	須恵甕	(18.0)	7.9		EIJK	1	暗灰	10	SE40 木野産
11	須恵甕		7.6	(14.0)	BEIK	1	紫灰	10	SE40 木野産
12	須恵甕		8.2		BEK	2	明灰	10	SE40 木野産
13	灰釉長頸瓶	(10.0)	8.3		EK	1	灰白	70	SE40 模倣産
14	土師環	(11.0)	2.6		DE	3	橙褐	15	SE42
15	土師環	(11.0)	3.0		DE	3	黒褐	25	SE42
16	土師環	(10.8)	3.1		DFH	2	赤褐	55	SE42
17	土師甕	(22.0)	11.6		ADEJ	1	褐	30	SE44
18	土師環	12.2	3.4		ADH	3	明橙褐	95	SE47 No.2
19	土師甕	21.0	17.0		DEJ	2	褐	50	SE47 No.1・3・4
20	土師甕	22.4	20.2		ADEJ	2	褐	70	SE47 No.4
21	土師環	11.4	3.2		ADE	3	明褐	30	SE48 覆土
22	土師環	3.0	3.2		DE	2	褐	20	SE48 覆土
23	土師環	(10.0)	3.3		DEH	2	明褐	25	SE48 覆土
24	土師甕	(22.0)	6.5		ADEIJ	1	褐	15	SE48 No.1
25	須恵甕		10.1		BEIK	2	灰	5	SE49 木野産
26	埴輪		5.4		ABDE	2	橙褐	15	SE49 土師質
27	埴輪	(11.0)	3.7		DE	2	明褐	25	SE51
28	須恵甕		5.9		EIJK	1	紫灰	5	SE51 木野産
29	常滑(片口)鉢		5.8	(13.0)	BEK	1	灰黄	15	SE51 底部を二次使用している
30	須恵黄釉	(35.6)	8.5	(28.8)	E	1	灰	15	SE51 穿孔 在地産
31	土師環	11.4	4.4		DEII	1	褐	100	SE54 No.9
32	土師環	(11.8)	3.9		ADH	3	橙褐	40	SE55
33	土師環	(12.4)	4.2		DE	2	暗褐	65	SE55
34	土師小型甕	(12.2)	14.7		DE	2	暗褐	60	SE55 No.1
35	土師環	(12.0)	2.9		DE	2	明褐	10	SE56 放射状暗文
36	土師環	(13.0)	3.3		ADE	2	褐	25	SE56
37	土師壘	(13.0)	2.8		DE	2	暗褐	15	SE56
38	須恵環	(14.0)	4.3	(8.4)	BEIJ	3	紫灰	15	SE56 木野産 A
39	須恵環	(14.8)	3.8	(9.0)	BEIK	1	暗灰	45	SE56 木野産 A
40	須恵環		1.5	(8.6)	AE	1	褐灰	50	SE56 木野産 A
41	土師甕		2.6	7.0	BEJ	3	茶褐	80	SE56 底部木葉痕あり
42	土師甕	(18.0)	6.5		DEH	2	赤褐	20	SE56
43	須恵蓋		5.3		EK	1	青灰	破片	SE56
44	竹口鉢	27.6	11.3	14.4	DE	2	灰	75	SE57 13C 様子 在地産
45	土師環	(13.0)	3.7		DEII	3	茶褐	5	SE60
46	土師甕	(20.0)	11.6		BDEJ	1	褐	15	SE60
47	礎石	長21.9cm 幅18.4cm	厚さ9.9cm				重さ2555g		SE51 角閃石安山岩
48	礎石	長21.4cm 幅17.5cm	厚さ11.5cm				重さ2770g		SE57 閃石安山岩 隅に炭化物付着



第245図 第37号井戸跡・出土遺物(1)



第246図 第37号井戸跡出土遺物(2)

第124表 井戸枠計測表

(cm)

方位	段	長さ	幅	厚み	切り込み上		切り込み下		工具幅	
					左	右	左	右	内	外
北	1	97.2	18.8	2.9	8.0	8.0	0.0	0.0	5.4	5.0
	2	110.0	16.0	3.2	7.0	5.6	2.8	3.2	4.8	4.4
	3	96.2	12.3	3.2	3.2	2.5	3.2	—	4.0	3.4
	4	120.5	20.8	4.0	3.0	7.6	6.8	4.6	6.5	6.0
	5	111.0	14.2	3.2	4.2	6.2	2.8	—	5.2	4.0
	6	110.3	14.5	4.0	0.0	2.6	4.2	5.6	4.4	4.4
	7	(94.6)	16.6	3.1	—	—	—	—	4.2	4.0
東	1	96.0	18.2	3.8	0.8	0.3	7.4	9.8	4.0	4.2
	2	95.0	14.4	3.0	1.2	1.8	5.0	6.0	4.2	4.3
	3	116.6	13.6	3.0	3.0	9.8	4.8	6.0	4.2	4.4
	4	112.1	18.1	2.6	2.0	1.2	6.2	7.4	5.6	4.6
	5	108.8	17.2	2.8	2.6	—	6.4	2.8	4.8	4.3
南	1	97.0	20.6	3.4	10.6	8.3	0.0	0.0	5.6	5.2
	2	97.4	15.0	2.9	7.0	6.6	0.2	0.8	4.0	3.5
	3	98.0	13.8	3.4	3.8	0.4	3.6	4.0	4.8	4.4
	4	113.2	17.3	5.0	7.2	2.6	3.0	6.0	4.8	4.0
	5	117.0	12.8	4.2	4.0	2.2	4.0	2.8	3.3	3.0
	6	(79.5)	15.6	3.0	—	—	—	—	4.2	3.8
	7	(62.5)	11.2	2.2	—	—	—	—	4.3	3.8
西	1	96.1	20.0	3.3	0.5	2.0	9.6	9.0	4.2	5.2
	2	95.8	12.6	2.8	0.4	1.8	4.4	5.4	3.8	3.8
	3	100.6	17.0	3.2	3.4	4.4	3.8	5.0	4.6	4.8
	4	110.0	13.8	3.6	2.5	2.2	5.0	5.2	4.0	5.0
	5	117.2	15.6	3.8	5.4	3.0	5.0	4.6	4.0	5.0
	6	(79.4)	15.0	3.0	—	—	—	—	6.2	5.0

— 計測不能 0.3 圧力で凹んだ部分

している点などから、時期差が認められる。

木製品(第247図8・9)も出土している。井筒内からは、曲物・槽と呼ばれる木製容器が出土している。曲物は井筒底部から2点並んで出土したが、1点は残存状態が悪く、図示できなかった。もう1点の曲物は径19.8cm、高さ11.6cmである。曲物の底板は1回り大きい桶の蓋板が転用され、再加工されている。槽は長さ46.0cm、幅30.0cm、高さ9.9cmで、中はくりぬかれている。側面両側には加工痕がみられる。逆位の状態で出土した。

以上の状況から、井戸跡の構築時期は9世紀後半で、10世紀前半ごろまで使用されていたと考えられる。

第38号井戸跡(第238図)

O-17グリッドに位置する。北側に第35号井戸跡がある。

平面形は円形で、規模は長径0.52m、短径0.45m、深さ1.04mである。筒状に掘り込まれている。

遺物は、井戸跡中層から土師器模倣杯(第241図3)が出土している。時期は、6世紀末である。

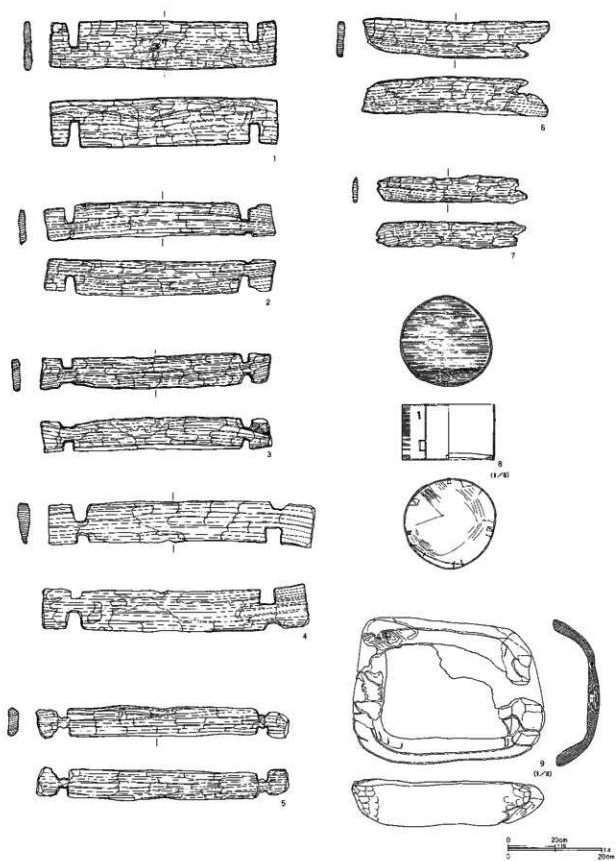
第39号井戸跡(第238図)

C・D-20グリッドに位置する。東側に第170号住居跡がある。

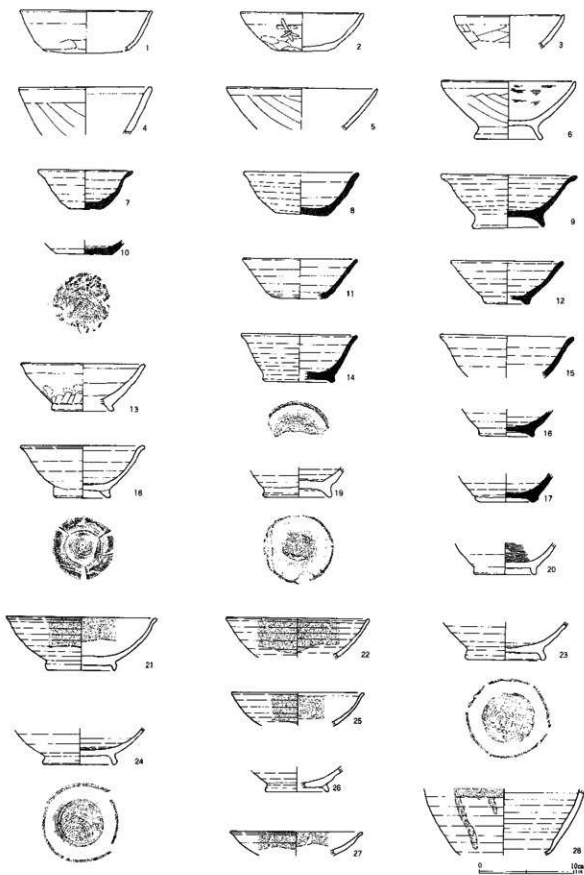
平面形は円形で、規模は長径1.42m、短径1.38m、深さ1.45mである。ロート状に掘り込まれている。井戸跡下半の筒部は径0.60mである。覆土は、自然堆積である。

遺物は少ない。銅のはがれた羽釜の口縁部(第241図4)が出土している。他に、土師器環・甕、須恵器甕が出土しているが、小破片のため時期は不明である。

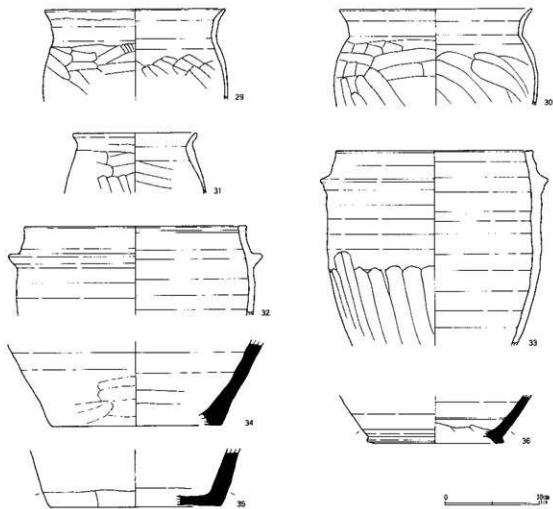
井戸跡の正確な時期は不明だが、出土遺物に羽釜



第247图 第37号井戸跡出土遺物(3)



第248图 第37号井戸跡出土遺物(4)



第249図 第37号井戸跡出土遺物(5)

があること、井戸跡の形態から平安時代後半の可能性が考えられる。

第40号井戸跡 (第238図)

H-22グリッドに位置する。西側に第120号土壇がある。

平面形は楕円形である。規模は大きく、長径2.64m、短径2.57m、深さ1.58mである。径の大きさに対して、掘り込みは浅い。ロート状に掘り込まれている。覆土は、自然堆積と考えられる。4～8層は掘り方の崩落土が流れ込み、1～3層は外部からの流れ込みと考えられる。この3層は礫を大量に含んでいる。井戸跡の周囲に、礫を用いた何らかの施設が存在していた可能性が考えられる。

遺物は、土師器環、須恵器高台付環・甕、灰釉陶

器長頸甕(第241図5～13)が出土している。5～8は上師器環である。8は口縁部に強いナデが施され、無調整の部分も合わせて直線的に開き、一見、須恵器の環のような印象を受ける。底部の調整はヘラケズリである。須恵器はすべて末野産である。甕類はいずれも焼成が良い。13の長頸甕は猿投産である。8世紀代の遺物も出土しているが、混入と考えられる。時期は9世紀後半である。

第41号井戸跡 (第238図)

I-16グリッドに位置する。

平面形は不整形である。規模は長径0.56m、短径0.54m、深さ0.84mである。筒状だが、底面では北側に寄って掘り込まれている。

遺物は、出土しなかった。

第125表 第37号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(14.0)	4.3		ADE	2	暗褐	15	井戸跡内
2	土師環	(13.0)	4.1	(5.6)	AE	2	橙褐	30	体部外面に「木」の墨書 振り方
3	土師環	(11.6)	3.5		ADE	2	褐	25	振り方
4	土師鉢	(14.0)	5.0		DEH	2	赤褐	15	上層
5	土師高台椀	(18.0)	4.4		ADE	3	赤褐	20	内面黒色処理+ミガキ 上層
6	土師高台椀	(14.2)	6.1	(6.8)	ADE	2	赤褐	60	内面黒色処理+ミガキ 振り方
7	須恵環	10.0	4.0	3.3	AEIJ	1	灰白	100	No.6 末野産 井筒内 B
8	須恵環	(12.0)	4.5	5.5	DEHJK	3	灰	60	末野産 振り方 B
9	須恵高台椀	14.4	3.7	7.4	HK	2	明灰	70	末野産 振り方 B
10	須恵環		1.5	6.0	EHK	3	灰白	85	末野産 上層 A
11	須恵環	(12.0)	4.2	(6.0)	ADEHK	2	灰	20	末野産 井筒内 B
12	須恵高台椀	(11.8)	4.5	(4.0)	BDE	1	灰白	25	振り方 B
13	土師蒸環	(13.0)	5.0	(6.2)	DEII	2	褐灰	40	井筒内下層
14	須恵高台椀	(12.0)	5.0	7.0	ABE	3	黄灰	25	末野産 振り方 B
15	須恵高台椀	(14.0)	3.9		EIJ	3	暗褐	10	末野産 上層 A
16	須恵高台椀		2.9	(5.4)	ABE	3	暗黄灰	10	末野産 振り方 A
17	須恵高台椀		3.0	(5.5)	BEI	3	黒	40	内外面及び断面が黒色 振り方 B
18	須恵蒸高台椀	13.0	5.6	5.5	ADE	1	暗茶褐	100	No.5 井筒内
19	須恵蒸高台椀		3.2	6.9	ADE	2	赤褐	70	上層
20	クロコ高台椀		3.4	(6.3)	ABDE	3	橙褐	60	内面黒色処理+ミガキ 上層
21	灰軸高台椀	(16.0)	3.7	(7.2)	EK	2	明灰	15	東濃産 刷毛埴り 井筒内 振り方
22	灰軸高台椀	(15.0)	4.2		EK	1	明灰	20	東濃産 漬けかけ 振り方
23	灰軸高台椀		4.0	7.8	BEK	1	明灰	60	東濃産 漬けかけ No.9
24	灰軸高台椀		3.9	7.4	E	1	明灰	70	東濃産 漬けかけ 振り方
25	灰軸高台椀	(14.0)	3.5		EK	2	明灰	5	東濃産 漬けかけ 上層
26	灰軸高台椀		2.7	(6.4)	E	1	明灰	20	東濃産 井筒内下層
27	灰軸高台皿	(14.0)	2.5		EK	2	明灰	10	東濃産 漬けかけ 振り方
28	灰軸瓦蓋		7.0		K	1	明灰	15	東濃産 井筒内下層
29	土師甕	(19.0)	9.6		DE	1	褐	25	井筒外
30	土師甕	(20.4)	10.3		ADEH	1	茶褐	30	井筒内/井筒外
31	土師小型甕	(13.0)	6.4		DE	2	暗褐	15	振り方 下層
32	土師釜	(23.4)	9.4		ADEJ	2	灰褐	15	クロコ整形 土師質 井筒内下層
33	須恵甕	(20.8)	20.6		ADE	1	暗褐	20	須恵質 ロクコ整形 井筒内 No.7・8
34	須恵甕		9.0	(18.0)	BEIK	2	青灰	10	末野産 下層
35	須恵甕		6.0	(18.0)	EFK	1	青灰	10	南比企産 振り方
36	須恵甕		5.1	(13.0)	BDEIJ	2	褐灰	20	末野産 井筒外下層

第42号井戸跡 (第238図)

M-19グリッドに位置する。

平面形は円形である。規模は径0.50m、深さ1.52mである。筒状に掘り込まれている。

遺物は、土師器環(第241図14~16)が出土している。いずれも模倣環で、7世紀中葉のものである。

第43号井戸跡 (第238図)

M-19グリッドに位置する。東側に第13号掘立柱建物跡がある。

平面形は円形で、規模は長径0.58m、短径0.56m、

深さ1.14mである。筒状に掘り込まれている。

遺物は、出土しなかった。

第44号井戸跡 (第238図)

N-19グリッドに位置する。南側に第13号溝跡がある。

平面形は円形で、規模は長径0.57m、短径0.55m、深さ1.42mである。筒状に掘り込まれている。

遺物は、土師器甕(第241図17)が出土している。武蔵型甕で、口縁部に最大径を持つ長胴のものである。胎土には粗い砂粒を多く含む。他には、同時期

の土師器環が出土しているが、小破片のため図示できなかった。時期は7世紀後半である。

第45号井戸跡 (第239図)

O-21グリッドに位置する。西側に第262・263号住居跡がある。

平面形は円形である。規模は径0.65m、深さ0.88mである。筒状に掘り込まれている。

遺物は、出土しなかった。

第46号井戸跡 (第239図)

O-19グリッドに位置する。

平面形は円形である。規模は長径0.49m、短径0.45m、深さ1.13mである。筒状に掘り込まれている。

遺物は、出土しなかった。

第47号井戸跡 (第239図)

Q-20グリッドに位置する。

平面形は円形である。規模は長径0.46m、短径0.42m、深さ0.96mである。筒状だが、底部は北側に穿って掘り込まれている。

遺物は、底面付近から土師器環・甕(第241図18~20)が出土している。18は北武蔵型環で、19・20は武蔵型甕である。19は胎土の砂粒を多く含む。時期は7世紀後半である。

第48号井戸跡 (第239図)

E-25グリッドに位置する。第190号住居跡と重複関係にあり、本井戸跡の方が新しい。

平面形は北側が張り出す円形で、規模は長径2.95m、短径2.62m、深さ1.74mである。大きな掘り方を設け、筒部を掘削している。筒部の径は0.91m、底径は0.39mである。筒部の1~8層は自然堆積であるが、9~13層は掘り方の埋め戻しである。

遺物は、土師器環・甕(第242図21~24)が出土している。23は9世紀代で器面の風化が著しい。それ以外は、8世紀中葉のものである。他にも陶時期の土師器環・甕、須恵器が出土している。須恵器は皿・椀等で、新しい時期の遺物が多い。須恵器環を転用した甕の破片も出土している。破片のため図示でき

なかったが、底部調整はヘラケズリで、南比企産である。土師も出土している。また、上層からは、土器以外に馬歯が出土している。

時期は、8世紀中葉である。

第49号井戸跡 (第239図)

E-25グリッドに位置する。西側に第190号住居跡がある。

平面形は円形で、規模は長径0.97m、短径0.87m、深さ0.98mである。筒状に掘り込まれ、底部は北側に寄っている。覆土は自然堆積である。5層は白色粘土層である。6層は有機物の腐食土が含まれている。

遺物は、須恵器甕、円筒埴輪(第242図25・26)が出土している。25は木野産である。26は円筒埴輪の底部である。他にも、8世紀初頭の土師器環・甕の小片が多く出土している。埴輪は混入である。

時期は8世紀と考えられる。

第50号井戸跡 (第239図)

D-26グリッドに位置する。

平面形は楕円形である。規模は長径0.9m、短径0.78m、深さ1.15mである。西側は筒状に、東側はロート状に掘り込まれ、筒部は西に寄っている。筒部の径は0.45m、底径は0.32mである。

遺物は出土しなかった。

第51号井戸跡 (第239図)

C-28グリッドに位置する。第10号溝跡と重複関係にあり、本井戸跡の方が新しい。

平面形は円形である。規模は長径3.56m、短径3.24m、深さは2.80m以上であるが、安全上の理由から完掘することが出来なかった。楕円状に掘り込まれている。覆土は自然堆積である。4層以下は、掘り方の土が流れて堆積したと考えられる。1~3層は外側からの流れ込みである。

遺物は、須恵器甕、土師器環、常滑の鉢、在地産の銅(第242図27~30)である。28は須恵器甕の口縁部の破片である。8本の櫛状工具により、波状文が施されている。7世紀代のものと考えられる。28以

外は中世の遺物である。29は常滑の鉢で、底部が削かれている。30は須恵質の鍋で、口縁部に穿孔がある。また、礎石(第244図47)が出土している。石材は角閃石安山岩である。

時期は13世紀後半である。

第52号井戸跡(第239図)

C-30グリッドに位置する。

平面形は円形で、規模は長径1.25m、短径1.15m、深さは1.17m以上あるが、安全上の理由から完掘することが出来なかった。ロート状に掘り込まれ、筒部の径は0.68mである。

遺物は、土師器製の破片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。

時期は古代であり、それ以上は不明である。

第53号井戸跡(第240図)

C-30・31グリッドに位置する。第65号掘立柱建物跡、第202号土壇と重複関係にあり、本井戸跡がもっとも新しい。

平面形は楕円形である。規模は長径1.92m、短径1.83m、深さは1.88m以上であるが、安全上の理由から完掘することが出来なかった。ロート状に掘り込まれている。筒部の径は0.96mである。覆土は自然堆積である。1層は礫が含まれ、外部からの流れ込みである。2～5層は掘り方である。

遺物は、出土しなかった。

第54号井戸跡(第239図)

O-23グリッドに位置する。

平面形は円形である。規模は長径0.66m、短径0.60m、深さ1.12mである。ロート状に掘り込まれている。覆土は1～3層は自然堆積で、4～18層は黄褐色土と灰暗褐色土が互層をなし、埋め戻しである。

遺物は、底面から0.1mで土師器環(第242図31)が出土している。6世紀後半である。

第55号井戸跡(第240図)

N-19グリッドに位置する。南側に第13号溝跡がある。

平面形は楕円形である。規模は長径0.82m、短径0.66m、深さ1.00mである。筒状に掘り込まれている。非戸跡上部と底部に礫が多く出土し、石組みの非戸が崩落したものと考えられる。

遺物は、土師器環・小型壺(第242図32～34)が出土している。34は底面で、礫につぶされた状態で出土した。時期は、7世紀中葉である。

第56号井戸跡(第240図)

B-26・27グリッドに位置する。第193・194号土壇と重複関係にあり、第194号土壇より、本井戸跡の方が古い。第193号土壇との新旧は、不明である。

平面形は円形である。規模は長径2.47m、短径2.43m、深さ1.64mである。大きな掘り方を造って筒部を掘り込んでいる。筒部の径は1.10mである。覆土は自然堆積であるが、1・2層は大粒の礫を多量に含み、外部の礫を用いた施設などから流れ込んだと考えられる。3～5層は掘り方である。

遺物は、比較的まとまって出土している。土師器環・皿・甕、須恵器環・甕(第242・243図35～43)がある。35は内面に放射状の暗文がみられる。38～40は木野産である。どれも体部下端にヘラケズリが施されている。41は甕の底部で木葉痕がみられる。古墳時代のものである可能性もある。

時期は8世紀前半である。

第57号井戸跡(第240図)

A・B-27グリッドに位置する。南側に第34号溝跡がある。

平面形は円形である。規模は長径2.60m、短径2.54m、深さ2.56mである。ロート状に掘り込まれているが、底面の径が大きく、他のものとはやや様相を異にする。筒部の径は1.74mである。覆土は埋め戻されている。

遺物は、片口鉢、礎石(第243図44・第244図48)が出土している。44は在地産のものである。48は、丸いくほみの周辺に粘性の高い黒色の有機物が付着している。柱の痕跡と考えられる。その他に、常滑甕の肩部等が出土したが図示できなかった。

第126表 井戸跡一覧表

(m)

番号	グリッド	長径	短径	深さ	重複遺構	時期	備考
33	M-14	1.67	1.46	1.04	SD12	9 C後	
34	P-15・16	0.40	0.40	1.04		8 C前	
35	N-17	0.44	0.40	0.96		不明(8 C前)	
36	H-19	0.44	0.44	1.04		不明(8 C前)	
37	C-22	3.82	3.26	3.86	SJ137・172, SB58・59	9 C後~10 C前	木組み
38	O-17	0.52	0.45	1.04		6 C後	
39	C・D-20	1.42	1.38	1.45		平安後半	
40	H-22	2.64	2.57	1.58		9 C後	
41	I-16	0.56	0.54	0.84		不明(8 C前)	
42	M-19	0.50	0.50	1.52		7 C中	
43	M-19	0.58	0.56	1.14		不明(8 C前)	
44	N-19	0.57	0.55	1.42		7 C後	
45	O-21	0.65	0.65	0.88		不明(8 C前)	
46	O-19	0.49	0.45	1.13		不明(8 C前)	
47	Q-20	0.46	0.42	0.96		7 C後	
48	E-25	2.95	2.62	1.74	SJ190	8 C中	
49	E-26	0.97	0.87	0.98		8 C前	
50	D-26	0.90	0.78	1.15		不明	
51	C-28	3.56	3.24	2.80	SD10	未完掘 13 C後	
52	C-30	1.25	1.15	1.17		未完掘 古代	
53	C-30・31	1.92	1.83	1.88	SB65, SK202	未完掘 不明	
54	O-23	0.66	0.60	1.12		6 C後	
55	N-19	0.82	0.66	1.00		7 C中	石組み
56	B-26・27	2.47	2.43	1.64	SK193・194	8 C前	
57	A・B-27	2.60	2.54	2.56		中世	
58	B-23	0.47	0.39	0.78	SJ157・SB53	古代	
59	B-24	0.64	0.58	1.24		不明(8 C前)	
60	P-22	0.43	0.36	0.84		7 C後	

時期は中世である。

第58号井戸跡(第240図)

B-23グリッドに位置する。第157号住居跡、第53号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本井戸跡がもっとも新しい。

平面形は楕円形である。規模は長径0.47m、短径0.39m、深さ0.78mである。筒状に掘り込まれている。

遺物は、土師器製の小片が出土しているが、図示できるものはなかった。

第59号井戸跡(第240図)

B-24グリッドに位置する。西側に第155号住居跡が、東側には第22号溝跡がある。

平面形は円形である。規模は長径0.64m、短径

0.58m、深さ1.24mである。筒状に掘り込まれている。

遺物は、出土しなかった。

第60号井戸跡(第240図)

P-22グリッドに位置する。

平面形は楕円形である。規模は長径0.43m、短径0.36m、深さ0.84mである。筒状に掘り込まれている。

遺物は、土師器環・甕(第243図45・46)が出土している。環は9世紀のもので、甕は7世紀後半のものである。他に、7世紀後半の土師器環・甕の小破片が出土している。

時期は7世紀後半と考えられる。

(5) 土壌

大奇遺跡Ⅱ区から検出された土壌は、270基である。第1～87号土壌は「大奇遺跡Ⅰ」で報告した。今回報告するのは、第88～270号土壌の183基である。土壌は北側のA～Eグリッドに集中し、南へ行くほど少なくなっている。第10号溝跡より南側には、わずかに18基しか分布していなかった。

土壌は、平面形態から5種類に分類した。

- | | |
|-------|-------|
| A—円形 | D—長方形 |
| B—楕円形 | E—不整形 |
| C—方形 | |

A. 円形

円形の土壌は76基検出された。調査区北側に多く分布し、特に、D・E-22・23グリッドとB-26グリッドに集中している。

規模は、径0.70～1.20mで、深さは0.30m以上のものは10数基であり、ほとんどが0.10～0.20m代である。図示可能な遺物は出土していない。

B. 楕円形

楕円形の土壌は20基検出された。ほとんどが第10号溝跡より北側に分布し、南側の低地に分布するのは、第103・135号土壌だけである。特に集中する場所はB-36・37、B・C-26～28、G-I-21・22グリッドである。

規模は、長径1.20～2.00m、短径0.60～1.00m又は1.50m前後、深さ0.10～0.20mが主体的である。規模の大きい土壌としては、第123・128号土壌があげられる。

長軸方向は、N-S、N-66～77-E、N-70～75-Wが多い。

図示した遺物が出土した土壌は、第124・128・155・230号土壌である。第124号土壌からは、土師器甕(第259図10)が出土している。北武蔵型で、時期は8世紀中葉である。第128号土壌からは、土師器杯・甕(第259図11・12)が出土している。11は北武蔵型の丸底杯で、体部下端をヘラケズリしている。12も北武蔵型である。時期は8世紀中葉である。第155号土壌か

らは土師器杯・皿、須恵器甕(第259図15～17)が出土している。15は北武蔵型の丸底杯で、16は皿である。17は甕の破片である。外面は平行叩きに、カキ目か施されていて、内面は背海波文の当て具を丁寧にナテ消している。胎土はきめが細かく含有物は少ない。産地は不明である。時期は8世紀前半～中葉である。第230号土壌からは、土師器杯・鉢・甕(第260図32～34)が出土している。32は北武蔵型の丸底杯である。33は口縁部が大きく開いた鉢である。外面はヘラケズリを施さず、かるいなテのみで、輪積み痕が明瞭に残っている。底部の調整は不明である。34は甕の胴部から底部にかけての破片である。胴部下側に内側から穿孔が施されている。時期は8世紀前半である。

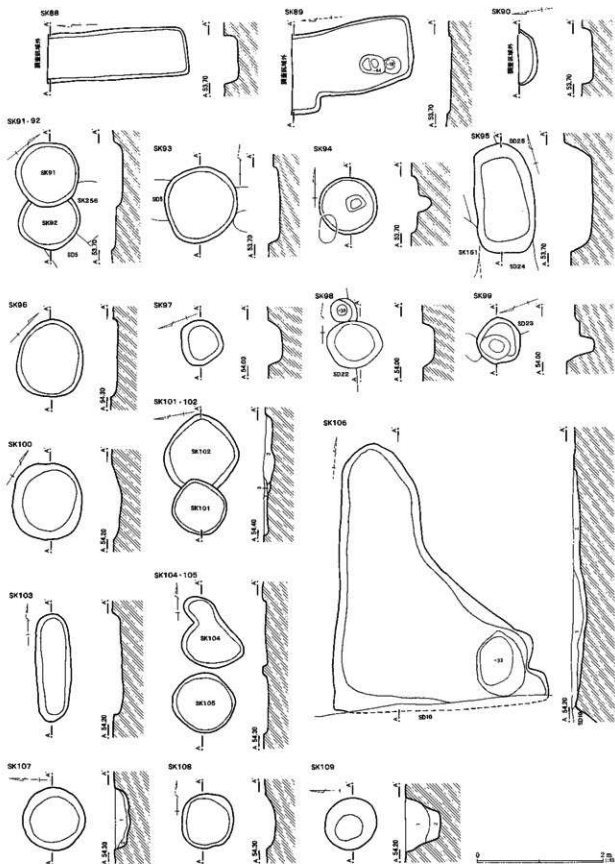
C. 方形

方形の土壌は18基検出された。ほとんど第10号溝跡より北側にあり、2～3基の単位で点在するように分布している。南側に分布するのは、第253・264号土壌のみである。

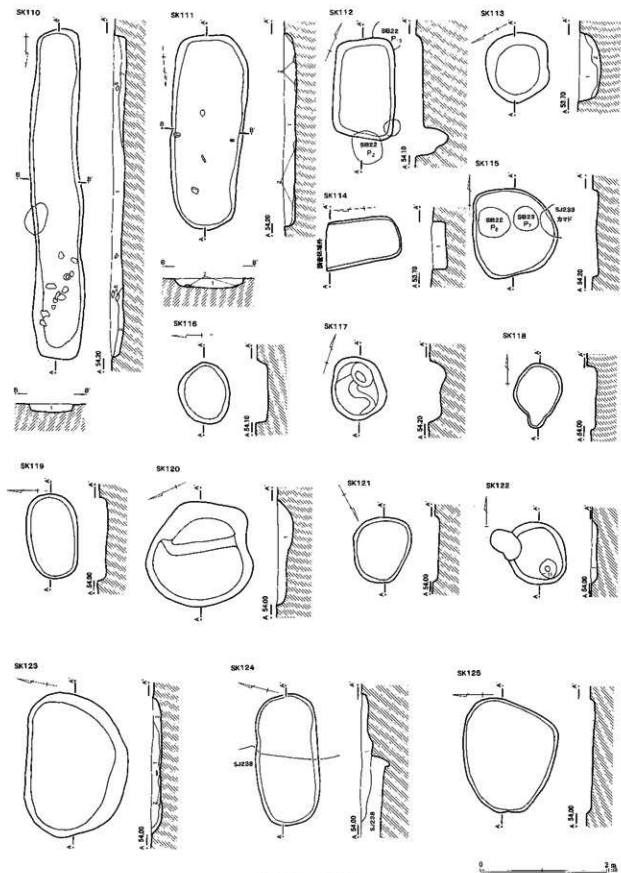
規模は、長軸1.40～2.00mのものがほとんどで、中でも1.50m代が多い。短軸は0.90～1.05m、又は1.40～1.60mがほとんどである。深さは、0.10～0.30mである。

長軸方位は、N-8°-W-N-6°-Eのほぼ南北を向くものが約半数を占め、次いで、N-85°-89°-Eの東西を向くものが多い。

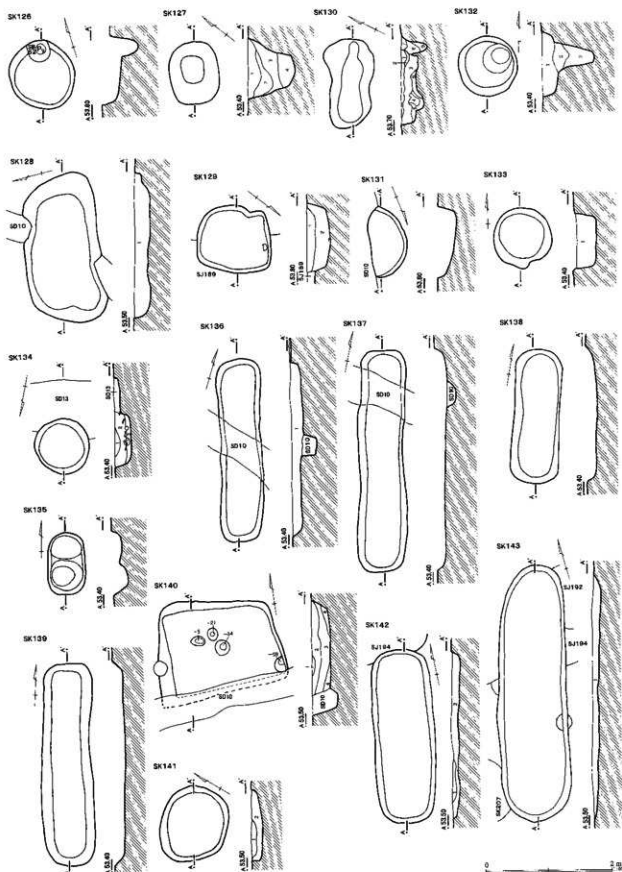
図示した遺物が出土した土壌は、第112・208・215・218号土壌である。第112号土壌からは土師器杯(第259図5)が出土している。時期は8世紀中葉である。第208号土壌からは、白磁碗(第260図24)が出土している。時期は18世紀代である。第215号土壌からは、土師器杯・皿(第260図26～28)が出土している。時期は8世紀前半～中葉である。第218号土壌からは土師器杯(第260図29)が出土している。口縁部にヨコナテが施されている。時期は9世紀代である。



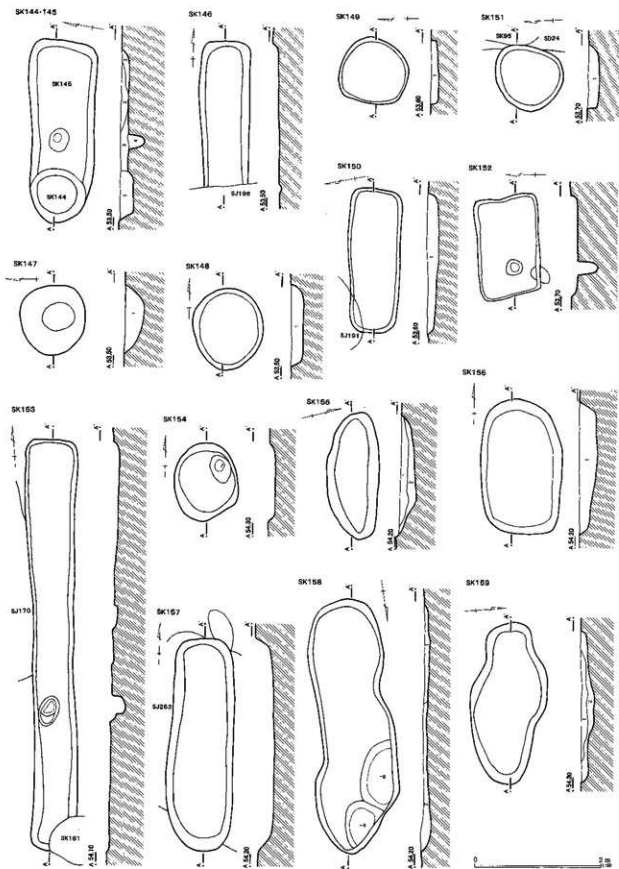
第250图 土坑(1)



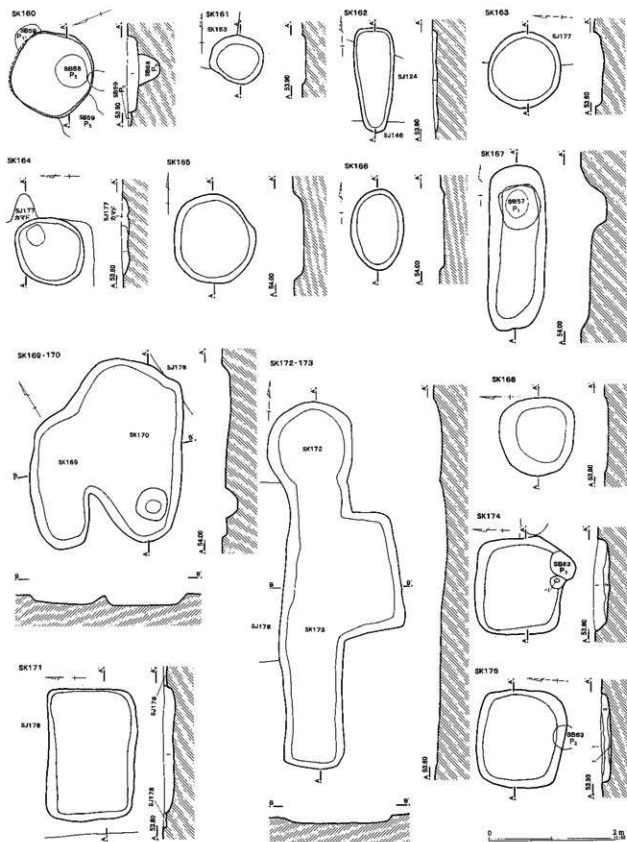
第251图 土壤(2)



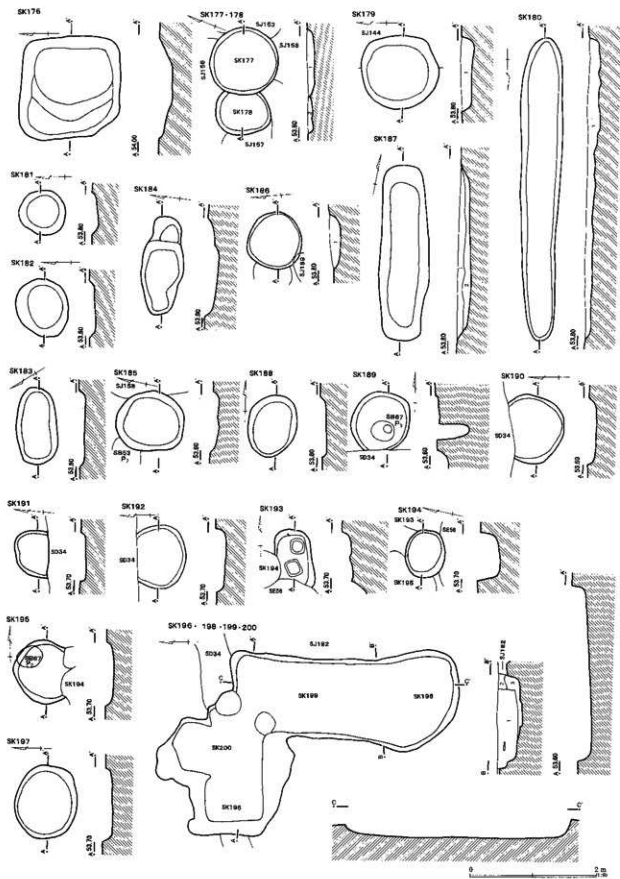
第252図 土坑(3)



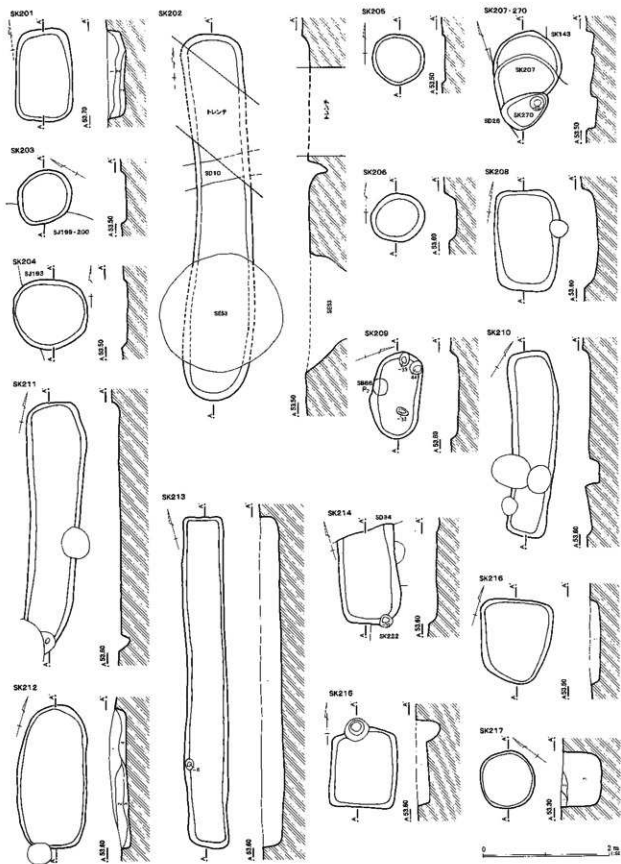
第253図 土坑(4)



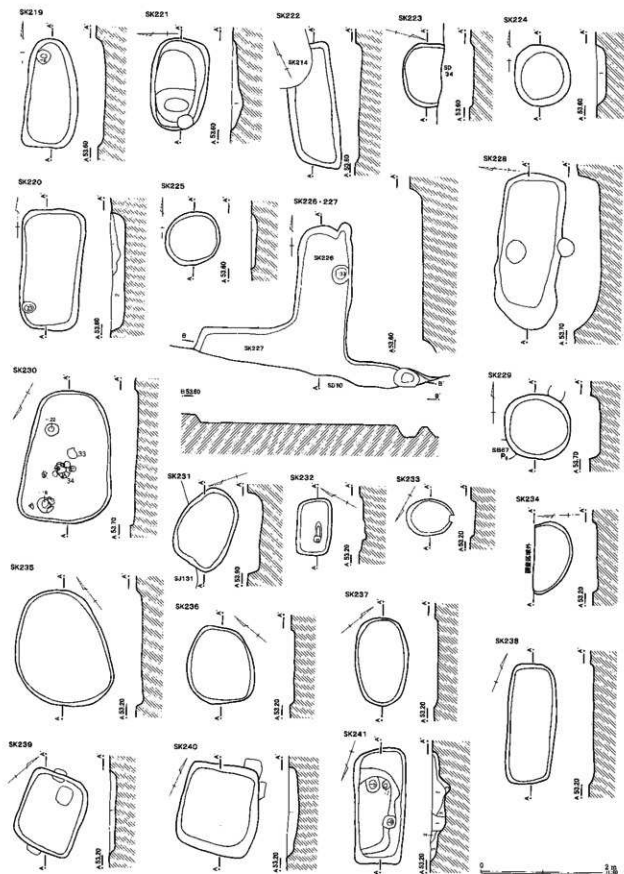
第254图 土壤(5)



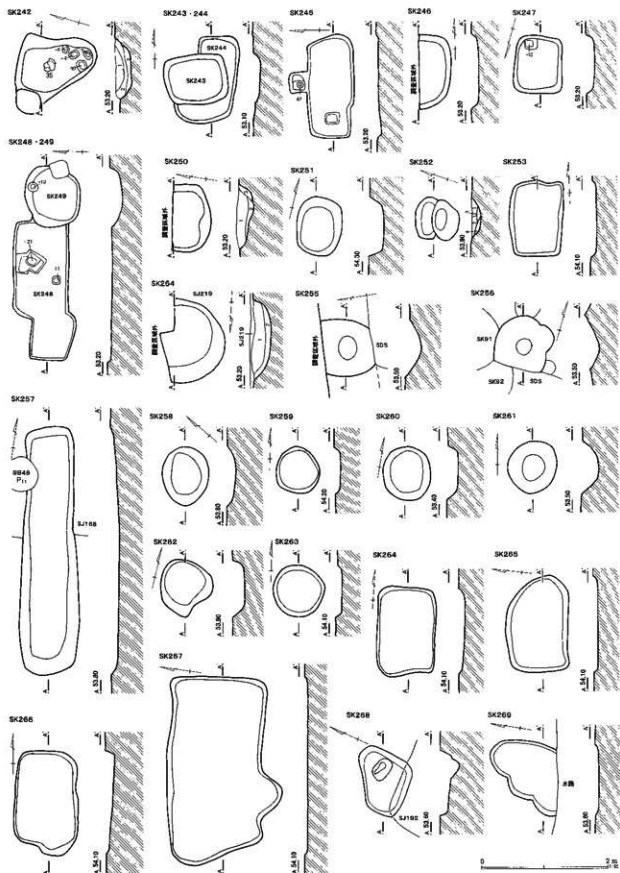
第255図 土坑(6)



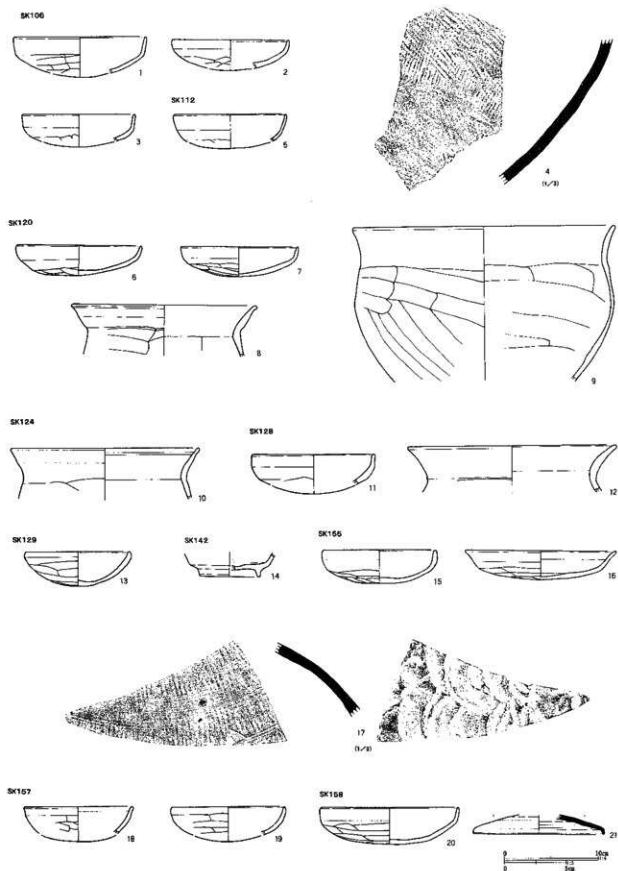
第256図 土壙(7)



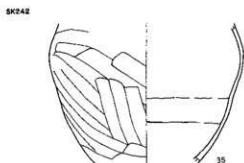
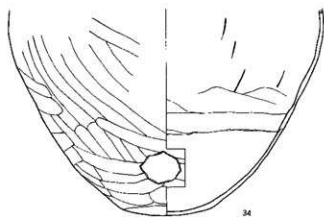
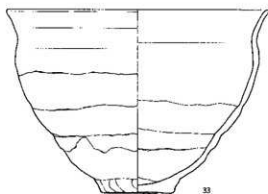
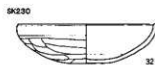
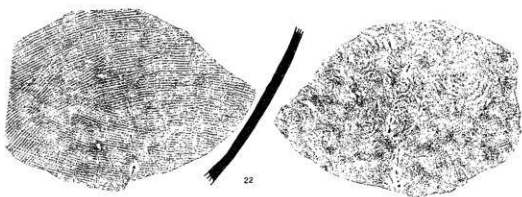
第257号 土坑(8)



第258图 土坑(9)



第259図 土壇出土遺物(1)



第260図 土壙出土遺物(2)

第127表 土壌出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	土師環	(14.0)	3.8		DEH	2	褐	15	SK106
2	土師環	(12.4)	3.0		ADE	2	褐	15	SK106
3	土師環	(12.0)	2.6		DEH	2	明褐	15	SK106
4	須恵甕		11.3		BEK	3	黄灰	破片	SK106 未野産
5	土師環	(12.0)	2.7		ADE	2	橙褐	5	SK112
6	土師環	(13.4)	3.2		ADE	3	明褐	75	SK120
7	土師環	(12.4)	3.1		ADE	2	橙褐	25	SK120
8	土師甕	(19.4)	5.4		ADEH	1	赤褐	15	SK120
9	土師甕	(27.6)	16.2		DEH	2	明褐	25	SK120
10	土師甕	(20.0)	5.4		DEH	2	褐	15	SK124
11	土師環	(13.0)	3.1		ADEH	3	橙褐	15	SK128 覆土
12	土師甕	(22.0)	5.0		ADEH	2	褐	15	SK128 覆土
13	土師環	(11.0)	3.6		ADE	2	橙褐	30	SK129 No.1
14	青磁高台碗		2.6	(6.4)		1	緑灰	20	SK142
15	土師環	(12.0)	3.5		ADE	2	橙褐	40	SK155
16	土師皿	(15.8)	3.1		ADEH	3	赤褐	35	SK155
17	須恵甕		5.8		EHK	1	青灰	破片	SK155 産地不明
18	土師環	(11.6)	2.9		DE	1	橙褐	5	SK157
19	土師環	(12.0)	3.0		DEH	2	橙褐	10	SK157
20	土師環	14.6	3.9		ADR	2	明褐	75	SK158
21	須恵蓋	(13.8)	2.0		BE	2	灰	10	SK158 未野産 A
22	須恵甕		16.7		BEI	1	灰白	破片	SK158 未野産
23	須恵環		2.8	(10.0)	BE	2	灰	10	SK199 未野産 A
24	白磁碗	(12.0)	2.7		K	2	白	10	SK208
25	土師環	(16.4)	4.6		DEH	2	明褐	20	SK212
26	土師環	(12.0)	2.8		DEH	3	暗褐	20	SK215
27	土師環	(13.0)	3.0		ADE	2	橙褐	10	SK215
28	土師皿	(13.0)	3.1		BDE	2	橙褐	25	SK215
29	土師環	(13.0)	2.9		DEH	2	明褐	15	SK218
30	土師環	(12.0)	2.7		ADE	2	褐	5	SK220
31	土師環	(11.0)	2.2		ADE	2	明褐	10	SK220
32	土師環	(14.4)	4.1		ADE	2	褐	45	SK230 口縁部黒炭あり
33	土師鉢	(27.4)	19.3	7.6	DEH	2	明茶褐	60	SK230 No.2
34	土師甕		21.8	9.2	ADE	2	橙褐	40	SK230 胴部下半に穿孔か SK230 No.1
35	土師甕		14.8		DEH	2	暗褐	30	SK242 No.1

D. 長方形

長方形の上墳は32基検出された。すべて第10号溝跡より北側に分布している。全体数のおよそ2/3が調査区北東部に位置する。特に第26・27号溝跡の東西に集中している。

規模は、長軸2.00～2.50mが最も多く、1.07～2.00mと2.50～2.80mのものも多くみられる。3.5m以上は少なく、最大は6.45mである。短軸は0.70～0.95mが多く、特に0.80m前後が多い。深さは、0.20mのものが多い。

長軸方向は、28基がN-20°-W-N-20°-Eの

間を向いている。その内13基は、ほぼ南北を向いており、他の3基は東西を向いている。

図示した遺物が出土した土壌は、第142・157・212・220号土壌である。第142号土壌からは、龍泉窯系の青磁碗(第259図14)が出土している。時期は18世紀代である。第157号土壌からは、土師器環(第259図18・19)が出土している。時期は7世紀末～8世紀初頭である。第212号土壌からは、土師器環(第260図25)が出土している。時期は8世紀前半である。第220号土壌からは、土師器環(第260図30・31)が出土している。時期は7世紀末～8世紀初頭である。

第128表 土壌一覧表

(m)

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	重複構造	時期	備考
88	A-30	(2.20)	0.80	0.23	N-1'-W			D
89	A-27	(1.90)	1.24	0.07				E
90	A-25	0.88	(0.26)	0.18				A
91	A-28	1.02	1.01	0.14		SD5, SK91・256		A
92	A-28	0.98	(0.68)	0.06		SD5, SK92・256		A
93	A-28	1.20	1.16	0.20		SD5		A
94	A-26	(0.93)	0.90	0.10				A
95	A-25	1.73	0.90	0.44	N-16'-E	SD24・25, SK151		D
96	I-14	1.23	1.08	0.12				A
97	A-24	0.72	0.67	0.23				A
98	A-24	0.89	0.73	0.21		SD22		A
99	A-24・25	0.72	0.70	0.46		SD23		A
100	J-17	1.23	1.20	0.15				A
101	Q-13	0.90	0.90	0.06		SK102		A
102	Q-13・14	1.22	(1.04)	0.18		SK101		A
103	O-16	1.71	0.58	0.14	N-6'-E			B
104	O-17	1.26	0.79	0.08				E
105	O-17	1.02	0.94	0.07				A
106	K-17	4.14	3.37	0.25		SD10	8 C前	E
107	G-18	1.00	1.00	0.26				A
108	H-18	0.95	0.88	0.16				A
109	I-18	0.87	0.81	0.57				A
110	I・J-19	5.16	0.80	0.19	N-2'-W			D
111	I・J-20	3.06	1.14	0.18	N-7'-E			D
112	G-19・26	1.55	0.98	0.12	N-23'-W	SB22・23	8 C中	C
113	A-24	1.10	0.98	0.34				A
114	A-24	(1.16)	0.72	0.23	N-3'-W			D
115	G-19	1.48	1.12	0.08		SJ233, SB22・23	9 C以前	A
116	J-18・19	0.97	0.80	0.21				A
117	H-18	1.00	0.88	0.26		SB32		A
118	H-21	1.01	0.75	0.16				E
119	H-21	1.32	0.82	0.13	N-77'-E			B
120	H-21・22	1.82	1.68	0.26			8 C前-中	E
121	H-21	1.04	0.90	0.07				A
122	F-20	0.98	0.94	0.10				A
123	H・I-21・22	2.28	1.62	0.17	N-66'-E			B
124	G-21	2.07	0.98	0.17	N-74'-E	SJ238・241	8 C中	B
125	G・H-22	1.85	1.52	0.08	N-77'-E			B
126	E-25	1.08	1.06	0.33		SB52, SD10		A
127	F-26	0.98	0.77	0.74				A
128	E-26	2.35	1.22	0.27	N-75'-W	SD10	8 C中	B
129	F-24	1.17	1.05	0.37		SJ189	7 C後	E
130	G・H-25	1.38	0.79	0.42				E
131	E-25	1.11	(0.60)	0.31		SD10		A
132	I-27	0.98	0.95	0.84				A
133	I-27	0.95	0.91	0.37				E
134	J-27	0.87	0.86	0.27		SD13	近世以降	A
135	H-26	0.96	0.58	0.27	N-0'			B
136	C-32	2.88	0.73	0.20	N-15'-W	SB35, SD10	7 C後以降	D
137	C-32	3.45	0.79	0.20	N-9'-W	SB65, SD10	7 C後以降	D
138	C-31・32	2.10	0.75	0.18	N-2'-W	SB55		D
139	C-31	3.18	0.82	0.20	N-1'-W	SB55		D

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	重複構造	時期	備考
140	C-30	2.02	(1.43)	0.29	N-86°-E	SD10	7 C 後以降	A
141	C-29	1.24	1.07	0.17				A
142	B・C-29	2.70	0.96	0.10	N-10°-E	SJ194	18C	D
143	B・C-29	4.02	1.10	0.12	N-15°-E	SJ192・194, SK207	8 C 前以降	D
144	B-30	0.87	0.85	0.22		SK145		A
145	B-30	(2.01)	1.05	0.38	N-84°-E	SK144		D
146	B-30	(2.25)	0.80	0.16	N-1°-W	SJ196		D
147	B-32	1.10	1.05	0.34				A
148	B-32	1.31	1.11	0.20				A
149	B-29	1.11	1.06	0.12				A
150	B-29	2.28	0.85	0.18	N-81°-W	SJ191	8 C 初以降	D
151	A-25	1.10	1.03	0.18		SD24, SK95		A
152	A-27	1.58	1.03	0.10	N-85°-E			C
153	C・D-20	6.45	0.82	0.27	N-2°-E	SJ170, SK161	10 C 前以降	D
154	H-16	1.22	1.00	0.11				A
155	I-16	1.98	0.82	0.24	N-70°-W		8 C 前-中	B
156	I・J-17	2.08	1.30	0.30	N-1°-W			D
157	I・J-17	3.32	1.08	0.33	N-1°-E	SJ253	7 C 末-8 C 初	D
158	I・J-16	3.97	1.35	0.16				E
159	I-16	2.54	1.22	0.20				E
160	C-21	1.37	1.30	0.16		SJ171, SB58・59	10 C 後以降	A
161	D-20・21	0.96	0.77	0.04		SK133		A
162	B-23	1.63	0.64	0.09	N-0°	SJ124・146	8 C 前以降	B
163	D-22	1.18	1.14	0.15		SJ177		A
164	D-22・23	1.22	1.04	0.11		SJ177	9 C 後以降	A
165	D-22	1.40	1.30	0.16				A
166	D-22	1.27	0.84	0.06	N-0°			B
167	D・E-22	2.57	0.93	0.17	N-1°-E	SB57		D
168	D-23	1.26	0.18	0.06				A
169	D-22	2.08	0.98	0.15		SK170		E
170	D・E-22	2.92	1.86	0.16		SJ178, SK169		E
171	D-22・23	2.04	1.40	0.20	N-89°-E	SJ178		C
172	D-23	1.48	1.32	0.13		SJ178, SK173		E
173	D・E-23	4.33	1.94	0.20		SJ178, SK172		E
174	B-22	1.56	1.51	0.24	N-88°-E	SB63		C
175	B-22	1.53	1.41	0.15	N-90°-E	SB63		C
176	D-23	1.61	1.57	0.20	N-4°-W			C
177	B-23	1.08	1.06	0.13		SJ153・156・158, SK178	9 C 後以降	A
178	B-23	0.88	(0.61)	0.08		SJ156・157・158, SK177	9 C 後以降	A
179	B-22・23	1.23	1.14	0.21		SJ144, SB29		A
180	B・C-23	4.73	0.64	0.22	N-2°-E			D
181	D-22	0.76	0.68	0.09		SJ177	9 C 後以降	A
182	D-22	0.95	0.80	0.09		SJ177	9 C 後以降	A
183	D-22	1.20	0.66	0.09	N-54°-W	SB57		B
184	D-21	1.53	0.68	0.22				E
185	B-23	1.10	0.90	0.13		SJ158, SB53	8 C 前以降	A
186	D・E-25	0.90	0.86	0.17		SJ189	7 C 後以前	A
187	D・E-24	2.73	0.80	0.21	N-11°-W			D
188	A-23	0.97	0.76	0.10				A
189	B-26	1.00	0.91	0.08		SB67, SD34		A
190	B-26	1.11	1.03	0.11		SB67, SD34		A
191	B-26・27	0.75	(0.56)	0.11		SD34		A
192	B-26	1.00	(0.79)	0.16		SB67, SD34		A

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	重複遺構	時期	備考
193	B-27	(0.77)	0.57	0.18	N-6°-W	SE56, SK194		C
194	B-26・27	0.74	0.63	0.36		SE56, SK193・195		A
195	B-26	1.00	(0.93)	0.11		SB67, SK194		A
196	B-26	2.90	1.50	0.24		SJ181・182, SD34, SK199・200	8 C 後以降	E
197	B-26	1.16	1.02	0.16				A
198-199	B-26	3.56	1.52	0.39		SJ181・182, SD34, SK196・200	8 C 前以降	F
200	B-26	2.16	1.06	0.24		SJ181・182, SD34, SK196・199	8 C 前以降	E
201	A・B-29	1.44	0.91	0.27	N-6°-E			C
202	C-31	3.52	0.93	0.12	N-1°-E	SD10, SE56		D
203	B-31	0.94	0.84	0.09		SJ199・200	7 C 中以降	A
204	B・C-29	1.20	1.08	0.10		SJ193	8 C 前以降	A
205	B-30・31	0.85	0.78	0.05				A
206	C-31	0.86	0.77	0.18				A
207	C-29	(1.03)	1.10	0.14		SD26, SK143・270		E
208	B-28	1.55	1.05	0.26	N-8°-W	SB66	18C	C
209	B-28	1.37	0.80	0.12	N-7°-W	SB66		B
210	B-28	2.93	0.76	0.11	N-29°-W	SB66		D
211	B-28	3.89	0.92	0.13	N-7°-W			D
212	C-28	2.23	1.11	0.31	N-16°-W		8 C 前	D
213	B-27・28, C-27	5.16	0.71	0.38	N-16°-E			D
214	B-27	(1.66)	0.90	0.14	N-13°-E	SD34, SK222		D
215	B-27	1.24	1.02	0.21	N-3°-E		8 C 前~中	C
216	C-26	1.33	1.18	0.15	N-14°-W			B
217	C-26	0.90	0.86	0.65				A
218	A-22	1.33	(1.02)	0.48	N-0°	SJ129	9 C 代	C
219	B-27	1.71	0.83	0.13	N-0°			B
220	B-27	1.90	1.01	0.25	N-3°-E		7 C 末~8 C 初	D
221	C-27	1.45	0.89	0.17	N-75°-W			B
222	B-27	2.00	0.75	0.06	N-20°-E	SK214		D
223	B-28	0.98	(0.64)	0.04		SD34		A
224	B-26	0.95	0.92	0.15				A
225	C-26	0.89	0.85	0.07				A
226	C-29	(2.47)	0.91	0.23		SD10, SK227		E
227	C-29	3.88	0.61	0.14		SD10, SK226		E
228	B-26	2.44	1.00	0.40	N-89°-W			D
229	B-26	1.02	1.02	0.15		SB67		A
230	B・C-27	2.07	1.45	0.10	N-26°-W		8 C 前	B
231	B・C-21	1.26	0.88	0.22	N-38°-W	SJ131	11C 前以前	B
232	B-35・36	0.88	0.54	0.12	N-62°-E			C
233	B-35	0.74	0.59	0.08				A
234	B-36・37	1.16	(0.60)	0.08				A
235	B-36・37	1.80	1.50	0.12	N-57°-W			B
236	B-36	1.20	1.06	0.06	N-41°-E			B
237	B-36	1.36	0.86	0.06	N-45°-W			B
238	B-36	1.88	0.79	0.07	N-19°-W			D
239	B-36	1.37	1.03	0.09	N-27°-W			C
240	B-35・36	1.41	1.26	0.17	N-15°-W			C
241	B-35	1.80	0.84	0.30	N-18°-W			D
242	B-35	1.32	0.90	0.24		SJ222	8 C 前	E
243	B-34	0.98	0.80	0.14		SK244		E
244	B-34	1.40	0.90	0.05		SK243		E
245	B-34	1.62	0.89	0.05				E
246	B-34	1.18	(0.53)	0.12				A

番号	グリッド	長径	短径	深さ	長軸方位	重複遺構	時期	備考
247	B-35	0.93	0.78	0.14	N-16°-W			C
248	C-34	2.25	0.86	0.06		SK249		E
249	C-34	1.01	0.88	0.20		SK248		E
250	A-34	1.06	(0.62)	0.28		SJ219	7C中以降	A
251	O-20	0.91	0.72	0.22				A
252	H-21	0.76	0.60	0.13				E
253	M-18	1.20	0.87	0.11	N-2°-E			C
254	A-34	1.30	(1.00)	0.34		SJ219	7C中以降	A
255	A-28	0.90	(0.78)	0.22		SD5		A
256	A-28	1.01	0.82	0.20		SD5, SK91・92		E
257	E-24	3.93	0.90	0.19	N-9°-W	SJ168, SJ49		D
258	E-22	0.94	0.73	0.14				A
259	P-21	0.72	0.69	0.09				A
260	D-30	0.86	0.75	0.18				A
261	B-32	0.83	0.73	0.25				A
262	H-23	0.91	0.82	0.20				E
263	P-21	0.82	0.82	0.10				A
264	J・K-21	1.42	0.92	0.10	N-4°-W			C
265	K・L-20	1.56	0.98	0.09				E
266	J・K-21	1.63	1.02	0.14				E
267	K・L-20	2.97	1.50	0.05				E
268	B-29	1.16	(0.70)	0.30		SJ192	7C末～8C初以降	E
269	J-16	(1.16)	1.02	0.06				E
270	C-29	0.75	0.49	0.20		SD26, SK207		E

「大奇遺跡1」で報告した第1号土墳墓は長方形で、長軸方向はほぼ北南を向いている。ロクロ上野器高台付椀(第271図12)が出土している。長方形の上墳の中には、この土墳墓に形態や軸方向が類似するものがあり、土墳墓である可能性が高い。

E. 不整形

不整形の土墳は37基検出された。の中には、複数の土墳が重複するものと、土墳の形自体が不整形なものがある。今回は両者を無理に分類することはせず、一括して不整形として扱う。

調査区中央部と北側に分布する。規模などは、個体差が激しく傾向がでなかった。

図示した遺物が出土した土墳は、第106・120・129・158・199・242号土墳である。第106号土墳からは、土師器環、須恵器甕(第259図1～4)が出土している。4は末野産須恵器の甕の破片である。外面は平行叩きが施されているが、破片の下半はナデ消され

ている。内面は青海波文と考えられ、凹凸はあるが、丁寧にナデられていて不明瞭である。時期は8世紀前半である。第120号土墳からは土師器環・甕(第259図6～9)が出土している。時期は8世紀前半～中葉である。第129号土墳からは土師器環(第259図13)が出土している。時期は7世紀後半である。第158号土墳からは土師器環、須恵器蓋・甕(第259・260図20～22)が出土している。22の甕は、外面が平行叩き、内面は青海波文が施されている。須恵器は末野産で、時期は8世紀前半である。第199号土墳からは須恵器環(第260図23)が出土している。底部下端をヘラケズリしている。底部の調整は回転糸切り後、一定方向のヘラケズリである。末野産である。時期は8世紀前半である。第242号土墳からは土師器甕(第260図35)が出土している。時期は8世紀前半である。

(6) 欄列跡

第4号欄列跡 (第261図)

調査区のはほぼ中央、E・F-21グリッドに位置する。第48号掘立柱建物跡と重複関係にある。直接の前後は不明だが、軸方向からは本欄列が古いと考えられる。P5-6間は攪乱により壊されており、本来はこの位置にもピットがあったものと考えられる。

総延長は約14m、軸方向はN-23°-Wである。各ピットは等間隔に配置されておらず、P3-4間の80cm、P8-9間の2.10mまでバラツキがある。規模は、径40-60cm、深さ15-60cmと幅がある。深さは概ね15-30cmに収まるようである。P2・3が近接し、P5に2箇所の掘り込みが認められることから、建て替えが行われた可能性もある。

付近で同様の軸方向の遺構としては、第9・39・41号掘立柱建物跡、第225号住居跡がある。その位置関係から本欄列は前者と後者を区画していたものと考えられる。

遺物は、図示不能な土師器の坏・壺・甕、須恵器の甕などの胴部の小破片が出土しているのみである。時期は不明だが、関連する可能性のある遺構の時期とするならば、8世紀と考えられる。

第5号欄列跡 (第261図)

調査区のはほぼ中央、I-22-26グリッドに位置する。第10号溝跡の東側を遺構の範囲としたが、西側にも同様のピットが認められることから、更に西側に延びる可能性もある。東側はP1で第6号欄列跡と交差し、両者で施設を構成していたと考えられる。

総延長は約33m、軸方向はほぼ東西軸である。P1-2間は4.80m、P13-14間は4.30mと特に大きく間隔が開いており、出入口の可能性も考えられる。各ピットは等間隔に配置されておらず、いくつかのピットのまとまりが1.8-2.3m間隔で並んで全体を構成しているといった様相である。規模は、径20-50cm、深さ4-36cmと幅がある。深さは概ね10-20cmに収まるようである。覆土の状況を確認

したのは数基にとどまる。ほとんどが自然堆積と考えられる。P23の2層を杭の痕跡と考えると太さ約5cmのものと推定できる。

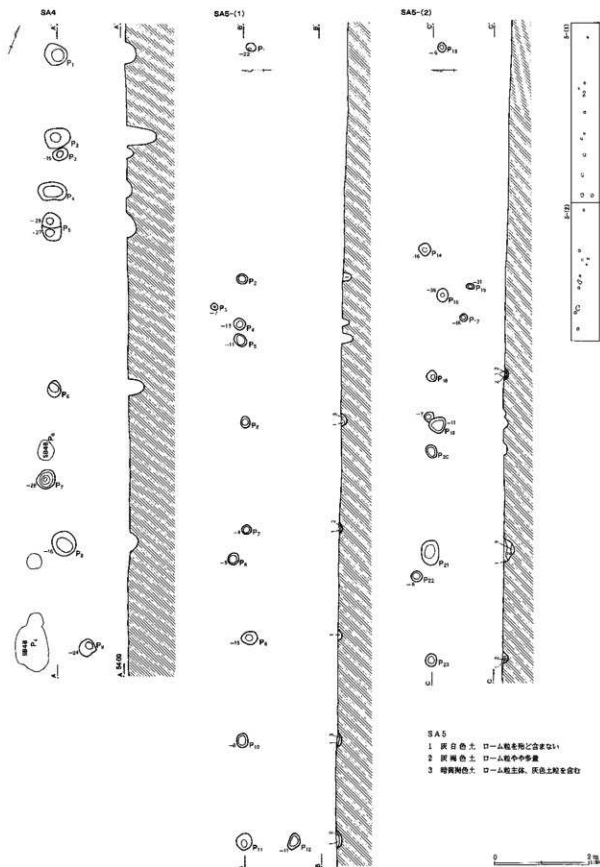
付近で同様の軸方向の遺構としては、第38・49-52・69号掘立柱建物跡がある。その位置関係から本欄列はこれらの南側の区画と考えられる。遺構の分布状況からは、区画自体は更に西側に延長していたものと考えられる。住居跡は東西軸の軸方向になるものが多く、どれが関連するものか特定できないが、いずれかが区画に関連するものと考えられる。

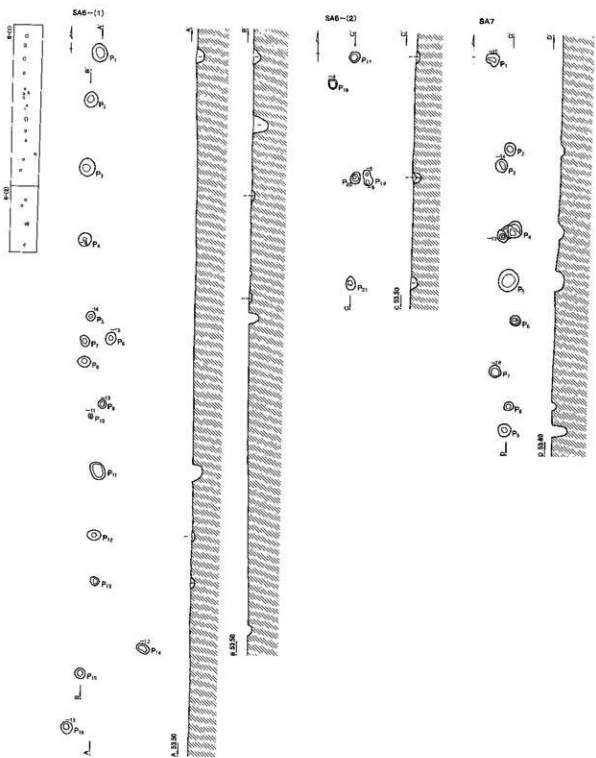
遺物は、図示不能な土師器の坏・甕の小破片が出土している。時期は不明だが、関連する可能性のある遺構の時期とするならば、時期は9・10世紀と考えられる。

第6号欄列跡 (第262図)

調査区のはほぼ中央、G-I-25・26グリッドに位置する。第10号溝跡の南側を遺構の範囲としたが、北側にも同様のピットが散在して認められることから、更に北側に延びる可能性もある。南側はP1で第5号欄列跡と交差し、両者で施設を構成していたと考えられる。

総延長は約22m、軸方向はほぼ南北軸で、若干西に振れる。P16-17間が2.90mとやや大きく間隔が開いており、出入口の可能性も考えられる。各ピットはほぼ等間隔に配置されている部分と、そうではなく、いくつかのピットが集まっている部分がある。P1-2-3-4-5-9-11-12は、1.4-1.6m間隔で並んでいる。P5-10の周囲には複数のピットが集まっている。また、P12-13間は1.0mと間隔が短く、P14は東側に外れた位置にある。あるいは、互い違いにした出入口のようなものの可能性もある。P17以南は、P17・18、P19・20を一組のものと考え、各々2.60m、2.30mとやや間隔が広がっている。規模は、径20-40cm、深さ4-20cmと幅があるものの、全体的に浅い。覆土の状況を確認したのは数基にとどまり、いずれも自然堆積と考え





SA 6
 1 灰白色土 □—山崎北砂層
 2 灰褐色土 □—山崎南砂層



第262岡 横列跡(2)

られる。

付近で同様の軸方向の遺構としては、第38・49-52・69号掘立柱建物跡がある。その位置関係から、本柵列はこれらの南側の区画と考えられる。遺構の分布状況からは、本遺構の延長線上に第51号掘立柱建物跡の東側の側柱が並び、若干位置がずれるが、その北側に第7号柵列跡があることから、区画自体は北側に延長していたものと考えられる。住居跡は東西軸の軸方向になるものが多く、どれか関連するものか特定できないが、いずれかが区画に関連するものと考えられる。

遺物は、図示不能な土師器甕の小破片が出土しているのみである。時期は不明だが、関連する可能性のある遺構の時期とするならば、時期は9・10世紀と考えられる。

第7号柵列跡（第262区）

調査区の北側、D-26グリッドに位置する。南側に第190号住居跡、第51号掘立柱建物跡、第49号井戸跡があり、更にその延長線上に第6号柵列跡がある。

総延長は約8m、軸方向はほぼ南北軸である。各ピットは等間隔には配置されておらず、P1-2・

3-4間が1.90m、1.70mとやや大きく間隔が開いている。その南側はやや間隔が狭く、80cm-1.20mと不揃いである。P2・3、8・9は一組のものと考えられる。また、P4には複数の掘り込みがあることから建て替えられた可能性もある。規模は、径20-50cm、深さ7-30cmと幅があるものの、全体的に浅い。覆上の状況を確認したものはない。

付近で同様の軸方向の遺構としては、第49・51・52・69号掘立柱建物跡がある。その位置関係から、本柵列はこれらの東側の区画と考えられる。若干位置がずれるが、第51号掘立柱建物跡の東側柱の軸線上、第6号柵列跡の延長線上に当たることから、一連の区画施設の可能性もある。また、遺構の範囲の北側にも同様のピットが東西に散在して認められることから、それらと組み合わせになる可能性もある。住居跡は南北軸、東西軸の軸方向になるものが多く、どれか関連するものか特定できないが、いずれかが区画に関連するものと考えられる。

遺物は出土していない。時期は不明だが、関連する可能性のある遺構の時期とするならば、時期は9・10世紀と考えられる。

(7) 土墳墓

大寄遺跡Ⅱ区では、土墳墓が4基検出されている。第1・2号については、既に報告した。本書では、第3・4号について報告する。

第3号土墳墓 (第263図)

調査区の北側、B-25グリッドに位置する。北西4.0mに第4号土墳墓、北6.0mに第1号茶毘跡があり、これらの遺構とも関係すると考えられる。

平面形はやや不整な楕円形である。規模は長軸1.08m、短軸0.45m、深さ0.38mである。断面形は箱形である。主軸方向は、W-Eで、ほぼ東西軸である。床面は段を持ち、西に向かって深くなっている。覆土は埋め戻しである。2・3層は掘り方で、埋め戻されている。1層は埋葬時の被覆土と考えられる。

人骨や古銭は2層の上位から出土し、このレベルに遺体を収めたものと考えられる。東側が大腿骨で、

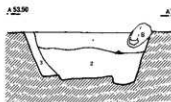
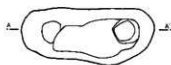
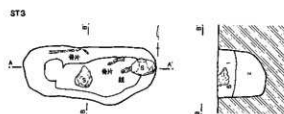
古銭はその上から密着して出土している。北側の骨片は腕の骨のようである。襷はその上位から出土している。東側が熔結凝灰岩(角閃石安山岩)、中央が所謂河原石で石材は不明である。落ち込んだもののように、上位にこれらの礫を用いた構造物があった可能性がある。

遺物は、7枚の古銭が重なった状態で出土している。布が付着しており、それにくるんだ状態で納めたものと考えられる。いずれも北宋銭である。「元祐通寶」(1086年)が2枚、「咸平元寶」(998年)、「皇宋通寶」(1038年)、「元符通寶」(1098年)、「大觀通寶」(1107年)が各1枚で、1枚は判読できない。

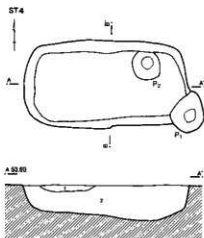
本土墳墓の時期は、12世紀以降の中世のいずれかの時点と考えられる。

第4号土墳墓 (第263図)

調査区の北側、B-25グリッドに位置する。南東



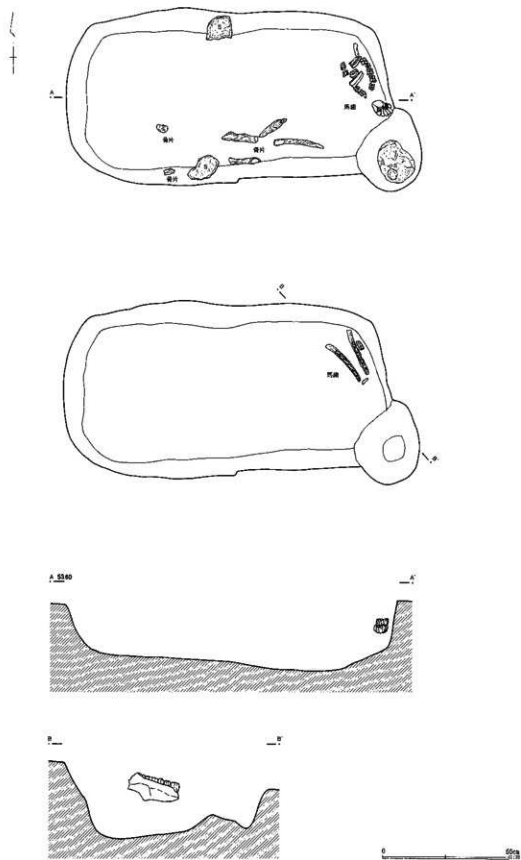
- ST3
- 1 暗褐色土 ローム・黄褐色粘土小ブロック多量
 - 2 暗褐色土 ローム粘土・ローム小ブロック・黄褐色粘土多量、
焼土粒・炭化物粒若干、しまり欠く、粘性强
 - 3 暗褐色土 赤褐色土をベースに黄褐色土を含む、
ローム・焼土粒多量、しまりあり、粘性强



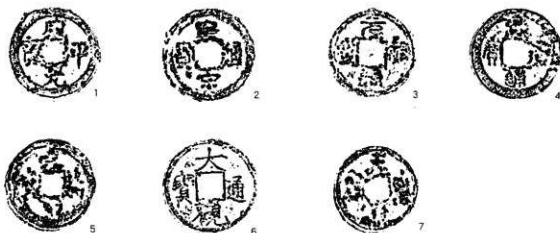
- ST4
- 1 灰褐色土 灰砂・ローム粒多量、しまり少、粘性强
 - 2 暗褐色土 灰褐色土・ローム粒・ローム小ブロック多量、
炭化物粒・焼土粒多量、しまり欠く、粘性强

0 1m

第263図 第3・4号土墳墓



第264图 第4号土槨墓遺物分布圖



第265図 第3号土墳墓出土古銭

4.0mに第3号土墳墓、北東3.0mに第1号茶毘跡があり、これらの遺構とも関係すると考えられる。

本遺構は馬の遺骸を取めた馬の埋葬土墳墓である。

平面形は隅丸長方形で、南東側にピットが取り付くものである。規模は長軸1.33m、短軸0.71m、深さ0.27mである。断面形は箱形である。主軸方向は、W-Eで、ほぼ東西軸である。床面は平坦だが、東壁際がやや浅くなっている。覆土は埋め戻しである。

遺構の北壁際と南東コーナーにはピットが掘り込まれている。P1は径60cm、深さ6cmで、中から人頭大の礫が出土している。P2は径40cm、床面から

の深さ5cmである。

馬の骨や歯は東・南壁際からまとまって出土している。特に東壁際からは顎が良好な状態で出土している。骨の出土位置からは南向きに脚をおった状態で埋葬したと考えられる。礫は北・南壁の中央と、P1から出土している。前者は上位から、後者は底面から出土している。石材は不明である。前者は落ち込んだもののように、上位にこれらの礫を用いた構造物があった可能性がある。P1の礫の性格は不明である。

遺物は出土していない。時期は中世と考えられる。

(8) 茶毘跡

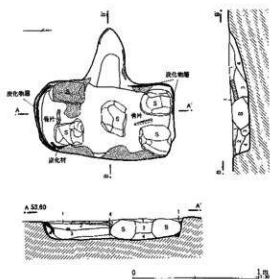
第1号茶毘跡 (第266図)

調査区の北側、B-25グリッドに位置する。第180号住居跡と重複関係にあり、本茶毘跡が新しい。また南6.0mに第3号土墳墓、南西3.0mに第4号土墳墓があり、これらの土墳墓群とも関係する施設と考えられる。

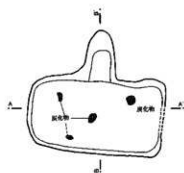
本遺構は、方形の燃焼部に棺座となる礫を置き、棺ごと火葬した施設で、所謂「茶毘跡」と呼ばれるものである。調査時には土墳墓 (ST2) として取り扱われている。

平面形は凸形で、隅丸長方形の燃焼部の一辺中央に煙道状の突出部が付くものである。燃焼部の規模

は長軸1.10m、短軸0.60m、深さ0.18mである。断面形は箱形である。突出部は幅25cm、長さ40cmで、なだらかに立ち上がる。遺構の上部は削平されているものと考えられる。主軸方向は、N-3°-Eで、ほぼ南北軸である。燃焼部の東・南側壁面の全体、西側壁面と突出部の一部が焼上化している。床面は平坦である。その上に、径30cmほどの自然石を5個配し、棺座としている。壁面が焼上化した後、4層が崩落し、その上部に部分的に炭化物層が入る。この炭化物は、棺材の一部と考えられる。この時点で棺は壊れ、炭化物・焼土・骨粉を多く含む2・3層が形成されたと考えられる。北側の礫の間から大瓦



第266図 第1号茶毘跡



- 1 暗褐色土 中々硬直上が硬直、積上層・ローム状多量、しまり・陥凹欠く
- 2 黒灰色土 暗褐色土をベースに大量の炭化物、炭化材を含む、腐土層・ローム状含む、腐物多量、しまり少、陥凹なし
- 3 黒褐色土 炭化物粒・積土状多量、ローム状少量、腐物多量、しまり・陥凹欠く
- 4 暗茶褐色土 ローム粒・積土状多量、炭化物少量、腐物少量

骨が出土していることもその傍証となろう。2・3層の含有物は、棺の炭化した残材や、取り上げ切れなかった骨と考えられる。塚の上面には部分的に焼土が厚く分布し、遺構の上部が崩落したものである

可能性がある。

遺物は出土していない。時期は不明だが、他の土墳墓と同様の時期であるならば、中世に帰属するものと考えられる。

(9) ビット・グリッド・表採出土遺物

ビット出土遺物

大寄遺跡Ⅱ区からは1485基のビットが検出されている。これらのビットには地鎮のために、塚を埋め込んだと考えられるもの(A-25P1)や、図示不能の状態だが、土師器の甕の破片が一括して出土したもの(G-14P1)などがある。また、遺物は出土していないが、斜めに杭を打ち込んだ状態が観察できるもの(F-20P6、F-24P1、H-19P1)もある。ここでは、遺構の柱穴と認定できないビットからの出土遺物を第267図に掲載し、概要を述べる。

1・2は一括で出土したロクロ土師器の小皿である。時期は10世紀後半である。地鎮等で埋納された可能性が高い。3は室町時代の軒丸瓦の瓦当部分である。巴が太く、種文が大ぶり、側縁部も幅が広い。また、瓦当部分全体も厚みがある。室町時代のものと考えられる。1～3の出土したA-25・26グリッドは、中世の土墳墓や茶毘跡等があり、調査区の

北側も含めて、中世の遺構が分布する可能性が高い。

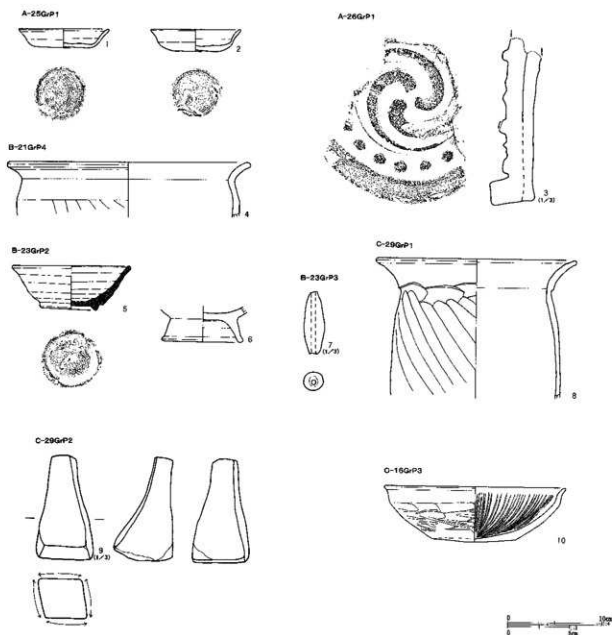
4は土師器の甕である。10世紀のものと考えられる。5は須惠器の高台付碗である。高台の付け方が雑で部分的に団子状になっている。6はロクロ土師器の高台付碗の高台で、所謂高脚高台である。時期は10世紀後半である。B-21・23グリッドには、10・11世紀の遺構が多く分布しており、4～7もそれらと一連のものと考えられる。

8は土師器の長胴甕で、8世紀前半のものである。径30cmのビットに大きな破片がスッポリ入り込んでいた。9は凝灰岩製の砥石である。4面を使い込んでいた。ビットの底面からの出土である。C-29グリッド付近には8世紀の住居跡が分布しており、8・9もそれらと一連のものと考えられる。

10は9世紀前半の環である。内面には放射状の暗文が施される。時期は9世紀の前半である。

グリッド・表採出土遺物

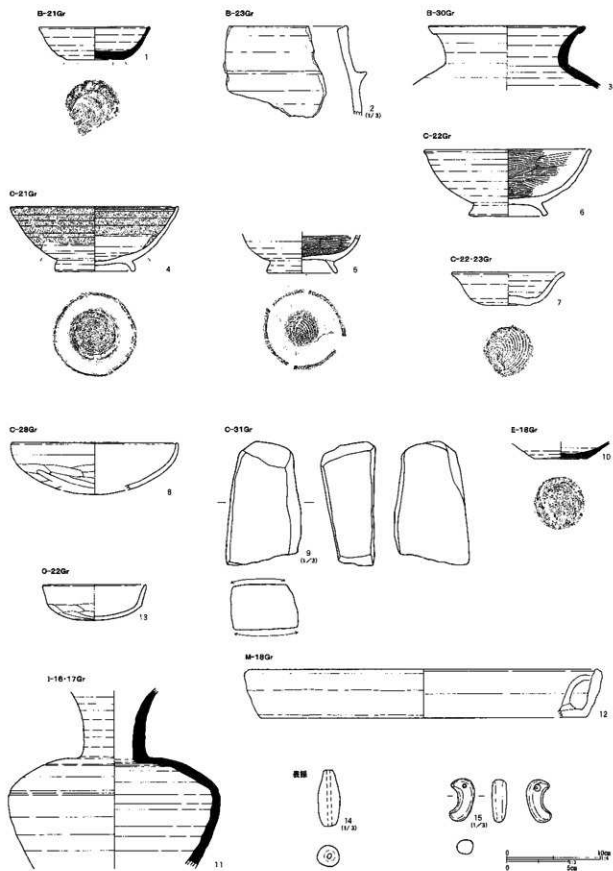
遺構に伴わない遺物を第268図に一括して掲載し



第267図 ビット出土遺物

第129表 ビット出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率	編考	
1	ロクロ小皿	9.4	2.0	5.0	DEJ	2	橙褐	70	A-25GrP1 No.1	
2	ロクロ小皿	9.5	2.3	5.0	DEIJJ	1	橙褐	80	A-25GrP1 No.2	
3	軒丸瓦	長径(16.0)		DE	1	灰 55%	中世後半	A 26GrP1	No.1	
4	土師 甕	(25.2)	5.8		BDE	2	褐	25	B-21GrP4	
5	須恵高台柄	12.3	4.7	5.7	BEIJ	3	黄灰	90	B-23GrP2 B	
6	ロクロ高台柄		3.8	7.8	EIJ	3	黄灰	80	B-23GrP2	
7	土師 鉢	長4.9cm	幅1.6cm	孔径0.4cm			重さ10.59g	ABDE	2 褐 100%	B-23GrP3
8	土師 甕	21.0	14.7		DEHJ	1	褐	70	C 29GrP1	
9	磁 石	長8.2cm	幅4.5cm	厚さ3.1cm			重さ147.47g		C-29GrP2	
10	土師 環	(19.2)	5.8	9.0	ADE	1	褐	55	内面放射状喙文	O-16GrP3



第268図 グリッド・表採出土物

第130表 グリッド・表採出土物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色	面	残片	備考
1	須恵 環	(11.6)	3.5	(6.2)	BEFK	1	灰	30	南比企産 A B-21Gr	
2	羽 釜		7.1		BDE	2	灰	破片	須恵質 ロクロ整形 B-23Gr	
3	須恵 甕	(16.4)	6.7		EIK	1	黄灰	10	本野産 B-30Gr	
4	灰釉高台陶	(17.8)	6.8	8.0	EJK	1	灰	40	東濃産 大原窯式 漬けがけ C-21Gr	
5	ロクロ高台陶		4.1	7.3	DE	1	赤褐	80	内面黒色処理+ミガキ C-21Gr	
6	ロクロ高台陶	(17.5)	7.1	(7.5)	ABDE	2	黄灰	20	内面黒色処理+ミガキ C-22Gr	
7	須恵系 環	(11.8)	3.5	5.0	ADE	2	橙褐	55	C-22・23Gr	
8	土 師 環	(17.6)	3.0		ADE	2	橙褐	30	C-28Gr	
9	磁 石	長9.8cm	幅6.0cm	厚さ3.6cm	重さ326.34g				C-31Gr	
10	須恵 甕		1.8	5.6	EIJ	1	灰	80	本野産 A E-18Gr	
11	須恵長頸壺		19.0		EHK	1	黄灰	50	磯岡産か? I-16・17Gr	
12	焙 烙	(36.8)	5.1	(34.6)	DE	2	明茶褐	10	近世 M-18Gr	
13	土 師 環	10.8	3.8		ADH	2	橙褐	80	O-22Gr	
14	土 錘	長4.4cm	幅1.8cm	孔径0.4cm	重さ12.60g	DE	2	褐	100% 表採	
15	勾 玉	高さ3.3cm	幅1.15cm	孔径0.3~0.55cm	重さ9.38g				表採	

た。これらの遺物が出土したグリッドには、遺物と同時期の遺構が分布している場合が多く、本来的にはそのいずれかの遺構に帰属するものと思われる。

3は本野産の甕の破片で7世紀のものと考えられる。4は東濃産の灰釉陶器高台付碗で、大原窯式と考えられる。5は体部の外面と底部には黒斑が付く

(10) II区出土鉄製品

大奇遺跡II区から出土した鉄製品は60点である。今回報告する範囲からは、32点出土している。主な鉄製品は、刀子・鎌・鉄鎌・釘である。その他板状・棒状の用途不明品が多数出土している。鉄製品の多くは、住居跡からの出土である。

刀子 (第269図1~11)

刀子は11点出土している。1は完形であり、両刃と思われるが、関は浅い。2は茎尻を欠いているが、ほぼ完形であり、両刃である。3は大型の刀子としたが、刃幅が2.60cmと他よりも広いので、小刀の可能性もある。刃部は半分を、茎部は先端部をそれぞれ欠損している。両刃であり、茎部は先端に行くほど細くなっている。4~8は刃部から茎部の破片である。すべて両刃であるが、5以外は浅くはっきりしない。4は折れ曲がった状態で出土した。7は刃部が短い。8には、茎部の周辺に木質部が残存している。9は刃部の破片である。10・11は茎部の破片

が、高台には見られず、製作手法を窺わせるものである。11の長頸壺は、磯岡産と考えられ、肩に一面に灰がかかっている。12の焙烙は江戸時代のもので、器面が乳白色である。15の勾玉は滑石製で面があり、丁寧な造りである。5世紀のものと考えられる。この他に刀子(第269図7)が出土している。

である。

鎌 (第269図12・13)

鎌は2点出土している。どちらも柄の装着部として、端部全体を直角に折り返している。12は刃部先端を欠いているが、ほぼ全形が窺える。13は刃部半分を欠損している。

鉄鎌 (第269図14~16)

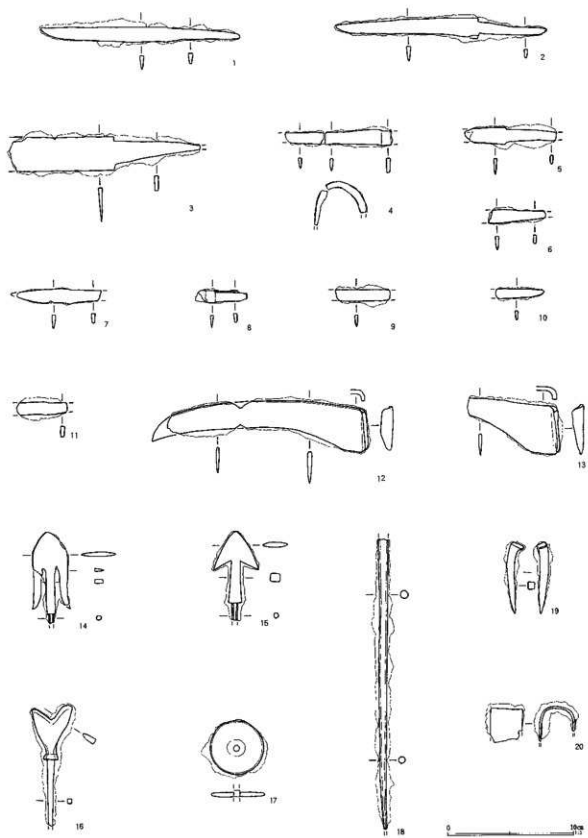
鉄鎌は3点出土している。14は平造五角形鎌である。逆刺が深く、関筈被である。15は両丸造三角形鎌である。逆刺が浅く、関筈被である。16は雁股鎌である。先端の扱りは浅く、両刃幅は広い。関筈被である。

紡錘車 (第269図17・18)

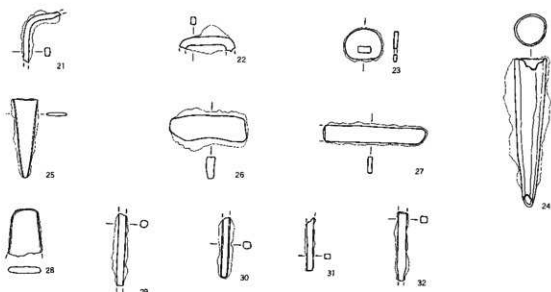
紡錘車は2点出土している。17は車部のみで、18は軸部のみである。

釘 (第269図19)

釘は1点出土している。頭部を方形に造り出して



第269图 II区出土铁製品(1)



第270図 II区出土鉄製品(2)

第131表 鉄製品一覧表

() は残存長

番号	種類	大きさ (cm)	重量 (g)	備考	出土遺構
1	刀子	長さ15.9、刃幅1.1、背幅0.3、茎幅0.8	27.65		SJ236 No.19、カマド
2	刀子	長さ(16.8)、刃幅1.1、背幅0.3、茎幅0.6	31.12	茎尻欠損	SJ212 No.1
3	刀子	長さ(15.3)、刃幅2.6、背幅0.25、茎幅1.2	64.77	刃部-基部破片	SJ156 No.10
4	刀子	長さ(8.4)、刃幅1.0、背幅0.3、茎幅1.1	11.01	刃部-基部破片	SJ166 噴溝
5	刀子	長さ(7.3)、刃幅7.3、背幅0.3、茎幅0.7	16.19	刃部-基部破片	SJ231 4区
6	刀子	長さ(4.6)、刃幅1.1、背幅2.5、茎幅0.65	3.05	刃部-基部破片	SJ236 カマド
7	刀子	長さ(6.7)、刃幅1.1、背幅0.3、茎幅0.8	6.29	刃部-基部破片	Q-13G
8	刀子	長さ(3.9)、刃幅1.0、背幅0.3、茎幅0.7	5.29	刃部-基部破片	SJ236 カマド
9	刀子	長さ(4.4)、刃幅1.0、背幅0.3	7.69	刃部破片	SJ237 2区
10	刀子	長さ(3.9)、背幅0.2、茎幅0.7	2.79	基部破片	SJ173
11	刀子	長さ(4.1)、背幅0.3、茎幅0.85	9.82	基部破片	SJ238
12	鎌	長さ(15.5)、刃幅2.5、背幅0.3	86.93	切先欠損	SJ241 No.27
13	鎌	長さ(7.6)、刃幅1.6、背幅0.25	42.63	刃部破片	SJ158 No.4
14	鉄鏝	長さ(7.2)、鏝身長5.0、鏝身幅2.8、厚さ0.3	19.51		SJ163 床下土壇1
15	鉄鏝	長さ(7.0)、鏝身長5.6、鏝身幅3.7、厚さ0.4	24.34		SJ163 No.1
16	鉄鏝	長さ9.6、鏝身長4.4、鏝身幅3.4、厚さ0.4	23.44	雁股鏝	SJ131 No.10
17	紡錘車	径4.5、厚さ0.35	15.70	車部	SJ170
18	紡錘車	長さ(22.8)、軸断面幅1.0	41.84	輪部	SJ145
19	釘	長さ5.6、断面幅0.6×0.55	7.70		SJ126 No.1
20	刀痕具	長さ(3.1)、幅2.9、厚さ0.15	14.74	鏽か?	SJ171 P.1
21	用途不明品	長さ(3.8)、断面幅0.65×0.4	8.65	門金具か?	SB36
22	用途不明品	長さ(1.1)、幅4.4、断面幅0.6×0.4	9.75	門金具か?	SB36
23	用途不明品	径2.7×3.2、厚さ0.3	13.94		SJ241
24	用途不明品	長さ11.7、幅2.6	82.99	筒状	SJ176 床下土壇3 No.1
25	用途不明板状品	長さ6.1、幅2.0、厚さ0.2	12.73		SB29 P.5
26	用途不明板状品	長さ(6.3)、幅1.7、厚さ0.7	38.85		SJ212
27	用途不明板状品	長さ(8.3)、幅1.6、厚さ0.3	17.93		SJ156 No.1
28	用途不明板状品	長さ(3.7)、幅2.6、厚さ0.5	16.54		SJ149
29	用途不明棒状品	長さ(5.7)、幅0.5	9.10		SK125
30	用途不明棒状品	長さ(4.7)、断面幅0.6×0.55	5.94		SJ139
31	用途不明棒状品	長さ(5.1)、断面幅0.5×0.4	3.17		SJ126
32	用途不明棒状品	長さ(5.5)、断面幅0.53×0.5	8.92		SJ156 No.1

いる角釘である。

刀装具 (第269図20)

刀装具は1点出土した。幅約3.00cmの板を折り曲げていて、半分は欠損している。鍔と考えられるが大型なので刀子のものではないだろう。

用途不明品 (第269図21~24)

用途不明品は4点出土した。21・22は、断面が方形で、棒状のものを直角に折り曲げている。門金具と考えられる。第36号掘立柱建物跡から出土している。23は、円形の板状で、長方形に穿孔したもので

ある。用途は不明である。24は、円形の筒状鉄製品である。形態は鉄錐の石突に類似するが、用途は不明である。

用途不明板状品 (第270図25~28)

用途不明板状品は4点出土している。25は長三角形で、26・27は長方形である。

用途不明棒状品 (第270図29~32)

用途不明棒状品は4点出土している。29は、断面が円形で、30~31は方形である。紡錘車の軸部の可能性が考えられる。

(II) 追加遺物

不手際から、本文中で掲載漏れのものを一括して掲載する(第271図)。訂正してお詫言いたい。本文中の資料と合わせて参照頂きたい。

1~13は、「大寄遺跡I」で報告した遺構から出土したものである。3の砥石には使用面に「×」の線刻が施されている。4は古墳時代中期の高環である。出土遺構は8世紀であることから、混入と考えられる。5は上製紡錘車である。各面ともヘラ削り後ナデが施されている。6は秋間産の類瓶の蓋で、8世紀後半のものである。12はクロコ土師器の高台付椀で、前回の報告で所在が不明となっていたものである。時期は10世紀後半である。13は土師器の甕で、

「大寄遺跡I」で出土状況の写真のみ掲載されているものである。非戸跡廃絶時に廃棄されたものようである。時期は7世紀末~8世紀初頭である。

14~16は、今回報告で遺漏したものである。14は丁字形の砥石で、下面のみが使用されている。凝灰岩製である。15・16は第237号住居跡出土である。15は猿投窯産と考えられる水滴である。上面に自然釉が一面に付着する。口縁部と把手を欠失している。底面は回転ヘラ削りで、「一」のヘラ記号が施されている。16は切子玉で、上面と側面の一部のみ遺存している。

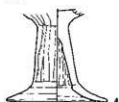
第132表 追加・訂正出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	口径	胎土	焼成	色調	残率	備考
1	クロコ小皿	(10.5)	2.7	5.0	AEG	1	橙褐色	75	I区 SJ176 No.9
2	土師甕	20.0	25.9	(4.4)	ADE	1	橙褐色	70	I区 SJ203 SK236
3	砥石	長径12.2cm	幅4.2cm	厚さ2.3cm					II区 SJ15 No.8
4	上環高環(脚)	9.8	(10.4)	DE	1	明赤褐色	80	II区 SJ49	
5	土製紡錘車	上径5.2cm	下径3.6cm	厚さ1.9cm	孔径1.2cm	重さ50.22g	DE	2	褐 95% III区 SJ110
6	円面瓶	器高2.1	EK	2	紫灰	15	秋間産	A	II区 SJ111
7	紡錘車	長さ17.9cm	幅9.7cm						SJ122 No.17
8	用途不明棒状品	長さ3.6cm	断面幅0.7×0.55cm						SJ122 No.17
9	上環高環	12.6	3.4	DE	2	明褐色	50	II区 SB7 P10	
10	須恵高環	1.9	(7.0)	BEIK	1	灰	25	II区 SB7 P6 末野産 A	
11	土師甕	(22.0)	6.1	BDEII	1	褐色	35	II区 SB7 P10	
12	クロコ高台椀	14.7	6.3	8.2	ADEFH	1	橙褐色	100	II区 ST1 内面黒色処理+ミガキ
13	土師甕	(11.0)	20.3	ADEJ	2	褐色	20	II区 SE14 No.4	
14	砥石	長径10.9cm	幅7.8cm	厚さ3.81cm					II区 SJ115
15	須恵水滴	器高4.2cm	口径6.0cm	EK	灰	95%	東海産	A	底部ヘラ記号 II区 SJ237
16	切子玉	長さ(1.1cm)	幅1.2cm						重さ6.75g 石村水産 II区 SJ237

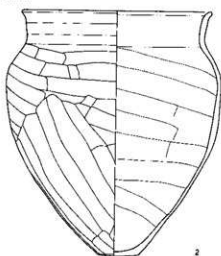
I区 SJ176



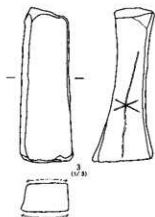
SJ49



SJ203



II区 SJ15



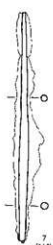
SJ110



SJ111



SJ122



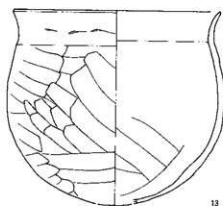
SB7



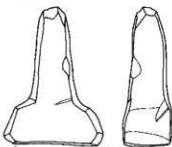
ST 1



SE28



SJ129



SJ287



第271图 追加・訂正遺物

第133表 大審遺跡Ⅱ区遺構新旧対照表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SJ124	SJ268	SJ176	SJ170	SJ228	SJ235	SB22	SB22		SB31
SJ125	SJ144	SJ177	SJ171	SJ229	SJ220	SB23	SB23		SB33
SJ126	SJ119	SJ178	SJ179	SJ230	SJ215	SB24	SB24		SB67
SJ127	SJ121	SJ179	SJ264	SJ231	SJ238	SB25	SB25		SB73
SJ128	SJ120	SJ180	SJ263	SJ232	SJ222	SB26	SB26	SD1	SD5
SJ129	SJ115	SJ181	SJ260	SJ233	SJ213	SB27	SB27	SD5	SD2
SJ130	SJ147	SJ182	SJ265	SJ234	SJ216	SB28	SB28	SD6	SD35
SJ131	SJ157	SJ183	SJ132	SJ235	SJ217	SB29	SB29	SD7	SD7
SJ132	SJ158	SJ184	SJ148	SJ236	SJ219	SB30	SB30	SD8	SD8
SJ133	SJ159	SJ185	SJ136	SJ237	SJ236	SB31	SB71	SD9	SD9
SJ134	SJ163	SJ186	SJ259	SJ238	SJ225	SB32	SB4	SD10	SD10
SJ135	SJ162	SJ187	SJ261	SJ239	SJ227	SB33	SB5	SD11	SD11
SJ136	SJ164	SJ188	SJ258	SJ240	SJ226	SB34	SB8	SD12	SD12
SJ137	SJ165	SJ189	SJ240	SJ241	SJ228	SB35	SB35	SD13	SD13
SJ138	SJ244	SJ190	SJ241	SJ242	SJ224	SB36	SB3	SD14	SD14
SJ139	SJ166	SJ191	SJ133	SJ242Pt	SJ229	SB37	SB37	SD15	SD15
SJ140	SJ140	SJ192	SJ195	SJ243	SJ230	SB38	SB38	SD16	SD16
SJ141	SJ129	SJ193	SJ253	SJ244	SJ237	SB39	SB39	SD17	SD17
SJ142	SJ141	SJ194	SJ254	SJ245	SJ64	SB40	SB40	SD18	SD18
SJ143	SJ183	SJ195	SJ194	SJ246	SJ74	SB41	SB41	SD19	SD19
SJ144	SJ245	SJ196	SJ193	SJ247	SJ73	SB42	SB42	SD20	SD20
SJ145	SJ172	SJ197	SJ134	SJ248	SJ75	SB43	SB6	SD21	SD21
SJ146	SJ173	SJ198	SJ196	SJ249	SJ76	SB44	SB7	SD22	SD22
SJ147	SJ176	SJ199	SJ243	SJ250	SJ212	SB45	SB45	SD23	SD23
SJ148	SJ178	SJ200	SJ242	SJ251	SJ78	SB46	SB46	SD24	SD24
SJ149	SJ177	SJ201	SJ255	SJ252	SJ77	SB47	SB47	SD25	SD25
SJ150	SJ262	SJ202	SJ256	SJ253	SJ79	SB48	SB48	SD26	
SJ151	SJ130	SJ203	SJ135	SJ254	SJ201	SB49	SB49	SD27	SD27
SJ152	SJ131	SJ204	SJ137	SJ255	SJ202	SB50	SB50	SD28	SD28
SJ153	SJ185	SJ205	SJ251	SJ256	SJ204	SB51	SB51	SD29	SD29
SJ154	SJ186	SJ206	SJ191	SJ257	SJ203	SB52	SB52	SD30	SD30
SJ155	SJ249	SJ207	SJ192	SJ258	SJ205	SB53	SB72	SD31	SD31
SJ156	SJ182	SJ208	SJ252	SJ259	SJ206	SB54	SB54	SD32	SD32
SJ157	SJ257	SJ209	SJ197	SJ260	SJ207	SB55	SB55	SD33	SD1
SJ158	SJ250	SJ210	SJ138	SJ261	SJ210	SB56	SB56	SD34	SD34
SJ159	SJ247	SJ211	SJ139	SJ262	SJ208	SB56P6	SK90	SE33	SE11
SJ160	SJ248	SJ212	SJ142	SJ263	SJ209	SB56P7	SK74	SE34	SE12
SJ161	SJ184	SJ213	SJ189	SK252	SJ221	SB57	SB57	SE35	SE18
SJ162	SJ174	SJ214	SJ190		SJ180	SB58	SB58	SE36	SE36
SJ163	SJ188	SJ215	SJ143		SJ199	SB59	SB59	SE37	SE37
SJ164	SJ266	SJ216	SJ214		SJ223	SB60	SB60	SE38	SE19
SJ165	SJ267	SJ217	SJ200	SB11	SB11	SB61	SB61	SE39	SE39
SJ166	SJ269	SJ218	SJ198	SB12	SB12	SB62	SB62	SE40	SE40
SJ167	SJ187	SJ219	SJ5	SB13	SB13	SB63	SB63	SE41	SE22
SJ168	SJ239	SJ220	SJ3	SB14	SB14	SB64	SB64	SE42	SE23
SJ169	SJ246	SJ221	SJ4	SB15	SB15	SB65	SB65	SE43	SE24
SJ170	SJ161	SJ222	SJ1	SB16	SB9	SB66	SB66	SE44	SE25
SJ171	SJ167	SJ223	SJ2	SB17	SB17	SB67	SB74	SE45	SE26
SJ172	SJ168	SJ224	SJ231	SB18	SB18	SB68	SB68	SE46	SE27
SJ173	SJ175	SJ225	SJ232	SB19	SB70	SB69	SB69	SE47	SE28
SJ174	SJ181	SJ226	SJ233	SB20	SB20		SB1	SE48	SE48
SJ175	SJ169	SJ227	SJ234	SB21	SB21		SB19	SE49	SE49

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SE50	SE50(SK218)	SK118	SK118	SK159	SK52	SK200	SK200	SK241	SK8
SE51	SE51	SK119	SK119	SK160	SK160	SK201	SK201	SK242	SK9
SE52	SE52	SK120	SK120	SK161	SK161	SK202	SK202	SK243	SK10
SE53	SE53	SK121	SK121	SK162	SK162	SK203	SK203	SK244	SK10
SE54	SE29	SK122	SK122	SK163	SK163	SK204	SK204	SK245	SK11
SE55	SE30	SK123	SK123	SK164	SK164	SK205	SK205	SK246	SK12
SE56	SE56	SK124	SK124	SK165	SK165	SK206	SK206	SK247	SK13
SE57	SE57	SK125	SK125	SK166	SK166	SK207	SK207	SK248	SK14
SE58	SE58	SK126	SK126	SK167	SK167	SK208	SK208	SK249	SK14
SE59	SE59	SK127	SK127	SK168		SK209	SK209	SK250	SK15
SE60	SE31	SK128	SK128	SK169	SK169	SK210	SK210	SK251	
SK88	SK88	SK129	SK129	SK170	SK170	SK211	SK211	SK252	SJ221
SK89	SK89	SK130	SK130	SK171	SK171	SK212	SK212	SK253	
SK90	SK87	SK131	SK131	SK172	SK168	SK213	SK213	SK254	SK16
SK91	SK82	SK132	SK132	SK173	SK172・173	SK214	SK214	SK255	
SK92	SK83	SK133	SK133	SK174	SK174	SK215	SK215	SK256	
SK93	SK84	SK134	SK134	SK175	SK175	SK216	SK216	SK257	
SK94	SK85	SK135	SK135	SK176	SK176	SK217	SK217	SK258	
SK95	SK86	SK136	SK136	SK177	SK177	SK218	SK63	SK259	
SK96	SK96	SK137	SK137	SK178	SK178	SK219	SK219	SK260	
SK97	SK97	SK138	SK138	SK179	SK179	SK220	SK220	SK261	
SK98	SK98	SK139	SK139	SK180	SK180	SK221	SK221	SK262	
SK99	SK99	SK140	SK140	SK181	SK181	SK222	SK222	SK263	
SK100	SK100	SK141	SK141	SK182	SK182	SK223	SK223	SK264	
SK101	SK101	SK142	SK142	SK183	SK183	SK224	SK224	SK265	
SK102	SK102	SK143	SK143	SK184	SK184	SK225	SK225	SK266	
SK103	SK103	SK144	SK144	SK185	SK185	SK226	SK226	SK267	
SK104	SK104	SK145	SK145	SK186	SK186	SK227	SK227	SK268	
SK105	SK105	SK146	SK146	SK187	SK187	SK228	SK228	SK269	
SK106	SK106	SK147	SK147	SK188	SK188	SK229	SK229	SK270	
SK107	SK107	SK148	SK148	SK189	SK189	SK230	SK230	SA4	SA2
SK108	SK108	SK149	SK149	SK190	SK190	SK231	SK231	SA5	SA3
SK109	SK109	SK150	SK150	SK191	SK191	SK232		SA6	SA4
SK110	SK110	SK151	SK80	SK192	SK192	SK233		SA7	SA5
SK111	SK111	SK152	SK81	SK193	SK193	SK234	SK1	ST3	ST3
SK112	SK112	SK153	SK183	SK194	SK194	SK235	SK2	ST4	ST4
SK113	SK78	SK154	SK47	SK195	SK195	SK236	SK3	茶混1	ST2
SK114	SK79	SK155	SK48	SK196	SK196	SK237	SK4		
SK115	SK115	SK156	SK49	SK197	SK197	SK238	SK5		
SK116	SK116	SK157	SK50	SK198	SK198	SK239	SK6		
SK117	SK56	SK158	SK51	SK199	SK199	SK240	SK7		

V 結語

1. 出土土器の様相

(1) 大寄遺跡の土器編年

はじめに

大寄遺跡Ⅰ区・Ⅱ区では、古墳時代後期から平安時代後半までの、約600年間という長期に渡り、規模の大小はみられるが集落が営まれている。そこで大寄遺跡出土土器を用いて、14期に編年を行った。各期ごとの様相を述べていく。

編年の基準となるものは、XⅠ期までは北武蔵型環と武蔵型甕である。これに、須恵器環・甕を補足する。北武蔵型環・武蔵型甕の編年に関する代表的な研究は、赤熊浩一氏・富田和夫氏・鈴木徳雄氏のもが挙げられる(赤熊1988、富田・赤熊1985、鈴木1984)。XⅡ期以降は、土師器・須恵器が減少し、須恵系土師質土器・ロクロナ師器(註1)などが主体的に出土するため、これらを用いる事とする。

今回取りあげた遺構は、その期の代表的なものや特徴的なもので、一括性が高く、土器のセット関係が分かるものである。したがって、遺物を個別にみると前後の時期となるものが含まれることがあること、構成する器種がその期の全てではないことをこわっておく。

1. 各期の土器様相

Ⅰ期

大寄遺跡の集落としての初現期である。Ⅰ区第21・56号住居跡が挙げられる。器種は土師器環・高環・壺・甕・甌がある。

土師器環は坏身模倣環・坏蓋模倣環・有段口縁環があり、有段口縁環が主体である。第56号住居跡1・3のような口径13.5cmのものは、段部の作りがしっかりしていて、内外面には黒色処理が施されている。第21号住居跡3や第56号住居跡2のような、口径13cmとやや小ぶりのものは、前者よりも段部の造りが甘く、段が明瞭ではない。坏身模倣環は口縁部が極端に内屈する。高環は脚部が長い。壺は胴部まで

が、胴部中位に最大径を持つと考えられる。甕は口縁部が外反し、最大径が胴部中位にある。甌は口縁部が斜めに直線的に立ち上がり、ミガキは施されていない。

Ⅱ期

Ⅱ区第14・57号住居跡が挙げられる。器種は土師器環・鉢・壺・甕・甌がある。

土師器環は坏身模倣環・坏蓋模倣環・有段口縁環がある。坏身模倣環はほとんどなくなり、坏蓋模倣環と有段口縁環の両者が中心となっている。どのタイプの坏も、Ⅰ期より小ぶりになり、口径11cm代のもがみられるようになる。坏身模倣環は、Ⅰ期のものより口縁部の屈曲度が小さい。坏蓋模倣環は口縁部と体部の境の稜が弱くなり、口縁部が外反するものが多くなる。有段口縁環は段がさらに弱くなるものや、体部の位置が下にさがって扁平化しているものがある。甕は口縁部の屈曲度が小さくなり、胴部の張りやや弱くなっている。口径は小さくなり、器高も低くなる。甌も甕と同様に、口径・器高が小さくなる。口縁部は短くなり、胴部内面にはミガキが施されている。

Ⅲ期

Ⅰ区第151号住居跡が挙げられる。器種は土師器環・鉢・小型壺・壺・甕がある。

土師器環は坏蓋模倣環が主体になり、坏身模倣環や有段口縁環はみられなくなる。坏蓋模倣環の口径は11cm前後、12cm前後、14cm以上のものがある。口径11cm前後の坏の口縁部は、あまり外反せず直立し、断面は三角形になる。12cm前後のものは、Ⅱ期と同様に口縁部が外反している。本期には、Ⅳ期に出現する北武蔵型環の前進と考えられる環がみられる。模倣環より厚手で、口径に対して器高が高い。深身の丸底である。9cm前後、10.5cm前後、12cm代のも

のがある。また、器肉が非常に薄い特徴を持つ武蔵型甕も、本期からみられる。口縁部は外反し、胴部は張らずに底部に至る。最大径は口縁部にある。外面は縦方向にヘラケズリが施されている。

IV期

II区第23・21・133・206号住居跡が挙げられる。器種は土師器環・盤・鉢・壺・甕・甔、須恵器環がある。

土師器環は、III期から継続する口径12cm代の坏蓋模倣環がみられるが、III期より減少している。代わって、主体になるのが北武蔵型環である。口径は10cm前半、11cm前後、12cm以上のもがある。20cm以上の大ぶりのものもみられる。口縁部の内屈が強いものと、内湾ぎみのものがある。甕は口径は変わらないが、III期よりも器高が高くなっている。口縁部直下からヘラケズリが施されている。甔はミガキの施されていないもので、I期から継続する小ぶりなものである。第23号住居跡33は小型の甔の可能性が有る。須恵器環蓋は宝珠状のつまみを持ち、かえりが付くものである。坏身は環Gである。

V期

II区第245号住居跡・第230号土壌が挙げられる。器種は土師器環・盤・鉢・壺・甕・甔、須恵器環・盤がある。

土師器環は、IV期までみられた模倣環がなくなり、北武蔵型環のみになる。口径は10cm、13cm前後、17cm代と法量分化している。口縁部の内屈は弱まる傾向にあり、内湾するものが多くなる。盤は小さくなる。甕は口縁部の外反がやや弱まり、胴部が若干張ってくる。器高は35cm代のもが多いが、30cmと低いものも出てくる。胴部外面の調整は、斜め方向のヘラケズリになる。第230号土壌33の鉢は、円盤状の底部に幅3～4cmの帯状の粘土を積み上げて成形した後、口縁部はヨコナデが施されるが、胴部は軽くナデられるのみである。そのため輪積み痕が明瞭に残っている。上部は4段、下部は2段の粘土帯で別々に作り、上部を下部にかおせる様にして、粘

土紐で接合させている。北武蔵の上師器は、外面をヘラケズリすることが大きな特徴に挙げられるので、この鉢は特異である。第245号住居跡27も同様な造りである。大寄遺跡には、これらの鉢の様に胴部や底部外面にヘラケズリを施さず、軽くナデだけのものが本期以降にもみられる。須恵器坏身は環Gがみられるが、前期よりも小ぶりになっている。産地は末野産と群馬産がみられる。この時期には、18cm以上の大ぶりの坏身やかえり蓋が共存することが多いが、大寄遺跡では良好なセットはみられなかった。

VI期

II区第241号住居跡が挙げられる。器種は土師器環・皿・壺・台付甕・甕、須恵器環がある。

土師器環はV期と同様に北武蔵型環が主体である。V期には3種類の法量がみられたが、小ぶりの環がなくなり、12～14cmと16cm代の2種類となる。口縁部は内湾せず、直立するものが多くなる。底部は丸底とやや丸底のものが混在している。外面のヘラケズリも、V期までのような口縁部直下から施されるものは少なくなり、体部中位から施されるものが多くなる。しかし14の環の様に、深手でヘラケズリが口縁部直下から施されているものもある。甕は胴部の張りがさらに強くなり、器高も28cmとさらに低くなる傾向がある。外面のヘラケズリは、肩部が横方向に、胴部が縦方向に施される。甕のヘラケズリの方向は、本期以降この方向で施されるようになる。本来は、須恵器環が伴うと考えられるが、良好なセットはみられなかった。本期までは須恵器の出土量が極端に少ない。

VII期

II区第225・238号住居跡が挙げられる。器種は土師器環・暗文環・壺・台付甕・甕、須恵器環・碗・蓋がある。

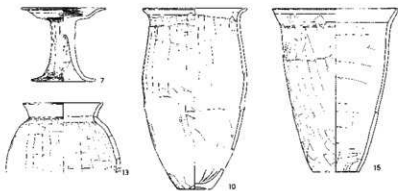
土師器環はVI期までと同様に、北武蔵型環が主体である。底部がより平底化する傾向がみられ、腰を持つものが多くなる。口径は12cm代に加えて、13cm

大寄遺跡Ⅰ期

I区S J 21(I第43図)

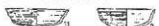


I区S J 56(I第70-71図)



大寄遺跡Ⅱ期

II区S J 14(I第265-266図)

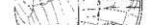
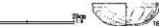


II区S J 57(I第305-306図)



大寄遺跡Ⅲ期

I区S J 151(I第140~142図)



第272図 大寄遺跡Ⅰ～Ⅲ期の土器

後半のものが多くなって来る。しかし16cm以上の大ぶりの環はみられなくなる。ヘラケズリはさらに底部付近から施されるようになり、無調整部分が多くなる。第238号住居跡15・16は深身で平底だが、ヘラケズリが口縁部直下から施されている。暗文環の扁平化が進み、口径13cmと14.5cmのものがある。甕は胴部の張りがさらに強くなり、最大径が口縁部もしくは、胴部上位になる。第238号住居跡36は武蔵型甕と同様の器形だが、ヘラケズリが全く施されていない。V期にみられた特異な鉢と同様の造りである。幅2～4cmの粘上帯を上部に5段、下部に4段で積み上げている。第225号住居跡13の甕も同様の造りだが、器形が異なり、口縁部まで筒状であり、器肉が厚い。壺は胴部の張りが強く、最大径が胴部中位にあり、ヘラケズリが施されている。須恵器は本期から出土量が増加する。環は口径13cm前半で、底部は糸切り離し後、回転ヘラケズリが施されている。ヘラケズリには全面と外周のみのものがある。椀は、口径16cmで口縁端部に面を持つ。糸切り離し後、外周回転ヘラケズリが施されている。蓋は、椀蓋と短頸壺のものがある。椀蓋は口径18cmと大きく器高が高い。扁平のつまみで、かえりがなく端部が屈曲している。短頸壺の蓋はリング状つまみで、天井部端部に凸帯を有する。上野型有蓋短頸壺のものだが、凸帯部は鈎状にはならない。須恵器の産地は、南比企産が多く、他に木野産と群馬産がみられる。

Ⅷ期

Ⅱ区第95・236号住居跡が挙げられる。第236号住居跡出土資料は、土師器環や須恵器蓋がⅧ期のものに近く、第95号住居跡のものより古いので、Ⅷ期とⅧ期の中間になると考えられる。ここでは、甕がⅧ期に含まれることから本期にした。器種は土師器環・暗文環・壺・台付甕・甕、須恵器環・蓋がある。

土師器環は北武蔵型環が主体である。底部はさらに平底に近づき、扁平化が進む。口径12.5cm前後のもの、14cm代のもの、16.0cmの大ぶりのものがみられる。第236号住居跡6は深身で、口縁部直下からヘ

ラケズリが施されている。内面には、暗文を模した線刻が施されている。この環は底部にヘラケズリが施されていない。甕は口径が小さく、口縁部の外反が弱まり、「コの字」の形態に近づいてくる。又、胴部に最大径を持つようになり、器高も低くなる。須恵器環は口径12～13cmで、底部は糸切り離し後、全面もしくは外周回転ヘラケズリが中心である。一部糸切り離しもある。産地は南比企・木野・群馬産がみられる。

Ⅸ期

Ⅰ区第185号住居跡が挙げられる。器種は土師器環・小型壺・壺・甕、須恵器環・高台付椀、灰釉陶器浄瓶がある。

土師器環は北武蔵型環が主体である。前期までとは異なり、平底であり、底部と体部の境が明瞭になってくる。口縁部は、直立するかやや外反するもので、内灣するものはない。口径12cm前後のもので占められている。体部は無調整で、底部はヘラケズリが施されている。口径14cmのものは深身で、ヘラケズリが底部のみでなく、体部下半にも施されている。甕は胴部の張りがやや強くなり、器高がさらに低くなる以外は、Ⅷ期と同様である。須恵器環は、底部は糸切り離して、無調整のものが中心となる。底径は口径の半分を上回る。高台付椀は口径17cm、底径9cmと大ぶりである。須恵器の産地は木野産と群馬産がある。灰釉陶器の浄瓶は撥投産であり、黒笹14号窯式のものである。

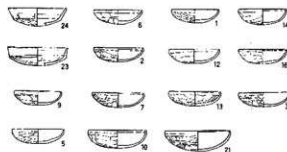
X期

Ⅱ区第235・247・250号住居跡が挙げられる。器種は土師器環・椀・台付甕・甕、須恵器環・高台付椀・蓋がある。

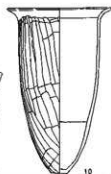
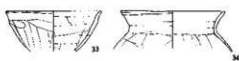
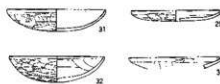
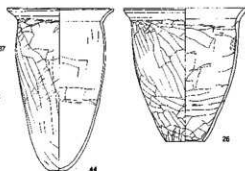
土師器環は、Ⅸ期より一回り小ぶりになる。底部が小さくなり、体部が斜めに立ち上がる。口縁部のヨコナデの範囲が広がり、口縁部と体部の境を沈線で区切るものと、体部が内灣気味に立ち上がり、口縁部が外に開くものがある。底部はヘラケズリされている。椀は内面が黒色処理され、ヘラミガキが内

大奇遺跡Ⅳ期

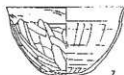
Ⅱ区 S J 23(Ⅰ第279-280図)



Ⅱ区 S J 21(Ⅰ第274図)



Ⅱ区 S J 133(Ⅱ第382図)

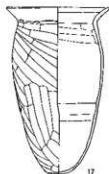
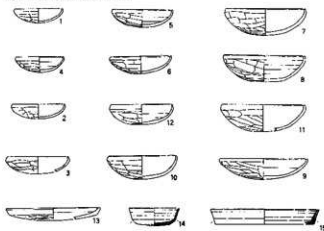


Ⅱ区 S J 206(Ⅱ第101図)

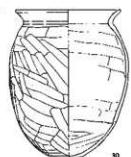
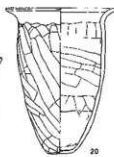
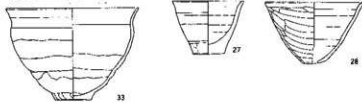


大奇遺跡Ⅴ期

Ⅱ区 S J 245(Ⅱ第139~142図)



Ⅱ区 S K 230(Ⅱ第260図)



第273図 大奇遺跡Ⅳ・Ⅴ期の土器

外面に施されている。甕は口縁部が完全に「コの字」状になる。須恵器は、本期になるとさらに出土量が

増加する。環は底径がさらに小さくなり、口径の半分を下回る。また、口縁端部が外反してくる。産地は末野産がほとんどである。高台付碗は、前期より小ぶりになるが、環と異なり底径は口径の半分より大きい。産地は末野産が中心となる。

X I 期

II区第16・252号住居跡が挙げられる。器種は土師器環・皿・台付甕・甕、須恵器環・高台付碗・皿がある。

土師器環は、X期よりも口径・器高ともに大きくなる。器形は平底で、体部が斜めに直線的に立ち上がるものと、内灣気味に立ち上がり、口縁部で外に開くものがある。底部はヘラケズリが施されているが、第252号住居跡7のように中心がケズリ残されているものがみられる。甕は「コ」字状の口縁部がやや崩れ始め、胴部の張りが非常に強くなる。須恵器環・高台付碗は、底径がさらに小さくなり、口径の半分を下回る。口唇部は外反する傾向にある。X期と同様、末野産が中心である。

X II 期

II区第162号住居跡・第37号井戸跡が挙げられる。器種は土師器環・高台付碗・小型甕・甕、ロクロ土師器環・碗・高台付碗、須恵器環・高台付環・高台付碗・壺・甕、須恵系土師質土器高台付碗、土師系土師質土器高台付環、灰軸陶器碗・皿・瓶、羽釜がある。

X I 期までと比べると、器種が多様化してくる。須恵器B・ロクロ土師器・須恵系土師質土器・土師系土師質土器等、それまでみられなかった土器群が出現する。主体的なものは土師器と須恵器Bである。

土師器環は口径12cm前後となり、体部は斜めに直線的に立ち上がる。体部にヘラケズリが施されるものと、無調整のものがみられる。底面はヘラケズリが施されているが、X I 期と同様に中心がケズリ残されているものがある。高台付碗は体部外面にヘラケズリが、内面に黒色処理とヘラミガキが施されている。第162号住居跡の甕は、「コ」字状の口縁部

がやや崩れているが、第37号井戸跡の甕はあまり崩れていない。ロクロ土師器（註2）がみられるようになる。ほとんどが、内面に黒色処理とヘラミガキが施されている。須恵器Bは還元焰焼成だが焼成が甘く、器形がそれまでの須恵器とは異なるものである。須恵器B環の中には、口径10cm、底径3.3cmの非常に小ぶりなものがみられる。また、器肉が厚いものもある。高台付環・碗は口縁部が大きく外反するもの、高台が高くなるもの、底径が非常に小さくなるものなどバラエティーに富んでいる。産地は末野産のものが中心である。須恵系土師質土器は、ロクロを使用した酸火焰焼成の土器で、須恵器の形態と製作技法の流れを持つものである。須恵系土師質土器は高台付碗がみられる。土師系土師質土器は、製作技法は土師器と同様だが、焼成は土師器より良好で還元焰に近い酸火焰焼成である。須恵系土師質土器と非常に似た焼きである。また短い高台が雑に貼り付けられている点も、須恵系土師質土器に類似する。土師系土師質土器は高台付環がみられる。第37号井戸跡13は、ロクロを使用せず、口縁部はヨコナデが体部下半はヘラケズリが施されている。灰軸陶器高台付碗は東濃産が多く、大原2号窯式であろう。高台付皿は、第162号住居跡17が光が丘1号窯式、第37号井戸跡27か所戸53号窯式のものである。羽釜はロクロ整形で、底部をヘラケズリするものがみられる。

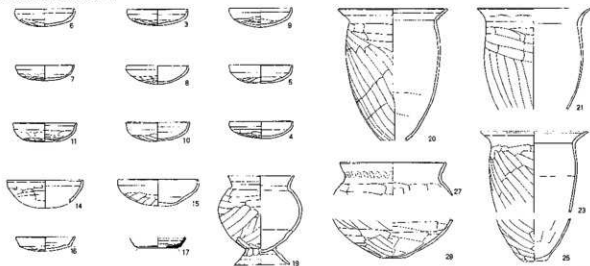
X III 期

II区第142・186・231号住居跡が挙げられる。器種は土師器環・高台付環・高台付碗・台付甕・甕、須恵器環・高台付環、須恵系土師質土器環・高台付環・ロクロ土師器高台付環がある。

土師器環は、平底で体部は内灣気味に立ち上がり、口縁部で外に開くものと、斜めに直線的に開くものがある。第231号住居跡10はヨコナデが全体に丁寧な施されていて、一見須恵系土師質土器のようだが土師器である。高台付環・碗は、X II 期にもみられた外面にヘラケズリが、内面は黒色処理され、ヘラ

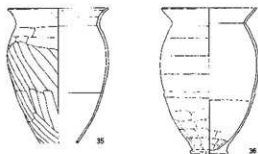
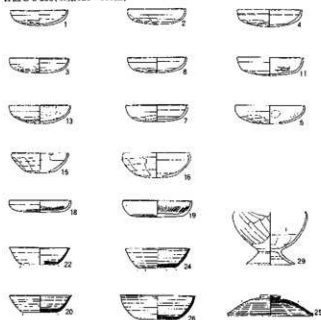
大寄遺跡Ⅶ期

Ⅱ区 S J 241(日集132-133図)

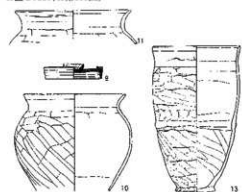


大寄遺跡Ⅶ期

Ⅱ区 S J 238(日集128~130図)



Ⅱ区 S J 225(日集115図)



第274図 大寄遺跡Ⅵ・Ⅶ期の土器

ミガキが施されるものと、第231号住居跡5のように小さく雑な高台が貼り付けられたものがある。甕は「コの字」状の口縁を持つものはない。第142号住居跡7のような厚手で、焼成がロクロ土師器に類似するような甕がみられる。この甕がXIV期以降に連続するものと考えられる。須恵器Bは出土量が減少し、須恵系土師質土器が増加する。環・高台付

坏ともに器肉が厚く、高台は小さい。胎土は木野窯の須恵器に近いものが多い。第142号住居跡2はロクロ土師器の高脚高台付坏である。須恵系土師質土器より、焼成が良く、造りが丁寧である。高台が非常に高くなるというこれまでの須恵器にはみられない要素も持っていることから、ロクロ土師器の初期のものと考えた。本期には羽釜が伴うものと考えら

れるが、良好なセットがみられなかった。

XIV期

I区第176号住居跡、II区第134・145・156号住居跡が挙げられる。器種はロクロ土師器小皿・椀・高台付椀・瓶・鉢・甕、羽釜がある。

ロクロ土師器小皿は底部を糸切りしているものと、ヘラ切りしているものがある。口縁部から体部の立ち上がりは斜めに直線的に立ち上がるものや、内灣気味に立ち上がるもの、口縁部で外反するものなどがある。椀は内面が黒色処理されないものがある。高台付椀は内面が黒色処理され、ヘラミガキが施されるものとそうでないものがある。高台の小さいものは、内灣気味に立ち上がり口縁部でやや外反する。高台の高いものは、直線的に立ち上がり外反する。甕は口縁部が短く外反し、分厚く、外面のヘラズリが縦方向のものと、口縁部が強く外反し、薄手で、口縁部直下に横位のヘラズリが施されるものがある。羽釜はロクロ整形で、底部がヘラズリされるものと、ロクロ整形を行わず、鈿の下から縦方向にヘラズリが施されるものがある。

ロクロ土師器は、これまでの研究で高台付椀が大・中・小に法量分化していて、小皿・椀・高台付椀は時期が下ると小形化する傾向にあると言われてきた。これに基づき、本期を数期に分類しようと試みたが、明確に分けることは出来なかった。これは、I区第176号住居跡にみられるように、小皿は器形にばらつきがあり、高台付椀には法量分化した明確なセットがみられなかったことによるもので、周辺の遺跡の資料との比較等で再確認の必要がある。また羽釜・甕を用いて、細分を試みたが、どちらも明確な型式変遷を辿れるものが見出せなかった。本稿では、ロクロ土師器を主体とする時期として、本期を設定するに留めざるを得ない。今後他遺跡との比較・検討を経て、細分出来るものと考えられる。しかし、II区第134号住居跡の椀が大ぶりで、羽釜の口縁部や鈿のつくりがしっかりしていること、II区第145号住居跡にXIII期でみられたロクロ土師器高

脚高台付環に類似する環の口縁部の破片(2)があり、甕の形態もXIII期の第142号住居跡7と相似していることなどから、これらは本期の中でも古い様相である可能性が高い。また、II区第156号住居跡6の椀は第134号住居跡2よりも小ぶりであり、甕・羽釜も小さくなり直立しており、後出する要素ではないかと考えられる。

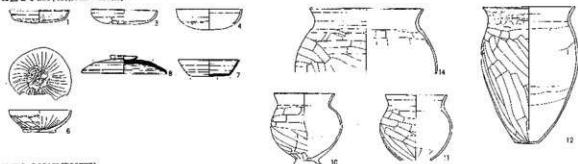
2. 年代

大冨遺跡からは、具体的な年代を示す遺物は出土しなかった。そこで、これまでの土師器・須恵器・灰釉陶器の年代観を参考にして、各期の年代を大まかに把握したい。年代の基準となる遺物を順に挙げておく。IV期の土師器環は、八幡大神南A第1号住居跡及び今井G第2号住居跡のものと並行関係にある。V期の土師器は、今井G第5号住居跡及び立野南第2号住居跡のものと並行関係にある。VIII期の南比企須恵器環は、南比企編年III期の環に相当する。IX期の灰釉陶器浄瓶は、黒笹14号室式に相当する。

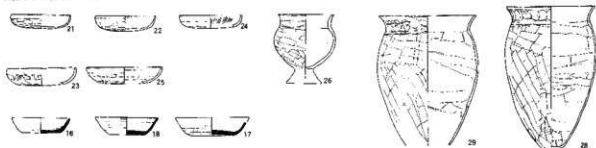
以上の点から、I期を6世紀末～7世紀初頭、II期を7世紀第1四半期、III期を7世紀第2四半期、IV期を7世紀第3四半期、V期を7世紀第4四半期～8世紀初頭、VI期を8世紀第1四半期、VII期を8世紀第2四半期～中葉、VIII期を8世紀中葉～後半、IX期を9世紀前半、X期を9世紀中葉、XI期を9世紀後半、XII期を10世紀第1四半期、XIII期を10世紀第2四半期とする。XIV期は、XIII期の様相と大きく異なるため、両期は連続せず、1期以上の隔りがあると考えられる。この間を埋める土器群としては、中掘遺跡第20号住居跡出土土器が挙げられる。この中には、ロクロ土師器小皿の前段階と推定される土師質の環がみられ、高脚高台付環が定量みられる。中掘VIII期に属し、10世紀第3四半期であると報告されている。この後に、ロクロ土師器が主体となる時期へと移行すると考え、XIV期を10世紀第4四半期～11世紀前半とする。XIV期の様相の部分で前述したように、2～3段階に細分される可能性が高く、今後の課題である。

大寄遺跡Ⅷ期

Ⅱ区 S J 236(Ⅱ第122・123図)

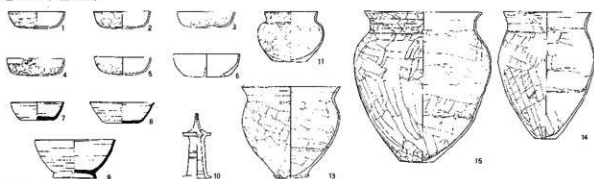


Ⅱ区 S J 95(Ⅱ第337図)



大寄遺跡Ⅸ期

Ⅰ区 S J 185(Ⅰ第175図)

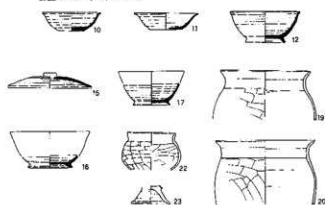


大寄遺跡Ⅹ期

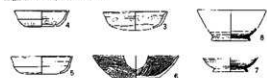
Ⅱ区 S J 250(Ⅱ第145図)



Ⅱ区 S J 247(Ⅱ第143図)



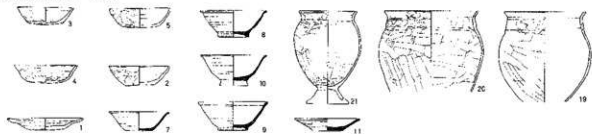
Ⅱ区 S J 235(Ⅱ第121図)



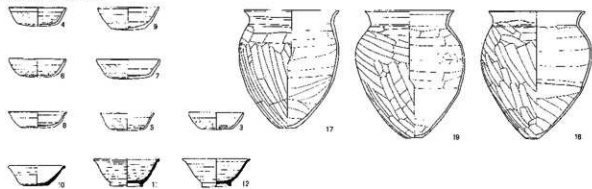
第275図 大寄遺跡Ⅷ～Ⅹ期の土器

大寄遺跡Ⅰ期

Ⅱ区 S J 16 (I 第267・268図)



Ⅱ区 S J 252 (II 第146・147図)

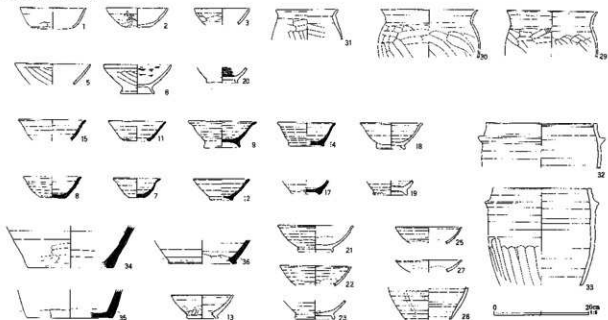


大寄遺跡Ⅱ期

Ⅱ区 S J 162 (II 第608図)



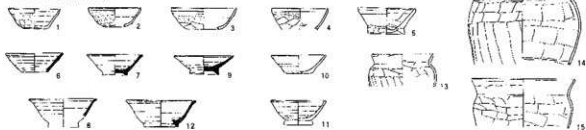
Ⅱ区 S E 37 (II 第248図)



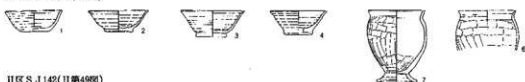
第276図 大寄遺跡Ⅰ・Ⅱ期の土器

大寄遺跡Ⅲ期

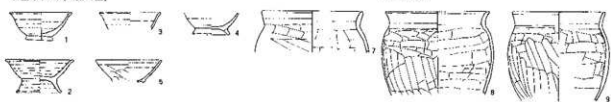
Ⅱ区 S J 231(Ⅱ第118図)



Ⅱ区 S J 186(Ⅱ第65図)

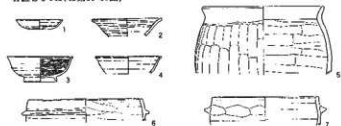


Ⅱ区 S J 142(Ⅱ第49図)



大寄遺跡Ⅳ期

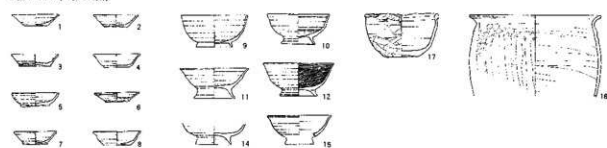
Ⅱ区 S J 145(Ⅱ第50-51図)



Ⅱ区 S J 134(Ⅱ第39図)



Ⅰ区 S J 176(Ⅰ第168図)



Ⅱ区 S J 156(Ⅱ第61図)



第277図 大寄遺跡Ⅲ・Ⅳ期の土器

(2) ロクロ使用の酸化焙焼成土器の位置付け

はじめに

古代の代表的な土器といえば、土師器・須恵器である。一般に土師器とは、ロクロを用いず、焼成坑で焼かれた酸化焙焼成の上器で、須恵器とは、ロクロを用い、窯で焼かれた還元焙焼成の上器であると定義されている。平安時代前半までの北武蔵で出土する土器は、これらの土器で占められている。しかし10世紀に入ると、この2種類の土器に該当しない土器が出土するようになる。ロクロを使用した酸化焙焼成の土器である。この土器は、各研究者により様々な名称で呼ばれている。関東では「土師質土器」・「須恵系土師質土器」・「ロクロ土師器」、東北では「須恵系土器」・「赤焼き土器」と多くの名前が付けられている。その定義は研究者の間で大きな隔たりがあり、共通の認識がないのが現状である。

大寄遺跡では、平安時代後半の集落が検出され、ロクロを使用した酸化焙焼成の土器がまとめて出土した。これらの土器を仔細に観察したところ、異なる土器群に分類できるのではないかと考えるにいたった。本節では、この土器群を定義し、北武蔵における平安時代後半の土器生産の中でどのように位置付けられるのかについて検討したい。

1. 研究史

ロクロを用いた酸化焙焼成の土器をめぐる問題は、1980年代に関東地方でさかんに論じられていた。最大の論点はこの土器の名称であり、各研究者により様々な名称が付けられている。それらをすべてここで整理することは出来ないため、本書で使用した「須恵系土師質土器」・「ロクロ土師器」と、北武蔵で使われている「土師質土器」が、どのように定義されたのかについてみておくことにしたい。

「ロクロ土師器」という呼称は、早い段階から異淳一郎氏が使用していることが良く知られている。それによると、ロクロ土師器はロクロを使用した土師器とされている。(異1983)

「土師質土器」は、1981年に中沢悟氏によって提唱

された概念である。中沢氏はそれまでロクロ土師器又は土師器と呼ばれていた土器を、「ロクロ使用の酸化焙焼成による椀・杯・内黒椀を土師質土器と一括して呼称し、羽釜とともに須恵器として取り扱っている。この「土師質土器」の提唱が、1980年代のロクロ土師器か、土師質土器かという呼称をめぐる議論の火付け役となった。ここでは服部・佐久間・福田氏の説を取り上げる。

この問題は、1986年神奈川考古学会によって開催されたシンポジウム「古代末期～中世における在来土器の諸問題」でも取り上げられた。服部敬史氏は「ロクロ土師器とした大枠で概念規定し、その第2段階とする画期が現れるのを「土師質土器様相」と表現すれば、ある程度、生産体制も時代性も含みうる」として、土師質土器はロクロ土師器に含むものとしている。同年、佐久間豊氏は「ロクロ土師器の第二段階でも土師質土器でもよいと考えているが、……9世紀末葉～10世紀初頭に大きな社会状況の変化があり、それが土器様相に具現化されているならば、「土師器」と区別してもあながち不適当ではないと考える。」(佐久間1986)として、ロクロ土師器と土師質土器を同様なものと捉えている。同時に土師器とは区別する可能性を残している。

福田健司氏は、この土器を80年代から「須恵系土師質土器」と称しており、ロクロ土師器という名称を批判し続けている(註3)。福田氏は1995年、須恵系土師質土器はその出現を須恵器生産と同時に直後に求め、「須恵器の模倣から始まり、須恵器生産が停止した後は灰釉陶器・緑釉陶器を模倣し、それら両者の生産が終わると木器・山茶碗を模倣する」としている。

このようにこれまでの研究は、ロクロ使用の酸化焙焼成の土器を「ロクロ土師器」とするか、「土師質土器」(「須恵系土師質土器」という名称も含め)とするかに論点が集まり、同様の土器を地域や研究者の考え方で、呼び分けているという段階に留まっている。

筆者は、酸化焰焼成の上器はこれまでのように一つの概念では捉えられないと考えている。冒頭に触れたが、大寄遺跡出土土器には、須恵器に近いものとロクロ土師器に近いもの2種類があると考えられる。本節では、2種類の上器を「須恵系土師質土器」・「ロクロ土師器」と呼び分けて新たに位置付けを行う(註4)。

2. 分類の基準

「須恵系土師質土器」・「ロクロ土師器」の両土器群を定義するためには、土師器・須恵器についても再定義する必要がある。以下では、まず「ロクロ」と「焼成」を分類の基準として、各土器群を検討する。

ロクロと焼成

関東地方の土器生産の中で、北武蔵北部は、土師器を一貫して非ロクロで造っている地域である。渡辺氏は東関東を非ロクロ土師器圏と位置付けている(渡辺1997)。大寄遺跡が位置する埼玉県北部はこの土器圏の中でも中心的な地域に該当する。したがって、各土器群はロクロ使用の有無により大別できる(註5)。ロクロを使用する土器群は須恵器A・須恵器B・須恵系土師質土器・ロクロ土師器であり、ロクロを使用しない土器群は土師器・土師系土師質土器である。ロクロ使用の頻度と焼成状態をもとに、各土器群を概念的に位置付けたのが第278図である。須恵器Aはロクロを多用し、還元焰焼成である。須恵器Bは須恵器Aよりロクロの使用頻度が低く、還元しているが須恵器Aほどではない。須恵系土師質土器は須恵器Bと同等か、それ以下でしかロクロを使用せず、酸化焰焼成である。ロクロ土師器は須恵器Bと同等か、それ以下でしかロクロを使用せず、酸化焰焼成である。しかし、焼成は須恵系土師質土器より良好なものが多い。土師系土師質土器はロクロを使用せず、酸化焰焼成だが、より還元焰に近い。土師器はロクロを使用せず、酸化焰焼成である。

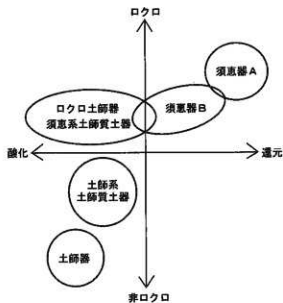
以上の定義のみでは非常にあいまいで、各土器群の違いがはっきりしない。それは2つの問題点があるためである。1点目は、各土器群が重複する部分

や概念図の中心に近づく部分は、土器が類似してくるため分類することが困難になってくることである。それを具体的に示したのが口絵4である。これは各土器群の焼成と高台の製作技法の特徴を示すために、底部を上にしてその部分のみを拡大したものである。須恵器Aの中には3のような灰色のものだけではなく、6のような黄灰色のものもある。須恵器Bと須恵系土師質土器の中にも、灰色に近いものと褐色に近いものがみられる。9・13・15などは異なる土器群だが、色調は非常に良く似ている。2点目は概念図では同じカテゴリーに入ってくる須恵系土師質土器とロクロ土師器が、実際に土器を比較すると全く異なるものであるということである。口絵4の12~14と16~18を比較してみると、同じ酸化焰焼成と言っても、その焼成状態や器形が明らかに異なっていることが分かる。

この2つの問題点から、ロクロ使用の有無と酸化焰焼成か否かだけでは土器群を明確に分類することは出来ないことがわかる。

製作技法と器形

次に、分類の基準としたいのは「製作技法」と「器形」である。ロクロを使用する4種類の土器群の製作技法は、ロクロ使用、底部の切り離し技法は糸切



第278図 各土器群の概念図

りが多く、高台は貼り付けである等の点では同じである。しかし、ロクロ使用の頻度は大きく異なっている。このロクロ使用の頻度を分類の基準とする。この差が特に現れている部分が、高台のつくりと貼り付け方である。

口絵4の須恵器Aは高台の形が整えられており、丁寧に貼り付けられていて、整形段階にかなりロクロを使用していることが分かる。須恵器Bの高台は、Aと比較すると造りがやや雑になっているが、ある程度の整形は行われていると考えられる。須恵系土師質土器は非常に雑な造りで、粘土紐で輪を作っただけの高台が底部に簡単に貼り付けられただけであり、整形はほとんど行われていない。一方、ロクロ土師器の高台は形が丁寧に造られており、貼り付け方も丁寧である。確実に丁寧な整形が行われていたと考えられる。土師系土師質土器は、口縁部をヨコナデし、体部下半をヘラケズリしている点は土師器の製作技法と同様である。しかし、高台の造りと貼り付け方は須恵系土師質土器のそれと同様である。

第279図は各土器群の供養具を挙げたものである。須恵器Bの坏の中には、非常に分厚いもの(8)や極端に小ぶりのもの(7)がある。高台付坏・椀類には、高台が「ハの字」に開き高脚高台に近いもの(9)、高台が形骸化したもの(14)、高台が小さくなり磁器の模倣と思われるもの(12)などがある。須恵器Bの特徴は、それまでの須恵器にはみられない形態があり、器種ごとにかなりバリエーションがみられることである。須恵器生産内の要因だけでなく、外部からの影響が多分にあると考えられる。須恵系土師質土器とロクロ土師器を比較してみると、須恵系土師質土器は須恵器を模倣しているが、ロクロ土師器は陶器や木器を模倣していると考えられる。土師系土師質土器は、須恵系土師質土器と同様の器形であり、須恵器を模倣していると思われる。土師器の高台付椀とは、明らかに異なる器形である。

以上のように整形の差と器形をみていくことで、先に挙げた2つの問題点を解消し、ロクロ使用の有

無と焼成だけでは分けきれなかった各土器群を、明確に分類することができると考えられる。

ここで、各土器群を改めて定義すると、須恵器Aはロクロを多用し還元焰焼成の土器である。須恵器Bはロクロを使用し、還元焰焼成の上器だが、従来にはなかった器形がみられ、バリエーションがある。須恵系土師質土器はロクロをほとんど使用せず、酸化焰焼成の土器である。器形は須恵器を模倣する。ロクロ土師器はロクロを使用する、酸化焰焼成の土器であり、器形は陶器や木器を模倣する。土師系土師質土器はロクロを全く使用しない、酸化焰焼成の土器であり、器形は須恵器を模倣している。土師器はロクロを全く使用せず、酸化焰焼成の土器である。

3. 各土器群の共伴関係

次に、各土器群が前節で挙げた大寄遺跡XII期からXIV期の中で、どのような共伴関係があり、時間的にどのような広がりを持っているのかについて検討する。第280図は時期を5段階に設定して、各土器群の共伴関係を示したものである。

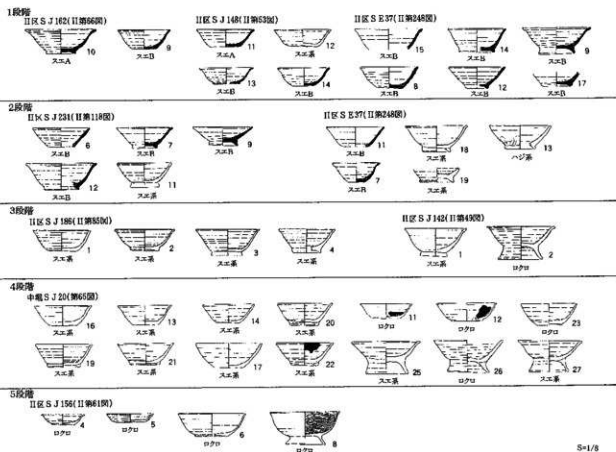
各段階の特徴は以下のとおりである。1段階は須恵器Bが主体的に出土し、須恵器Aや須恵系土師質土器がわずかに共伴する。2段階は須恵器Aがなくなり、須恵器B・須恵系土師質土器・土師系土師質土器が共伴する。3段階は須恵器Bがなくなり、須恵系土師質土器が主体的になる。4段階は須恵系土師質土器とロクロ土師器が共伴する。5段階はロクロ土師器が主体的になる。

第37号井戸跡は木製の井戸枠が組まれた状態で検出されており、本遺跡の中で最も出土状態の良い井戸跡である。この井戸跡出土土器の内、須恵器Bでも小ぶりの坏(7)と、第231号住居跡出土須恵器B坏(6)に類似する坏(11)は、須恵系土師質土器・土師系土師質土器と一緒に井筒内から出土しており、それ以外の須恵器Bは掘り方から出土している。出土位置の違いが時間差を示すと考え、1・2段階に分けた。1段階は大寄XII期に、2・3段階は大寄XIII期に、5段階はXIV期に含まれる。4

口	須恵器Ⅰ					
	須恵器Ⅱ					
ク						
	土師質土器					
口	口ク土師器					
	土師系土器					
非	土師系土器					
	土師器					

S=1/6

第279図 土器の種類と器種



S=1/8

第280図 各土器群の共存関係

段階は大奇遺跡には良好な資料がなかったため、中掘遺跡第20号住居跡出土土器で補った。

ここで問題になるのは、4段階の高脚高台杯・椀である。杯・椀・高台付杯は、先に示した基準をもとに須恵系土師質土器とロクロ土師器に分類することが出来る。しかし、高脚高台杯・椀は同一の器形であっても、この基準では両土器群に分類することは出来なかった。中掘遺跡第20号住居跡出土土器を例に挙げると、25は赤褐色で、須恵系土師質土器の焼きである。27は灰色で還元焰に近い酸化焰焼成であり、ゆがみがひどい。須恵系土師質土器に含まれるであろう。26は灰白色であり、丁寧な造りなので、ロクロ土師器と考えられる。このように高脚高台杯・椀は須恵系土師質土器・ロクロ土師器の両方があり、それは共存していると考えられる。しかし、両者がどのような関係にあるのかは、今回明確にすることは出来なかった。今後の課題である。

第280図をもとに各土器群の消長を、概念的に図化したのが第281図である。10世紀以降出土する土器の主体は、須恵器B・須恵系土師質土器・ロクロ土師器と変化していることが分かる。この変化はどのようなことに起因しているのだろうか。各段階の背景について考えると、1段階は須恵器生産の衰退期、2段階はその解体期であると言えよう。この段階は須恵器・須恵系土師質土器・土師系土師質土器と、各土器群が混在している。また各土器群を個別にみても、器種内でかなりバリエーションがある。これは従来の須恵器生産が解体し分散するためであると考えられる。3段階は須恵系土師質土器生産主体の段階、4段階は3段階同様、須恵系土師質土器生産主体の段階だが、ロクロ土師器生産が出現する段階、5段階はロクロ土師器生産主体の段階と考えられる。

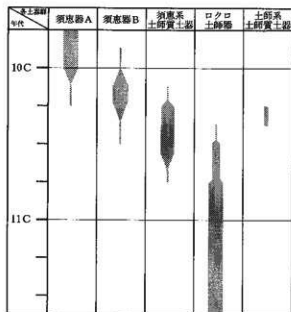
4. 出現の背景と問題点

ロクロ使用の酸化焰焼成土器を須恵系土師質土器とロクロ土師器に分類することが可能なことを述べてきた。では、これらはどのような背景で出現した

のだろうか。

須恵系土師質土器は須恵器生産の解体する過程で出現した土器群である。器形・製作技法は須恵器と同様で、須恵器の変質したものだと言える。ここで、須恵器生産が盛んに行われていた地域のその後の様相をみてみよう。折原石遺跡は木野窯跡群に、森坂遺跡は東金子窯跡群に近接する遺跡である。この様に須恵器生産に近接する遺跡からは焼成坑が検出され、出土する土器は須恵系土師質土器に類似するものがある。このことも須恵系土師質土器が須恵器生産の解体する過程で出現したものであることを裏付ける。

一方、ロクロ土師器の出現は2つの可能性が考えられる。1つは、須恵系土師質土器がロクロ土師器に変質したというものである。もう1つは須恵系土師質土器とロクロ土師器は全く別のものであるというものである。現時点では、後者の方を探りたいと考えている。その根拠としては、両者は各器種の器形が異なり、ロクロ土師器の焼成・整形の状態が、須恵系土師質土器から変化したとは考えにくいことが挙げられる。またロクロ土師器の高台付椀にみられる内面の黒色処理やミガキを施す技法が須恵器・須恵系土師質土器にはみられないことなども、両者



第281図 各土器群の消長図

が結びつかない理由の一つである。しかし、大寄遺跡では、須恵系土師質土器とロクロ土師器が共存している良好な資料がなく、移行期の土器を十分に検討することが出来なかった。したがって、現状で前者の可能性を完全に否定できたとは言えない。

今回位置付けたロクロ土師器と従来のロクロ土師器との関係も、ここでは明らかにできない。従来のロクロ土師器は土師器生産の中に含まれるものだが、今回取り上げたロクロ土師器が土師器生産の中に含まれるものであるとは、現時点では判断することが出来ない。この土器の実態が明確になり、生産体制が明らかになってはじめて、土師器として生産されたロクロ土師器であるか、否かが決められるであろう。それまでの仮称としてロクロ土師器を用いる。

おわりに

ロクロ使用の酸化焰焼成の土器を須恵系土師質土器とロクロ土師器の2種類に分類し、両者を別々に定義した。須恵系土師質土器とは須恵器生産が解体する10世紀前半に、解体の流れの中で出現する土器である。器形は須恵器を模倣するが、酸化焰焼成で、ロクロをほとんど使用しないため、非常に雑な造りである。ロクロ土師器は10世紀後半のある時期に出

現し、古代の終わりまで供器具の中心となった土器である。器形は陶器や木器を模倣するが、ロクロを使用し、酸化焰焼成の土器である。

また、今回は坏・碗などの供器具のみを対象にし、同時期の煮沸具の中心である羽釜については取り上げなかった。どの土器群に属するのかについては、今後の課題である。羽釜にも焼成は酸化焰焼成と還元焰焼成があり、技法ではロクロ・非ロクロがあるなど、単純に1つの土器群には過ぎないと思われる。

須恵系土師質土器は須恵器の変質したものであると考えると、須恵系土師質土器は須恵器であり、一つの土器群として分類することはないと考える意見も挙がるであろう。しかし、須恵器生産解体の実態を捉えるためには、敢えて須恵器と区別し時間と空間の広がり把握することが必要だと考える。さらに須恵系土師質土器とロクロ土師器を区別することもロクロ土師器の実態を明確にするためには必要なことであると考え、この様な土器群を設定した。今後、北武蔵の他の遺跡出土土器を同様の視点で検討し、各土器群の実態を明確にした後、再度名称について検討するという方向性を持たなければ、平安時代の土器生産についての研究は進展しないと思われる。

2. 集落の変遷

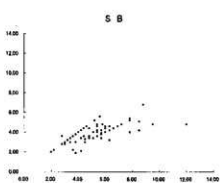
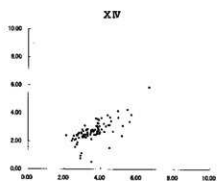
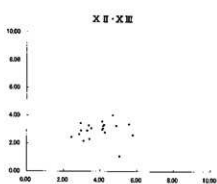
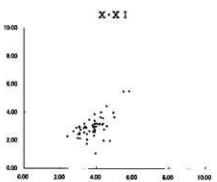
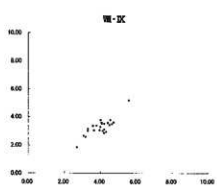
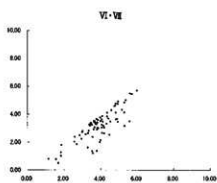
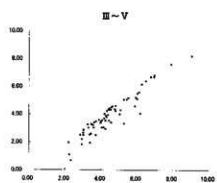
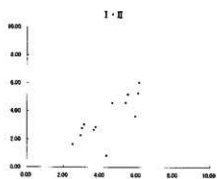
今回の大寄遺跡Ⅰ・Ⅱ区の調査区からは、竪穴住居跡475軒、掘立柱建物跡91棟、井戸跡68基、土壇412基、茶毘跡1基、土壇墓4基、溝跡57条、欄列13条等が検出された。竪穴住居跡は縄文時代前期のものが4軒、不明2軒、古墳時代後期～平安時代に至るものが469軒である。

ここではⅠの編年に基づき、古墳時代から平安時代に至る集落の変遷を素描したい。なお、掘立柱建物跡については、時期を限定できるものが少なく、遺構の重複関係をもとに、ある程度の幅をもって考えざるを得なかった。従って、厳密に各期に割り振ることは困難である。掘立柱建物跡の帰属について

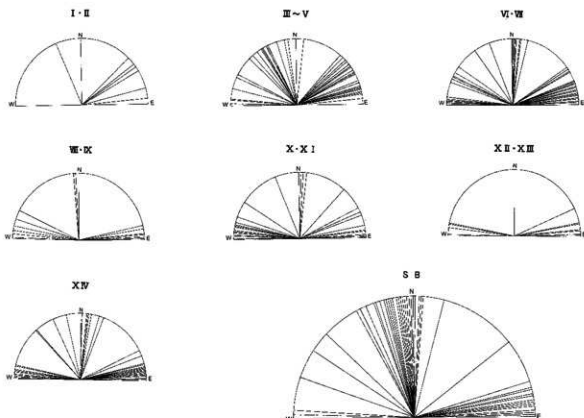
は、更に変更の余地があることを予め断っておきたい。

集落の中で最も古く位置づけられる6世紀のⅠ期の住居跡は8軒のみである。調査区の北側に分布が限られる。Ⅰ区第8・21・54・55・56号、Ⅱ区第57・73・74号が該当する。住居跡の全体が調査できたものではなく、全体の様相は不明である。Ⅱ区第57号住居跡はカマドをコーナー部にもつ特異なものである。また、Ⅱ区第8・11号溝跡、第38・54号井戸跡もこの時期に属するものである。井戸跡はいずれも小規模で、素掘りである。

7世紀に入っても、Ⅱ期の段階の遺構は少なく、



第282図 住居跡・掘立柱建物の規模



第283図 住居跡・独立柱建物の軸方向

住居跡は4軒のみである。I期同様調査区の北側に散在する。I区第27号、II区第10・14・151号住居跡が該当する。規模には大小があり、いずれも北西方向にカマドが造られている。

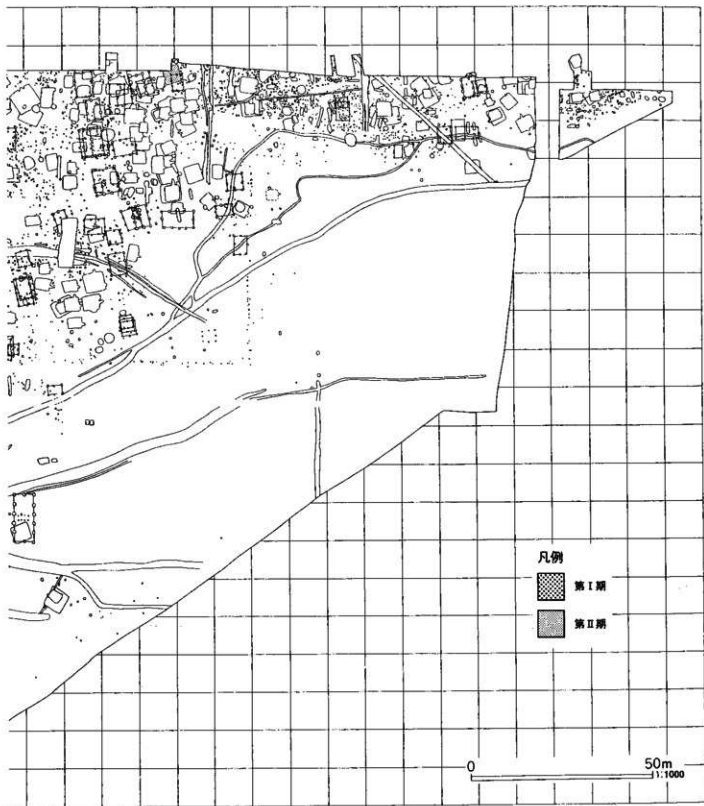
集落が調査区全体に展開し始めるのは、III期からである。ここに、集落の第1の画期を認めてもいいだろう。大きくI区の東側と北西側、II区の北西側と北東側の4つのまとまりが見られる。恐らく各々が、調査区北側へ展開すると考えられる。住居跡は15軒あり、I区20・57・151・187号、II区53・55・59・75・197・201・204・205・207~209号住居跡が該当する。北東-南西の軸方向を持つものが多く、北東壁、南西壁にカマドが造られている。この他に、南北・東西方向の軸方向のものがあり、軸方向によりグループ分けができる可能性もある。また、規模にも大・中・小があり、II区東側の群は中・小規模のもので構成されている。規模の大きいものは4本

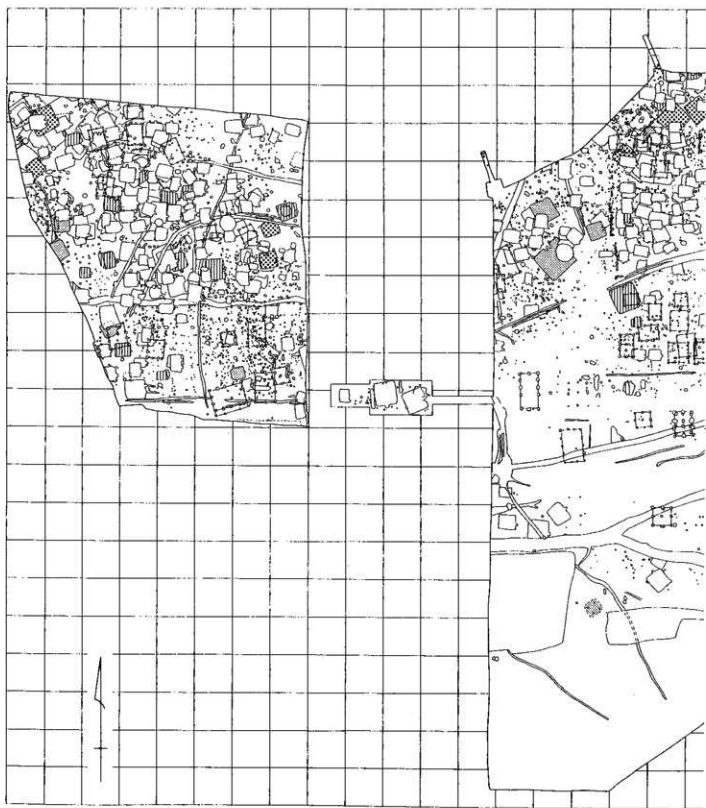
柱穴である。II区第75号住居跡には、支柱穴のほかに補助的な柱と考えられる小ピットがある。I区第151号住居跡は、土師器・環・壺・鉢・小型甕・甕が、カマドの左側の壁際を中心に大量に出土している。

IV期になると、調査区の南側でも住居跡が造られるようになり、大規模集落が拡大するものと考えられる。18軒の住居跡があり、I区第91・99・190・208号、II区第21・23・28・55・65・199・200・211・216~218・249・258・262号住居跡が該当する。規模には大中小があるが、大型の住居跡が目立つようになる。II区第23号住居跡は、9mを越える本遺跡最大の住居跡である。この他にもII区第21・55・262号住居跡は大型である。軸方向は、北西方向のものと北東方向のものがある。I区第91号住居跡は南カマドである。カマドは、奥壁の中央よりやや右側に造られるものが多い。貯蔵穴があるものはカマドの向かって右側に造られている。規模の大きいものは1



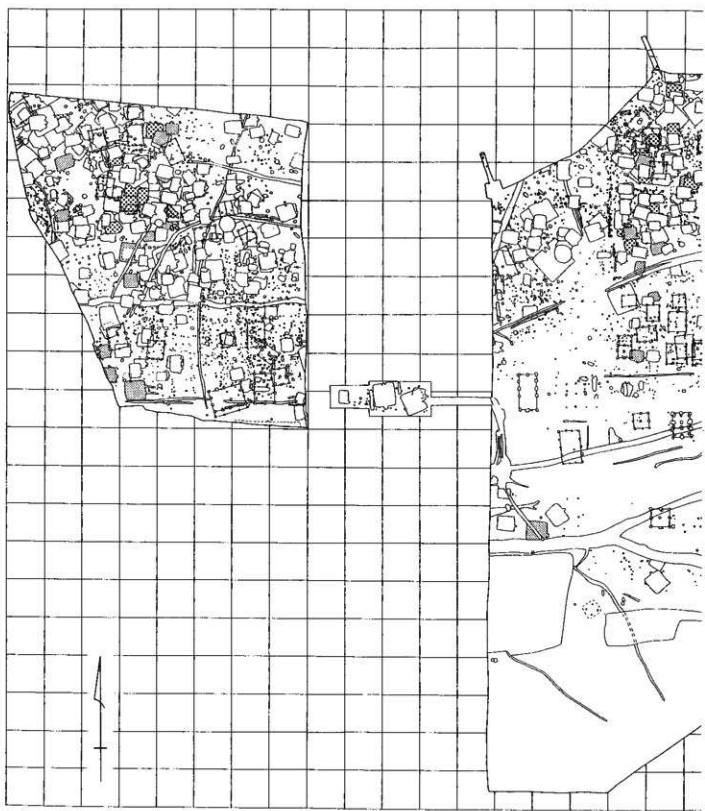
第284図 I・II期の住居跡



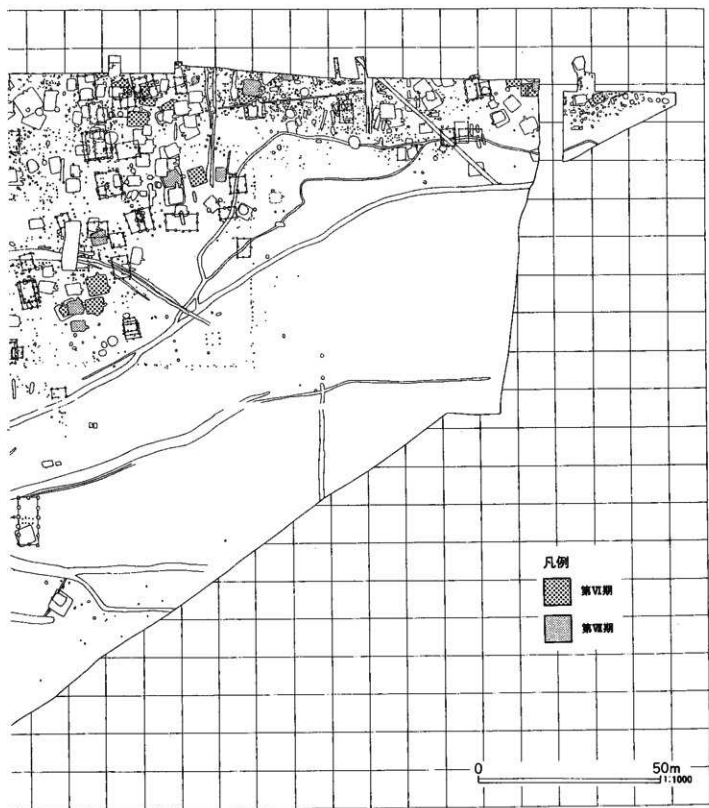


第285図 III～V期の住居跡



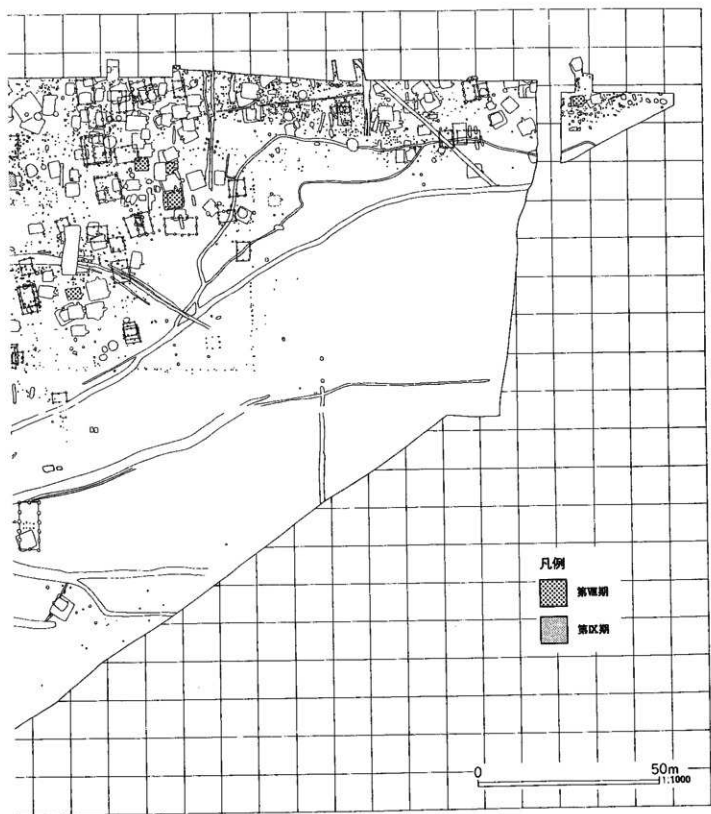


第286図 VI・VII期の住居跡





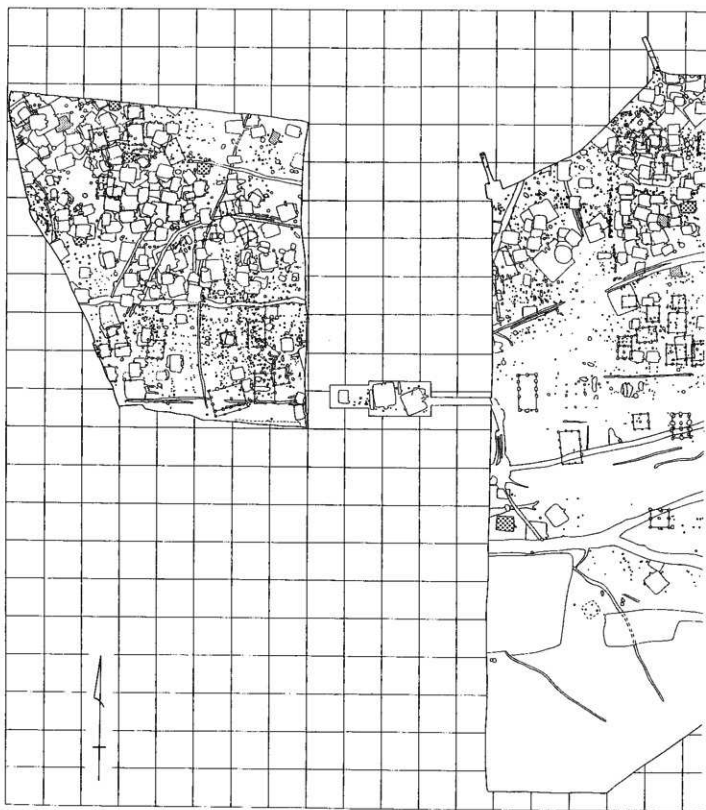
第287図 VIII・IX期の住居跡



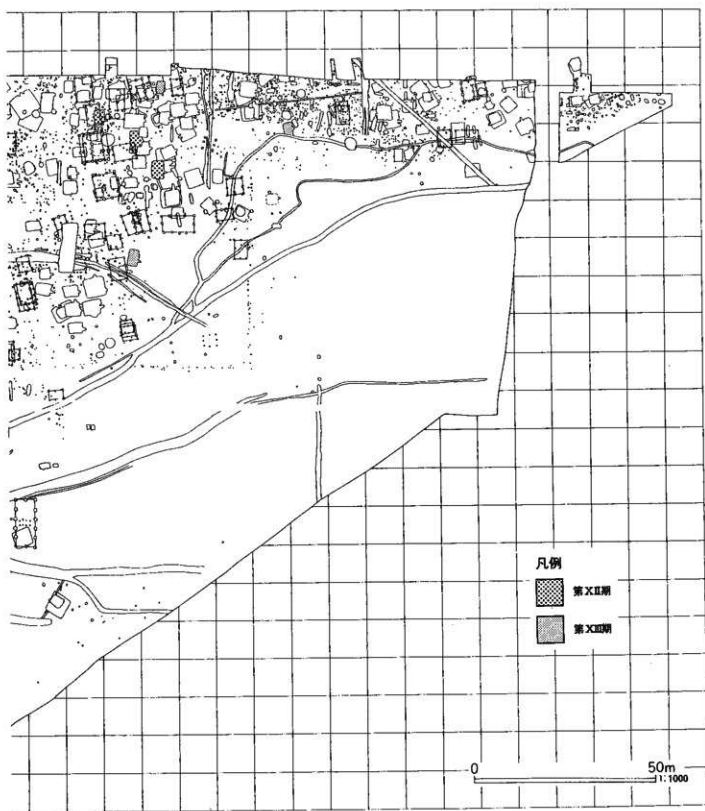


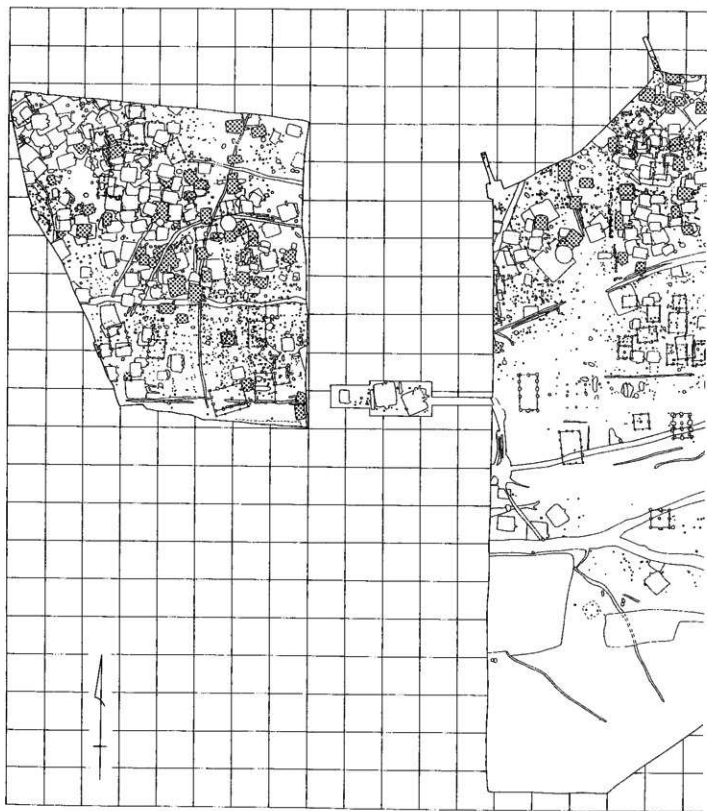
第288図 X・XI期の住居跡



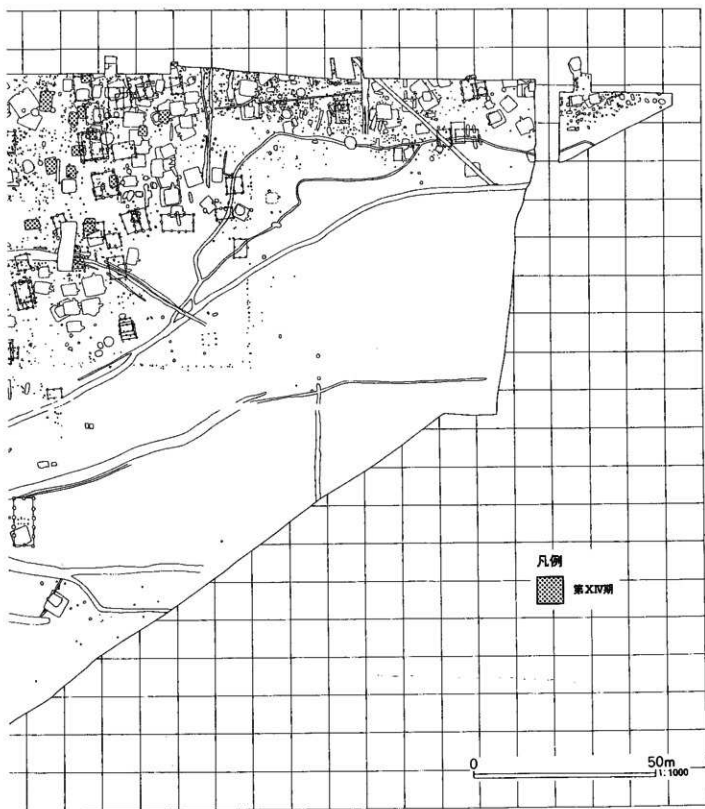


第289図 XII・XIII期の住居跡





第290図 XIV期の住居跡



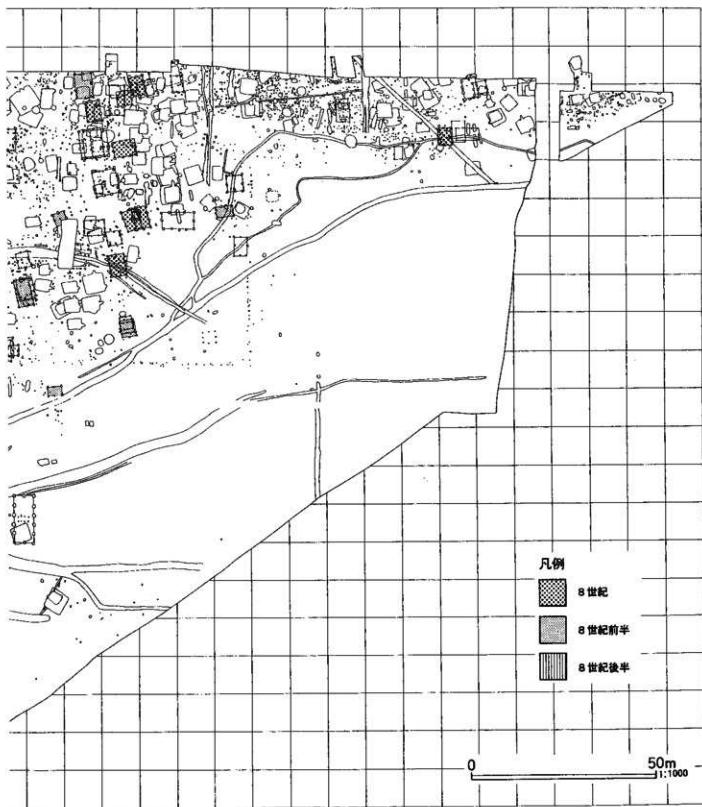


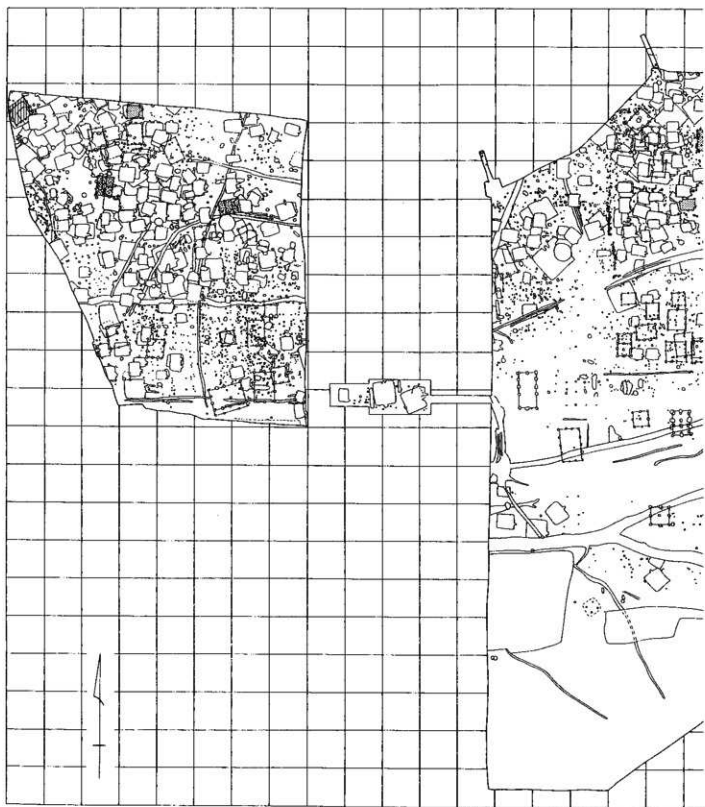
第291図 7世紀の搦立柱建物跡



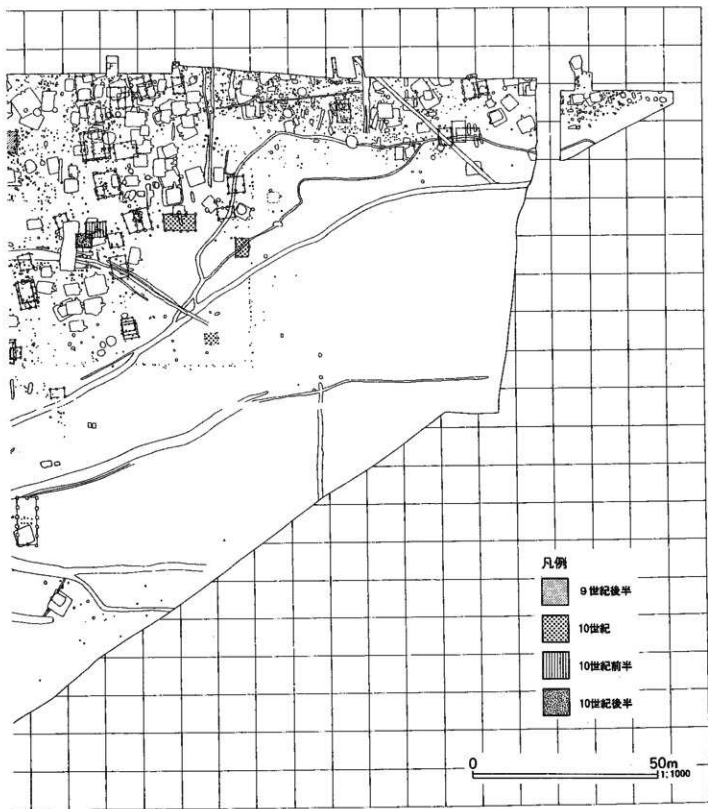


第292図 8世紀の掘立柱建物跡





第293図 9・10世紀の掘立柱建物跡



いずれも4本柱穴である。II区第217号住居跡には、入り口と考えられる施設が付設されている。

また、時期の限定が難しいため確実ではないが、南側のエリアへの住居跡の展開を勘案すると、この時期から掘立柱建物跡が本格的に造られるようになると推定される。II区第3・31号が本期のものと考えられる。仮に、V期に減さない7世紀の掘立柱建物跡を本期のものとする、II区第12・14・43・57～59号が本期の可能性のあるものになる。I区では、まだ分布が見られない。これらを含めると、住居跡群からやや離れた南側と東側に、総柱建物跡、側柱建物跡が分布することになる。側柱建物跡は、3×2間のものが最も多いが、5×2間のII区第13号建物跡のような大型のものもある。13号は中央に3×1間の小規模な柱穴がある特異なものである。調査区の北側の住居跡群に接しているものは、やや軸方向が西に偏している。その内の3棟、西庇のII区第57～59号建物跡は、D-21グリッド付近に集中して分布している。II区第3号は北東-南西の軸方向を持つもので、今回の調査区では他に見られない。性格等が異なるのであろうか。

総柱建物跡は4棟あり、いずれも2×2間(第12・14・31・56号建物跡)である。第31・56号掘立柱建物跡は調査区の北側、12・14号は南側に位置する。側柱建物跡同様に、両者では軸方向が異なる。調査区の南側のものは、一定の間隔を置いて配置されている可能性が高い。

ただし、南北軸のものは8世紀以降に下がる可能性もあり、V期にこういった様相を考えた方が適切であるかもしれない。

第42・44・47・60号井戸跡は、いずれも調査区の南側の低地にかかる部分に分布している。いずれも規模が小さく、素掘り、溜井と考えられる。

調査区を東西方向に貫く大規模な第10号溝は、本期もしくは次の時期に開削されている。第9・19・33号溝は、第10号溝に関連する一連のものと考えられる。

V期は、更に軒数が増える時期である。I区では、調査区全体に溝が分布するようになる。II区では調査区の東側に分布が見られないが、前後の時期の様相を勘案すると、やや北寄りに分布する東側の群がある可能性が高い。VI期と並んで、最も集落域が拡大した時期の一つとしていだろう。本期に該当する住居跡は30軒ある。I区第24・63・69・70・81・82・117・144・145・152～154・160・163・179・193・201号、II区第39・48・50・55・89・141・155・160・189・240・245・248・261号住居跡が該当する。

規模には大中小があり、一辺7mのI区第55号、II区第241・245号から、長軸方向3mの第248号住居跡まで幅がある。大型のものと小型のものがセットになる可能性もあるが、断定には至らない。軸方向は、北・東・北東・北西・南西方向のものがあり、軸方向による分類も可能である。平面形は正方形と長方形のものがある。カマドは奥壁の中央ではなく、向かってやや右寄りに造られるものが多い。大型のものは4本柱穴だが、中・小型のものについては柱穴が認められないものも多い。

掘立柱建物跡も本期に特定できるものが多く、I区では、この時期から掘立柱建物跡の分布が見られるようになる。I区第2・5・13号、II区第26～28・54号が該当する。

II区のIV期、あるいは本期に開削された第10号溝の埋没後に造られた、分布域の南側にあるII区第11・15号建物跡も本期に属すると思われる。第11号建物跡は、第18・30号溝によって区画されている。周辺の建物跡が並存したものは確かではないが、やや軸方向が異なることから性格が異なる可能性もある。第15号建物跡は2×3間の総柱建物跡で、建て替えが行われている。

これらとは別に、I区の北側、II区の北側にも建物跡が分布する。いずれも2×3間の側柱建物跡である。軸方向は、やや西に偏している。

井戸跡は、II区第9・18・21・60号が該当する。

いずれも小規模なもので、素掘りである。第60号

以外は、住居跡群の西側に接して造られている。

VI期は、XIV期と並んで最も住居跡が増える時期である。XIV期が80年から100年程度の時期幅があるのに対して、VI期は長くとも30年ほどであり、一時期の数点から言えば、本期が最も集落が拡大した時期と考えられる。7世紀から展開する集落は、この時期に最大規模になる。I区北西側、II区北西側、北側、北東側、中央の、少なくとも5つの群に分けられると思われる。この時期に該当する住居跡は45軒になる。I区第23・37・45・71・72・103・109・110・114・118・119号、II区第128・140・144・146・158・169・180・182・184・185・191・210・213・215・222・223・237・239・241号住居跡が該当する。重複するものや、拡張されるもの、カマドを造り替えるものが多く、継続した居住を窺わせる。軸方向は、北側・東側のものがあり、東側のが多い。平面形は正方形が多く、長方形のものもある。カマドは、壁の中央もしくは向かってやや右側に造られている。規模は5m前後のもの3m前後のものがある。大型のII区第140・144・237号住居跡は、カマドが造り替えられている。II区第241号住居跡には棚状施設や、入り口と考えられる施設が付設されている。規模の大きなものには4本柱穴のものもあるが、その割合は小さく、むしろ柱穴を持たないものが多い。

II区第237・241号住居跡は出土遺物が多く、237号からは切子玉や鑲投壺産の水滴が出土している。

II区第71号住居跡は、本期あるいはVII期と考えられるが、床面に鍛冶が2基付設されており、輪の羽口等も出土している。

獨立柱建物跡は、I区第14・21号、II区第9・21・22・24・30・33・34・39・41・42・45・52・53・63号が本期あるいはVII期のものと考えられる。II区の中央やや西側を中心に展開する。大きく南北軸、東西軸のII区住居跡群南側エリアのもの、やや西に偏した軸方向のそれ以外のものに分けられる。

側柱建物跡は、3×2間のものが最も多い。II区第33・34号建物跡は南側に第7号溝がある。G・H

—17—19グリッドの建物跡は8世紀代のまとまりのある建物跡群で、時期が特定できないものもあるが、第7号溝により区画されるものと考えられる。南庇を持つII区第22号建物跡は近接するが、この建物跡群とは軸方向が異なり、性格が異なるものと思われる。

これ以外の北側に位置する建物跡は、先に述べた住居跡群の分布と重なっており、各々の住居跡群に対応している可能性が高い。

総柱建物跡で、この時期に特定できるものは第34号1棟のみである。住居跡南側の建物跡群に含まれている。

井戸跡も時期を特定できるものが少ないため断定はできないが、重複関係等から11基が8世紀前半までに開削されたものと考えられる。II区第49・56号井戸跡は、規模が大きく、深い。第56号井戸跡からはまもって土器が出土している。

VII期は、分布域は同様だが、軒数は少なくなる。VI期にピークを迎えた集落は縮小に向かう。この時期に特定できる住居跡は33軒である。I区の第12・48・49a・59・76・77・90・121・122・155・164・192・196・200号、II区の36・70・91・108・113・152・165・166・179・183・188・212・225・238・242・246・251・256号住居跡が該当する。軸方向はほとんどのものが東側である。平面形は正方形のものと、主軸方向が長い長方形のものがある。カマドは、壁の中央もしくは向かってやや右側に造られている。規模は5m前後のもの3～4mのものがある。II区第152号住居跡は、一辺1.8mほどのごく小型のものである。II区第91・200・238号住居跡は、カマドが造りかえられているが、規模の大小との関係は不明瞭である。規模の大きなものには4本柱穴のものが多い。第238号住居跡からは、遺物が多く出土している。

この時期に特定できる建物跡は、II区第44・47号建物跡のみである。いずれも住居跡の分布からやや

離れた南側に位置する。この内47号建物跡は、周辺の建物跡と一定の距離を置いて配置されている可能性がある。

井戸跡で本期に特定できるものは、Ⅱ区第48・56号のみで、住居跡群とやや距離を置いている。いずれも大型のもので、2段の掘り方を持っている。

8世紀代だが、時期の特定できない掘立柱建物跡は15棟ほどある。これまで述べてきたように、住居跡と同じ位置に分布し、やや西偏する軸方向を持つものと、住居跡の南側のエリアにあり、先の33・34号建物跡等とともに建物跡群を構成するもの2者がある。3×2間の側柱建物跡が最も多い。総柱建物跡は3棟あり、南側のエリアに造られている。住居跡群に近接するものは、各々の住居跡群と対応関係にあることも考えられよう。

Ⅷ期は更に集落が縮小する。分布域に大きな違いはないが、住居跡は14軒のみである。Ⅰ区の第19・58・112号、Ⅱ区の第12・15・82・95・101・121・150・163・167・220・236号住居跡が該当する。この傾向はX期まで継続し、集落の縮小期といえよう。住居跡は、正方形のものと主軸方向が長い長方形のものがあり、後者が多い。Ⅱ区第167号住居跡以外はいずれも軸方向は東向きである。第167号住居跡は、カマドが造りかえられており、当初は東カマドであった。従って、本期の住居跡群は、ある時期いずれも東側に軸方向をもって散在する景観を見せていたと考えられる。規模は第167号住居跡以外、いずれも長軸3～4mのものである。カマドは、奥壁の中央に造られるものと、やや右寄りに造られるものがある。第167号住居跡は4本柱穴で、それ以外は柱穴を持たないものが多い。

掘立柱建物跡でこの時期に特定できるものはⅡ区第35号のみである。1×1間の布堰を持つ特異なものである。この他にⅠ区第3・4号建物跡も本期の可能性があり、いずれも3×2間の側柱建物跡である。住居跡群に対応するものであろうか。

Ⅰ区第3号井戸跡は、唯一この時期に帰属すると

考えられるもので、住居跡群の東側にある。2段の掘り込みを持つ大型のものである。

Ⅸ期の遺構は極端に少なく、住居跡は9軒のみである。Ⅰ区の第11・102・185・197・198号、Ⅱ区の第25・49・111・119号が該当する。軸方向は、北向きのⅡ区第111号住居跡以外は、いずれも東方向である。平面形は正方形のものと長方形のものがあり、後者には主軸方向が長い縦長のものと、逆の横長のものがある。規模は3～4mのものが多い。Ⅱ区第111号はやや人型である。カマドは奥壁の中央に造られるものが多い。いずれも主柱穴を持たない。Ⅰ区第185号は出土遺物がやや多く、灰陶器の浄瓶が出土している。

掘立柱建物跡で本時期に明確に伴うものはない。

X期も前段階同様集落の規模は小さく、14軒のみである。Ⅰ区の第66～68号、Ⅱ区の第143・149・153・154・157・177・203・234・235・247・250号が該当する。調査区内での遺構の分布は散在的だが、第203号住居跡は東側の調査区北側法面にかかって検出されており、もう一つの群が北側に展開する可能性がある。住居跡は第66・67号以外いずれも軸方向が東向きである。平面形は正方形のものと長方形のものがあり、後者はいずれも主軸方向が長い。規模はいずれも長軸4m前後である。第66・67号住居跡はカマドが造りかえられている。

Ⅸ期同様にこの時期と確定できる掘立柱建物跡は見られない。井戸跡はⅡ区第33・40号が該当する。いずれも大きな掘り方を持つものである。

住居跡が再び増加に転ずるのは、9世紀後半のXⅠ期からである。39軒の住居跡が検出されている。

Ⅰ区第15・16・28・32・40・75・78・86・94・95・113・120・123・133・162・166・172・194・195・202・203号、Ⅱ区第13・16・18・30・60・61・68・80・102・104・115・129・138・168・180・230・252号住居跡が該当する。Ⅰ区の西側とⅡ区の北西側、Ⅱ区の北側中央に分布が集中し、少なくとも3群以上に分かれていると考えられる。軸方向は、東向きのもと

北向きのものがあるが、後者はごく僅かである。平面形は正方形、主軸方向が長い縦長、その逆の横長の長方形のものがある。正方形のものがやや多く、長方形のものは双方で割合を分け合っている。II区第115号住居跡は、極端に細長い平面形である。規模には大中小がある。I区の16・113号住居跡は、正方形で一辺5～6mの大型のものである。その他は長軸3～4mのものが多いが、I区第78号、II区第18・30・102・115号は2.5mほどでごく小さい。カマドは、奥壁中央のやや右寄りに造られるものが多い。右側コーナーに極端に近いものや、対角線上に斜めに突出するもの（II区第30号）も本期より見られるようになる。柱穴は、I区第113号が4本柱穴であるのみで、その他は不明瞭である。II区第60号住居跡は、焼失家屋である。I区第32号、II区第16・252号住居跡は出土遺物が多い。

掘立柱建物跡は、I区第10号、II区第7・8号が本期のものである。いずれも南北軸をもつものである。住居跡群との関係は不明瞭である。II区の北西部に分布する南北軸のものの中には、住居跡群に伴うものも含まれていると考えられる。

井戸跡は、II区第16号が該当する。大型で、断面形は漏斗状になる。

II区第5～7号横列は時期が明確でないが、集落が拡大した本期以降のものであると考えられる。集落景観を考える上で重要な要素と考えられるので、本期～XIV期まで、この遺構があった可能性を意識しておきたい。

XII期はXI期に比べて大幅に集落が縮小し、住居跡は1軒のみである。この傾向はXIII期まで継続する。遺構の分布もI・II区の北西側に限られる。I区第10・43・97・126号、II区第117・135・137・147・148・162・255号住居跡が該当する。第255号住居跡はM-14グリッドに位置し、南側に離れている。この周辺にもう一つの住居跡群がある可能性もある。

軸方向は、いずれも東向きである。平面形は正方

形、主軸方向が長い縦長、その逆の横長の長方形のものがある。規模は4～5mの大型のもの、3～4mの小型のものがある。カマドは、奥壁中央のやや右寄りや、より右寄りに造られるものが多く、対角線上に斜めに突出するもの（II区第135号）もある。本期から長大な煙道を持つものが見られるようになる。柱穴は不明瞭で、主柱穴とできるものは見られない。

掘立柱建物跡は、I区第1号、II区第38号が本期に該当する。前者は3×3間の側柱建物跡で、柱間が一定せず、柱穴も軸線上にきれいに並ぶとは言い難い。後者は3×2間の総柱建物跡である。

本期に特定できる井戸跡は第37号のみである。調査区の北側にあり、住居跡群に対応するものと考えられる。規模が大きく、蒸籠組みの井戸枠が施されている。中からは土器とともに曲物と大型の容器が出土している。

XIII期はXII期に続いて、調査区の北側を中心に遺構が散在する程度である。この時期に該当するものは1軒に留まる。I区第17・22・42・108・132号、II区第117・135・137・147・148・162・255号住居跡が該当する。軸方向は、いずれも東向きである。平面形はXII期同様に、歪んだ正方形、主軸方向が長い縦長、その逆の横長の長方形のものがあり、横長のものが多くなる。規模は全体的に小型化し、4m前後のもの、2～3mのものがある。カマドは、中央より、より右寄りに造られるものが多くなる。対角線上に斜めに突出するものも継続して認められる。長大な煙道を持つものが増え、カマド構造の変化を窺わせる。柱穴は不明瞭で、主柱穴は認められない。

XIII期の後にはXIV期まで、30～40年の集落の空白期が存在する。もっとも、これは住居跡でこの時期に属するものが不明瞭であると言うだけで、掘立柱建物跡や井戸跡、土坑等が存在した可能性はある。その場合は分布域が北に偏ったとも考えられる。いずれにせよ、9世紀からの集落が最も縮小した時期

と捉えられる。

XIV期の住居跡は84軒を数え、8世紀前半と並んで、集落が最大規模に拡大した時期である。既に1-1(1)で示したように、本期は2-3期に細分できる可能性があり、時間幅もおおよそ100年間にわたると考えられる。仮に均等割した場合約30軒程度の集落が継続して営まれたものとも考えられる。住居跡は、I区全体、II区の北西側に分布している。I区第25・31・35・38・60・79・80・83・85・92・93・100・101・116・124・127・131・134・136・137・146~150・156~159・168・170・171・175・176・178・180・181・183・184・186・189・199・204・205・209・210号、II区第4・6~8・19・22・24・27・33~35・37・38・43・44・46・47・54・56・58・66・78・81・85・86・88・96・97・114・118・120・122・126・131・132・136・145・156・170・171・173・176・224・226・227号住居跡が該当する。軸方向は、東向きものが大部分だが、北向きのものも少数認められる。I区第79号住居跡は南カマド、第101号住居跡は西カマドである。平面形はXII期同様に、歪んだ正方形、主軸方向が長い縦長、横長の長方形のものがある。横長のものが大部分で、正方形のものはほとんど見られなくなる。規模には長軸5~6m、3~4m、2~3mの大小がある。中・小規模のものが多く、主たる居住施設から性格が変わりつつあることを窺わせる。深さは概して、ごく浅いものが多い。竪穴というより、むしろ平地式建物跡のような印象を受ける。カマドは、中央より右寄りに造られるものが多く、コーナー近辺に取り付くものも多い。対角線上に斜めに突出するものも継続して認められる。住居跡の規模に対して、カマドが大きく、小型のものでは燃焼部と煙道が短軸の半分から3分の2に及ぶものもある。よく焼けているものが多く、使用頻度の高さを窺わせる。柱穴は不明瞭で、主柱穴は認められない。II区第156号住居跡は比較的多く土器が出土したが、それ以外はあまり多くないようである。

掘立柱建物跡でこの時期に明確に該当するものは

I区6・12号、II区48号のみである。6・12号は3×2間の掘立柱建物跡である。48号は擾乱により全体が明らかでないが、3×2間程度の掘立柱建物跡になると考えられる。いずれも柱穴の規模が小さく、軸線上にきれいに並ばないものである。

非戸跡で本期に特定できるものは、II区第22・25号井戸跡のみである。住居跡群の中に造られているが、南側と東側の分布域の端に造られていると見られることもできる。いずれも規模が大きく、2段の掘り込みを持つ。

土壇墓は2基あり、住居跡の中に掘り込まれている。10世紀後半以降の住居跡を利用した廃屋墓と考えられる。

10世紀代と考えられる掘立柱建物跡はI区で1棟(第12号)、II区で3棟(第49~51号)認められる。I区12号建物跡は3×2間の掘立柱建物跡である。II区のもの5×2間、2×2間の掘立柱建物跡で、いずれも第5・6号欄列との関連を窺わせる位置関係にある。

先述のように、欄列跡はI区で6条、II区で7条検出されている。時期の特定は難しいが、8世紀と考えられるII区第4号欄列跡以外は、概ね9・10世紀頃のものと思われ、相互に区画溝として関連し合うものと推定される。

II区第5~7号は、集落域の外延を区画するものと考えられ、その近至には掘立柱建物跡が造られている。X~XII期とした場合、住居跡の分布域とほぼ重なる範囲と、その外延に位置する掘立柱建物跡群とをともに区画するものと考えられる。また、XIV期の集落に伴うと考えた場合には、住居跡の分布域とはやや離れた位置関係にあり、住居跡群と掘立柱建物跡群が計画的に配置され、その外側を区画するものと考えられる。住居跡群、掘立柱建物跡柱、欄列跡の位置関係を見た場合、後者とするにはやや無理を感じる。更に検討を尽くした後再検討の必要があろう。

I区第4号と第6号は約22m離れて平行し、富田

氏が既に指摘しているが、住居跡群内部の区画と考えられる。II区のものも住居跡群内部の区画の可能性が高く、第5～7号とともに居住の単位を示すものと考えられる。

溝は南流するII区第22・23号溝がある。浅く、性

格は不明だが、集落域の区画とも考えられる。

以上、大変難解ではあるが、6世紀から11世紀の集落の推移について述べた。500年に渡った集落の景観の推移を描ききるには遠く及ばざるをえないものである。更に検討を尽くす必要がある。

3. まとめ

以上、大寄遺跡の出土土器と遺構について若干の検討を試みた。しかし、検討が不十分であることは明らかである。ここでは、残された課題と展望について述べ、まとめとしたい。

出土土器については、14期に細分した。これは、これまでの長い土師器、須恵器、灰釉陶器の研究成果を踏まえ、良好な一括遺物を選別し、層位論的前後関係を考慮して編成したものである。この編年については、9世紀までの部分については大方の首肯が得られるだろう。しかし、10世紀以降については、見方が分かれるものと思われる。既に大寄遺跡の10世紀以降の土器については、「大寄遺跡 I」において、富田和夫氏が10世紀中葉から11世紀中葉をA～E期に細分する案を示しているが、今回の報告ではその案を棚上げしている。特に、本報告では10世紀中葉段階に集落の間隙があると考え、中堀遺跡出土資料をもって、その空白を埋めた。XII期以降の土器群のおおまかな推移を示したつもりだが、準備不足もあり、富田案との関係は明確に示せなかった。今後は、西浦北遺跡や宮西遺跡、あるいは大久保山遺跡や群馬県資料を含めた周辺遺跡の資料との比較、検討が必要であろう。富田案との関係は、その中で示すことにしたい。

平安時代後半の所謂「ロクロ土師器」を巡っては、これまでも多くの研究の蓄積がある。本書では、大寄遺跡出土資料の観察を通して、ロクロの使用頻度や焼成、整形の精粗や器形の分析をもとに、10世紀の上器を「須恵器A」「須恵器B」「須恵系土師質土器」「土師系土師質土器」「ロクロ土師器」に分け、各々定義を行った。特に、ロクロ使用の酸化焰焼成土器

については、「須恵系土師質土器」、「ロクロ土師器」に分類できることを示し、その背景となる須恵器生産体制の解体、土師器を含む該期の土器生産について述べた。ここでの見解は、あくまで大寄遺跡出土資料をもとにしたものである。今後周辺資料の検討を通して再吟味する必要がある。恐らく異論も多々あるのではないかとと思われ、活発な議論を期待したい。

大寄遺跡は、当初より10世紀後半から11世紀の集落として注目されてきた。その際に語られる集落像は、欄列に囲まれた掘立柱建物跡群と竪穴住居跡が群在するものだったと思われる。しかし、掘立柱建物跡の大部分は8世紀までのもので、10世紀以降とできるものはごく限られること、集落の外延を区画する第5～7号欄列跡が、XIV期よりX期のものである可能性が高いことから、むしろ欄列が群在する竪穴住居跡群を囲む9世紀後半の集落を推定せざるをえない結果となった。XIV期の集落は、欄列を伴う可能性もあるが、むしろ集落の外延に掘立柱建物跡があり、それよりやや離れて住居跡群があるという構造のようである。ただし、前節で述べたようにこの集落像は、現時点における筆者の認識であり、議論する余地は多々ある。むしろ、筆者等の集落像を巡って議論が起こることを期待したいと思っている。

何度も引いているように、10世紀後半～11世紀の集落は、県内では本庄市大久保山遺跡等で知られるのみである。大久保山遺跡の集落は、大寄遺跡同様の竪穴住居跡と掘立柱建物跡で構成されるものである。具体的に比較、検討することはここではできな

いが、この時期の集落構造を明らかにする上で両者の検討は欠くことができない。今回残された大きな課題の一つである。

また、500年もの間、営々と竪穴住居跡が造られ続けることによる課題も多い。住居跡の構造の変遷、例えばカマドの位置や構造、床下土坑、柱穴から考えられる土層構造、入り口部の施設と枚挙にいとまがない。同様に掘立柱建物跡についても、その構造や規模の変遷、柱穴のあり方といった問題がある。井戸跡や土坑、欄列跡、土墳墓、茶臼跡等も同様に多くの課題がある。通時的な検討が可能な良好な資料を前に、これらの問題に取り組みないのは、時間的な制約もあるが、筆者の力量不足によるものである。これらの多くの問題については、今後時間をかけて取り組んでいきたい。

ところで、大寄遺跡からは、所謂特筆されるような出土遺物はない。重要文化財に指定された緑釉陶器が出土した西浦北遺跡や、奈良三彩や畿内産土師器、黒書土器を多く出土する熊野遺跡とは対照的である。このことは何を意味するのだろうか。一方で熊野遺跡は、7世紀後半から10世紀初頭まで継続するが、9世紀後半には急速に収束する。西浦北遺跡は8世紀から10世紀まで継続するが、10世紀後半頃には途絶すると考えられている。大寄遺跡は細々ながらおよそ500年もの間継続して集落が営まれている。このことは、大寄遺跡が特別な集落ではない、極々一般的集落であることによるのではないだろうか。集落が大きくなることもあるが、十数軒で営まれ続ける集落の景観は関東地方の農村の姿を彷彿とさせる。「一般的であること」、これこそが大寄遺跡

の特徴であり、当時の人々のありのままの生活を伝える貴重な資料なのではないかと考えている。課題は山積みだが、一つ一つ明らかにすることにより、当時の人々の日常生活を垣間見ることができると感じている。後考を期し、ひとまず筆を置くことにしたい。

註

1. 須恵系土師質土器とロクロ土師器については次節で詳しく述べる。
2. ここでいう「ロクロ土師器」は、土師器としてのロクロ土師器である。XIV期のロクロ土師器とは異なる。
3. 先に挙げた「神奈川考古」21号の「南武蔵における平安時代後期の土器群」註8で須恵系土師質土器を土師質土器やロクロ土師器と同一であるとされている。
4. ここで言う「須恵系土師質土器」は福田氏の提起したものと若干異なる。福田氏が述べている須恵器生産の影響を多大に受けた土器であるという点は首肯できるが、この土器の出自や古代の終焉まで続くという点には同意できない。又、ここで言う「ロクロ土師器」も従来の土師器としてのロクロ土師器とは、一線を引くものである。
5. 土器はすべて粘土紐・帯を巻き上げる、又は積み上げた後、回転をかけてある程度の形を造る。こままで成形段階とし、成形後、さらに回転をかけて器面を調整することを整形段階とする。本稿で用いるロクロは、整形段階にかける回転力のことを言う。

参考・引用文献

- 青木義徳ほか 1982 『井沼方・大北・和山北・西谷・吉場遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第20集
- 赤熊浩一 1988 『狩塩塚・古井戸Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
- 赤熊浩一 1999 『木野遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第207集
- 赤熊浩一 2000 『宮西遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第250集
- 赤熊浩一 2000 『熊野／新山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第251集
- 浅野晴樹 1989 『北島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第81集
- 梅沢太久夫・石岡憲雄 1981 『六反田』岡部町六反田遺跡調査会・埼玉県立歴史資料館
- 斎上元博 1996 『八木上／八木／八木前／上広瀬北／森坂北／森坂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第165集
- 神奈川考古同人会 1986 『神奈川考古—古代末期から中世における在来土器の諸問題—21号』神奈川考古同人会
- 北野博司 1993 『戸水C遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 古代生産史研究会 1997 『東国の須恵器』
- 窯跡研究会 1997 『古代の上師器生産と焼成遺構』
- 酒井清治 1984 『古耕地(Ⅱ)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集
- 佐久間豊 1986 『房総をめぐる奈良・平安時代土器生産体制の展開に関する諸問題』『研究紀要10』p337～352 千葉県文化財センター
- 桜岡正信 1988 『群馬県における内面黒色処理を施す土器の一側面』『古代集落の諸問題』p161～174 玉川時雄先生古稀
- 佐藤忠雄 1983 『西浦北・宮西』岡部町教育委員会
- 末木啓介 1999 『埼玉県における平安時代の黒色土器と土器生産について』『土曜考古』23号 p81～106 上野考古学研究会
- 鈴木孝之 1990 『古代～中近世の井戸跡について(1)』『研究紀要』第7号 p217～271 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木徳雄 1984 『いわゆる北武蔵系土師器環の動態』『土曜考古』9号 p47～76 土曜考古学研究会
- 瀧瀬芳之 1990 『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集
- 瀧瀬芳之 1997 『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第191集
- 巽淳一郎 1983 『古代窯業生産の展開』『文化財論叢』p659～686 奈良国立文化財研究所
- 山中広明・末木啓介 1997 『中郷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
- 山口昭二 1982 『美濃窯の灰釉陶器と緑軸陶器』『考古学ジャーナル』211号 p60～64 ニューサイエンス社
- 利根川章彦 1999 『折原石遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第225集
- 富田和夫 1997 『関東西部』『古代の土師器生産と焼成遺構』p153～168 窯跡研究会
- 富田和夫 2000 『大寄遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268集
- 富田和夫・赤熊浩一 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群……丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 中沢 悟 1981 『清里・陣場遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 西井幸雄 1999 『城見上／末野Ⅲ／花園城跡／箱石』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第211集

- 能登 健 1982 『筑碓上川久保遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 服部実喜 1988 『関東地方における平安時代後半期の土器様相』『神奈川考古第24号』p157～180 神奈川考古同人会
- 尾関孝志 2001 『下野田稲荷原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第263集
- 福田健司 1887 『須恵系土師質土器について』『落川遺跡調査概報』V p466～471 日野市落川遺跡調査会
- 福田健司 1995 『在地産土器の編年と問題点』『上朝の考古学』p484～512 雄山閣出版
- 福田健司 1997 『I出上土器』『落川遺跡II遺物編』p1～100 日野市落川遺跡調査会
- 藤巻幸男・小島教子 1984 『賀茂遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 三浦京子 1990 『群馬県における8～11世紀の黒色土器について』『東国土器研究』第3号 p55～69 東国土器研究会
- 水口由紀子 1991 『武蔵国における中世成立期の煮炊土器小考』『埼玉考古学論集』p961～974 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 森 隆 2001 『平安時代の研究史概観』『中世土器研究論集』p269～298 中世土器研究会
- 山田尚友 2000 『東裏西遺跡（第2次）・東裏遺跡（第4次）・下野田稲荷原遺跡（第3次）・大門西裏南遺跡（第2次）発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第277集
- 山田尚友 2001 『下野田稲荷原遺跡（第5次）・東裏遺跡（第5次）・大門西裏南遺跡（第3次）発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第295集
- 早稲田大学本庄校地文化財調査室 1980 『大久保山I』早稲田大学本庄校地文化財調査報告1 早稲田大学出版部
- 早稲田大学本庄校地文化財調査室 1996 『大久保山IV』早稲田大学本庄校地文化財調査報告4 早稲田大学
- 渡辺 一 1988 『鳩山窯跡群I』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1990 『鳩山窯跡群II』鳩山窯跡群遺跡調査会・鳩山町教育委員会
- 渡辺 一 1990 『南北企窯跡群の須恵器の年代』『埼玉考古27号』p123～145 埼玉考古学会
- 渡辺 一 1997 『関東地方の土器生産』『古代の土師器生産と焼成遺構』p277～290 窯跡研究会